

インフィニット・ストラトス～オーバーリミット～

龍竜甲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、一夏より先にIS学園に男子がいたら……。

そんな考えから始めて見た二次創作です。

IS学園の二年生に上がった主人公 暮刃（ひいらぎ くれは）は、新学期早々地域の警備任務に駆り出される。

十分に扱えないISをなんとか操りながら警備を続けるクレハだが、案の定問題が発生してしまい、危険な状況に立たされる。

そんなクレハを助けたのは、日本に帰ってきた彼女で――。

pixivと同時連載です。おそらくこちらがメインの投稿になるかと。

目次

第一巻

プロローグ前半 | 1

プロローグ後半 | 9

再会と再起動 | 23

銀対白（蒼編） | 31

銀対白（蒼編） 2 | 38

銀対白（蒼編） 3 | 43

クラス代表就任パーティー | 53

クラス代表と暗がり少女 | 58

柊 クレハ | 69

凰 鈴音 | 79

銀対白（白編） | 85

決心 | 93

そして少年少女は動き出す。 | 101

復讐 | 108

そして彼は | 115

再会という名の運命 | 127

二巻

序章 | 135

gold or silver? | 139

作戦名「男女を越えた先」 | 145

方針。 | 153

のどかな（？）昼休み | 159

大惨事、世界『対戦』勃発。 | 166

千冬の本心

176

ラウラの本心

182

彼女に希望を

196

終わったあとに。

209

三卷

目指すは南の島！

219

蒼い空、そして瞳

1

228

蒼い海、そして瞳

2

239

変化のサラ

246

多頭の龍

253

飛翔する思い

261

貴方を想って紡ぐ言葉

272

革命者

284

朝陽の向こう

295

真実

310

覚悟

322

第四卷

夏的一幕1

345

夏的一幕2

364

迷走

381

正体

399

接続の意味

414

襲撃

433

記憶の欠片

451

夕日の光景

479

夏の終わりと終わらない騒動

493

新たなる敵と夏祭り（前編）

511

新たなる敵と夏祭り（後編）

534

第五卷

新学期と悩みの種

551

デュノアのやり方

568

多難な学園祭

576

空港急襲

586

スターク・インダストリー

601

第一卷

プロローグ前半

ISという兵器がある。

正式名称を『インフイニットストラトス』と言って、元々は宇宙空間での活動を目的として、日本最高の頭脳を持つ科学者、篠ノ乃東博士が十年ほど前に発表した技術だ。

始めこそ次世代の宇宙服ということで研究、開発が進められたが、ある事件を境に「IS」の兵器としての有用性が危険視されはじめ、国際連合はアラスカ条約を日本に対して締結させ、連合内部にIS委員会なるものを設置。国家のIS保有数並びに運用状況を監視することにした。

そしてアラスカ条約により、日本は都内にIS学園を開校。世界中からIS操縦者を集め、育成していく方針をとった。

これにより、ISの安全な運用が実現され、ISはスポーツの一種として世間に認知されることとなる。

だが、待つて欲しい。

結局のところISとはなんだ？

スポーツ用具の一つ？ はたまた原初の通り宇宙服？

そんな訳はない。

結局のところ、ISとは……。

兵器なのだ。

@

四月、俺にとって二年目の高校生活が幕を開けた。

事前に聞かされた話だと、今年、公的にはIS学園始まって以来の男子生徒が入学するらしい。

なぜ、ISの運用が始まって十年もたつというのに初めて、なのかというと男性にはISが使えないからだ。

理由は不明。制作者である篠ノ乃東博士は二年ほど前から行方不

明。ISを構築するISコアが完全にブラックボックスなため、理由の解明も問いただすこともできない。

まあ、あの人ははじめっから答える気は無いらしいけど。

そう言えばさつきから目覚まし時計が五月蠅い。

俺はてを伸ばし、ベッドの側にある目覚まし時計のベルを押さえつけた。

押さえつけたまま上体を起こし、ベッドに腰かけたまま、ようやく時計のスイッチを切る。

まずい、そろそろ雨が訪ねてくる時間だ。

急いでクローゼットからシャツとスラックスを取りだし、身支度を整える。なんとか間に合ったな。

(アイツは何かと世話を焼きたがるしな)

雨が来る前に準備できたので、俺は持ち込んだテレビを点け、ニュースにチャンネルを合わせた。

最近はどこもかしこも物騒なニュースが飛び交い、今映っている番組でも無惨に破壊された建物が報道されていた。

(IS学園生徒を狙った犯行……か)

去年はここまで酷くは無かった。

確かにIS学園生徒を狙う犯罪シンジケートは存在するが、ここまですで大つぴらに事を運ぶ奴等は珍しい。

これまでも何人かの生徒が巻き込まれたらしいが、実際にISで襲ってくる連中は居なかったらしく、日頃軍人並みの訓練を積んだうちの生徒には勝てるわけもない。今回も犯人を撃退したらしく、被害者は三年の生徒だと報道されていた。

——やっぱり兵器じゃないか

……ま、俺には関係ないか。

あ、でも雨には注意しとかないとだな。

あいつ、たまに抜けてるところあるし。

ピンポン

そうこうしているうちに、部屋のチャイムがなった。

どうやら雨が来たみたいだ。

ロックを解除し、ドアを開けるとそこには見慣れた幼馴染みの顔。
「お、オハヨ。クつちゃん！」

「ああ、おはよう雨。今日も食堂か？」

「ううん、今日は作ってきたんだ」

そう言つて、結構ポリユームのある弁当箱を差し出す前髪お化け。
ゴメン、前言撤回。顔見えねえ。

この前髪娘が俺の幼馴染みの篠乃歌 雨（シノノカ アメ）である。
見た通り、結構な人見知りの恥ずかしがりやで、人前に出ることを
得意としない。

だが、人は何かしかの特技は有るようで、料理の腕は光るものがある。
特に和食。

「……おお、凄いな相変わらず。ドンだけ時間かけてるんだよ」
ベッドを収納スペースに押しやり、壁際から小さいテーブルを引き
出して二人で向かい合わせになるように座る。

ふたを開けてみると、卵焼きに焼き鮭、煮豆と、全て輝いているよ
うに見えた。実際に白米は輝いている。

「あ、あんまりは掛かってないよ。新学期初日だから、ちよつと頑張っ
ただけ。前日の夜にね、下ごしらえするの」

「いや、普通はそんなことしないっての」
箸を雨から受け取りながら雨の工夫を賞賛する。

さて、まず何から食べようか……。

「そう言えばクつちゃん、今朝の速報見た？ また襲われたらしいよ」
「ん、ああ。そのはなしか。無事だったんだってな三年生」

うわっ、卵焼きスゲエ！ ふつくらしてるのに、含まれてる出汁が
みずみずしい！

「うん、でもなんか妙な事を聞かれたらしいよ。龍が何とかって」
「何とかって何だよ。アレか、そいつらは珍獣ハンターなのか」

煮豆全然パサパサしない。程よい甘さが心地いいデス。

さつきの卵焼きもあんまり甘くなく、俺好みの味だったし、ホント
料理うまいな。好み言った覚えは無いけど。

「クつちゃん……」

「あー、雨。お前が何を言おうとしてるか想像付くが、俺は関係ないからな」

「でもクっちゃんだって一応はIS操縦者なんだし、気を付けた方がいいと思うけど・・・」

「操縦者なくて、候補者。な」

踏み込まれたくない所まで話が進んだから、自然と不機嫌な面になっていたんだろう。雨はしゅんとしてしまった。

その様子を見せられては、いつもお世話になりっぱなしのこいつに申し訳ないと思ったので、流石に雰囲気を変える。

「えっと、ありがとな。弁当」

「えっ？ う、ううん。そんな良いよお礼なんて・・・」

両手をパタパタ振って遠慮の姿勢を見せるが、本来遠慮の姿勢を見せるべきなのは雨じゃなくて俺だ。

「俺もそろそろ自活しなくちゃな。後輩にみっともない姿は見せられないだろ」

俺は寮の中で唯一の一人部屋で、後輩が入ってくるなら、ここに来る可能性もあるはずだ。IS学園生徒は基本寮生活だしな。

そう決意すると、何故か雨は絶望的な表情になった。

さつきまで可愛らしく揺れていた両手はわなわなと震え、震える唇でやつと声を出す。

「そ、そんな・・・あのぐうたらなクっちゃちゃんが・・・自活!? ダメダメ・・・私の存在意義が・・・!!」

「お、おい？ 雨？」

あまりにも鬼気迫る顔だったので心配になる。存在意義がどうのって・・・なにクライシス起こしてるんだよ？

すると雨はガバツと顔をあげ、珍しく前髪を払って俺の顔を見た。「く、クっちゃんは！ 今のままでいいと思うよ・・・」

「・・・お、おう。そうか・・・」

び、ビツクリした。余りにも近くに雨の顔が来たのでこっちがどもっちまったぞ。

でも、今のままか・・・

事情を知らないとは言え、ちよつとショックだぜ。雨。

俺は、このままじゃいられない。

弁当を食べ終わった俺は、自主的に弁当箱を洗い、布巾で水分を拭き取る。

「あつ、懐かしいねこれ」

その最中、雨は俺の部屋の整理をするつもりらしく、さつきからクローゼットをごそごそしていたんだが、何かを見つけたらしい。

「何を見つけて……イイっ!？」

ぴろーんと雨が広げていたのは、俺の制服。IS学園の白い制服だ。

だが、ちよつと待つてほしい。その制服は俺のだが、形が違う。

IS学園の制服は、各国の風潮に合わせるため、改造は自由とされているが俺は基準服をそのまま着ている。

だが、雨の持つている制服は俺のだが、俺が着ているものじゃない。

その制服は、胸元にはネクタイではなくリボンがあしらわれている、本来腰の辺りで切れているはずの裾が、膝上まで伸びている。

女物だ。まごうことなき女物だ。

「懐かしいよね。クっちゃんが女装して入学してた頃!」

言つたああああ!!

雨が遂に俺の黒歴史を口にしたぞ!

「いや、違う! あれは親父が女子で届け出出して……てかなんで捨ててないんだよ俺!」

「そのわりには結構本気で女子に混ざつてたでしょ」

雨の指摘にぐうの音もでない。

ああそうさ! 確かに俺は去年の春、女子に変装してここに入学したさ!

でも仕方ないだろ! 通つたんだから!

誰に向けてかわからない弁明をしていると、雨が目を見開く。

「……く、クっちゃん……あれ」

雨が震える指で指すのは時計。その長針が指すのは始業五分前。たしか、今年的生活指導つて……千冬さんだっけ……。

「……終わったな、雨……って居ねえし！」

気付けば雨は居なくなっていた。

くそ、幼馴染みより罰則の心配かよ……。

バタバタと準備し、最後に洗った弁当箱を雨に返すため掴む。

——今のままで良いと思うよ

——変わり続けよつか、くーちゃん

あの人からの言葉と相反する幼馴染みの言葉。

俺、柊 暮刃（ヒイラギ クレハ）には、どちらが正しい道が分からなくなっていた。

@

「まったく、よくもまあ初日から遅刻できるものだな。なあ、女装男子？」

「はい……すみません。て言うか千冬さんは俺が女装して入学してくるの知ってたじゃっ!？」

見事に遅刻した俺は、ホームルームに行けずそのまま生活指導室に連行された。『ブリュンヒルデ』の手によつて。うわ、凄い光栄。

千冬さんは俺の頭をしばいた出席簿をテーブルにおき、腕を組んだ。よっしゃ、叩いて被つてゲームだな……!!!

「おい、バカなことは考えるなよ。短い人生だ。そうそうに散らせたいことはないだろう?」

あ、これ普通に怒られる流れだったんだ。まあそうか。

千冬さんは読心術に長ける。俺みたいなヤツの考えていることなんてお見通しだろう。

だから、多分伝わったはずだ。

「それ以上障るな」というメツセージは。

「……さてと、お前は今日から二年生だ。私も今年は一年生を受け持つことになったからな。まったく、去年のような目に遭うのは御免だぞ」

去年のような目、と言うのは一部の熱狂的な千冬さんファンによる、追っかけだろう。

「でも、千冬さん去年は一睨みで静かにしてましたよね。あんな感じで行けば良いんじゃないですか？」

「あの後、妙な手紙が靴箱に投書され始めたんだ……」

千冬さんは陰鬱な表情を浮かべながら、携帯端末に件の手紙を表示させた。

もつと！ もつと！もつと罵って!!

ありがとうございます!! ありがとうございます!!

もうちよつと上から見下ろす感じで下さい。具体的には→←ら辺からです。活動に必要なんです。

エトセトラエトセトラ……。

「……酷いですね……これは」

「お前でもそう思うか」

「待つてください千冬さん。お前でも、つてどういうことですか。まるでこの手紙の差出人と俺が同レベルみたいじゃないですか」

「大差ないだろう」

酷い。手紙もそうだが、千冬さんも相当ヒドイ。

て言うか文字で角度指定しても分からないだろ。数字入れろよ。

「確か、副担任、山田先生でしたよね。頼ったら良いじゃないですか」

「山田先生には迷惑を掛けられん。今年はそのバカが居るからな。既に大変な目に遇われているんだ」

「ああ、弟さんでしたっけ」

たしか……織斑一夏って言ったな。

世界で確認された二人目の男性IS操縦者だ。

一人目こと俺はISを展開しているかどうかの判断が難しく、世間からは存在が隠されているが。

「ああ、私の愚弟だ。あの馬鹿者が。受験場所を間違えるだど？ 小學生か」

散々な罵倒だが、その表情は、弟を心配する姉そのものだ。

腐っても姉なんですね……

「あでっ」

「また失礼なことを考えただろうか？」

また殴られた。チクシヨウ、出席簿取つとくんだった。

「まあ、そう言うわけだ。学内と一部に限られるが、お前の存在を知る人間が増える。努々、注意を怠るなよ終。」

「はい、分かりました」

「……もう乗る気は無いのか？」

先程とは違う緊張感を漂わせ、千冬さんが問う。

乗る、と言うのはやはりISの話だろう。

確かにここにいる身ゆえISの起動、展開は出来るが、特定の機体を除いて適合率がかなり低い。誰でも一定以上の適合率を出せる日本製のIS『打鉄』や、フランスの量産機体、『ラファール・リヴァイヴ』を使ってもだ。

世間一般から見れば、「なんでお前学園にいの？」ってぐらいに。だが、重要なのは特定の機体を除いて、と言うところだ。

どうやらここで、俺を正式に操縦者として認めるかどうかIS委員会の中で意見が割れているらしい。

「はい。ありません」

「……そうか。以上で要件は終わりだ。これからも変わらぬ学園生活を送るといい」

千冬さんの言葉にまたどきりとさせられる。

どうやらこれで解放してくれるらしく、顎で行け、とドアを示される。

良かった、二発ですんで。居眠りなどをしようものなら、音速のチヨークが飛んでくると言う噂の織斑千冬を目の前にして遅刻したのに、たつた二発だけ？ しかも結構常識的な威力だ。あとで雨に自慢してやろう。

「それと、最後に」

「はい？なんですか？」

「一応、他人の前では先生を付けろよ？ この女装男子！」

いや、三発食らった。通常通りだ。

プロローグ後半

俺が生徒指導室から出ると、すぐにホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴った。

だから俺は、一限に間に合うように校内を歩いている。

一限目は一般教科だ。遅れるわけにはいかない。

すると、一年のフロアを横切ったとき、ある教室の前に女子がかなり集まっていることに気が付いた。

「やっぱり良いわよね、年下!」

「あ、わかるわかる。なんだか、教えてあげたくなくなっちゃうよね」

「えー、私はどっちかって言うと、リードしてもらいたいタイプ」

「あれが、千冬様の遺伝子……(じゅるっ)」

……よく見れば二年や三年もいるぞ。

しかし近づくと、俺に気づいた二、三年の女子が、あからさまに嫌そうな顔をした。そこまで毛嫌いすることないじゃないですか……。

「お? 珍しいな。雨がこんな人混みにいるなんて。どうしたんだ?」

「あ、クっちゃちゃん。今来たの?」

人混みの中に雨を見つけたので、話しかけるついでに、自然に混ざる。

今来たの? じゃないだろ。一人でさつきと行きやがって……。

「ああ、さつきまで千冬さんの説教を受けてたんだよ。朝から二発だぜ?」

「それは災難だったね……」

「それより、何なんだこの集団は。千冬さん?」

あの先生の人気は、目を見張るモノがある。

今年は学年主任も兼任するそうで、去年から女子たちが壇上に立つ千冬様を見る機会が増える! と騒いでいた。授業中の姿をどうやって見る気だよ。殴られるぞ。

そう予想したが、どうやら俺の予想は外れらしい。

「――の弟か」

「うん、正解。織斑一夏くんだった」

道理でいつもの騒ぎかたとは違うと思ったワケだ。

集まっている女子たちは、どこか牽制しあうような雰囲気を放っている。

俺も首を伸ばし、教室1―1内を覗き見る。

・・・お、いたいた。

教室の最前列に、男子制服を着たヤツが一人座っている。

落ち着かないのか、暇潰しに教科書を読む動きは、どこかで忙しい。

というか、内容理解できてるのかな？ 普通IS学園に入学するやつって、前々からISについての基礎知識を学び、学園でその知識の確認、及び実習を行うってのが一般的なんだが、あの織斑一夏は見たところ完全に素人だ。

入試の際に、偶然ISを起動させたらしいが、IS学園の入試からまだ一ヶ月とちよつとだ。

俺はたつぷり一年かけて理屈は頭に入れたが、一ヶ月やそこらで理解できるほどISは甘くない。

(俺の場合、実習がネックだったりするんだけどな・・・)

「五月蠅いぞ小娘ども！ 私の授業の邪魔をする気か？ もうじき授業が始まる、さっさと教室に戻れ！」

遂に千冬さんが声をあげ、俺たちを追っ払う。

女子たちは、指導を受けたことに一礼し、素直にその場から立ち去る。

「・・・俺たちも戻るか」

「そうだね・・・」

これ以上騒がしくなることは無いだろうが、俺たちも、女子の波に紛れるように歩き始める。

ってか千冬さん、俺より後に指導室出たはずだよな？ なんて普通にここにいるんだ・・・？

千冬先生のマジックに驚いていたら、クラスの女子が俺に気づき、

話しかけてきた。

「およう・クレハ君じゃないツスカ。どしたん？ ホームルーム居なかったツスよね？」

彼女の名前はフォルテ・サファイア。

クラスメートで、俺の女装が発覚した後も、変わらず接してくれた数少ない人物の一人だ。

三年のダリル先輩とペアを組んでいて、その実力は折り紙付き。先輩と渡りを付けてくれたりと、俺がこの学園で過ごしやすいように苦心してくれた、なかなか優しい性格の持ち主である。

どこかの国の代表とか言う話は聞いたことないが、専用のISを持つていて、去年の専用機持ち限定タッグマッチ戦では、その実力を遺憾なく発揮させた。

専用機――。

この学園に通う者なら、一度は夢見るモノだ。

世界中のあらゆる国家、及びIS開発企業はそれぞれ、総数467機のISの内一定数のISを研究、開発と言う名目でIS委員会から受け取っている。

それらを量産型ではなく特別にチューンアップして、所属している人間にテストターとして貸し与え国の技術の向上を目指す。それが世界における専用機の仕組みだ。

ようするに、「もっともっと技術高めたいから、ちよつとこれ使つてIS学園で性能見てこい」ということだ。

もちろん、専用のISを持つにはそれ相応の実力が伴わなければならないが……。

因みに国家の代表と慣れるほどの実力者を、代表または代表候補生という。

「ちよつと遅れてな。生徒指導室にいつてたんだよ」

「あー、何発？」

「二発」

そんな短い会話を終わらせると、フォルテがそう言えば、と話題を振ってきた。

「同じ立場の者として、彼には挨拶してきたツスか？」

「いや、してない。今日は止めとく。多分向こうは俺のこと知らないだろうし、急に出ていってもまた騒がしくするだけだろ」

「まあ、そうツスよね。女子はクレハくんの話したがないツスから」

フォルテから、知りたくなかった女子の事情を聞かされ、ちよつと気分を落としていると、さつきから雨が会話に入って来ないことに気が付いた。

周りを見渡すと、雨は俺の後ろに豆みたいに小さくなって、フォルテを見ている。どうやら人見知りモード発動中らしい。

「篠乃歌さんもおはよツス」

「う、うん。オハヨ・・・」

お、おお。雨が挨拶を返したと・・・!?お兄ちゃん感動。

「さて、お二人さん、急ぐツスよ。もう授業まで三十秒も無いツス！」

そう言うと、フォルテは一人スタートダッシュをキメる。あつ、ズリイ！

俺たちも負けじと廊下を駆ける。間に合うか・・・!?

「おい貴様らー！廊下は走るな!!」

当然、怒られたの言うまでもない。

@

その日の夕方、部屋に戻った俺は、鞆をベッドに放り投げ、自身も鞆の後を追うようにベッドに倒れこむ。

「あー、疲れだー」

喉から搾るように、ダミ声を室内に響かせる。

今日はIS実習があることをすっかり忘れていた。初日だからって油断したぜ。

だから、人体とISのリンクをサポートするためのスーツ、ISスーツを部屋に忘れていて、体育教官も勤める千冬さんに報告したところ、「下着ですか、女子になるか、好きな方を選べ」と言われた。混乱して下着で実習を受けるところだったぞ。女子用スーツって、セパレートタイプがあるんだ・・・。

それだけでも疲れるには十分なのに、更に追い討ちをかけるように適合率が伸びない伸びない。

五パーを下回ったときは、ブレードでハラキリしようかと思っただらいいだ。女子の嘲笑が痛かった。

(くそっ、どれもこれもみんなこれのせいだ)

制服の上から自身の左胸に手を当てる。

こいつのお陰でISが動かせるようになったが、同時にこいつのせいで他のISを動かせなくなった。

俺がISを動かせるようになったのは二年前、中学三年生のときだ。

胸に埋め込まれたこいつのせいで、俺は今ここにいます。

そのとき、特徴的な着信音が俺の端末から鳴った。

「……………おいおい、マジかよ」

この音が鳴るのは、大抵面倒ごとが起きるときで、去年一年、俺も結構ひどい目を見てきた。

しかし、出ないわけにも行かない。

表示を見ると、「轡木用務員」とある。

「……………もしもし」

『二年一組、終 暮刃君ですね。至急用務員詰め所に来てください』
それだけを言うと、通信は一方的に切られる。

轡木 十蔵。ここ、IS学園で働いている、唯一の男性職員だ。

普段は、柔和な人柄と親しみやすい性格から「学園の良心」とアダム名されているが、その実態は違う。

現IS学園理事長の夫にして、多忙な日々を送っている妻の代わりに、学園の実務を殆どこなしている、まさに裏理事長とでも呼ぶべき人物だ。

俺は学園に、去年一年で作った多大な借りがあるため、それを返すために、時たまこういう風に呼び出しを受けるのだ。

さて、行きましようかね。

俺は再び制服を手に取ると、それに袖を通した。

@

「柊 暮刃くん、キミに任務を言い渡します」

そら、来たぞ。

用務員室に入ったとたん言い渡された呼び出しの理由。

予想は着いていたが、俺が任される仕事なのであまり重要なものは無い、というのが今までの任務だった。

例えば、IS学園のイメージアップを図るためにISをキャラクター化した着ぐるみで都内を歩かされたり、訓練用のISの整備、格納。その他、細々した雑用が主だ。

だからなんでこんな重大任務のようにイチイチ呼び出すのか分からない。片付けくらいなら普通に頼めよ。

しかし、今回の仕事はそんな簡単なモノでは無いようで、轡木用務員は他言無用を指示してきた。

素直に頷くと、用務員は任務内容を話し始める。

「内容は、教師部隊と共にIS学園周辺都市の警護、及び敵勢力の撃退です。予定期間はおよそ一週間。早速今晚からはじめてもらいます。何か質問は？」

「……この有無を言わせない饒舌なしやべり方、正しく裏に相応しい人物だな……」

俺は轡木用務員と真正面で向き合い答える。

「ではひとつ。警戒対象は恐らく最近活発化している犯罪シンジケートの攻撃ですね？ ならば内容にある通り戦闘になるかもしれませんが。なぜISをマトモに扱えない俺をこの任務に組み込んだんですか？」

今までの任務と、今回の任務の違いすぎる。

しかも、俺はISの起動展開は出来るが、操縦が効かない。

もし本当に戦闘が起こったのなら、ただの足手まといになるだけだ。連れていくメリツトがない。

轡木用務員は少し考える素振りをみせ、ニパツと笑って答えた。

「今回の任務に君の存在は都合がいい、では理由に足りませんか？」

「納得するわけが無いですよ。俺がこの任務に都合のいい存在なら他にも優秀なのが大勢います。何処かの代表候補生にでも正式に任務

を発行し、募集した方がいいんじゃないんですか?」

「そう、ソコですよ」

轡木用務員は、俺をビシと指差した。

「本来、この任務に生徒を駆り出す予定はありませんでしたが、教師側だけでは人員の確保が難しく、どうしても一枠足りない状況だったのですよ。そこで君のいった通り候補生を採用しようと思いましたが、ある理由により、却下せざるを得ませんでした」

「ある理由……?」

「他国の候補生を、日本の治安維持に駆り出して、問題がないと思いませんか?」

そう言うことか。

本来、ISの規定範囲外での展開は、アラスカ条約に違反する行為になる場合がある。

いくら、犯罪への対処でも自国の候補生、ISが条約違反を起こしたとなったら国も黙ってはいないだろう。

だから、俺を使う。

俺は世間どころか、未だに校内でも知らないやつが居るような男性操縦者だ。

知っているのは学園の関係者と、中国、イギリスのほんの一部のIS関係者。そして、数名のIS委員メンバーだけだ。

もし違反をしてしまったとしても、学園は幾らかは言い逃れができるし、所属する国がないので、何処にも迷惑が掛からない。

「……つまり俺はすて駒扱い、ということですか」

「気を悪くしないでください。それでも我々は君の能力を高く買っています。調子に並みは有りますが、適合率の低い機体でよく今まで此処で学んで来られたものです。それ相応の報酬は出せると思いますし、今回はバックヤードでも構いません。受けてくれますよね?」

そこまで言われたからには断れるはずもなく、俺は頷くしかない。

「よかったです。最悪、縄かけてでも行かせるつもりでしたから」

「おい。……いや、なんでもありません。」

初めから断らせるって言う選択肢は無かったのか。

「それでは以上で話は終了です。すぐに千冬先生号令のもと、任務が始まります。正門に向かってください」

俺は一礼して、彼に背を向け出口に向かって歩き出す。

「そうそう。噂なのですが、敵は龍を狙っている。という話があります。何か心当たりは？」

「………いえ、特には」

「………そうですか。立ち止まらせてしまつてすみません」

謝る轡木の声をききながら、俺は不安な気持ちで扉を閉めた。

@

春の夜は未だ寒く、結構堪える。

「すみません、柊 暮刃。 たった今到着しました」

「柊くん！ 遅刻は厳禁ですよ〜！」

そう言つて怒るのは、既にIS「ラファール・リヴァイヴ」を展開している111副担任の山田真耶先生だ。

初日から、締まらないことでもやらかしたのか、普段以上に先生モードだ。

「やつときたか柊。 お前も学習しろ」

「すみません千冬さん。 轡木用務員との話が長引いてしまいました」

「ふん、ならいい。 ほら、これがお前のぶんだ」

千冬さんから渡されたのは、緑色に輝くペンダントだった。

隣で山田先生が「織斑先生が名前を呼ばれても怒つてない……!？」と驚愕している。 いや、ちゃんと怒られますよ。

渡されたペンダントはIS「ラファール・リヴァイヴ」の待機形態で、スペックを確認するとちゃんと訓練用ではなく、実戦用になっていた。

「ちゃんとお前の癖にあわせて、格闘戦装備だ。 幾らか拡張領域が余っていたので銃器の類いもあるが、まあ好きなように使え」

「はい、分かりました」

千冬先生は、俺がバックで監視を行うことを知っているようで、俺だけ、他の先生とペアで動くよう指示された。

「ヨロシクねー。 柊くん」

此方に向かって手をふっているのが、ペアで行動する先生、大倭先生だ。

かなり若い先生で、ノリが完全に女子高生のそれと同じであること
で有名な先生だ。因みに今年の担任がこの先生である。

俺はラファールに起動の指示を与える。

一瞬で粒子が身体を包み込み、その粒子が俺にあわせて装甲を形成
する。

……ふう。各部異常ナシ。適合率、12%うわ。

「初めて見たけど、本当に操縦できる男子って居るんだねえ」

「まあ、満足に動かせたことは無いんですけどね」

大倭先生が目を丸くするので、ちよつとハードルを落としておく。
期待されたらたまらん。

「よし、全員準備が整ったな。それではこれより、特殊任務『ネズミ取
り（ロール・キャッツ）』を開始する！総員浮上！」

千冬さんの掛け声で、俺を含めた全ての教師たちがPIC（パッシ
ブ・イナーシヤル・キャンセラー）をオンにし、フワリと宙に浮く。

『それでは各ユニット、指定の配置につき警護を開始。次の連絡は一
時間後だ』

先生たちはそれを聞くと、それぞれ割り振られた持ち場につく。俺
と大倭先生の持ち場は港区にある工業地帯だ。

まず先生が先頭を飛び、俺が後から追従する形で空から様子を見
る。

先生、ISで飛ぶとき、足閉めて飛んでくれませんか？

いい感じの肉付きの太ももがチラチラと……。

俺は先生より少し上の高度を保ち、ハイパーセンサーの感度を引き
上げる。

下には大量のコンテナが積み上げられており、工業地帯というかた
だのコンテナ集積場所、といった感じだ。

どれもこれも、結構古いのが置いてある。

しかし、俺は少し気がついたことがあったので、プライベートチャ
ンネルで大倭先生に通信を入れる。

「偶然じゃない。私も連絡しようと思ったところよ」

「そうですか。だったら話は早い。見たところおかしなコンテナが四基ほど置いてありますね」

「やっぱりそう思う？ 巧妙に隠してるつもりでしょうけど、全然だめね。コンテナを引き摺った痕がまだ新しいわ」

俺はコンテナが妙に新しいことに違和感を持ったのだが、先生はその裏付けまで取っていたらしい。凄いな。

「調べますか？」

減速して、空中で停止しながら提案する。

「そうね、だけど一応織斑先生に連絡を入れておいて。私が降下し、調査します」

先生は音もなく降下を開始し、緩やかに着地した。

対IS用アサルトライフルを構え、慎重にコンテナとの距離をつめる。

俺はその間に、千冬さんにコンテナを調査する旨の連絡を入れ、再びハイパスコープの感度を上げる。

熱、動体、赤外線、未だにどのセンサーにも反応がない。

と思っていたら、

「避けて！ 柊くん！」

——警告！——

未確認ISの起動を確認！ 射撃体勢への移行を確認！ ロックされています！

大倭先生の叫びと、ISの警告が、同時に俺に届いた瞬間……俺は光の中にいた。

コンテナから出たのは大出力の荷電粒子砲で、俺はその砲撃をもろに食らった。

常時展開しているシールドバリアーは、適合率が低いせい脆弱で、シールドとしての役割を果たさずに割れた。

ISが操縦者を守るために絶対防御を発動させる。

そのせいで、リヴァイヴのシールドエネルギーはどんどん削れていく。

急激な減少を知らせる警告音が鳴り響く。

「つアツ!!」

俺は二刀の近接格闘ブレードを召喚し、それで全面にシールドバリ
アーを展開。ビーム攻撃を受け流す。

ハイパーセンサーが敵 I S のすがたをとらえ、表示される。

(なんだ・・・あの I S!?)

何とかビームの照射から抜け出し、確認すると、異様としか言えな
い I S がコンテナから出てきた。

真つ黒な装甲に、両腕には大型荷電粒子砲をそれぞれ一門ずつ備え
た巨大なマニピュレーター。

おまけにごく初期型の I S に見られる全身装甲タイプだった。

見た目は初期の第一世代型 I S や、第二世代型 I S に見えるが、攻
撃力はかなりある。さっきの攻撃で既にシールドエネルギーを六割
ほど削られた。

「はアあああアツ!!」

大倭先生が敵に斬りかかる。

しかし敵もやり手のようで、重そうな見た目とは裏腹に、先生の剣
撃を次々とかわしていく。

俺も先生と敵の距離が開いた瞬間を見計らって、銃による支援射撃
を行うが、装甲が硬いらしくただの銃弾では体勢をくずすこともでき
なかった。

「終くん！撤退して！ 私が時間を稼ぐ！」

先生が降り下ろされたマニピュレーターを受け止めつつ、逃げるよ
うに指示する。

敵の I S のせいだろうか、さっきから救援信号を出しているのに、
ジャミングにかかったかのように返答がない。

ここはどちらかが離脱し、直接救援を呼んだ方がいい。

俺は反転し、I S 学園に向かって飛行する。

だが、敵の I S はそれを許す気がないようで、大倭先生を隙をつい
てもう一方のマニピュレーターで弾き飛ばすと、右腕の粒子砲を断続
的に発射し、俺の行動を制限する。

(まずい、今ので先生は完全に沈黙した。逃げることも難しいぞ……!!)

俺は一心不乱に、飛んでくる砲撃を避け続ける。

暫くすると、敵のISが砲撃をやめ、背中のブースターから燃費の悪そうな黒い煙をあげながらこちらに向かって飛び上がってきた。接近してくるつもりだ!

突き出された右手のマニピュレーターを俺から見て左に払うと、次は上段から左のマニピュレーターを頭めがけて降り下ろしてきた。

俺はとっさにその場で下降し、攻撃をかわす。

再び、追撃で拳が迫ってくるが、それもギリギリかわす。

(クソ……っ。やっぱり反応が……!)

ISと人体のリンクをサポートするISスーツを着ているにも関わらず、体感的にリヴァイヴの反応が遅い。原因は明らかに適合率の低さだろう。

始めこそ、敵の猛攻をなんとかかわしていたが、だんだん敵も慣れてきたのか、こちらの動きに合わせ正確に拳を振るい、砲撃を放つようになってきた。

そして俺が攻撃をギリギリでかわすため、そのたびにISが絶対防御を発動しエネルギーが削られていた。

一際大きい衝撃が全身を襲い、地面に接触するまで自分が殴られたことに気がつけなかった。

(今のもう限界だ……!)

致命的な角度で攻撃を受けたのか、絶対防御が発動したせいで俺のシールドエネルギーの残りの殆どが消え去った。

こちらに向かって、ISが粒子砲を向けている。

今食らえば、絶対防御はおろか、通常装甲すら消え去り、赤い光の奔流が俺の体を焼くだろう。

最後に通信回線を開いてみたが、結果は変わらない。ジャミングが効いているようで、誰とも連絡が取れない。

俺はコンテナにもたれ掛かり、死を覚悟した。

その時。

「ひっそり日本に戻ってきてみれば、いきなり市街地戦？
けっこうハードなことするようになったのね日本って！」

そんな声が聞こえると同時に、敵ISが被弾し吹っ飛ぶ。

(い、今のは・・・まさか『龍咆』・・・!?)

声は、若い。どこか幼さを感じる女性の、女子の声だ。

しかも、俺はこの声を知っている。

「ちよつと、その操縦者。あんたもう少し模擬戦の相手くらい選んだらどうなの？ 見てらんなかったわよ」

その少し上から目線で発せられる口ぶりも、その肩に部分展開したISも、その小柄な体軀も。

つい二年前だと言うのに、すでに懐かしさを感じるほどに、思い出の中にいた少女。

いや、もしかしたら思い出したのかもしれない。

「・・・ねえ？ 大丈夫？ さっきから反応が無いけど」

気が付けば俺は、その助けしてくれた少女に、不思議そうに覗き込まれていた。

どうやら彼女はISで浮上しているらしく、ハイパーセンサーを使ってこちらの様子を窺っているようだった。

「あ、ああ。大丈夫だ」

俺はマニピュレーターをふり、意識があることをアピールしたが、はたと気付く。

・・・さつき俺は彼女に顔を見られていたはずだ。

事実、俺はさつき確認し、あれが彼女であると納得したからだ。

だったら、なぜ彼女は俺を前に平然としていられる・・・？

そんな俺の疑問を余所に、彼女は自身のISを、部分展開ではなく、完全に展開した。

ああ、わかる。

分かってしまう。

あの機体がどのようなものか。

明るい紫が基調となったカラーリングで、特徴的な武装はやはりあの両肩の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）だろう。勾玉のよ

うに外側に突きだしたデザインが攻撃的な印象を受ける。

そして、俺の偽物の心臓が、異常な速度で血液を全身に送り始める。身体が熱い。まるで何かに歓喜しているようだ。

「それで、アレ。倒しちゃっていいの？」

「え？ あ？ そうだな……。問題ないと思う……。…」

その熱のせいで、彼女の問いにもしどろもどろに答えることしか出来なかった。

俺が問題ないと言うと、彼女はその勝ち気な瞳に眩いほどの光をともらせ、臨戦態勢に入った。

「そう、じゃあアイツは私が片付けてあげるから、ちよつとあんだ。あたしをIS学園まで案内してくれない？ 見たところ教員部隊の一人でしょ？」

彼女は盛大な勘違いをしたまま（まず、俺を男だと認知していない）再起動を果たした敵と向き合った。

日本人と似たアジア系の、鋭い顔を自信満々に敵に向け、チャームポイントのツインテールを潮風に靡かせながら、その中国人女子は名乗りをあげたのだった。

「私の名は凰 鈴音（ファン リンイン）！ そして専用IS『甲龍』！ 私たちを舐めると、痛い目見るわよ!!」

そう高らかに宣言する彼女の姿は、俺には二年前の冬の彼女になつて見えた――！。

再会と再起動

『甲龍』………』

闇夜に、街頭の光を受けて輝くISに、俺は呆然とした眩ししか洩らせない。

なんで、アイツがこんなところに………!?

混乱の最中にある俺をおいて、当の鈴は体勢を立て直したISに向かって突進する。

その両手にあるのは甲龍の基礎武装——『双天牙月』だ。

「ハアアアアアアッ！」

鈴は分割状態にあるそれを縦横斜めと、振り回す。

その猛攻を捌ききれないのか、敵ISは両手にバリアーを張り踏ん張っている。

一際強い斬撃を鈴は放つと、遂に敵のバリアーが粉々に砕ける。

『龍咆』!!」

鈴はその隙を逃さず、甲龍の第三世代型兵器『衝撃砲』を相手に直接撃ち込む。

ハンマーで殴られたかのような衝撃が二発。相手の真芯に当たり

絶対防御が発動。エネルギーが大幅に削られる。

吹き飛んだISは、そのまま東京湾に落ち、見えなくなった。

——敵ISの沈黙を確認

「………っ!?!」

突然走った痛みに、俺は胸を押さえる。

くそっ、目標が沈んだことに安心したのか、さっきの疼きが酷くなってる………!

「……あー、逃げられちゃったかー。ま、いや。ねえ、ちゃんとやっつけたんだし、案内してくれるよね?」

着地した鈴がISを起動したままこちらに歩み寄ってくる。

まで、来るんじゃない………。こっちに来るな………!!

——特定のコアの反応を検知、Bシステムを起動——

遂に俺の視界内に、そんな表示が出てきたときだ。

「——凰 鈴音！今すぐISの起動を解きなさい！」

「抵抗は無意味です。既に五機のISがあなたたちを包囲しています！」

黒塗りの大型バンの登場とともに、二機のIS（リヴァイブ）を纏った女性自衛官たちが銃を構えたまま俺たちのそばに着地した。

「ゴイツら、日本のIS部隊……？ 今更何しに来たって言うのよ！」
突然のIS部隊の登場に驚く鈴。

「何をしに来たのかと、問うのはこちらの方です。IS学園編入手続きを終えるまでの勝手なISの展開は、アラスカ条約に抵触します。よって、我々は貴女を拘束しなければなりません」

「え……？ ちよつと！ 勝手になに両脇に手え突っ込んでんのよ！
放しなさいよ！」

そのままずると、甲龍ごと引きずられていく鈴。

凄いなあの女性官たち。完全にパワータイプ仕様の甲龍の抵抗を簡単に抑え込んでいる……。

やがて、鈴が俺から離れたせいか、胸の疼きも段々と収まっていく。

（……まあ、なにせよ。敵のISを一機落としたか……）

俺は立ち上がり、まだ痛む胸を押さえながら大倭先生を探す。

ISの反応がないから、恐らく展開が解けているのだろう。

——そう、安心していい。

——敵ISの再起動を確認！ ロックされています!!

（再起動だ?!?）

慌てて海を見やれば、海中から覗く2つの赤いアイカメラ。

その付近に、チャージ中なのか光が集まっているように見える。

（マズイ、今後ろには鈴を乗せた車が——!?!）

一瞬の間のと発射される最大出力形態（バーストモード）での荷電粒子砲。

俺は紙切れのようなシールドエネルギーを使って、それを抑え込む。

「うおおおおおおおっ！」

五重に張ったシールドが、一枚割れる。

後ろではこつちに気付いていないのか、ISを解いた女性自衛官が鈴とともに車に乗り込み、発車の瞬間を待っていた。

また、一枚割れる。

大倭先生にも、千冬さんにも連絡が通じない。他の先生にもだ。

完全な孤立。俺は一人であるISに立ち向かわなければならぬのか!?

また一枚割れ、残り二枚。

ISの適合率が、胸の疼きとともに下がっているのか、マニピュレーターが揺れる。

シールドも維持できなくなりそうだ・・・!!

ようやくこちらの状況に気付いたのか、展開されたISがこちらにかけてくる。

でも、遅い!

残り、一枚。

どうする、どうすればここを乗り切れる!?

援護は間違いなく間に合わない。もう俺のリヴァイヴも限界だ。

さつきから偽物の心臓がここから出せと言わんばかりに跳ね回る。

——— Bシステムを・・・

ああ、わかってるよ。

ホントは会えてうれしいんだよな。お前も俺も。

でも、過去の出来事が許せなくて、お前をここに埋め込んだあの人が許せなくて、正直言ってお前をまた見たいとは思えないんだ。

——— Bシステムを・・・

だから、塗り替えたくて、越えたくて、いつまでもいつまでも無様にここで足掻いてる。

いつかは使えるようになる。いつかは完璧に自分のモノにして、大手を振って謝りに行こう。

そう、頭では考えながら毎晩眠れない夜を過ごしている。

だから・・・あ。

俺のハイパーセンサーが、IS『甲龍』を纏った『鈴』を捉えた。それと同時に俺のなかで、何かがカン高い音をたてて広がっていく

感覚がした。

—— Bシステム、起動。スタンド・アップ 展開準備

シールド一枚を支えている、リヴァイブのマニピュレーターが溶けていく。

それでもシールドが消えないのは、また新たにISを構築しているからなのだろう。

緑色の装甲がとけ、真っ白な装甲が姿を表す。

両肩の角ばった装甲は、綺麗な流線形を描く白銀の装甲に替わり、固定ユニットが消え去り、背後に新しく非固定ユニットが現れる。

—— 展開準備、及び展開完了　IS『瞬龍』起動します

「—— ハッ!!」

俺は両拳を握りしめ、前に向かって正拳突きを繰り出す。

両腕を離れたエネルギーは、最大出力の粒子砲をも押し退け直進する。

「おいあんたら! さっさと逃げろ!!」

自分でも驚くほど低い声で叫んだと思う。

俺は背後の連中にそう叫ぶと姿勢を低くとり、『イグニッション・ブースト瞬間加速』で相手との距離を一瞬で縮める。

ビームを照射するISを真下に見ながら、俺は再び拳を固め降り下ろす。

ドオン! という水を弾く音が周囲に響き渡り、俺の衝撃砲が相手にヒットする。

「—— ツー!」

続けて二発。更に続けて三発。

合計六発の衝撃砲を真上から浴びせた。

装甲をベコベコに凹ませたISが、最後に俺のほうを見てきたので。

「俺に勝負を吹っ掛けてきたことがマチガイだったな。なあ?」

無人機さんよ」

爆発するISに向けて、そう手をふってやった。

@

その後、呆然と状況を理解するだけのことに脳の処理能力を割り振っているのか、全く反応しなくなった鈴を、ISごと車の天井に縛り付けた自衛官たち（俺を見ても何の反応も無かったから、もしかしたらIS委員会の連中かもしれない）が連行するのを見送つてから、しばらくした後、他の先生方がこちらに急行してきた。おそつ。

怪しいと見ていた他のコンテナは、全てISが収納されていたような痕跡があつたが、戦闘の最中に逃げてしまつたらしく何の情報も得ることは出来なかつた。

で、現在の俺は、と言うと。

「まつたく、たいしたことをしてくれたな。この馬鹿者が」

千冬さんの説教を受けていた。なぜか轡木用務員も同席して。

時刻は朝の6時。そう、朝の。

（おかしい。俺は昨日の二時くらいまで事後処理におわれていたはずだ。なのになんで寝ていない・・・!?!）

俺の疑問を全く意に介せず千冬さんは説教を進める。

「敵を撃退したのは褒めてやろう。だが、撃墜するバカがどこにいる。死体が上がつてこなかったか良かったものの、上がってきたら終、お前は間違いなく処分を受けてたぞ」

そうそう。あのISだが、俺の予想は的中していた。

突撃前、熱源反応のなかつたコンテナに、最後の粒子砲の容赦ない攻撃。

あれはどちらも人が乗っているという仮定では成り立たない事象だ。

人が居たのなら、熱感知に引つ掛からないのはおかしいし、後ろに生身の人間がいる状態で粒子砲を最大でブツ放すなど、マトモな人間の戦いではない。

以上のことから無人機だと仮定してのラストアタックだったので、引き揚げられたISを調べたところ、完全に人の痕跡はなし。晴れて無人機だったということが証明された。

だが、千冬さんはその情報を箝口令が敷かれている、と他言無用を

押し付けてきた。

もともと秘密の仕事なので、言うつもりは無いが、どうにも気になる。

「(バシツ)・・・私からは以上だ。轡木用務、貴方からは何かありますか?」

「そうですねえ・・・。まあ、良いでしょう。結果だけを見れば敵の戦力は確かに削られました。この場合、叱責を受けるのは新任とは言え、戦闘中に生徒を残して気絶した大倭先生でしょう」

千冬さんは俺の頭を叩き、轡木用務員に話を薦めた。

「確かに、今週編入予定だった凰 鈴音さんを条約違反で強制帰国させたのはまずかったです。貴方の存在が明るみにならなかったことが幸いし、数週間後に再来日することが決定しました。なんの問題もありません」

そう言うと、用務員は指導室を後にした。

「・・・柀」

千冬さんが椅子に深く腰掛け、俺を見据える。

「・・・Bシステムを起動させたらしいな」

「・・・ええ、ホントにイヤなことを思い出しました」

千冬さんは、俺と一緒にあの場を経験した一人だ。

勿論、俺の胸・・・と言うか心臓の代わりとなっているIS『瞬龍』についても知っているし、それに搭載されたシステムの危険性も熟知している。

「・・・制御は?」

「昨日の状態では少し気性が荒くなっている、と言うことを自覚しましたが、常識的な範囲です」

「そうか。何よりだ」

千冬さんは安心したように息をつく。

「私にもなぜこのタイミングで凰と、あの機体がやって来たのかはわからん。だから特に注意できることは無いんだが、気を付けろ」

「ええ、もう丸一年以上気を張った毎日ですよ」

チョツとしたジョークを言ったつもりだったが、千冬さんは「そう

か、アイツが迷惑をかける」といつて、それきりなにも言わず、欠席許可証を置いて指導室を去った。

……えっと、つまりこれ休んでいいって事なのか？

@

二年前の冬、イギリス、中国、日本の共同で、あるISが極秘裏に造られた。

計画のコードネームは『双龍』。

そのISは、特定のISと特殊なネットワークを構築することで、あるシステムが起動し機体全体の出力を格段に上げると言うものだった。

システム名は Berserker system。縮めてBシステム、と呼ばれた。

計画には、日本側から数年ぶりに表世界に顔を出した篠ノ乃束博士が参加。

イギリス側は、当時イギリスが最も研究の進んでいたBT兵器の技術の基盤、非固定浮遊部位の技術を提供。

同じように中国側も、空間を圧縮し、自在に砲弾を操る衝撃砲の技術を提供した。

試験操縦者は、日本で発見され、未だに公表されていなかった存在である当時14歳の少年だった。

Bシステムにおいて重要な、特定のISには中国の未完成IS、『甲龍』が選ばれた。

試験は成功。

その場で、システムを搭載したISは『瞬龍』という名称がつけられた。

ここまでは、誰もが幸せに計画を進められる、そうおもっていた。

だが、試験終了直後、国籍不明の武装集団、及びISが研究所を――

「……………朝か」

何やらイヤな夢を見た。

俺は頭を振るうと、カレンダーを見る。

あの事件から今日で6日。

千冬先生の残した欠席許可証は、一週間の許可が出ていて、度肝を抜いた。

だから俺はその許可証を盾に、一週間の休みを得たのだ。

することもなく、唯一したことといったら、トレーニングぐらいだろうか。

じつとしていると、俺のIS『瞬龍』が、生体再生で補った血管に血液を送り出す鼓動が聞こえて気分が悪くなった。

許可証も明日で期限が切れる。

「……学校、出るか」

そう言えば、今日一年がアリーナで何かする、という周知メールが出たな。

気晴らしになるか分らんが、出てみるか。

目的を持つと、幾らか行動する気力も湧くようで、俺はやっと重いからだを上げたのだった。

銀対白（蒼編）

一週間ゴロゴロしている間に土日を含んだらしく、久しぶりに登校した学園は月曜日だった。

クラスの皆は、俺が一週間休んでいたことを不思議に思っていたらしく、千冬さんが

『終は一身上の都合で、実家に帰省している』

と、話を付けていてくれたみたいだった。だから雨もまったく訪ねて来なかったのか。

大倭先生は朝、顔を会わせると両手をあわせて謝ってきたものの、俺はそれに視線で「いいっすよ」と返している。

ふー、やつと放課後だ。

今日の目的は、朝のホームルームでも連絡のあった通り、一年同士による模擬戦の観戦だ。

俺はクラスの女子の会話から会場は第三アリーナだと言う情報を得たので移動する。

IS学園は各教室が詰め込まれている本校舎を中心に、各アリーナや各施設がところ狭しと並んでいる。

たっぷり五分ほどかけて第三アリーナに移動する。

雨やフォルテは他の女子と先に行ってしまったらしく、近くには姿が見えない。

なんか、休んだ一週間で俺の孤立度が上がってませんか？

そんなことを考えながら並木通りを歩いていると、ある人物と目があつた。

「……サラ・ウエルキン……」

IS学園二年生。整備科所属。

イギリスの代表候補生だという話は聞くが、専用機持ちだという噂は聞いたことはない。

彼女は、同じ年とは思えぬ大人びた雰囲気漂わせて、木の幹に寄りかかって立っていた。

「何してるんだよ、こんな所で」

俺は目があったからには無視するわけにもいかず、比較的苦手とする彼女に取り敢えずそんなことを訊ねてみる。

「それはこちらの台詞よ。貴方こそどうしてここにいるの?」

「どこでどうしてようが俺の勝手だろ」

「その言葉、そっくりそのままお返しするわ」

あー、そうですかい。

俺はサラを無視して歩き出す。

しかし、サラはどうやら俺に用があつてここにいたらしかった。

「今日のアリーナでの模擬戦。見に行くつもりなのかしら?」

「・・・ああ。ちよつとした暇潰しでな」

「対戦するカードはご存知?」

「いや、知らん」

端的に伝えると、サラは上品に、しかし厭らしくフツツと笑った。

「どうやら最近話題の、世界で一番目の男性IS操縦者と、我が祖国、イギリスの代表候補の試合のようですよ」

「・・・それがどうかしたのか?」

対戦カードははじめて知ったが、今さら驚くような内容ではない。

せいぜい、今年の一年は血の気が多いなーと言うくらいだ。

「見に行くつもりでしたら、気を付けてくださいね。あの子、男性嫌いなモノでして」

そう言うとサラはアリーナに向けて歩き出す。

なんだ? どういう意味だよあれ?

・・・やっぱあの時のことまだ怒ってんのかな?

あの時のこと、と言うのは俺の女装が露呈した時のことで、その原因はあのサラ・ウィルキンに有ったりする。

彼女とは一年の頃、寮のルームメイトとして一学期を過ごしたのだが・・・やっぱり起こるのよね。

ハッキリ言っちゃうと、サラは百合趣味なのだ。

ある日の夜、俺が女装したままトレーニングルームから帰ってくる時、その部屋で待っていたのは、薄く頬を赤らめベッドに横になるサラだったのだから驚いた。

その時は何とかかわしたものの、就寝時に彼女の手が俺のナニを……いや、止めておこう。

兎に角、俺はサラに特に嫌われている。

俺へのいじめはアイツが先導して行っただと言われているくらいだ。そんなヤツがワザワザ忠告じみたことまで言いに来たのだ。ただで済むとは思えない。

「……………やっぱ帰るか」

その場でくるつと回れ右。

俺は寮に向かって歩みだした。

@

それから十分ほど後だろうか。

俺の端末に、千冬さんから着信が入った。

「はいっ、終了ですっ!」

「……………なぜそんなに力が入っているのだ?」

いや、千冬さんから連絡って、大抵怒られることが原因なので……………。

「……………まあ、いい。至急第三アリーナまで来てくれ。ちよつと我々では抑えが効かん」

千冬さんの声はどんよりと暗く、疲れているというより、呆れたような響きを含んでいた。

「何かあったんですか?」

「ああ、オルコットのヤツがちよつとな。頼んだぞ」

それつきり、通話は途切れる。

——オルコット。

さつき学内ネットで調べたが、この学園においてオルコットの名を持つのはただ一人。

セシリア・オルコット。

一年生にして、イギリス代表候補生、及び専用機持ちというエリート街道まっしぐらというヤツだ。

今回、アリーナで織斑と戦うのは彼女だという話だ。

……………待てよ。つまりさつきサラが言ってたのはこういうこと

なのか？

一年が俺をどうやって知ったのかは気になるし、どういう用件なのかも気になる。

……全てはアリーナに行けば分かること、か。

@

「……で、なんで又ISを着てるんですかね？」

俺は身長的に見下げることになる山田先生を睨んだ。

「そ、そんな睨まないでくださいよう……」

山田先生はいそいそとISのチェックを終わらせて、オペレーションルームに戻っていく。

このISは、訓練機ではなく、山田先生のリヴァイヴだ。準備できなかったらしい。

適合稼働率は15%。あ、いつもよりは良い方の数字だ。

『仕方がないだろう？ 織斑の前にお前を出せとって聞かないんだからな』

スピーカーから千冬さんの声が流れる。

千冬さんもオペレーションルームに居るようだ。

因みにさつきからそこで見ている、織斑一夏ともう一人女子の視線が気になる。

二人が俺を物珍しそうに見てくる。

「……なんだよ？ そんなに珍しいか？」

「い、いえ。俺より先輩が居たことに驚いているだけです……」
「えっと……、柊、先輩？のことは学園の情報にも有りませんでした。一体どういことなのですか！」

女子のほうの質問にどうやって答えたものかと悩んでいると、山田先生が「Aピット、射出準備！」とコールする。

俺は都合よくコールが鳴ってくれたので、それで終わりだとばかりに準備姿勢を取る。

『おい柊。「瞬龍」は出来れば使いな。負けても良い。だが、無様な姿

は晒すなよ?。」

個人回線で千冬先生が言う。

「それはつまり、出来れば使って勝て、と言うことですか?。」

『……この間の一件と、検査の結果、お前の破れた心臓にはI Sのコアが、生体再生を用いて張り付いているようだ。発動しても暴走が起きなかったのはコアとお前が一心同体の状態であるから、と言える。よって私は現時点を以て、お前の気さえ許せば専用機「瞬龍」の使用を許可することに決めた。I S学園生らしく、全力でぶつかると良い』

あの千冬さんが……瞬龍の展開を許可した!?

つまりそれだけ俺が信頼されている、と言うことなのだがどうにも腑に落ちない。

「——千冬さん、まさか「Aピット、射出!!」あががががががががが!。」

俺は早速無様な姿でアリーナに放り出されたのだった。

@

アリーナの観戦席は、かなりの生徒で埋まっていた。

たかだか学級の代表を決めるための試合なんだろう? なんてここまで人が集まってんだ?

あ、雨がフォルテと一緒に座ってる。

驚いた目でこっち見てるよ。

「やっと出てきましたわね、終 クレハ!。」

開放回線ではなく、肉声で俺を呼ぶ。

声のした方を見ると、俺より上空に一機のI Sがいた。

そのI Sは、背中に四枚のフィン・アーマー、手には身の丈を越すほどのロングレンジライフル「スターライト・Mk3」が握られていた。

リヴァイヴからのデータによると、あのI Sはイギリス製第三世代型I S『ブルーティアーズ』というらしい。

名前の通り、装甲から手にしたライフルまで真っ青だ。

そしてその操縦者が……。

「私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ！ この度はサラさんのお気持ちを晴らすためにここへ貴方をお呼びしましたの」

サアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

やっぱりアイツの関係者か！

ていうかお気持ちって！ 去年のことあのセシリアとかいうヤツに言ったのかよ！

「サラさんがお休みになっているところに忍び込み、シーツのにおいを嗅いただけでなく、あまつさえそのお体に指を這わせるなど！ あつてはならないコトですわ！」

しかも盛りすぎだろおとおお！

「ま、まて。落ち着け。アイツから何を聞かされたか知らないが、全部誤解——」

「更に女性の服を着て学園に入り込むだなんて、なんて変態！」

真実ちよろっと混ぜて、信憑性を増しやがった!!

ああ、さつきまで突然の男子の登場に目をキラキラさせてた一年女子の顔が、ごみを見る目に……

おいやめろ、ハイパーセンサー。顔だけピックアップすんな。

「そう言うわけで、あなた方男を私が華麗に倒して見せますわ！」

—— 敵 I S、戦闘態勢へ移行。

「赦しを乞うなら今のうちでしてよ？」

セシリアがライフルを構える。

「確かに、謝るべき事はしたけどな……」

あんなに散々言われて、それも嘘に踊らされた罵倒で、挙げ句の果てには模擬戦参加？

「ふざけるなよ。一年。先輩には敬語が基本だろ」

—— 俺はそこまでバカにされて黙ってるほど大人じゃない。

俺が気迫を込めて言うと、

「男性の方が何をおっしゃって居るのかしら？ 誰のお陰で今の世の中があると思っていらいっしやるの？」

「テメーこそ誰がこの世の中動かしてると思ってる。今も大統領や総理大臣は男だぞ」

「あら、残念。イギリスは既に女性の方が務めていますのよ？」

セシリアはそれに気づいていないのか、先程と変わらぬ態度で男をバカにし続ける。

確かに、ISが認知されてから世界は変わった。男の地位は低くなり、女尊男卑の考え方が一般的になってきている。

町に出れば、突然女性に荷物もちをやらされる男を見るのもそう珍しくない。

だからこそ、セシリアの見下げた態度、嘘に簡単に乗せられる単純さが許せない。

「逆に言ってやるよライム女。赦しを乞うなら今のうちだぜ」

そう言いながら俺は、胸の左側。心臓が熱く、激しく脈打っていることに気がついた。

おまえ、結構好戦的なんだな。

でも、今回はお前の出番は作らないように戦うぜ。

千冬さんはああいったが、万が一って時もある。

「そう、でしたら——私が日本の謝り方と言うものを教えて差し上げますわ！」

試合開始のブザーが鳴り、正式に模擬戦が始まる。

刹那に放たれた青い閃光が、俺を貫く——。

銀対白（蒼編） 2

セシリアの放ったレーザーをなんとか避けた俺は、あいつの狙いを悟った。

（あいつのさっきの狙いは俺の頭！ 日本の謝罪……土下座か！）
どうやらセシリアは俺に土下座を要求しているらしい。

再びリヴァイヴのアラートが鳴り響き、迫ってきた第二射目もなんとかわす。

「ふん、なかなかやりますわね……。けれど、いつまでそれが続いて!？」

セシリアは俺の動きを見て、俺の力量を測ったらしく、射撃の頻度が一気に増した。

セシリアは俺より上から射撃を行っているため、俺の姿が見えやすいのだろう。その狙いは的確だ。

なんとかしなければ。

……無様な姿は晒すなよ？

ピットから出る前の千冬さんの言葉がリフレインする。

俺はそれに応えるように再びレーザーをギリギリの線でかわした。

「ああもう！ ちょこまかと！ 腹ただしいですわね！」

「おいおい、焦るなよ。試合はまだ始まったばかりだぜ？」

そうカツコつけて言うが、余裕がないのはこちらの方だ。

ただでさえ低い稼働率で戦っていて、あまつさえ向こうは第三世代型。

余程の技術差がなければ、勝つのは困難を極める。

俺はセシリアからの攻撃がやむタイミング——エネルギーのチャージ——を狙って、近接ブレードで攻撃を仕掛ける。

「タイミングはなかなかのものですわ。やはり基本は出来ていらっしやるのですね！」

瞬間加速を使って仕掛けた攻撃は、ブルーティアーズの近接武器『インターセプター』によって妨げられた。

……基本だと？

彼女の言い方にカチンと来たが、そこは大人の対応。顔には出さない。

——敵ISのエネルギー充填を確認！ 射撃モードへ移行！
マズイ！ 攻撃が来る！

俺はセシリアの左腕を押さえたままその場で飛び上がると、先程まで俺がいた場所を、青い閃光が駆けていった。

「ふふふ、ハイパーセンサーに頼りきりのようですね！」

セシリアは俺から距離をとると、再びライフルによる射撃を再開した。

銃弾の雨が酷くて、近づけない。

彼我の距離は約30メートル。遠距離用武器で牽制しつつの接近を狙っても、向こうは中長距離を得意とするISだ。

俺よりうまく距離をとる方法を知っているだろう。
ならばどうするか？

俺は不意の一撃を喰らい、姿勢を崩す。

衝撃をISが緩和しきれておらず、頭を揺さぶられる。

気持ちが悪い。吐きそうだ。

その隙が命取りとなり、俺はその瞬間だけでも、計五発の銃撃を受けてしまったのだ……。

@

「あのバカ者が……」

千冬はオペレーションルームで試合を観戦しながら呟いた。

クレハがりヴァイヴのままオルコットに挑んでいる映像がディスプレイに映っている。

「？ どうかしましたか織斑先生？」

デスクに座っている山田摩耶から不思議そうな視線を向けられる。

「いや、少しな」

千冬はそう短く返すと再びディスプレイに目をやった。

（終のやつ……本気で二世代で三世代に勝つつもりか？）

ISバトルにおいて、機体性能というのは勝敗を大きく分ける。

もちろん操縦者の練度も重要な要因だが、まだ乗りはじめて五年と

経っていない新人の戦いにおいては機体が勝敗を分ける場合が数多くある。

この勝負、クレハが装着しているのは第二世代のリヴァイヴ。オルコットは第三世代だ。

しかもクレハはもともと適合稼働率が低いと言うハンデを抱えている。

クレハに相当な策でもない限り、勝つのは難しいだろう。

(さて、あれの許可は出したが、アイツが使うかどうかだな……) 千冬はそう考えながら、塩コーヒーを作り始めた。

@

試合開始から30分が経過。

リヴァイヴのシールドエネルギーも大半が削られ、残り140。

装甲は所々が消失し、ISスーツが見えている。

武器も残っているのは、この近接ブレード二本だけだ。

(正に、危機的状況だな)

さらにセシリアは先程からブルーティアーズが、ブルーティアーズと呼ばれる由縁の第三世代型兵器、『ブルーティアーズ』を周囲に展開している。

四機からなるその兵器は、使用者の脳波を読み取り、射出したビットを自在に操るといふ兵器だ。

だが、ネタは割れたぞ。

俺はなけなしのシールドエネルギーで瞬間加速を使うと、再びセシリアとの接近を試みる。

「貴方も分らない人ですわね!!」

セシリアが俺に向けて二機のビットを使つての多角的直線攻撃を仕掛けてくる。

上下から迫ってくるビットの砲口は淡く光を湛えている。

ビットから繰り出されたレーザーをなんとか回避すると、スコープ越しにセシリアと目があつた。

「閉幕と行きましょう!!」

セシリアがトリガーに指をかけるのが見える。

彼女との距離は約十メートル。

喰らえば一撃で終わる攻撃を回避する方法は、あるにはある。

俺は急加速を行い、セシリアとの距離を詰める。

突然のことに、セシリアはスコープから目をはなし、俺の姿を捜しているようだった。

今だッ!!

「ウオオオオオオッ!!」

セシリアの隙をつき、ブレードでスターライトの銃口を上へはねあげる。

すると偶然セシリアの指がトリガーを引いたのか、真上へ向かってレーザーが放たれる。

「な・・!! ま、まだまだですわ!!」

セシリアは俺と距離を取ると、次は四機全てのビットを射出。待ってたぜ、この時を!!

射出されたビットは他方向から俺に迫ってくる。

だが、もうネタは割れている。対応には苦労しない!

それぞれのビットが一斉にレーザーを放とうとした瞬間、俺は二本のブレードを円を描くように振るう。

刃の届く範囲にあったビット四機はそのすべてを切り裂かれ地に落ちる。

観戦席から歓声が沸き起こる。

「あ、貴方・・・一体なんで方向が判りましたの!?!」

「分かってねえよ。ただ——」

セシリアの顔が驚愕に歪む。

「——お前のクセとタイミングさえ掴めば、いつ撃ってくるか予想はつくだろう?」

俺はビットが爆発したのを確認すると、セシリアに向かって飛翔する。

これで彼女の武器はあのロングレンジライフルだけだ。

つまり、懐に潜り込むことができれば勝てる!

最後のエネルギーで瞬間加速を使い、セシリアの真上に翔ぶ。

しかし、そんな中でセシリアは再び口元に笑みを浮かべた。

「残念ですわね」

セシリアの言葉と共に、腰のアーマーが可動し、二門も砲口が現れる。

まさか……あれは——。

「おあいにく様！ ブルーティアーズは六機あつてよ！」

言葉通り、腰の砲口から攻撃が繰り出される。

しかし、今までのビットのようにレーザータイプではない。

俺は回避しようとするも、それが間に合わないと悟る。

腰のブルーティアーズから発射されたのも、それは。

——ミサイルだった。

銀対白（蒼編） 3

セシリアの放ったミサイルが真っ直ぐ俺に向かって飛んでくるのがわかる。

けれども今の俺には防ぐ術はなくて、ただ流れる時間が体感的には遅くなっているのを感じていた。

そんななか、俺の中のもうひとつの意志がこう命じてくる。

——『斬れ』、と。

@

俺は胸の高鳴りに従い、IS『瞬龍』を展開開始。

その展開中に瞬龍の基礎武装である黒い近接ブレード、『時穿』とききうがちを無理やり展開する。

「っあらっ—」

迫り来るミサイルを一閃。

時穿に切り裂かれたミサイル二本はその場で爆発を起こした。

端から見れば俺に当たったように見えるだろう。

爆発と同時に瞬龍の完全な展開を終えた俺は、立ち込める煙を突き破って、セシリアに猛攻を仕掛ける。

完全に墜ちたと思われていた俺の復活に、アリーナの生徒が歓声を上げた。

「な、なんですかの!?! そのISは!?!」

インターセプターで辛うじて俺の斬撃を受け止めたセシリアは目を見開いた。

そう思うのも無理はない。

さっきまで訓練機体で戦っていたヤツがいきなり見たことないISを纏っているんだ。

恐らくブルーティアーズのデータベースにもものつてはいないだろう。

俺は時穿でセシリアを押し退けると、そのまま前進。

すれ違いざまにスターライトMk2を破壊する。

「私の銃が．．．!?!」

呆然とするセシリアに対して、シールドエネルギーを削るため再びブレードを構える。

「これで分かっただろ。自分の実力が」
事実、セシリアはリヴァイヴの俺にも幾らか遅れをとる行動をしていた。

そして、瞬龍が出てくればこの様だ。

まだ、このレベルの操縦者には遅れはとらない。

しかし、当のセシリアはまだ闘気を失っていないようで、炎の灯つた瞳で此方を睨み付けてくる。

俺はその目を覚悟と受け取った。

瞬間加速で飛び出し、セシリアの首めがけて時穿を振るう。

——獲った——!!

ガキンツ!

短い金属音がなり、俺の剣は何かはその動きを止められた。

その何か、とは……。

「ふー、ちよつと血の気が多すぎませんかね先輩?」

何の特徴もない近接ブレードで俺の剣を止めたのは、1年1組織班一夏だった。

「何いつてるんだよ1年。これは訓練だぞ。本気でやらなくちや意味がないだろ」

「いやいや、その本気が妙に真に迫るものがあつたので、思わず手が出てしまいましたよ」

そう言う一夏が纏っているのは訓練用ISではない。

(専用機………一次移行前ファーストシフトって感じだな)

色が塗られる前のプラモ然としたその灰色のボディは日光を浴びて、鈍く光っている。

(そん な こ と よ り、マズイな………
もうエネルギーが切れかかっている)

瞬龍での戦闘開始から三分。今はこれが限界って事だろう。

俺は時穿を納めると、瞬龍の展開を解いた。

「おい、1年2人。ていうか、特に金髪」

俺はピットに向かいながら二人に言う。

「あんまり簡単にノせられるな。嘘や八百長、まあちやんと考えて動けよ」

一夏は困惑の表情を浮かべていたが、セシリアは辱しめを受けた見たいに顔を憤怒の表情に歪めている。放送できない顔だな。

……つと、こんな感じで良いですかね。千冬さん？

多少の、一夏の乱入はあったが、うまくセシリアをさばけたはずだ。そういう視線をオペレーションルームに向けると、窓越しに千冬さんが頷いたような気がした。

『それではこれより、クラス代表決定戦を執り行うツ!!』
千冬さんの宣言のあと、セシリアの叫び声が上がった。

@

「……………んで？　なんでここが分かった」

「新聞部の方に聞いたのですわ♪」

俺は試合が終わり、山田先生にリヴァイヴを壊したことを謝ってから、新聞部の質問攻めを避けたのち、やっと夜になって安住の地にたどり着いた訳だが……………。(因みにさつきまで雨がいた)

……………報復に来たと……………。

いや、限界まで瞬龍、ていうか心臓を使ったせいであつと動きたくないんですが……………。

ていうか新聞部……………。

去年からここに居るため、その悪名は耳に入ってくるが、戦った相手を部屋に寄越すつてどういう神経してんだあいつら。

「それで、セシリア。一体何の用があつてここに来た？　やり過ぎたのは謝るからさつきと帰ってくれ」

突然の訪問者にそう言うが、セシリアは表情を崩さない。その笑顔、絶対怒ってるだろう。

「取り敢えず話は中で聞いてやる。終わったら帰れよ」

無理矢理そう言うと、セシリアは「はい♪」と言う。なんなんだ一体……………。

「単刀直入に申し上げます。昼間の件は本当に申し訳ありませんでした」

部屋にいれ、イギリス人と言うことで紅茶を出したのだが、その瞬間セシリアは土下座した。

日本伝統の謝罪方法、土下座である。

「先ほどサラさんにお話を窺った所、わたくしに伝えたことは真つ赤な嘘、冗談だと仰ったため、謝罪に参りました……」

ああ、そう。

まあそれに関しちや、さつきサラの端末にグロ画像ウイルス送りつけたからもう気にしてなかったんだが……まさかあの高飛車な態度から一変、ここまで大人しくなるとは……。根は素直なのかもしれん。

「別に、もう気にしてない。去年ちよつと色々あって、ああいうのには慣れてるんだ」

着席し、俺のぶんの紅茶を一口飲む。うん。ぱりつぱりのリプトンだ。

「それに、千冬さんも俺にIS使わせるために呼んだんだろうし、新学期の肩慣らしになって良かったぜ？」

そう言うことやつとセシリアは立ち上がり、席についた。

「そう言われるのなら私も胸を撫で下ろす気分なのですが、質問、宜しいでしょうか？」

「……答えられる範囲で、ならな」

一応そう言っておく。

「なぜ貴方とあのISは世界中のどのデータベースにも記載が無いのですか？」

……答えられない範囲だな。

「悪いがノーコメントだ。俺がここにいる理由にも繋がるんでな」

「では何故貴方は御自分の存在を公表されないのですか？ この学園には居場所が有るようですが、このままでは生活しづらいのでは？」
「それも答えるわけには行かない」

特に、イギリス人のお前にはな。

「そうですか……」

セシリアは俺の反応に落胆したのか、肩を落とした。

「……まあ、なんだ。俺もまだ未熟でな。学ぶことがあるんだよ。ここで」

二年前に起こした事故で、俺は大切なものを失ったし、失わせた。

ここにいるのはその償いの意味もあるが、将来を共に生きていく瞬間^{コイツ}を制御するためにも、ここでの知識は必要だ。

それに、千冬さんもいる。あわよくば東さんにだって会えるかもしれない。

「俺は自分の目的の為だけにここにいます。まわりがどうかは知らんが、それだけが、俺自身の理由だ」

こういうことを言うが、最近ちよつとグータラが過ぎたかな？

答えられない質問の代わりに、と言ってみたが満足してくれないかなあ……？

「……そう、ですの……。ご立派ですわね」

意外にもセシリアは満足したように頷いた。

「って、あれ？ セシリアさん？ さっきまでバカを見るような目じゃありませんでした？」

セシリアの瞳は、さっきまでの疑ったような目ではなく、後輩が先輩に向ける目、即ち尊敬の目をしていた。

「ま、紅茶飲めよ。リプトンなのは勘弁してくれ」

「い、頂きますわ」

少しむず痒い空気を感じた俺は、セシリアに紅茶を勧める。冷めたら勿体ないもんな！

「って、あら？……この紅茶……？」

「？ どうした？ なんか不味かったか？」

一口含んだセシリアが改めて香りを確かめるのを見て、不安になる。

雨が持ってきてくれたのをそのまま使ったんだが、淹れ方間違えたか……？

「い、いえ。我がオルコット家の紅茶と同じ茶葉の様でしたので、すこし意外に……」

え？ 貴族様と同じ紅茶？

「確かイギリスでも専門の業者がつくほどの名品で、香り、味、色。全てが揃った最高級品ですのに、一体どうやって……?」

……雨、お前なにもんなんだよ一体？

「……因みに、値段は？」

「ええと、確か100グラムじゅ……ほどでしたと思います」

値段を聞いた瞬間、目の前の一杯の紅茶が札束の海に見えた。

何とかちびりちびり紅茶を飲み、夜も遅いのでセシリアが帰ると言いだした。

「本日は迷惑をお掛けしました。紅茶まで頂いてしまって、このお礼は何時か必ず致しますわ」

「何度も言わせるなって、別に良いって言ってるだろ。あんましつこいとあの紅茶一氣に使ってやるぞ?」

「ふふっ、お優しいのですね」

優しい? どこが?

「同じ寮の中だし、送らなくても良いだろ? 気を付けてな」

「……やっぱり、優しくないです」

小声でそう呟いたセシリアに、やっぱり送っていかうかと提案しようと思った瞬間、瞬龍が起動した。

起動したといっても、視界内に各パラメーターが表示される位で、見た目には分からない。が。

(……なんだ!? また、胸が……!)

ずきずきと、締め上げられるような痛みに見舞われる。

俺の様子に気がついたのか、心配そうにセシリアが顔をのぞきこんでくる。

だめだ、今の俺に近づくのは——!

——Bシステム、ファーストシークエンスで固定。対象のISSコアを確認。登録します。

なんだ……？ 何をやっているんだコイツは!?

——既に登録されたコアが一件あります。上書きしますか？

視界のなかに、Y/Nという選択肢が表れる。

何をやっているかは知らんが、とにかくこう言うときはNだ!

眼球運動でNを選択。処理が再開される。

——それでは、上書きせずに強制的に登録を開始します。

なん……だと!?

そこから先は更に痛みの奔流が激しくなった。

心臓が跳ね回り、鼓動が早くなる。身体中に血液がまわり、顔が熱

くなる。

何なんだよ……この感覚ツ!!

——登録。登録。登録。登録。登録。登録。登録。登録。登録。

登録。登録。登録。

目の前で流れていく登録という文字の流れ。目が回りそうだ。

——登録、完了。登録済みのコアは二件です。

——特定のISコア反応を確認。Bシステム、通常起動します。

そして、痛みが嘘のように消えていく。

突然起こった事に驚きはしたが、別に変わったことはないな。

あるとすれば、何故か俺の手がセシリアの肩に——つて、え？

「夜は危ない。やっぱり俺がセシリアの部屋まで送った方が良いみた

いだ」

俺の意思とは無関係に勝手に喋り出す俺。いや、意味わからん。

だが、送っていかうかと提案しようとしていたのは事実だ。

だが問題なのは、自然にセシリアの肩に手を回しているところであ

る。

「え？え？ ええと……？」

あー、ほら。セシリアですら戸惑い出したぞ。

て言うかなんかキモいぞ。俺。

「さあ、行こう。俺も早くシャワーを浴びたいからね」

なんでシャワーを浴びる必要があるんだ。

一方でセシリアはというと、

「はっ!? あうあうあうあう・・・!?!」

なんか顔が真っ赤で一杯一杯って感じた。
何をテンパってるんだよお前。

「お手をどうぞ、お嬢さん」

と、遂に俺が死にたくなる台詞を吐いたとき、その者は現れた。

「……………く、クレハくんが、篠乃歌さん以外の女性と……………!?!」

くうー、これは新聞部に高く売れるツスよー……………ツ!!」

ふお、フォルテー!!!

まずい! 他人が現れたのはいいが、なんで噂大好きフォルテツシ
モ♪なんだよ!?

ああ、写真を撮るな! 録音するな!

「やあフォルテ。こんな夜遅くにどうしたんだい? 俺になにかよう
かい?」

「いや、別に用事はなかったツスけど、たった今出来ました! う
ひよー、しかもお相手は一年生の専用機持ちじゃないツスかー! レ
ベルたけー!!」

まずい、さすがにこれ以上はまずい。何とか体の制御を……………
!!

「フォルテ、君の声を聴けるのは嬉しいが、回りを見てごらん。もう
ベッドに入っている時間だ。もう少し囁くように俺に喋ってくれ」

うん、フォルテの厚かましい声はこれで抑えられるが、全然解決し
てない!

手元の僅かな振動に気づくと、セシリアが何故か涙目で俺を見上げ
ていた。

俺はそれに純度100%。混じりっ気なしの笑顔を向ける。うわ、
俺キモすぎ……………。

「あ、貴方はそうやって色々な女性に声を掛けるのですか?」

「いいや、今はセシリアだけを見ているよ」

と、俺は事実を伝えたが……………。

「えー、じゃあアタシや篠乃歌さんはどうなるツスかー? 遊びだつ
たんすかー?」

フオルテが適当なことを言っただけかき回す。

「み、見損ないましたわッ！」

そう言うと、セシリアは俺の拘束を振りほどき、廊下を駆けていった。

.....ちよつとまで。

今までの俺の行動を振り返ってみると、俺がセシリアの部屋に行く流れになりかけてなかったか!?

ようやく自由に動かせるようになった体で、頭を押さえる。

ああ、頭いたい.....。

フオルテも居なくなってるし、胸のウズキも消えた。

——Bシステム、待機モードへシフト。瞬龍、停止します。

遂には瞬龍も停止し、俺は完全に孤立した。

この場においても、明日からの学校生活においても。

「ああ、やっぱり退学しようかな.....。」

@

同時刻、IS学園校門まえに一人の少女の姿があった。

潮風に靡くツインテールに、今流行りのパーカーにスポーティーな脚線美を際立たせるホットパンツ。

少女のすぐそばにはたったひとつだけのボストンバックがおいである。

「やっと着いたわよ、IS学園！」

彼女の手首には、ピンク色に輝くブレスレット。

IS『甲龍』の待機形態だ。

「お待ちしていました。風 鈴音さん。用務員室は此方です」

彼女、鈴に対応するのは一年一組の副担任、山田摩耶だ。

彼女は、鈴の鋭い瞳に気圧されながらも、轡木用務員の待つ用務員室に鈴を案内する。

「それじゃあ、確かに一夏はここに居るのね？」

鈴は轡木用務員から編入の詳細を聞くと、表向きはISを動かせる唯一の存在として公表されている、織斑一夏の所在を聞いた。

「ええ、貴女の四組とは違うクラスですが、確かに一組に在籍していますよ」

そう言うと鈴は誰の目で見ても喜んでいると分かる笑顔を浮かべた。

しかし、何かに気づいたのか表情を引き締めた、凜とした雰囲気を出す。

「もうひとつ聞いていい？ 一週間程前の事なんだけど……」

彼女、凰 鈴音は何も件の織斑一夏に会うためだけにこの国に来たわけではない。

その目的のために、彼女はあることを轡木に問い掛けた。

そして、彼と彼女の加速し続ける物語は幕開けを迎える――。

クラス代表就任パーティー

——Bシステム。

俺のIS「瞬龍」に搭載されている特殊な機能だ。

それを搭載したISは特定のISと、特殊なコアネットワークを構築し、瞬龍及びその使用者の身体能力を格段に向上させる機能だ。

・・・と、二年前に俺は聞いた。

だが、東さん。

登録できるコアが複数ってことや、性格が変わるなんて、全く聞いてませんが・・・!?

セシリアとの一件から数日。

俺がセシリアに強引に迫ったという噂は新聞部発行の学内新聞で、学園じゅうに広がり、道行く女子が俺を虫を見るような目で見るようになった。

特に一年一組が酷く、セシリアがヘイトスピーチでもしているのか、俺がこの学園にいる理由が「女を喰うため」何てことになってた。

一方で変化が少なかったのが俺のクラスなんだが、俺についての一定の理解がある分、今回の一件で俺に対してどういう対応をとればいいのか分からないらしく、俺に対する対応も何処かぎこちない。

雨については1日学園を休んだくらいだ。

勿論、噂を流した新聞部は千冬さんに「下らない」の一言で切り捨てられ、べられたらしい。

俺も、情報のソースであるフォルテに、頭部が凹むほどのヘッドロックをかましてやった。

Bシステム、あれの起動にともない発現したあのキモい俺だが、この数日の検証でたった一つだけ分かったことがある。それは、

女子の前では不用意に動悸を乱してはいけない。

どうやらアイツは俺の心音が乱れたときに出てくるみたいだった。

検証方法？ ああ、女子の心証を犠牲にして行ったよ。

あの夜は、別に動悸を乱した覚えはないが、登録ISの追加、瞬龍の起動に驚いたのが原因のようだった。

(もともと嫌われてる部分の方が多い俺だ。今更汚名が増えたところで些細な問題だ)

そう割りきりながら、遅めの夕食を食堂で摂っていると、

「というわけで！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう〜！」

「おめでと〜！」

という女子の声に続き、ぱんぱんと、クラツカーの音が鳴り響いた。

どうやら、どつかのクラスがパーティーでも開いているらしい。

「いやー、これでクラス対抗戦が盛り上がるねー」

「ほんとほんと」

「ラツキーだったよね、同じクラスになれてー」

「ほんとほんと」

様子を見るに、セシリアと一夏の所属する一年一組の連中らしいが、主役の一夏には興味がないとばかりに用意された料理を食いつているやつがいる。返事テキスト過ぎだろ。

一夏はというと、食堂の半円を描くテーブル席の最奥にすわり、その両側を女子が取り合って視線の応酬が起こっている。うわ、死にそう。

そんななか、一人の女子生徒が一夏に近づいた。

・・・あ、ええと確かあの子は一夏と同じピットにいた・・・

篠ノ乃、箒？ 揺れるポニーテールが特徴的だったから少しだけ記憶に残っている。

彼女は一夏と一言二言交わすと、手にした湯飲みからお茶を一口飲んだ。

祝いの言葉でも掛けてたのか？

その後、千冬さんにめられた二年の新聞部副部長、黛薫子が現れた。薫はここぞとばかりに取材という名目で一夏の写真をばかでかいカメラでバシバシ撮っていく。

・・・でも知ってるぞ俺は。お前ら新聞部、とった写真にアホみたいな高値付けて外で売り捌いてるだろ。チクるネタではあるが、弱味

はつかいどころが肝心。今は言わないでいてやる。今回の一件で冬さんに幾つか押収されたみたいだし。

男子生徒を取材できたことに満足がいったのか、次に黛はセシリアに「クラス代表を譲ったのは惚れたから？」などと言う。

だがセシリアは、極めて平常通りの笑顔で上手いことかわした。あの黛のイジリを回避するとは、流石だ。

しかし、ここで想定外のことが起こった。

今の俺は食堂の片隅で狐うどん(420円)を啜るただの男子生徒。だから、連中に関わるのを避けるため、行動を急いだのが過ちだった。

食膳をカウンターに返そうと席をたった瞬間だ。しかし、ソコは不幸に定評のある俺だ。

ものの見事に脚を絡ませて、盛大にスツ転んだ。

俺の手から離れた丼や、いなり寿司の入っていた小皿が宙を舞う。

そして……。

パリンパリン、ガツシャーンっ

それぞれの食器はリノリウムの床に叩きつけられ、その形を失った。

この場でそんな大きな音を立てれば、食堂じゆうに響くのは当たり前で……。

「おやおやあ……？　そこにいるのは今巷で大不人気の柊　暮刃くん

じゃありませんか？」

黛エドナに目をつけられたドロオプロ——ライフ。

「あ……あーあ。やつちまつたー。これは怒られるぞー。その前に箸で片付けないとー。それじゃっ！」

「簡単に逃がすと思ってる？」

あ、これだめだ。多分写真の件をちらつかせても、それよりヤバイネタをここで獲られる……!!

「どーしたのー……って、げ」

「なんで野獣先輩がこんなところに……」

「……あれ〜？　食べるのに夢中になってたらなんでこんな緊張感バ

リバリの空気に〜?」

後ろに控える女子たちは今にも牙を剥いてガルルルとか言いそうな雰囲気だ。獣はどっちだよ。

む、まずい。ここで心拍を乱せばまた取り返しの間かないことになつてしまう。

しかも今度は新聞部副部長までいる。現行犯逮捕は免れない。

「……ど、どうしたんだよお前ら。片付けないとおばちゃんに悪いだろ?」

努めて冷静に切り抜ける方法を実行する。

しかし、

「騙されちやダメよ。今は普通に見えるけど、本性を表せば……」

「ていうかこの場はどうすんの? 集合写真とるんでしょ?」

警戒心マックスですねお前ら。

「ちゃんと話した方が身のためよ終くん。この前のオルコットさんの一件と、これまで起こしてきた淫行の数々……ここで白状しなさい! 記事にするから!」

「言うと思つてるのか、黛?」

なんだよ淫行の数々つて。この間のが初犯……つて、別にわざとじゃねーよ。

「いい加減うんざりしてたのよ。君のその不明瞭さに。なんで何処にも君に関するデータがないの?」

どうやら黛は、今回の事だけでなく、俺が入学してから今までのことについて言及しているらしい。

いつの間にかふざけた雰囲気は霧散し、ノリノリだった女子たちは戸惑っている。

セシリアや一夏、箒は……うん。普通に歓談を続けている。

「別に、隠してる覚えはない。新聞部お前らの実力不足だろ」

「ぐぬ、そう言われると仕方ないのだけど……。でも、一年生は君の存在に戸惑っているのよ。オルコットさんの件も併せて色々説明をくれると嬉しいのだけど?」

黛は歓談中のセシリアにねえ、オルコットさん?と問いかける。

その際ようやく俺に気づいたららしいセシリアは俺の方を見るものの、視線はあわせようとしない。

「……まあ、悪いことをした、申し訳ない気持ちならあるさ。」

一夏は中々鋭い目でこちらを見ている。どうやら俺の行動を観察するつもりらしい。

「……ふむ、折角謝罪する機会を得ているんだ。ここいらで清算すべきだろう。」

「わかった。一、二年生には去年のこと、一年生には今回の一件のことを謝罪する。だから、これ以上の詮索は——」「ここがパーティー会場ね!!」——は?」

俺が謝罪の言葉をのべている最中、突然食堂のドアが開かれる。

レコーダーで録音していた黛も、どこから出てきたか分からないフォルテも、その他の女子も、その声のした一点に意識を向ける。

「……なによ。一組がここでパーティーやってるって聞いてきたんだけど」

そこに立っていたのは彼女——。

「んー。キミ見慣れない顔だね。何年生?」

黛も知らないような新入生^{ルーキ}。

「お、お前、もしかして……!!」

座っている一夏が何故か反応を示した人物。それは……。

「……再登場、って訳かよ。鈴」

肩の露出したIS学園制服に身を包んだ、中国からの来訪者、凰鈴音だった!

クラス代表と暗がり少女

「それで、一夏はどこ？」

食堂のドアを蹴破る勢いで入ってきた鈴は、口ではそう言ったものの、目ざとく座ったまま呆然としている一夏を発見。嬉しそうな笑顔で駆け寄っていく。

「り、鈴……？ お前鈴か!？」

女子に囲まれている一夏が鈴の姿を見て驚愕した。

「うわ、久しぶりだな！ どうしたんだよ急に！」

「それはこっちの台詞よ。しばらく見ない間にIS操縦者なんかになって。それこそどうしたのよ？」

「うーん。少し説明がめんどくさいんだが……。つて、鈴こそここにいてるつてことは……」

「そうよ！ あたし遂に中国代表候補生になったの！」

鈴が胸を張って言う。

なるほど、鈴がIS学園に来ることができた理由は候補生だからか……。

「代表候補生か……。つてことは専用機持ちか？」

「うん。あたしのISは中国製第三世代『甲——』」

「ちよつと待ったああああ！」

一年一組女子、入魂の叫び。

「なにになに!! あなた織斑くんとどういう関係!？」

「随分と親しげじゃない！」

「あーん、またライバルが〜」

その叫びは様々で、興味に目を輝かせる者（黛とか）も居れば、ショックに肩を落とす者もいる。

その中で一見冷静だが、肩をプルプルと震わせる者が一人。

「あー、一夏？ そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「ああ、悪い筈。今するよ」

一夏がそう言うと言った女子は佇まいを直した。

人の波にテンパっていた鈴ももとの調子を取り戻す。

「こいつは凰 鈴音。俺と小五からの付き合いでさ、箒がファーストなら鈴はセカンド幼なじみって所か？」

「なんでわたし（あたし）に訊くのよ？」

二人の幼なじみがキレイなユニゾンを見せる。

「まあセカンド幼なじみが鈴。鈴は中二の冬に中国に帰っていったから、会うのは一年ちよつとくらいだ」

鈴の紹介を終えた一夏は次は箒の紹介を開始した。

「んで鈴。こっちは箒。前に話したこと覚えてるか？ 小学校からの幼なじみで俺が通っていた剣術道場の娘さん」

「へー、そうなんだ」

二人の幼なじみが互いをじろじろ見つめあう。

その迫力に一組のテンションは隠れぎみだった。

「こうしちゃいられないわ！ 早く部屋にかえって記事にしないと！

それじゃクレハ君！ 謝罪記事の話はまた今度で！」

黛・・・お前は遅いなあ。

黛が去ったことで、正座から解き放たれた俺は、背後の喧騒をBGMに、落とした食器の片付けを開始する。

あー、なんだこれ。妙に悲しい。

「・・・一夏さん、二人も幼なじみが居たのですね」

一人寂しくカチャカチャしていると、目の前にセシリアがやって来た。

スカートが舞って、チラツと見えた脚からは目をそらす。平常心。

「お前は加わらなくていいのかアレに？」

後ろを見ると、食事がどうたらで箒が鈴に食って掛かっている。

その様子をクラスの女子たちは楽しげに眺めている。

「いいんですの。一夏さんのことは精一杯サポートして差し上げる所存ですが、プライベートにまで突っ込む気はありませんので」

「はー、しっかりしてんな」

よし、欠片は集め終わった。あとはこれを盆に入れて・・・。

「そう言えば、あんた。夜のコンテナ集積所で何やってたのよ？」

ぎく。

「コンテナ？ 夜？ なんのことだよ？」

「隠さなくていいのよ？ 夜の町で遊びたいって言うのは分かるけど。IS着てドンパチは不味いんじゃない？」

それ、俺です。

「いや、ここに来てから一步も敷地の外へは出てないぞ？ 何かの間違いじゃないか？」

「いや、確かにあれは男だったわよ？ 話したのも一瞬だったけど間違いない男。あんたじゃなきゃ誰が居るのよ？」

そんな鈴の疑問に答えるように、その場にいた全員が背中を丸めた俺を指差した。

おい、なんだその息の合った動きは。

「え？ え？ 男じゃない！ なんであんた以外に居るのよ!?!」

「俺の前例がいたんだってよ。因みにあの人。二年生だぞ」

鈴は混乱した様子で俺の背中と一夏の顔を交互に見ている。

仕方がない。場を抑えるためだ。少しの接触は大丈夫だろう。

俺は立ち上がり、鈴と向き合う。

「・・・終 クレハ。二年生だ」

「・・・なによ？」

あー、もう分かれよな。

にぶちん。

「自己紹介だ。お前だけ知っていて、俺が知らないのもズルいだろ」

「あ、ああ。そうね」

鈴は咳払いをひとつとしてややオーバーな態度で自己紹介をする。

「私は中国代表候補生、凰 鈴音！」

「・・・何かつこつけてんだ鈴？」

「う、うっさいわね！ 準備してたんだからやらないともつたいでしよー！」

シンと静まった空気に一夏の突っ込みと鈴の大声が響く。怪獣か。

「そ、それで。あの時のIS乗りはあんたなのね？」

「ああ、俺だ。それがどうかしたのか？」

「話が分かりそうな人で良かった。忠告するだけよ」
「忠告?」

すると鈴は声の大きさを抑えて、俺だけに聞こえる声量で言った。
「知ってても知らなくてもいいわ。今後『双龍』という言葉聞いても、関わろうとといった気は持たない方が良いわ」

双龍……?」

それだけ言うと鈴は俺から離れていった。

@

双龍。

俺のIS『瞬龍』と鈴のIS『甲龍』の開発計画のコードネームだ。
それがなんで鈴の口から出てくる?

確かに彼女はあの日のことは忘れてしまったハズだ。甲龍を持つに至った経緯も適当なものにすりかわっているだろう。

だが、俺のことが分からない所から見ると、全てを把握している訳じゃ無さそうだな。

どうして知ってるのかは知らんが、何にせよ。関わらない方が良さそうだな。

鈴のためにも。俺の為にも。

@

織斑一夏クラス代表決定パーティーから一夜明け、翌日には鈴が正式にIS学園に転入してきたようだった。

クラスは一年二組。当たり前前にホツとする。

だがしかし、目の前にはもつとゾワゾワくる催し物が迫っていた。

「えーっと。今年もクラス代表対抗戦が行われます。このクラスの代表は一応篠乃歌雨さん、と言うことになってるけど……って、篠乃歌!?! 誰!?! 勝手に決めた人!!」

朝のホームルームで大倭先生が騒いでいる。

クラスの皆はこう思っただろう。

(あんただよ)

……と。

「せんせー。確か先生が始業式の日には急ぎの用事があるって言って決

めたじやないですか？」

一人の女子（名前覚えてない）がそう告げる。

「え、本当に？ 不味いなあ……。流石に雨に対抗戦出てくれて言うのも可哀想な話だよね……。？」

先生は少し上目使いでクラスを見渡す。

「誰か代わりに対抗戦でろや」と言うことだろう。

確かに雨は座学では優秀な生徒だが、実習となると少々ミスが目につく生徒だ。しかも気が弱い。

「クレハくんクレハくん。どうツスカ？」

「なんだよフォルテ。出てみないかってか？」

「そのとおりツス！ 今年は織斑一夏くんが一組の代表ツスからね。ここでクレハくんが名乗りを上げれば話題性抜群ツスよ？」

「アホか。対抗戦は学年別だろ。当たる確率なんて有るわけがない」

「それはどうつすかねー？」

フォルテはニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべている。

なんだ？ こいつのこういう顔にいい思い出なんて一つもない。

「あ、対抗戦について変更点が一つ」

壇上に立つ大倭先生が連絡用のプリントを見ている。

「今年から対抗戦、全学年総当たりだからね！」

……マジで？

瞳を輝かせた女子の圧力に勝てず、二年一組の出場は俺になった。
ざげんな。

@

放課後、昨日と今日でかなりのストレスを溜め込んだ俺は、気晴らしにとアリーナ地下の射撃訓練室を訪れた。

アリーナにホログラフのターゲット表示機能が備わってから一気に利用者が減った施設らしいが、俺にとつちや都合がいい。

雨からはゴメンねゴメンねと謝罪の言葉がびっしり書かれたメールが届いたが、怖いので気にしてないと返信し無視を決め込む。

（さあ、鬱憤を人差し指に込めて引き金を引いてやる！）

そう意気込み、薄暗い廊下の突き当たり。訓練室とプレートの掛け

られた扉を開く。

中は、縦100メートル。横50メートルほどの大ホールで、壁際には個人兵装用の重火器から、IS用のライフルまでかなりのモノが揃っていた。しかも全て手入れが行き届いている。

しかもその隅っこには脱ぎ捨てられた制服と、綺麗に畳まれた制服二着が置いてある。

「どうやら一応生きてるみたいだな。」

俺はそう決めると、ここに住人であるある生徒の名を呼ぶ。

「おい、湊！ ミーナートー！ 居るんだろ？ 出てこいよ！」

声がホールじゅうに反射する。

すると傍らの布に覆われた箱がモゾモゾ動き、人が出てくる。

「なにか用ですか？」

ニュツと木箱から顔を出して言うのは渚 湊（なぎさ みなと）。

俺と同じ二年生だ。

湊のトレードマークである青みの掛かっているショートヘアの髪が機械油で汚れてる。

因みにこの学園に青い髪の女子生徒は二人いる。・・・いや、一年に妹が来たらしいから三人か？ まいいか。

俺は手早く用件を告げる。

「適当に射撃がしたい。ライフルよりはハンドガンの方が良いな。IS用ってあるか？」

「あります。250番のロッカーからIS用のハンドガン兵装になるので、自由に使って・・・。」

と、そこで湊の声が途切れる。

「クレハさん。訓練がしたければ、まずは私の訓練に付き合ってくださいか？」

五分後、射撃訓練室に二機のISを纏った二人が佇んでいた。

「相変わらずゴツイスナイパーライフルだな」

「クレハさんこそ、いつもとISが違うようですが？」

互いに互いのISに口を出しあう。

湊は専用機を自分で作った、珍しいケースで。一応日本の代表候補生と言うことになっている。

ISは第二世代型で名を『サイレン・チェイサー』という。

完全な長距離射撃型らしく、装備もライフル一丁だけらしい。片寄ってんなく。

スナイプの為だけに無駄を削ぎ落とした装甲なので、軽く、結構な移動速度も売りなんだとか。

そんな射撃特化のISが細いフォルムを照明の光に照らされながら、長距離実弾ライフル『サイレントスコール』を構える。

対して俺は瞬龍を展開し、湊の管理する重火器の中から、あまり出回っていないハンドガンタイプの火器を選択。

「それではクレハさんはここから真つ直ぐ、前だけを見て射撃してください」

湊が入り口にもっとも近い、要ははしつこの射撃台を指して言う。

「それだけか？ 的持って走れ、とかじゃなくて？」

「はい。それだけで構いません」

そう言うのと湊は奥の射撃台へと移動する。

名前通りの無音の移動だ。黙って近寄られても今の俺じゃ気づかないだろうな。

湊は射撃台へつくと、システムを起動。射撃訓練システムのスコア方式を選択した。

しかも……。

「……最高難易度って、本気かお前」

「ええ、本気です」

……古今東西、狙撃主には変人が多い。こいつもその例に漏れなかった、ってわけか。

「開始と共に好きなタイミングで撃ってください。なるべく不意を突くように」

その言葉を最後にカウントダウンがゼロを切り、目の前に的が出現。

俺は一拍遅らせてから引き金を引く。

しかし。

(……ん？あれ？)

俺のはなった銃弾は何事もなく的を通過。俺に10ポイント加算される。

(なんなんだ一体……？)

続いて、丁度真ん中のレーンに的が出現。

俺はただただ、引き金を引く。

手元の銃口から現れた銃弾はマズルフラッシュとともに真っ直ぐ飛翔する。

しかし次の瞬間、ISのプライベートチャンネル越しに、湊が息を止める気配がする。

湊のライフルから放たれた銃弾は、俺のやや前方に向かって亜音速で飛翔する。

みるみる二つの銃弾の距離は縮まり、そして接触。

ハンドガンの銃弾は超長距離ライフルの放つ、大口径の銃弾に運動エネルギーで負けるため、強制的に進行方向が変えられる。

変えられた進行方向の先には、さつき出現した二つ目の的がある。そして……

「ワンシュート」

湊の声とともにその的を撃ち抜いた。

す、すげえ。銃弾と銃弾をぶつける技量があるのは知ってたが、その角度まで自由に操れるとは。

その後も最高難易度のなに恥じないスピードとタイミングで、次々と的が出現する。

俺も不規則に銃弾を放つが、湊は一発もはずすことなく、軌道を変えた俺の銃弾で的を撃ち抜いていった。

ただ、俺の真正面に現れた的だけは、手出しすることなく俺に処理させたが。

「パーフェクト」

湊の宣言通り、表示されたスコアはいつも通り上限いっぱい9999点だった。

すげえな。

銃を下ろした俺は、これ迄のスコアを表示させる。

計算システムが地上のヤツと同じだから、他人の記録が混ざってるが、湊名義のスコアはどれも同じ点数だ。少し気味が悪くなるね。

湊はと言うと、いつの通り射撃が終わっても銃を構える姿勢を解こうとしない。

彼女が言うにはそうやって銃の調子確かめているんだと言う。射撃が終わったあとじゃ意味ないだろ。

湊が姿勢を解いたタイミングを見て、俺も瞬龍を解き制服に戻る。ちよつとごわごわするのが気になるが、着替える手間がないから楽だな。勿論授業ではちゃんと着てるが。

ISが解除される音がしたので湊を見ると、ISスーツ姿に戻った湊がいた。落ち着け、あれは歴としたユニフォームだ。

「ありがとな湊。お陰で良いもんが見れたぜ」

くいくいと整理体操をする次いでに湊に礼を言う。

「いいえ、お礼を言うのはこちらの方です。クレハさんのお陰でいい練習ができました」

そう言つて機械的に頭を下げる。

相変わらずなのは石頭もなのか。

「別に、俺じゃなくてもいい練習だっただろ。それこそその自動銃座でも出来る——」

「いいえ、最近のクレハさんは少し精神に動揺があったので、射撃のタイミングがほどよくバラけていました。それこそ注文通りの不意をつくようなタイミングだったのでもいい練習になりました」

「それ、褒めてるのか・・・?」

つまるところ、落ち着いてない。か。

「それに、これ迄の傾向から今日辺りにでも来るのではないかと思つていたので」

まあ、そりゃここを見つけたのも、女装の件がバレてみんなに後ろ指指されて逃げ場所を探していた頃だったしな。

俺のなかでここが心のシエルターとして機能してるんだろ。

「なんにせよ。いい気分転換が出来たぜ。そうだな。もういい時間だし食堂にでも行くか？」

お礼をしようと思いついたのが食堂でのオゴリ。
そう悪い話ではないはずだ。

「クレハさんが良いのなら一緒に一緒にさせてもらいます」

そう言いながら、湊はISスーツの肩紐に手をかけた。

俺は出口に向かいながら、オゴリの上限の設定を始める。

よしよし、そうだな……。今日は気分が良いから結構お高いものでもおごつてもいい気分だぜ。

背後で伸縮性のあるものが人間の肌を打つパチンという音が聞こえる。

カツカレーとかどうだろうか？ いや、まだ行けるな。カツカレープラス、プリン！ とか。

嫌な予感がし始めた俺は、確認のために頭では別のことを考えながら振り向く。

プリン！とか……。プリン！みたいな……。とか……。プリンみたいな肌とか……。って!?

この世には二種類の女性が存在する。

即ち、ISスーツのしたに下着を着ける者と着けない者だ。

どうやら湊は後者だったらしい。

「お、お前！ なんてここで着替えてんだっ！ 更衣室行けよっ！」

振り返った先には、ISスーツを胸まで下ろしている半裸の湊がいた。

——Bシステ——

さて瞬龍、落ち着け、俺！ まだ大丈夫なレベルだ！ 確かに下着を着けていないと分かるレベルで胸は見えていたがまだソコまでだ！ 洋画で女優さんが着てるイブニングドレスの方が露出は幾らか高い！

「？」

当の湊は何とも思っていないようで、小首を傾げている。

いや、その動作は文句なしに可愛いんだけどな、勘弁してほしいで

す。

危うく動機を大幅に乱すところだったが、何とか峠は越えたらしい。

良かったな俺&湊。

また噂が流れるとこだったぜ。

あと、湊。テメーに奢るメシはカレーで十分だ。

プリンが俺が食ってやる。

そんなことを考えながら、悶々と湊の着替えを待つ俺だった。

柊 クレハ

俺が学校内で見慣れない女子と共に夕食を摂っていることが珍しかったようで、数奇の目にさらされながら夕食をとってから早30分。

湊と別れた俺は、一人寮の廊下を歩いていった。

時刻は既に八時を回った。

この寮には門限はないが、恐らく大概の人物は部屋にこもって宿題でもしている時間だろう。

そういうわけで静かな廊下を一人進み、部屋の前まで着いた、が。

(……ん？ なんだこの荷物？)

俺の部屋は四階の角部屋になっており、片側にしか隣人がいない。

しかし今現在、その隣の部屋と俺の部屋の扉の間にポツンとひとつ、ポストンバックが置いてあった。

……ふむ。

見たところ女物だ。

ていうか男子の割合が1%に満たないこの学園で、自分の物以外の男の荷物を見ることが自体稀なことだ。

隣の部屋のヤツが、部屋変えでもしてるのだろう。

結構な頻度で起こることなので、そう納得する。

俺は部屋の鍵を開けようとカードキーを差し込んだが、ここで有ることに気がついた。

部屋の鍵が空いているのだ。

IS学園のセキュリティは堅牢だ。

マスターキーでもない限り、他人の部屋を解錠するなんてまず不可能と言いきれる。

でも、この部屋のキーを持っているのは俺と、特例で雨だけのはずだ。

最新の注意を払って慎重に部屋のドアを開ける。

去年サラに呼び出された際、ドアノブにトラップを仕掛けられていた経験があったので、イヤでも慎重になる。

無音でドアを開け、室内に侵入。あれ？　ここって俺の部屋じゃなかったっけ？

室内を見渡しても変わった様子はない。

強いて言うなら、テーブルの上に雨が置いていたらしい弁当があるくらいだ。

「…………閉め忘れか？」

いや、部屋の鍵はオートロックだし…………。

と、ソコで。

「——つたく、早く帰ってきなさいよね同室のヤツ！　荷物置けないじゃない！」

キツと、シャワー室の扉を開ける少しくぐもった音と共に、怒りの声が聞こえた。

本日二度目の嫌な予感に駆られ、振り向いてはいけないはずなのにそーっと後ろを振り返ってしまう。

「……………」

目と目が合う瞬間にく、鈴は叫び声を上げるでもなく、瞬間的にISを部分展開し、その腕で俺の顔にアイアンクローを極めた!!

「痛い痛い痛い痛い!!　見てない！　見てないぞ俺は！」

「うるさい！　乙女の自室に無断で入った時点で有罪よ!!」

手加減しているのか、羞恥のあまり力が入っていないのか、鈴のアイアンクローはギリギリ俺の頭を潰さないレベルで止まってくれている。

「だっ、だったらお前こそなんでここに居るんだよ！」

「はあ!?　バカなの!?　ここはあたしの部屋よ！」

「ここは俺の部屋だッ！」

俺の証言に鈴の動きが止まる。

視界は掌で潰されていて見えないが、恐らくキョトンとしているんだろう。

「…………オーケー。良いわ。話を聞いてあげる」

おお、どうやら交渉に出してくれるみたいだぞ。

よし、そうと決まれば早速この手を…………。

「記憶を消した後でねッ！」

——握り閉めたのだった。

@

「なあ、^{ファン}鳳。俺の頭、なんか歪んでないか？」

「気のせいよ」

気がつくくと、俺は自室の床に横になっていた。

俺が使っているベッドでは、何故かチエツクのパジャマを着た鈴が当たり前のように寝転がってマンガ雑誌を読みふけている。

妙に頭が痛かったので鈴に聞いてみたんだが、この通り素っ気ない返事が帰ってくる。

まあ俺の頭はこの場では大きな問題ではない。

なぜ当たり前のように鈴がここにいるかが問題だ。

「おい、鳳！」

「名字で呼ぶの、止めてもらっていい？」

「……じゃ、鈴」

俺はテーブルから椅子を引いて座る。

「まず、どうやってここに入ったか教えてもらおうか」

そして出来ればいつ俺が帰ってきたのか教えてほしい所である。

「簡単な話よ。カードキーがあるからよ」

「どうして持ってるんだ？」

「あー、もう質問ばかりするんじゃないわよ！　ここがあたしの部屋だからよ！」

つまり、俺のルームメイトが鈴だと……？

いやいや。空き部屋なら沢山あるだろ。わざわざ男子と同居させなくても……

そう言ってみたが、鈴は一夏と箒が同室だから同じ扱いなんじゃない？と言う。

以前の俺なら問題はない。

だが、今の俺じゃ問題が大アリだ。

何かの拍子にBシステムが起動したりすれば、鈴の身の安全と俺のイメージ（既に最悪）の不変は保障出来ないぞ。

「それに、あんたが同居者だって分かって、逆に良かったわよ」
「は？　どういう意味だよそれ」

俺には不安しか無いんだがな。

鈴はマンガをポンと放り、ベッドから立ち上がった。

「あんた、あたしとチームを組みなさいよ」

「・・・え？」

チーム？　ISで？

ISは元々旧兵器の大軍を相手に一機で立ち向かう事が前提に設計された兵器だと、束さんから俺は聞いた。

故にISはISじゃなければ相手に出来ないと言われている。

公式大会でもタッグマッチはあれど、スリーマンセル以上の競技なんて聞いたことがない。

「ていうか、二人でチームって・・・あともメンバーは？」

「え？　あたしとあんただけだけど？」

「・・・アホ、そりゃペアって言うんだよ」

あまりの考えなしの発言に少し頭がいたくなる。

突然俺の前に現れて、部屋に侵入し、更にはペアを組め？

絶対に嫌だね。ていうかお前には関わりたくないんだよ。

「あんたをあの夜に見てビビッと来たわ。あんた・・・いやクレハならあたしの目的に着いてこられる」

「あの夜って・・・」

あの夜と言えば、俺が鈴と再開した夜。瞬龍が起動した夜のことだろう。

あの時に瞬龍はBシステム上の登録コアを更新し、鈴のIS甲龍と特殊なコアネットワークを築いている。

恐らくその際、使用者である鈴に何らかの影響が出て、こいつの目的が何かは知らんが、俺なら着いてこられると思っっているのだろう。要するにカンチガイだ。

「お前があの時の俺をどう見たかは知らんが、ただの敵性ISを一機潰した位だぞ。そんなの二年生なら一般生徒でも出来る」

「でもあんたは敵のビームを受け止めながら、ISを切り替えたわよ

そして、五分ほど経ったときだ。

「クツちゃーん。お弁当箱取りに来たよ〜」

ドアのす濃き間から漏れる光で、俺が居ると分かっているからだろう雨が、ノックもチャイムもせずいきなりドアを開け放った。

IS学園の部屋は言ってみればホテルのような部屋だ。

入り口からベッドまでの距離が遠いとは言えない間取りとなっている。

だから……。

「……え？ クツちゃん……その子誰？」

「あんたこそ何よ？」

鈴、テメちよつと生意気だな。

「こないだ編入してきた一年生。 凰 鈴音だつてよ。今日からルームメイトになるんだそうだ」

「そ、そうなんだ……。知らない子がいたからビックリしちゃったよ」

「んで、鈴。こっちは俺の幼馴染みで篠乃歌雨って言うんだ。二年生だぞ。敬語」

「あんたがペア組んでくれるならね」

初対面であろう二人を、中間に位置する俺が紹介する。

何でだろうな。俺が年上だからだろうか、鈴が生意気な態度を取っても、少しイラツとするだけで怒ろうとは思えない。二年前からそうだよ。

「い、一年生か……。こ、後輩キャラ……」

……。ん？ なんだか一瞬雨の様子が……。

しかし、様子がおかしかったのは一瞬だけで、今はもう鈴を見てニコニコしてるいつもの雨だ。

「……がんばれ雨……！ 後輩妹キャラなんて幼馴染みの下位互換クラスよ……！ 勝負にならないわ……！」

なにやら雨がぶつぶつ言ってる。

本人は小声のつもりだろうが全部聞こえてるぞ。誰も妹キャラなんて言っていないだろ。

「で？ 弁当だったか？ 悪い雨。今日は食堂で食べたんだ。明日の

朝にでも食べようと思つてたんだが、それじゃあ、ダメか？」

テーブルの上に鎮座する荘厳な重箱弁当を見やる。

「ううん。持つて帰るよ。わたしまだお夕食食べてないんだ。クツちゃんには明日朝一番で美味しい美味しいお弁当作つてきてあげるねっ！」

おお、なんか知らんが勝手にヒートアップしてらっしやるぞ。伊勢海老とか入りそうな勢いだな。

それと美味しいのは分かつてるから、そこまで強調する必要無いだろ。

雨はその後、重い弁当箱を一人で持つて、ガンバルー！ とか叫びつつ部屋に戻つていった。

なんだあいつ？ アブないな。

「ふー、まあ今日は良いわ。同じ部屋だし機会はたくさんあるしね」

俺と雨の様子を静観していて、毒気を抜かれたのか鈴はいそいそとベッドに潜つていく。

……まだ夜九時だぞ？ 夜更かしの趣味はどこにいったんだよ。

「それじゃ、あたし寝るから。電気消しておいてね。おやすみ」

それつきり、鈴が言葉を発することは無くなった。

部屋には、準備されていない予備のベッドと、制服のまま呆然とする俺が残されていた。

@

あの日の事は、今でも鮮明に思い出せる。

真つ白い部屋に、俺と彼女は二人きり。

彼女が纏うISは彼女のイメージにピッタリのピンク色のISで、俺の纏うISはこの部屋と、俺の心を表したような真つ白なISだった。

頭上にある展望窓には俺の両親と、彼女の両親。そして東さんに千冬さん。そして研究員として参加したイギリス人のオルコット夫妻。

室長の合図と共に、俺はBシステムを起動。元々は随意的に操れるシステムだった。

実験は順調に進んだ。

瞬龍のエネルギーも順調に消化されていき、それに比例して、各駆動部のエネルギーも増幅していった。

目の前にいる彼女はそんな俺を憧れるような目で見ていた。

止める、と言いたくなる。そんな目で俺を見るな。俺は誰かにそんな目で見られるような人間じゃないんだ！

そんな感情が胸の中で渦巻き、爆発した。

エネルギーは臨界を越え、無くなったハズのエネルギーゲージがマインスを示し始める。

そのタイミングを見計らったように流れ込んでくる黒い集団。

瞬龍の腕が勝手に動き、その集団の半分を吹き払った。白い壁が真っ赤に染まる。

その光景に彼女は驚愕し、意識を消失。ISが解除された。

瞬龍は俺の意思とは無関係に動き回り、拘束具を千切り、回りにいた人間全てを攻撃した。

彼女の父親、自身の両親、親しかった研究員のメンバー。

そして遂に、俺の腕が彼女に向けられたとき、銃声が鳴り響いた。

胸元を見れば、白いスーツに紅いシミができていて、瞬龍が操縦者の負傷の警告を表示した。

負傷したのは心臓。

ハイパーセンサーが捉えたその銃撃者は——千冬さんだった。

崩れ落ちる俺の手のひらに、待機形態の瞬龍がキューブの形で収まった。

そのキューブを拾い上げる手。束さんだ。

束さんの手の中で、キューブ型の瞬龍が形を変えていく。

俺は破れた心臓で眩く。

——変わりがなかったなあ、と。

その声を聞いたのか束さんが聞いてきた。

——なんで変わりがなかったの？ と。

それに俺は確かこう言ったんだ。

——だってさ、鈴が見てくるんだよ。まるでヒーローを見るような目でき。

——だったらなれば良いじゃん。ヒーローにさ。

——ムリだよ。変わろうと思ってそれを着たのに、また悪い方向に変わった。

段々と重くなってきた瞼の隙間に、それまでの人生を思い浮かべた。

幼い頃は、活発で何にでも挑戦して、何回も失敗してきた。

段々と年を重ねると失敗すると怒られることが多くなってきて、両親の存在が心の支えだった。

そんな時に入ってきたのが、俺のIS適正を嗅ぎ付けた外国の研究者達で、世界を変える少年だ、とその中では持て囃された。

嬉しかったよ。楽しかったよ。やっと俺でも成功させることができる事が見つかったと思ったよ。

でも、現実はそのほど簡単じゃなかった。

失敗するたびに身体の調査、調整が行われて、再び実験に駆り出される。

吐いても吐いても、血ヘドを吐いても俺は続けた。

何故なら、彼女が見ていたから。

中学二年生だという彼女は、俺を見ると直ぐ様スゴいじゃん！と俺自身を評価してくれた。

——男のIS操縦者なんてスゴいじゃん！　なんで言わないのよ!?

その目はただただ珍しいモノを見る目で、学校の先生のように俺の残した結果だけ見るでもなく、研究者達のような俺の残すであろう結果を見ている訳でもなく、ただただ俺自身を見ていた。

彼女と過ごす時間に救われた。まるで遠い故郷にある我が家に居るようだった。

彼女と過ごすうちに親しい研究者も何人か出来た。

失敗しても彼らに励まされ、歯を食い縛った。

だからこそ希望が持ってたんだ。

『そうなんだ……』

俺の話を聞き終えた束さんは一言そう言った。

もう瞼は開けない。音だけの世界だ。

そんな冷たい身体の俺に、冷たい刃物が押し当てられる。

切り込まれる感触。

「———だったら」

束さんが言う。

「変わり続けようよクーちゃん！」

その言葉は、一見すると俺が今まで繰り返してきた事を続けろという意味だろう。

だが、満面の笑みの束さんの顔と共に、心に深く、深く突き刺さったのだった。

凰 鈴音

鈴がルームメイトになってから一夜明けて翌日。

俺は節々の痛みで目が覚めた。

・・・そうだ。

昨日はあれから鈴を起こそうとしたが、寝ぼけている鈴から一発アツパーをもらい、やむ無くベッドを奪還することを諦めたんだっ
た・・・。

床から起き上がり、被っていた毛布を手早く片付ける。

こりや早いうちに収納してあるベッド出さないとな。

窓際のベッドを見てみると、鈴の姿はなく、シャワールームから流水の音が微かに聞こえる。

俺は今のうちにさっさと着替えを済ませ、授業の準備をする。

確か今日は一般の体育がある日だ。

IS学園には、ISの知識を学ぶ特殊科目と、その他の一般科目がある。

勿論進級には単位が必要で、どちらの科目でも手を抜くわけにはいかない。

もちろん一般科目の方には保健体育も含まれていて、俺たち生徒はISスーツとは別に体操服を準備する必要がある。

そんなこんなで準備をしていると、不意にシャワーの音が止まった。

・・・来るぞ・・・ヤツが・・・！

ギイとくぐもった音を扉が上げる。

出てきたのは髪がしっとりしている制服姿の鈴だ。

どうやらちゃんと、昨日シャワールームに張り付けておいた張り紙に乗っ取って更衣室で着替えをしたらしい。

「・・・なによ？ 漢字くらい読めるわよ」

タオルで頭をゴシゴシ擦る鈴は、ジト目でそう言った。

「そうか、なんなら中国語で書いておこうかなどか思ったりもしたんだが、杞憂だったみたいだな」

「え？ クレハって中国語が出来るの？」

鈴が意外そうにいう。・・・教えたヤツが驚くっていうのも変な感覚だな。

「まあな。簡単なことしか言えないが」

俺は無意識に頭をガリガリと掻く。

『へえ、意外。クレハってもっとバカなんだと思ってたわ』

おいおい、言ったソバから始めるのかよ・・・。

鈴はドライヤーを使って髪をツイントールに結わえながら、流暢な中国語を発音した。

『失礼だなお前。これでも語学の点数は良いんだぜ？』

お返しとばかりに中国語で返すと、鈴は「本当みたいね」と視線で言ってきた。

暫くして、鈴のツイントールが完成。さらさらした黒髪が朝日に煌めく。

「さあクレハ、食堂にいくわよ」

「いやお前、昨日の話聞いてただろ。雨が弁当持ってきてくれるって言ってたの、思えてないのかよ？」

食堂に向かおうとする鈴を引き留める。

それと同時に部屋のドアがノックされる。

「来たみたいだな・・・」

@

五分後、収納型のテーブルを2つ繋げて十分な広さを持つテーブルにしたあと、その上に雨が持ってきてくれた重箱をところせましと並べた。

しかし、流石に四段は食えんぞ四段は。

雨は相当張り切ったらしく、難色を示した俺の顔を見てしよんぼりした。

とか思っていたら、丁度部屋の前を通りかかったフォルテを見つけたので、強制的に食卓に付かせる。食った後？知らん。お前なら余裕だろう。

結果、四人の朝食となり、重箱攻略の兆しも見えてきたのだった。

「ウムウムウム……。で、どうだったつすか昨日の夜は？ キノウハオタノシミデシタネ」

いなり寿司を食いながらフォルテが喋る。

「別になんもねーよ。あつたとしても鈴は専用機持ちだぞ。しかもパワー型だ。俺の手に負えるか」

ちよつとしたことはあつたが、冷静を保つため、思い出さないようにする。

隣では鈴が「あたしパワー型なんて言つたっけ……。？」と首をかしげている。

「どうつすかね。最近クレハさんの様々な噂が飛び交ってますからねー。曰く、中学では様々な性犯罪を行い、その罰として去勢されたとか」

「ええっ!?! クツちゃんいつの間!?!」

「無いから、それデマだから!」

雨が本気でビツクリしていることに傷付いた。三年の時は例の実験のせいで離れて暮らしたが、俺たち幼馴染みなんだよな？

「正直なところ、あたしとしてはそうであつたほうが助かるんだけどなー……。あ、このきんぴらごぼうおいし」

「ありがとう、鳳さん。でも大丈夫ですよ。クツちゃんは年下には興味ありませんから!」

雨が鈴の皿にきんぴらを足しながら言う。

何だろうか、この二人どこかピリピリしてるよな。一方的に雨が攻撃してるみたいだが。

「そう言えばクレハ、一体いつになったら返事くれるのよ?」「絶対にしない。諦めろ」

鈴が昨晚のペアの話を出してきたので、即座に打ち切る。

しかし、ネタの尻尾を見せればたまらずかぶり付く野次馬魂を持ったヤツがここにいた。

「返事? 返事って何のことつすかりんサン!」

おいフォルテ。顔赤くしてワクワクしてるとこ悪いが、そういう浮いた話じゃないぞ。

「別に、あたしとクレハでペアを組もうって話なだけよ」

鈴の返答にフォルテはなーんだ残念っす・・・と肩を落としたが、そのフォルテのとなりでテーブルに箸を叩きつける音がしたのでビクツとなる。

「ペペペ、ペア!? それは、トーナメント的な意味で!? それとも永遠の契りのな——」

「まてまてまて、前者だ前者! 勝率を上げるために急造ペアは避けて、公式のペアを組もうって話だよ!」

「で、で、でも凰さんクツちゃんのこと名前で・・・!」

うーん、これは想像以上にめんどくさい。

チラリと鈴を見てみると、旨そうにカレイの甘辛煮をつついている。辛いもの好きだっけ。

「別に、名前であらう誰だって呼ぶだろツ。このペアには競技的な意味だけでその他の感情は一切ない!」

「むふふ、強引に納得させるとことかチョツと怪しいっす・・・!」

混乱している雨には力業。これが幼馴染みの状況収集の付け方だ。俺が強く言うと言は一応納得したようで、席に戻った。

勢いよくメモ帳にメモするフォルテ。

「脈なし・・・脈なし!」と呟いている雨。

一心不乱にカレイの身を落としている鈴。

・・・めんどくさいなコイツら。

@

一般授業の体育の時間、女子がグラウンドでソフトボールを楽しむ中、俺は一人でグラウンドの端に逃げ、暇な時間を過ごしていた。

バッテリーボックスには大倭先生がデカイポニーテールとユサユサしながらバットを構えており、完全に女子高生の雰囲気溶け込んでいた。

おつ、良い当たり・・・でもセカンドフライだ。

「・・・なにしてるのよ、こんなところで?」

突然降りた影に上を向くと、鈴が立っていた。

ISスーツの上にパーカーを着込み、どうやら実習中だと言うこと

が分かる。

「お前こそどうしたんだよ。千冬さんの授業だろ。サボってるど怒鳴られるぞ」

「質問に質問を返すんじゃないわよ。バカみたいに思われるわよ」

そう言いながら、鈴は隣に座った。

理由は分からないが、こんな所で油売っていて良い状況なのだろう。

俺は昨日から気になっていることを聞いてみた。

「・・・なあ、お前の目的って何なんだ？」

「なによ突然？」

鈴は目だけでこちらを見ていった。

「昨日からペア組めペア組めって煩いけどな、まずはお前の目的をいえよ。じゃなきゃ判断が付かん」

ホントは組む気なんてないが、この間鈴が言った『双龍』という単語。あれがどうにも気になる。

鈴と組めば分かるのかもしれないが、その行為が破滅を呼びかねないのでチョツとズルをさせてもらおう。

「双龍って言うのは、ある組織の名前。中国で生まれて、最近どこかの組織と協力体制を取ってるみたいで、世界中に影響力を持つようになってきた秘密結社よ」

「・・・その双龍の本部が日本にあるって言うのかよ？」

俺の知っている双龍とは根本的に違っていたので幾らか安心したが、秘密結社か・・・これまた漫画みたいな話だ。

「ううん。本部の場所は分からない。と言うより、存在そのものが疑われてる機関だしね。誰も本気にしてないのよ。・・・でも、あたしだけでも探し続けるわ。お父さんを見つげるために！」

鈴は力強くそう言うと、俺に、親父さんのことを教えてくれた。

中華料理が上手で、強く、優しい父親。

不覚にも、鈴の語る父親の姿が、自分の父親の姿と重なる。

「それでさ、二年くらい前かな。突然姿を消したと思ったらさ、離婚してたのうちの両親。お母さんに聞いてもお父さんには会わせてく

れないし、聞くとさ、苦しそうな顔するのよ。それが堪らなく苦しくて……」

膝に顔を埋める鈴に、俺は何もしてやれない。してやる権利なんて無いから。

——俺は、鈴の父親を殺しているから。

今さら謝れるわけがない。いや、どんなに謝ったって許されることじゃない。

だから、俺は鈴から逃げようとした。彼女に知られる前に、彼女と関わる前に逃げて逃げて逃げて、自分と彼女を守ろうとしていた。

「必死になって頑張つて、ISで代表候補にまで上り詰めたときに、中国の極秘文書で双龍の存在を知ったのよ。起こしてきた様々な事件の被害者一覧に、しつかりとお父さんの名前もあった。でも、でもあたしはお父さんが死んだなんて信じられない。せめて最期くらい聞かないと収まりがつかない。だから、最近IS学園付近で起こってる通り魔事件の話を聞いて日本に戻ってきたのよ。もちろん一夏に会うためでもあるわよ？」

それでも、長くは居られないけどね……と、鈴は最後に言った。

逃げていた俺とは反対だ。真逆だ。こいつは立ち向かおうとしている。

失ってしまった自分を許容せずに、真実を得ようとしている。

そんな鈴が眩しくて、後ろめたさもあつてか、俺は何も言えずにただただ時が過ぎるのを待っていた。

やがて授業終了のチャイムが鳴った。

「……戻るわ」

「ああ」

鈴はそう言ってグラウンドの向こう側へ消えていった。

@

そして数日後、全クラス対抗戦リーグマッチが始まった。

今年是对戦数が数倍多いので、3日かけて行われる。

俺の試合は初日の昼、なんと織斑一夏が相手だった。

銀対白（白編）

昼、丁度一時半。

俺は第三アリーナのBピットに立っていた。

瞬龍を展開し、調子を確かめる。・・・大丈夫みたいだ。

両拳に搭載された衝撃砲『轟砲』の砲口も自由に操作できる。

俺はホロデイスプレイに表示された相手の情報を読む。

IS『白式』

織斑一夏専用ISとして登録。

世代：第三世代

装備：スパイクアーマーの非固定武装 近接特化ブレード『雪片式型』

・・・武装が、一つ？

なんだあのIS。湊と同じで偏った装備だな。

そんな事を考えていると、射出タイミングが迫ってきた。

何にせよ、負けるつもりはない。

それに、俺は少しイライラしている。

こないだの鈴との対話以来、部屋が息苦しくて仕方ないんだ。鈴か

らくるプレッシャーや、俺の中で渦巻く変な感情とかがごちゃ混ぜに

なあって俺を潰しに掛かってくる錯覚までした。

本気で一夏の部屋に逃げようかとも考えた。

しかし、今はその一夏が相手だ。

全力でボコらせて貰おう。

と、思った瞬間、閃いた。

・・・あれ、これって鈴を遠ざける良いチャンスなんじゃないのか？ と。

俺が弱ければ、あいつは俺が付いてこられないと判断するだろう。

そうなりや後は下り坂を下るも同然だ。

アイツは俺に失望し、俺の前から姿を消す。

万々歳じゃねーか。

『Bピット、出ますー！』

山田先生の声で我に帰った俺は、体勢を整える。

この勝負、怪しまれない程度に負ける！

……俺は少し精神が参っていたようだった。

@

「久しぶりですね、柘先輩」

アリーナに出た俺を迎えたのは、純白のISを纏った一夏の姿だった。

「久しぶりって、何回かすれ違っただろ」

「あれ？ そうでしたっけ？ でも、話すのは久しぶりですよ？」

一夏はイチイチ笑みを浮かべて語りかけてくる。

……早く始めろよ。

「まあ、そうだな。そんなもんなんじゃないのか？先輩と後輩の繋がりなんて」

俺はぶっきらぼうに返す。

そんな俺に、一夏は困ったような笑みを浮かべた。

「それじゃあ、さっさと終わらせようぜ。学校の公式試合なんじゃサボるわけにもいかないし」

俺は自身の拡張領域から、近接ブレード『時穿』を取り出す。

すると一夏は、『雪片式型』を展開していた。

「ハンデは必要か？一年」

俺がそう聞くと、一夏は剣を正面に構えて言った。

「それじゃあ、先手だけ貰いますー！」

予想以上の瞬発力で突っ込んできた一夏の雪片を、時穿で受け止める。観客の生徒や来賓が歓声を上げた。

「折角の試合です、行きますよ!!」

一夏は俺の剣を弾くと、地面に向かって思いっきり蹴りをお見舞いしてくれた。

いいぞ、もっともっと攻撃を加えろ。俺に勝て！

「ハッー」

俺に続いて着地した一夏は、瞬時加速で俺との間を詰め、雪片を袈裟斬りに振るう。

エネルギーが削られ、ゲージが減った。

俺は適度に反撃するため、アリーナの壁を蹴り、一夏の真下に接近。展開していたハンドガンでエネルギーを削る。

即座にその場で側転を切った一夏は、今度は真上から俺に向かって剣を降り下ろす。

俺は前に転がり、その刃を避けた。

「…………先輩、手抜いてませんか？」

「別に、抜いてねーよ。お前が強いんだ」

実際、一夏は驚くほど成長している。

クロスグリップ・ターン 三次元躍動旋回や、エマーゼンシー・ストップ 緊急機体制動、ゼロリアクト・ターン 無反動旋回といった格闘戦を行うに当たって必要な機体制御はあらかじめ会得しているみたいだ。筋が良いって言うんだろうな。

「なら、遠慮なくー！」

再び斬り込んできた一夏に向かって俺は正拳突き——拳の衝撃砲『轟砲』を放つ。

衝撃砲とは周囲の空間を圧縮、固定する事で砲身を生み出し、その際発生した衝撃をどの方向にも放てる、見えざる大砲なのだ。ちなみに甲龍にも搭載されていて、中国初の第三代兵器として世界中を駆け巡る技術だ。

その見えざる砲弾に殴られ吹っ飛ばす一夏。

しかし、一夏は見事に体勢を空中で整え、着地した。

「え、えほっ…………何ですか今のは…………!?!」

「衝撃砲だ。中国の技術だから鈴にでも聞いてみてくれ」

あーあ、ここで衝撃砲見せたら、アイツもつと怒るだろうな。

初見の一夏にぶちかますの楽しみって言ってたし。

「いよいよ本気で来るってワケですね？ だったらー！」

一夏が力んだ瞬間、白式が金色の光に包まれた。

——敵IS、単一仕様能力の発動を確認！ 攻撃対象としてロックされています！

瞬龍が瞬時に状況を伝えてくる。

ワンオフアビリティ!? なんて第一形態の白式が使えるんだよ

!?

しかも、一夏は明らかに自然発生を待つしかない能力を自分で呼び起こした。まず常人には不可能な芸当だ。

俺が内心驚いていると、更に驚くべきことに、一夏の持つ雪片式型が展開し、中心部から青い光が伸びた。

あの装備・・・展開装甲じゃねえか!!

俺は束さんにISを埋め込まれた後、数カ月を束さんのラボで過ごし、千冬さんとともにドイツへ渡った。

その際見たのだが、あれと同じ光を束さんが制作しているのを見た。

だから分かる。あのIS、白式は束さんの作ったISだ!

そして恐らく第四世代相当の技術が使われていることは間違いないだろう。

第一、展開装甲の攻撃はバリアー無効化攻撃だ。

俺のISの特徴と相性は最悪だ。

ここからは一撃も喰らうわけには行かない。

命に関わるぞ。

切り込んでくる一夏を瞬時加速で真横にかわす。

しかし。

「まだ・・・まだあ!!」

一夏は機体パワーにものを言わせて無理やり軌道修正をして、俺を追ってくる。マジかよ!

「クソッ!」

俺は前進しながら振り向くと、展開したライフル『レッドバレット』で一夏を狙う。

どうやら相当のエネルギー消費量らしく、決着を急いでいるように見えた。

だから俺は遠距離攻撃でエネルギーを少しずつ削っていく。

アイツが追い付くか、俺が削りきるか、我慢くらべだな。

白式の元々高い機動性が、単一仕様能力発動に伴い底上げされたらしく、パワースピード型である瞬龍でも全く降りきれない。

既にスピードはBシステム発動前の瞬龍のスペック限界だ。

きつと観客は、アリーナを目まぐるしく廻る俺たちの様子しか見えないだろう。

(このままじゃ、うちが明かん！)

そう考えた俺は、真下に向かって無反動旋回。超スピードのおいかげっここから離脱する。

しかし……。

「すいません、読めてましたよ先輩ッ！」

降り下ろされる刃は、エネルギーが切れたのか元の雪片のモノだ。しかし、俺の残ったエネルギーを削るには十分な攻撃力を持っている。

俺は、一夏が焦っていると思っていたが、一番焦っていたのは俺だったらしい。

だから、終結を急ぎすぎて、一夏の予想通りの行動を取ってしまった。不覚だ。

降り下ろされる白鉄の刃。

その刃は予想通り、俺のエネルギーを全て、余さず削り取って行った。

@

夕方、医務室のベッドで気がついた俺は、周りを女子たちに包囲されていた。

なんだこの包囲陣は！ 逃げられないではないか！ とボケてみたが、女子たちの顔は至って真面目だ。いや、真面目に怒っていた。

女子から繰り出される罵倒を、耳の穴を掻くフリで塞ぎながら聞き流した俺は、彼女らが退出したあとにはもう満身創痕だった。なんだこれ、試合より緊張感あったぞ。

雨とフォルテは調子が悪かったのかと心配してくれたが、もともと負ける気で挑んだぶん後ろめたさを感じた。

そして、一日ぶんの試合が終わったらしく、俺は医務室を出て、寮への道のりを歩いていた。

「随分と無様な負け方ね」

そんな俺に掛けられる声。サラ・ウエルキンだ。

「うるせーな。別のクラスのお前には関係ないだろ」

「いいえ、関係あるわ。私はあなたたちには強くあつて欲しいもの」

あなた・・・たち？ 俺と、誰のことだ？

「と言つても、気づいたのはごくごく最近の事なのだけけれど」

サラは一人でよくわからないことを呟き続ける。

なんだあれ。いつも以上に怖いぞ。

恐怖を感じた俺は、サラをスルーして、歩みを進めるが、ガシツと片腕を掴まれる。

「ちよつと待ちなさい」

サラの声が少し揺れている。

精一杯イヤそうな顔を作り、しぶしぶ振り向くとサラは自分の携帯端末を持っていた。

「いい加減に、その・・・ワクチンをくれないかしら・・・？」

パカツと開いたその画面には、俺でもウツつとなるレベルに酷い画像が表示されていた。絶対飯時に見たくない。

どうやらサラは、俺がウイルスを添付したメールを見事に無警戒で開き、端末をウイルスに感染させてしまったらしい。まあ100パー俺のせいだけだ。

ホントならここで無視して去つてやるのも面白いなと思つたが、サラが珍しくしおらしいので俺は毒気を抜かれ、ワクチンを送つてやることにした。

「・・・ほら、帰つたらこのソフト走らせてみる。構造は単純なもんだったから、多分一掃できると思う」

「・・・あなたも、やるときはやるのよね・・・」

サラはそう言うと、礼も言わずに帰つていった。

結局何のためにここにいたんだよアイツ？

@

寮、自室。鬼の前。

扉を開けると、憤怒の形相の鈴がいた。

どうやら一夏の前で衝撃砲を使ったのがホントにまずかつたらし

い。

「そんなに見せびらかしたかったのかよ、子供かお前は」

と言うと、鈴は甲龍を部分展開して、俺の脳天にチョップを叩き込んできた。殺す気か！

一発俺にぶちかましたので落ち着いたのか、鈴はベッドに腰掛けた。

「・・・で？ 何だったの今日のあれは？」

「見りや分かるだろ。負けたんだよ」

俺は収納してあるベッドを引っ張り出しながら答える。

「そんな結果のことを言ってるんじゃないわよ。なんで負けたのかって言ってるの」

鈴はその細い脚でベッドのふちをペシペシ蹴る。

イラついてんのかコイツ？

「全力で当たった奴に理由なんか聞いても仕方ないだろ。負けるときには負ける。それが世界のルールだ」

「ウソね。あんた全力じゃなかった。少なくとも一夏が能力を出すまでは」

びしりと俺の力量を言い当てられ、言葉につまる。

俺は鈴に言い当てられたことが悔しくて、むきになってしまった。

「だとしても、お前に何の不都合があるんだよ。今回の試合の結果、何にも関係ないだろ」

「・・・あるわよ、あんたは大事なパートナー候補なの！ 期待してたのに！ 初めてあたしの話を真面目に聞いてくれたのに！ 失望したわ！」

そんな鈴の勝手な言い分に、俺も頭に血が上ってしまった。

「・・・ふざけんなよ、勝手なのはお前の方だろ鈴！ 突然俺の前に現れて部屋にまで侵入してきて、挙げ句に勝手にパートナーになれ？

ふざけるなよ！ 期待したのも失望したのも全部お前の都合だろ！

俺に勝手に変な期待をするな！」

「でも・・・あんたはあたしの話を・・・！」

「そのこともなあ！ 心の中では笑ってたよ！ なんてアホなこと考

えてやがるんだってな！ 悪いが俺はソコまで夢見てる人間じゃない！」

ドアの方には騒ぎを聞き付けた近隣の生徒たちが群がっている。

ああ、こんな大勢の前で取り乱しちまうとはな。

「~~~~ツッ！」

鈴は激しく興奮したようで、一度はISを部分展開したがって、ひとつ深呼吸をしてそれを修めると、酷く冷たい声で言った。

「……そう、分かったわ。あんたはあたしが迷惑だった。違いないわね？」

「ああ、大迷惑だ」

「……そうなんだ……」

鈴は顔を伏せて呟く。酷く弱々しい声だ。

すると、鈴はボストンバックを取り出す。

数日間しかここにいなかったから、荷物はクローゼットに仕舞わずに、バックの中に全て入っている。

長くはここにいられないと、鈴は言っていた。つまり、直ぐに出ていくつもりで用意していたのだろう。

「失礼しました、先輩。いままでありがとうございます」

鈴は群がっている女子を押し退けて、一礼。部屋から出ていく。

そんな俺たちを女子たちは心配そうに見つめている。

……別にアイツと過ごしたこの数日間に、思い出なんてあるはずがない。

ただ一緒に起きて、一緒に飯食って、一年の特別実習がない日以外は一緒に帰った位だ。

テレビの取り合いでリモコンを壊すこともない。

夜更かしするアイツのせいで、明るい部屋で眠ることもない。

望んだ結果だ。

万々歳だ。

これで晴れて俺は自由な日々を取り戻せる。

でもその夜、何故か俺は静かな部屋をより一層意識して眠るのだった。

決心

鈴が出て行ってから翌日の朝、俺は使いなれない寝具で寝た。

そのせいか、腰が猛烈に痛い。

隣を見ても、喧嘩した鈴の姿はない。

いく宛もないだろうし、戻ってくるかもと思ったが、アイツの意思は固そうだ。

モソモソと着替えていると、雨からメールが入っていることに気が付く。

曰く、「部活の先輩が負けた腹いせのツイスターゲーム大会から解放してくれないの〜。ゴメンねクツちゃん。朝御飯は食堂でちゃんと食べてね」と。

雨はたしか・・・茶道部だっけか。

茶道部部长つていったら雨にも負けないくらい大和撫子くな黒髪美人だったと思うが、徹夜でツイスターとははっちゃけてんな。三年のどのクラスかは忘れたが、それでいいのかクラス代表。

俺はISスーツを制服のしたに着込み、食堂に向かう。

朝の挨拶が交わされる食堂の券売機に並んでいると、隣の券売機に並んできたのは織斑一夏だ。

「おはようございます、柊先輩」

「ん、おはよう」

一夏は丁寧な頭を下げ、挨拶をする。礼儀正しいな。

一方の俺は、昨日の夜なぜか寝付けなかったので、あくび混じりの挨拶だ。

そんな俺を見て、一夏が不思議そうな顔をした。

「どうしたんですか先輩？ 眠そうですね」

「ん、まあな。・・・そうだ、昨日の夜鈴がそっちに行っていないか？」

「鈴がですか？・・・いや、見てないですね・・・同じ部屋なんでしたっけ？ やっぱり苦労します？」

同じ女子と相部屋と言う苦労を分かち合う俺たち。

「苦労なんてもんじゃねーよ。何だよあいつ。勝手に腹立てて出ていきやがって……」

「あー、やっぱり怒らせましたか……。鈴は怒りっぽいですからね。俺も中学の時は苦労しましたよ」

列が前進する。

俺は軽めの洋食セットを選択。一夏は結構カロリーが多そうな料理を小皿で幾つか選んで注文した。

「それじゃあさ一夏、これまでに鈴にこんな話されたことあったか？」俺は鈴とあの夜に出会ってから、起きたこと、鈴から言われたこと言ったこと、全てを話した。

双龍とか、重要な単語は上手く言葉をすり替えた。

「——それで、すこし昨日は言い過ぎたのかって思い始めてるんだよ」

「……」

一夏は俺の話を聞きながら、難しい顔をしている。何故だ。

「……それで、先輩はどうしたいんですか？」

一夏の予想外な一言に、俺は食べているマカロニをフォークからずりりと落とす。

「いや、別に俺はアイツが何であそこまでパートナーに拘るのか気になってだな……。別にでていったら出でいったでスッキリしてるんだけどな」

「それじゃあ、気にすること無いじゃないですか？」

「……確かに、無いな。俺の日々を脅かす邪魔物は居なくなつたわけだし、良いことしかない。」

「……なのに、なんで俺はこんなに気にしてるんだ？」

「長年アイツの幼なじみやってる俺から言わせてもらおうとですね、アイツは猫と一緒にですよ。気を許した相手としかメシは食べませんし、喧嘩もあまりしません。でも、先輩は出会ってから二週間やそこらですよね？ そんな短期間の付き合いである先輩にそんなことまで話すなんて、信じられないことですよ。ていうか、鈴の親父さんが無くなってるかもしれないなんて、初めて聞きましたし」

そこは、一夏も知っているものと思って話したが、どうやら知らなかったようだ。鈴には話さないよう念を押す。

「よっぼど、そのびびっと来たのが強かったんでしょね。アイツの勘も野生並みですから」

「…………お前は、鈴の話、信じるか？」

俺はおさなじみとして、付き合いの長い一夏にそう問いかけた。

一夏は迷うことなく言い切った。

一夏は試合がありますからと言って、出て行ってしまった。

鈴、お前は勘で選んだ相手をパートナーに据えようとしていたのか？

そう問いたい気持ちに駆られるが、問いかける相手がない。

残された俺は、一人でコーンスープに目を落とす。

プカプカ浮いているコーンは、引つ付きあったり離れたりしていた。

@

そして、始まる第二アリーナ第一試合。

今日はここで鈴と一夏が試合をする。

俺はそれを見るためにここに足を運んでいた。

試合が始まると、両者は瞬時に動き出した。

一夏が振るった雪片式型を鈴の双天牙月が的確に弾く。

弾かれた一夏は空中で一回転し、鈴を正面に構えた。

…………なんだか、竜虎って感じの二人だ。

「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど——」

鈴が手に持った双天牙月をくるくるとバトンのように回す。

すると次の瞬間、鈴は攻撃に転じた。

鈴の持つ双天牙月は、青竜刀のような刃が両側についている特徴的な武装だ。ゆえに、攻撃が変則的かわりにくい。

一夏を見れば、刃を当ててさばくのにも苦労しているようだ。

その状況を打開しようと思ったのか、一夏は一旦離脱を試みた。しかし。

「甘いっー」

そう言うと鈴の肩のアーマーが開き、衝撃砲の本体が見えた。鈴が砲撃する。

一夏の体勢がぐらりと揺れ、当たっていることが分かる。

一夏の体勢が整うと、鈴はそれから更に、6、7発の砲弾を一夏に撃ち込んだのだった。

「何なのだ・・・あれは・・・!!」

聞き覚えのある声にしたを見ると、箒とセシリアがいた。

どうやら二人で一夏の応援に来ているらしい。

「衝撃砲だ」

箒の疑問に答えてやる。

隣でセシリアがムウーっと頬を膨らませたので、タイミングが悪かったかと後悔する。

「ひ、柘先輩ではないですか・・・」

箒が俺の顔を見て驚く。しかし、その表情は一瞬のことで、次の瞬間にはドヤアという腹立たしい顔になった。

なんだ、一夏が勝ったことを自慢してんのかこのやろ。

「空間自体に圧力をかけて、砲身を形成。そのエネルギーで起こった衝撃を砲弾として打ち出す中国の第三世代型兵器だ。鈴が乗ってる甲龍はその試作機なんだよ」

箒の疑問に答えてやったつもりだったのに、気がつけば、箒は俺の話のスルーしてモニターを見ていた。一夏が心配なんだな。

代わりにセシリアは聞いていてくれたが、お前知ってるだろと聞くと頷くので無意味なことだった。

「詳しいのですわね」

「まあ、自分のISに搭載されてる兵器だしな」

着席しながら言うと、セシリアは更に問いかけてくる。

「・・・あら？ でも、クレハさんのISは日本製だったと記憶しているのですが・・・記憶違いでしょうか？」

「いや、合ってるぞ日本製だ。別に元々イギリスお前の技術だった浮遊装備も世界中で共有されてる技術だろ。俺が中国の装備を持ってても不思議じゃないだろ？」

俺は捲し立てるように言葉を並べる。

その勢い押されたのか、セシリアは静かに自分の席へと戻った。アリーナにいる鈴を見ると、試合の最中だというのに笑っている。まるで親友と遊んでいる子供のような笑顔で。

鈴の刃と一夏の刃が交錯し、火花を散らす。

ああ、クソツ。俺はまた失敗した。変わるチャンスだった。

せつかく鈴が再び現れたんだ。あの日溜まりのような日々を取り戻そうとは思わなかったのか。

いや、分かっている。そんなのは無理だ。時は戻らないし、失った命も戻らない。

だったら俺が鈴にできることはなんだ？

——アイツの言葉を信じてやることだけだろうがっ！

そのとき、アリーナ全体に衝撃が走った。

混乱する生徒を余所に、アリーナの防御システムが次々と作動する。

しかし、生徒が観客席に残っている状態で閉鎖されたため、俺たちは逃げる事が出来なくなってしまうていた。

なんだ？ なにがおきてるんだ？

「セシリアー！」

「はい！」

「状況は分かるか？ お前なら広範囲高次リーダーくらい積んでるだろう？」

近くにいたセシリアにそう言うと、セシリアはブルーティアーズを頭の部分だけ部分展開して、周囲のスキャンを開始した。

「敵性ISの存在を確認しましたわ。現在一夏さんと凰さんが交戦中ですわ！」

「よし、お前たちはこのまま生徒の誘導をしろ。教員部隊が直ぐに入ってこないとなると、遮断レベルは恐らく4以上だ。教員部隊のクラッキングでも数十分掛かるぞ」

俺は生徒が押し寄せる出口とは反対にアリーナ側の壁に駆け寄り、地面を探す。

確か・・・こちら辺に・・・あった！

俺は地下への降下階段の入り口を見つけると、所持している拳銃で鍵を無理矢理壊す。

「な、何をしているのですか!?!」

箒が俺に追い付いてきて、俺を見て叫んだ。

「加勢する」

「無茶だ！ 敵は一夏達ですら苦戦している相手なのだぞ!? 分かっているのか!?!」

「分かってる!」

俺は梯子に足をかけて箒を制す。

「敵が強いのも分かってる！俺より一夏のほうが強いのも分かってる！でも止めたんだよ！こんなところで何もせずに立ち止まるのは!」それに、このタイミングでのアーリーナのシールドを突き破るレベルでの攻撃を行えるISは俺の知っているなか、一種類しかない。

あの日の夜、取り逃がした残りの四機のうちの一機だ。

あいつらはしきりに俺を撃ち落とすことに拘っていた。

憶測だが、あれが鈴のいつていた双龍の所持するISの機体なのだろう。

! ！
というか、轡木用務員も言っていたじゃないか、龍を狙っていると

俺は自分の思慮のたりなさを清算しにいくんだ。

俺がとりのがしたなら俺が収集を付ける。

IS学園の二年生なら当たり前のことだ。

「それにな箒、俺は一夏に加勢するんじゃない。鈴の味方になりたくないんだよ」

そう言っただけ俺は暗い闇の中に身を投じる。

箒とセシリアが何かいっていたが、既に聞こえない。

暗い穴を抜けると見慣れたホールに出た。

湊の自室兼、練習場の、射撃訓練室だ。

「湊、状況は?」

「把握しています。戦うんですね」

青い髪の湊が確認するように言う。

一夏、俺はお前とは違う。だから簡単には味方になってやるなんて言える立場じゃない。

だから、この言葉を言わせてもらおう。俺の決意の表れとして。

「ああ、護りに行くんだ」

俺の言葉に納得したのか、湊は一つ頷いた。

「……やっぱり、クレハさんにはそう言う優しい言葉が似合いますね」

「あ？ 何いつてるんだよ？」

「いえ、何でもありません。電子ロックのない出口はこっちです」

俺は湊の先導のもと、地上を目指して走り出した。

@

地上に出ると、他のアリーナにいた生徒や教員が第二アリーナを見守っていた。

出口から出てこない湊とはここでお別れだ。

「ファイトです、クレハさん」

「……お前、それ似合わないな」

赤くなる湊に思わず笑みがこぼれる。

いい感じにリラックスできたぜ。

息を吸い込み、吐く。

いつもは嫌っていたが、今回ばかりは頼りにさせてもらうぜ。

調子のいい操縦者で悪いな。

「展開！・^{オープン}瞬龍!!」

体の中に、金属が砕ける音が響き渡る。

足元から銀色に輝く装甲が展開され、段々と上昇してくる。

肩の装甲は丸みを帯びた流線型で、粋なことに、IS学園の校章が施されている。

なんだよ、どこでこんなこと覚えたんだ？

展開を完了した俺は、右手に近接特化ブレード『時穿』を展開。左手には瞬龍が新しく産み出した射撃武器、『流桜^{リゅうおう}』を展開する。

お、ハンドガンタイプか。分かってるな。

その時、オープンチャンネルに通信が入る。

『——応答しろ柊！柊！』

「こちら柊、現在アリーナ外部に脱出成功。これよりアリーナ内部へと上空から侵入する」

『つて、おい！待て柊！』

「・・・なんですか？」

千冬さんがあまりにしつこいので、聞き返す。

『凰も一緒だぞ。良いのか』

既に決心が固まった俺は、千冬さんにキツパリと返した。

「良くないに決まってるだろ？」

『——』

「何が悲しくて過去のトラウマ引つ掻き回すようなことする必要があるんだよ。バカみたいだろ。でも、千冬さん。今はそんなこと考える時間じゃない。私情抜きでやらなきゃいけないことがあるんだよ。だから俺は、鈴を護る」

『・・・そうか。お前は進み出したか』

「ああ」

『では、無事に帰ってきたら器物破損、及び教員に対する非礼な態度の反省文を提出しろ。代わりにお前だけ自由行動の許可をやる』

急に饒舌になりやがったこの先生！

「ええ、ありがとうございます、千冬センセイ・・・!!」

こめかみをぴくつかせながら礼を述べる。

そして通信が切られる瞬間、トンでもない言葉を残していった。

『ああ、そうだ。ついさつき通信システムが復活した。お前の最後の部分、オープンで流れてるぞ』

!?

『頑張れよ、若人よ』

俺は現実から逃れるように地面を蹴り、空へと飛び上がった。

そして少年少女は動き出す。

アリーナを上空から見渡した俺は、戦闘中の一夏（白式）、鈴（甲龍）及び、敵ISを確認した。

敵のISはやはり、俺があ之夜に沈めた物と同じタイプのようで、鈍重そうな腕に全身装甲、そして二つのアイカメラと不気味な出で立ちだった。

鈴と一夏は上手いこと連携をとり、教師部隊が到着する時間を稼いでいた。

（さて、どうしたもんかな）

一方の俺は、敵が侵入したと見られる遮断シールドの穴からフィールドをのぞきこみ、加勢するタイミングを図っていた。

Bシステムは、微妙に掛かってきている。戦闘前の緊張で瞬龍もエンジンがかかりかけているらしい。

よく観察すると敵の攻撃には波が有るようだ。

どういうタイミングかは知らんが、攻撃が止んだり激しくなったりしている。

俺は保険にと思い、先ほど別れた渚にあるお願いをする。

よし、準備は整ったぞ。

俺は二人が何かを画策し、実行しようとするタイミングで敵に銃撃をしながら降下する。

「なっ、柊先輩!」

「クレハ……せんぱいっ!」

俺を見て二人が驚愕する。

特に鈴は、どことなく顔が紅い。

俺はアリーナ中央に着地するとそのままスラスタの推進力で滑走する。

あいつらの目の前に降りることで、敵の注意を俺に向けさせ攻撃のチャンスを増やそうと思ったのだ。

しかし――。

「一夏あ!!」

アリーナのスピーカーがノイズを漏らしたかと思うと、大音量で女子の叫び声を上げた。

ていうか、この声、一夏の幼馴染みの筈か。何やってんだよあいつ。中継室をハイパーセンサーでみると、どうやら筈は中継システムを乗っ取って声をあげているらしい。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」大音量の叱咤が再び鼓膜を叩く。うわ、うるせえ!

だが、そんなことより目の前の敵だ。

俺は滑走しながらライフルを構える。

衝撃砲はかなりのエネルギーを消費する。発動だけで段々とエネルギーを食い潰していくBシステムとの併用は避けなければならぬ。今の時点でエネルギー残量は550。なるべく早期決着が望まれる。

(よし、こいで——)

敵に照準を合わせたとき、俺は違和感に気がついた。

敵が、俺を見ていない。いや、鈴や一夏すらも見ていない。

見ているのは———筈だ。

まずい、中継室には観客席や来賓席と違って、遮断シールドがない!

「鈴!や——」

一夏が言葉を紡ぎ終わるのを待たずに、敵は筈に向かって瞬時加速で迫る。

一夏は鈴の衝撃砲を背中に受けると、目を見張るほどのスピードで飛び出した。

あれは、エネルギー変換を行わない外部からのエネルギーによる^{イグニッションブースト}瞬時加速だ。

瞬時加速とは自身のエネルギーを外部に放出して、それを吸収、圧縮して放出することで爆発的な慣性エネルギーを得る技術である。

外部のエネルギーを吸収するので、自身のエネルギーでなくても良いことは良いのだが、純粋なエネルギーでないものでは機体とそれを

制御する操縦者に絶大な負担がかかるのであまり行われる事はない。しかし、今回一夏はそれを行っている。

瞬時加速のスピードは受けたエネルギーの大きさに比例するので、鈴の衝撃砲を受けるのが手っ取り早く加速する方法なのだ。

「——オオオッ!!」

箒を目の前にして、敵の荷電粒子砲の砲口が赤く輝き始める。

「箒ッ!!」

箒と敵ISの間に体を滑り込ませる一夏。

そんな一夏に、無慈悲にも粒子砲が照射される。

「ガアアアアッ!!」

「一夏ア——ッ!」

一夏の絶叫と箒の叫びが重なる。

敵は照射を終えると、一夏の身体を殴り飛ばした。

中継室にめり込んだ一夏に箒が駆け寄る。

ISは解けてないので気を失っているわけではなさそうだが、反応が著しく低下した一夏の名を箒が必死に呼んでいる。

敵はそんな箒にも攻撃を加えそうな雰囲気だ。

「鈴!」

「わかつてるわよ!」

俺たちは同じタイミングで飛び出す。

まず俺が敵を惹き付け、鈴が二人を救助する作戦だ。さすが場数を踏んでる中国代表候補だぜ。何も言わなくても意識が通じる。

先に敵を捕捉した俺が近接特化ブレード『時穿』を展開。その刀身で敵を水平に薙ぐ。

しかし、手応えはガツンという重く、固いものを殴った感触だ。

「はあああッ!」

それでも俺は剣を振った。

空中に駐留していた敵を地面に叩き落とす。

「鈴はそのまま二人をつれて逃げろ! 俺が殿を引き受けてやるよ!」

「バカ言わないでよ! よわっちいあんた一人に何ができんのよ!

あんたが救助役よ！」

「はあ!? ふぎけんなよ! そんなボロボロなやつに時間なんて稼げるわけないだろ! カッコつけんな!」

俺の指示に、鈴が反抗する。ダメだ。さつきは意識が通じるとか言ったが、全然あわない。

そんな俺たちに苛立ちを覚えたのか、敵が粒子砲を放ってきた。

俺は時穿でシールドを展開し、難を逃れる。

「ほら、悩んでる暇はない。早く行け!」

俺がそう言うのと鈴は諦めたのか、機体を反転させ中継室で呻く一夏と箒をその両腕に抱き抱えた。

「あんたも・・・、やられるんじゃないわよ!」

そう言うのと鈴は中継室背後の壁を衝撃砲で破壊。その奥に姿を消した。

「さあて、俺たち二人だけだぜ」

土煙から姿を表した敵を睨む。

この敵は恐らくだが、龍——鈴を狙っている。

鈴を守るといった手前、これ以上先にいかせるわけにはいかない。

まあ、俺の素性が敵にばれてりゃ俺もターゲットに入るんですけどね。

俺は空いているもう一方の腕に五十口径ライフル「レッドバレット」を展開する。

『時穿^剣』と『レッドバレット^銃』。この二つの武器を操って戦うのが俺の基本スタイルだ。

銃で牽制し、剣で切り込む。これを幾度となく繰り返せば、余程の遠距離型でない限り勝ちは固い。

しかも今の俺は瞬龍の能力を十全に引き出せるBシステムが甘く掛かっている。

なるべく本調子になるときに現れる変な性格を出したくないので、一気に片付けるか。

俺は後位スラスター翼を全開にし、弾丸のように飛び出した。

ライフルのトリガーを引き、銃弾の雨を降らせる。

そして、敵が怯む瞬間を逃さずに時穿を降り下ろした。ギンツ！という金属音が鳴り、その大きな腕に刃が止められたのだと分かった。

そしてその防御力はそのまま攻撃力に成りうる。

敵は左腕で剣を止め、右腕の拳で俺の胴体を殴り付けた。

余程の威力なのか、絶対防御が発動したにも関わらず、その防御を突破。俺は吹き飛ばされた。

両手をつき何とか受け身はとったが、中々キクボディーじゃないか。

逆流してきた胃液を拭い、無理やり笑みを作る。

まだだ。さっきの絶対防御のせいで大幅にエネルギーが削られたが、まだ300弱ある。

最低でも一本。腕くらいは落としてやらねえとな。

敵が放ってきたビームを一太刀で切り裂くと俺は飛翔し、空中に身を踊らせる。

そのまま両手に搭載された衝撃砲『轟砲』を繰り返す。

何度も、何度も連続して放つ。

敵は見えない砲撃を、腕をクロスし交差防御クロスアームブロックで乗りきると、間髪入れずに粒子砲を放つ。

その攻撃は、当たらない。

なぜかという、狙った先に俺が居ないからだ。

俺は衝撃砲を打ち切ると、反撃を受ける前に地面に急降下した。

そして、敵が居ない俺に向かって粒子砲を放つのをみると、敵ISに接近。右腕の関節部分に時穿の刃を押しあて、真上に切り飛ばす。

この敵は、俺の簡単な策に騙されるとこからして無人機だろう。そして今それを証明した。

切り離された腕の断面に中身はなく、ただの空洞が存在していただけだったのだ。

それを確認した俺は、伏せていたカードを切る。

「渚、やっぱり無人機だった。頼めるか」

『——はい。それでは狙撃を開始します』

渚がそういった直後、敵のISに衝撃が走った。渚が放った弾丸が、装甲に当たり爆発したのだ。

これが、俺の掛けていた保険の正体。敵が遠慮なんて要らない無人機だった場合には遠慮なく弾丸を浴びせてやれと渚には言っていた。

それでも渚、徹甲榴弾はやりすぎだろ。俺を巻き込む気か。

二発、三発とぶちこまれ、敵は完全に沈黙した。

なにやら騒がしい声が聞こえてきたので、耳を澄ますと二人の狙撃主が言い争っているようだった。

——— 今のは私の出番でしたのに！

——— クレハさんは私にお願いをしてきました。よってこれは私の受けた任務です。

——— あーんもう！折角織斑先生に許可を頂いて来たのに！

……だとき。呑気なもんだな。

おっ、鈴が戻ってきたな。敵を倒した俺を見て口をパクパクしてるぞ。

「あ、あんた……じゃなかった。先輩がそれを倒したんですか？」

「あー、なんだその敬語。気持ち悪いから止めろよ」

「はあっ!? 気持ち悪いって何よ！ あんたのほうが百倍気持ち悪いわよこのスケベっ！」

「誰がスケベだ誰が!? 部屋の内装から住んでる人物の予想くらい立てるのが常識だろ！」

「あつ、あたしのはだか見たくせによくもまあそんな被害者ヅラが出るわね！ あーもうイラついてきた！ 大体あんたはだらしなさ過ぎるのよ！ いつになったら予備のベッド出すつもりなのよ！ 申し訳なさで胃に穴が開くと思ったわ！」

「いや、一体いつお前がそんな心遣いなんてしたよ!? お前こそ———」

突然キレた鈴と口喧嘩をしていると、状況が急変した。

ビシユンツと俺と鈴の間を粒子砲が通過していったのだ。

——— 敵IS再起動を確認！ ロックされています！

マズイッ！ そう思い、真横に鈴と共に跳ぼうとするが、意識に身体が付いていつてない。

不審に思い、身体を隅々までチェックすると絶望的な気分に置かれる。

敵は残った左腕が變形し、あの夜見せた最大出力形態パーストモードへの変貌を遂げている。

それに引き換え俺はというと、Bシステムが、解かれていた。失敗した。安心してた。完全に終わったと決めつけていた。

最後の緊張感を手放した瞬間に、俺の切り札は消え失せていたのだ。

しかもこの角度は鈴に直撃コースだぞ。それだけは絶対に避けなければならぬ！

渚たちも異常に気がついたのか、それぞれの対応をとりはじめるが、もう遅い。

放たれた最大出力荷電粒子砲は、俺たちというより鈴に向かって直進する。鈴は呆然とその光景を見ているだけだ。もしかしたら諦めているのかも知れない。

でも、俺は諦めないぞ。お前には目的があるんだろ。折角少しだけ付き合う覚悟が着いたんだ。こんな所で死なれちゃ困るぜ。

俺は素早く鈴を抱きしめ、粒子砲に背中を向けた。そして残ったシールドエネルギーの全てをシールドバリアーに費やす。

そして、俺の意識はその光の奔流によって刈り取られた――

復讐

.....
.....
.....頭、いてえ。

目が覚めるとすぐに自分の頭が痛みを訴えてきた。

いや、頭だけじゃない。地面に触れている背中も、かなりの火傷を負ってるみたいだぞ。

そこで俺の意識は完全に覚醒し、気絶する前に起こったことを全て思い出した。

たしか、敵の粒子砲を受けたんだったか？

額から流れ落ちる血のせいで赤く染まった視界をうつすら開くと、アリーナの壁が自分の真横にあった。

どうやら衝撃で吹き飛ばされ、壁に叩きつけられたらしい。

(.....そうだ、鈴は.....)

俺は吹き飛ばされる寸前に、アイツを抱き締めたはずだ。

首から下が満足に動かせない中、俺の胸を確認すると。

「.....よう、無事だったか」

「.....無事じゃないわよ.....バカッ！」

おうっ、起き抜けに右ストレートはキツイ.....。

俺一応怪我人だぞ？ テメ、この状態で『怪我？ 何ともないさH A H A H A H A！』とかって笑えたらソイツはもうゾンビだろ。

「なんで、なんであたしを庇ってあんたが怪我する必要があるのよ.....！」

鈴は俺の上でその小さな体とツインテールを震わせていた。

そして、ポカポカとハンマーパンチを力なく降り下ろす。

とても弱々しい、鈴とは思えぬ力だ。

「仕方ないだろ、手が出ちまったんだから」

ようやく動かさせた右手で額の血を拭う。

気絶していたからか、瞬龍は待機形態へ戻ってしまっただけらしい。

「・・・あたしのことめんどくさいって言ってたのにな？」

「バカ、めんどくさいと死なせちゃダメだっていうのは違うだろ。それに、謝りたかったしな」

鈴は俺が言わんとしていることに気が付いたのか、真ん丸の瞳を更に見開いた。

「——お前の話、笑ってたとかいって悪かった。謝るよ」

俺は照れくささのためか、無意識に砂の入り込んだ頭をかいた。

チラリと鈴の様子を窺うと。

「ま、まあ謝ってくるだろうとは思ってたわ！ ていうかあの夜戦ってた本人が信じないとか、ソイツの頭を疑うレベルよ！」

・・・急にいつもの調子を取り戻してきたな・・・。なんかイラツと来る。

落ち着け俺よ。せっかく謝ったんだ。また怒らせるのは意味のないことだ。

しかし、敵の攻撃が来ない。ISのない俺たちには興味がないって言うことか？

不思議に思い、視線を巡らせると、意外な光景が広がっていた。

「——それで？ いつまであなたたちはイチャついている気なのかしら？」

「ぎ、サラア!?!」

そこにはなんと、敵の拳を打鉄の近接ブレードで受け止めるサラ・ウェルキンの姿があった。

「どうでもいいから早く起きてくれないかしら？ 柵クレハ、もう動けるでしょう？」

サラは脂汗を浮かべながら言う。

確かに俺はもう動ける。ISもなんとか展開できるだろう。

だが、鈴は・・・。

「・・・ごめん、あたしは動けない。衝撃で下半身が痺れてるの」

目覚めても俺の上になんか推察できてはいたが、一時的な麻痺にかかっていた。

「よし、なら俺が連れて脱出させる。サラはその間なんとか持つてく

れ」

「訓練機で実戦機を相手にできるとは思わないことねッ！」

そういつつサラは敵を剣で弾き飛ばした。流石はイギリス代表候補生だ。

「よし、鈴。行くぞ」

俺は小柄な鈴を抱きかかえるとそのまま瞬龍を展開。一目散に一夏達を脱出させた中継室の穴へ飛翔する。

しかし、そこで。

「お、おい一夏、何してるんだよ・・・？」

ボロボロの白式を纏った一夏がそこには居た。

「先輩と、鈴が戦ってるんです・・・逃げるわけには・・・いかないッ！」

「お前、自分がどういう状況なのか分かってるのか!? ただでさえエネルギー消費の多い単一仕様能力を使ったばかりなんだ、エネルギーはもうないんだろ!? お前も限界だ！」

俺が帰るよう指示するが、一夏はそれを頑として受けようとはしないで、一步一步アリーナへ足を進める。

「だったら、あたしも戦う」

「鈴、お前まで何いってんだ!？」

鈴はそう言う俺の腕からおりて、なんとか自分の足で立つて見せた。

「大丈夫よ、足で直接操作できなくても、インターフェイスからの思考入力でなんとかなるはずよ。それより、あいつ倒しただけじゃ終わらないんですよ？」

鈴は外でサラと戦っている敵ISを顎で示した。

・・・確かに、アイツを倒すだけではこの事件は終わらない。

事件の規模にもよるが、こういった襲撃に関して言えることがある。

それは、

「この事件を引き起こした黒幕、少なくともアリーナのレーダーシステムを潰して、アイツをここまで誘導したやつがいるはずだ。そいつ

がいる限り、この事件は連続するぞ」

元々不思議に思っていた。

なぜアリーナのリーダーシステムはアイツを関知しなかったのか、そもそも電算処理機能が明らかに欠如しているアイツに、アリーナのシステムをハッキングなんて芸当が本当に可能なのか。

導き出される答えは一つだ。共犯者がいる。

いや、アイツに操縦者は居ないから、主犯か。

まあなんにせよ、その主犯をあぶり出して捕まえる必要がある。

しかも俺は、その犯人が誰なのか予想が付いている。

「よし、それじゃあここで解散だ。比較的動ける俺が主犯を探して倒す強襲^{アサルト}。鈴と一夏は敵の相手をしてくれ。倒さなくてもいい。時間を稼いでくれ」

俺の指示に二人は確りと頷いた。

アリーナに戻った俺はサラに交代の指示^{スイッチ}を出す。

サラの交代は敵を弾いた瞬間に行うことが多い。

次に入る人間が攻撃しやすくなるようにという配慮の結果だ。

サラが拳を弾き、その瞬間に待機していた一夏が入れ替わる。

「よし、なんとか上手く行ったな」

「ええ、そうね。なんとか死なせずに済んだわ」

……やっぱりか。

俺は普通にアリーナの扉を開き、普通にアリーナ内部へと避難した。

「……この扉が使えるってことを知っているってことは、気づいたの？」

「……ああ、今回の襲撃事件、裏で糸を引いていたのはお前だな、サラ」

IS学園のシステムに侵入し、アリーナを占拠出来るのは俺の知る限りこいつと生徒会長くらいなものだ。

チリチリと身を焦がすような殺気が、サラから放たれ始める。……

やる気だぞ、こいつ。こんな狭い通路で。

「何時から疑ってたの？ 彼女が編入してきてから？」

「いや、実際はついさっきまで確信は持ってなかった。サラがアリーナで俺たちを守る瞬間まではな」

自然に非常口から避難したのはただのハツタリだ。

非常口は四ヶ所あるが、サラが入ってきたのがここからで良かったぜ。でなきや俺は後ろから撃たれてた。

「するとここで疑問が生まれる。

——一体なんで俺たちを生かそうとする？

鈴の身を危険にさらす敵が再び現れたせいで、俺の声が険のあるものへと変わっていく。

俺たちの命、二体の龍、Bシステムが目的なら俺たちを生かす理由がない。俺に至っては殺すより他に手がない。

「なんでって・・・やっぱり覚えてすらないのね・・・」

サラは俺の質問に答えるでもなく、ただただ失望した呟きを漏らした。

サラが床を強く踏みつける。鉄の接触音が通路じゆうにこだました。

「ふざけないでよ・・・あなたたちのせいで、いや、あなたのせいでどれだけの人が死んだと思ってるの・・・？」

サラは、そう言った。

その言葉に俺は背筋が凍るのを感じた。

「あなたがいたせいで、私の兄は・・・ウエルク兄さんは・・・っ！」

ウエルク。その名前は、俺も覚えている。身体の調整期間中に辛く苦しい生活の俺を励ましてくれた研究チームの一人だ。

「まさか、妹・・・なのか・・・？」

予想外の事態に軽く混乱する。

「そうよ、あなたたちが秘密裏に行っていた実験に参加していた研究者の中には、私の兄、ウエルク・ウエルキンはいた。そして殺されたのよ。あなたの手によってっ！」

サラが俺に刃を向ける。いつもの光景だ。しかし、その刃に乗った思いは熱く、激しい感情でいまにも吹き出してしまいそうな危うい感じがした。

「ここへあのISを招き入れたのは貴方を孤立させやすくするため、アイツに殺させなかったのは、私の手で復讐を果たすため。だって、そうじゃないと私の気が晴れないんだもの」

サラの声は激情を通り越してもはや冷静だ。静かに、剣を構えている。

「さて、サラ。俺は戦うつもりはない。せめて他の生徒だけでも——」

「殺しあいの最中に命乞いとは情けないものねっ！」

説得を試みようとしたが、サラが攻撃を仕掛けてきたのでやむ無く迎撃として時穿を抜く。

ただの訓練機のブレードのはずなのに、その刃はことさら重く感じた。

「貴方には情けなんてかけてあげない。私が刈り取るの。この、双龍に与えられたこのISでッ！」

瞬間、サラの身体を黄色の光が渦巻いた。

彼女のブロンドがその粒子の流れに乗って、キラキラ輝く。

打鉄のくすんだ鉄色の装甲が溶け、黄色の装甲が展開される。

『ダブル・キャスト二重同時展開』……。長年ISと共に過ごし、それこそ身体の一部のようになるまで馴染ませないと到達できない上級の技術だ。

「まさか、サラ。お前も持つてるのか、ここに」

俺は自身の胸を示す。

「ええ、そう。でも私の『サニー・ラバー明日を奪う者』はちよつとイヤらしい子だったみたいで、本体はここにあるのよ」

そういつてサラは、その装甲に包まれた豊かな胸部、その先端を指差した。

……。舐めやがって、このレズ女が。

「悪いが、俺はウエルクさんを忘れた覚えもないし、忘れることもない。それよりもするべきことがある。悪いが、今日死ぬのは俺じゃない、お前って可能性も有るぞサラ」

緊張感のせいかな、だんだんと意識が鋭敏化されていく。

「それこそ、望むところよ。拒む兄さんを無理やり参加させてまで

作ったIS、私が砕くわ！ 貴方に明日はない！」
サラが駆け出す。狭い通路での戦闘なので、自然と直線的な動きだ。

しかし、標準的な大きさのISとは二回りほど小さし瞬龍はその狭さをものともせず、自由に動くことができる。

そこがこの戦闘で勝利する重要なポイントとなるだろう。

身体の調子は悪い。瞬龍だって限界が近い。だが、

——特定のISの反応を感知。Bシステム、起動します。

「クレハーツ！ 言われた通り、片付けたわよ！」

鈴お前が来てくれたお陰で、何とかかなりそうだ。

出力が増した瞬龍で、俺はサラを迎え撃つ——。

そして彼は――

背後の鈴にサラは気づいたようだったが、構わず俺にその手に持った大型の両刃剣を振るう。

騎士のような甲冑が、世界中の朝日を全て集めたような黄金色の輝きを放ち、それをプラチナブロードのサラが纏う。こんな状況じゃなかったら、感嘆の息の一つでも漏らしていたかもしれない。

しかし俺は気を引き絞め、サラに対応した。

あの剣は通路（こご）で振るうには大きすぎるようだ。

だからサラの振りも、小さく、速くならざるを得ない。

スピード勝負なら、瞬龍（俺）とBシステム（た）も負けられないぞ。

一秒間に二撃。サラが放った突きの数だ。

俺は時穿を展開し、右に左にと払い除ける。

――見える。対応できる。このくらいなら。

「・・・やはり、彼女がカギみたいね」

一瞬俺に接近したサラが耳元で囁く。

・・・まずいな。

Bシステムのトリガーを知られた。

Bシステムのトリガーとは、特定のISのコアだ。そして今現在その登録されているコアはセシリアのブルーティアーズと、鈴の甲龍だ。セシリアは撤退したようでアリーナないに反応がない。

鈴を展開不能にされると詰むぞ。

「・・・だったらどうするつもりだよ?」

「決まっているでしょう? こうするのよ」

サラが背後の鈴に向かって右手をかざす。

その瞬間――

「え、えっ? ど、どういうこと? クレハッ!」

一瞬のうちに鈴のISが消失し、鈴が狼狽する。

何やってんだバカ!

「鈴今すぐ展開しろ! 早く!」

「や、やろうとしてるわよ! でも、甲龍が無いの!!」

鈴に展開を促すが、そこでハタと気付く。

—— I S、甲龍の消失を確認。登録を解除します。

—— Bシステム、強制終了します。

消失……？

俺は付近の I S コアの検索を開始するが、甲龍の反応が鈴にはない。

しかも鈴は甲龍が無いと言った。

それはつまり、待機形態の甲龍も見当たらないと言うことで……。
まさか……まさか……。

「剥ぎ取ったのか…… I S を！」

俺はサラを睨む。

Bシステムが解除されたため、内心ビクビクだが、そんなことは言ってられない。

鈴は、戦う力を失ったのだ。

「そうよ、これがこの『明日を奪う者』^{サニール}の能力。対象の I S のコアを強制的に引き抜く力！ 奪われ、失った私^バが得た得るための力！」

サラは笑う。ケタケタと可笑しそうに。

「さて、これで残りは貴方だけよ終クレハ。今あそこにいるのはなんの力も持っていないただの高校生。それは貴方も同じよね。 I S を持っているだけのただの高校生」

……ダメだ。呑まれるな。戦意を失うなッ！

圧倒的不利を突きつけて、相手の戦意を削ぐ。嫌がらせが趣味であるサラの常套手段だ！

「……ッ！」

サラが鈴に切っ先を向ける。殺すつもりなのか……？

「さて！ 鈴は関係ない！ 狙いは俺だろう!?!」

「ええそうよ。狙いはあなた一人。でも、見られたからには始末するしかないでしょう？ それに、凰さん。貴女も一枚噛んでるようなのだし」

まずいまずいまずい！

I S が重い、身体が重い、意識に動きが付いてかない！

そして・・・

「さようなら、凰さん。貴女にも明日は無かったようね」
剣を、降り下ろした――。

@

「鈴ッ！」

鈴は肩から二の腕にかけて縦に切り裂かれ、弾き飛ばされた。

鈴の小さな体躯が壁に叩きつけられ、崩れ落ちる。

「ふざけるなサラッ！」

俺はなんとかスラストを噴射し、鈴に駆け寄ろうとするも、その行く手をサラに阻まれた。

「ふざけるな・・・？こちらの台詞よ。貴方が凰さんを傷つけられて私に憤りを感じているならッ、私は誰に対して怒ればいいのかよ!!? イギリス!? 中国!? それとも日本!? いいえ誰でもない。貴方は恨まれ、失うべき人間なのよ!」

サラは、泣いている。

その手に血で濡れた剣を握りながら。泣きながら、笑っている。

その顔に恐怖した俺は、それを押し込んで、サラの懐に潜る。

「このっ、まだ抵抗を・・・!」

――今だ。

「なッ!」

俺は懐に潜り込んだ瞬間、サラが俺の頭を刈ろうと剣を横に薙ぐのが見えた。

だから俺はそれを逆手にとり、頭ひとつ分低くなるように瞬龍を解除した。

しかも解除する瞬間、サラの足元を衝撃砲で破壊し、バランスを崩しておく。

その作戦は成功し、サラは俺の頭を捉えきれず、スカ振り体勢を崩した。

今がチャンスだな。

俺はそうやってサラをすり抜けると、鈴を抱き上げる。

外に出るか、通路内を逃げるか迷ったが、狭さがこちらに有利に働くのと、鈴の手当てが必要なので通路側に逃げることにした。

「外に出て、逃げればいいのに……。こんな狭い中でどうやって逃げるつもりなの!？」

サラは、狂っている。復讐の狂気に取り憑かれ、俺たちを追撃しようともしない。

サラ、こっちはパートナーが一発やられたんだ。だから俺も、お前に一発返してやるぞ。

俺が過去にお前の兄貴を殺したとかそう言うのは関係なく、ただパートナーを傷つけられた相棒として、な。

@

狭い非常口の通路を抜けると、生徒がアリーナの客席に向かうための大通路にでた。

見渡して自分の現在位置を割り出す。

……たしか、2ブロック先に医務室があったな……。

レーダーを仕掛けられると一発で場所が分かってしまうため、俺は瞬龍を纏わず、走る。

……出血が多い。俺、応急手当の方法なんざ中学校でしか教わったことないぞ。

医務室の扉を蹴るようにして開け(鍵がかかっていた)、備え付けのベッドに鈴を寝かせた。

鈴の顔は青ざめている。

移動する途中で目を覚ました鈴は自分の状況を認識して、力なく笑った。

「ごまあ無いわね……。あんたと関わってからロクなことがないわ……。よく知らない奴には襲われるし、大ケガするし、ほんともう散々よ」

「喋るな。出血が多い。恨み言なら後で聞いてやる」

切り傷の位置からみて、上腕二頭筋の上を走る静脈は切断されている。出血が止まらないのはそのせいか。

くそつ、包帯を巻く手が震えて、上手く縛れない。

俺は腋の下の止血点を強く押さえる。

……が。

「おい、鈴大丈夫か!? おい!」

殺気から反応がないと思っていたら、いつの間にか鈴は意識が混濁してあうあうと意味不明な言葉を発している。

酸欠による意識障害だ。血が足りてない。

くそっ、どうする!?! 連絡は……ムリだ。

サラがジャマーを発していた以上、あいつの手の中であるアリーナ内では通信が行えないと見るべきだ。

なんとか……なんとか……。

……そうだ。

俺の心臓組織は瞬龍の生体再生機能で賄われている部分がある。

なぜ瞬龍本体を埋め込む必要が有るのかと束さんに聞いたことがあった。

……えーつと、何て言ったっけ? たしか……。

(瞬龍の生体再生機能は生体維持機能じゃなくて、正しく生体組織を再構成する機能なんだけど、くーちゃんが壊したっけうか、チーちゃんが壊したくーちゃんの心臓なんかは常に動いていないといけない臓器でしょ? だから、万が一っけ言う場合を防ぐ手立てとして、心臓に直接埋め込んでるんだよ☆)

……だっけか。

つまり、外部にも機能する機能ってことだ。

問題はそのやり方だ。

俺の時は束さんがやってくれたが、俺がこの機能を使うのは初めてだ。

エネルギーの譲渡見たいに流出ケーブルでも接続すればいいのかも知れんが、今の鈴にはその接続孔がない。

いや、俺と瞬龍に電子的な繋がりが無いところから見ると、そういうのは必要ないっけいぞ。

俺はサラが追ってくる危険性も度外視して、瞬龍を展開。発動の仕方を探る。

——武装の展開

違う！

——指向性レーダーの操作

違う！

——Bシステム発動時の特殊機能

ちが・・・ん？

三つ目のウィンドウに気になる文字が表記されていた。

Bシステム発動時の特殊機能・・・？

急いで読み進める。

——Bシステムとは、対IS戦の多対一を想定され設計されたシステムで、同時に製作進行されていた機能に、VTシステム、生体再生機能がある。当該機にはその中の二つ、Bシステムと生体再生機能が備わっている。

・・・あつた。生体再生機能の説明が！

かいつまんでいくと、どうやらエネルギーを外部へと送る行為はBシステムを発動させなければならぬらしい。

「・・・ダメだ。出来ない・・・」

今の俺はBシステムを発動させるための特定のISがない。セシリアにも連絡は取れないだろうし、こんなタイミングでそのドアをセシリアが開くとも思えない。

だったら、鈴を助けられないのか？

いや、それも一応否定できる。

なぜなら、Bシステムを発動させる手だてがまだあるからだ。

俺は鈴を見る。意識がなく、くてんとベッドに横たわる鈴を。

・・・出来るのか・・・俺に。

そういうドラマや映画は雨の影響でたくさん見ている。アイツはあのシーンがあるラブストーリーが好きだからな。

けれども、胸に瞬龍が埋め込まれてからはそう言うのは避けて生活してきた。

そんな俺に、この状況は酷と言うものだろう。

だけど、弱音をはいている暇はないぞクレハ。お前が一瞬ためらっ

ているうちにサラが俺たちに、鈴が死に一步近づくんのだ。

覚悟を決めろ、男を見せろ俺！

鈴の寝ているベッドの脇に方膝ついてしゃがむ。

この時点でもすでに痛いほどに心臓が脈打っているが、それでもまだ足りないらしい。

気を失い、苦しんでいる鈴にこんなことをするのは罪悪感で死にたくなるが、俺はこの事を鈴には告げないつもりだ。告げたが最後、俺はこいつの前では普通でいられなくなる。

父を殺し、その娘にまで手を出す奴として、俺は自分が許せなくなる。

鈴の右肩を見る。

痛々しく、俺の弱さが招いた傷だ。

だから、それを治すために俺はするぞ。

へんな感情なんか一切ない、治療の一環としての——口づけを。

そして俺は、起こさないように静かに鈴眠り姫にキスをした。

鈴の唇は、冷たくて、柔らかくて、花卉のように小さくて、とても悲しい感触がした。

そこから火が点くようにして俺の心臓が爆発のような鼓動をうち始める。

そして、遂に発動した。

——過剰な脈拍の上昇を、脳内アドレナリンの分泌を感知。 B

システム、

起動します。

……さつき俺はこの事を告げないといったが、あれの本当の理由は、たぶんきつとこいつのファーストキスをこんな形で終わらせたくないからなんだ。

愛情や恋愛感情なんてこっぴどく恥ずかしいものなんて一切ない。女子に対して余りにも失礼な行為。

あるのは人命救助というとても尊い行いに対する気持ち。
覚えてないなら好都合。

俺に構わず鈴は一夏とイチャついてりやいさ。

いや、それもなんかイラツと来るのは何でなんだろうな。
わからねえや。

@

「……あら？ 鳳さんはどうしたのかしら？……って、あなた、なってるわね」

俺は大通路に姿を表したサラを見つけ、医務室を守るように立つ。

「意外ね。貴方に死体愛好家のケがあつたなんて。同じ女として鳳さんに同情するわ」

「……」

俺は、何も言わない。

今はまだ、鈴の生死がサラの中で不明な状態を保つだけでいい。

「……よく俺がBシステムを起動させているって分かつたな。参考までに教えてもらつていいか？」

俺は弾切れになつたライフルを収納し、代わりに「流桜」を展開させ、所持弾数をチェックした。

「……感覚よ。今のあなたは始業式の夜に見せたあの時や、セシリアとの試合が終わつたあと、セシリアの肩を抱いたときと同じ感覚がするのよ」

「……嘘だな。」

サラは感覚どころか、俺がBシステムを使っているか判別する能力だつて持つていない。

俺と鈴が初めてサラと交戦したあの通路での出来事。

サラはISを剥ぎ取るあの機能を俺ではなく、鈴に使つた。

Bシステムを使っているか判別できるなら、あの時は鈴ではなく、俺のISを剥ぎ取るべきだつた。

それをしなかつたと言うことは、脅威度の判断がつかなかつた。つまり判別できなかつたと言うことだ。

そして、鈴のISを消したときに俺が慌てたため、システムが停止し、発動条件である特定のISが甲龍だと判断できた、と言うところだろう。

だから鈴を戦えなくした。俺のBシステムの発動を防ぐために。つまり、さっきの皮肉も、俺の回答を促すハツタリなのだろう。

俺はまんまとそれに引っ掛かって、発動状態であることと言ってしまったわけだ。

人を弄るのが上手いなやっぱり。

しかし、今となつてはもう関係ない。

俺はサラを倒し、甲龍を取り戻す。

それが俺の、いや俺たちの勝利条件だ。

「お喋りはこの程度にして、早く終わらせましょう。お互いの大事な人を殺した相手との決闘を」

……別に鈴は死んだ訳じゃないが……

まあいいや。今だけ死んでる扱いで。活きがいいとうるさいし。

「ああそうだな。だけどサラ、お前は殺すつもりで来るといい。じやなきや俺がお前を殺してしまう」

その言葉にイラツと来たのか、サラは額に青筋を浮かべた。

「減らず口をッ！」

サラが床を蹴り、もうスピードで俺に接近してくる。

得物は先程と変わらず両刃剣が一刀だけ。

「だったら俺もこれだけで相手してやるよ」

流桜を消して、時穿を両手で構える。

俺も自ら前に出てサラとの近接戦に入る。

サラの狙いは極めて正確。

超高速の突きが体の急所を次々と襲ってくる。

払いのけるより、かわしたほうが早いので俺は突きの一つ一つを丁寧に見て』かわす。

しかし……

バシユウツ！

圧力の抜ける音がして、俺の動きが強制的に止められた。

焦って足を見ると、両足の装甲が起動限界を越えてオーバーヒートしていた。

(やっぱり連戦はキツイか・・・！)

サラは俺に起こった事態を認識するとチャンスとばかりにその顔をニヤリと歪めた。

迫り来る鋒^{きりぎりす}。足元を固定されたままでは動くに動けない。だったら・・・！

俺は突きが当たる一瞬前に両腕からサラの背後に衝撃砲を二発、微妙にタイミングをずらして放つ。

サラはそれに驚いたらしく、動きを止めた。

「・・・なに？ 驚かせて動きを牽制したつもり？ だけど・・・」
いや、狙いは正確だ。

俺には見えている。

一瞬早く打ち出した砲弾にぶつかって、跳ね返ってくる「エネルギーは小さめ、速度は速く」の二発目が！

「くがつ!？」

サラの背を衝撃砲が襲う。

やった！湊の真似だけど出来たぞ。

ビーム兵器の偏向射撃^{フレキシブル}ならぬ、反射射撃^{リフレクト}！

「つう・・・でも、この程度で・・・！」

サラ、もう遅い。お前は集中を切らして、周りを警戒できていない。だから・・・。

「——どの程度なら効くつてのよ?！」

背後に立った鈴が、サラに衝撃砲を放つ。

よし、上手く展開できたみたいだな！

凜と立つ鈴は今、消失したはずの甲龍を展開している。

考えてみれば変な話だ。

通常兵器どころか、ISとの戦闘でも破壊されないISコアが、意図も簡単に消失したのだ。

だから甲龍は破壊されたのではなく、サラが持っている、或いはサラのIS「サニーラバー」の拡張領域に変換転送されていると思った

のだ。

それで、試しに通常起動ではなく、ISを遠隔起動する緊急展開でやってみると言ったのだが、無事に取り戻せたみたいだな。戦う術を。

「凰……鈴音……ッ！」

衝撃砲を至近距離から浴びせられて動けないサラに、俺は流桜を突きつける。

絶対防御なんて発動しないように、ちゃんと額に銃口を触れさせる。

「終わりだよ、サラ。俺、お前とはいい友達に慣れると思ってたのにな」
「……バカを言わないで。……わたしは、貴方が大ツキライよ……」

「そうか」

別に俺は好き嫌いの話をしてるんじゃないやなかつたんだが、そう言われるとちよつと悲しいな。

「で、こいつどうすんのよ？ あたしとしては傷の件もあるし、千冬先生にコツテリ絞ってもらいたいんだけど」

「いや、どつちにしてもそうなるだろ。ISでの殺人未遂だぞ。罰を受けないハズが……」

その時だった。

突如横から一筋の粒子砲が放たれ、俺たちは反射的にそれを避けた。

——サラをおいて。

「……油断したようね柊クレハ。凰鈴音。逃げることになるのは本当に遺憾なのだけれど、次の機会があるだけまだマシだわ」

外からの砲撃らしく、外装を突き破って放たれたビームに巻き上げられた土煙が晴れると、底には例の黒い全身装甲のISに抱えられたサラが捨てぜりふを吐いていた。

「待て！ お前は本当に双龍から来たのか!? 双龍ってなんだ!」

「——双龍とは世界を変える………神様よ」

サラはそう言い残すと、無人機に抱えられ、アリーナから脱出した。残された俺たちに通信が入る。

『……おい、無事か……？　おい、無事か終と嵐！』
千冬さんだ。

「……はい。終です。通信復旧したんですね」

『何が復旧したんですね、だ！　すでにそのブロック以外は完全に復旧している！　何があった!?!』

「……いえ。ちよつとアリーナ内の安全を」

「安全？　ふざけ……いや、だったら早く戻ってこい。みんな心配してるぞ」

「……はい。今から出ます」

通信を切る。

鈴は俺の顔を心配そうに見てくる。

サラのことを言わないのを不思議に思ったのだろう。

「……神様、か」

なあサラ、その神様は死人を生き返らせてくれるか？

こうして、クラス対抗総当たり戦二日目は終わった。

再会という名の運命

あれから二日。クラス対抗総当たり戦は全試合を終えて、無事に……いや無事じゃねえな。特に俺とか。

まあ、終わることができた。

鈴と一夏の試合は無効試合ということになっていて、体調のこともあり、試合したい再開しないそうさ。

……で、俺はというと。

「呑気なもんねえ……」

「お前にはこれが呑気って言えんのかよ鈴」

絶対安静が言い渡され、普通の病院にも行くわけには行かないので、保健室登校どころか、保健室入院なんていう超珍しい休養を取っていた。泣ける。

昨日は面会ができるようになると、雨やフォルテがいの一番に見舞いに来てくれて、心配してくれたが、怪我している理由を鈴とのケンカと言い張った俺を尊重して何も聞かずにいてくれた。

しかし、続いて現れた生徒会長には、色々なことを（主に鈴との同居生活について）根掘り葉掘り聞かれるわ、黛も面白がって騒ぐわ騒ぐ。

極めつけに今日のクラスメイトの奴等だ。なんで……なんで……俺に女装を強要してくるんだ……っ！」

俺はさめざめと泣く。長い髪^{ツラ}を垂らして。

「まあ、良いんじゃない？ 未確認機を倒した評価はあんたにも入るみたいだし」

「良くねえよ！ 新聞書くから女装して撮らせろ!? Faceboockに上げるから女装して撮らせろ!? お断りだッ！」

「……のわりには正面切って抵抗しなかつたじゃない」

「……」

うん、まあ女子に手をあげるのもどうかと思うし、ネット上の画像は先生が消してくれるし……。

……そう言えばサラはどうなったのだろうか。

鈴の顔を見たら、不思議とそう思った。

現在彼女は海外任務としてイギリスに渡ったことになっている。

IS学園に籍を置いているのは戻ってくる気があるのか、はたまた他に理由があるのか。

「ん？ なによ？」

チラリと鈴を見る。

鈴の制服は改造されていて、両肩が大きく露出している構造だ。

そして、その右肩からは・・・

——うっすらと傷があるのが見てとれた。

その事を指摘すると鈴は「別にいいわよ。命あつての身体だしね」と、悲しそうな顔をして言う。

俺は知ってるぞ鈴。さつき来た女子が持つてる雑誌の表紙、お前の写真だっただろ。これからの季節にあわせて肩の出る白いサマードレス姿で。

・・・モデルに傷を負わせちゃったことに深い罪悪感を覚えた。

「そう言えば、あんたどうやってあたしの傷を治したの？ そういうワンオフアピリテイ単一仕様能力なの？」

「いや、ワンオフアピリテイじゃなくて、基礎機能だ。生体再生能力」「へーすごいじゃない！」

鈴が浮かべた笑みが二年前の笑みと被る。

しばらくの間、無言の時間が流れる。

一分、二分だったのかもしれないが、十分や三十分だったのかもしれない。

「なあ、鈴——」「あたし、本国に帰るわ」「——え？」

突然の宣言に声がひっくり返る。

「帰るって・・・何でだよ!？」

「だって、サラ・ウエルキンが逃げたなら、日本にいる理由がないし。クレハには断られちゃったし」

いや、違う。違うんだ鈴。俺は——。

言葉を紡ごうとしたが、何故かこれより先が出てこない。

「だから、中国でまた頑張るの。あんたみたいに強くて、融通の利く

パートナーを探すためにね」

「……融通が利かなくて悪かったな」

「違うだろクレハ。お前が言いたいことはそんな皮肉じゃないはずだ。」

「だから、今日はお別れを言いに来たのよ。このあとは一夏のところにも行くつもり」

「行って……どうするんだ？」

すると鈴は頬を赤らめて言った。

「そうね、最後になるかもだし、あの篠ノ之つてやつを出し抜いてやろうかなー」

それはつまり……。

「そうか、何するかは知らんが、まあ頑張れよ」

「うん、ありがとクレハ。あんたと暮らしてた二週間、悪くなかったわ」

「そうか……」

「……止めてはくれないんだ」

そして鈴は去っていった。サヨナラも言わずに。

俺の頭から、かつらが落ちる。

……こんなもん着けてアイツを見送ったのかよ俺。

これで鈴は俺のもとを去っていく。

最後の言葉は聞かなかったことにしろ。

お前の言葉は信じたし、お前のためにも戦った。

「でも、なんで俺はうつむいてんだ？」

きつと鈴は双龍を追いかけるために、サラみたいな連中を追っかけて行くんだろう。

それこそ、今回の一夏との再会が最後になってしまう可能性を押し込んで。

「……だめだ。あんなことしてたら命がいくつあっても足りないぞ」
既に鈴が保健室を出てから二時間経った。

既に外は暗く、どこからかヘリのローター音が聞こえてくる……
ような気がした。

おい止めろ。立ち上がるな。寝てろ。瞬龍は修理中だぞ。

聞かなかったことにしろって言ったのが聞こえなかったのかクレハ。

自分の中の自分が必死に押し止めてくる。

頭では分かっているのに、身体が言うことをきかない。

スライドドアに手をかける。

聞かなかったことにしろとは言われたが、見なかったことにしろとは言われてない。

デジャブるんだよ。

さっきの眩きを洩らした横顔と、視線の先の父親が銃弾に貫かれるところを目撃したあの横顔が。

そして何より、

またあの悲しそうな顔をさせてしまった自分が本当に許せない。

「……まったく、どうなっても知らねえぞちくしょう！」

俺は保健室を飛び出した。

@

「おい一夏！」

「……え、終先輩ツ!? 大丈夫なんですか?」

寮の一夏を訪ね、鈴が来たかと確認をとる。

「は、はい。さっき来ました。結構大きめの荷物もって」

「そうか……なんて答えたんだ……?」

俺の質問の意味が分からなかったのか、一瞬ポカンとしたが、直ぐに思い至ったのか「ああ」と声を洩らした。

「いいと思うよ、と言いました」

「そうかありがとなッ！」

「……うん! 意味わからんな。」

告白されていいと思うよって、どこまで鈍感なんだよアイツ!

さっき聞こえたローター音は空耳なんかじゃない。本当にヘリが来てるんだ。

この学園でヘリが着陸できるところは幾らでもあるが、保健室から聞こえるところは一つしかない。

急いで本校舎に向かう。

走って走って走りまくって、漸く見えたとき、そのへりはすでに離陸体制に入っていた。

屋上まで上る時間はない！ だったらここで――！

「鈴――ッ！ 行くな――ッ！戻ってこい！ 俺と一緒に……一緒に……」

俺はひとつ区切り、全力で叫んだ！

戦いたくない。

逃げたくない。

悲しませたくない。

俺自身を嫌いになりたくない。

だからそんな思いをこの言葉にのせて限界を越えて叫ぶ！

「俺が一夏と一緒に前前の作った酢豚食ってやるからよ！ うまいの作るまで返さねえぞおい！ きいてんのか鈴――ッ！」

しかし、その声は届かず、夜の大空に溶けて消えていった。

……間に合わなかったか。

酢豚の話は鈴が乱入してきた就任パーティーで三人が話していた事だ。

「……本気で食ってみたかったんだけどなあ」

眩くが、誰も返してくれるものはいない。

――そう、思っていた。

「――だったら今からでも作ってあげるわよ。そんな恥ずかしいこと叫ばなくても」

……鈴だ。

「おい、お前何やってんだそんなところで」

再登場の仕方に、俺は目を丸くせざるを得ない。

「……別にいいでしょ。再現してあげたのよ。あんたと出会った時を」

鈴は今、校舎の屋上から俺を見下ろしている。

月を背にして立つ姿は凜としていて美しい。凜という文字は鈴のためにあるんじゃないかと錯覚してしまう程だ。

位置関係は……なるほど、コンテナに乗っているときと同じだな。

いや、そんな事よりも！

「お、おまつ、なんでへりに乗ってないんだよ!？」

「なによ、乗ってた方が良かったの?」

「いや、そういう訳じゃないが……」

なんで下りてるんだよ? 中国帰るんじゃないのか?

そう聞くと鈴はこう言った。

「気が変わったのよ。やっぱ絶対にあんたをパートナーにしてやろうってね」

……笑いしか洩れない。

なんだよ、何処までもワガママだなコイツ。

さっきのへり、中国軍の大型機だぞ。それに無駄足踏ませるとか、なんなのコイツ?

「……大変だぞ。俺のパートナーは」

「舐めないでよ。あんたよりもつとめんどくさいやつと幼なじみしてるんだから」

ん、まあ違うない。

「それと——ちゃんと受け止めなさいよ!？」

「えっ!? はっ!？」

いきなり鈴の姿が屋上から消える。

いや、飛び降りたのだ。

高さ25メートルの屋上から。

「おい、確かアイツの甲龍は……!」

それに気づいた瞬間、再びダッシュした。

落ちてくる鈴の場所を見て、速度を割り出し、落下地点を予測する!

スゲーな! Bシステムでもないのに計算速い!

……それほど切羽詰まってるんだな。

「間に合ええええええッ!」

鈴めがけて渾身のスライディング。

腕のなかにスポット収まる小さい感触。

「……こんな出会い方じゃなかったら俺たち」

「違うわ。今はもう、『再会』よ」

「ああ、そうかい。相棒」

——認めよう。

俺はコイツと共に進んでいく運命らしい。

運命って言葉は好きじゃないが、自分を納得させるための言葉としてはとても便利な言葉だ。

だから、これも運命だ。

俺は、俺に向けられる鈴の笑顔を見て、そう思ったのだった。

鈴が戦うなら俺も戦おう。鈴が信じろというなら俺も信じよう。

鈴が危険ならば俺が戦おう。

そう、すべてを投げうってでも、オーバリーミット限界を越えるに至るまで。

それが俺にできる、唯一の——コイツの家族にできる罪滅ぼしなら。

@

「……ねえ、一夏」

「ん？　なんだよ鈴」

「……やっぱりあたし、待つてみても良いかな？」

「……鈴がそうしたいならそうすればいいさ。鈴が決めた相手なんだろう？　いつものワガママみたく、どこまでも追っかけてみるよ」

「なによ、いつものワガママって……。でも、そうね。ここで引き下がるのはあたしらしくない気がするし、ギリギリまで待つて、アイツが来たら今度こそ有無を言わさずパートナーにしてやるわ。クレハって、なんだかんだ言っつて結構いいやつだったし」

「鈴がそこまで言う相手なんて珍しいな。そんなに柊先輩が気に入ったのか」

「……うん。一応助けてもらった恩もあるしね。……いや、ないわ！　あたし一回アイツ助けてる!!」

「じゃあ、ここからだな。鈴がなにをしに来たのかはハッキリとはわ

からないけど、多分あの先輩なら付いてきてくれるだろ。いいと思うぜ、俺は」

「うん、ありがと一夏。手始めにとびつきりカツコいい再登場シーン考えとかないとね!!」

第一巻了

二卷

序章

六月頭。日曜日。

数日前のあの一件からしばらく経ち、ほのかに初夏の香りを匂わせてきた休日。

俺は部屋にこもっていた。

「うーん、やっぱり格闘戦特化にチューンアップするべきなのか……？」

目の前にあるのは大型モニタとゲームハード一式。

タイトルは勿論あの名作ゲーム『I S / V S 《インファイニットストラトス・ヴァーストスカイ》』だ。

発売初日で百万本セールスを記録したこのゲームは第二回モンド・グロツソでの各国の機体データが使われており、俺は自分の元愛機、ラファール・リヴァイヴの調整に頭を悩ませていた。

このゲームを買ったのはホンの二、三日前のことだ。一夏に誘われてプレイしたんだが、その時に敗北を喫したのが悔しくて全力で練習中なのだ。

「ああ畜生！俺はどつちのお前に乗ればいいんだリヴァイヴ！」

瞬龍に射撃武器が搭載されてから、格闘戦一辺倒と言うわけにも行かなくなり、普段から射撃に慣れておくかと思っただんだが、これがかなか難しい。

「て言うか、なんだテンペスタ！お前そんな強くないだろ！」

ゲーム画面に表示されているリヴァイヴを踏みつけたテンペスタに文句を垂れる。

ありえねえよ。なんだよあの無限コンボ。

コンピューター鬼畜過ぎるぞ……。

「……なーに一人でアツくなってんのよ？」

唸る俺に後ろから声をかける人物。

そう、俺のパートナーにしてルームメートの凰ファン・リンイン 鈴音だ。

休日のこいつの服装は梅雨に入ったからか、一層薄手のモノになってきている。

「おい鈴。そんな格好で出歩くなよ。胸が無いの『コントローラー貸せ。 対戦開始』——って、俺のリヴァイヴがあ——！」

一瞬で2Pに滑り込んだ鈴の打鉄に俺のリヴァイヴは無惨にも切り殺された。

その後、勿論俺も殴り倒されたが。

@

千冬さんが言うには、先日襲撃してきた例の黒いIS、『ゴーレム』は、未登録のコア。つまり新しく何者かが生み出したコアを基に造られた機体だと分かった。

俺が地域の警備に出たときのISも同じで、今分かっているだけでもそのなにかは五つのコアを新しく作ったことになる。

それは何故か。何が目的か。

分からないことはままあるが、手がかりがない訳じゃない。

双龍の存在だ。

アリーナ襲撃事件の影で暗躍していたサラ・ウエルキンはその双龍からの情報をもってこのIS学園に来ていたらしい。目的は俺を殺し、俺の心臓に埋め込まれたIS、Bシステム試作機『瞬龍』の破壊だった。

俺は初のBシステム発動時に、実験に立ち会った人間を多数殺害している。

最近気付いたオルコット夫妻。つまりセシリアの両親。

鈴が双龍を追いかける理由である、鈴の親父さん。

そして、俺の恩人でもあるサラの兄。

本来なら警察にでも飛び込んで自首するところだが、あの実験自体IS運用法に触れるため、揉み消されてしまうだけだ。

だから俺は双龍を突き止めて、瞬龍やBシステムに纏わる話をすべて聞かなければならない。

だから俺は鈴と行動を共にすることを決めたのだ。

俺の目的のために、俺の贖罪の為に。

@

「……んで？ なにか弁明は？」

モノローグから帰還すると、上下逆さまに映る鈴の顔があった。

「……取り敢えず、下ろしてくれよ。頭がボーツとしてきたぞ……」
俺がそう乞うと鈴は仕方ないわね……と呟いて俺を縛り上げていた
ロープを切った。いてえ。

「で？ あたしの胸が何だつて？」

まだそこからののかよ。

「別に。なんも無い。女子ならちよつとは慎めつて思っただけだ」

こんなことを直視して言うのは恥ずかしかったため、少しそっぽを
向いて言う。

実際、今の鈴のカッコは目に毒過ぎる。いや、青少年の観点から見
ると目の法薬かもしれないが、そんなことは関係ない。うっかり俺が
なっちまったらどうするんだよ。Bシステムのトリガーはなんでか
鈴には甘いからな。

「……？……!! あ、あんたどこ見ていつてんのよ！ このス
ケベツ！」

ほら、一瞬でキレた。理不尽すぎるだろ。

「まてつ、待て鈴！ 別に胸見て言った訳じゃない！ 全体的に！ タ
ンクトップはまずいだろ！」

「さりげなく全身見てることを言うんじゃないわよ！ あとこれブラ
トップよ！」

なおさらダメだろ！ 上に着ろ！

最終的には俺が鈴をシートで巻くという結果に落ち着き、目の前に
フガフガいう春巻きが出来た。

思わずため息がでる。

鈴に加え、近々アイツもここに来るといいう話を千冬さんから聞いて
いる。

そして更には全員強制参加の学年別トーナメントだ。

瞬龍の整備も完全に終わっているため、後者については問題はない
が、前者にはある。

——ラウラ・ボーデヴィツヒ。

たしか最後にあったのはIS学園入学前の3月。最終リハビリでドイツ軍に居たときだ。

俺はそこで千冬さんの殺人的なじごきを受け、今ここにいます。

一緒に行動したのは1ヶ月弱でも、作戦行動中は大体ツーマンセルで組まされた。

今ではとある部隊の隊長を勤めているとか何とか。

そんなラウラが学園に来るのだ。

「……一夏に、忠告しとこうかな……」

多分殴られるんじゃないかな、アイツ。

日曜の夜。

あれから俺たちはゲームで遊び倒し、夜の時間を迎えていた。時刻は6時。休日の夕食にはちょうどいい時間帯だろう。

「……鈴、そろそろ飯に行こうぜ?」

「嫌よ。絶対今日中にテンペスタを撃ち落としてやるんだから」
けれども俺が部屋にとどまっている理由は一つ。

……鈴がドハマリしたのだ。ゲームに。

どうやら、俺のリヴァイヴを打ち落としているうちにゲームで勝つということに病み付きになったらしく、現在対テンペスタ戦を52回繰り返している。

鈴も鈴だが、ゲームもゲームだ。

50回挑戦しても勝てないようなプログラム組むんじゃねえよ。

「あーもういいから行くぞっ。休日は食堂が閉まるのが早いんだから!」

「ちよっ、返しなさいよコントローラー! ご飯ならアタシが作って上げるわよ!」

「少し興味はあるが、残念ながら食材がない。それとも鈴、夜中に空腹で喘いでも知らねえぞ?」

夜中に苦しむ自分を想像したのか、押し黙る鈴。

……今の会話で思い出したが、酢豚食ってないな。作ってくれ
るんじゃ無かったのか。

鈴は渋々ゲームを片付け(電源は点けたまま)薄着のブラトップの上からタンクトップを重ね着した。

……いや、あんまり変わってないからそれ。

廊下にでるとちやうど混む時間帯なので、食堂に足を運ぶ生徒が大勢いた。

俺と鈴はその流れに紛れるように歩き出す。

「……ねね。あれ見てよ」

「あれって・・・変態終?」

「と、中国の代表候補生じゃない。同じ部屋なの?」

「どうにもそうっぽいわね。結構仲良さげな雰囲気だし」

「そう言えば、先月のあの事件。アリーナから出てきたあの二人が最後だったらしいよ」

「うそお。ナニしてたのよ?」

そんな会話が聞こえたが、極めて平静を保つ。変に動揺したら医務室でのことがフラッシュバックしかねん。

足早に歩みを進めて食堂に入り、手早く注文を済ます。

二人とも食べるものが決まってるからスムーズに進める。

「クレハ、あんたまた狐うどん? よく毎晩毎晩食べてて飽きないわね」

「今日一日三食豚骨ラーメンだったお前に言われたくない」

朝の日清麵職人に、昼の生麵タイプ。そして夜の食堂だ。

この間心配になって「おいリンリン。ラーメンばっか食ってないで笹食え笹」って言ったら五分間ボコられたし。そのあと一夏がやって来て説教してくるし、なんなの? 心遣いの表し方を間違えたっぽいな。

二人して席につくと入り口から見慣れた顔が姿を表した。

「——あんまりくつつかないでくれよのほほんさん・・・。かなりん探してるんだろ?」

「んふふ。あとでこの感触をみんなに教えてあげるんだよ」

うお、なんだアイツ。パジャマなのか・・・?

一夏と添うように入ってきた生徒は、ダボダボなパジャマ(?)を着て、ずり落ちるナイトキャップを、手先が隠れるほど長い袖でうっとおしげに直している。

全身装甲ならぬ、全身寝装って感じだな。

「感触なんか教えてどうするつもりなんだよ・・・。うおっ、なんか視線の圧力を感じる!」

一夏がそう言うと、のほほんさんと呼ばれた少女はカウンターに座る女子のもとへと逃げるようにすっ飛んでいった。

その際、複数の女子がそののほほんさんに殺人的な視線を向けた。・・・ような気がした。

「・・・あの噂、本当なんでしょうね?」

「うん、間違いないみたい。さつき一組の子が噂してるの聞いたもん」

「戦って」

「勝って」

「優勝して」

「株あげて・・・!」

「二「キヤーーーーーーッ!」二」

・・・なんだあの一団。

「・・・なありンr・・・鈴。一夏がまたなんかやらかしたのか?」

「さもアイツを問題児みたいに扱ったわね・・・。べつに、聞いてないわよ何も」

鈴ははずると麺を啜りながら言う。

本当に知らないみたいなんだが・・・。

「二戦って勝って優勝してキヤーーーーーッ! 戦って勝って優勝してキヤーーーーーッ!」

あの盛り上がりようを見て、何も知らないって言い張るのは、ちと無理があるんじゃないだろうか。

「本当に知らないわよ。アイツ鈍いから多分自分でも把握してないことが多いんじゃない? ほんと、なんであんなのがモテるんだか・・・」

「おいおい、お前一夏の幼なじみだろ。あんなのって酷くないか?」

二人の関係を心配して俺が言うと、鈴は箸が変形するほどの力で拳を握りこんだ。

おい、バキッなら分かるが、グニヤッてなんだよ? なんでキレイなH字を描いて割り箸が曲がつてるんだよ?」

「知らないわよあんなやつ! 昔ッから鈍くて鈍くて、酢豚の下りなんかもう笑えたわよ! 嘘! 笑えない! 殴りたい!」

な、なんか知らんが勝手にヒートアップし始めたぞ鈴が!

「なんで伝わらなかったのかなあこの感情! イライラしてモヤモヤ

して、ギスギスしてたあの頃がバカみたいよ！　おー、もう抑えられない。ちよつと殴つてくる！」

鈴は完全にキメた顔でそう言うと、席を立った。

周りでは女子たちが一夏に分からないように騒いで、背後では俺の名を呼ぶつもりだったのだろう一夏の声が悲鳴に変わっている。

いつにもましてカオスだ。

俺は鈴の井からチャーシューをくすねながらこう思った。

——別に忠告しなくて良いや、と。

@

「えーつと、ISスーツの注文。今日までだから早く決めて注文書を提出するようにね。みんな二回目だから迷うことないでしょ？」

「いやいや先生。今年は織斑君が居るんですよ？　ちゃんとしたやつ選ばなきゃ女としてまずいですよ」

「そうですよ。お洒落を忘れたら失格！　先生がいつも言ってることじゃないですか」

「それになんか最近、変態格を気にするようになってきた物好きな派閥も……」

その女子はそこまで言った後、速やかにその他の女子によって排除されていた。

何かを誤魔化すように俺に向かって笑みを浮かべる女子たちが怖い。

月曜日の朝。大倭先生が先日だしていたISスーツを新調するための注文書を集めるように言ってきた。

女子はなかなか手間取っているようで今このときもカタログを眺めているやつもいる。

「やっぱりハツキのが……いや、私にはちよつと大胆すぎる……！」

そのうちの一人が俺の幼馴染みだ。

「なんだよ雨、まだ決めてないのか？」

「う、うん。数が多いからどれがより効果的か悩んじゃって……」
なるほどな。ISスーツとはISと操縦者の適応率を高め、肌表面

を流れる微弱な電位さをダイレクトにISに送り、より直感的にISを動かすための、いわば補助装置だ。

本気で上を目指すやつらはスーツにも拘っているそうさ。

「クツちゃんは・・・どれがいいの・・・？」

カタログを見せるためにか、机をくっ付ける雨。小学校みたいだな。

しかし、その雨の顔はいっぱいいっぱいって感じにはりつめてる。

最近そんな顔ばっかしてないか？

「いや、俺は去年の暮れに買ったやつだからまだ良いや。今回はスルーだ」

そう答えると雨は「そ、そうじゃなくて・・・。」と言いかけたがそこで大倭先生に見つかってしまい机をもとに戻す。

「まったく、幼馴染みだからっていつでもどこでもイチャ付いてるんじゃないわよ。て言うか終くん。一年の嵐さんがキミ宛にペア申請出してきたんだけど、どうなってるの？」

先生の言葉に教室が沸いた。

「本当ですか先生！」

「ちゃんと確認してください先生！」

「ちゃんと結婚してください先生！」

「待って待って。なんでそんなに慌てるの君たちは!! あと三人目！あとで屋上ね」

クラスの全員が俺に視線で回答を求める。

「あー、まあ。そのまま通しておいてください。アイツのことだし記入ミスなんてないとおもうんで」

「え？ じゃあ間違いないの？」

「え、まあ・・・。成り行き上・・・」

・・・

「「「うそおおおお!!」」」」

今度は教室が揺れた。

.....

.....

「——つてことで、ちよつと君たち騒ぎすぎよ。意外なのは分かったから藁人形作ってる女子はその手を止めなさい。誰の写真使う気よ。篠乃歌、キミまでそっちにいつちやったら誰がこのクラス纏めるのよ?」

先生の鶴の一声で場は収まった。

さつきまでの教室のありようといったら筆舌に尽くしがたい。

「さて、ちよつと意外な確認は終わったけど、まだサプライズは終わらないわよ」

先生の遠回りな言い方に?を浮かべるクラス一同。

俺もまたその一人だ。

(ラウラ・・・か? いや、他国からの転校生にサプライズも何もないだろ。ここは元々多国籍学園だ)

それじゃあ一体サプライズとはなんなのか。

にわか騒ぎだした教室に先生の声が響く。

「なんと、一年生にまた転校生よ! しかも男女二人! 金髪美男子と銀髪美少女!」

.....だ。

「.....だ」

「美男子いいいい!?!」

なるほど。サプライズなんて言うわけだ。

作戦名「男女を越えた先」

女子の会話を盗み聞きすると、転校生は二人でやはり女子の方の名はラウラ・ボーデヴィツヒというようだった。

一年の教室から帰ってくる女子たちは口々にもう一人のシャルル・デュノアという男子生徒のことを語った。

曰く、

「王子さまみたいーい」

「金髪サイコー」

「年下なのがまたいい」

「きつとロールキャベツ男子」

・・・だそうだ。

なるほど。そのデュノアとやらは金髪の優男ってことか。

・・・どうでもいいな。

「あれ？ クレハくん？ 机に突っ伏して何してるっすか？」

うわ、五月蠅いのが来た。

「見りや分かるだろ。気分最悪なんだよ・・・」

俺は昼休みにも関わらず、一人でため息をついていた。

雨は茶道部の人たちと弁当食いにいったし、たまに校内でぼつたり会うサラは行方不明だし、ぶつちやけイベントの一つも起こらない。

いや、サラは帰ってきてほしくないけど。

「あー、あれっすねえ。男子が増えたことで注目度が下がっちゃうく的な？」

「ばか、違う。もう一人の方だよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。新聞部から調査指令とか出てるんだろ」

「もちろんっすよ。ドイツはIS技術に関してわりと閉鎖的っすからね。転校生なんて珍しいっすからみんな躍起になってかぎまわってるっすよ？・・・もしかして、なんか知ってるっすか？」

一瞬でメモ帳とペンを構えるフォルテ。流石は黛に並ぶジャーナリスト魂の持ち主。欠点は興味の無いものはとことんどうでもいい

ところか。

「知らん知らん。なーんも知らん。そういうわけであっち行け」

そういったところで俺は自分の失態に気づいた。

なんで俺はフォルテを煽るような言い方をしてしまったんだ・・・

！

「・・・ふーん。その顔はなんか訳ありっすねえ・・・。クレハくんのファンに売れそうな情報っすか？」

「売れるか。てかファンってなんだよ。どこに出来たんだそんなもん」

その時、教室の隅でひそひそ話をしていた女子たちがフォルテを呼び、なにやら相談事を始めた。

・・・チラチラとこっち見てるな・・・って、手にもってんの長めのウィッグじゃねえか。

そしてフォルテは女子の集団から離れ、ウィッグ片手にこちらに戻ってきた。

・・・そう、ウィッグ片手に、だ。

(あ、嫌な予感してきた)

迫る予感から逃げようと席を立つも、教室の入り口には女子がたむろして出て出るに出られない。なんだこの統率の取れた包囲網は・・・!?

「お、おい。なんだよお前ら・・・って、いつのまにそんな化粧品準備してやがった!? まて、カツラは止めろ！ 最近寝不足で肌が荒れてんだよ！」

まずい、混乱で心配すべき所がずれている。

俺を追い込んだ女子たちは、フォルテを筆頭に俺にプレッシャーを掛けてきた。

そして・・・。

「クレハくん、ちょっとゲームしてみないっすか？」

俺の頭にカツラが被せられた。

@

女子たちが提案したゲームは題して「勝てば天国、負ければ地獄。

ドキドキ女装を隠せ！デュノアくんに大接近ゲーム」というらしかった。四半世紀は前のセンスだな。

ルール説明によれば、ゲームの開始は今日の放課後。俺は放課後になると女子たちが全力を尽くして施したメイクを武器に、転校生のシャルル・デュノアに接近し、女装だと悟られずに食堂でお茶をしなければならぬようだ。

隠し通すことができれば俺は一週間女装で過ごしても良い権利を得て、負ければ転校生の男子に酷い先入観を持たせることが出来る権利を得る、というのが女子の提案した罰ゲームだった。

「……って、どっちも俺得しないんだけど!？」

「だーまらっしやいっすよ、クレハくん。既に状況は動き始めてるっす。放課後になって今さらなに言ってるっすか」

「くっ……!」

俺は校舎の角に隠れて、窓で自分の容姿を見る。

……完璧だ。悲しいくらい完璧だ。

なんだよこのつけまつげ。凄い長いのに全く違和感がない。肌も白いし鼻筋もピンと通ってる。文句ない美少女だった。

……いや文句はたんまりとあるが。

「ほらほら。最後に練習っすよ。……って、一年ほどを女装で過ごしたクレハくんには今さらっすよね……」

「おい、軽く引いてんじやねえよフォルテ。お前らがしたんだらうがこの顔に」

「いやいや、ぶっちゃけますけど、なんでそんな可愛く仕上がったのか私たちにもわからないんですよ」

「んな無責任な……。なあ、この胸、もうちよつと小さく出来ないか?」

俺は下を見下ろすが、自分の偽乳に遮られて足元を見ることが出来ない状態だ。なんでこんなでっかくしたんだよ……。

試しに触ってみる……うわ、やわらけえ。なにこれ。パッド?

むにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅ

「……あの、クレハくん?」

「・・・・・・・・・・はっ、別に気持ち良いとか思っていないぞ!？」

「いや、思ってたら友達縁を切ってたっす・・・・・・・・」

その時だ。

耳につけたインカムに女子から通信が入った。

「二人とも、用意は良いわね? もうすぐターゲットがそこを通過するわ。柊くんは待機。フォルテは背後から監視に入っ。柊くん、折角なんだから楽しませてよね。くしし」

うわ、コイツらすげえ面白がつてやがる。

ていうか女子的には良いのか? 数少ない男子に言い寄る女がいても。

試しに聞いてみると・・・・・・・・。

「は? 柊くん男子じゃない」

だ、そうだ。遊びつて割りきってるらしい。本物の恋はマジで戦争ですから、ともいった。

「接敵まで五秒前。・・・・三、二、一・・・・行って!」
くそっ!

俺は夕焼けに染まる教室前に飛び出していく。あたかも曲がり角で偶然ぶつかった風を装うように。

フォルテは後に、その背中は勇ましい様に思えたが、よく考えるとこの上なくマヌケだった、と語ったらしい。

@

五分後。

「へえ。偶然ISを? ボクのクラスにもそういう経緯でここに来たっけ言う人が居たよ」

「そうなんですか? ちょっと安心しましたっ♪(女声)」

「それで、キミのクラスは?」

「・・・・・・・・」

俺たちは食堂のテラスで紅茶を飲み交わしていた。

話をしてみるとデュノアはとても良い人柄をしていることが分かった。

それよりも今は周りのいぶかしむような、気味悪がるような視線が

気になる。

多分いまこっちを見てるのは二、三年の連中だな。

あいつらは去年クレハ（女ver）を見てるから直ぐに気がついたのでろう。

一人の上級生が端末を手に取り、どこかに連絡を入れるしぐさをするが、クラスの工作班が事情を説明し、俺が女装して男子とお茶をエソジョイしているという書き込みを未然に防いだ。

水際だった素晴らしい対策だ。

お前ら実習ももうちよつと本気で臨めよ……。

「えーっと、お悩みは以上で終わりかな？」

デユノアが悪意のひと欠片もない笑顔を向けてくる。

うう、心が痛むぜ。インカム越しにもうう、と胸を詰まらせる声が聞こえた。

俺は話を切り上げるべく、以上ですとだけいった。

しかし……。

「そう、じゃあもう暗くなってきたし、部屋まで送ろう。たしかこの寮って全学年同じ建物なんだよね」

はい、わたり通路で簡単に行き来できます。

って、待て。待て、待て！

「それじゃあ行こうか。タイの色からキミは僕と同じ一年生だよ。ね。だったら大丈夫だよ」

一体何が大丈夫なのか。

デユノア、お前は男子なんだぞ?! その男子が女子を部屋まで送ると言うことの重大性をもうちよつと自覚しろ！

ほら、インカムから悲鳴の声が聞こえた！

しかしいまの俺は弱い女子（という設定）。

無邪気なあのスマイルの前ではなすすべもなく従わせられる。

……確かにあの顔は王子さま的な女子の夢を攪るワケだ。

一つ一つの所作が全く違和感ないし、鼻にも掛かってない。

本当に、普通にでる当たり前の反応なんだ……。

食堂を出た俺たちは寮の通路を歩く。

まずい。部屋の場所を聞かれたらどう答えようか……。

そんなことに頭を捻らせてた時だ。

「……ッ!?!」

突然階段の前でデュノアが俺の腕を引き、物陰に俺を押し込むようにしてくる。

これは……いわゆる壁ドンってやつだな。俺の方がでかいからちよつとおかしいが。

「静かに。尾行者が何人居るね。どうにもキミを監視してるみたいだけど、どうする？ キミが望むならボクは全力で彼らを追い払うよ」

あ、ク^ァラ^ィス^ィの女^ツ子^ら共^め……。なに尾行対象に悟られてるんだよ。警戒されたら男バレの確率があがつちまうだろ。

……。しかし、なんだろうなこの違和感……。

俺の足は今デュノアの脚の間に挟まれてるんだが、なんだか腿に当たる感触が乏しいのだ。

「や、止めて下さい……。乱暴は苦手で……。」

しかし、俺がやんわりと逃げる方向へ話を進めようとしたときだ。

「うおおおっ!?! シャルルあぶねえッ!」

「え……。？ ギゅむっ!」

上から大量の段ボール箱と共に大柄な男子、一夏が降ってきて、目の前のデュノアを押し潰したのだ。

いきなりの出来事に目をパチクリさせる俺。

取り敢えずピクリともしない二人を見てみると、見事に二人ともデカイたんこぶをこしらえてやがる。当分目はさまさないだろう。

……。あれ、これって逃げるチャンスか？

俺を監視する女子はデュノアの機転により完全に撒いたみたいだし、目の前の二人はこうだ。

完全に逃げろという神様の思し召し。感謝するぜ神様!

俺は逃亡を図る前に場の片付けはしておくことにした。

ばら蒔かれた書類は元の箱に戻し、ちゃんと箱も重ねておく。

気絶してる二人に関しては、なんかムカつくからこの学園にも数割

の割合で存在している腐ってる連中の餌になってもらうため、階段脇の暗がり重ねておいておこう。

そう思つて、一夏を運んだあと、デュノアの胴体を掴んだときだ。
むにゅ

……ん？

なんだよ今の効果音。いや擬音。

明らかにコイツデュノアの胸から鳴つたが……。

不思議な音のなる胸ですね。と数回手を動かしてみる。

「……………あ……………はう……………」

「!？」

ズザザつと飛び退く。

デュノアが明らかに普通じゃない息を漏らしたところで全てを察した。

あの腿にあたる感触に感じた違和感の正体にも！

コイツ、シャルル・デュノアは……………女だ。

そう悟つた瞬間、床に寝そべるデュノアの赤らんだ顔がとてつもなく色っぽく感じられてきて、きつきの桃色の吐息と相まって、俺の鼓動は急速に激しさを増していく。

ヤバい、ヤバい、ヤバい！ 女と意識した瞬間からこれかよ！

段々と視野が狭まってきて、胸が痛いほどに脈打つ。

これは……………あれだ。

Bシステムが恐らくデュノアの持つISコアに反応してトリガーに登録しようとしてるんだ……………！

うずくまり懸命に落ち着こうとするが、必死になつて落ち着くなんてできるはずもなく、Bシステムが発ど……………。

「……………そこにいるのは『お兄ちゃん』ではありませんか？」

「!？」

突如俺を『兄』と呼ぶ存在が現れたことで俺の心臓は文字通り凍りついた。

ギギギとはだしのゲンのような効果音を上げて俺の首が回る。

「そのお顔……………やはりもう一人の男子とは『お兄ちゃん』のことだつ

たのですかっ」

「……俺の女装したときの顔を見分けられる人種は二つある。

一つはこの学園の生徒、及び教員。

そしてもう一つは……」。

「お久しぶりです柊『お兄ちゃん』。ラウラ・ボーデヴィツヒ、今日付
けでI S学園に転入となりました。つきましては、現在柊『お兄ちゃん』
は軍を退役した身でありますので、『お兄ちゃん』などという無礼
な敬称でお呼びすることを、お許しください」

ビシイつと直立不動の敬礼を決める銀髪の欧州美少女、特にドイツ
軍なんかには籍を置いてる奴なんかは結構見分けるかもな……。

一夏とデユノアを階段の脇に放り込んだあと、ラウラと改めて向き
合った。

「……久しぶりだな。ラウラ少佐……。いや、今はラウラ隊
長と呼んだ方が良いか？」

ついに見つかったか……。

俺は心の中で頭を抱えた。

「いえ、先ほど教官に「ここは学校だ」とご指導を賜ったので、柊『お
兄ちゃん』は私のことを呼び捨てでお願いします」

おう、そうか。

俺が二人めの転校生と聞いて異様に落ち込んだ理由。

それは……。

「これでまた二人で行動できません、柊『お兄ちゃん』」

こいつ……ラウラは口調こそ軍人のそれだが、俺にだけちよつと
おかしな敬礼をつける変なヤツだから、だ。

……因みに、俺には妹なんて居ないんで、ちよつとそつうい
うのは困ります。

方針。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍に所属する最年少女性士官だ。階級は少佐。

俺はIS学園に入学する前、ドイツ軍で術後のリハビリをこなして、当時組まされていたパートナーがラウラだった。

出会ってから俺たちは幾度となく任務を共に経験し、信頼が出来上がるまでにはなっていたと思う。

だが、そんな俺たちにも一つだけ合わない点があった。それは……。

「ところで、なぜそのような懐かしい装いをしておられるのですか柊『お兄ちゃん』」

そう、何故かは分からんがラウラはいつの間にか俺のことを兄と呼び始めたのだ。

本人にワケを聞いても、自分でも理解していない。ガイヤがそう囁いたのです……、という曖昧な返答をされたので、放っておいたが、やっぱりおかしいだろ。

「……ラウラ、いい加減兄と呼ぶのはやめないか？ 俺はお前の兄貴じゃない」

「はっ……？ では一体どうお呼びすれば……？」

俺の質問が意外だったのか、オロオロしはじめるラウラ。幾度となく目にした珍しくもない光景だ。

そして、こう言うときは決まって……。

「……では、兄様……とお呼びするのはどうでしょうか？」

——本質はそのままに、呼び方だけ変えられるのだ。

「はあ、とりあえずそれも却下な。どうしてもって言うなら『兄さん』が妥協点だ。それより……」

ため息を吐きつつ、かつらをとる。

今俺達は寮の裏手にある噴水広場に移動しており、人に聞かせられないような話でも出来る状況にある。

改めて、「柊兄さん……兄さん……」とぶつぶつ呟くラウラと向

き合う。

「一体何しに来たんだラウラ？」

「……織斑一夏を倒すためです」

尋ねると、一瞬の間のあと、ラウラが答えた。

目の前の眼帯少女は、なぜか昔から一夏のことを毛嫌いしている節があった。

千冬さんが楽しそうに一夏の話に向こうでしてたときも、一人不機嫌そうな顔していた。

理由を聞こうと、夜の宿所を訪ねた際には、一心不乱に『一夏』とドイツ語で書かれた藁人形相手にスパリングをするラウラを目撃してしまったのでその場でUターンして自分の宿所に戻ったこともある。

「またそれか……。一体なんでそんなに嫌ってるんだよ？ だいたい顔知ってるのかよ？」

「……あの男と同じクラスになったので……」

と、不機嫌そうに頬を膨らませるラウラ。

同じ部隊だった隊員達には見せられんな。ラウラの威厳を損なう。

「倒すためだかなんだか知らんがな、あんまり派手にやり過ぎるなよ？ 校舎なんか壊したりしたら千冬三宮拳骨部屋行きだぞ」

取り敢えず忠告だけはしておいてやろうと思ひ、最低限覚えておく必要がある事柄を簡潔に伝えると、ラウラは……。

「きよ、教官の……拳骨部屋……！」

と、一瞬のうちに背後が花で彩られるほどの幸せな表情になった。

なに？ お前ちよつと見ない内にへんな属性身に付けたんじや無いだろうな？

その後、ラウラの部屋だとか、起床時間だとか、食事の時間だとか、ラウラは俺に合わせて行動するとか言い出したが、そこまで来ると鬱陶しいを越えて、俺が拳骨を繰り出しそうなので自由にしろと言うと、ラウラは一礼して去っていった。

……あの赤い右手の甲……。

既に一発食らったのかもな、一夏。

時刻は既に9時を回った。食堂がオーダーを締め切る時間だ。今行っても夕食は食べられないだろう。

だが、腹は空いている。このまま一夜を過ごすなんてムリだ。夜中に鈴に蹴り転がされかねない。

(つつても、今空いているのは校門外のコンビニしか……)

俺はあることを思いつき、件のコンビニへと足を向けた。

@

寮からコンビニの往復は意外に時間が掛かった。もう九時半だ。

二年生の寮官である大倭先生に見つからないように一階廊下の窓から侵入後、自室へと向かう。

やっとの思いでたどり着き、コンビニから持ち帰った白いビニール袋の中身を確認する。

(玉ねぎに、人参。ビーマンに豚ロース。そしてパイナップル、と……)

にしても最近のコンビニってスゲーな。野菜でも売ってんのかよ。流石はプラスなだけはあるぜ……。

意気揚々とドアノブに手をかけ、一気に開く!

「どおおおおおこおおお行ってたのよ!! バカ!」

般若の鈴がお出迎えしてくれた。

おっと、帰ってきて早々にバカ呼ばわりかよ。

まあ、仕方ないか。門限思いつきり過ぎてるし……。

「あんたが帰ってこないからご飯食べそびれちゃったじゃない! せめて門限には帰ってきなさいよ……ん? なによその袋? はっ、まさか弁当!?!」

袋の存在に気づいた鈴は、内容物を確認しようと袋に手を伸ばしてくる。

俺はそんな鈴をかわして、キッチンに内容物を並べた。

「……酢豚、作ってくれよ」

「……はあ?」

鈴が意外そうな、とても不服そうな声を出した。

「……………つたく、なんでアタシがこんなことを……………」

「いいだろ別に。酢豚食わせてくれるって言っただろ」

「あつ、あれはあの時のノリっていうか……………その……………」

帰宅直後の一幕が終わり、俺達の部屋には甘酸っぱい中華の王道、酢豚の香りが充満していた。

今夜のシェフ……………いや、中国的には厨子^{チュジ}か？

……………とにかく、作り手である鈴は現在部屋にある簡易型キッチンで思いつきフライパンを振るっていた。

因みにパイナップルは「アタシの好みじゃない」ということで一蹴されてしまった。旨いのに……………パイソ。

調理開始からジャスト20分。

部屋の小さいテーブルの上に、こんもりと盛られた酢豚が置かれた。

「……………なんか多くないか？」

「どっかのバカがちゃんと量を計って買って買ってくればこんなことにはならなかったかもねっ！」

投げつけられた箸を右手でキャッチする。

まあ、せっかく作ってくれたのだ。感謝を捧げて頂くのではないか……………食材と生産者に対してのみ。

「ちよつと、あたしにも感謝をなささいよ。まったく、誰のために磨いた腕なんだか……………」

「だったら今度一夏に振る舞ってやれよ。アイツ喜ぶだろ」

言いながら、早速箸をつける。

出来立ての酢豚はマジで旨そうだ。

とろみのついた赤いあんにくるまれた豚肉がなんとも言えない芳醇な香りを放つ。

「それじゃあ、頂きます……………」

「ん、どぞー」

鈴の適当な返事を聞きながら俺はその豚肉を頬張った。
……旨い。

トマトケチャップのうらに隠されたショウガ汁の風味が程よい所で後味を打ち切らせ、次の一口へと食べる者を誘う……。ちよつとしたマジックだな。

「……ど、どうなのよ？」

俺の食べる様子に鈴は興味津々だ。

俺はその期待に答えるべく、食事中なので口ではなく、サムズアップで答えた。

途端に鈴の緊張した面持ちも消え去り、ようやく鈴も箸を浸けた。

「それでさ、何してたのよ。こんな時間まで？」

「まあ、昔の知り合いに会ってたんだよ」

流星に妹と紹介するのは変だったので適当に濁す。

「ふーん……。まあ良いけど」

あ、これは隠し事してるのバレてるな。

野生児並みだからなこいつの直感。調味料も適当な感じで入れたし。

鈴は自分の分を食べ終わると、改まって会話の口火を切った。

「クレハ。この間見せた中国の調査書は覚えてる？」

「んあ？ ああ、あれだろ。国家機密とかで閲覧許可出るまで数日掛かったヤツ」

よく覚えてるぞ。役人仕事しろー！ とかって三日間ほど鈴が荒れ狂ったアレだ。

「そのなかで気になる情報が有ったわよね？ 『双龍が関わったIS事件』の項目よ。アタシのお父さんもその項目に被害者として記されているし、関わった人間全てがわかっている範囲で記されているわ。その中の……」

鈴は結晶型端末を取り出して、甲龍にセット。ホロウインドウが開き、実際の書類が表示された。

「……『双龍の設計思想』……。いや、これはあれだろ？ 双龍が二年前から活動を始めたとかっていう調査結果を元にして、双龍が

普通の I S メーカーの暗部なんじゃないかっていう予想で考えられた報告書……だっけか？」

「その通りよ。二年前といたら各国が第三世代機の開発に着手し始めた時よ。I S のデータを集めるために暗躍してらるって話もあるけれど、今はこれ。目の前にあるものが先決よ」

「なんだよ目の前にあるものって……ん？」

資料を改めて見直していると、一番下に気になる情報が記載されていた。

『中国国内から I S 技術が不正にドイツに受け渡されたという情報もあり、現在は国内の調査とドイツへの調査許可を申請中。なお、それらの技術が組み込まれたと見られる、研究及び製作が禁じられているシステム、『V T システム』を積んだとみられる I S は以下の機体である。』

そこに記されていた I S、それは……。

「ドイツ軍所属、シユヴァルツェ・ハーゼ保持機体。『シユヴァルツェ・レーゲン』。通称『黒ノ雨』……。搭乗者、ラウラ・ボーデヴィツヒ……。」

これって……ラウラの機体じゃねーか!!

驚愕する俺に、鈴は重々しく口を開く。

「クレハ。例の転校生から…… I S を盗むわよ」

学年別タッグマッチトーナメント、二週間前の出来事であった。

その後の相談の末、作戦決行は学年別タッグマッチトーナメントの開催期間に入る二週間後……その二週間のうちに実行することになった。

もちろん実行するのは鈴かと思いきや、まさかの俺。

いや、男がコソコソ動き回れるわけないだろ。と抗議するも鈴は、「いや、クレハってなんか女子に嫌われてる節あるじゃない？ だから関わりたくないと思って誰も近づいてこないわよきつと」

という俺の古傷を抉る理由でその申し出を却下。晴れて盗みの実行犯は俺と言うことになった。

そして二日後の昼休み。

今朝の経過報告によれば、今日のうちに鈴の用意した俺のサポートメンバーが現れるらしいが、まさか朝からずつというフォルテコイッじやないだろうな？ 絶対失敗するぞ。

「クレハさんなんか最近元気ないっすねえ……なんか知ってるっすか雨さん？」

「う、ううん。最近私も部活で忙しかったから……。こ、今度お弁当作っていかくツちゃん……？」

「あ、ああ。今度頼むわ……とびきりスタミナつくやつを」

授業が終わると速攻で机に突っ伏した俺を心配して、雨がやって来る。

悪いな、心配してくれてるがこの疲労はラウラの行動を探った結果なんだ……。盗みのために。

なお、俺に対象の調査術を覚えてくれたのは第三アリーナの住人、湊ミナトだ。

スナイパーは狙撃対象の動きを予想し的確にそこを突くため、対象の行動を調べる能力が総じて高い。

今回の一件に挑むにあたって俺は湊に先生役を頼んだわけだ。

（素直に教えてくれたのは良かったが、タイトスカートで目の前をうるちよろされるのは如何なものかと思うぜ……）

そんなわけで疲れているところを二人に心配された俺は昼のエネルギーを求めて売店へ立つ。

「あ、ちよつと待つてクツちゃん・・・！」

しかし、扉を開いたところで雨に呼び止められる。

袖を軽く握って絶対に逃がさないの構えだ。

「どうしたんだよ雨？ 早くいかないとサンドウィッチ売り切れ
る・・・」

食堂とは別にある売店のサンドウィッチと言えば、この学校に俺
と男子が来る前からある人気商品で、俺が入学してからは男子にあ
わせてポリウムアップされたとても食べごたえのあるサンドウィ
ッチとなっている。

元々訓練などでカロリーを消費しやすい環境に居るため、女子たち
もポリウムアップには文句が無かったのだろう。

俺は最近金欠ぎみなため、食堂よりも売店を利用する比率が多
くなっている。

しかし雨はそんなに人気のある商品を買いにいく俺を呼び止めた
のだ。

少し恥ずかしそうでモジモジしているが、俺は急いでいる。

それならばそれに見会っただけの理由を聞かせてもらおうか！

「えっと・・・私のお弁当・・・一緒に食べる？」

「オーケーだ雨。是非ご相伴に預かろう」

瞬時に手のひらを返す。怒りやすい鈴をかわすために最近身につ
けたパッシブスキルだ。

遠くでフォルテが「うわ、ダメ男っす・・・」とか言ってる気がす
るが、まあ気のせいだろう。

久しぶりの雨のメシにウキウキ顔で席についた俺はガキのような
テンションで雨の弁当を待った。

・・・やっぱり雨だから和食だろうか？ いや、最近鈴という中華
の要素も入ってきたし、雨のテンションによつては中華にてを出して
いてもおかしくはない・・・。もしそうなら雨の酢豚が食えるぞ・・・
！

だが、その瞬間だった。

「・・・なっ!？」

何者かが俺の腕を引つ張ったのだ。

突然の出来事に、腕を引いた人間を目視で確認する。

その人物とは綺麗なブロンドの髪を、サラ・ウエルキンとは違い毛先にロールをかけていて、常に高圧的に佇んでいる下級生……つて。

「せ、セシリア!？」

「鈴さんから依頼は受けましたわ。是非ともご協力させてくださいましクレハさん？」

な、なんか怒ってるセシリアがソコには居た。

額には青い血管を浮かべていて、口許はひくひくとつり上がっている。

え？　なんで怒ってるんだコイツ？

「クツちゃんお待たせく……つてオルコツトさん？　ど、どうしたんですか……?？」

ああ、雨の言葉が尻すぼみになっていく……。

フォルテは参加するより観戦する方を選んだのか遠巻きに俺たちの様子を眺めている。あの野郎！

「先輩方。失礼ですがクレハさんをお借りしても？　大事なお話が御

座いますの」

「えっ、で、でもクツちゃんとお昼……」

「お借りしても?？」

「どうぞ……」

よっわ！　雨弱い！

下級生なんだからもうちよつと粘つても良いだろ！

「それではクレハさん。行きますわよ?？」

「え、でも弁当を……」

何とかメシにありつこうと雨の弁当に手を伸ばす。こういうところ俺はがめついよな。

「それでしたら心配は要りませんわ。私がバスケットを用意してきましたの」

そう言つてピクニックにでも行くようなバスケットを掲げるセシ

リア。

するとそれをみた雨が自分も、と持ってきた袋の中を探し始めた。そうして取り出される小さくカラフルな容器。女子が使うにしては中々スタイリッシュなデザインだ。

「こ、これ。クツちゃんの好きなの詰めたから……一緒に食べてね」
「あ、ああ。ありがとな……っておい！ そんな強く手え引つ張んなって！」

こうして俺は教室から強奪されたのだった……。

@

歩く通路から予想するに、セシリアはどうやら屋上に向かっていている様だった。

途中で恥ずかしくなったのか手は放してくれたが、依然として態度はちよつと不機嫌だった。

「なあ、なんでそんなイラついてるんだよ？」

「……ふん」

問いかけるが、セシリアは無視を決め込んでくる。

先輩を無視するとは良い度胸だなコイツも……。

しかし、チラチラとこちらの様子を窺っている辺りから察するに、なんで怒っているのか自分でも分かってない感じだな。

その理由を俺が考える謂れはないし、元来女子という生き物は定期的にイライラする生き物らしいし、俺には理解できない領域なので、俺は考えることを放棄したのだった。

屋上に出ると六月らしく初夏の日差しが俺たちを照り付け、暑かったので俺はブレザーを脱いだ。

セシリアは英国貴族のプライドがどうかで脱ごうとはしないが見るからに暑そうだぞ。

備え付けのベンチに座り、取り敢えず弁当を広げる。

今さらな確認だが、鈴が依頼したサポートメンバーとはセシリアの事でまちがいなさそうだ。

どう言いくるんだかは知らんが、教室に現れたときの口ぶりから察するに結構協力的みたいだ。セシリアは優等生らしいし、期待できる

な。

「しかし、意外でしたわ。クレハさんにそんな趣味がありましたなんて……」

「は？ 趣味が？」

おい鈴。お前何て言っつてコイツを引き込んだんだよ？

尋ねたいが、此方も本当の事を言わないといけなくなるので自分からは尋ねられない。

ヤキモキしているとセシリアは更に不機嫌な様子で唇を尖らせた。

「見ず知らずの女の子の私物が欲しいだなんて、悪趣味にもほどがありますわよ……」

……窓際のベッド、使用不可能にしてやろうかな。

つて、そんな報復活動なんて考えている場合じゃない。気になることは山ほどあるが、今は話を合わせる時だ！

「あ、ああ。ちよつと妹がな……。大体ドン引くならなんでこんな依頼を受けたんだよ？ 鈴からの報酬か？」

話を反らすために、セシリアが依頼を受けた理由に話題を変えるが、俺がそう尋ねるとセシリアはいきなりビクツと飛び上がり、ダラダラ汗をかき始めた。

表情は「墓穴を掘りましたわ……」って顔をしてやがる。

「おいおい、一体どんな報酬を貰うんだよ？ ちよつと聞かせろよ」

興味がわいたので更に追及するが、セシリアは答えられないのか首をふるばかりだ。

……いや、小声でなにか呟いたぞ？

えーと？ 「しゃ、シャシンダナンテ、イエマセンワア……」？

写真？ 確か鈴は中国でモデル活動もしてたと思うが、そんな写真が欲しかったのかセシリアは。

「なんだよ。写真で良いなら幾らでもやるから。協力は惜しまないでくれよ？」

「……！ それは本当ですのっ!？」

うおっ、目がキラキラしたセシリアが突然顔を近づけてきたので思わず仰け反る。

その拍子に風に乗ってきたセシリアの甘ったるい体臭が強く感じられたうえ、流石は欧州人といったサイズの胸が大きく弾んだので、目線も反らしていなかったら危うく一ヶ月前の二の舞になるところだった……。

にしても、なんで女子ってそんなに甘いにおいがすんの？ 不思議。

それにしてもこの反応……。よっぽど有名らしいな鈴って……。
「そ、それではクレハさん……。どうぞご賞味下さいませ」

話が一段落着いたので、昼食に移ることにした俺たちは止めていた手を再び動かす。

セシリアの様子を窺うと、さつきとはうってかわって上機嫌なようだった。鼻唄まで聞こえてきそうだけ。今回だけは鈴に感謝しとこー。

セシリアが差し出したのは普通のタマゴサンド。

普通の食パンに、普通の卵サラダを挟んだ普通のものだ。

——だが。

「ありがとなセシリア……。それじゃいただきまあ——
フツ」

次の瞬間。俺はウエルクさんと再開していた。

ああ、向こう側が見える……。

目が覚めたのは夕刻の保健室。食中毒だったらしい。

大惨事、世界『対戦』勃発。

「まったく、だらしないわね。一体何に当たったって言うのよ？」
「いや・・・それが分かるなら俺にも教えて欲しいんだが・・・」

今回で二度目となる保健室での鈴との会話。

セシリアのサンドイッチを食べて気を失った俺を心配して見に来てくれたようだが、本人に確認しても「だっ、誰があんたの心配なんかするのよ！ あれよあれ！ 未知の病原菌とかだったりしたらイヤだから見に来たのよ！」・・・とのコトだったが、「病原菌とかって予想がついてるならホイホイ来んじゃねーよ。バカなのか？」と言うと、その健康的なおみ足で首4の字固めを喰らったので大人しく様子を見に来た、ってことにしておいた。

「・・・で、どう？ セシリアとは上手くやれそうなの？」

「どうって聞かれてもだな・・・。本当の目的を伝えてない以上どこかでボロが出るかもしれん。よっぽど上手く計画しないと誤魔化しきれないぞ」

今はセシリアに嘘の依頼を出して騙している状態だ。いずれ本当の目的がバレて計画自体が頓挫する可能性もある。

「それに関しては大丈夫よ。あたしの依頼ってことには顔をしかめたけど、報酬の話をするとき直ぐ様乗ってきたわ」

「報酬・・・？ ああ、写真の件か・・・」

鈴のモデル写真だったか？ セシリアも物好きだな。

「なあ、どんな写真渡すんだよ？ ちょっと見せろ」

そうお願いすると鈴はキョトンとした。

「何だよその反応。別にいいだろ。どんな写真かくらい知ってたって」

「え、ええそうね…。確かに知ってた方が良くいかも知れないわね・・・」
そういうと鈴はなぜか吹き出る汗を拭いながら、震える手で端末を差し出してきた。

「・・・変な奴だな。どいつもこいつも」

表示されていた写真を見ると何故か俺の写真（寝顔&着替え）が映

し出されていたので、フリック操作で写真を切り替える。

なんか変な悪寒が背筋を襲ったが、サンドイッチに当たったせいだろう。気のせいだ。

数回画面を擦ると、様々な衣装を身に纏った鈴の姿が映し出された。

明るいパーカー姿に残念な水着姿、華やかなドレスに残念なチャイナ服。

……総評、残念です。どこがとは言わんけど。

「ん、まあ良く撮れてるとお……ってなんでそんな部屋の片隅に？」
画面から顔をあげるとそこに鈴の姿はなく、保健室の片隅に震えている鈴を見つけた。

俺の声に反応してか、そつと顔をあげて俺を見る鈴。その瞳には「ヤバイ！ 怒られる！」と、「ヤバイ！ 見られた！」という2つの怯えの色が見えた。何でだよ。

「ほら、これならセシリアも満足してくれるだろ。本人もやる気満々だったみたいだしな。こつちが詰めを誤らなきゃ問題ないかもだな」
ポンと端末を投げ渡す。

キヤッチした鈴は俺の顔と端末を交互に見てから「あ、良いんだ！」と安心した面持ちになった。

報酬の件が解決したので俺は話を次に進めることにした。

「…それで、これからの事だが、やっぱり盗るのはラウラの自室でだな。あいつ、何でか知らんが常に気を張ってやがる。普通に挑んでも返り討ちだ」

ここ二、三日で調査した結果から言わせてもらおうと、ラウラは現在昼間の間は常に張り詰めた空気を纏っていて誰も寄せ付けないオーラを放っている。元、相棒として心配になるレベルだ。

「だつたらどうやって忍び込むのよ。窓は強化ガラスだし、部屋のセキユリティは堅牢。真つ当な手段じゃ入れっこないわよ」

「いいや、入れる」

鈴は俺の提案を不可能だと切り捨てるが、その不可能を可能にするかも知れない真つ当じゃない手段が今の俺にはあるのだ。

「作戦決行は明日の放課後だ。俺が呼んだらセシリアを連れて集合しろ」

くくく、奴隷のように扱われる恐怖をアイツにも味わってもらおうかな。

@

翌日の放課後。寮内を歩く俺の回りには三人の女子がいた。

いや、うち一人は男子のふりをしている女子、と言った方がいいだろうな。

「ええとどうしていらっしやるのですかデュノアさん?」

予想外の登場人物に頬をひきつらせるセシリア。鈴木もよく飲み込めて居ないようだったので二人は顔を見合わせるだけだ。

「いやあ、同じ男の子の操縦者でもありますし、同じクラスのみんなどは仲良くなりたいですからね」

いや、嘘だろ。同じ男子ってことも嘘だが、もうひとつ嘘が潜んでいる。そんな印象を俺はデュノアの笑顔から受け取った。

そう、この場にデュノアを呼んだのは何を隠そうこの俺だ。

(ちよつと! どうするのよこれ!? ていうか一夏と一緒なんじゃなかったの!? 説明しなさいよクレハ!)

(分かりませんわ! これからクレハさんが女体に興味を抱かれる大切な儀式だというのに、他の殿方がいては邪魔になりますわ! 説明を求めますクレハさん!)

(ちよつと、おいセシリア……まあいいや。二人とも俺に任せろ)

(任せろって……どうするつもりなのよ? どうしてデュノアなんかをつれて……!)

ボソボソと前を歩く三人で打ち合わせをすると、俺は立ち止まりデュノアと向かい合う。

デュノアがビクツと驚いたように立ち止まると、あとの二人はその隙にさっさと歩き出した。

「えーっと、いったいどうしたんですか? 柊先輩……?」

今回デュノアを引き抜いてくるに当たって、こちらの事情は一切説明していない。一夏にもだ。

だから初対面である俺の言葉に従ってここまで来るなんて、警戒心足りないんじゃないの？

(でもまあ、仕方ないか)

困惑するデュノアをよそに俺は目の前のデュノアの両肩をガシツと掴んだ。

「ヒヤツ」と女っぽい声をデュノアはあげたが、触れても落ち着いているところを見るに、俺はまだコイツを女として意識していないようだ。行けるぞこの調子なら。

「え、ええと・・・柊先輩？」

俺は一ヶ月前にセシリアにやったよう、そのまま平静を保ってデュノアの耳元に顔を寄せる。

人気がなくたって良かったぜ。見られたら俺の悪名がさらに悪化してた。

俺の意外な行動にデュノアは顔を赤くして体を硬直させた。かすかにだが掴んだ肩も震えている。

そんなデュノアにたいして俺はこう呟いた。

「——あんまり女子っぽい声出すなよ。バレるぜ」
「!？」

その瞬間デュノアは俺の両手からするりと逃れ、2ステップで俺との距離を空けた。

「・・・なんだよ。折角忠告してやったのに。先輩からの言葉は素直に受け取っておくもんだぜ」

「・・・一体いつから気付いていらしたのですか？」

デュノアの手がカギツメのような形になる。

隙あらば消す。

そんな殺気がデュノアから飛んできた。

「別に。いつでもいいだろそんなことは。へタな変装をするそっちの落ち度だ」

俺がそこを言及するとデュノアは言葉に困ったのか下唇を噛み締

める。

「……それで本題だ。誘ったのは此方なんだが……何が目的で大人しく付いてきたんだ？」

問題はソコだ。変装してここに潜り込んでくるのはいい。企業の広告塔だとかただの目たちたがりやか、はたまた誰かに強制されたのか。幾らでも理由は思い付く。

だが、今日なぜ俺たちに大人しく着いてきたのかそこが分からない。

誘いを快諾してくれたときから裏があるとは思ってたが、いよいよ核に迫ってきたな。

デユノアは言い訳を巡らそうとして、考えるそぶりを見せたが俺が簡単には納得しそうにないと思っただのか、諦めたようだ。

仲良くなるため？ 理由にしちやあまりにもお粗末すぎるぜ。男装女子さんよ。

「それを言えばこの場は見逃して下さるのですか？」

「……前にも性別を偽って入ってきたやつがいてな、ソイツは変装がバレてから数日間奴隷のように扱われたらしいぜ」

「……すいません、話が見えないのですが……」

ああ、あの日々は本当にツラかったぜサラ……！

「要するにだな、黙っておいてやるからちよつと無理なお願いくらい聞いてくれってことだよ」

これが俺の考え付いた真つ当じゃない手段だ。

聞くところによると、デユノアの得意分野は銃撃を用いた近接戦バックヤードに、防御を務める後衛だ。

だが、それだけじゃない。

フォルテたち新聞部の情報網と調査能力をもつてして暴いた更なるデユノアの特技。それはというと……。

「……デユノア、得意なんだってな。電子解析——電子戦」

「!? ど、どこでそれを!？」

デユノアが取り乱す。よし、動揺を誘えばこっちが有利に話を進められる。

「それもこの際どうでもいい話だろ。動揺したところを見るに嘘じゃないみたいだな。どのくらい出来るんだ？」

「……っ、ISのプロテクトを外す位です……。でもこんなこと一体……」

「……おいおい。ISのプロテクトを外すって……」

それって操縦者の意向無しに無理やりエネルギーパスを開けるって事だぞ。

そんな技量をこんなことって……各国の技術者が泣くぞ。

「合格だ。黙ってやるからちよつと手伝ってくれ」

「……は？」

振りかえって歩き出した俺の背中に間の抜けた声が掛けられる。

「別になんどここにいるかなんて言わなくていいよ。代わりにちよつと突破してほしいシステムがあるんだ」

「ハッキング……?」

いまだ呆然とするデュノアに懐から取り出したホログラフキーボードの投影気を投げ渡す。

「盗みの片棒を担げってことだ」

@

「……流石はIS学園って所だね。暗号化の複雑さが半端じゃないよ」

件のラウラの自室前。

俺と鈴はデュノアの操る数字の奔流に目をくらくらさせていた。

なお、セシリアはその高精度なレーダーを部分展開させて、周囲の警戒に当たらせている。

いきなり本人登場とか笑えんからな。

「……ん、解析終了。開ける？ クレハ？」

「あ？ ああ。そうだな……。確認しとくか」

それと、なぜかデュノアが俺にたいして敬語を使わなくなった。

どうやらさつき脅迫まがいのことをしたせいで完全に敬う対象から外されたらしい。

デュノアが再度キーを叩くとそれぞれのカードキーに設定されて

いるのであろう32ケタの数字が弾き出され部屋のロックが解除された。

「……入るの?」

デュノアが聞いてくる。

「いや、今は入らん。ラウラが居ないと意味がない。デュノアは解析した暗証番号をメモっておいてくれ」

「了解したよ。……そういえばなんでクレハってボーデヴィツヒさんのことラウラってファーストネームで呼んでるの? もしかして親しかったりするの?」

デュノアの問いかけに、後ろの女子二人がピクツと反応する。

「そういえばそうねえ……。なんで気のおけない相手みたいな感じで喋ってるのかと思ってたけど、知り合いだったのか。そっか」

「うふっふ。クレハさん? ちょっと説明していただいても構いませんこと?」

「おい、ちよつと待て二人とも。こんなところで喧嘩してる場合じゃ……」

「何をしているのですか、柊お兄ちゃん?」

ピククウツ×⁴

お、恐れていたご本人の登場だ……!

「よ、よおラウラ。偶然だな! 俺はちよつとたまたま通りかかっただけで怪しいことは何もブフツ!」

鈴に殴られ強制的に止められる。

「……貴様。私の上官に手をあげるとは……見逃すことは出来んぞ」

俺を殴った鈴をラウラが刃物のような目で睨む。

鈴は気圧されるように後ずさった。

「^{イギリス}老国と、^{フランス}蛙顔の国……。ん? よく見れば中国人。貴様は柊お兄ちゃんと相部屋だったな。ちようどいい。柊お兄ちゃんは今日から私と相部屋だ。話は後日教官にも通すが、まあ構わんだろう。柊お兄ちゃんは荷物を纏めておいてください。私が運びますので」

「ちよちよちよちよ、ちよつと待ちなさいよ！ 相部屋？ 変更？
認めないわよ！」

数瞬遅れて事態を把握した鈴が咄嗟に流れを打ち切る。

しかしラウラは流れを切られたことに更に苛立ったらしく、靴先を
ぺしぺしならし始めた。

「別に貴様の意見は聞いてはいない。先程の柗お兄ちゃんに対する暴
力行為だけで部屋割りを変更するには十分すぎる材料だろう。それ
とも何か？ 貴様がここで柗お兄ちゃんの靴でも舐めて謝れば考え
んでもないがな」

う、うわあ……相当イラついてるぞラウラのやつ……。
デユノアが「きつときつきの一夏の態度がキテるんだね……。」
とか呟いてるけど、なに？ 一夏がラウラをイラつかせたのか？ 面
倒な。

鈴はというと、さつきから俺を見たりラウラを見たり、現実から逃
れるようにラウラのISを探そうとしている。

「だ、誰がこいつの靴なんか……！ 靴なん……か……ッ
！」

……とか言いながら視線が足元に向いているのはなんでなんです
かね鈴さん!?

悔しそうに目に涙を溜めて、俺にかしづくように膝をつく鈴。なん
なんだよ、なんなんだよ一体！

悔しさに歪む鈴の顔はどこか切なく、どこか男の征服欲をそそる色
香を漂わせる。

そんな鈴を面白そうに眺めていたラウラは、鈴が段々と従順になっ
ていくにつれ焦ったような顔を始める。

鈴が最後の確認をするように俺の顔を下から見上げてくる。

いつの間にか四つん這いになった鈴を上から眺めさせられるよう
な形になっていた俺は――。

「――鈴、止めろ」

「！」

危うく正気を失いかけていた鈴の顎をとり、上にあげること正気

を取り戻させる。

視界の端には久しぶりに見た『Bシステム発動』の文字。

そしてデユノアにやったように耳元で小さく囁く。聞かれるのはまずい内容だからだ。

「鈴、お前の目的を良く思い出せ。今回の目的は俺じゃないだろ？」

「んなっ！　だ、誰があんたなんかを！」

「そうだ、それでいい。目的は俺じゃなくてあくまでもラウラだ。鈴が負けない限り俺は鈴のパートナーであり続ける」

「……！」

「目の前にあるのは双龍へと繋がる道を塞ぐ壁だ。どんな形であれ乗り越えないと次へは行けないぞ鈴」

「そう……りゆう……」

「そうだ、いいぞ鈴。段々と光が戻ってきた！」

「戦って、勝って、手がかりを掴む！　ボーデヴィツヒ！　あたしと勝負よー！」

立ち上がった鈴はラウラに向かって堂々と宣言する。

「ほお……数だけが取り柄の国がこの私に挑むか……。良いだろう。その二人はどうする？」

「いや、ボクは遠慮しておくよ。あんまり関係なさそうだしね」と、デユノア。

「でしたら、わたくしは参戦させて頂きますわ。我が祖国英国をバカにした罪。その代償を支払っていただきませんと」

「といって、鈴と並び立つセシリア。その顔はラウラに負けず劣らず怒っている。

「勝負の時間は明日のこの時間。第三アリーナで行う。そっちは二カ国同時に掛かってこい。強国ドイッが相手をしてやる」

「言ってくれるじゃない……。負けたときの言い訳にしても惨めなだけよ？」

「そっちこそ、たった一人に負けて生き恥を晒さないように気を付けろ」

三人の間にバチバチと火花が散る。

えーつと、つまりなんだ。
侵入して盗む作戦は失敗したっぽい。

千冬の本心

翌日の放課後、俺は千冬さんに呼び出されて地下のIS格納庫へと向かった。

今日はラウラ、鈴、セシリアによる模擬戦が行われるので急いでアリーナに向かいたいところだが、千冬さんの呼び出しをブツチすると出席簿が何処からともなく飛来する可能性があるので大人しく従うことにした。

……いくらなんでも代表候補生二人にラウラが勝つとは思えんが、そうなるならラウラが心配なので早めに用事は切り上げてもらう。

そんなことを考えながら、秘密基地然とした地下通路を薄暗い明かりの中歩く。ここら辺は湊の住んでる第三アリーナにちよつと似てるな。

数ある部屋の中に一つだけ使用中のランプが灯った部屋があるので、事前に渡された認証パスをかざしてロックを解除する。

プシュツという音と共に空気エアが抜け、スライドドアが開く。

「来たか、柊」

「二分の遅刻ですよ柊君」

そこにいたのは千冬さんと……山田先生？

室内は通路より更に暗く、少ない明かりと山田先生の操作するディスプレイの明かりが僅かな光源だ。

そしてその数少ない明かりは、台に寝かされたあるものに当てられていて、それらを千冬さんは険しい顔で見つめている。

「……無人機の残骸……ですか」

「ああそうだ。お前が四月に破壊した一機と、織斑が破壊した一機。どちらもコアが破壊されていてマトモな検査ができません。全くバカ者どもが……」

千冬さんの悪態を余所に、俺は山田先生のディスプレイを見る。

「え、えーと、コアは破壊されましたが、僅かながらに得た情報もありました。一つは前々から提唱されていた特殊機構『独立起動』スタンドアローンと、

『独立駆動』の存在の確認。そしてもう一つが……これです」

先生は画面をそのしなやかな指でフリップし、独立起動装置、独立駆動装置の次の画像を目の前の大きなホログラフィーディスプレイに表示させた。

映っているのは幾重にも重ねられた幾何学的な模様。……なんだつけコレ？

「これは……あれですか……。えっとあれですあれ。ふ、ふ、ふ、ふらフラグメントマップ！」

なんとか記憶を呼び覚まし答えると山田先生からは拍手を、千冬さんからは冷ややかな視線を頂いた。精進します。

「フラグメントマップというのはISにとつての遺伝子のようなモノです。ISは個々の能力によってバラバラに進化していくのでそれぞれ違う構造のフラグメントマップが構成されます。なので、同じものは二つと無いのが特徴なんです。ここまですか柊君？」

「え、はい良いですが……。コレがなにか？　なんで俺は呼び出されたんですか山田先生？」

「え、いや分かりませんよ……。織村先生は私にも教えてくれなかったので……」

そういつて指をツンツンさせる山田摩耶、年齢二十数歳。そんなのだから女子高生に囲まれても違和感ないんだよあんたは。

そろそろ呼び出された理由を聞こうと千冬さんの方を見るとすると千冬さんは……

「山田先生、しばらく席を立て貰っても良いですか？　少々込み入った話があるので」

「え？　は、はいわかりましたあ……」

山田先生退場。

プシュツという音を確認すると千冬さんは山田先生が座っていた席に腰を下ろした。

「……この二機のフラグメントマップ、どこかで見たことがあると思うんだが、柊。気付くことは無いか」

「いや、俺は整備科の生徒では無いのでマップの読み方は分からない

んですけど・・・なんとなく嫌な予感はしますね」

そう言うと千冬さんは三回手を叩いた。正解、と言うことだろう。「私も胸騒ぎがしてな、過去に受け取ったマップデータから一致しているもの、または似ているものを探してみたんだ。・・・ああもちろん山田先生の協力を得てだぞ。私もマップはさっぱりわからないのでな」

千冬さんも読めないんだマップ・・・。

と、流石にここまで経緯を説明されたら俺にも薄々言いたいことが分かってくるので、ここからが本題だ、という千冬さんの表情はすぐに読み取れた。

「終、この二機のマップは多少の違いはあるが、瞬龍お前のフラグメントマップの根幹にあるものと同じ形をしているそうだ。そこから導き出される事は——」

「——やはり、双龍が絡んでいる、ということですね」

この予想は前から立っていたが、今回のことで確信に変わったな。無人のISが攻めてきて、そのISの製造元は俺の使ってる双龍製のIS、瞬龍と同じところ。しかも最初の一機は間違いなく瞬龍か甲龍のどちらかを狙っていた。

決定的だ。

二年前に発足し、姿を消した秘密結社、双龍の活動が活発化している。

「最近お前はフアン凰と共に探っているようだがどうだ、何か出たか」

そう聞かれるが、最近あったサラ・ウエルキンについての一連の事件は既に報告しているので何も言うことがない。

強いて言えばラウラのVTシステムが気になるが、確証のとれていない報告をするのは部隊の混乱を招くのでまだしないでおう。

「いいえ、ありません」

「そうか・・・」

そう返事をした千冬さんは、山田先生の飲んでいたコーヒー牛乳のパックを手にとってチューチュー吸い始めた。

甘い・・・飲むですね。

ていうか飲んでる事実を山田先生に知らせたらあの人気絶するぞ。
千冬さんLOVE勢だし。

「・・・私はな、二年前に柊、お前の心臓を撃った」

「・・・また、懐かしい話をしますね」

今でも鮮明に思い出せる。

二年前、千冬さんは瞬龍の制御に失敗して暴走させた俺を殺す、という方法で事態の収束を図った。

言うことを聞かない瞬龍に振り回される俺に狙いを定めた千冬さん。

その顔は覚悟を決めた人のものだった。

今思えば、俺はあの時に死んでおくべきだったのかもな。

「私はISによって失いかけた一夏の命をISで救った・・・。ツ
だがあの時は何もできなかったツ！ お前を殺す他に方法が見つ
けられなかったツ！・・・だが私は覚悟を決めていたよ。ISで人を
助け、ISによって命を奪うことにたいしてな。それを自覚した瞬
間、私はISに乗ることを辞めた。都合のいい道具は時として都合の
悪い道具に様変わりする」

その通りだ。千冬さん。だから俺はISのことを・・・。

「柊、お前はこう言うのを何て言っていたか？ 兵器って呼んでいた
な。全くその通りだよ。降りたからこそ分かる。ISは紛れもない
兵器だ。今はまだいいが、いつアレの弾倉に核弾頭が搭載されるかも
わからない。だから正直なところ、お前たちにこれ以上ISの深みに
嵌まらないでほしいというのが私の願いだ。ISの闇は深い。学生
レベルでスポーツとして楽しむのがこの平和主義の国に合っている
だろう。束と仲が深いお前だ。闇に触れるということがどういうこ
とかも分かるはずだ。だから・・・これ以上進むのは止めてく
れ・・・」

「・・・」

千冬さんの本心に、なんの言葉も出てこない。それほど衝撃的だっ
たのだ。

ISによって数々の名声を得てきた織村千冬がISに関わるなど言うなんて……。

確かに、今の状態を維持すれば安全は保たれる。ウチの教員チームの防衛はこの国よりも堅い。

ISを遊戯として楽しむならこんなに適する場所は他にないだろう。

……だが、鈴の気持ちはどうなる？ 何も知らずに生きているセシリアの人生はどうなる？

俺が奪ったものだ。俺が失わせたものだ。

だから、俺がけりを付けるのは当たり前のことなんだ。

死んでお詫びなんてできない。それは更に大きな穴を開けてしまう結果にもなりかねない。

——だから、俺は……

ガシヨンツ！

「織村先生ッ！ ボーデヴィツヒさんとオルコットさんたちが！」

突如入ってきた山田先生に思考を中断させられ、そちらをみると、大慌てで駆けてきたのか肩で息をする山田先生がいた。

だが……、今何と言ったんだ先生は？

「第三アリーナで戦闘をしています！」

その瞬間、俺は山田先生をすり抜け、部屋を飛び出していた。

その俺に背後から声をかける人物が。

「待て終。ここから地上に上がったのでは時間が掛かりすぎる。」

「じゃあ、どうするっていうんですか……!?!」

タイトスカートで俺に並走するという器用なことを成し遂げた千冬さんが俺に別の方法を提案する。

時計をみると……くそっ30分も遅れちゃった！

「緊急用の地下通路を使う。ISはあるな!?!」

「はい、ありますッ！」

「よし……こっちだ！」

地下に降りる時に使ったエレベーター脇を右折。立ち入り禁止表示を飛び越え、走ると更に通気孔のような広い空間に出た。

「ここはIS学園のある人工浮島のバランスをとる為の貯水場だ。あらゆる場所に繋がっている！」

ISの展開を促してきたので瞬龍を展開する。

一気に島の反対側にある第三アリーナに向かって飛ぶために姿勢を整える。

——と、その瞬龍の装甲に千冬さんが掴まる。

「つて、危ないだろ！ 降りろよ千冬さん！」

「問題はないッ！ そんなことよりあのバカ共が心配だ」

「いやでも……」

「心配はいらないさ。普段から生身でIS戦には備えている」

そう言っ取り出したのはアンカー付きの小型ワイヤーリール。

千冬さんはそれを俺の首もとに取り付けた。

「それと、お前は焦ると歳上への敬意を忘れるな。ん？ 私の心配よ

り作文用紙が何枚になるかの心配をしたらどうだ」

「い、いきまますッ！」

俺は後ろの搭乗者を振り落とすべく、瞬龍を急発進させた。

ラウラの本心

緊急時には水を注水し、人工島のバランスをとるために存在する学園地下の貯水槽。

俺たちは現在、そこを猛スピードで駆けていた。

俺たち、そう言ったのにはもちろん理由があり、スラスタを操って進む俺の肩にはアンカーで身体を支えたこの学園の教師、織斑千冬が掴まっているのだ。

天井を支えるために乱立されたコンクリート製の太い柱を右に左に避けていると言うのに、千冬さんはその慣性力をもともせずの前だけを見ている。なるほど、ブリュンヒルデの名は伊達じゃない。

IS学園地下のIS格納庫で山田先生から、鈴、セシリア、ラウラによる交戦エンゲージの報告を受けた俺たちは第三アリーナへ急ぐため、この巨大な貯水槽に飛び込んだ、と言うわけだ。

通信で入った山田先生の報告によれば既に戦闘開始から20分以上の時間が経っている。

戦況は不明。だが、ラウラが一人である代表候補生二人を相手にしているのなら、すでに決着が着いていてもおかしくはない。

(ダメだ・・！ ラウラのISはどんな性能が秘められているか未知数だ。迂闊に交戦するのは命取りだぞ鈴・・！)

ラウラのISには、現在俺と鈴が追っている謎の秘密結社、『双龍』が関与したシステムが組み込まれている可能性がある。

俺のISにも『Ber ser ker s y s t e m』：通称Bシステムが組み込まれてはいるが、ラウラのそれが安全なモノとは限らない。

(それくらいの警戒心はあるもんだろが！ なんて普通に戦ってんだよ!?)

俺は心のなかで鈴のことを罵る。

鈴のこともそうだが、セシリアがいるのも心配だ。

ほとんど関係のないセシリアがなんで鈴と共闘してるんですかね

!?

「——柀、見えたぞ！」

その時、呆けていた俺の耳に千冬さんの声が届いた。

前方の天井を見れば、確かに50メートルほど先に地上へ上るための梯子が設置されていた。

大きさは、小型のISであるこの『瞬龍』がギリギリ通れるレベルだ。

千冬さんに行きます、と声をかけた後、その狭い通路に突入した。く、この狭さ、少しでも操作を誤れば千冬さんが壁に撞すり潰されるぞ……！

足の裏と、ふくらはぎ、そして背中に取り付けられたスラスタとPICを操り、何とかアリーナの大通路へと上り詰めた。

こんな緊張感のある上昇操作、ドイツ軍でもやってねえぞ……！「何をへばっている柀！ 先に往くぞッ！」

通路脇にある、学園外からの観戦者用に備え付けられたIS用近接ブレードを手にとった千冬さんがそんな事を言った。

「先に行くって……、ISも無いのにアリーナに飛び出るつもりですか……！？」と、言おうと顔をあげた瞬間、

パァンッ！

千冬さんのハイヒールがそんな音をたてて床を叩き、アリーナへと通じる扉を一太刀で切り裂いた千冬さんがISに匹敵するスピードで飛び出していく様を俺は見た。

その姿に俺は戦慄を覚える。

確かに千冬さんは言った。

生身でISと戦うことはできる、と。

千冬さんのスピードはその言葉の現実味をさらに付け加えられるレベルのもので、事実その意外すぎるスピードに俺の反応が一瞬遅れたほどだ。

その一瞬の後、俺も外に出るために体勢を立ち上げ、急速発進する。アリーナの壁を抜けるとそこは土ぼこりが舞う戦場で、アリーナ中央では今にもラウラと、一夏が剣を交えそうになっている。

ふと、アリーナの観客席をみると、一部だけバリア機能が消滅して

いる部分がある。なるほど、零落白夜か。

更にアリーナの端ではボロボロになった鈴とセシリアがデユノアによる応急手当を受けている最中だった。

「柎、一夏を頼む。ボーデヴィツヒは私が押さえ込むッ！」

千冬さんはその言葉を最後に更に地面を蹴って加速し、抜刀する。

その姿はまさに戦乙女ワルキューレの一人、ブリュンヒルデそのものに、俺は見えた。

@

ラウラと一夏が、それぞれが持つ刃を互いを討たんが為に振り下ろす。

だが、ラウラの前に立ちふさがった千冬さんがそれを許しはしない。
い。

「……やれやれ、これだから餓鬼の相手は疲れる」

「教官ッ!」

「千冬姉ッ…!」

千冬さんはおよそ170センチはあろうかと言う近接ブレードを巧みに操り、ラウラの動きを制止させると、ラウラを厳しい目で睨んだ。それだけでラウラは何もできなくなってしまった。

突然の千冬さんの登場に驚いたのは一夏も同じだったが、その手に持った雪片の動きは止まらない。このままではシールドバリアーを持たない千冬さんごとラウラを攻撃してしまう。

だから……!」

「全くだ、仲裁に入る人の苦労ぐらい考えて欲しいですね」

そう言いながら瞬龍の拡張領域から近接特殊ブレード『時穿』を展開し、雪片と切り結ばせる。視界の端に映る鈴にジロリと視線を向けるとうっ、と息を詰まらせる顔をした。

「柎お兄ちゃん……しかしこの男は……!」

「ボーデヴィツヒ」

「……っ……」

尚も戦闘を続ける意思を示したラウラだったが、千冬さんを前にはいつもの威勢も影を潜めるらしい。

俺は一夏に止める、というアイコンタクトを送ると、それに気づいたららしく大人しく剣を引いた。元々自分から突っ掛かるタイプじゃ無いのだから、あの二人がメツタメタにやられたのを見て、飛び出したってとこか。

・・・ラウラには説教が必要そうだな。うん。

「模擬戦をするのは構わん。互いの力を高めあうにはやはり実践が一番いいのは事実だ。だが、アリーナのバリアーを破る事態になられば教師として黙認しかねる。そこまで争いたければ決着は学年別トーナメントで着けるんだな」

千冬さんが事態を收拾するために、一息でそこまで言うとならげだったラウラも自身のIS『シユヴァルツェア・レーゲン』の展開を解いた。

「教官が、そうおっしゃるなら」

そう素直(?)に応じるラウラ。しかしやはり獲物を前に止められたのが不満なようだ。

「織斑、お前もそれでいいな」

一夏にも確認をとると、極めて真摯な姿勢で「はい、それで構いません」と答えた。

その言葉に千冬さんは口許だけで小さく落胆したような顔をする、声を張り上げてアリーナ全体へと言った。

「では、学年別トーナメントまでの一切の私闘を禁ずる！ 解散!!」

パン、と手をうった千冬さんの姿がまるで何かを自分に納得させるようなものに、俺には見えた。

「・・・千冬さん」

皆がアリーナを去ったあと、俺は背を向けたまま全員が解散するのを見守っていた千冬さんに声をかけた。

「千冬さんがどう思うかは分かりませんが、千冬さんがどうしようと俺たちはこの道を進み続けます。アイツはきつと過去の自分の弱さを責めるために、俺は自分のしたことの原因を知るために。これから深いところに足を踏み入れるかもしれませんが、まあ俺は二年なんて独立ってことで気にしないで、一夏のことを見てやってください。俺

「たちは、進まずには居られませんから」

俺はそう言うのとアリーナの外に向けて歩みを進める。

背後で千冬さんが、「馬鹿者が」と呟くのが聞こえたような気がしたが、気のせいってことにした。

@

「……………で、なんであんなことになってたんだよ?」

それから約一時間後、学園の保健室で鈴とセシリアは包帯ぐるぐる巻きのまま、俺と一夏の詰問を受けていた。

というか、二対一で負けるとか、ダサいにも程があるぞ。

そう言うのとセシリアが激昂した。

「ううううう、うるさいですわねっ、少し油断しただけですわ!」

「そうよ! 一夏が来なくてもあのままだったら逆転してたわよッ!」

男子二人に挟まれた二人はそれぞれ涙目で虚勢を張る。いや無理だろ……………。

「お、お前らなあ……………」

「まあでも怪我が軽くすんだのは流石……………」

二人の態度に肩を落とした一夏を尻目に、俺は二人の肩をパンツと叩いてやる。

「いたたたたたたたっ!!」

すると二人が二人して魚のようにのたうち回った。

「……………じゃないな」

「ですね」

むしろその傷で虚勢張るとか、バカ……………なんだろうか。

「ふ、二人してバカとはなによッ! 第一、一夏だってアイツには手も足も出てなかったじゃない!」

「そうですね! そちらの陣営にも無謀なおバカさんが居るのですから撤回を求めます!」

「だってさ、一夏」

「先輩!」

それにしてもなんで俺たちの思考を読めたのだろうか。女ってみすてりー……。

「はあ。それにしてもなんで二人して戦うことになったんだよ？ 敵の戦力分析くらいしてやれよな」

俺がそう問うと、鈴たちは口々に「奇襲だったのよ」とか、「売られたケンガが大きすぎて焦っていただけですの」とか、「第一、あんたがあんたが賭けの対象なんだから引くわけには行かないでしょ」とか、「負けられない戦いってありますわよね……？」などと供述しており……って、その負けられない戦いに実質負けてどうすんだよ。「二人ともポツと出の新参ものにクレハを取られたくなかったんだよねえ？」

その時、保健室の扉開けて、缶ジュースを持ったデユノアが入ってきた。

「取られるって大袈裟な……ただ部屋割りが——」「ななな、何いってるか全然分かんないわねえ！ これだからヨーロッパ人は困るのよ！——」って鈴その言い方失礼だろ隣には欧州人^{セシリア}が——「べべべ、別にわたくしわっ！ そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！——」——あー、気にしてないか」

もういいや、この二人。

「はい、飲み物買ってきたよ」

デユノアは笑顔のままそれぞれの前に飲み物を差し出す。

鈴とセシリアにはそれぞれ烏龍茶と、紅茶を。俺と一夏には緑茶だ。

「ふ、ふん。まあ折角買ってくれたものを飲まないわけにはいかないしねっ！」

「不本意ながら頂きますわっ」

そういつてぶしゅつと缶を開けて、大倭先生の飲酒を彷彿とさせる勢いで喉に流し込む二人。

一夏が二人を心配そうな目で見ている。こいつ、割りと心配性なところあるよな。

すると、だ。どこからともなくまるで猛獣が大地を駆けるような地

響きが鳴り始めたのだ。

ドドドドドドドドド、とフォルテが愛読するJ O J O（現在第12部）の効果音のような音が段々と近づいてくる。

「な、なんなんだ・・・これ!？」

「一体なんの音なんだ?」

一夏が音の発生源を探るように廊下の方を向く。

俺もならって廊下の様子を見に行こうとしたときだ。

「織斑君! デュノア君!」

俺は勢いよく入ってきた何かの集団によつて無惨にも薙ぎ倒された!

な、なんだあ!?

止まることを知らないその何かの集団は、足元の俺には気づかずに、ある者は踏み、またある者は蹴りながら室内へと侵入していく。その勢いはさながらサバンナのバッファローと言ったところか。

結果俺はなんとかベッドのしたに潜り込むことでバッファローの攻撃を避けて、安全地帯を手に入れた。

落ち着いて辺りを見回すとそこにあつたのは何本もの足、脚、あし・・・。白や黒の靴下に包まれた細いがしつかりと柔らかそうな印象を受ける脚や、アングルソックスのせいで部活動や訓練に励んでいることが如実に分かる綺麗な脚線美を描いた脚、少し顔をあげればソコには女子特有の細すぎず太すぎない健康的な太ももがあるという、目のやりどころに困る光景が広がっていた。ここでようやく俺は女子の大群に薙ぎ倒されたのだと気がついた。

・・・にしてもこの数、二で割つても30人はいるぞ。

そうやって落ち着きを取り戻した俺だったが、先ほど蹴られたり踏まれたりして命の危険をガチで味わったせい、女子の脚を見ているうちに、いきなりあのアブナイ感覚が襲ってきたのだ。

太鼓でも叩いているかのような心臓の脈動に、段々と視野が狭まって感覚が研ぎ澄まされていくあの感覚。更には視界の隅に映るBシステムの英語表記だ。

まで、まで、まで。これまでの経験からこの瞬龍がBシステムを発

動させるのは大体鈴かセシリアと一緒にいたときで、トリガーとして登録するにしてもこの状況ではISどころか顔も確認できてない状況だぞ!?

なんでBシステムが反応してんだよ!

と、そこで思い当たる条件が一つ閃いた。

まさか、この光景が気に入ったとかありませんよね瞬龍さん!?

なんとか無駄な発動を抑えようとした努力も空しくBシステムが無意味に発動。

少しでしゃばりな性格が表に出る。

「二人とも、これ!!」

ベッドの下から状況を探ると、丁度一人の女子が何やらプリントを差し出したようだ。カサツと微かな摩擦音が聞こえた。

「なにになに……?」

「ええとお? 今月行う学年別トーナメントではより実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は学園側が抽選によりペアを決定するものとする。締め切りは——」

「ああ、そこまででいいから!」

一夏が読み上げている最中に先を急いだらしい女子がプリントを引ったくった。

そして、一斉に一夏とデユノアに向かっててを伸ばす気配がする。

「私と組んで織斑くん!」

「一緒にガンバろデユノアくん!」

どうやらコイツらは数少ない男子(女子含む)と組むためにここに来たらしい。

行きなりタッグマッチに仕様変更か……。心配性なのは千冬あさん人も一緒だなあ。

学園側が一教師の一言で決定を変えたのは意外だったが、変わってしまったのは仕方がない。俺も雨かフォルテ辺りと組んで申請するかな……。

大量の女子生徒から誘いを受けた一夏は答えに窮しているよう

だった。

きつとデユノアのことを心配しているのだろう。同じ部屋だし、気づかないはずがない。

そして、ワザワザ男子として転校しているのだからなにかバレてはいけない理由があるのは明白だ。

とすると、一夏が取れる行動は一つに絞られる。

「悪い、俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」
空気が、凍った。

恐らくは誰もが男女のペアが二組は生まれると確信していたのだろう。それ故に、予想外の一夏の選択に普段マツハの早さで処理している脳が一時的に処理を中断したのだ。要するに、考えたくない事態が起こった、つてとこか。

しかし、それらの女子のなかにもなかなかタフなやつがいたらしい。

集団の最後尾にいたらしい一人の女子が、

「……シャル×いち……いや、いち×シャル……アリね」と呟いたのだ。

俺でも真意が見抜けてしまうその一言は、殆どの女子に意味が理解されないまま浸透していった。

「男子同士で組むのも確かにアリね……美少年同士だし」

「いや、織斑くんは美少年って言うか美青年って感じだけど」

「まあ他の娘と組まれるよりかは良いかあ……」

と、彼女らなりに納得して部屋を出ていく。

バタバタと再び騒がしくなっていく廊下と反比例して静けさが広まっていく保健室。

そんななかで一夏の吐いたため息だけがいやに大きく聞こえた。

「……で、あんたは誰と組むのよクレハ？」

対面のベッドから鈴が声を掛けてきた。

デユノアが、「さつきからいらないと思ったけどそんなところにいたんだ……」と呟いたがBシステム発動状態で女子の前に出たらなに口走るか分からないんでね。

「あ？ 普通に雨か、フォルテ辺り。もしくは更識あたりにも、つて思ってるんだけどどうもなあ……」

フォルテはダリル先輩以外のペアじゃ戦績悪いつて聞くし、更識はキャラがなあ……。最近見てないけどもしトリガーとして機能する人物として瞬龍に見初められると、とてもめんどくさい。

よし、無難に雨だな。

そう言うとき鈴は少ししよんぼりしたようだ。おいおいツンデレがそんなんでいいのか。

ペアを組むといった手前、最初の機会に別のペアと組むのはいささかつつかえがないとは言えんが、校則なら仕方ない。だって学年別だもんなあ……。

て言うかそもそもお前の傷じゃ……。

「ダメですよ」

と、いきなり現れたある人物が俺の心の声を代弁してくれた。

「お二人のIS、ダメージレベルがCを越えています。当面は修復に当てないと戦闘は教師として許可できません。ISを休ませる意味でもトーナメント参加は諦めてください」

いつになく教師っぽい山田先生。

すると、いつになく教師っぽい山田先生は不思議な圧力を持っているらしく、あの代表候補生がしぶしぶと言った様子で参加は諦めてくれた。

「あぐ……くつ、わか……りました……！」

「不本意ですが、ほんつとうに不本意ですが今回は参加を見送らせていただきますわ……！」

ドンだけラウラとやりたかったんだお前ら。

二人の様子に満足したのか、山田先生は凄く嬉しそうに言った。

「分かってくれて先生嬉しいです。ISに無理をさせるといつかはそのツケを払うときが来ますからね。お二人の未来のチャンスを先生は失ってほしくありません」

ニコニコ顔でそういつて出ていった先生だが、その後ろで一夏が首を捻っている。Bシステムの恩恵で鋭くなった聴覚がボソツと「ツケ

を払うときが・・・？」と呟くのを拾った。

「どうやら一夏は未だにI Sの基礎理論第三項を記憶していないらしい。」

I Sとは、使用者と共に経験を積んで自分自身を強化していく自己進化プログラムが常時走っていて、そのプログラムは損傷状態での稼働経験さえも経験値として蓄積するらしい。だから、損傷が激しい状態で稼働させればそのぶん質の悪い経験値しか入ってこずに、その後築かれる特殊エネルギーバイパスに重大な欠陥を生んでしまうらしい。結果、平常時の稼働に悪影響を与えてしまう、というわけだ。

一夏の疑問に気づいたデュノアが一夏に耳打ちすると一夏は納得したようにポンと手を打った。

どうせ、「骨折したときに無理すると筋肉痛める」くらいの理解なんだろうなあ・・・。要約するとそれで間違っていないんだが。

「しっかし、なんで二人ともラウラとバトルことになったんだ？ 先輩が関係あるんですか？」

一つ疑問を解くとまた一つ疑問に思ったことがあつたらしい一夏が未だに渋面を浮かべる二人に問いかけた。

「そりゃあまあ、パートナーの貞操の危機だったし・・・。(チラ)」
「く、クレハさんをせっ、性犯罪者にしないためには必要な戦いだったのですわっ！・・・。(チラ)」

なんでこっち見る。

「・・・先輩、何しようとしてたんですか・・・？」

一人事情を知らない一夏が俺に侮蔑の眼を向けてきた！

「おいちよつと待てお前ら、なんで俺が危ないことするみたいな感じで説明したんだよ!？」

俺の焦りを尻目に、説明役として役立ちそうなデュノアは面白がつて手助けしてくれないし、ほんと、泣くよ？もう。

二人の態度に腹をたてた俺は、再び「魚ビクンビクンの刑」に処してやろうと二人をシバくためにベッドのしたから這い出たときだ。

「では、私が今回の経緯について説明しましょうか、柊お兄ちゃん」「うおっ!？」

いきなり現れたラウラに俺は変な声を上げてしまったが、他の全員は即座に戦闘態勢に入った。

す、スゲエ……。一瞬で殺気が充満したぞ……。

「私とそこの二人で賭けをしたのだ。私が勝てば柊お兄ちゃんは私の部屋に移動し、生活を共にする。ドイツ軍にいた時のように朝起きてから夜寝るまで常にな。そこの二人が勝てば今まで通り生活するという勝っても負けても私には損のない勝負だったんだが、その二人は面白いように乗ってきてな、それで今回はその勝負の結果を確認してきた、という次第だ」

とても精神を逆撫でする説明をありがとうラウラ。さあ、後ろのドアからそのまま退出するんだ、いやしてくださいっ！

「な、なんですってえ……!?!」

「言わせておけばドイツ風情がこのっ!」

「そのドイツ風情に負けたのはどこのどいつだ?」

ん?とさらに挑発ぎみに返したラウラに、二人が押し黙る。

一方の二人は息の合ったユニゾンで「柊お兄ちゃんってキャラ間違えてるよね……」と呟いていた。あいつらっつ。

「結果は知つての通りで相違ないな。では行きましよう柊お兄ちゃん」

そう言いながら俺の手を引いて歩き出すラウラ。

その無理矢理さにはいい加減怒りがわいてきたぜ。

手を引くラウラの手を、俺は振り払った。

Bシステムの感覚が、ラウラが不快に感じた兆候と、背後で面食らってるみんなの気配を掴む。

「……どうしたのですか? 柊お兄ちゃん?」

そう言うラウラの眼帯に隠れていない瞳は、俺が付いてくることを当然のように思っている。

その当たり前前だという態度が、俺は気に入らなかつた。

「ふざけんなよ、ラウラ」

「ふざけてないません、至って真面目です」

「そう言うことを真面目に言うところをふざけんなって言うてるんだ

よ！」

怒声をあげた俺に、流石のラウラも面食らったようだ。

思ってみれば、ラウラと過ごした二ヶ月の中で初めて怒ったのはこれが初めてだったな。

「なんで俺が賭けの対象になってるんだよ？　なんで俺の行動がお前に制限されなきゃならないんだよ？　ふざけんよ、ここはドイツ軍じゃない、IS学園だ！　お前の常識に俺を巻き込むな！」

確かに向こうでは場数を踏んだラウラの判断を優先した行動が多かったかもしれない。

確かに向こうではラウラの判断を頼りに行動を制限したかもしれない。

だけど、それはドイツ軍でのことだ。

「いいか、分かっているなら何度でも言うぞ。ここはIS学園だ。お前のホームグラウンドのドイツ軍じゃない。ついでにいつとくぞ、俺はお前の兄じゃない。呼ぶなら先輩かさん付けだ」

感情まかせに思いの丈をぶちまける。後ろの二人にも言いたいことはあるがそれを言う余裕はない。

何故ならば……。

「……なぜ、私を否定するようなことを言うのですか……？」

ラウラが、その鉄皮面を涙で歪ませたからだ。

「なぜ、私を否定するようなことを言うのですか……？　教官も、お兄ちゃんも私の前から姿を消して、異国の地へと旅立って、私を肯定してくれる存在は、あの地には誰もいなくなってしまった！」

ラウラの絶叫が響く。

その場にいた全員が眼を丸くした。

「教官の弟を倒せば認められると思っていた、貴方に付いていけば私は何者かわかると思っていた。たった二人だった私の拠り所を失った私の気持ちを考えたことがありますか!？」

そう言うラウラは湿った眼帯を取り外し、袖で涙をぬぐうと失礼しました、と一礼して走り去っていった。

去り際に見たラウラの瞳は今も昔も変わらず赤と金色のオツドア

イだった。

「ね、ねえクレハ・・・？」

流石にまずったことを察知したのか、鈴がおずおず俺の名を呼んだ。

わかってる。俺だって失敗したと今思ってるよこだよ畜生。

俺、てつきり一夏を倒すためだけに来たのかと思ひ込んでいたけど、それだけじゃなかったのか。

なんで気づいてやれなかった。そう言う感情を察するのは俺がウエルクさんから学んだ一つの特技だろうが。

あいつと俺は一緒だったことを気づいてやれることが出来なかった。

ラウラの叫びを聞くまではラウラが逆ギレしたと思っていたが、逆だった。

俺が、ラウラに逆ギレしたんだ。

「悪いな、変なところを見せて。でも心配すんな。何とかする」

一応そう言うが明確な手段が思い付かない。唯一頭をよぎる案も人頼みだ。

いや、なりふり構っていられる場合じゃない。

学年別タッグマツチトーナメントまで残り時間も少ない。

迷惑に感じていたのは本当だし、放っておけばいいのかも知れないが、どうやら出来そうにない。

俺は端末を片手に、保健室を後にした。

彼女に希望を

六月末、学年別タッグマッチトーナメントの初日だ。

今朝から開会式に向けて最終確認や、来賓客の対応と多忙な準備に走っていた生徒たちも、試合一時間前となったら流石にそれぞれ更衣室で試合の準備を始める。

俺は第三アリーナ地下射撃訓練場で、今日実施するAブロックの対戦組み合わせの発表を待っていた。

「やはり、クレハさんはラウラ・ボーデヴィツヒのことが気になりますか？」

そう声をかけてきたのは最後の最後でペアとなったミナトだ。

彼女は青い第二世代型IS「サイレン・チェイサー」を纏って愛銃の手入れを行っていた。

「……まあな」

素直に肯定するのはシヤクだったが、嘘をついても意味がないことを自覚し、素直に吐露する。

その時、天井から吊るされたモニターに、今日の組み合わせが表示された。

Aブロックは一年のブロックで、その中には当然だがアイツらの名前も含まれる。

そして、ラウラの名前を見つけて、驚いた。

(篠ノ之 箒&ラウラ・ボーデヴィツヒVS織斑 一夏&シャルル・デユノア——!?)

しかもまさかの第一試合とききたもんだ。

「見に行きますかクレハさん？」

ISを解き、ISスーツ姿となったミナトが隣に来てそう言った。

「いや、暫くはここにいたい」

「……そうですか」

そう言うときミナトは胡座かいてる俺のとなりに、姿勢正しく正座で座った。

なんでだよ、こんな広いところでせまつ苦しい位置取りしなくていいだろ。

——と、思つて、俺がズリ、と距離を開けると。

「……………」

ズウウウン……と擬音が付くほど分かりやすく肩を落とした。するとまた距離を詰めてくるので、また離れる。

また近づく。離れる。近づく。離れる。

そして、近づく。

「あーもう諦めた。俺の負けだ。ていうか何なんだよさつきから」

「今日のクレハさんは、少し思い詰めた顔をされていたので、無理矢理にでも絡まなければ、と思いましたが」

「俺が、思い詰めてる……?」

意外な指摘を受けたので面食らう。

「はい。まずは勝手にラウラ・ボーデヴィツヒのことと推定しましたが、間違いなら謝罪しておきます。クレハさんと彼女の間にあるいさかいがどうすれば解決するのか私には分かりませんが、クレハさん。貴方はわかっているはずですよ。しかし、貴方はそれを実行するか未だに決めあぐねている……………」

「……………」

その通りだ、ミナト。

俺とアイツのケンカを解決する方法は恐ろしく簡単だ。

ただただ、ラウラ・ボーデヴィツヒを認めてやればいい。

だがそれは千冬さんの方法であつて俺の方法であつて俺の方法じゃない。

俺は俺のやり方で、立場で、ラウラと言う存在を認めなければならぬ。

それはつまり……………。

「!・クレハさん、出ました」

ミナトの声にモニタを見上げる。

そこには黒と白、二機のISが向かい合い対峙していた。

@

戦局は終盤。

一夏のIS白式が、単一仕様能力「零落白夜」を発動した。

「これで決めるっ！」

「触れればエネルギーを消し去る刃か……ならば触れなければいい！」

モニターに激しい攻防を繰り返す二人の姿が映し出される。

一夏はラウラを攪乱するように、直進してからの急ターン、停止、加速を繰り返しているが、あれはただ避けているだけじゃない。

ラウラのISシユヴァルツエア・レーゲンの第三代型兵器、停止結界^Aは身体中ありとあらゆる場所から慣性力を停止させるだけの強制力を持ったエネルギー網を放出できる。

ラウラはその放出を手指、眼球から行うことが多く、一夏の動きはそのことを見切ったような動き方だった。

ラウラの表情に焦りが見え始め、間断なく放たれる攻撃にワイヤーブレードが加わる。

「くっ、ちよろちよろと目障りな……ッ！」

一夏はデユノアの援護射撃を受けながら、段々とラウラとの距離を縮める。

「……の、小癩なアアア！」

大振りの攻撃を一夏に回避されたラウラの表情が固まる。

しかし、一夏はその隙を見逃さなかった。

なんと一夏はそれまで斬る事だけしか行ってこなかったにも関わらず、試合中に「突き」を繰り返したのだ。

「無駄なことだッ！」

ラウラの瞳が輝き、一夏の動きが止まる。

剣を除いた腕全体にAICの網が絡み付いたのだ。

「フッ、腕にこだわる必要なんてない！ ようはお前の動きを止められれば——！」

ああ、バカ——

俺はそう心の中で呟いた。

何故なら……。

「なんだ、忘れていいのか？ それとも知らないのか？ 俺たちは、二人なんだぜ？」

「!? しまっ——」

驚愕するラウラに、超至近距離にまで接近したデユノアの六連装ショットガンが火を吹く。

「くあああああッ!？」

ラウラの叫び声と共に肩の大型レールカノンが爆散する。

俺はその様を見ながらニヤリと笑う一夏を見て悟る。

(マズイなラウラ……見破られたぞ！)

どうやらラウラのIS技術はドイツ軍で共に戦ったときとあまり変化していないようだ。

ラウラはAICの停止結界を同時に複数扱うことは苦手としている。というより、出来ない。

目標が視界内から消えてしまう、または集中を解いてしまうと拘束が解けてしまうのだ。

今の叫びはその弱点を如実に表すものとなってしまうていた。

「……ラウラッ！」

「クレハさん!？」

知らず知らずのうちに俺は駆け出していた。

どこに向かうのかはわかっていない。

俺の中の瞬龍がそうしろと暴れまわる。

ラウラを助けろと叫んでいる！

「ラウラッ！」

既に見慣れたアリーナの扉を蹴り開けて試合中のフィールドに飛び出す。

しかし、既に遅かった。

「ぐ、ああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ——
——」

目の前で、ラウラが絶叫を響かせていた。

あちこちの装甲が破壊されたシュヴァルツエア・レーゲンから青白い電撃が放たれ、周囲にいた俺やデユノアが壁に叩きつけられる。

なんだ!? 何が起こった!?

改めてラウラを見てみるが、彼女自身に変化はない。ただただ、痛みを苦しんでいるだけだ。

暫く荒れ狂う強風に身体を吹き飛ばされぬよう身を低くしていると、次第にその風と電撃が収まっていく。

それらが完全に止まると、残されているのはピクリともしないシュヴァルツエア・レーゲンと俺たちだけだ。

観客席の人たちは起こったことが理解できず呆然としている。

「!? クレハッ! 後ろ!」

観客席から身を乗り出した鈴が、俺に注意するので、直感まかせに真横に飛ぶ。

——黒い風が吹き通っていった。

そう錯覚させたのは黒いマニピレーターが俺のいた地点を通り過ぎていったからだ。

「黒い腕って……冗談じゃないぞ」

受け身をとった俺はその場で攻撃の正体を確認した。

「おいおい、そんなに怒ってんのかよ……。ラウラ」

軽口を叩くと、それに怒ったかのようにラウラがワイヤーブレードを俺に向かつて放つ。

おいっ、それ避けられないからッ!

「先輩ッ!」

ダメージを覚悟していた俺を、一夏が掬い上げるようにして離脱させてくれた。

「悪い、サンキューな」

「そんなのあとでいいですから! まずはおアレ! どうかしてくださいよ!」

「おいこら、テメエ、人の義理の妹アレ呼ばわりとはいい度胸だな……。」

「あれ!? 先輩意見変わってません!」

一夏はラウラの攻撃範囲外に出ると、俺を下ろして警戒した。

俺も瞬龍を呼び出してひとまず防御の意識を強める。

「別に変わったわけじゃない。もともとそうだったんだよ。俺とラウラは兄妹じゃない。だけど、義理の兄妹だったんだよ。後から知った事実を肯定するのは変わったには入らないだろ？」

「凄い屁理屈捏ねますね……！」

一夏が呆れたようにため息をつく。

心外だな。

「で、その義妹さんはどうなったんですか？」

「分かんらん」

即答する。

分からないのは事実だ。

シユヴァルツエア・レーゲンに搭載されたVTシステムのトリガーが何なのかは分かかっていないし、なにより、今のラウラは名声高いヴァルキリーと同じアルゴリズムで動いているとは思えない。

先の二撃もただ力任せに拳を振っただけに見える。

だが、異常が起きているのもまた事実。

そしてそれに対応出来るのは……。

「行くわよクレハ。私たちペアの初戦闘ね」

「初めてを鈴と迎えられて俺も嬉しいぜ」

————— 周囲に登録済みのISCコアを確認。Bシステム、

スタンド・アツプ
起動

双龍の手がかりを追う俺たちの仕事って事だな！

@

「クレハ！ 右援護！」
ライト・サポート

「了解！」
ヤー

鈴の掛け声と共に左右にわかれ、ラウラを挟撃する。

ラウラの意識は俺の方に向き、俺はそのラウラに特殊拳銃型射撃武器「流桜」を拡張領域から呼び出し、撃つ。

だが、

ガンツ！ ガンガンガンツ！！

放った弾丸全てが、シールドバリアーに弾かれる。

「そんな……。戦う分のエネルギーなんてないはずなのに！」

遠距離からライフルで援護するのか射撃姿勢を取っているデユノアが、開放回線ですう眩いた。

と、すると今のラウラはエネルギーが回復している状態だと見るべきだな。

だったら――！

「時穿――！」

黒い刀身を持つ特殊近接ブレードがラウラのシールドバリアーとぶつかり、解けたエネルギーが火花のように弾け回る。

そこで、俺は時穿の特殊能力を発動させる。

「斬れ！」

そう叫ぶと共に、エネルギーではない何かに時穿の黒い刀身がズブズブと沈む。

それを見たラウラが虚ろな瞳を見開くが、もう遅い！

パンツ！ という音が響いて刀身がバリアーを通過し、シユヴァルツエア・レーゲンのボディにダメージを叩き込む。

「こおんのおーッ！」

その開いた空間に向けて、鈴が衝撃砲二門をフル稼働させて放つ。ドウツ！ドウツ！と着弾音が轟く。

防御に使った右腕が粉々に砕け、血だらけの右腕が顔を出す。

「グ……、ナゼ……オイテイクノデスカ……ナゼ……ワタシカラ居場所ヲウバツテイク……？」

ラウラが苦悶の声を上げる。

聞き取れた声はラウラの本心。

置いていかれた者、独りの人間の苦しみだ。

「織斑一夏アアアア――ッ！」

破壊された右腕が再生し、瞬時にプラズマブレードが展開されると、俺に向かって振り下ろされる。

Bシステムと俺の反射神経が下した回避方向は前方。詰め寄れ、だ。

瞬時加速で回転するように接近した俺はラウラをISから引きずり出すべく、両足を切り飛ばそうと剣を構える。

だが、まるで切っ先が鎖で繋がれたかのように動かない。
それどころか全身が固定されている。

これは――！

「邪魔よ！ クレハッ！」

「うおっ!?!」

スケートのように地面を滑って身体を滑り込ませてきた鈴が俺の身体を蹴ると同時に、俺を縛っていたAICの放出源、左腕を双天牙月で破壊する。

縛りから開放されると同時に、俺も身を捻って二撃、右腕に叩き込む。

「ふう、ナイスフォローだ鈴。助かった」

「あ、あんたがぼさつとしてるからでしょ！ しっかりしてよ！」

鈴から罵倒を浴びながらエネルギーを確認すると、残りの活動時間は二分チョイってとこだな。

二分以内にあのじゃじゃ馬からラウラを引きずり出し、事態の収束を図る。

たった今、そういうメールが個人回線を通じて轡木事務員から送られてきた。

まあ、安心しろよじいさん、俺の目的もラウラの奪還だからよ！

「先輩！ 俺たちは!?!」

「一夏とデュノアは待機迎撃。観客席のロックが厚くていまだに避難が終わってないブロックがあるらしい。ラウラの武装は大体実弾兵器だから被害がでないように叩き落としてくれ」

「それは命令ですか？ セーンパイっ？」

デュノア・・・人がシリアスに指示出してんのにちやちや入れるなよ・・・。

「命令じゃない。ていうか上級生下級生なのに、命令とかあり得んだろ。普通に行動しろ」

「了解です！」

一夏とデュノアはそうして後方に付き、流れ弾の処理を行う位置についた。

「そういえばクレハ、あんたさつきどうやってバリアー突破したのよ？」

「え、ああ。時穿のベリックポテンシャル・オープン基本性能・開放？ まあ、その説明は追々していくから、前見た方がいいぞ」

「え？」

鈴が呆けた声を出しているので、代わって俺が迫っていたワイヤーブレードの対処を行う。

(斬れ！)

次は声に出さずに頭の中で解号を唱え、時穿の能力を発揮させる。

ワイヤーの先端と時穿が接触した瞬間、俺の目がとらえたのは、黒い刀身が何もない虚空に切れ込みを入れ、押し広げ、ワイヤーがそこに吸い込めれていく様だった。

今の現象を分かりやすく言うなら、空間断裂。

空間に極大化したエネルギーを掛けて、そこに強制的に時穿の穴を作る特殊兵器らしいのだ。この時穿という剣は。

だから、さつきのはラウラのバリアーを切ったのではなく、バリアーを張った空間のみを切り裂いたということだ。

零落白夜とは発想が違うが、これも十分バリアーキラーウエポンだよ……。

「あ……、ありがとう……」

「ん？ どういたしまして、な」

面と向かって礼を言われるのが何となく恥ずかしかったので、返事をすると同時にラウラに意識を集中させる。

空間を切る技、仮定的に「ざんくう斬空」と名付けるが、今のワイヤーぶつたぎりアクションで、瞬龍が覚えたのか、次からは念じるだけで瞬間的に技が出せるそうさ。

よかったー。今のタイミング合うか、一か八かだったんだよな。オートで出せるならそれに越したことはないぜ。

「おい、ラウラ。聞こえてるか？」

「ぐ……く……終……お兄ちゃん……？」

「そうだよ。クレハだ。取り敢えず、それ脱いだから話をしようぜ？」

怒らせたことならちやんと謝る」

「む……りです……。ISが……。身体に食い付いて、外れま……アアツ!? ……っ!」

見ればボロボロの両腕に、再び破壊されたはずの装甲が展開される。

通常破壊された装甲は、交換という形で新しいものへと新調される。

しかし、今は壊しても壊しても新たに出現する無限回復状態だ。

恐らく、残っているシールドエネルギーを喰って装甲に変換しているんだろうが、恐ろしいエネルギー回復力だな。

ガス欠を起こしやすい調整チューニングの瞬龍に分けてほしいくらいだぜ。

だけど、今はその機能も破壊すべき対象だ。

いくぞ、柊クレハ。

義兄と義妹の義兄妹ケンカだ。

「待ってろラウラ。そんなもの、俺が剥がしてやる!」

瞬間加速を用いて一瞬で懐に潜り込むと、回転を掛けながらの一閃で、シールドエネルギーと絶対防御分のエネルギーを一気に削ぐ。

ラウラは———というかレーゲンは真下の俺に向かって再生中の大型レールカノンの照準を合わせると、間髪入れずに放った。

喰らえば一撃。かわすにしても距離が無さすぎる。接触は免れな
い———!

「!? クレハッ!」

鈴の叫ぶ声だけが俺の耳に届く、心配するなよ鈴。言っただろ。俺はお前のパートナーであり続けるってな。

(だから!)

俺は迫り来る大型砲弾に向かってオーバーヘッドキックのように片足を振り上げる。

瞬龍は小型の装甲だから、ほとんどの生身と同じ感覚で操縦出来るのが少ない利点だ。

(だからこうやって———!)

振り上げた脚が砲弾に接触すると、瞬間加速で蹴り足に巨大な運動

エネルギーを発生させて、砲弾が俺に向かって進む運動エネルギーより大きい運動エネルギーで打ち消す。

そのまま脚の勢いに引っ張られるように身体もクルリと一回転して、そのまま！

「―――ぶっ壊れろ」

打ち出された砲弾の軌道が俺の脚によって90度曲げられて、レーゲンの右足を破壊する。

「クレハ……あんたって！ 上出来後は私に任せて！」

鈴が双天牙月を構えて弾丸のように飛び出すと、体勢が崩れているレーゲンの両足を完全に破壊し、ラウラの両足を開放。

「最後は俺たちが！」

「僕たちが！」

続いて一夏とデユノアが左右から腕のマニピレーターにそれぞれ斬撃と六連式の火薬炸裂パイルドライバー、通称シールドピアスを叩き込み、破壊する。

「クレハッ！ 引っ張り出して！」

四肢が開放されたラウラを繋ぎ止めるのは、残った背部ユニットのみだ。

俺はISの展開を脹ら脛下のPIC力場発生部と、スラスターのみの部分展開に切り替えると、ラウラに飛び付き、ユニットの分離を試みる。

「……終……お兄ちゃん……に、げてください……。時期に……。暴走状態が臨界点を超え、機体が形を保てなくなります……。そうなる……。逃げてください……。ッ！」

「ぎけんなッ！ お前はまだ俺と仲直りしてないだろうが！ こんなところで一人で逝っちゃったらそれこそ永遠に一人になるぞ！」

「でも……このままでは教官まで……」

「他のことはどうでもいい。ラウラ自身が自分の事を考えなくてどうするんだよ！ 居場所を見つけたる前に、自分の存在を見つけろ！」

瞬龍のBシステムがシユヴァルツエア・レーゲンの様子を簡単に改めたところ、機体の状態はマジで弾ける5秒前状態だ。

しかし背部から伸びたユニットは、そのままラウラの胸を包み込むように固定されていて、外すためにはここを解除するのが一番でつとり早くてええと・・・畜生！

「・・・・・・・・一人は、イヤです・・・」

ラウラの口から漏れたのはそんな小さな否定の言葉。

だが、その言葉に込められたラウラの経験は俺の想像を遥かに超えたものだった。

先日、ラウラと喧嘩別れしたあの日、俺はラウラの所属するというIS特殊部隊「シュヴァルツェア・ハーゼ」の副隊長クラリツサ・ハルフォーフ大尉に連絡をとった。

副隊長を勤めていたのは初耳だったが、むしろ都合がよかったのだ、俺と千冬さんがドイツを去ってからのアイツの様子を聞いてみたんだが、あまり聞いていて気分の良いものじゃなかったな。

俺たちがドイツを去ったあと、ラウラは一人、軍の中では特出していたIS技術を買われて他の部隊へと転属となり、地位も権威もへつたくれもない少佐の位を与えられたらしい。

そこで待っていたのはよそ者への差別と、その努力によって習得した技術への妬みだった。

ISを扱えるのが女性だけなため、女性士官養成所からの嫌がらせもキツイものだったらしい。

クラリツサは定期的にラウラと連絡を取っていたため、その状況を知ってはいたが、他の部隊のことということもあり、下手には手を出せなかったらしい。

そして、数ヶ月そんな状況を耐え抜いたラウラは、完成されたナノマシンによる強化人間だけで構成された特殊部隊である「シュヴァルツェア・ハーゼ」への転属を機会に、ここ日本への留学を申請したらしい。

ラウラが虐められていたことも驚きだが、まさか本当に兄妹みたいなものだったことにも驚いた。

俺は出産後に薬によって身体を変えられた瞬龍搭乗者被検体1号。ラウラはその出産にすら人によって手を加えられたIS戦闘用の

強化人間。

瞳の金色は、注入された特殊ナノマシンによる影響で、常にハイパーセンサーが起動している状態らしい。

なるほど、全てを見渡す瞳、ね。

他とは違う生まれ方をして、更にはでき損ないの烙印をおされたらウラ。

ウエルクさんという居場所を見つける前の俺そのまんまじゃないか。

だから、俺は決心した。

俺がラウラの居場所になる。

俺がラウラを肯定してやる。

俺がラウラの――

「だったら、俺がラウラの兄貴になるよ。だから、勝手に妹が死ぬのは見過ごせないな」

そして、俺たちは爆発に巻き込まれたのだった。

終わったあとに。

「……つ……?」

「あ、あれ……クツちゃん……起きてる……?」

いきなり意識だけが覚醒し、顔の見えない雨の音が聞こえた。

なんだよ……? 寝てたんだから起きるのは当たり前だろ。なんでそんな心配そうな声なんだよ?

「あ……。雨、今何時だ……?」

「時間の確認?! それよりもまず確認することがあるよう、クツちゃん!」

珍しく雨が語気を荒げているので、体を起こそうとするが——
——イテっ。

なんだこれ。上手く腕が上がらない。

いや、それどころか首から下がほとんどの動かない。

少し感じる痺れたような感覚が嫌な予感を冗長させているのだから。う。

「そうだな。それじゃあ——ラウラは?」

「まずクツちゃん自身の心配をしてよ!?!」

「してるよ。爆発の衝撃を真正面から受けたんだ。ISがあっても無事でいられるなんて思ってた。どうせ暫くは痺れて動かないんだろう?」

そう確認すると、雨は俺が意外に冷静だったことに驚いているのか、怒ったように手を振り上げたまま首肯した。

「それで、俺が倒れた後何があった」

開いた目で回りを確認すると、どうやらまた保健室で寝かされているらしく、薄い布団が被さっているのが分かる。

オマケにフォルテもよだれを垂らして被さっているが、蹴り起こそうにもそれができない。すごく、残念です……。

壁にかけられた時計の時刻は、俺が記憶しているものと変わらぬ日付を指していて、まだあの出来事から一日と経っていないことが分か

る。

(暴走寸前のISに飛び込むとはな・・・俺もよくやるぜ)

学年別タッグマッチトーナメント初日のAブロック第一試合。

選手として出場したラウラ・ボーデヴィツヒは謎のプログラムにISの制御を奪われ、暴走状態に陥ったのだ。

そんなラウラを颯爽と助け出そうとしたのだが、結果はこの通り。ベッドの上だ。

Bシステム発動状態でもできないことってあるんですねー。

「ぼ、ボーデヴィツヒさんは過度なストレスとダメージを負ってて・・・その・・・」

「? なんだよ。いつも以上に歯切れが悪いな雨」

「それ嫌味クツちゃん?」

「・・・悪い。ちよつと性急過ぎた」

落ち着きを取り戻すために一息を吐くと、それにあわせて雨が口を開いた。

「ボーデヴィツヒさんはね・・・クツちゃんの一時間前に起きてからずっと・・・隣にいるよ?」

「——え?」

シャ——ツ!

雨の不意を突く言い方に呆気にとられていると、またまたいきなりベッドを個室に分かつカーテンが勢いよくレールを走り、夕焼けに染まる空がお目見えする。

急激な光度の変化により俺の瞳孔が収縮し、一瞬視界がボヤける。

そのボヤけた視界の中には夕日を背に俺を見下ろす長髪の女性の姿があった。

「・・・大丈夫そうだな、ラウラ」

「はい」

短い返答。俺が眠っている間に何かがあったのは間違いなさそうだ。

俺ははつきりと見えるラウラの金色の瞳から、確かな意思の存在を感じた。

気がつくくとベッドの脇には雨の姿はなく、落ち着いた状況でラウラと話すことができる。

「——柊特別少佐」

「……」

ラウラが俺のことを階級をつけて呼んだのはいつぶりだろうか。

確か二年前の初顔合わせ以来か。

「私は先程の自分の失態で様々なことを学びました。　I S 戦闘技術はもちろん、教官の思いや人柄。織斑一夏という少年の強さ。柊特別少佐の優しさ、といった人々の抱く心。そして最後に、私自身を」

ラウラは俺に話しかけているようで、自分に言い聞かせるように呟く。

そしてベッドから下りて——どうやら動けるらしい——右手を俺に差し出した。

「初めまして。ラウラ・ボーデヴィツヒです。所属は1年1組。家族構成は義兄が1人と嫁が1人。どちらも私が心から信頼する人物です。同じ釜の飯を食べる間柄として、仲良くしてほしい」

「……」

……不思議と言い表せない感動が胸の奥から沸き上がってくる。

これは、不器用で恥ずかしがり屋な、ラウラなりの仲直り。

更には所属をドイツ軍と言わなかったことから推察するに、どうやらI S 学園を自分のホームだと認めたようだ。

ちよつと気になるプロフィールも飛び出したが、追求せずにスルーしてやるよ一夏。

「ぐ……」

外傷は無いのに痺れだけが色濃く残るといふ不思議な腕を懸命に挙げる。

さつさと通常生活に戻るためにもしつかりとりハビリしとかなないと、だ。

予想以上に強く握ってしまった手からパチンと音がなる。

「ああ、よろしく頼むぜ。妹よ」

こんな可愛い妹から兄と慕われるんだ。兄貴冥利に尽きる話だ

ろ？

@

「……とかなんとか言っちゃってかつこよくめるつもりだったのに、まともや締まらない結果に終わってしまった。」

後から千冬さんに聞いた話なんだが、事態を収束させたのは正確に言うとな、俺じゃなくて一夏らしかった。

ラウラの救出のためにシユヴァルツェア・レーゲンにとりついた俺は、爆風に揉まれながらも瞬龍の最後のシールドエネルギーのお陰で怪我を負わずに済んだが、強い負荷が掛かったためそのまま戦線を離脱。

気を失わなかったラウラに引きずられる俺の姿には千冬さんも眼を覆ったらしい。情けない、とな。

その後、レーゲンはあり得ない再起動を果たし、完全なる暴走を開始。

それを倒したのが一夏を初めとする一年生数名の仮設チームだったのだ。

俺がやったことは一般人観客の前で姿をさらして学園上層部の仕事を増やしたことと、人命救助。

「……いやいや人命救助だって大事な事だぞ？ ていうか最初にすべきことだろ。」

しかし先生方は仕事を増やしたことに對してご立腹のご様子。

今回の事件のせいでトーナメントは一回戦を残して二回戦以降の試合はすべて中止。それにともなって各国スポンサーへの事情説明とその他もろもろの雑事に追われているのに、俺についての情報操作まで追加されるのだ。そりゃ保健室出た瞬間に銃撃されるわな……。

そうして、大倭先生を筆頭とした先生陣對俺という絶望的な對戦カードが用意された結果。

「……身体ダルいつてのにこの広さはあんまりだぞ……」

見事に敗北して、風呂掃除を大倭先生の代わりに行うことになったのだった。

誰もいないはずなのにカポーンという音が何処からともなく鳴り響く。

ていうか体調的に考えたら普通、風呂に入って湯治する側の人間だと思っただけど、俺。

今年まで男子がいらない、という体を保ってきたIS学園には当然男子大浴場なんてものは存在しない。

俺自身これまで部屋のユニットバスで済ませてきたから良いとは思ってたんだが、実際見てみると羨ましくなってくるぜ。大浴場。

よし、決めた。

掃除をちやつちやと終わらせて黙って入ってしまおう。

清掃業者の看板が何処かにあったはずだ。あれを前においていれば入ってくるやつはいないだろ。

よし、作業を進める理由ができた。後は早いもんだぜ。

楽しみが出来る人間、作業効率上がるモノらしく、予想されていた時間を大幅に短くする形で俺への嫌がらせ罰掃除は終わった。

「あー……」

手早く湯に浸かると全身の力を抜く。

少し熱いが中々にいい湯だ。

だが、俺は気づいてしまった。

「……サウナ、水入れてないぞ」

このサウナは贅沢にも熱した石に湯をかけて蒸気を作り出す手の込んだタイプで、掃除する際に蒸気発生用の水を抜いておくのがルールらしいのだ。

俺はそれにしたがって水を抜いたのだが、入れることを忘れてしまっていたようだ。

「だと思ったらあの中は灼熱地獄だな……」

ウゲゲ、と思いつつもここでスルーしたらあの暴力教師に吊し上げられかねないので仕方なく水で満たされた桶をもってサウナに向かう。

ガチャ……うわ、やっぱり熱い……。さっさと水入れないと大変なことになってたな。

ザーつと水を掛けると一気に蒸気が噴き出す。

はー、銭湯とかによくある石に水をかけないでくださいってこう言うことだったのか。

視界が蒸気で潰されたので、サウナの温度を下げるために調節システムのある脱衣場に向かおうとドアノブに手をかけた時だ。

「うおーっ、スゲー！」

!? なん・・・だと!?

ガラリラとスライドドアが引かれて姿を表したのは腰にタオルを巻いた織斑一夏だったのだ。

なにが可笑しいのかヤツは子供みたいに浴槽の周りを「わはははー」と笑いながら走り回っている。

なんだあれ。

て言うか、今日は貸し切りのつもりだったんだけどな・・・いや、俺が勝手に言ってるだけなんだが。

しかし、まさかあの看板の圧力をモノともせずに入ってくる強者が居たとは・・・。恐れ入ったぜ織斑一夏!

そんなどうでもいいことを考えている内に一夏は身体を洗って湯船に浸かった。

そうだ、どうせ男同士なんだからいいや。一夏が入ってきたってことは先生か誰かから正式に許可を貰ったんだろう。

そうすると少し悪戯心が沸き上がってきたので、折角だから驚かせてやることにした。

風呂場のエコーを楽しむかのように「生き返るう〜〜」とジジ臭いことを言う一夏の背後に回ろうとサウナを抜け出した時だ。

カララララ・・・

またしても侵入者の登場である。

だが、俺はこの時油断していたのだ。悪戯心が先走ってこの学園における男女比についてまで頭が回っていなかったのだ。

今ここにいるのは俺と一夏、つまり男子二人。

それはつまり・・・。侵入者が女であることを意味していた。

その事実が遅れながら気がついた俺はつい、本当につい、ペタペタ

と濡れたタイルを踏み鳴らす侵入者の方を見てしまったのだ。

「お邪魔します……」

若干頬を赤く染めながら身体を隠すように俺の前を歩いていくのは、シャルル・デュノア！ マジで女子だ！

だが、お湯の温度が高めなのが幸いした。湯気でほとんど前が見えん。ツイてるぞ、俺。

デュノアも俺の存在に気がついていないようなので、一瞬始まりかけた心臓の疼きを抑えながらソツと巣サウナに帰る。

(システムチェック、システムチェック、と)

ドアに背をつけて座り、常時起動している瞬龍のシステムウインドウを表示する。

……良かった。トリガーにはなり得なかったみたいだな。って、安心してる場合じゃない。

なんであの二人一緒に風呂にはいつてんの!?

一夏もデュノアの登場に驚いたらしく、激しい水飛沫の音がする。チラツと窓から覗いてみると、あーあ。どこのラブコメだよって感じの雰囲気で背中合わせで座ってるよ。

て言うか湯船にタオルつけられるのイヤなんだが、相手がデュノアだけに注意しにも行けん。我慢だ。

暫く我慢してあいつらが出ていくのを待とうと思ったが、どうやら女子のデュノアは言わずもがな、一夏も風呂が長いタイプらしい。一度出ようと腰を上げていたが、デュノアに引き留められて惰性で堪能しちやってるよ、風呂。

(しかし、俺はそろそろ限界だ……)

ずっとサウナに籠っているせいか、頭がボーツとしてきた。病み上がりなんだからサウナなんて入るんじゃないやなかったぜ。

(よし、死ぬ前に脱出するしかない……ッ！)

本来ならあいつらが入ってきた直後に出ていれば、偶然ばったりを装えただろう。ていうか事実偶然ばったりなんだがな。

しかし、時間がたった今はその手は通じない。

今、この瞬間にフラツと出ていけば、女子のいる風呂場で隠れてコ

ソコソと仕掛け終わった、みたいな感じになっちゃう。

それだけは避けねばならぬ展開。

いくぞ俺。作戦名は「花^{ダツ}のある道^{シュ・ガーデン}を走る」だ！

俺は窓から外の様子を感じとり、出ていくタイミングを計る。

そして、来た。

(今だっ！)

二人が長々と話し込んだ瞬間。

俺は瞬時加速もかくやというスピードと、

ヘビを思わせる体捌きでサウナを脱出し、少々音がなるのも構わず
に出口に向かってダツシュする。

ダツシュ・ガーデンとはその名の通り、花^{女子}の居るところをどれだけ
静かに走れるか、と言うことである。

花は踏み荒らせば荒らすほどみすぼらしくなり、女子は乱暴になれ
ばなるほど品格が落ちていく。だから怒らせるようなことは出来る
だけ避けていく。それが俺の信条。

(しかし、鈴やセシリアは暴力の権化だよな……)

あいつらこの間俺の部屋でイギリスの紅茶と中国の飲茶、どっちが
息抜きとして優秀かなんて些細なことで喧嘩するし、審判長の俺が
どっちかに票を入れるともう一方がぶちギレするし……。

こないだ「女性の品格」を呼んでフムフム唸ってたどこぞの独身女
教師、大倭先生を見習って欲しいね。あ、名前出してしまった。

親指に力を込め、出口に向かって最後のターンを決める。よし、
コースはバツチリ決まった。後は駆け込むだけだ。

取っ手を握り、一瞬で開くように思いつきりスライドさせた。――
のがまずかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

女子、じよし、j o s s i、g i r l s

半裸の女子数名の目が一瞬で俺に集まる。

なんで・・・お前ら・・・看板出しといたハズだろっ!?

そう憤ったが、答えは目の前にあった。

看板が、目の前に、あったのだ。

(・・・ああ、一夏か。きつと業者の人に気を効かせただけなんだろうな・・・)

だけど殴ってやる。

俺がこれから殴られる分だけな!

「ちよおおおつと良い? 柊くーん?」

「オネーサン達とお話しましょうねー?」

「あれ、テメー・・・クレ坊か。ここは女子風呂だぞ?」

これはこれは三年生の方々でしたか。ダリルセンパイチーツス。褐色の肌が艶かしくてドキツとさせられる。

悲鳴を上げるでも怒号を上げるでもない先輩方は、俺に向かって大ききめのバスタオルを投げつけるとその上から首、両肩、両腕を拘束、逃亡を不可能にさせる。

ていうかその結束バンド、どこから出したんだアンタら。

まずい、これが恐怖か。久々に味わったぜ。

戦闘中はアドレナリンが麻痺させてくれたが、この場では半裸の女性達と一緒にいうことでBシステムが好みそうなシチュエーションの真っ只中だ。

だから視界をバスタオルで奪ってくれたことには感謝するがあああああって、ちよつと待て! 誰だ! 今IS展開したの! 専用機持ちか!?! ってことは・・・ダリル先輩!?

「悪いなクレ坊。フォルテのダチのテメーを殴りたくは無いが、ことがこただけにお咎めなしってのもな。我慢してくれよ?」

目の前の光が遮られ、ダリル先輩が目の前に居ることが分かる。

まあ、そうなりますよね。でも、先輩の専用機「ヘル・ハウンド ver 2.5」の拳って凄いいゴツゴツしてるんだよね。

ISの絶対防御に頼るっていうのは・・・まあ無理か。

かくして、俺の学年別タッグマッチトーナメントは幕を下ろすこと

となる。

ISは戦闘のお陰で大破、修理中。

得たものは義妹と罰掃除とつまらないラブコメ要素。

まあ、それでも去年一年よりかは良い一年になりそうな予感だった。

季節ももうじき梅雨が終わり夏。

やって来るぞ、あの悪魔の期末テストが。

ああ、ダリル先輩の異常に大きい胸が腕を振り上げた拍子に重そうに揺れるのが影でわかる。

だが、俺の心臓はピクリともせず、自分でも止まってるんじゃないの？と思うほどだ。

これは、きつと、諦め。

それじゃー行ってみよー。さん、にー、いち――――ぐ
ふっ……。

@

「……やはりな」

「なにか見つけたんですか織斑先生？」

「……いや、見間違いのようだ。失礼」

「?? そうですか……?」

暗い地下格納庫の中、山田先生自ら修理しているのは白銀に輝く装甲、コアと切り離して具現化させた瞬龍の装甲だ。

千冬は監視の意味でその作業を見守っていた。

その最中に瞬龍の戦闘データに残っていた今日の戦闘データを見ていると、エネルギー推移の欄におかしな記録を発見したのだ。

(エネルギー残値がマイナスに振りきれている……。となるとやはりあのISはオリジナルの――)

オーバーリミット
——
現界超越か。

千冬は眉を寄せると迷わずその記録を削除。記録は誰にも見られることなく、闇に葬られたのだった。

三卷

目指すは南の島！

前回に引き続き今回。

俺は三年のお姉さま方に追われていた。

「待ちなさい柊！」

「だったらその手の棍棒を捨ててから言えッ」

現在位置、IS学園学生寮三階東棟。

俺、柊クレハは覗きの冤罪から逃れるために全力で逃げていた。

追跡者は全部で15人ほど。決して少ないとは言えない。

だが、こちらにも逃げ切る手が無ければ無謀な逃亡劇に身を投げたりはしない。

俺は利き目である右目で、意識して周囲を把握する。

後方から五人。得物はそれぞれ木製バツト棍棒と柄長モツプ槍兼薙刀だ。

残りの十人は方々に散って俺の事を待ち伏せしてるんだろうが、その潜伏場所はバレバレだ。

まず、どうやら五人一組で行動しているらしく、背後にいる組の他に、玄関先に一組。屋上に一組と言った配置だ。

どうやらあらゆる意味で経験豊富な三年生は俺が寮から脱出すると踏んでいるらしい。

しかし、だ。

現在俺のIS瞬龍はコアから装甲を剥ぎ取って修理中なので展開は愚か、起動すらもできない状態にある。

つまりハイパーセンサーは使用不可の状態にあるわけだが、なぜ俺に相手の配置場所がわかるかという点。

あつたのだ。俺にも。

—— 推奨 左折 ——

視界の右端に瞬龍の表示するものと同じような文章が矢印と共に表示され、その矢印は次の曲がり角を左に曲がれと言っている。

ヴァーダンオーソジェ
超界の瞳。

人間の体に疑似ハイパーセンサーを埋め込んだ瞳の事を指して使う用語である。

昼間の件で晴れて俺の妹というポジについたラウラ・ボーデヴィツヒが同じ瞳を持っていて、高速戦闘下での判断や状況の分析力に大きなアドバンテージを生み出すちよつと危険だが便利な技術、だと俺は教えられた。

ラウラは拒絶反応からかオンオフが効かなくなってるらしいが、俺はそんなことはなく、覚醒した瞬間からその機能を十全に使いこなせているカンジだ。

今まで発動しなかった理由は分からんが、ラウラが不完全ながらもVTシステムを発動させたことが関係あるのかもな。共鳴とか。

俺は脱衣所の鏡で、自分の右目が銀色に輝いていることに気づき、直ぐ様逃亡に踏み切ったというワケだ。あのまま捕まったら何されるか分かったもんじやないしな。

左に曲がると開け放たれたままの開放窓があり、そこから飛び出せと眼は言っている。

ハイパーセンサーと違ってイチイチ命令してくるのがちよつと腹立つ。

窓のサッシに足をかけ、三階下のアスファルトを確認するとそのまま飛び降りる。

上から女子の叫び声が聞こえるぜ。

——— 無衝ッ！ ———

俺は着地する瞬間に全身の関節を使い、衝撃を和らげ、打ち消す。小学生とかが、高いところから飛び降りるときに痛みを和らげるアレの高難易度版ってとこだな。前々から瞬龍にもお勧めはされていたが、今回初めて使ったぜ。マジで痛くないのな。

痛みが無いのなら直ぐに動き出せる。と言うわけで俺は年上の女性たちの怒りのこもった文句を聞き流しながら、自室に戻る算段を立てるのであった。

@

三階の自室を外から眺めて、どうしたもんかと頭を悩ませている

と、部屋の窓が開けられているのに気がついた。

そして・・・なんだか、甘酸っぱいような中華風の・・・とにかく旨そうな匂いが漂ってきている。

俺はまさかと思いつつ、寮のデザイン上の窪みに手をかけ足をかけ、よじ登っていく。なんで部屋に戻るのにこんな苦勞しなくちゃいけないんだよ・・・。

やっとの思いでステレンレスで出来た窓枠に手が届き、顔をエイヤツと出すと。

「お帰り。やっぱり覗き魔ってあんたのことだったワケねクレハ」

鈴が、ベッドに寝そべって俺を待っていた。

「違う。誰が悪いかで言えば、間違いなく一夏だ」

「なんでアイツが関係あるのよ?」

「ここでちよろつとデュノアと混浴してたことをバラしてやろうかと思ったが、鈴はデュノアが女であるとは知らない。信憑性が無いので一蹴されるだろう。」

「まあいいや。それよりクレハ。まだ食べてないでしょ。あんたのぶんにはパイナップル入れたあげたから早く食べましょ」

見ると、鈴が指し示すテーブルの上には少し冷めたのか微かに湯気を立ち上らせる酢豚と白いご飯が盛り付けてあった。

「お前って、見た目に似合わず家庭的なところあるよな」

「っ、かつ、家庭的!? そう!?!」

「ああ、マジもマジ。大マジだ」

意外な言葉に驚いたのか、珍しく激しい動揺を鈴が見せたので、俺も少し大袈裟に褒めておく。

鈴は最近、積極的に料理をする。

しかも楽しそうなのだ。

前に一度どうしてそんなに楽しそうなのか聞いてみたが、

『あ、あんたは黙って食べてりや良いの! これは・・・そう! 試食! あんたは試食役よ!』

・・・とのこと。

やっぱり一夏に作ってんのかな。

意を決してキスをした身としては中々複雑な気分だぜ。鈴は覚えてないだろうけど。

「ふ、ふーん……。家庭的、家庭的ねえ……。」

鈴がそう呟きながらニヘラニヘラ笑うので俺は見えていられなくなつて、手早く制服を脱いで部屋着に着替えると酢豚に箸をつける。

うーん、やっぱりうまい。パイナップルが入って肉の柔らかみが増してると思っていたのだが、以前と変わらない程よい柔らかさだ。鈴の酢豚にパインは関係ないらしい。

つて。

「鈴。そんなに凝視されたんじや食いにくくて仕方ない。お前も食えよ」

「感想は？」

「？」

「感想は？」

ん？ なんだ？ 鈴が少し上機嫌だぞ。

家庭的発言がそんなに嬉しかったのか。

「ああ、上手いぞ。やっぱり中華は鈴に限るな」

俺がそう言うのと鈴はまたニヘラくつとニヤニヤし始める。

なんだこれ。いつもと違いすぎて調子狂うぞ。ツンはどこいった。

飯を食い終わると、風呂に入っていないなかつた鈴は風呂へいくと言い出したが、残念ながら大浴場は俺の件があつてか、三年生が自主的に閉鎖。消毒が行われているという。酷い。

そう言うわけで今日は鈴が部屋のシャワーを使うことになったんだが、如何せん。部屋が狭くて音がよく聞こえてしまう。

テレビをつけてシャワーの音を掻き消そうとしてみたがバラエティー番組が思いの外面白くなく、直ぐに消してしまう。つて、消したらダメだろ。

あー、なんだこれ。どうした俺。

鈴は既にBシステムのトリガーとしてコアを登録されている。突発的な発動は起こるはずが無いのに、なんでこんな緊張してるんだ。ただ珍しく鈴が部屋のシャワーを使つてるだけじゃないか。

そうだ。きつと疲れているんだ。思い起こせば俺は今日の夕方まで、戦闘のシヨックで四肢に力が入らない状態だったんだ。そこから復帰して直ぐに激しい逃亡劇だ。疲れがあるのは仕方ない。

学年別タッグマッチトーナメントは一回戦はすべてやるらしいが、どのみち俺は瞬龍が動かせる状態に無いので、出ることは出来ない。休もう。泥のように。

俺は鈴に一言掛けてから布団に潜り込む。返事は聞こえなかったが、返ってくるまで声をかけ続けるのもめんどいので一度だけにする。

明日から二日で全ての試合を消化する予定だ。丸々二日、回復に当たててやろう。

そんなことを考えながら俺は眠りにつくの待つ。

.....。

.....。

.....お、シャワーの音が止まった。

にしても全然眠れない俺。

シャワー室から出た鈴は、モゾモゾと、ぱ、パジャマを来ている…

!?

衣擦れの音がやんだかと思うと、続いて、パチン。

スイッチを切る音がして部屋の灯りが消される。

スイッチを消したら鈴はそのまま、とこ、とこ、と危なっかしい足取りでベッドに向かっている。

どうやらこのまま眠るみたいだ。夜更かしする鈴にしては珍しい就寝時間だな。

俺もやつと眠気が来たところだ。このまま寝てしまおう。

おやすみ。鈴。

パチチツ!

うっ、なんだ!?

顔面がなにか硬い糸の束のようなもので叩かれたと思ったら、続いて……どっしーんと何か少し軽いくらいの質量を持った物体が俺の上に多い被さった。

なんだこの糸。えらい良い匂いがするんだが……。

まさかとは思うが、フォルテ……はないな。昼間ベッドの上から転げ落としたし。

じゃあ一体何なんだ。

俺はその束を何本か纏めて掴み、くいくいと引つ張つてやる。

半分寝てたから視界が戻るまで少しかかるかもしれないが、耳が。

「……………んにゅ……………くふ……………」

という声を腹の上の物体が身動きすると共に拾い上げた。

……………いや、実はもう大体予測ついてるんですがね。認めるのがちよつと怖かった訳ですよ。

さつき俺の顔を叩いたのは彼女の黒髪。腹の上に有るのは身体を丸めた彼女自身。

その彼女とは……………。

「寝ぼけてんのかよ。鈴……………」

上半身をおこし、闇になれた眼で顔を確認した俺は静かに嘆息した。

まあ、それも仕方ないか。

ダメージレベルCの状態であそこまでの戦いを繰り広げたんだ。

表には出さなくとも鈴自身はかなりの疲労を感じていたのだろう。

シャワーが長くて、返事がなかったのも既にシャワーを浴びながら意識が朦朧としていたからに違いない。

丸で猫みたいに丸くなって眠る鈴の前髪を払ってやると、くすぐつたそうに声を漏らす。

……………髪の毛引つ張つて悪かったな。

俺は鈴を抱き抱えると隣のベッドに運ぶ。

あどけない表情で眠っている鈴は拍子抜けするほど軽く、そして可愛らしかった。

だからだろうか。いつもはドキドキするようなことが多い鈴相手でも、平然と触れることができる。抱えることができる。

まるで二年前のあの時に戻ったような感覚がして、俺は安心したのだ。

もうじき七月だ。暑いと思うので布団はかけず、タオルケットを掛けておいてやる。

共に双龍を追うパートナー。風 鈴音。

俺は彼女と共にどこまで行けるのか。

考えがまとまらないまま、俺の思考は眠りの底へ沈んでいった。

@

七月初旬と言えば、どこの学校でも忌み嫌われるアレがある。

そう、期末試験だ。

一年生は試験が終わると臨海学校が控えており、全体的にウキウキとした雰囲気で行われた。

しかし、IS学園の臨海学校とはただの外泊訓練じゃない。

ISの訓練をアリーナでなく海上という非限定空間で行うことを目的とした、レッキとした課外授業なのだ。

しかし、やはり去年まで女子高だったせい、一日目は完全フリーとして自由時間が設けられている。

海に面した旅館に止まるので、泳ぐなり遊ぶなり好きにして良いのだ。

去年の俺は出発直前に女装がバレ、千冬さんの気遣いにより欠席が認められていたが、今思うと行けば良かったな。臨海学校。

ていうか、体育の着替えとかちゃんと別室でやって、あられもない姿は微塵も見えていないのにあそこまで滅多うちにしなくても良いだろ。水着姿のひとつや二つ、見ておかないと割りに合わない気がしてきたぞ。

そして、そんな後悔と共に期末試験が終わった三日後。

俺は久しぶり轡木用務員に呼び出しを受けていた。

「こうやって話すのは久しぶりですね柊くん」

「そう、なりますね・・・」

放課後、西日が差し込む用務員室で俺たちは向かい合って座っていた。

だが、今回は二人だけじゃない。

「・・・」

轡木用務員の背後には何もしやべらないが、大倭先生が控えているのだ。

珍しい組み合わせもあったもんだと思ったが、呼び出された理由が分からないので先を促す。

「君を呼び出したのは他でも有りません。君がこの学園に居るためにこなしてもらおう任務の話を持ってきたのです」

きた。来たぞ任務が。

四月の始めに警備の仕事させられて以来の仕事だ。

俺の存在は外部から秘匿されていて、それ故に学園で俺にさける予算もかなり少ない。不自然な金の動きはめざといやつにはすぐわかるからな。

だから俺は、自分の学費、そして生活費は自分で稼いでいる。学費だっていくら国立でもそれなりにかかるし、食堂だって定期的に食費を出して食っている。意外と苦学生なのだ俺は。

「今回の仕事はISを出来るだけ使わないで進めてほしい仕事です。出来れば、ただの一般人、まあ場合にあっては身分は偽装ということをお願いします」

ってことはどこかの組織に潜入でもするのか？

「それでは、これは極秘任務という訳ではないので簡単な内容をここで説明しておきます。受けるのであれば資料を送るので改めて確認しておいてくださいね」

と前置きした轡木用務員は、割り気安い雰囲気で喋り出した。

しかし、やっぱりこの有無を言わせない一方的なしゃべり方。そこが見えなくてそろそろ恐ろしいぞ。

「今回の仕事はあるIS実験の監視任務です。イスラエルとアメリカが共同開発している第三世代の噂は聞いたことがありますか？」

「はい、一応あります」

「よろしい。そう言うわけである組織から秘密裏にその実験を監視してほしいと依頼が来たのです。もちろん学園が出せる腕利きでという条件は有りましたが」

「待ってください。監視ってことは良いんですが、俺が出て大丈夫

「なんですか？」

「はい、先方は経過報告だけ回してくれば良いという事なので、調査する人物の顔は出さなくても良いといってくれました。学生の身分に潜入なんてやらせるんですから当然だと私は思いますがね。．．．それで、どうですか？ やるか、やらないか」

内容はＩＳ実験の監視および報告といった簡単なもの。一年生でも出来そうだ。

だが、監視するのはＩＳの実験。

過去に俺が経験した惨劇も実験中の事だったため、俺は少し奴等の情報が掴めるのではないかと考えた。

「はい、やります。二年終クレハ。任務を受注します」

「よくいってくれました」

轡木用務員は朗らかに微笑んだが、その糸目には俺がうつっているのかすら定かではない。

「それでは大倭先生。後は頼みます」

「分かりました。轡木用務員。お任せください」

上司つぱく大倭先生に後を一任した轡木用務員は話は終わりだとはばかりに新聞を広げる。

「ほら、柊くん出るよ」

「えっ、ちよつ大倭先生？」

足早に近づいてきた大倭先生は俺の腕をひつつかみ、用務員室からつれて出す。

「ふう、やつぱりあの人の前だと肩凝るなあ．．．柊くんもんで」

「イヤですよそんなの。．．．で、仕事の場所は？」

話の流れから見て、目の前で肩をグルグル回す大倭先生が俺のサポーターに付くんだだろうが、場所を伝えられなかったので聞いてみると。

「ん？ ハワイ」

やったぞ俺。臨海学校よりグレード高いじゃないか。

なーんて喜べる展開があるはずがないことは、今の俺でも薄々予想は付いていたのだった．．．。

蒼の空、そして瞳 1

「・・・というわけで、ハワイに行くことになった」

夜、俺は食堂で飯を食っていた一年生メンバーに取り合えずそう伝えた。

「」「」「」「」「」「」「」「」

全員が唾然とするなか、一夏が先んじて口を開いた。

「・・・・・・・・左遷、ってやつですか?」

「違う。ていうか学生に左遷なんてあると思うなよ」

「でも先輩問題起こしますし・・・・・・・・」

「アレはお前がカンバン片すからだろ!?!」

一夏のボケに応戦していると、意外なことに狐うどんをフォークで食ってるセシリアが。

「まあ、クレハさんの力が学園側に認められつつあるってことですね。喜ばしいコトですわ」

なんて言っとうどんをちゆるちゆる食い進める。

「えー、でもたしか記録でしか知らないけど、クレハって一夏に負けるんだよね? 大丈夫なの?」

「デュノア、負けた言い訳はしないがちよつと黙ってような?」

「ふむ、兄さんの実力が認められたのは確かに喜ばしいことだが、一緒に海に行けないとなると少し寂しいものがあるな」

「ラウラ、どのみち先輩は二年生で臨海学校には行けないのだぞ」

「ん、それもそうだな・・・・。時に兄さん、軍のIS実験と言いましたか」

「ああ、日本のお偉いさんが監視にいつてこいつて言ってるらしい」

サラダをむしゃむしゃヒツジ見たいに食うデュノアに、ソバのかき揚げをサクサク食うラウラ。

箸と一夏だけはちゃんとした定食を食ってる。

「・・・・・・・・で、帰りはいつ頃になんのよ?」

ラーメンどんぶりを抱えた鈴がスーパークさい息を吐きながら尋ね

てくる。

「多分だが、お前らが臨海学校から帰るのと同じくらいだと思う。予定通りに進まないこともあるだろうから一日二日は違うかもしれないがな」

「ふーん．．．」

そう言つて再びどんぶりを傾ける鈴。

？ 質問の意図がよくわからなかったな。

「あつ、もしかして鈴。クレハに水着見てもらいたかつたとか？」

「——ブツ！ えほえほえほっ！ ちつ、違うわよシャルロット！ 変なこと言うんじゃないわよ！」

顔を真っ赤にして咳き込む鈴。

そう言われると、つい、本当について想像してしまう。

まず俺の脳内に登場したのはイメージ的に青い水着に身を包んだセシリア。

お嬢様然とした振る舞いとはうって変わって自己主張の激しい白い肢体がとても眩しい。アリだ。

続いて登場したのはイメージ的に白か控えめな赤い水着を着ている箒だ。

欧州人であるセシリアを凌ぐほどの弩級巨砲を備えた身体を恥ずかしそうに隠している姿が容易に想像できる。これもアリ。

そして三人目のラウラは．．．．．。

．．．．．あれ？ どうしたんだろうか。スクール水着以外のイメージが湧いてこないぞ。まいいか。妹だし。

これ以上は倫理的によろしくないという判断のもと、一部マニア向けにアリ。ということにしておこう。

そして四人目のデユノア。

天真爛漫な笑顔の裏に隠れた少し小悪魔っぽい性格が、オレンジ色のビキニを際立たせている。ギャップ、というやつかな。まあ、アリだ。

ていうかこのイメージ。なんか知らんが勝手に超界の瞳が

——イメージ画像でお送りしております——

って本当に合成写真を写してるんだけど。ナノマシンかなんか知らんが無駄に高性能だな。

そして最後に鈴。

長いツインテールを潮風になびかせ佇むその身体は上から73、6

5

「あんだ、すつごい失礼なこと考えてない？」

「え……あ、凄い残念だとは思ってる……って何でもない！」

「？ 残念？ ……どういふことよそれ？」

しまった！ 勘づかれたか!?

俺は急いで瞳をもとに戻し、すぐさま退散する。

「じゃっ、そう言うわけで行ってくる！」

『いつてらっしやーい』

五人ぶんの声を背中に浴びながら、俺は次の人物のもとへと向かった。

@

「やったね……クツちゃん！ 久しぶりの大仕事……だね」

「ああ、簡単な任務らしいけど、気は引き締めなくちゃだな」

「うん……。クツちゃんは凄いんだから……。怪我だけは、しないでね？」

「ああ、また怪我するとお前が五月蠅くなるだろうからな。気を付けるよ」

雨の部屋を訪ねると、もうすでに知っていたのか、雨が弁当抱えて待っていた。

飛行機の中で食べて、とのことだったがどうせ荷物チェックで没収されるのでここで食うことにした。

久しぶりに摂る雨の料理。

中華は鈴の分野だが、和食は雨だな。ていうか雨はオールジャンルをソコソコのクオリティーで作る。

セシリアに少し技術を分けてやってくれよ。サンドイッチスゴク不味かったんだからな。

食事も一段落着いたとき、俺は自分がイヤにリラックスしているこ

とに気がついた。

「・・・やっぱり、雨といると落ち着くな」

「そ、そうかな・・・？」

「幼馴染みだし、やっぱり空気があつてんのかな？」

「お、幼馴染み・・・」

そう呟き、神妙な顔をする雨。どうしたんだろうか。

そして俺は前々から考えていた事を提案する。

「あ、そうだ。俺夏休みに実家に帰ろうと思ってるんだけど、雨はどうするんだ？」

「」

「・・・雨？」

どうしたんだろうか。一瞬で雨が固まった。

驚いた様子でこちらを見ているが、なにがそんなに驚くことなんだよ。

もう3年以上も親の顔を見てないんだぞ。そろそろ帰らないとダメだろ。

最後に会ったときに見た両親の顔を思い浮かべる。

・・・ヤバイな。もやーつとしか思い浮かばない。瞳で記憶検索を掛けてもエラーを吐き出しやがる。ほとんどの忘れてるってことか。

「で、お前は どうする雨？」

「」——わたしは、帰らない

「え？ 意外だな。雨が実家に——」

「だから、クツちゃんも帰らないで」

怒ったような、知られては不味いことを知られてしまった子供のような顔をした雨。

切れてしまいそうな緊張感のせいで、俺は声を出すことができない。

なんだよ、何に怒ってるんだよお前は。

すると雨は、ハツとして照れたようにパタパタと両手をふる。

「——あ、えーつと、わたし・・・クツちゃんにIS操縦・・・教え

てほしいなー……んて……だめ？」
なんだよ。

思いの外可愛い理由に、俺はズルッと転けそうになった。マンガか。

「……ああ、わかった。約束するよ」

「うん、ありがとう……」

指切りを交わした俺は、そのまま雨の部屋を後にした。

@

アメリカ合衆国ハワイ州、ホノルル。

現在地。ホノルル国際空港。

俺たちは日本をたつてから、ここの空港に降り立っていた。

「んで、なんでいるんだ湊」

「別に、ただ私もサポート要因として呼ばれたので来ただけです」

俺は横にいる蒼髪の少女を見て言う。

飛行機の中では見なかったのに、なんで今合流したんだよ。驚かせるな。

「いやー、ごめんね柊くん。伝え忘れてた」

あんたもう教員やめて兵士やつてりや良いのに……。

天候はカラッとした晴天。やはり南国だ。

海に面した空港なので強烈な潮風が鼻に突き刺さるような感覚を覚えさせられる。

実験を行うと言うアメリカ軍基地は、このホノルル国際空港と滑走路を共用しているヒツカム空軍基地で、三日後の実験日は一般人を立ち入り禁止にするらしい。

つまり、一般人に紛れ込んでも任務の遂行は不可能と言うわけだ。

そこで大倭先生が考え出した方法はこれ。

「Hey! Are you students in our school?」

英語で黒く焼けた大男がこちらに向かって叫んでいる。

見れば、その男の回りは俺たちと歳がそう変わりなさそうな男女の集団で溢れかえっていた。

そう、学校。

大倭先生は学校のインストラクターとして、俺たちは一般訓練生として、アメリカ軍のキャンプに潜入するのだ。

これなら軍の施設を彷徨いても多少は気付かれないだろうし、基礎体力の増強にも繋がる。

さらに言えば、今年は偶然、狙撃のプロがホノルルにいてキャンプの教官として候補生の訓練を監督するそうなのだ。

俺にとっちゃどうでもいいし、むしろ反対したいくらいなんだが、湊がプロの狙撃主と聞いて興味を持ったらしく、頑としてこの方法を採用しようと言ってくる。それに俺は負けたと言うわけだ。

俺たちは更に怒られないように駆け足で男のもとに向かう。

「ん？ アジア人か。珍しいな。名前は」

よし、瞳が英語を字幕翻訳してくれてるぞ。

しかも喋ろうと頭に浮かべた文章を自動で翻訳してくれているので、しゃべるぶんにも問題はなさそうだ。

「柊 クレハだ」

「・・・渚 ミナト」

「・・・よし、全員揃ったみたいだな。全員荷物を持って！ 宿舎に移動するー！」

『イエッサー！』

あ、やっぱりこれなのか返事。

宿舎は空港に隣接された施設の中にあって、丁度軍の格納庫とは滑走路を挟んだ反対側にあった。

五人組の部屋わけと仮のチームを編成されるとすぐに訓練服に着替えるという指示があつた男から出された。

「・・・どうしたの」

偶然同じチームになったミナトも迷彩柄の訓練服に身を包んで駆け足移動している。

「いや、仕事とはいえ、運動してるミナトを初めてみるなーって思っただけだ」

「私だって運動くらいする」

何故かヘソを曲げたミナトと共に芝生の敷いてある運動場へ移動

し、整列する。

暑い。瞳の情報によると今日は35℃を越している暑さのようだ。大丈夫なのかこの暑さ。

と、俺が危惧していると三人の教官の登場だ。

勿論一人は大倭先生だが、もう一人、あの人が狙撃のプロって奴だろうか。

階級章から見て、あの大男の教官が伍長。大倭先生は仕方ないとして、あの男には階級しようがないぞ？ どういうことだ。

「それではお前たちにキャンプ中に使われる識別番号を与える！ 耳をかつぽじってよく聞けッ！」

『イエッサーー！』

口悪いな伍長教官殿。

左から順に番号が言い渡されて行き、各々復唱して次にうつる。

・・・きた、俺の番だ。

「柊クレハ、908。いいな」

「柊クレハ！ 908番！」

「よし、次ッ」

ふう・・・。こえーあの教官。デカイからなおさら迫力があるぜ。

それにしても偶然って面白いな。

908、ね。

「おい、ちよつといいか。おい」

俺の番が終わったとホットしていると、隣の白人が声をかけてきた。うおつ、すげえ筋肉質だぞ。

「なんだよ。暑くてイライラしてんだ。ちよつと黙ってろよ」

「おいおいなんだよその凝り固まったような英語は。発音がなっちゃんないないな。日本人か？」

どうやら隣人は大雑把な性格らしい。

「そうだ。よくわかったな。外国人は俺たちの顔なんか見分けがつかないもんだと思ってたぜ」

「言ってくれるじゃないか」

「そこっ、喋るんじゃないッ！」

あ、大倭先生が形だけでキレた。

取り合えずピシツとしておく俺たちだったが、しばらくするとまたもや向こうが口を開いた。

「俺はボブ。ボブ・アンダーソンだ。似合わない名前だろ？」

「ああ、ボブっていうのはもつとゴリゴリした顔のやつが名乗るもんだと思うぜ」

「ハハハッ！　そう思うだろ？　だから呼ぶならサムって呼んでくれよ。母さんと神父様にや悪いが好きなんだよサムが」

「了解した。サム。クレハだ。宜しくな」

教官に見られないように握手を交わす。

まさかこんなところで外人の知り合いができるなんて思わなかったぞ。

それからしばらく待機していると、何処からともなく一組の男女が現れた。

「だからアイスはだめだといっているだろう。これから仕事なんだ。お前も教官なんだからしゃんとしてろ」

「うー、でもでも、あそこのアイス屋さんの限定フレーバー今日までなのよさー！」

「だったら連れてきたあのメイドにでも頼めばいいだろ。ていうか、体調管理はしてるんだろ。増量してたら朝のランニング量を増やすぞ」

「うええええん、お兄ちゃんのバカあああ！」

つておい、あれ日本語だぞ。

よく見れば男の方は三十代半ば。女の方は二十歳位に見えるぞ。

「む、なんだ貴様ら。ここは立ち入り禁止だぞ出て行けッ！」

二人を発見した教官が大声をあげた。

大倭先生が「9029・・・まさかあんなやつらがいるなんて・・・！」なんて驚愕してる。

「せっかく来てやったのに出ていけとはご挨拶だな伍長。引退した身なのに無理して来てやったんだぞ？　両手を上げて歓迎するのが普通じゃないのか？」

「ええいだまれッ！ おいコイツらを摘まみ出せ！」

「むー、お兄ちゃんコイツちよつとウルサイのよ？」

二十歳くらいの女が少女のように耳を塞ぐ。

整列している全員が固唾を飲んで事の行方を見守っていた。

「なつ、わ、私はあの白騎士相手に勇敢に戦った戦闘機パイロットだぞ！ それをうるさいとは何事か！ 日本人風情がふぎけるなッ！」
手が、出た。

教官は左足を踏み込み、十分二人を殺傷圏内に入れると、そのまま右手を突きだし、男の顔に拳を放つ。

「——マキナ。やってみろ」

「お任せなのよさー！」

しかし、拳が届く一瞬前、素早い体裁きで男の前に出た女が拳を弾き、逆に右の掌底を教官の胸にはなった。

パンツつと小気味よい音が響き、教官がフラフラと後ずさる。

「うぐつ・・・うつ、なん・・・なんだお前らは・・・！」

「よし、まだ喋れる元気のある彼に一つ技術を教えてやれ。相手との距離を詰める基本的な武術だ」

「いくぞオラー！」

その時、掌底を繰り出した姿勢のまま、女が姿勢を低くすると、一瞬で教官の懐に潜り込んだ。

どうしたんだ教官。アンタなら反応できない速度じゃ無かっただろ？

「なつ、いつの間に・・・!?!」

それが、教官の放った言葉だった。

女はそのまま教官の袖と腰のベルトを掴むと、くるんっ。

キレイな弧をえがいて教官を一回転させてしまった。

「縮地だ・・・！」

「？ なんだクレハ。縮地ってのは？」

同じように今の現象を不思議に思ったらしいサムが尋ねてくる。

「縮地ってのは日本の武道の技術で、一瞬で距離を縮められたような錯覚を相手に与えることからその名がついたんだ。たしかアメフト

の走法にも同じようなのがあったと思うぜ」

「はー、縮地、縮地ねえ…。ようは一瞬でトップスピードで走って教官をのしたってことか？　すげえなああのちび」

「誰がちびじやー！　ー！　ー！　ー！　ー！　ー！」

マキナと呼ばれた女が叫んだ。

「おいサム。ちつとは声を抑えてくれよ。俺まで怒鳴られる」

「心配せずともさつきからこそそそやってるのは聞こえてるぞボウズ」

うっ、バレてる。ヤバい。

男は俺たちの前に立つと女共々胸を張った。

「このとおり、諸君らの教官は訓練中の事故に見舞われたので、この俺が諸君らの指導を引き継ぐ！　心して着いてこい！　返事はどうしたア！」

『サー！　イェツサー！』

—— ソノ オトコ ガ レイノプロ ダ ——

—— マジ デスカ ——

「フム、和文モールズ。それも随分と内輪の特性があるものだな。あそこのインストラクターはお前のなんだ？」

うおっ！　すげえな。この人。IS学園の二年で習う暗信を一発で見抜きやがった。

—— アヤシマレルナ、ヤリスゴセ ——

「いえ、彼女とはただの旧知の仲なだけであります！　同じようなミリタリー好きのため、オリジナルを作っていました！」

「……ふん、オリジナルの信号か。まあ珍しいものでもないな。悪かったな変に勘ぐってしまっただけ」

「いえ、問題ありません」

男が振り返った瞬間、瞳が妙なデータを出してきた。

—— 右腕、肩口から全てに金属反応。義手の可能性。

腕がないってことか？　何者なんだよあの二人。

「よし、それでは今日のメニューを発表する！　嬉しいとは思いますが騒ぐなよ。騒いだら倍の量を足してやる！」

ゲエツ、きつと鬼軍曹だぞアイツ。

見れば隣のサムも苦虫を噛み潰したような顔をしている。

そして、その新教官は。

「寝ろー！」

そう、叫んだ。

『……はい？』

「はいじゃない。すぐに実行に移せ。寝る場所は自由だ。木陰でも宿舎でもどこにでも行け。三日間しかないキャンプの一日目だが全部休養に充てる。日頃の訓練で疲れた身体を確りと休めろ以上だッ！」

……な、なんつー教官だ。

みろよみんなの顔。なんかもうカトウーンアニメ見たいな驚きかたしてるぞ。つて、大倭先生、あんたもか。

言われたからには仕方ない。

各々寝床を探して動き出すものもいれば、やってやんねーとぼやきつつトレーニングに向かう者もいる。

「どうするよミナト。この時間使って下見にでも行くか？」

「そうですね、ではさっさと抜け出して行きましょう」

そして二人してこそそこそ逃げ出そうとしたときだ。

「おい、お前たちはこっちだ」

「逆らわない方がいいのよさ。腕が惜しくねーってんなら何処となりと逃げるがいいのよさ」

まおうがあらわれた。

蒼い海、そして瞳 2

「あんたたちが、俺たちのサポートチーム・・・？」

例の二人に連れられて、俺とミナトは宿舎裏の木陰に移動していた。

海風が吹くそこは普段から密談に使われているようで、話が立ち聞きしにくいように木々や岩が配置されていた。

「そうだ。俺は日本国家安全保障局の指示を受けた市ヶ谷にある事務所から指示を受けてここにいます。ただ、チームについても俺はマキナの監督係だな」

教官（そう呼べと命令された）はその辺の石に腰かけて言う。

因みに荒事に対処する係のマキナ副教官殿は「飽きた」の一言と共にアイス屋へと駆けていってしまった。

「市ヶ谷、って言ったな教官。 ってことは赤坂や霞が関ともパイプがあるはずだ。 自衛隊関係者か」

「察しが良いな柊訓練兵。 だがハズレだ。 俺とマキナの所属はもつと機密性の高い組織なんだな、洗いざらい説明してやるわけにもいかないんだ。 だけど、お前のことは知ってるぞ」IS学園二年、柊クレハ。 同じく二年、渚湊」

「・・・」

フルネームで呼ばれたミナトが教官を警戒する。

その反応、同意するぜミナト。

俺のことすら知っているってことは国連のIS委員会との繋がりが無い訳じゃなさそうだ。

委員会は双龍のことをリークしてるだろうし、安全保障局もワザワザ軍人っぽいのを送り込んでくるってことは何時後ろから撃たれてもおかしくない。 気をつけて話を進める必要があるな。

「ってことだな、俺たちの受けた指令は2つ」

教官は俺たちの反応をひとしきり楽しむような表情を見せると、指を二本立てた。

「一つ、監視任務にあたる作戦要員を基地内で動き回れるように取り

計らうこと。これについてはもう手を打ってある。こことはちよつとしたコネがあつてな。お前たち二人は士官のメシをかつぱらつたつてことにして他の訓練兵とは別行動を取らせることにしてある。好きに探つてもいいが、あまり目立ったことはするなよ。そして二つ目、件の軍用ISの破壊だ」

教官は本題に入ったように語気を強めた。

「日本のお偉いさんは今回の実験をかなり重視しているようだ。アメリカには存在の明かされない特殊部隊ネームレスの噂も有るしな。不安ごとは潰しておきたいらしい。お前たちがISのスペックを測り終えたら事故を装つて破壊するように俺は指令を受けた」

「壊す？ どうやってだ？」

「もちろん手段はある。こいつだ」

そう言つて取り出したのは小さな世代遅れの大容量記憶媒体^Uだった。

「なんだそれ？ なんのデータだ？」

気になつて聞くと、サイレンチエイサーの解析用アプリを走らせたのかミナトが答えた。

「・・・ISを自己崩壊に追い込む特殊プログラムです。かなり完成度が高いですね、どこの製作ですか」

「それは俺にも分からないんだ。上は禁則事項だといつて教えはしなかった。JBも——つて元上司も知らないと言いやがった。上層部のくせに使えんもつさりだ」

「どうでもいいことは良いので、要するにそれをISに打ち込むと勝手に壊れるつて認識で良いようですね」

ミナトが強引に話を締めると、ミナトは俺を見上げて言った。

「それではクレハさん。例のISを見に行つてみますか」

@

例のIS、正式名称「銀の福音^{シルバリオ・ゴスペル}」があるのはこの基地の第一格納庫らしく、俺たちは教官と共にそこに向かつていた。

格納庫内に入ると、慌ただしく白衣を着た研究者とおぼしき一団が回りを走り回っている。

勝手に入ってきた俺たちを咎めようとした軍人は、教官の姿を見ると急に態度を変え、敬礼し去って行ってしまった。なにもんなんだよアンタ。

「……あれが福音ですか」

ミナトの声に釣られて前を見ると、固定器具に支えられて、純白のISが一機だけ佇んでいた。

遠目だからまだ詳細には分からんが、どうやら全身装甲っぽいな。頭部の両側から足元にまで固定ユニットが設置されており、パツと見れば二世相だが、データ上は歴とした第三世代型。

超界の瞳によれば広域殲滅戦に特化した特殊射撃型で、機動力も予想スペックでは白式や、通常状態の瞬龍を余裕で上回っている。Bシステムの最大出力は知らんが、もし戦闘になんかになったら骨がおれそうなモンスター級兵器だぞこれ。

福音のそばまでいくと、どうやらGPSからマキナの反応が消えたらしく教官は大慌てで格納庫を出て行ってしまった。

え、どうすんのこれから……？

「——あなたたち、何？ 見学の子達、って訳じゃないわよね？」

やべっ、目エ付けられた!?

そう焦って声のした方にバツと振り向くと、そこには一人の女性。ネームプレートから確認すると、彼女の名前はナターシャ・ファイルス。金髪碧眼とまさに外人女性といった風体の人だ。

まあ、今の日本では黒髪黒眼の方が珍しいって言えますけどね。時代が進んで外国の血が混ざった日本人が増えて様々な色を持つ人が増えてきたのだ。

まあ、それはどうでもいいとして、問題はこれからのこと。教官のいない今、どうやってごまかせばいいんだ……？

「訓練兵さん？ アジア人とは珍しいわね。この子が気になった？」
彼女は福音のそばにいくと、その装甲をペタツと撫でる。

「えっと、もしかして操縦者か？」

「そうよ。名前はナターシャ。友人はナーシャって呼ぶコもいるけど、どうする？」

「じゃ、ナターシャさん。さつきISをこの子、って呼んだけど、なにか思い入れがあるのか？」

「ええ、その通りよ。この子は私の大切な友人なの。命だつて助けて貰ったんだから」

そう言うナターシャさんの表情は過去を懐かしむような表情だ。するとその時、格納庫内がにわか慌ただしく成ってきた。

「どうやら米軍の輸送機がこの格納庫に一時的に格納されるようだ。騒がしくなってきたわね・・・」

ナターシャさんは唇を尖らせると、改めて俺たちを見てニヤツと笑った。

「と・こ・ろ・で、あなたたち二人から微弱なIS反応が有るんだけど、どういう理由？」

腰に手を当てて聞いてきたナターシャさんの顔には、可視設定されたホログラムウィンドウが表示されていた。

@
ところ変わって基地内部のカフェテリア。

昼時と言うことがあつても、俺は半ば連行される形で席につかされた。

ミナトはというと、

「はあくっかわワイイーっ！ 何この子!? 何しても無表情なくせに確りと顔赤くなってるわよ。美少女って得よね〜！」

いや、貴女も美人だから。なんて言えるはずもなく、目の前で頬擦りされるミナトを眺めながらコーヒーを飲む。

スリスリスリーっ頬が擦りきれらんじやないかってスピードで柔肌を堪能するナターシャさんは凄く楽しそうだ。

なんかもう、俺たちのことなんかどうでもよくなつたんじやね？

「それにしても男性操縦者がもう一人居たとはねー。お姉さんビツクリ。あ、ミナトちゃん、あーん」

「私は子供ですか（モグモグ）」

「食ってるくせに何いってんだお前」

見事に餌付けされたミナトをしれーっとする。

ミナトって食事回数は少ないけど、結構食うよな。前にもかなり奢らされた記憶がある。

「で、あの子の調査だっけ？ 日本政府もそんなまどろっこしいことするんじゃないかとちゃんと申請してくれれば公表したのに。こーんなカワイイコに潜入調査だなんて許せないわね！」

俺は目的を聞かれた際に、全てをナターシャさんに話している。だってIS持つてること知られたらもう隠せないだろ。

だが、なぜか教官の二つ目の指令は知らせることは出来なかった。

「それじゃあ教えてくれるんですか？ 福音について」

「流石に無許可で教えるってのは私でもできない相談ね。あ、だからって盗み出すなんて止めてよ？ バレたら国際問題発展になっちゃおう」

それじゃあどうしろって言うんだよ。

こちららバレないように潜入したのに、初日で操縦者本人にバレるとかあり得んだろ。福音に探知能力が有ることぐらい調べとけや。

「だから、直接教えることは出来ないけど、間接的には教えてあげる」
「間接的に？ どういうことだよ」

「察しが悪いわねクレハくん。ISの能力を測るには実戦で戦ってみるのが一番よ。だから——」

「——実際に戦って稼働データを持っていけってことですか？」
「correct！」

ナターシャさんの提案はこうだ。

稼働実験本番は明後日ということになってるが、ナターシャさんは個人的に明日の夜に福音に乗り込むつもりらしく、そこで訓練ということで俺たちの相手をしてくれるらしい。

もちろん相手はミナトじゃなく俺。女の子を殴るのは趣味じゃないらしい。

って、なにが女の子を殴るのは趣味じゃないだよ。

ナターシャ・ファイルスっていったら第二回モンドグロツソ、キャノンボールファスト部門の優勝者じゃねーか。ヴァルキュリアだぞ。

「それじゃあ、明日の夜に。バイバイ」

ナターシャさんは手を降りながら、真上から陽が差す外に出ていった。

@

その後、訓練場に戻ってみると、サムが暑苦しく筋トレをされていて、誘われたが「休めつて言われたんだ。日本人は働き者だが俺は違う」といって断り、興味のあったホノルルの街へと繰り出してみた。

当然だが、俺にはホノルルの知識なんか無く、人間ナビゲーションのミナトは宿舎に戻ってしまったので必然的に瞳に頼る事となる。

空港を出て、北西に進むと観光客の溢れる街が見えてきて、俺は舗装された道を歩く足を早めた。

カンカン照りの中町に入ると、観光客向けの土産物店がたくさんある町並みだなと思った。

何となく観察するように歩いていると迷彩服で彷徨く人間が珍しいのかチラチラこちらを見てくる人がいる。

しまった。着替えてくるべきだったかな？

だが、考えても既に後の祭り。ここからワザワザ着替えに戻るとかあり得ん。暑いし。

取り敢えず近くにあった屋台でタピオカの入ったマンゴージュースを購入し、粒々した食感を味わっているとバカみたいにデカイアイスを食ってるヤツを見つけてしまった。

「マキナ副教官殿、服に垂れていますよ」

「う？うおおっ！ 私の一張羅がア！ 貴様つなせ早く言わない！」

「いや、いう前に気づけよ自分で」

「上官に向かってその態度はなんだア！」

やば、ノリで絡んでみたけど暑くてキツいなこの会話。

「あー、やっぱり絡むべきじゃ無かったな。悪い忘れてくれ」

「うきいいい！ そのしゃべり方昔のお兄ちゃんを彷彿とさせてスゴいうざいのよさー！」

なんか知らんがキレられた。アイスを持ったままブンブンするマキナにどう対応しようか迷って、ストローをガジガジやっていると不意にカップを持つ手の手首を掴まれる。

一体なんだとイラつきながらそつちを見やると、目に飛び込んできたのは赤茶色の長いストレートに白い肌。

「ちよつと貴方。女性にたいしてその言葉遣いは省みる必要が有るんじゃないかしら？」

この高圧的な口調に声。それにこの手首を掴んでいる手にも見覚えがある。

間違いないな。

どうやら迷彩服を着ている人間がIS学園関係者な訳がないと思っていたらしいが、その先入観は捨てるべきだぜ――

――サラ。

「よう、久しぶりだな。サラ・ウエルキン」

「――え」

そこにいたのは5月に学園で俺を殺そうとした、同級生サラ・ウエルキン本人だった。

変化のサラ

サラ・ウエルキン。

IS学園二年生。

双龍の関係者で五月に俺と鈴を葬ろうとした張本人。

それが今、ホノルルで俺の右手首を掴んでいる。

「終……クレハっ?」

呆然と呟くサラに俺はただ「おう」とだけ返すと、サラは弾かれるように俺から距離をとった。

「ん? なんだよオマエラ? 知り合い?」

アイスをペチャピチャしながらマキナが聞いてくるが取り敢えずスルーして、サラと向き合う。

「意外だったな。どこにいるかと思えばリゾートでバカンスか。てつきり龍砲の衝撃で野垂れ死んでるかと思ってたぜ」

「そつちこそ、そんな服着て何をしていると言うのよ? 米軍のキャンプにでも参加しているの? 私相手に二人で掛かってくるような腰抜けにしては殊勝な心掛けね」

「……………」

「……………」

「ああんツ!」

二人同時にガンを飛ばし合うと、即座に状況は肉弾戦に移る。

サラは右足を引きその場で半身になると、俺を誘うように左の人差し指をクイクイと揺らす。

舐めやがって。

その誘いに乗るべく、俺は街中にも関わらずサラに飛びかかる。てつきりISが出てくるかと思っただが流石にここでは憚られたらしい。

突き出されていたサラの左手を取ると、動きを封じるために極めようとサラの腋の方にねじり込む。

だがサラはそれを右手でパンツと払うと俺が次の動きに出る前に、どこからか銀色のバタフライナイフを展開。それで俺の首に突きを

放ってきた。

コイツッ！ 頸動脈をカツ切る気かよ!?

だが武器が出りやこつちも出すぞ。

喉元に迫る白刃を抜銃した愛銃フルサーのスライドで受けると、そのままずらして刃をトリガーガードの中に固定する。そして、銃自体を捻ってサラの手からナイフを奪ってしまう。

武器を奪われたサラは銃を警戒してか距離は取ろうとせずに、そのままキレのあるワンツーツを放ってきた。

……迷彩服の男にサマードレスを着た美少女がボクシングやっていると、夢のような光景だな。

しかし、変だ。

さつきから受けているサラの拳。

ナイフを簡単に手放した時には気のせいかと思っただが、どうやらそうじゃないらしい。

異様に、弱い。

軽いのだ。サラの攻撃が。

学園を出てからスタイルが変わってスピード重視に成ったのかと言えどそうでもなく、俊敏さには特に変化は見られない。

なにより、Bシステム未発動状態の俺でも対処できてしまう攻撃だ。

いくら男女の体格に差が有ろうとも、日頃から軍人並みの訓練を積んでいる学園生の攻撃は、ただの俺ではいなせない。

それほど、学園の女子は強いのだ。本来は。

しかし、サラは確実に弱くなっている。その理由がわからない。……ついでもうひとつ気づいたことが有るんだが……。

俺は、頭ひとつ小さいサラのジャンピング頭突きを受け止めながら聞いてみることにした。

「なあサラ。お前の胸、そんな小さかったっけ？」

そう聞いたとたんに、サラの動きが止まった。

俺の方に向ける視線は焦点があっておらず、ゆらゆらと泳いでい

る。

あー、聞かなかったほうがよかった話題かなこれ。

純粹に女性のバストがこんな短時間で縮小するなんて聞いたことが無かったから聞いてみただけなんだが、様子から察するに、これはサラのぶちギレパターン。

俺を男子だと知ったあの時の全力モードだぞ！

「ふ、ふふ。そこに、気がついてしまったのね……?」

な、なんだ!?! サラの声がいつも以上に冷たい！ 普段をマイナス20度くらいだとすると、今の声は一気に下がってマイナス273度——絶対零度級だツ！

「私の中では幾らか整理が突きかけていたけど、やっぱり無理な話よね。いくらあの人が戻ってきたからって貴方が兄を傷付けた事実は変わり無い……。殺すわ」

「ちよつ、待て！ 今なんていった!?!」

「殺すわ」

「そうじゃねえ!」

俺が空を仰いで突っ込んでいる間にサラは攻撃体勢を整えると猛然と拳打を浴びせてきた。

は、速い！

さつきよりも上がったスピードもさることながら、なにより正確だ。

正確に人体の急所という急所を突いてくる。

顎、鳩尾、喉仏、後頭部への回し蹴り……。果ては股間にまで蹴りを放ってくる。

鬼気迫る猛攻に、俺が怯みながら後退していると、不意に貫つた右胸への一撃のせいで大きくバランスを崩し、よろけてしまう。

ドンツ

ん？ なんかにぶつかったみたいだな。

何かがぶつかったと思われる背中に手を回すと……なんだこれ。冷たくてべちよつとしてる。

すると隣で俺たちのケンカを傍観していたマキナが青ざめている

のに気づき、後ろを見やると……ぶふつ、なんだよ教官
その頭！ マンガみたいアイスなんか載つけてどうしたんだ
よ……アイス？

俺は先ほど触れたべちよつとした冷たいものに舌を伸ばしてみる。
……甘い。

あ、やつべー……。

「なあ？ 柎訓練兵」

「は、ハイッ！ なんでありませんか教官殿！」

「俺は休めといったが、観光客で溢れ返る街中で喧嘩しろとは言つて
ないぞ……？ どういうことだ」

「は、ハイッ！ これは全てあの女が——って」

居ねえし！ 状況を見て逃げやがったなアイツ！

「女が、どうしたんだよ？ 柎訓練兵」

ポンと叩かれる肩。背後には正しく鬼の形相の教官が立っていた。

@

クソ提督ならぬクソ教官の三時間耐久スパリング地獄から生還
した俺は、宿舎での夕食時間が過ぎていたため、ナターシャさんやミ
ナトと来た基地内部のカフェテリアで自腹の夕食をとっていた。基
地の内部についても空港と共用だから結構人がいて、明るい雰囲気
だ。

にしても、外国のハンバーガーがかいってのはホントだったんだ
な。俺の顔の半分くらいは高さがあるぞ。

そんな日本とは違う海外の常識を再確認したと言うこともあつて
気持ちのよい満腹感を味わっていると。

「……相席、良いかしら」

「ああ、どうぞ——ってオイッ！」

危うくスルーしかけたが、目の前に座った茶髪、サラじゃねーか！
「何かしら？ 食事中は静かにしてほしいものね。女性の胸を注視し
ている変態柎さん？」

「してない。あとその呼び方止める」

サラは俺の頼みを華麗にスルーし、カウンターから取ってきたマル

ゲリータピザを口に運んだ。

いくつものチーズの混ざった濃厚な薫りが鼻を擽る。

「……旨そうだな。それ」

「貴方さっきバカみたいに大きいハンバーガーを食べてなかったかしら？ ウェイトコントロールは操縦者の基本よ」

「そんな常識、俺には通用せん。昼間の迷惑料だ。ひと切れくれよ」

図々しいとは分かっていたが、ノリとは言え、一度言い出したからには途中で「やっぱいいや」と言うのも恥ずかしく、俺はサラに皿を突き出す。駄洒落だと思わない。

するとサラは、にやつと笑みを浮かべると――なんと先ほど口を付けた食いかけをポイと載つけてきやがった。

「……おい、これじゃ食べられないだろ。口つけてないのにしてくれよ」

「あら？。それがお願いする者の口の利き方なのかしら？ タバスコが大量に欲しいならいつでも言っただろう？」

くつ、こいつ。

俺を逆に困らせて弄ってやろうと言う魂胆が丸見えだ。食べる手止めてまで俺をニヤニヤ眺めてやがる。

俺が精神的に不安定になるとBシステムが発動すると言うのを知っているからこんなことをしているんだろう。

もし俺がこのまま口をつけられればめでたく間接キスが成立。サラはどう思うか知らんが、俺の方はBシステムが発動し、妙にチャライ俺が出てくること受け合いだ。それだけは絶対に阻止せにやららん。

……。間接キス、キスねえ……。

サラの菌形がついたピザを眺めながら思い出すのは今年の5月。

俺はクラス代表対抗戦の日、サラの攻撃で負傷した鈴を助けるために瞬龍の生体再生機能を使用した。

その際に、してしまっているのだ鈴と。キスを。

ドクン

鈴は気絶してたから覚えてないと思うが、鈴の冷たく、小さな唇でも俺の心臓に火を点けるには十分な魅力を備えていた。

ドクンツ

覚えてないならいい。むしろ好都合だ。アイツは一夏を追っ掛けて日本に来たとも言ってたし、それなら俺も——って、あれ？

——心拍の急激な変化を感知。特定の脳内神経伝達物質の生成を確認。Bシステム、起動します。

気づくと、俺は変わっていた。

「……ど、どうしたのよ？ 食べたかったのよね？ 食べればいいんじゃないのかしら？」

ハッ、と現実に取り戻され、長考に耽っていた俺をサラが覗き込んでいる。

俺は逆にサラをイジメてやろうと思って、内心ほくそ笑んだ。

「——じゃあサラ。本当に食べていいんだな？これを？」

「え、ええそうよ。食べたいならそれをあげるわ」

流石に過去の出来事の記憶で俺がBシステムを発動させていると言う発想はないのか、先ほどと変わらない様子でニマニマしているサラに、お仕置きの意味も籠めて不意に囁いてやる。

「間接キス、意識しないのか？」

「ツ……って、きゃあっ!？」

身を乗り出して接近した俺から距離をとろうとサラは上半身を退いたが、椅子に座っているのだから後ろに下がるわけもなく、ひっくり返るサラ。その際スカートがヒラリと捲れていたが、そこは武士の情けだ。見ないで置いてやるよ。武士じゃないけど。

「あ、貴方、一体どうやって……？」

「そんなことどうでもいいだろ。今はこのピザについてだ」

サラの肩がピクツと跳ねる。

「サラがくれたこのピザ、旨そうだけどサラが食べてたものだから俺でも意識させられてるんだぞ？ もちろんホントに食っていいなら俺は遠慮せずに頂くぜ？」

「……(ふるふる)」

「ひよっとしたらサラはホントに気にしてないかも知れないと思ったから、断るのも嫌だしな。男らしく堂々と食ってやろうと思ったけど、

今のサラを見る限りそんなことは無いよな？」

「ツ！・・・ツ！」

自分から言い出したことなのはサラも同じだ。俺に食べ差しのピザを差し出し、俺はそれを使ってサラを逆にイジリ返そうとしている。先に折れた方の負け。

だが今の俺は些細なことなら力業で押しきってしまうB―俺。恥ずかしさなんて微塵も感じないね。

サラは自分のしたことの浅はかさを呪っている頃だろう。

「分かってやってるでしょ？」と真つ赤な顔で睨んでくるが一年間その顔でにらまれ続けてたら流石に慣れるよ。むしろ赤面も相まってカワイイ顔してるよ、とサラの美少女っぷりを再確認する余裕さえあるな。

「返事がないってことはいいつて事だよな？」

「ツ！ だ、ダツ――！・・・ううう・・・」

「・・・えーと、ホントにいいの？ 食っちゃうよ？」

「だ、ダメに決まっているでしょうツ！ この恥知らずツ！」

ようやく羞恥心が限界を越えたサラは俺の手からピザを引つたくと、パクパクゴクン。

アメリカ人のようにコーラをがぶ飲みしてピザを胃に流し込んでいる。

まるでモンハンのハンターのような食いつぷりに圧倒されていると、ピザ一枚を平らげたサラがドンツとテーブルにグラスを叩きつけた。

「い、いつか仕返しをしてあげるから、覚悟してなさいツ！――けぷう」

と、サラは可愛らしいげっぷを残してテーブルを去ってしまった。

それにしても、打算で起こしたことは言え、サラの新しい一面が見られたな。

――百合趣味でも、男に対して恥ずかしいことは恥ずかしい。っと。帰ったらフォルテに教えてやろっと！

多頭の龍

次の日の朝。

キャンプの訓練開始時刻とは程遠い午前4時。

俺とミナトは島の南端。人気の無い海辺にやって来ていた。眠い。すつごく。

ナターシャからの呼び出しじゃなかったらシカトしてるぞ。ヒトの都合も考慮してほしいね。

「……で、来てみたはいいが、どこにもいないってなんだよ」
澄んだ蒼色をしている海を眺めながら二人でその辺を歩く。

「彼女、奔放な性格に感じましたからね……」

「お前が言うってことは相当だな……」

しれつと言ったミナトに突っ込むと、ミナトはっーん。知らんぷりしやがった。」

て言うか、キャンプの早朝訓練。確か5時からだぞ。ゆっくりしてる暇少ないんだけどなあ……。

と、思っているのと、どこからともなくキーンと言う耳鳴りのような音がし始める。

「……この音……」

ミナトも気付いたようで、姿勢を低く身構える。

俺も無意識のうちに胸に手をあて、迫り来る物体に備える。

——接近。500メートル。超界の瞳、準戦闘モードで起動。

右目が銀色に輝き、周辺の警戒を強める。

——と。

「!? クレハさん後ろッ！」

「——！」

瞬時にISを右腕に部分展開すると、背後を狙ってきた相手の拳を弾くように回転ぎみに振るう。

ガンッ！

火花が散り、俺は右腕にかかる遠心力でそのまま反転させられ、敵

と相対させられる。

直ぐ様第二撃に備えるべく相手を見ると、目に入ったのは純白の装甲。

「えー。今のを止めるかあ……。ゴスペルの拳速には自信があつたんだけどなあ」

そう言いながら第二撃を放ってくるのはナターシャ・ファイルス。俺たちを呼び出した張本人だ。

ナターシャは未だ展開の終了していない俺の胴体を攻撃しようとする。ノーモーションからの蹴りを放つが、俺は右腕に時穿を召喚し、脚を弾くついでに距離をとる。

その間に展開を終了させると、ナターシャに飛び掛かろうと顔をあげるも、その必要がないことに気が付く。

「動かないでください。動けば頭部を破壊します」

スチャツとゴスペルの頭部装甲にサイレント・スコールを当てるミナト。その身体は薄く、青い「サイレン・チェイサー」の装甲で覆われている。

「……いやー。君たち意外とやるものね。接近戦とはいえ、三十秒も掛からず動きを封じられたのは初めてよ」

ナターシャは両腕を頭の上に挙げながらそんなことを言う。

「ナターシャさん、一体何の用で呼び出したんだ。こんなお遊びをするために呼んだ訳じゃないんだろ？」

「ん。まあそうね。彼の頼みじやなきやこんな朝早くに出歩かないわよ私」

「そんなズボラ宣言は良いから、早くしてくれよ。教官にどやさされる」
チラチラと視界端の時刻を気にする。

ただでさえ、サムとアツイ筋力トレーニングをする事を条件に昨日のスパーリングから解放されてるんだ。

これ以上怒らせたなら何が出るか分からんからな。あの教官は。

「男なんだからそう焦らないの。うるさいとミナトちゃんにも嫌われるわよ？」

「それについても物凄いどうでも良いから早く進めてくれ」

ジロツ。

ミナトが俺を睨み付けた。なんでだよ。

「はあー。鈍いつて罪ねえ……。まあいいわ。ミスター。来ていいわよ」

ナターシヤが岩影にむかって手招きすると、待ちくたびれたようにゆらりと姿を表す人影。

背丈は俺より大きい。頭ひとつぶん位だ。

高身長を白衣で覆っていて、技術者か、医者だと人目でわかった。

だが、驚いたのはその人物の顔。

俺は顔を見て、動けなくなってしまった。

「——久しぶりだね。終君」

癖つ毛の茶髪に、妹にも遺伝したらしい整った顔。

まさしく二年前に、俺が撃ってしまった彼女の兄。

「う、ウエルクさん……?」

死んだはずの人間が、そこにはいた。

@

そいつの姿を確認した瞬間、俺は流桜を召喚し目の前の男に照準を合わせる。

「ちよっ、クレハくん!? 何を——」

「黙っていてくれナターシヤ!」

過去のトラウマに縛られている俺は、予想外の人物の登場に激しく動揺する。

——急激な心拍の上昇を確認。Bシステム発動に支障をきたす状態です。深呼吸を推奨します。

瞬龍も俺が普通ではないと判断し、Bシステムは発動せずに処置の仕方を表示してくる。

「一体、何者だアンタ……!? なんでそんな姿をしているっ!」

「なんでって……僕の顔を忘れちゃったのかい? ウエルクだよ。僕たち仲良しだったじゃないか」

銃を向けられると言うのに飄々とした態度を崩さない。

ああそうさ。その剛胆なところもウエルクさんの特徴だったさ。

だが！

「アンタは二年前に死んだはずだ。千冬さんも死体を確認している！
なのはどうして生きている!？」

俺の発言に、警戒心を持ったのか、ナターシャやミナトはそれぞれの武器を構えた。

ナターシャは俺を少し信用していないのか、男を護るように。

ミナトは男に警戒心を持ったのか、銃を構えた。

「ちよつとクレハくん。どう言うことなのか説明出来る？ あなた、とても失礼なこと言ってる自覚ある?」

はじめて聞く、ナターシャの怒気を孕んだ声。震え上がりそうになるが、ウエルクさんの姿をした男に対しての警戒を解くことは出来ない。

「自覚はある。でも俺の記憶と違ったことが起きてるんだ。納得出来ないのは当然だ!」

そうだ。生きているハズがないのだ。

二年前、俺は確かにウエルクさんの胸を穿った。

瞬龍の暴走とはいえ、その時の感覚はまだ残っている。

あの傷では生きていられる訳がないし、現に千冬さんが全ての研究員の死亡を確認している。

なのに、何故だ！

「——生き返ったんだよ。僕は」

「!?!?!」

突然の告白に、その場の全員が目を丸くした。

「あの事故のあと、僕の身体はある組織に引き渡されたらしくてね。身体に処置を施された後、また息を吹き返した。心肺停止から蘇生までの最長記録が五時間なら、僕の場合の27日は驚異に値すると自分でも思ってるよ」

に、27日後の蘇生!?! 聞いたことないぞそんなの！

「でも、僕がこうして生きているのは事実だ。事実が事実として捉えるべきだよクレハくん」

俺はこうして諭されて、やっと現実を受け入れる準備が整ってき

た。

よくよく考えれば、死んでいたと思っていた人間が生きていたんだ。喜ぶべきじゃないか。

だが、なんだ？ この胸に引つ掛かるざわめきは？

何かに気付けそうな気がする。そんな気がしてならない。

「そうして生き返った僕だけどね。やっぱり公的には死んでる扱いになってたから仕事がなくてね。困ってたところを彼女に技術者として雇われた訳さ」

「そう言うことよ。クレハくん。ウエルキンは腕のいい技術者なんだから重宝してるの。身体もあんまり強くないし、優しくしてあげてね」

その雇った本人が確認の意味も込めてか、ホログラフディスプレイに契約書を表示させ、俺に見せてくる。

「・・・わかった。取りあえず生きてて良かったよ。ウエルクさん」

その契約書を一瞥し、ISを解く。

両手をプラプラさせ、これ以上戦闘をする気にはなれない――

「そう言えば、瞬龍。使いこなせているのかい？ 甲龍はどこにある

？ 凰 鈴音は――」

――と、思わせておいて、ウエルクさんの発言中に思いつきり部分展開した時穿で切りかかる。

これは賭けだ。当たれば過去を清算でき、外れば俺は彼を二度手にかけることになる。

だけど、確かめないわけにはいかなかった。

ウエルクさんの身体に入っているもの、その正体を見極める為に！

バシイイイッ！

ナターシヤの反応も遅れた俺の一閃は、シールドの弾ける音によって失敗に終わったとわかった。

失敗に終わった。つまり・・・

「・・・あーあ。やっぱり昔みたいには行かないね。人を警戒することを思えたのかい？ クレハくん」

砂塵が舞う中、透明なシールドに護られたウエルクが俺を睨む。

「やつぱりか。テメエらのやる処置だからマトモなモノじゃないと思ってたが、人体にエネルギーバリア埋め込むとはな……。双龍！」

「おおつ。その単語を今言うつてことは、結構知ってるみたいだね。どこで知ったのかな？」

ウエルクはバリアーに阻まれた時穿を片手で払うと、膝についた砂を払う。

「生憎だな。その身体の妹さんが色々呟いてくれたぜ」

曰く、神。

曰く、ISメーカーの暗部。

なるほど。中国の調査局もあてにできるもんだな。

死んだ身体を生き返らせる神に叛く行為に、人体にIS技術を適応させる高次技術。

どちらも、調査結果のまんまだったって訳だ。

「ちよつと！ どうしたのよ二人とも!？」

ここまでのやり取りを傍観していたナターシャが食って掛かってくるが今は相手をしている場合じゃない。

いつの間にか発動していたBシステム。

その警告が、ナターシャの福音に向かっていているからだ！

「ナターシャ！ 今すぐISをコア共々捨てるッ！」

「え？ どういう——」

その瞬間、外していた装甲が閉じ、頭部のバイザーが怪しく輝く。福音を調整したのはこの男だ。

双龍が関わっている以上、何かしら埋め込んでいるとは思ったが遅すぎた！

「な、なによこれっ?! 勝手に動いて……!」

福音はフワリと宙に浮くと、そのままホバリングを続ける。

「どうですか？ ナターシャさん。新時代の幕開けを告げる福音の乗り心地は？ バッチリでしょう?」

「ふざけないでッ！ コントロールを戻しなさい！」

ナターシャさんの激しく抵抗する音が聞こえてくる。

こ、この男ッ！

「止めろッ！」

瞬龍を展開し、学年別タッグマッチトーナメントで見せた「斬空」で攻撃する。

だが――

「次元の裂け目を利用した斬撃ですか……。こんな所ですかね？」
ウエルクは右手に銀色の剣を召喚すると、その場で一振り。

俺の斬空を相殺した！

(い、今のは……。斬空!?)

ウエルクの放った技に驚愕する。

先の発言から察するに、元々同じ技を持っていたようには思えない。それどころかおそらく武器も違うはずだ。

だが、ウエルクはコピーして見せた。俺の特殊武装の能力を。

「――男はISを扱えない。いままでそう言われてきましたね。確かに事実です。僕たち男はISを扱えません。これは元より、彼女達の力ですから」

そう言うウエルクさんの身体が、どんどん変化していく。

肌を突き破るように、深紅の装甲が生み出され、彼の身体を覆っていく。

まるで身体自体が装甲へと変化しているようだ……！

「だが、今はもう違う。技術は進歩し、篠ノ之束にも劣らない技術者が生まれつつある。」

このISは彼女が作った試作品……。行きなさい福音。甲龍を奪い。彼女の心を奪いなさい。彼の心臓は私が取りましょう。――

――牙龍

ウエルクの命を受け、福音は西の方角へと飛翔する。その先にあるのは恐らく日本。

IS学園の一年生が臨海学校の場所としている方向だ。

「ミナト！ ナターシャを追え！ 俺はこいつを相手する！」

「分かりました。ですが、その男は……。！」

わかってる、ミナト。目の前のウエルクから放たれる殺気は普通じゃない。

だから普通の俺には倒せるはずがない相手だ。

だが、こいつの狙いは俺と鈴だ。

ここでこいつを足止めするってことは、間接的に鈴を助けることになるだろう？

パートナーとしては、やっぱり相方には安全な所にいてほしいのさ。

(それに、こいつはサラのことも騙してるみたいだしな)

サラは昨日、「あの人が戻ってきた」と言っていた。

あの人、と言うのは間違いなくウエルクさんの事だったのだろう。

だが、今ウエルクさんの身体に入っているのはウエルクさんであつてウエルクさんじゃない。

俺の攻撃で確かにあの時ウエルクさんは死んだのだ。

そうでなければ、サラの言っていた強制されて研究させられていた、という昔の優しい性格と今の力に狂った性格とは、全く合わない。

——ウエルクさんではない何者かが、ウエルクさんの記憶を読み取り、演じている。

俺はそう思った。

だから、サラの為にも、こいつはここで倒す必要がある。

例え、そのせいで再び兄殺しと呼ばれようとも……な。

「クレハくん。私たちは二年待ちました。双龍にはあなた達の二対の龍が必要です。置いて死になさいッ！」

ウエルクさん。あんたの今の顔、鏡で見せてやりたいぜ。

強大な力に抗えずにいる……。

——昔の俺にそっくりな顔だよ。

飛翔する思い

深紅の装甲を朝陽に煌めかせて立つウエルク。

その整った相貌は酷く歪んでおり、かつての優しげな面持ちは微塵も感じられない。

「――牙龍、せんしん尖刃！」

ミナトがナターシャを追いかけるために砂浜から飛び去った瞬間。ジャキジャキジャキツ！

牙龍の腕が一瞬膨張したかと思うと次の瞬間その装甲が解け、手には巨大なパイルバンカーが握られていた。

――来る！

そう確信した瞬間、ウエルクは砂を蹴り俺に向かって直進しつつ、その手の杭を構えた。

「はアツ！」

気迫の籠った一撃が、盾代わりに構えた俺の時穿に炸裂する。

ビリビリ来る衝撃が消え去らぬ内に、ウエルクは先ほど展開した白銀の剣を振るう。

首に襲いかかった白刃が、絶対防御の壁さえも打ち砕くのを超界の瞳が捉えたので、俺は最低限の首の動きだけでそれを避け、ウエルクの腹部を蹴ると同時に距離をとる。

「……なんだよ、意外と武闘派だったんだなアンタ。てっきり根っからのホワイトカラーだと思ってたぜ」

「今は私たちの大願のためになりふり構っていられないのですよ。本来ならこの牙龍の使用も今回の計画の中には無かったですね」

スラストアーの圧力も掛けて思いつき蹴ったのに、当のウエルクはノーダメージ。

対する俺はパイルバンカーによる一撃で多重に展開したバリアー五枚を一気に損失。

剣に至っては絶対防御まで発動させられて、先の一瞬で俺のエネルギーは三割ほど削られてしまった。

たった二撃で三割。

この事実がああISの強大な性能を物語っている。

「……そうですね。ひとつ双龍について教えてあげますよクレハ君」
「？ 何のつもりだよウエルク。今さら年上ぶったって容赦は無しだぞ」

肌が擦りきれそうな緊張感の中でも飄々とした態度を崩さないウエルクに、つい剣呑な態度をとる。

冷静に。相手は中身が違うとはいえ、見た目がウエルクさんなんだ。

衝動に身を任せたら一瞬で刈り取られるぞ。

「いつの間にか乱暴な子に成ってしまいましたねえ……。僕は悲しいですよ」

「ほっとけ」

「………。まあいいです。クレハ君、君は双龍が何を指してISの研究を行っていると思いますか？」

「……知ったことじゃねえな」

「いやはや驚きましたね。君は敵のことを知らないまま戦っているのですか？」

俺の回答にウエルクが心底驚いた顔をする。

実際のところ、奴等が何を目的として瞬龍を作り、Bシステムを構築し、俺と言うテスターを仕立てたのか、そのほとんどが不明瞭のまま俺はここにいる。

初の男性操縦者完成の栄冠が欲しかったのか、はたまた強力なISで世界の実権でも握りたかったのか。

全くわからないが、一つだけ。

一つの存在だけが俺の戦いに理由をくれる。

「そうだな。実際俺は何も知らない。中国の情報漁っても全部が理解できるほど有能な頭してないからな。正直に言うとな俺にとつちやISだの双龍だのどうだったっていい」

「ではなぜ瞬龍それに乗り、戦い続けるのですか？ クレハ君の戦いに意味がないのなら、それは不要なはずです。即刻渡せば命までは取りま

——」

「……だけど！」

俺はウエルクの言葉を遮ると、時穿を顔の真横に構え、『敵』を見据える。

「……戦い続ける。パートナーであり続けるって宣言しちまったからな！」

直後、蹴り出した脚が砂を巻き上げ、瞳とBシステムの処理能力ギリギリの速度で突きを放つ。

首筋、脇腹、胸部。絶対防御が優先して発動される箇所を狙って打ち出される突き。

ウエルクのバンカーが剛なら、俺はスピード、速で勝負だ！

だが、ウエルクはまるで全ての突きが見えているかのように的確に対処してくる。

「なるほど、君の理念は理解しました。約束を守るのは大切なことです。それが私には分かります」

俺の時穿と白銀の剣がぶつかり合うたびに赤い火花が散り、甲高い金属音が鳴り響く。

「……ですが、君は弱い」

キンツ

突きを繰り出す一瞬前。

そのタイミングを見計らってウエルクは俺の手から時穿を撥ね飛ばした。

「……先程の続きですが、気が変わりました。ISの力を十全に引き出せていない私にも負けてしまうのですから、やはり君は瞬龍を持つ資格も、双龍について知る必要ありませんよ。クレハ君」

——しまっ——！

武器を失った俺に、ウエルクが何かを押し付ける。

その物体は円形で、俺の胸に張り付いたまま静かに光を放ち始める。

この光……前に見たことがあるぞ。

確かこの黄金の光は……『明日を奪う者』のIS剥離能力！

「そして戦う理由も個人の約束という酷く軽薄な理由です。世界と比

べては余りに小さすぎる」

光の正体を理解した時、俺の身体から瞬龍が消え去った。

同時に身体から力が抜け、前のめりに砂浜に突っ伏す。

胸を中心に暖かい何かが漏れ出していくのが分かる。

多分、心臓に埋め込まれたコアごと、瞬龍を抜き取られたんだ。

「・・・おや。そう言えば君の心臓はISの加護を受けて動いているんですでしたね。手荒なことをしてしまいました」

俺を見下ろしながらウエルクが何かを言っている。

だが、それが聞き取れない・・・！

寒い。

夏の朝は涼しいモノだが、俺が感じている悪寒は異常だ。

まるで氷の世界に一人だけ放り出されたかのような精神的な冷たさが五感を狂わせる。

頬に感じる湿った感触。

間違いない。血だ。

・・・いや、ダメだ。

意識を保て。感覚を研ぎ澄ませろ。

ウエルクをこのまま行かせてはダメだ。

間違いなく鈴が・・・。パートナーのアイツが襲われてしまう。

だから、行かせてはならない！

「・・・ッ、ま・・・て・・・！」

俺は左胸から血が滴るのもいとわずに、四肢に力を込める。

砂をつかむのは素手。身体を前に前にと押しやるのもただのブーッ。

一瞬でただの高校生と成り果てても尚、俺は瞬龍を手にしたウエルクに、手を伸ばし続ける。

「・・・ふん。そのしつこさだけは、あの女の息子らしい所ですね」
だが伸ばした手は砂に落ち、意識だけが深い暗がりにはズブズブと落ち込んで行く。

そうして俺は、

鈴を護ることが出来なかったのだ。

@

「……鈴を、護る、ねえ。」

誰かが、俺の頭の上で何かを呟くのが聞こえた。

……聞こえた？

つまり俺はまだ、死んでないのか。

沈んでいた意識がゆっくりと浮き上がってくる。

霞む目を開くと、そこにいたのは俺を上から覗き込むストレートな

栗色の髪の毛……サラ。

「なんだよ、サラか」

「どうしてそんな残念そうな声出すのよ。折角の膝枕よ？」

当たり前だ。

ていうか膝枕なんかはやってる本人が推すモノじゃなくて、してもらってる側が価値を決めるもんだろ。

そうでなくても、目覚めてから初めに見た顔が暗殺兄妹の妹とか最悪の目覚めだつっの。

むしろ色んな恨みを込めて、妹お前でもいいからグーパン顔面に入れさせてくれ。

そう頼んでみるとお返しとばかりに胸への打撃を食らったので、今更ながら生きていると確信する。

「……兄さんとやりあったみたいね」

なぜ知っているのかと聞くと、「うなされながら言ってたわよ」とサラは言った。

「お前は……知ってたのか。その……ウエルクさんは……」

「知ってたわ。二ヶ月前、学園から逃げたあと最初に接触したのが兄さんの姿をしたアイツだったの。私はその場で貴方の暗殺の失敗について聞いただされて、処分されたの。『サニーラバー』を胸ごと引き千切られたわ」

「引き千切られたって……。だから胸がそんな残念なことに……。つて拳構えんな。謝る」

「全く、死にかけても話の腰を折る悪癖は健在のようね。バカは死な

なきやなおらないって日本の諺の信憑性が薄れたわ。ま、そういう私もついさつきまでは、記憶処理の催眠に掛かってたみたいなのだけだね」

やれやれと肩を竦めてため息を吐くサラ。

その吐息が俺の鼻先を掠め、女子の生々しい匂いを感じ、思わず赤くなる。

・・・ていうか。

俺はおもむろに丸首のシャツに穴が開いていることを確認し、その下の胸に縫ったような痕があるのを確認した。

「感謝しなさい。ここが私の散歩コースじゃ無かったら貴方はの垂れ死んでた所よ」

まだ何も言っていないのに自慢げに胸を張るサラ。

元が豊満だっただけに、何も無い胸を張られると見てるこっちが痛々しくなるぜ・・・!!」

「それで、あの人たちの目的は何なの？」

「!・ そうだつ! 鈴が——ぐツ!!」

飛び起きた俺の胸に激痛が走る。

「落ち着きなさい。まだ完全に処置が終わった訳じゃないのだから。米軍の軍医を呼んだから大人しくしてなさい」

「それじゃあ尚更落ち着いてなんていられるかツ! 早く飛ばねえと

鈴が——あ」

そこで俺は、今俺の中に瞬龍が無いことを思い出した。

「どうしたのよ」

「いや、俺もIS奪われちゃまったな・・・」

ははっと自嘲する声が自然と漏れた。

「合ったとしても、今の貴方じゃ戦うなんて無理よ。傷が一気に開いて出血多量で死ぬわ。元々心臓に穴が開いた状態で生きてるってだけでも奇蹟なのに、これ以上奇蹟なんて陳腐なもの重ねないでちょうだい」

「・・・まで? これ以上重ないで? どういう意味だよ」

サラの言い方だと奇蹟が複数回起きているようにも取れる発言だ。

自分の体に何が起こったのか、俺はもしやと思いつつも、サラに訊ねていた。

「どういうも何も、貴方の心臓の付近にISのコアとおぼしき物質があつて、それが貴方の出血を塞ぎ止めていたのよ。貴方のISってホントに心臓に合ったのね」

それはつまり……。

生体再生が未だ機能している！

サラの話によると、サラが俺を発見するまでの三十分間。

ウエルクが俺からISを無理矢理剥ぎ取った結果、残ったコアの破片が機能し俺の傷の修復に努めていたらしい。

「お陰でサラの処置が間に合い、俺は一命を取り留めたんだとか。

全く、瞬龍様だよ。

起動させられれば傷の修復も一足飛びで進むのだが生憎、胸にあるのはコアのほんの一部。

生体再生も気絶する直前のBシステムの名残で発動されていたらしく、既にその機能は停止している。

ISのコアは完全にブラックボックスのため憶測でしかないが、再び瞬龍を起動するには緊急展開ではなく、コアの状態を完全なものにする必要がある。

……やっただぞ。光が見えてきた。

これを追い続ければウエルクを止められるかも知れない。

とにかく日本に戻るために、サラにホノルルから日本への出航はあるかと訊いてみるが、どうやら現在太平洋上ではIS委員会による航行規制が出ているらしく船は出せない状態にあるらしい。

ふらつく脚で立ち上がった俺は海の向こうを睨み付ける。

「くそっ、一体どうすれば……！」

超界の瞳を以てしても、遙か5000キロ先の島の様子なんてうかがい知れない。

俺が西の方を向いて唸っていると、サラがふと、眩きを漏らした。

「……どうにかならないこともないわよ」

「ほ、本当かよ!? なにか方法が・・・!」

思わず詰め寄ると、サラは驚いたように身をそらし俺から一歩引いた。

「お、落ち着きなさいよ。いきなり迫られて驚くじゃない・・・」
「そ、それはすまん。でも時間がないんだ。可能性があるなら教えてくれ!」

「・・・。なによ。完全に落ちてるじゃない」

サラは俺から顔を背けるとボソツと独白する。

「・・・? 一体何が落ちてるか知らんが教えてくれるなら早くしてくれさつさと」

「な、なあつ。教えられる立場なのにその態度ってどうなのかしら!」
いつまでたつても事が進む気配がないので、ふんぞり返って言うってみるとサラが頬をひきつらせて言った。

その態度に、俺は思わず懐かしさを感じてしまった。

思えば学園に入学してからの一年間は、ボツチ仲間であつたサラか雨としか言葉を交わしていなかった。

サラとは女装問題でひと悶着あつたので、出くわすたびに喧嘩腰になつていたが、ここ二ヶ月それが俺の生活から無くなつていたので。

だから俺は、このやり取りを懐かしく・・・型に嵌まつた、とでも言えばいいのだろうか。

とにかくここに居るのは敵としてのサラではなく仲間、唯一の友人であつたサラだと俺は認識したので。

そして思わず、笑みがこぼれた。

「なにを笑っているのっ!」

「いや別に、サラには関係ないさ。ただ今さらだけと言っておこうと思つてな」

「はっ、まさか身体的特徴を指摘するつもり? それなら私にだって考えが——」

「?——助けてくれて、ありがとな」

自然と口を突いて出たのは感謝の言葉だった。

なにもわからず女子の世界に放り込まれて、右も左も分からなかった俺を助けてくれたのは、どんな腹があつたとしても間違いないサラ・ウエルキンだ。

そして男の姿で通うようになっても付き合いが続いたのはフォルテと、サラだけだつた。

だから俺は礼を言ったのだ。

こいつは確かに俺の命を狙っていたが、それと同様に助けもしてくれた。

殺された恨みと、助けられた恩。どっちが重いかなんて考えるまでもない。

それに何時までも昔を引き摺ってるのも男らしくないしな。

「……ふん。女装の変態野郎がなにをカツコつけてるのかしら？」

「っ、テメ……！」

サラは一瞬俯くと、直ぐ様顔をあげて俺の事を弄ってくる。

……しかし、なんだ？

今顔をあげた瞬間、微かに笑顔っぽいのが見えた気がしたぞ？

「——そんな事よりあの男の対処が先よ。兄の身体を乗っ取っているのだから私も一枚噛ませてもらうわよ」

「ああ……ってI Sもないのにどうやって追う気だよ？」

「言ったでしょう？ どうにかなるって」
「??」

それから数分後、サラからの匿名のメッセージを受け取ったらしい大倭先生が砂浜に現れ、俺たちは先生を背後から拘束。

見事大倭先生仕様のラファール・リヴァイヴを手に入れることに成功した。

気絶している先生に向かって合掌していると、パタン。

背後でリヴァイヴの仕様を見ていたサラが、ペンダントに繋いだ端末を閉じる音がした。

「どうやら先生のリヴァイヴは近接格闘仕様みたいよ。って、四月の警備任務以来数回しか起動してないわね。まあいいわ。つまりは――

」

「俺とお前、どっちでも使えるってことか？」

「そういうことよ」

教師のISは、訓練用のISと同じように初期化と最適化フォーマットの機能が制限されている。

だから誰の専用にもなり得ないし、誰でも乗れると言うわけだ。

「それで、どっちが乗る？ 搭乗者には漏れなくどちらかのISを奪還する義務が付くぜ？」

「そうね、戦闘能力的には貴方が乗った方が良いかもしれないわ。私ではあの男に手も足も出なかったから」

「珍しいな。サラが俺より劣ってることを認めるなんて」

少し誇らしくなったのでフンとちよつと嫌味っぽく言う。

「そうね。私らしくないかも知れないわ。でも相手が相手なのだから万全を期す必要がある。それだけのことよ」

「.....」

なんか、ごめんなさいって感じだな。

「さて、それじゃあクレハ君？ しつかり日本まで送り届けて貰うわよ？ それと、もし私のIS傷つけたら背後に気を付けることね」

「おい、いまさら怖いこと言うんじゃないよ」

そう言っただけは待機状態のリヴァイヴを首から下げ、目を閉じた。

久しぶりのリヴァイヴだ。感覚は忘れてないと思うが、高い稼働率が出ることを祈るばかりだぜ。

深く深呼吸し、意識を集中させる。

そして――

（待ってる鈴。ウェルクは絶対に止めてやる！）

「――来いッ！ リヴァイヴッ！」

見開いた銀色の右目が瞬時にハイパーセンサーを起動。

超界の瞳の疑似ハイパーセンサーとのリンクを構築し、視界に映らない事象の情報までもが細かく分析され、処理が始まる。

次に深緑色の装甲が身体を包み込み、身体の芯から力が溢れてくるような、力強い装甲が構成されていく。

稼働率は・・・67%!

今までにない最高の稼働率に俺自身驚く。

これならなんとかなるかもしれない。

そう思わせるだけの力が、今の俺にはある。

——よし。

「飛べるぜサラ。しっかりと掴まってる」

「…………エスコートが下手な男はモテないわよ?」

そう言いつつ、サラは差し出した俺の手を素直に握ってくる。

マニピュレーターが、疑似神経を通して再現したサラの手の柔らかさにドキリとさせられたが、手を握るくらいがなんだ。こちらら膝枕まで経験済みなんだぞ。

だから視界端に映る、

——心拍数の上昇を確認。エラー。対応するシステムとのリンクを構築できません。

なんて表記、全く気になんてしてられないぜ!

「行くぞサラ」

「ええ、行きましようか」

脚部のPICとエネルギースタターが起動し、機体がフワリと宙に浮く。

サラが、俺の首に回した両手を強張らせるのを感じた。

「……………」

「……………なによ」

「いや、別に? 案外可愛いところもあるもんだって思ってたな!」

「ふ、ふぎけてないでちゃんと操縦を……………って速————きやああああああああ!!」

ホノルル最南端の小さな砂浜。

俺は自分の過去や、大切なものの為にそこから翔び立ったのだ——。

貴方を想って紡ぐ言葉

ホノルル島を出てから一時間後。

リヴァイヴのエネルギーが三分の一消費された。

ハイパーセンサーとGPSを照らし合わせてみると、日本までの距離は残り半分だ。

「大丈夫かサラ。いくらバリアーがあるとはいえ、生身での飛行は結構キツイんじゃないか?」

「心配ないわ。貴方が多重に展開してくれてるバリアーのお陰で負担は殆ど無いわよ」

「そうか。それじゃあと一時間ほどだ。我慢してくれよ」

「言われずとも耐えられるわよ」

俺の腕の中にいるサラはそう言って自身の肩を抱くように身を縮めた。

それじゃ俺は戦闘のイメージでもしておくかな、と長考に頭を働かせようとしたときだ。

『い。——おい——おおやま——先生! ——返事を

——先生!』

と、ノイズ混じりな音声オープンチャンネルから流れてきた。

慌てて通信先のアドレスを見ると——千冬さん!

「千冬さん!? 千冬さんですか!? 今どこに——」

「——ああ、良かった大倭先生。至急柊たちに伝達を——」

「千冬さん、俺です! 柊です! 通信可能です!」

「!? ひ、柊か・・・? なぜお前が大倭先生の回線を開いている!?!」

聞こえていなかったようなので大声で言うと、千冬さんはようやく俺の声を認識したようだった。

「少々事情があつて大倭先生から教師用のリヴァイヴをお借りしました。現在、飛行中のISを追跡中です」

「飛行中のIS・・・? まで。それは『福音』の事か?」

「そうです。現在福音は空軍基地を脱し、日本に向かって進路を取っています。恐らく狙いは鈴です」

「ちよつと待て！——」

千冬さんが回線を開いたままコンソールを操作する微かな音が聞こえる。

「——今回お前たちが受けていた任務、福音の監視だったみたいだな……。先ほど私も日本に向かって飛翔する正体不明のISの報告を受けた。調べたところそのISはお前たちが追っている福音と同じISのようだ。それを受けて、私たちはこれより専用機持ちによる迎撃作戦を展開する。詳細なスペックデータは入手しているか？」

「はい。今送ります。——送信しました」

「よし。受信した。こちらで秘匿事項として扱おう。——そう言えば同行していた渚はどうした。一緒にいるのか」

「ミナトはサイレン・チエイサーを展開して俺の前を飛行中です。ハイパーセンサーでは反応だけ感知できます」

「素晴らしいながら反応をチェックすると、どうやらミナトは福音の後ろをピツタリついているらしい。」

「そしてその後ろには更にもうひとつのIS反応——ウエルクのIS牙龍の反応がある。」

「なんとしてもウエルクを鈴に合わせるわけには行かない。」

「最悪、海上で戦闘を行う可能性もあるぞ。」

「よし、それでは終。お前と渚は我々に合流次第、作戦に組み込む。先ずはこちらに到着することを念頭に置け」

「——了解です」

「通信を切断。」

「眼下に見える漁船を不審に思いつつ飛行しているとサラが呟いた。」

「……いいの？ あの男のことを報告しなくて」

「良いんだよ。ウエルクに限っては俺の問題、いや、俺とサラの問題だ。だからアイツは俺とお前でやる」

「そう、良いの……。もし私たちが無様に敗北したら？」

「そんな時はそんな時だ。這いつくばってでもアイツを止めるさ。絶対に鈴に手出しはさせない」

「……はいはい。ごちそうさま」

サラが欧州人なクセして、欧米人みたいに肩をすくめてやれやれと首をふる。

「——それで、勝算はあるのかしら？」

「……あるが、ぶつつけ本番だな」

勝算。

今回の場合、勝つためにはやはりサラのISサニーラバーが必要だ。

特殊能力云々じゃなくて戦力的にこちらが大幅に劣っているからな。

牙龍のパイルバンカーはデュノアのシールドピアス並みの貫通力を持つていて、俺が一人で戦うと間違いなくエネルギー不足になる。

だから負担を減らすためにサラのサポートが必要なのだ。

つまるところ、先ずはじめに奪取すべきはサニーラバー。次に瞬龍だ。

俺がそう言うのと、何故かサラは吹き出しやがった。

「何だよ。結構頑張つて考えたんだぞ」

「何が頑張つて考えた、なのよ。穴だらけじゃない。どうやって奪取するのよ。バカなんじゃないの？」

「うっ、それは……」

「でも、貴方らしくて良いんじゃないかしら？ぶつつけ本番、出たところ勝負。そして、最終的には人任せ。最低じゃないかしら？」

「おい、最後のはあんまり頼つたことないぞ？」

五月の一件に関しては、お前の気を引いて鈴が隙を突きやすくしたのは俺だし、ラウラの時だつて暴走を沈めてラウラを救出したのも俺で……。あ、でも事態を沈静化したのは一夏達だしなあ……。もしかして頭ごなしに否定できない？

「——でも、別にいいだろ頼つても。それだけ信頼してるってことだし」

「つまり今回は私を信用するってことかしら？お人好し」

「今回だけ今回だけ。変なことすると海に投げ捨てるぞ」

今のところ、サラに危険な所はないし、ISを隠し持っている様子もない。

ISで抱き上げてる身体だって細くて華奢で良い匂いするし……
「……変なことしそうなのはどっちよ」

ジトーと視線を送ってくるサラに、俺は返事を返せなかった。

@

「——了解。一年生チームが戦闘に入ったらしい。高速移動する福音を叩くために高機動な二機で対応してるらしい。ウエルクがない間に俺たちもいくぞ」

「そうね。あの男の場合、向こうから出ないと見つけれないでしょうし」

太平洋日本近海に到達したとき、俺たちはウエルクの反応を見失ってしまい、優先事項を福音——ナターシャの救出に変更した。

「取り敢えずサラは千冬さんたちと合流だな。事情を説明して俺が単独行動を取る許可を取り付けておいてくれ」

「了解したわ」

砂浜が見え、旅館の建物も視認した。

砂浜には少数の生徒に、千冬さん、山田先生そして……鈴。

「——千冬さん、直ぐに出ます。エネルギーの補給だけお願いします」

「心配するな。直ぐに出撃できるようにはする。だが、今は一夏と篠ノ乃が出撃している。搭乗者の救出が成功すればそのまま帰還。失敗の場合には報告が入り、柁。お前に出してもらおう。いいな？」

「了解です」

着陸すると、直ぐ様整備科一年によるエネルギーの補充が始まり、すっげえ嫌そうな顔で「ISを解いてください」って言われた。

「よし。——それにしても久しぶりだなサラ・ウエルキン」

「え？ は、はい。お久しぶりです織斑先生……」

千冬さんを前に小さくなるサラ。

そんなサラに一年生女子からエネルギーの譲渡を受けつつ、耳打ちをしてやる。

「心配すんな。五月の件は犯人不明なまま調査も終わった。つまり前は2ヶ月無断欠席した問題児ってことになってる」

「え?・・・ああそうなの。なら良かったわ——」って、無断欠席? そんなのこの人が黙って見逃すわけ——」

そこまで言ったサラの両肩が、誰かに叩かれる。

勿論千冬さんと山田先生だ。

「取り敢えず、終わったなら指導室に來い（行きましようね〜?）」
「は・・・い」

おーお。あんなに肩落としちまって。ウエルクとの戦闘大丈夫かよ。

そんなことを考えていたら、不意に横っ腹に一撃。間違ひなく鈴だ。

こ、このちびすけは・・・!!

「つてえ! 何すんだよ!」

「うっさいクレハ! あんたこそ何よ! 二年の狙撃手と一緒になんて一言も言つてなかつたじゃない! 嘘ついたの!」

顔を会わせた途端に蹴りを入れてくるとつてもデンジャーな鈴は、何故だかご立腹なようだ。

なんでミナトと任務つてだけでキレることができるとでしょうかねコイツ。

「吐いてねーよ! 俺も現地行くまで知らなかつたんだよ。どっちかって言うてアイツがついてきた感じだ」

「付いて来たつて・・・。ていうか! 二人で行けるならまず最初にあたしに声かけなさいよっ!」

あーもー。長距離飛行してきたせいで疲れてるつてのに、コイツの甲高い声は結構身体に響く。

試しに掌底で鈴の口を塞ぎ、むぎゆ。

後ろに回つて頭ごと固定したため、鈴は目を白黒させて黙っている。

にしても身長ちっちゃいな。俺の肩までしかないぞ。

「・・・なるほど。あんなことをさらつと出来ちゃうから気が

高まつてるんですね柊君」

「おまけに自覚がないから余計に質が悪いわ。私としては誰が毒牙に掛かろうが良いのだけれど、見せつけられると殺意が湧くわ」

「……なんか、山田先生とサラがこっち見てヒソヒソ話してる。どうやら俺についての事だったので、今やっつてることを分析してみると……」

「……あれ。今の俺と鈴の体勢。なんか身長差カップルで、男が彼女を抱き締めてるようにも見えなくもない？」

鈴は小さいから頭だけれど、もう少し大きければ肩抱けたんだなあ……なんて考えてると。

ドクツ

一つ、心臓が脈打つ。

だが、Bシステムは起動しない。何故なら瞬龍が無いからだ。

思わぬところで失ったことを再確認した俺は、モガモガいう鈴を解放してやる。

「はあー。……そう言えばそろそろ一夏と箒から報告が来ても良い頃——ん？ 目の前にIS反応？」

鈴を解放した瞬間、リヴアイヴと瞳のハイパーセンサーに二機のIS反応が映し出され、真っ直ぐこちらに向かってきていることが分かる。

識別反応は白式と……何だろうか。見たことない反応だ。……

akatabaki——アカツバキ紅椿？

「なんだ？ 報告も無しに帰ってきたのかアイツら。紅椿に異常でも起こったか？ まあ二機揃ってるだけ良しとするか」

千冬さんがそう口を尖らせて言う。

真夏の海辺。水平線の向こうから姿を現したのは——

「なっ!!」

「クレハさんっ……！ 直ぐに治療を……っ！」

ボロボロの一夏と箒を背負ったミナトの姿だった。

@

砂浜に着地したミナトも少なからずダメージを負っており、一夏と

等同様に直ぐ様治療が施された。

「何があった。軍用とは言え、たった一機にお前ら三人が負けるなんて……」

「一機じゃ……ありません……」

頭から血を流しながらミナトが言う。

ミナトが言うには敵は福音と、ウエルクの操る牙龍に加え、もう一機出現した。

更にその操縦者は、ウエルクとの会話から男だと予想でき、三機からの攻撃を浴びた三人はボロボロになりながらも帰還した、というわけだ。

ミナトはステルスモードで逃げたらしいが、福音の広域索敵能力は狙撃主であるミナトを簡単に見つけ出してしまえるほど、高レベルのようだ。

「男性操縦者……双龍関係か」

「その可能性が高いわね。もともとISは女性しか扱えない筈なのに、その常識を破れる機関が複数あるなんて今のところ考えられないわ」

三人が旅館の一室で治療を受けている間、俺とサラと一年生は待機を命じられた。

だが、この件に関しては黙っているわけにもいかないのです、俺たちは旅館の別館にある一室で話し合っていた。

——恐らくこの案件は本格的に自衛隊のIS部隊か、安全保障局の管轄となるのだろう。

だが、そうなれば奴らは間違いなく福音を破壊する。

奴らは搭乗者が居ようが居まいが気にすることは無い。

ISの操縦者なんて元々代用品……スペアが準備されている消耗品だ。

ISは実戦兵器なので、乗れなくなったら次、そしてまた次へと受け継がれるのだ。

受け継がれると言えば聞こえは良いだろうが、実際瞬龍の行った実験で犠牲になった人数なんて計り知れない。

更に決定的と言えるのが、ホノルルで会った教官とマキナの存在だ。

あの二人は自衛隊の上層部からISを崩壊させるプログラムを渡され、それを秘密裏に使えと言われていた。

そう、福音を初めから壊すつもりで居たのだ。

自衛隊は領海侵犯を理由に福音を攻撃し、プログラムを使う。

だが、俺はそれをさせはしない。

何故なら、ナターシャは福音を大切に思っている。まるで友人のように。

例え、そのプログラムでナターシャの命は助かるとしても、ナターシャの『友人』はどうなる。

破壊され、鉄の塊に成り果ててしまう。そして残るのは、国家間の摩擦と、ナターシャの悲しみだ。

俺は、そんなことを容認できない。

「それじゃどうするつもりなのですかクレハさん？ 現在の貴方はISを失い、量産機にしか頼れない状況なのですよ？」

ソファーに座り、状況を把握したセシリアがまず俺の戦闘能力の低下について触れた。

「……………それでもやるんだ。国が動く前に俺が福音を止める」

俺の言葉を最後に、部屋の空気が重く、静かになっていく。だが。

「何一人でカッコつけようとしてんのよ？ 全然似合っていないわよ」

「……………鈴？」

気がつくのと、目の前に鈴が立っていた。

「なにが国が動く前に俺が止めるーよ。あんたが動くって言うなら私も動くわよ。双龍関係なら尚更ね」

「……………それはダメだ。今度の戦いは俺とサラでやる。それがいいんだ」

「ふざけるんじゃないわよー」

唐突に発せられた怒号に、俺は面食らう。

いつもの照れ隠しによる怒りじゃない。

鈴が本気で激怒した顔は、俺も今回初めて見る顔だった。

「クレハ、あんたの考えてること分かるわ。どうせ向こうで何かあって、その責任を取るために独りで戦おうとしてるんでしょ。あんたはそういうやつよ。ラウラの時もそうだった。あたしの時だってそうだった。あんたが戦うのは何時だって人のため。今回だってきつと福音の操縦者のためなんでしょ？　そして口ぶりからするとあたしも何かに関わってるわね？」

「……」

なんて、なんて鋭いやつなんだよお前は。

そうだ。確かに俺は責任を感じていた。

俺がハワイに来たために、ナターシャと福音を不幸な目に逢わせている。

そして、鈴にも危機が迫っている。

これらの事象には、全て原因に俺がいる。

だから俺が何とかしなくちゃいけない。

それが俺の仕事だと、それが俺の責任だと、そう思っていた。

「……だけどね、あんたが責任に感じてることはあたしも同じように責任を負うべき事なのよ。あたしがクレハを『双龍』に巻き込み、責任感を押し付けてる。だったらその責任くらいあたしが取るべきでしょう?」

「だけどつ、俺はお前に……ッ!」

「安全な場所にしてほしいっての?　バツカじゃないの?　女が男の後ろに隠れてる時代は終わったのよ。今は、並んで歩くべき時代なのよ。……だから、あたしちよつと怒ってるからね」

「……?　い、一体何にだよ?」

そう言うとき鈴は視線をチラツツとサラに向けた。

「ご、五月の事件だってあんたは一人で何とかしようとしてたけど、あたし達ってチームなのよね。だから置いていかれると凄く悲しくなるわ。信頼されてないんだ、ってね」

「なっ、別にそういう訳じゃ!」

「——とにかく、あたしだってあんたの後ろにいるだけじゃ嫌な

のよ。あの時の怪我だつてあたしの力不足で負ったんだから、あんたが責任に思う必要なし！ て言うか肩見すぎ！ このスケベツ！」

と、最後に俺の顔面に拳を叩き込む鈴。

どうやら自分で言つて恥ずかしくなつたみたいだが、お陰で気付かされたぜ。

自分がこれまでどれだけ自分本意だったかをな。

「つてえな……。……。そこまで言うなら頼りにさせてもらおうぞ相棒」

「ふん、望むところよ。その牙龍つてやつ杭なんか叩き斬つてやるわ」

「——よし」

……。そう言えばサラと鈴つて今のところどうなんだろうか。様子を見る限りいきなり切り会つてことは無さそうだけだなあ。。。。。

意気込み新たにこれからを話し合おうとしたとき、デユノアが口を開いた。

「えつと、いい雰囲気になつてるのに水を指すのもなんなんだけどね。。。」

「なつてないツ!!」

「うえつ?! 否定する?! ……まあいいや。それで、さつきから話に出てる双龍つて一体なんのことなの？ 僕たち何も聞いてないんだけど。。。」

俺と鈴、二人ぶんの反応に若干引いたデユノアがおずおずと手をあげて発言する。

その問いに、俺と鈴とサラは顔を見合わせると、一つ頷く。

「悪いなデユノア。ちよつと言えないんだ。俺たちの過去に関わることなんだ「なんであんたの過去に関わりがあるのよ？」——鈴とサラの過去に関係があつて言えないんだっ！」

ちよつと口を滑らしかけた俺は大慌てで訂正する。

そう言うたデユノアは少し目を伏せて、

「あ、ご、ごめん！ そう。。だよね。人の過去においそれと聞き入る

訳にはいかないよね……」

神妙な顔で謝るデュノア。

……タツグマツチトーナメントが終わってから、自分の性別をあらわにしたデュノアだが、未だになんで男装してたか理由は分からないんだよな。

以前、同室だったらしい一夏に聞いてみても顔を赤くするだけだったし、正確なところは謎のままだ。アイツはなんで赤くなってたんだ？

「……で、でもクラスメートが傷付いてるのに僕だけ黙ってみてるわけにはいかないよ。事情を全て知ってる訳じゃないけど、僕にもなにか手伝わせてほしいな、……なーんて……」

「そう言うことなら、私も協力させてください兄さん。嫁の嫁として。仇はとらねばなりません」

なんだよ嫁の嫁って。意味わからんぞラウラ。

「で、でしたら私もクレハさん！ 渚先輩が倒れた今、狙撃手兼観測手となれるのはわたくししかいませんわ！」

「お、おう。頼りにしてるぜ……」

福音迎撃部隊、総勢六名。

敵は福音、牙龍及び、正体不明のIS一機。

こちらの勝利条件は福音の停止、及び、敵ISの撃破。

俺にとっての敗北は鈴の安全が確保できなくなることだ。

「今の俺には瞬龍がない、だから本当に危ないときには全員を守ってやれる自信がないんだ。よって全員、離脱するときは俺を囨に使え。暫くは稼いでやる」

「——何を言ってるのよ柊君？」

俺が作戦前のブリーフィングのノリで離脱時の手順を確認していると、

「ここにいる全員が、ただ守られるだけの女の子だと思っているのかしら？」

そう言っつて不敵に笑むサラの後ろには、

腕をくんで胸を張る鈴に、あざとく笑顔を浮かべるデュノア。

腰に手をあて絶対的な信頼を向けてくるラウラや、無意味に高笑い
をしているセシリア。

「……ああ、むしろ後ろ弾に気をつけるとしようかな……」
そう苦笑いをしてしまえるほどの心強い味方がいたのだ。

——そして夕陽が沈む時刻、作戦は決行される。

革命者

「よし、それじゃあ皆用意は良いな。千冬さんに黙って出てきてるんだ。見つからないように出発するぞ」

夕陽が落ち、砂浜にも夜が訪れた。

俺たち、福音迎撃即席部隊は音も立てずに砂浜への集合を果たし、出発の最終確認をしていた。

「先生に見つかった場合は迷わず撃て。ただし麻痺弾な……あ、千冬さんには実弾で良いから」

「何言つてのよアンタ。千冬さん殺す気？」

「……まあそれは冗談として、いよいよ俺たちがそれぞれのISをまとい、出発しようとした瞬間。」

「……ま、待ってくれ」

旅館へと通じる小道から、人影が現れた。

俺は教員を警戒し、直ぐ様流桜を抜き照準を合わせたが、他のメンバーはその人影にただただ視線を送るだけだ。

「……何よ箒。アンタ部屋でグズツてるんじゃないやなかったの？」

鈴が一步前へ出て、その人影——いつものリボンがなく、ポニーテールではないが——箒に声をかける。

だが、その声は険を含み、どこか非難するような声だった。

鈴の物言いに、デユノアが声を出しそうになったが、それをラウラが押さえた。

ここは鈴に任せる。そんな意思が込められていた。

「……さつきお見舞いに行ったときはまだ寝込んでたけど、大丈夫なの」

「……問題ない。一夏が守ってくれたからな」

箒はそういうが、頭には包帯。脚や腕にはガーゼや血染みと、あまり大丈夫そうには見えない。

ここに現れたと言うことは……まさか、行くつもりかあいつ。

「そう、で？　ここになんの用かしら臆病者さん。折角の専用機をもてあまし、挙げ句もう乗らないなんて言ってる人がここに用があるなんて思えないんだけど」

「……さつき、お前たちが出て行ってから考えた……」

どうやら鈴の口ぶりから察するに、ここに集合する前に動けるIS乗りに声をかけて回ったみたいだが、一応一夏や箒にも声をかけたらしい。

だが、一夏は箒やミナトと比べても傷がひどく、望むべくもない。箒も何らかの理由で断ったか、喧嘩別れしたみたいだが、どうやらまた新たな覚悟を決めてここにいるらしい。

「確かに、一夏は私を庇って傷を負った。それはいつもそうだった。あいつはいつも誰かの為に傷を負う。心の傷も、体の傷も等しくあの身体で受け止めている」

鈴が腰をちよいちよいと小突いて来るのでよく聞いてみれば、あれ。あの箒の話。思いつきり身に覚えがあるんだけど。

どういう反応を示していいかわからなくなった俺は、とにかく聞く。箒の覚悟を聞く。

「どんなにひどい傷を負ったとしても、一夏は誰も責めずに、笑って過ごす。——だが、それではイヤなのだっ！　どんだん傷だらけになっていく一夏を見守るだけではもう嫌だ！　全部の恩を返せなくたって、たった一回、一回だけでも一夏の助けになりたい！　そう思って私は紅椿を手を取った！　そしてその意思は未だ変わっていない！　私も、闘う！　戦って、勝つ！　今度こそ負けはしない！　自分自身にもだ！」

箒が叫ぶ。

一夏への想いを言葉に乗せて、戦いへの覚悟を決める。

その言葉を全身で受け取った皆が一様に頷き……

「——決まりね」

鈴が胸を張って言う。

それを皮切りに——

「ラウラ、セシリア。どうだ？　福音の反応は消失したらしいが、追え

るか?」

「勿論です兄さん。たった今追跡終わりました。最後に確認された場所から動いていません。恐らくステルスモードかと」

「クレハさん。戦場となりそうな海域には不審な船舶の反応はありませんわ。箒さんも、心配なさらないで結構ですわよ」

「よし、各自、兵装は問題ないか!」

ブックレットや広域レーダーで海上の様子を探っていた二人に確認する。

最終確認としてそれぞれの装備を確認させる。

「リヴァイヴ、いつでも行けるよ。クレハのリヴァイヴも即席だけど機能向上に異常ナシ!」

「テイアーズ、ストライクパッケージのインストールは完了していますわ。最適化には少し掛かりますが二、三分で終了ですわよ」

「甲龍のパッケージも問題なく適化したわ。攻撃力の上がった双天牙月。受けてみる?」

「なぜ私のは打鉄なのかしら・・・?・・・サラ・ウエルキン。チェック終了よ」

「——『パンツァー・カノニア』インストール完了です。砲撃なら私を頼りにしてください兄さん」

五人ぶんの声を聞き、俺は箒の方を向く。

いきなりの剣呑な装備確認に驚いたのか、箒は目を丸くしているだけだ。

「あー。箒、一夏だったらこう言うと思うから言つとくわ——まあ、気楽に行こうぜ」

「!・・・はいっ」

箒は一際大きい返事をするると右手に巻かれたブレスレットを胸の前で握り、その名を呼ぶ。

「もう一度、私に力を貸してくれ——『紅椿』!」

その瞬間、箒の身体を金色の粒子が包み込み、紅椿なるISが姿を現す。

——美しいISだった。

牙龍と同じ赤いカラーリングだが、あれとは比べ物にならないほど煌びやかで、紅い。

鳳凰を思わせる装甲に、腰にさした二振りの刀。

箒の武士のようなイメージにぴたりと当てはまる、箒用に詭えたかのようなISだった。

「紅椿、あまつぎ雨月、からわれ空裂準備完了です」

箒がそう宣言すると、いよいよ全ての準備が整った。

「——よし、行くぞッ！」

「「「了解ッ！」「「「「」

@

太平洋、日本近海。

海上から約二百メートルほどのところで福音は胎児のように身体を丸めて停止していた。

「セシリア。周りにISの反応は？」

「——ありませんわ。かかるなら今が好機かと」

「よし。——ラウラ。三十秒後に砲撃を開始。頼んだぞ」

セシリアと共に待機していた俺は、ラウラの「了解！」の声を聞き届けると一旦通信を切った。

続けて福音のチャンネル——ナターシャに向けて発信してみるが、反応はナシ。どうやら意図的に通信が遮断されているらしい。

——熱源！ シュヴァルツエア・レーゲンのレールカノン飛来

！

瞳が情報を表示し、その瞬間、ウィンドウの中の福音の頭部で爆発が起こる。

当たったのだ。五キロ離れた地点からラウラが撃った砲撃が。

福音はその衝撃を切っ掛けに起動。

周りを確認するかのように首を巡らせると福音は真っ直ぐラウラの方向を見つめ、飛翔した。

「ラウラッ！ 砲撃！」

「了解！ 次弾装填——発射ッ！」

ラウラが新たにインストールしたパッケージ、パンツァー・カノ

ニアによって増設された防御用実体シールド四枚が、砲撃の衝撃によって軋みをあげる。

地上で射撃する際にアンカーとして利用されるらしいから簡単には壊れないだろうが、更に増設されたレールカノン、計二砲門を同時に放てばどうなるかはわからない——とラウラは言っていた。

福音はラウラの砲撃をシールドで受けると、爆炎を切り裂くようにして突き進む。

ダメージは入っているようだが、止まらない！

「くっ！」

強大な火力を得る代わりに機動力を捧げたラウラは、その場から離脱するも直ぐ様福音に追撃され、福音はラウラに右手を伸ばす。

だが、ラウラは口元をふっと緩ませる。

「セシリアっ！」

ラウラが叫ぶと隣のセシリアが射撃体勢に入る。

「お任せっ！ ですよー！」

セシリアは射撃の衝撃緩和のため、六基のティアーズを全て腰に据えスラストを吹かせる。

二発。

全長二メートルを超える大出力ライフル『スターダスト・シューター』から放たれたビームは正確に福音の右手と胴を撃ち抜く。

ビットを機動力として使うぶん火力が落ちているかと思いきや、それを補って有り余るほどの威力を誇るライフル——化け物級だ。

セシリアは続けてハイパーセンサーで福音を捕捉し射撃するも、福音はそれを持ち前の機動力でひらりひらりと避ける。

「ああんもう！ 速すぎるんですのー！」

「落ち着いてよセシリア。僕と箒でやってみるから」

箒の——紅椿の背にのって現れたデユノアは、前方に六角形の実体フィールドを展開し、両手に二丁のショットガンを構える。

「頼んだよ箒」

「任せておけ。——ただ、翼には注意してくれシャルロット」

箒は紅椿のスペックを遺憾無く発揮し、高速移動中の福音に肉薄す

ると、その背のデユノアのショットガンが火を吹いた。

弾丸の雨を浴びた福音は腕のプラズマブレードでデユノアを攻撃するも、リヴァイヴカスタムに追加装備された『ガーデン・カーテン』に阻まれる。

一撃で物理攻撃は効かないと判断したのか、福音は急速に距離をとると、背中の方角推進装置を解放。

細かく分解された装甲がまるで翼のように夜の空へと広げられていく。

「なん・・・だよあれ・・・!?」

その光景を見ていた俺は、装甲の合間合間に、エネルギーの連結部があることに気づく。

(エネルギーの塊を、装甲で覆っているのか・・・?)

まさかあれは――。

「シャルロット！一旦引くぞ！あれが来る！」
箒が叫ぶ。

デユノアは急速旋回する紅椿に捕まってその場を離脱し、嫌な予感に苛まれたラウラも、四枚の装甲を福音に向けて展開。いかなる事態にも備えた。

――キユルオオオオオオオオオオオオオツ!!

福音が甲高い機械音を上げると、身動きするようにその場で回転する。

『銀の鐘』
シルバール

その動きに合わせて背中中のエネルギー体が振られ、飛び散ったエネルギー片が砲弾となって辺りへと降り注ぐ。

(――やっぱり砲撃か・・・っ！)

俺自身もリヴァイヴのシールドを全て前面に押し出し、エネルギーの雨がやむまで耐える。

やはり強い。

あの三人が負けたと言う話も納得できる。

砲撃がやむと、福音が一瞬止まったのでそこに隙を見出だした俺は一息で突進。

大倭先生が調整したブレードで切りかかる。
ガキンッ！

腕の装甲でそれを防いだ福音はバイザー越しに俺の顔を確認する
となにやら計算を始める。

その隙を突いて――。

「セヤアアアアアッ！」

鈴が双天牙月を振りかざし、背後から福音を攻撃する。

――キユオツ？

不意を突けたのか、鈴の刃は福音の絶対防御を削り、明確なダメージを与える。

怯んだ隙に、セシリア、ラウラ、デユノアによる攻撃が叩き込まれ、福音は苦悶の声をあげる。

――敵 I S、攻撃機能停止。離脱します。

超界の瞳がそう告げると、福音が先程の全方位砲撃――『銀の鐘』を使い、セシリアたちの攻撃に切れ目を入れるとその場から離脱する。

だが！

「舐めんじゃねーぞッ！（ないわよー）」

俺と鈴は福音の行く手を阻むと、同時攻撃で海へと叩き落とす。

それを追撃するように箒が刀を振ると、刃から発せられたエネルギー刃が海上の水を蒸発させ、爆発させる。

「……やったの!？」

「いや、センサーに反応がある……。まだだろうな」

その場の全員が浮上してくるであろう福音に対して警戒したとき

――海中のエネルギー反応増大！ 二つ目の敵性 I S 感知

！

二つの警告を瞳が知らせてくると同時に、海上の水がズズツと盛り上がると、その中から二機の I S が姿を見せる。

方や光輝く銀色の翼を拡げ、まるで天使の様な輝きを見せる I S。

方や鈍く輝く赤色の I S で、右手には凶悪な杭を持ったまさに怪

物。

「——おやおや。死んだと思っていたんですが、生き延びて居たとは驚きですねえ……」

怪物が、ニヤリと歪んだ笑みを浮かべた。

@

「——先程の戦った蒼髪のお嬢さんに一撃貰ってしまったので、その回復のために海中に潜っていたら……。なんと傷ついた福音が沈んでくるじゃありませんか。これには私も驚きましたよクレハくん」

姿を表したウエルクは、隣で浮遊する福音を示しながら言う。

「状況が一変しました兄さん、福音が第二形態に。」

ラウラの報告を絶望的な気分で聞く。

——最悪だ。

福音ですら手をこまねいてるって言うのにアイツまで相手してる暇ねーぞ？

サラも一人でどこかに行っちゃったし、どうするべきか——

「——安心しなさい柊くん。もう討ったわ」

サラの声。

驚いて前を見ると、打鉄のブレードをウエルクの首もとに添えるサラの姿が見てとれた。

サラのやつ……。福音俺たちに丸投げしてこれを狙ってやがったな!?

「……一体何をしているのですかサラ。兄に対する行動とは思えませんね」

「誰があなたの妹なものですか。生憎夢からは覚めているのよ」

「ほう……。ではその胸のことも思い出しているようですね?」

「ハツキリと覚えているわよ。この刀で首を取られたくなければ直ぐ様「明日を奪う者」を返しなさい」

サラがウエルクに刃を突きつけながら言う。

ウエルクも死にたくはないのか、福音を動かそうとも、自身が動こ

うともしない。

「——ああ、あのゴミにならもう用はありませんよ。特殊能力のIS剥離も既に模倣コピーししまいましたし。ただ——いつまで人間ごときが私に刃を向けているつもりですか？」

「なっ——!?」

瞬間、ウエルクのパイルバンカー『尖刃』がサラの腹部を穿ち、そのまま吹き飛ばす。

「——さあて！ 始めましょうか皆さん！ 『超界者イクシード』と人間による戦争の前哨戦を!!」

ウエルクはそう言って大仰に両手を振る。

「いきなり現れて一体なんですかのツ!? 福音共々撃ち落としてあげましてよ!」

しびれを切らしたセシリアが牙龍のボディーに向けて狙撃を行う。
「! 待て——セシリア——!」

嫌な予感がした俺はいそいで制止するも間に合わず、スターダストシューターの銃口からビームが迸る。

大気減衰を無効化しつつ飛翔するビームは牙龍のシールドに阻ま
れず、本体に当たる。

その瞬間、

「牙龍、単一仕様能力発動。——『革命者リベレーター』」

ウエルクがワンオフアビリティーを使用した瞬間。

奴を中心に激しい爆風と熱が生まれ、超規模の大爆発が怒った。

その中心に程近い場所にいた俺たちは、その衝撃をもろに受けた。
瞳とリヴァイヴが各所の異常を伝えるメッセージが視界いっぱい
に広がり、その視界すらも爆風で目を開けていられなくなり見えなく
なる。

だが、シールドを身体の前面に何重にも張り、なんとかこのエネル
ギーの奔流をやり過ごす。

こ、これはただの爆発じゃない、エネルギーが吸いとられてい

く……！

爆風はまだ収まらない。エネルギー残量が残り半分を切り、ようやく減少にストップがかかった。

「……やはりこのISはゲームで使うには強すぎますね。後で廃棄しておきましょう」

ゲーム？ 戦争？ やつの言うことはイチイチ腑に落ちないが、ハッキリとわかる。

このままでは全滅だ……！

先の爆発でエネルギーの大部分を失ったのは俺だけじゃないように、全員が絶対防御によるフィードバックで荒い息をついていた。

「さて、クレハくん。貴方は福音に見張らせます。私は彼女から心を頂くとしましょう」

福音が音もなく俺の元にやって来て、その翼状の砲口を俺に向けた。

ウエルクはその様子を確認すると、自身を睨み付ける鈴に向かって一歩づつ空中を歩んでいく。

「い、一体あたしに何の用よ……？ 生憎イギリス人の知り合いなんて……くっ……数えるほどしか居ないのだけれど？」

「それは当然ですよ凰 鈴音。貴女の記憶には彼同様に修正が加えられています。……まあ、知る必要の無いことですがね」

そう言って右手を天高く掲げるウエルク。

その手に握られたのは俺の斬空を真似した例の銀色の剣だ。

まずい、鈴がやられる。ダメだダメだダメだダメだダメだ！

来い!! 来い来い来い来い来い来い来い来い来い来い!

答える瞬龍!

力だ、力が必要なんだ。誰をも貫き通す刃と、誰をも貫き通せない楯が!

懇願する! 哀願する! たった一度だけの力を!

居るなら答えてくれ瞬龍! 俺は鈴を……鈴を死なせるワケにはいけないんだよ!

「……ん? さつきから妙なことをしようとしていますね……」

福音。彼にもう用はありません。なにかせされても面倒ですから、首を落とさない」

「がっ!? ふ、福音が首を掴む・・・っ!?

ジリジリと力が込められていき、頭が真っ白になっていく。

け、頸動脈が締め付けられ、頭に血が回らない・・・ッ!!

薄れゆく視界の中では、福音が俺に向かって無機質な視線と腕のプラズマブレードを受けているのが分かる。

「グ・・・ウガアツ・・・!!」

「いよいよ絞め殺される——。」

そう思った瞬間、福音の腕の力が抜け、解放される。

・・・違う。抜けたんじゃない。腕が切り落とされたんだ・・・

!

解放された瞬間、流れ出した血の勢いに一瞬気を失った俺はISを消失。海へと転落する。

「・・・全く、久しぶりに姿を見せたと思ったら、またもや我々の邪魔ですか・・・」

海から顔を出すと、ウエルクが腕を切り落とした何者かに語りかけていた。

「——それはこっちの台詞だよウエルキン博士。私の可愛い可愛い妹と息子に何してくれちゃってるのかなあ?」

「こ、この声。この間延びしたしゃべり方・・・!」

「・・・た、東さん・・・?」

「ん? そだよくーちゃん! そんでひさしぶり—— 私の愛しき息子よー! きゃぴっ」

久しぶりに会った恩人は、いつもと変わらない調子で、いつもと変わらないウサ耳で、いつもと変わらないドレスで、以前と違う呼び方で俺を呼んだ。

「さあて、久しぶりに東さんの本気見せちゃうよー?」

そう言って笑う彼女は、愛用の移動式コンソールに手を掛けた——

朝陽の向こう

「んじゃ、手始めに行ってみよー!」

束さんが激しくコンソールのキーを打鍵する。

すると背後に十連装ミサイルポッドが顕現し、束さんの「ゴー!」の合図のもとそのすべてが射出された。

「この程度を手始めだなんて・・・舐められたモノですな!」

ウエルクは迫り来るミサイルに対して、銀色の剣を一振り。

放たれた空間断絶の刃——斬空がミサイルの半数を風ぎ払う。

爆炎を突き破って突進する残りの五本は、新たに召喚された短機関銃の掃射で全て撃ち落とされてしまった。

その光景を目を細めて見た束さんは更にコンソールを操作し、立っている足場から六本の機械の腕マニキュレーターを伸ばす。

まるで、蜘蛛の脚のように。

「おおつ、良いですねえ! まさか貴女自身が格闘戦を行うとは! これは予想外です!」

腕に近接ブレードを召喚した束さんを見て昂るウエルク。

そんなウエルクに向かって束さんは疾駆する。

「べっつにい! 束さんだつて運動が得意なんだつて見せつけておかないとね!」

アームを自分の腕のように操る束さんは次々とウエルクに向かって剣撃をくりだす。

六本のアームによる多重攻撃。

そ、想像を絶する速さだ・・・!!

目で追えなくてくらくらするぜ。

「なるほど。攻撃手段を限界まで引き上げて間断なく攻撃しようという腹ですか・・・ですが、それだけの処理を一人で行っていると、流石の束博士も隙が生まれるようですね?」

「!?!? 何が——」

一瞬、ほんのコンマ一秒だけ束さんのアームが停止し、その隙を突いてウエルクが反撃に出た。

六本ものマニピュレーターをそれぞれ一人で操作し、相手の裏をかのように責めさせる。

いくら天才東博士でも負荷が大きすぎるのだ！

ウエルクは動かなくなったアームを切り落とし、背後から迫ってきたアームを杭バンカーで破壊。

残りのアームも瞬く間に処理してしまった。

「——人である限り限界は訪れる。私はそれを身をもって実感しています」

「……化け物め……」

全ての腕を失った東さんが珍しく憎々しげな表情でウエルクを睨み付ける。

「大体、我々を模倣した兵器で我々に勝とうと言うのがそもその間違いなのです。やはり人類は殲滅されるべき対象だ」

「……ふん、えーつとお、どっちかっていうと模倣に関しては君の領分だと思うんだけどお、東さんもただやられてるだけってのは性に合わないんだよねえ〜！」

憎々しげな表情から一変。いつもの笑顔に戻った東さんは再びキーボードを打鍵する。

まるでオーケストラの指揮者のような滑らかで優雅な動きだ。

「さて、行くよ『超界者』くん。これなら多少は効くでしょ？」

そう言って召喚した兵装。それは。

「ま、まさか、それ全部『展開装甲』かよ……！」

東さんが数十本の金属棒を召喚したかと思うと、その全てが宙に浮き、浮遊している。

ISの非固定武装アンロックユニットと同じ技術だ。

「おや。大正解だよクーちゃん！ その名も展開装甲Ver. 東さん！ 東さんの思考をダイレクトに読み取り思いのままに動かせるまさにファンネ○！ 時代が追いついたって感じで、蒼いカラーリングがなんとも言えないカッコよさを表現してるよね！ それと正解者には後でハグしてあげよう！」

要らんわ。

「展開装甲ですか……。多少は本腰入れて当たった方が身のためですね」

「えー、よくいうよ身のためなんて。君たちは肉体なんて持つ必要が無いんでしょ？」

「確かにそうですが、生きるためには色々必要になることが多いのですよ」

会話の最中にも順に装甲を開き、蒼いブレードを露出させていく束さん。

「どうやら準備が整ったみたいだぞ。」

「さてと、それじゃここからは手始めじゃなくて本気モードだからねー！」

言うが早いか束さんは両の腕を大きく振り、展開装甲に指示を送った。

展開装甲は、それぞれが意思を持っているかのように統率のとれた動きでウエルクを翻弄していく。

「……くっ」

ウエルクの顔に焦りの色が見える。

牙龍の特徴はパイルバンカーによる強大な攻撃力と、強固な防御力だ。

だが、展開装甲にはシールドそのものを無効化する性質がある。

これによってウエルクは守りを失い、一方的に追い詰められ始めているのだ！

「まずは剣をお!!」

注意が散漫になった瞬間、束さんの操る一基が正確にウエルクの手から銀剣を弾き飛ばす。

ウエルクが目を見開くが、その隙を逃す束さんではない。

「ほらほらあーもういつちよーうー！」

続いて左右から挟み込むように現れた二基が、ウエルクの体をかすめエネルギーを削り取っていく。

「これは……！」

自分が攻撃から逃れられないと悟ったウエルクは何を思ったかい

きなり反転。

背中の可変ウィングらしき翼を變形させ、離脱姿勢——瞳によると、急激な加速で一氣に戦場を脱する状態——に入った。って、逃げる気がアイツ！

背中のスラスタの出力を増大させ、今にも飛び出しそうなウエルク。

「ここで逃げるのは情けないですが、次のためには……！」

——だが。

「——させないわよっ！」

突如飛来した両刃の大剣によって脚部のスラスタを貫かれ、失敗に終わる。

あ、あの大剣……！

まさか……。

「か、回復したというのですか!? この短時間で——サラウエルキン！」

「そのまさかよ。打鉄の防御力を舐めたようね。あと、兄さんの顔で名前呼ぶのやめてもらっても良いかしら？ ヘドが出るわ」

荒れ狂う海風のなか、金色の装甲——『明日を奪^{サニ}う者^{ラバ}』を纏ったサラは、不敵に笑って見せる。

「ほらっ！ ぼさっとししないで拘束！」

サラが俺に向かって叫んだので、それに応えて銃のマガジンに電磁弾を装填。

瞬時に照星を合わせると発砲し、ウエルクの周囲に電磁波フィールドを発生させた。

「よし、これでISは停止。チェックメイトね」

サラは止めにと、大剣で脚部スラスタを破壊する。

……終わったな。

始めはリヴァイヴでなんとかなのかと、自分自身でも不安だったが予想外の増援で収集はつけられた。

福音と戦闘中だったハズの鈴に連絡を取ってみると、あちらは既に決着がついており、一夏が白式の第二形態を発現したらしい。鈴は既

にこつちにむかつてるとか。

「さてと・・・東さん、ちよつ——」

「クーちゃん！ お久しぶりだよ。さあさあ、親子の再会を喜び合おうぜエイ！」

・・・俺の言葉は遮られた。

圧倒的な質量を持つ、温かい双丘によって。

「ちよつ、まずい！ 待て！待ってくれ東さん！ 離れろツ！」

「え、どうして？ 親子のハグだよ？ どうってことないでしょ？」

瞬龍が無くったってまずいものはまずいんだよ！

て言うか！

「それだそれ！ 聞きたいことはたくさんあるが、息子ってどういうことだ！」

息苦しい空間から顔を出し、見上げた東さんの顔は・・・ん？ なんか少し焦ってる？

「え、え、まだちーちゃんバレてなかったのか。案外お間抜けさんなどところあるから速攻でバレると東さんは予想してたんだけどなあ・・・。説明めんどくせー」

「めんどくせーってなんだ！ めんどくせーって！」

「あーうん。バレてないなら良いや。クーちゃん、東さんはまた旅に出るね！ また来年の七夕に！」

「行かせると思ってたのか！」

コンソールをカタカタしながら「次のく隠れ家はくどーこにしよつかなく」なんて歌い始めた東さんのウサギ耳を掴む。黙ってトンスラかこうなんてあまっちよろいぜ。

「むー、ウサ耳は最近の東さんのトレンドなんだよ？ それを無下に扱うってことは東さんを激怒させる行為に等しいね！ と言うわけで東さんは自分で作ったマシーンで走り出しちゃうから！」

「盗んだマシーンじゃない辺り東さんらしいが、もうあんた15って年じゃねえだろ!？」

「失礼な！東さんは最新のアンチエイジング技術で肌年齢はちーちゃ

んの歳のマイナス12！ 東さんをなめてもらっちゃあ困るよ!？」
「実年齢より下とかすげえな！」

なんだこの会話。俺は聞きたいこと聞いただけなのになあ……。
「……まあいいや。とにかく息子つてことは置いといて、だ。まずは
ウエルク
アイツのことについて説明してくれよ」

「えー、それもちよつとなあ……。」「
しづる東さんにイラツと来たので、もう一度うさみみを掴んでやろ
うかと画策したとき。

「——篠ノ之博士。貴女は後悔していますね」
いきなり、拘束されているハズのウエルクが喋り出した。

拘束している電磁フィールドの状況を見ても異常は無し。喋れる
状態じゃないはずなのに……。！

「……してないよウエルキン博士。東さんは後悔なんて無駄なこと
はしないの」

東さんがコンソール操作を中断する。

「それに、後悔してるのはそっちの方じゃないのかなウエルキン博士
？ 『鍵』を二本に分けるなんて面倒なこと、しないほうが良かったん
じゃないのかな？」

「必要だったのですよ。『彼女』は私たちでも制御がきれいな不完全
なものでしたから。暴発を防止するためには必要な措置だったので
すよ」

鍵？ 彼女？ 暴発？

わ、分からない。二人がなんの話をしているのかが、分からない！
「……最後に言いますよう。篠ノ之博士。もう一度我々の側につく
気はありませんか？」

「ないよ」

ウエルクの誘いをキツパリと断る東さん。

「正直なところ、私にとって世界なんてちっぽけなものでしかないよ。
だからどこで戦争が起ころうと基本的にはどうでもいいの。東さん
は世捨て人だからね。ちーちゃんや箒ちゃん、いっくんが死なない限
り外にも出たくはないって思ってるよ」

そう言つて束さんは俺を見た。

真つ直ぐ、俺の目を見ている。

「———だけど、どう言つた経緯で親になろうとも、息子のピンチには駆けつけてあげたいって思つちやうのが母親の気持ちなのですよ。だから、私はクーちゃんに敵対することはないよ」

その時、俺は束さんに、普段感じたことのない感覚を覚えた。

そう、言うなれば『母性』と言うべき感覚。

それが、本物のはずがないのに、俺にはちゃんと両親がいるはずなのに、そう感じてしまった。

「……く、ははははははは!!」

ウエルクが笑う。

束さんを嘲笑する。

「息子? 母親? 気持ち? 自身の研究の為に作り出した人形に吐く台詞とは思えませんね!」

その時、フィールドに異常が発生し、拘束力が低下。

フィールドが弾け飛び、ウエルクの四肢が解放される。

「———クーちゃん、これから話す内容は多分これまでのクーちゃんを壊してしまうことになりかねない。だから先に言っておくね」

束さんは、俺に向かって笑みを浮かべた。
……本当は何かを後悔しているのだろう、本当に、悲しい笑顔だ。

「———ゴメンね」

@

「———柸暮刃。貴方には記憶がありますか?」

「き、記憶?」

俺はリヴァイヴの近接ブレードを二振り構えながら繰り返す。

「そうです。過去にあつた事柄や覚えたことを忘れないように心にとめた経験の結晶。それが記憶です。それが、貴方にはありますか?」
肅々とした口調で、まるで追い詰められていることを感じさせない口調でウエルクが言う。

俺は、ウエルクから放たれる異質な圧力を感じ、じつとりと汗をか

く。

記憶。

ヤツは俺に記憶があるのかと聞いた。
だったら在ると答えられる。

ここ二年間で過ごした時間の記憶。瞬龍や、鈴との出会いに、束さんのラボで過ごした時間。

ラウラとペアを組んで戦ったドイツでの時間。IS学園に来てから色々あったが良い奴らとも出会えた。

そうした全てがあつて俺は今ここにいます。

「……ある」

「そう、ある。確かに貴方には記憶がある。それは貴方を実験の被検体とした我々『双龍』の検証データからも明らか。ですが、無いのですよ。貴方の記憶には『重み』が」

「重みがない……?」

意味不明な記憶の重みと言う概念に混乱がさらに極まる。

瞬龍の処理能力があれば理解出来るのだろうか？ いや、頭が理解することを拒んでいるのか。

「そうです。重み。貴方の記憶には出来事や事象の記憶はあっても、その場にあつた感情の記憶がまるまると欠け落ちているのですよ！

まるで初めから無かつたようにね！」

「な、何を言っているんだお前はッ！」

これ以上しゃべらせてはいけない。

俺はそう判断するとサラに視線を送り、同時攻撃を仕掛ける。

前後からの同時攻撃。タイミングは完璧だ。避けられるハズがない！

なのに――

「そうやって、思い出す事を忌避しようとする。篠ノ之博士が貴方にインストールした教え込んだ最初の本能ですよ」

刃が空を切る。

避けられた。

そして、すれ違い様に囁かれた言葉が頭の中で反響する。

束さんが教え込んだ。束さんに教え込まれた。俺の記憶の重み。記憶の中の欠落した感情。まるで最初から無かったかのような――

「ダメだよクーちゃん考えちゃ！」

束さんの声が聞こえる。

だが俺の思考は止まらない。

俺の記憶、俺の経験。俺の誕生。

……俺はどこで生まれた？ どこで育った？ どこに住んでいた？

家は？ 家族は？ 両親は？ 名前は？

クソッ！

思い出そうとすればするほど、記憶が不明瞭になっていく。

日本が出る前に、雨の部屋で両親を思い出そうとしたとき、俺は顔を思い浮かべることが出来なかった。

だが、あれは思い浮かべられなかったんじゃない。

——思い出す顔を知らなかったのだ。

「教えてあげますよ終幕刃！ 貴方は人ではない！ 篠ノ之束が自身自身の遺伝子を使い、作り上げられた^{アドヴァンスト}遺伝子強化体——。記憶なんてものは初めから無い、ただ瞬龍と適合するためだけに造られた^{モルモット}実験体なのですよ！」

……視界が揺らぐ。

ウエルクの言葉は耳に入った。

だが、意味がよく理解できない。

俺はここにいる。

記憶もなにも、欠けているハズがないのに……ッ！

「貴方が生まれたのは丁度二年前。そうですね。熱い陽射しが苦しい日だったと、この男は記憶していますね。つまりところは貴方は成長促進剤に浸されて無理やり成長させられたたった二歳の赤ん坊だと言ふことですよッ！」

「——ヤメロオオオオオオ！」

俺の背後から、誰かが飛び出した。

「クレハの事を実験体だなんて言うなッ！　クレハは私の……たった一人の息子だッ！」

束さんだ。

束さんは自分自身で剣を握ると、ISを纏っているワケでもないのに激昂して斬りかかる。

「ハハッ！　何を怒っているのですか！　貴女も我々と同じように彼の事を使い、研究を進めた仲では無いですか！　——貴女に怒る権利があると思っっているのかッ!？」

ウエルクは躊躇なく束さんにパイルバンカーを打ち込み、吹き飛ばす。

吹き飛ばされた束さんは足元にシールドの足場を張ると、それを蹴り、再びウエルクに肉薄する。

「確かに私は最低の母親だ！　自分の血を持つ息子をただの道具のように思っていた！　だけど今は違う！　クレハはちゃんと人の心を持ち、人と接するただの人間だ！　苦しんだり、大切な人の隣に居ようとする心を持つてる人間なんだよ！」

束さんの操作したミサイルポッドが全てのミサイルを吐き出し、全弾ウエルクに命中。爆煙が辺りに立ち込める。

——そうだ。

俺の記憶の大半が不完全なもの。だったら完全なものはどこからだ？

答えは簡単だ。

鈴との記憶。あれは本物の記憶であるはずだ。

瞬龍とのマッチングの苦しみも本物、身体を改造される痛みも本物なら、アイツと過ごした一時の時間だけは本物の記憶であるはずなんだ！

そうだ、剣を構えろ。まだ行ける。全てが全て偽物である訳ではないんだ。多くの偽物の中にも確かな本物はある！

「う、うおおおおおッ！」

再び弾き飛ばされた束さんと入れ替わるようにウエルクに肉薄する。

「くっ、人形が・・・ッ！」

降り下ろした剣をウエルクは再展開した銀剣で防ぐ。

「まだ、まだあー！」

瞬時にハンドガンを展開した俺は立て続けにフルオート掃射で銃弾をウエルクのシールドに叩き込み、エネルギーを削る。

「瞬龍を失った今のあなたでは我々にとって何の価値もありません！」

戦う理由は無いはずです！ 大人しく身を引きなさい！」

「んなこと関係ないんだよ！」

「だったら何故!?!」

銃弾を撃ちきった銃を投げ捨て、剣を二本構える。

「決まってる！——自分の為だ！ 鈴が認めてくれた俺自身の為に戦うッ！ だからアイツも死なせはしないし、アンタもここで止めるッ！」

赤い装甲を朝日に輝かせる牙龍に向かって急上昇する。

下から切り上げるように剣を振り、サラが傷つけた脚部スラストを切り落とし、機動力を奪う。

「分からない・・・！ 理解できないッ！ そうしてまで戦う理由なんて！」

打ち出された杭が、頬を掠めて後方へ流れる。

ブレードを腰にすえ、いつでも振り抜けるように構える。

一瞬にして物体を両断する、瞬撃の刃——

「——きつと昔のアンタなら理解できただろうよ。ウエルクさん」

「ふぎ・・・けるなああ!!」

ウエルクの杭が、再度俺を貫くために伸ばされる。

「——迅閃ッ！」

俺の放った瞬時加速での居合い切りはまさしく閃光の速度で放たれ、正確にウエルクの杭を破壊し、そのまま絶対防御をも越えてウエルク本体を斬り付ける。

その際、ウエルクの胸から輝く結晶が出現し、俺にはそれが瞬龍のコアだと分かった。

・・・お帰り、瞬龍。

それを握りしめた瞬間、光の塊が砕け散り、それらの全てが俺の胸へと吸い込まれるように消えていく。

「…………ぐ、う……。あ、あなた方は間違った選択をした……。これから巻き起こるISによる戦争……。それは間違いなくあなた方を中心としたものになるでしょう……。ッ」

息も絶え絶えにISの解けたウエルクが言う。

「いずれあなた方は知ることになる！ 双龍の真意を……。ッ」
海へと落ちるウエルク。

そのウエルクをサラが空中でキャッチした。

息は……。あるな。傷は深いが死んではないみたいだ。

束さんの下に戻ると……。相当疲れたみたいでへたりこんでる。

「…………運動できることを見せつけるんじゃないや無かったのかよ？」

「クーちゃん…………」

顔をあげる束さん。

「まあ、なんだ。全部を全部受け入れる訳じゃないが、取り敢えず今は気にしないことにした。……アンタを母親と呼ぶにはちよつと抵抗が…………」

瞬時に全てを受け入れるだけの器のデカさは俺にはない。

だけど、少しずつ。少しずつ受け入れていけばいつかは全部を飲み下せる日が来る。

「今の俺は甲龍鈴のパートナーなんだ。だから、そうやって生きていく。気にする必要なんか無いさ、束さん」

「う、うええ……。クーちゃん!!」

ちよ、ちよつと待て！泣き出すのは予想通りだが、飛び付いてくるとその胸が…………ッ！

アゴをカチ上げられるように（胸での）アツパーを喰らった俺は一瞬昏倒するも、なんとか落ちる前にリヴアイヴを再展開する。

まあ、こう言うところもあるから母親って思えないところもあるん

だろうな……。

「親子の触れあいつていっても、ちよつと過剰すぎるんじゃないかしら束博士？」

と、そこへウエルクを担いだサラがイラツとした顔で現れた。

だが、束さんはそんな事気にしてないとばかりに、俺に鼻水やヨダレを付けまくる。バッチイ！

「あー、なんだ。多分そろそろ鈴も来ると思うから、離れた——」

「なあんでえー！ クーちゃん束さんが迷惑なおくー！」

うん。今はめっちゃ迷惑だから離れろください！

——だが、まだこの戦闘は終わっていなかった。

忘れていたのだ。

ミナトが言っていた敵の総数は、3だと言うことを。

@

「——無様だな。ウエルク・ウエルキン。いや、バースと呼んだ方がいいのか？」

低く、良く通る声。

それが聞こえたとき、俺は反射的に声のする方向に向けて部分展開した瞬龍の衝撃砲『轟砲』を放つ。

撃った直後、ハイパーセンサーがIS反応を掴み、視界内に敵性の^{エネミー}表示を出す。

「おいおい、こちとらさつき終わったばかりだぜ……？」

放った衝撃砲は、当たり前のように消し飛ばされ、昇った朝日を背に一機のISが佇んでいるのが確認できる。

「くっ……^{ファン}凰……！」

気を取り戻したウエルクが呻く。

……凰だと……？

俺の記憶の中で凰の名字を持つ人間は二人しかいない。

即ち、鈴と——その父親。

「……なんで、アンタが」

ハイパーセンサーが操縦者の顔をアップで写し出し、その映像に俺は言葉を失った。

「よう、久しぶりだな坊主。二年前の事故以来か？　鈴はどうしてる。元気か？」

娘の心配をする姿は父親のそれだが、その瞳の奥にあるのは獰猛な肉食獣のような激しく燃える輝き。

フアン
鳳 経公

鈴の父親にして、俺が事故に巻き込んだ人物。

「にしても焦ったぜ。さつき来た青い嬢ちゃん達をちよつと驚かしてたら織斑さんとこの坊主までいるんだもんあ。お前といい、一夏といい。今日は懐かしい顔に会える日だなこりや！」

ガハハと中華料理屋の店長らしい豪快な笑い方をする経公さん。

だが、まどつているISは凶悪の一言に尽きた。

原型は中国製作の量産機、偃月えんげつらしいが、改造度が半端ではない!! 各部ブースターに増設された推進装置に、機動性を上げるための制御翼。

背に背負った巨大な刃物と、他にも挙げていったらキリがないぞ……!

「どうしてだ……。どうしてアンタがそっち側にいるツ！」

瞬龍を全身に展開させながら問う。

「ひゆう、懐かしいな。瞬龍じゃねえか！　つて、てめえ捕ってこいつて言ったのに失敗しやがったなバース！」

「ぐ……申し訳、ありません……!」

ウエルク——バースと呼ばれていた——が経公さんに謝罪する。

あ、あれだけ強かったウエルクがあんなに下出に出るなんて……。強さが未知数だ。

いや、もしかしたら戦う展開にならないかもしれない。

一方的な殺戮。それが起こる確率もゼロじゃないと、瞳は表示を出している。

だから、警戒する。

経公さんの一挙一足に!

「まーいいや。どうせ終わりだからな」

経公さんは首筋を搔きながら俺を見据えてこう言った。
「——おい坊主。今すぐ瞬龍置いて逃げるか、ここでこの青
龍偃月刀の餌食になって死ぬか。どっちか選べよ」

真実

「・・・妙だな」

昇りきった朝日を背にした経公さんがそう眩く。

その眩きを頭の片隅におき、俺は今の状況を分析する。

まず俺の状態だ。

瞬龍が手元に戻ってきたとはいえ、ISとの物理的なリンクが切れていた代償は大きい。

先ほどから俺のデータを再び入力しているのか、視界の隅に複雑な文字や数字の列が流れている。

俺の身体の状態から言ってもあまり長い時間の戦闘には耐えられそうにないぞ。

次に、サラ。

サニールバーを再展開したサラは俺と違ってISの方は問題ないようだが、ウエルクから受けた杭のダメージが意外に効いているように見える。こちらも全力とはほど遠そうだ。

そして束さん。

束さんの操る武器は正確にはISではないがその戦闘力は高く、事実ウエルクのIS『牙龍』を圧倒していた。

対して相手は経公さんとウエルクの二人だが、ウエルクの方は戦えそうにはない。

三対一。

客観的にはこちらが有利だが油断するわけにはいかない。

先ほどの台詞――

『――瞬龍置いて逃げるか、ここでこの青龍偃月刀の餌食になって死ぬか。どっちか選べよ』

――からも分かる通り経公さんは俺たちに対して敵対的な立ち位置にある。

死んだはずの人間が生きていた例はウエルクの時に経験しているから分かるが、恐らく経公さんは双龍側の人間――つまり敵だ。

「――なにが妙なんだよ。俺にとつちや生きてるあんたの方が妙に映

るぜ」

俺は戦闘に備えて密かに展開した「流桜」の薬室に通常の弾頭とは違う特殊弾頭の弾を籠める。

もし、経公さんが本当に双龍の人間だった場合——

——鈴が来る前に仕留めてやる。

「おおつ、良いねエその眼。状況的にはBシステムになり得ないってのにその殺気。——さっきの質問への返答ってことで良いんだよなクレ坊？」

「悪いが俺は双龍について色々知らなきやならないんだよ。だから瞬龍^{コイツ}は手放せない」

俺が向けた眼に俄然やる気を出したのか、経公さん——経公が背負った青龍偃月刀を手にした。

「束さん、サラ。俺にやらせてくれ。あの人と話したい」

背後にいる二人に向けて告げると同時に、経公が手にした武器を構えて先手をとってきた！

「わりいがクレ坊！俺達も大人の事情ってやつが有ってだなア、ソイツと甲龍が必要なんだよ！」

上段から降り下ろされた刃を時穿で受け止める。

青龍偃月刀——俗に言う青竜刀は日本刀とは違い、重さで相手を叩き潰す武器である。

その重い刃を受けた俺はその衝撃を受け止めきれず、バックステップでその場から回避。

離れる際に先ほど籠めた銃弾を経公に向けて発砲する。

銃弾が見えているのか、経公はなんと自身に迫り来る銃弾を斬ると言う技術を見せつけ——。

「.....？」

——と同時に、割れた弾丸の内部から白い煙幕が噴出し、辺り一辺を真っ白な煙で染め上げていく。

煙幕の範囲外にいた俺は両手の衝撃砲『轟砲』を構えるとエネルギーの許せる限り連射していく。

打ち込んだ砲弾の数は23。そのすべてに手応えがあったが——

—まだだ。

「ハッハー！　今のはスカツとしたぜクレ坊！」

笑い声を上げながら煙から突進してきた経公は言わずもがな無傷。それどころか余計に相手を昂らせてしまったようだ。

「俺も衝撃砲積んどけば良かったかもなあ……。ちつ、共青団出身の政治家は頭が固くて用意してくれなかったからなあ」

「共青団って……。あんたもしかして中国政府の元エリートかなんかかよ……。ツ？」

咄嗟に時穿を前に突きだし、青龍偃月刀の一撃を受け止める。

て、手がビリビリしやがる……！

「ああ、そうだ。俺は今じゃ双龍で全体の指揮取ったりするがな、元々は中華料理人な上に中華政界の秘蔵っ子だぜ？　笑えんだろ？」

「笑えるかっての！」

強引に経公を押し切り、続けざまに斬空を二撃放つ。

「一体なんで瞬龍や甲龍……いや、鈴を欲しがる!?　親の情とか言ったら絶対に斬るからな！」

意図も簡単に斬空の見えざる斬撃を避けた経公は俺を見るとハァー、とため息をついた。

「なんだよお前、自分が戦ってる世界のこととも知らずに力を振るってるのかよ。おい篠ノ之博士。息子に状況説明ぐらいしてやったらどうなんだよ?」

「今は束さんは関係ない。あんたは双龍の幹部的な地位にいるんだろ。だったらあんたから聞かせてくれよ。どうして二年も鈴の前から姿を消した?」

「そう言うと経公は——」

「……。仕方ないな。——聞けよクレ坊。ISこれは人類おれたちの作り上げたものじゃない」

「そう、話始めた。」

「今から12年前、とある女の子が自分の家が所有する山中で奇妙な物を見つけた。なんだと思う?」

「……。知るわけないだろ。良いから話せよ」

「あーあ。イヤだねえせつかちは。聞き手の反応がねえとこつちも話す気が失せてくるぜ。……まあいいか。とにかくだ、その日少女は光る人間を見つけたんだ。裸の上に何故か鉄の鎧を纏ってな」
経公は自身が纏っている偃月の装甲をこんこんと叩いて続けた。

「——それが世界に初めて現れたISだ。——といつても技術化されるのはもう少し後なんだが今はいいだろ」

「……待て、それじゃあ今俺達が纏っているのは……」

「違う違う、落ち着け。話はこつからだよ。——女の子が少女を見つけたとき、その少女は今にも死にそうな状況だったんだ。見つけた女の子はなまじ頭が良かっただけにその場で技術を駆使し、本能に従った」

「本能に……?」

俺が意味が分からないという顔を見ると経公はニヤリと口元を歪めた。

「少女はその生まれ持った強い探求心に従い——少女の身体を開き、その場で中核を成す部分の組織を一部切除した」

それは、つまり……。

「——そう、あの日の私は異常だった。彼女に魅せられた私はその場で彼女の核を奪い、心を手に入れた。人を殺したんだよ。——うん、人じゃない。世界初の『超界者』を」

俺の言いたいことをいつの間にか隣に居た束さんが代弁し、更に説明を付け加える。

「そう、そうだったよな篠ノ之博士。でも俺はあんたを責めないぜ。あんたは『核』を利用してその『心』までは棄てなかった。だから、今起きてる問題は解決できる」

……マズイ。早くも話に取り残されてる感じだ。

経公が言った女の子とやらは恐らく束さん。そして山中で死にかけていたと言う少女がISを装備していたってことか。

「さて、それじゃあ束さんはISを開発した訳じゃないってことか?」

「いいや、それも違うぜクレ坊」

またもや、経公が否定する。

「確かに篠ノ之博士はISを根っこから開発した訳じゃない。だが、手に入れた核を複製することには成功したんだ。昔は今ほど『超界者』の数も多くは無かったしな。それに、ISを一機作る為に超界者を一人殺してたんじゃ効率が悪い。だから世界中のあらゆる機関が血眼になって超界者の核——即ちISの元となるコアだわな。それをかき集めてるっていうのにそれを余所に核を複製、それをもとにISなる兵器まで作っちゃった時には笑いが止まらなかったぜ？」

経公は当時のこと——10年前を思い出しているのかクツクツクと喉を震わせた。

「——でも、私には理念があった！ 私が解析したコアには想像を絶する力が秘められていた。あれがあればエネルギー問題は元より、私が提唱した外宇宙への進出だって可能になるはずだったのに、それを双龍が……！」

束さんが経公を責めるように言う。

すると、経公の笑い声はぴたりと止んだ。

「——クレ坊。こつからが本題だぜ。さっき言った篠ノ之博士の輝かしい功績はな、その女の功罪で言うところの功のほうだ。無論、罪だって存在する」

経公が束さんに向ける目。

それはとてつもなく冷ややかで、侮蔑するような力が込められていた。

俺に向けられたわけではないのに、思わず身震いしてしまった。

恐怖。俺は今、あの男に恐怖している……ッ!?

「篠ノ之博士がISを発表してから数ヶ月経った頃だ。隠蔽されてたが世界中のIS研究機関がいくつも襲われ、または破壊されていた。超界者は探していたんだよ。昔死んだ少女の『心』を、な」

心——。これが意味するモノとは一体何なのか、俺の頭は一步一步理解に近づきつつあった。

「俺はその頃には共青团から双龍の指揮官になってたんだがな、事態を重く見た中国は早急に対超界者用の武器にISを利用することを決定付けた。技術が進歩し完成された兵器を駆る超界者に太刀打ち

できるまで待つてな。そうして始められたのが『双龍計画』だ」

「つまり瞬龍、甲龍つてのは——」

「そうだ。超界者——次元の向こう側の世界からやって来る破壊者に
対抗すべく造られたISだ」

頭のなかがぐらりと揺れた。

俺は知らないことが多すぎたのだ。

元より二年ほどしか生きていないから仕方のないことかも知れな
いが、衝撃が大きすぎた。

「……それじゃあ、なんで俺達が操縦者に選ばれたんだ……？」
俺は聞きたいとは思っているはずがないのに、それを問い掛けてし
まった。

俺と鈴は何のためにISに乗っているのか、ここからの話はそれを
悪にも善にもすると言う直感があった。

「——それに関しちゃうソッチが説明してくれると思うぜ？」

予想に反して、経公は顎で東さんを指し示した。

指された東さんはとても言いづらそうに語りだした。

「私が死なせてしまった『超界者』は、所謂女王、という地位にいた個
体だったようで、『核』と『心』を奪われたとだけあって、その他の超
界者はその両方を探し始めた。理由は簡単。その二つがあれば再び
女王を再臨させることができるから。中国に加えてイギリス、日本は
二つともを超界者に返還する、ということ合意がなされた……。で
も私はその時には既に核をISのコアとしてとある実験に使ってい
たの。——そのISが瞬龍」

東さんはそう語った。

「——それを知った俺達双龍は実験事故を装って瞬龍を奪取しよう
と考えた。篠ノ之束が所持していると思われる『心』も一緒にな。そ
れがあの日、俺が姿を消した実験の日の真実つてわけだ。先攻部隊が
突入し、試験稼働中の瞬龍を奪い取る。そういう手筈だった」

「——だけど、俺が暴走したせいで失敗したって訳か」

東さんから引き継いだ経公の話をもっと俺が引き継ぐ形で完結させ
る。

「暴走つて言うところちよつと語弊があるよクーちゃん。あの時の暴走の正体は『オーバーリミット限界超越』。超界者が纏うISにも同じ特性がある、言うなれば切り札だよ」

「切り札．．？」

東さんの説明に眉を寄せる。

ISの切り札といったら言わずもがな単一仕様能力だ。ワンオフアビリティ

東さんの話からすると、このIS、瞬龍にはそれ以上の能力があることになるぞ。

「分からねえかクレ坊？ そのISはオリジナルだ。世界中で流通しているコアが篠ノ之博士による複製品だしたらお前のそれは紛うことなき本物だ。だから俺達はその女王の核で造られた瞬龍と鈴を必要とする。——と言うよりアイツの頭の中にある情報に用があるんだ」

「頭の中にある情報つて．．．」

俺の身体は無意識に説明を求めようと東さんを見つめていた。

今までの話のなかに鈴が出てくることはなかった。

更に未だに一つだけ分からないのは、現在の『心』の在処。

大体予想はついていて自分でも自覚しているが、それを認めるわけには行かなかった。

それが本当なら、俺が負けるとどういう形であれ鈴は死ぬ。

目の前で東さんは俺を見ることなく真っ直ぐに経公を睨んでいる。

まるで、俺と話すことを拒むように。

「．．．本当は話すつもりはなかったけれど、クーちゃん。何があつても凰 鈴音を護つて。私は彼女の脳内に情報として『心』を埋め込んだ。あの日の事故のあとだよ。あんなに都合のいいタイミングで襲撃があつたおかげで、私は核と心が狙いだと知ることができたから、二機で一体と成れる双龍の傑作機、瞬龍と甲龍の中にそれぞれを封じ込めた。彼女が狙われるのはそれが理由。その後三国内で責任の擦り付けをしている間に双龍は独立した組織として活動を始め、今に至っているの。中国は私の取った行動を正しい判断だと認め、その事実をデータ上から抹消したけれど、双龍は知っていた。経公、貴方が

知っていたから」

「それじゃあアイツに記憶がない理由は……」

「強制的な脳内情報の上書きのせいよ。負荷が掛かりすぎて一部記憶情報を抹消したの。そうした方が都合もよかったから」

東さんの物言いに、俺は小さな憤りを感じた。

東さんや経公が何を思っただろうのかは理解できた。

だが、実の娘を平気で犠牲にしようとする経公の不快な覚悟が、都合がいいというだけで人の記憶を消してしまえる東さんの達観が、気に入らない。

心の整理がついた瞬間、やるべきことがわかった気がする。

「整理するぞ。詰まるところ、女王を復活させて世界を守ろうとする双龍と、対超界者用の I S を持つ俺達がどうにかしてくれるだろうと思っただけの日中英の三カ国がいざこざ起こしてるとして訳か」

「……まあ、そう言うことだな」

「……そう言うことだね」

俺の強引な纏めに二人が曖昧に頷く。

「そうか——だってよ。サラ」

「そうね。一言で言うなら腹が立つわね。核と心があれば超界者は再び現れることができる。だったら肉体はどうするのよって話よね。」

「……まあ、この人を見れば一目瞭然なんですよけれど」

呼び掛けたサラは彼女の意見を言う足元で再び捕縛されてるウェルク改め、バースを見下ろす。

「——経公、あんたいったよな。核と心を返すって。それ、一体どんな形で返すつもりなんだよ？」

彼らはわかっているはずだ。

その女王の復活。そのよりしろとなる肉体は鈴が使われると言うことを。

それでいいのか。

本当にいいのか。

少なくとも、俺は嫌だ。

「あんたら二人のどつちかに付け、と言われたら俺は渋々だが東さん

の方に付く。その世界を壊す超界者つてのがそこにいるバースミタ
いなやつなら全部俺が相手をしてやる」

怒りから来る感情が俺の心臓の鼓動を早める。

ドツドツドツと単調なりズムを刻みながら、身体の機能が上昇して
いることに気がつく。

——特定のISコアを検知。Bシステム、起動。

瞬龍の指示にしたがって見た方向には。

「なんで……なんでお父さんが……」

鈴がいたのだ。

@

……遅かったか。

俺は歯噛みした。

出来れば鈴がない間にケリを付けたかったが、こうなつてはそう
もいってられない。

Bシステムが発動したお蔭でさつきよりはマトモに戦えそうだ。

「おお、鈴！まさかそつちから来てくれるとは思わなかったぜ。久
しぶりだな覚えてるか？俺だよ俺！」

経公は隠した思惑を窺えさせない笑顔で鈴に向かって手を振り、親
しみ深い笑顔を向ける。

一方鈴は感極まった様子で、実の父がISを纏っている事実を気に
していない様子で目尻に涙を浮かべている。

ISを纏った二人が再会の喜びを分かち合おうと駆け寄る、が。俺
はその光景があまりにも自然すぎて一瞬反応が遅れてしまった。

凰 経公。

その男の狙いは——！！

「鈴ッ！離れろッ！」

とつさに叫んだ。

俺の叫び声に反応した鈴が俺の方を向いて「え？」と小首を傾げる。
その首の横を。

ブンッ！！

——振り下ろされた巨大な刃が通りすぎていった。

「……ちつ。別に殺しはしないぜクレ坊。鈴の身体は女王の復活に必要なモノだからな」

さも当然のように娘をもの扱いする経公。

異常だ。

改めてそう実感する。

鈴は反射的に武器を展開し、経公から距離をとる。

「クレハッ！ どういうことよ？」

「訊くよりもまず逃げろッ！ その男の狙いはお前だッ！」

そういつた瞬間、又もや経公の青龍偃月刀が煌めき、鈴に向かって振り下ろされる。

ギンッ！

鈴と経公の間に咄嗟に体を滑り込ませた俺は、時穿で青竜刀を受け止める。

「なによ……何なのよこれえ！ なんでお父さんがIS使って……わけが分からないわよ！」

「落ち着け鈴！ とにかく逃げろ！」

混乱している鈴は今にもしやがみこんでしまいそうなほど狼狽している。

まずい。非常にまずい。

このまま動けなくなったら俺は鈴を護りながらこの男と戦わなくてはならなくなる。

本調子でも無いのだからその状況は絶対に避けたい……！

「なんだよ坊主。やっぱりBシステムのトリガーは鈴になったのか」

「それがどうしたよっ！」

一瞬だけ時穿の柄から片手だけ離して、流桜を握ると至近距離から通常弾を経公に打ち込む。

「ぐっ……！」

シールドバリアーの効かない範囲、絶対防御が発動したのか経公の顔がほんの少しだけ歪む。

経公は先程とは逆に俺を蹴り飛ばすと、スラスターを吹かしながら

距離を開ける。

空中で姿勢を整え、経公の姿を探そうとした瞬間、アゴに強烈な衝撃。

メリツと頭の中でイヤな音が鳴り響き、激痛が走る。

あ、顎を蹴り割られた・・・!?

そう自覚した瞬間、続いて右脇に冷たい感触が一瞬だけ感じられ次の瞬間にはそれが猛烈な熱となって俺に襲いかかってきた。

「あ、アガッ・・・!?! が、アアアアアアッ!?!」

顎の骨が砕けているため声がうまく出せない。

痛いと言うより熱い金属棒でも差し込まれたかのような猛烈な熱を右肩に感じ、自分の右肩を見るが、そこにはあるべきはずの肩がない。

「おーい。探し物はこれか?」

経公が、手に何かを掲げている。

——俺の、右腕——。

頭が真っ白になる。

痛みすら一瞬消え去って、その事実を受け入れる準備をする。

シールドバリアーに絶対防御もあるはずなのに、それを突破して攻撃された。

肩から先がない。

時穿すら右腕が握ったまま経公の手にわたっており、俺は左腕で今さら出てきた出血を抑える。

「く、クレハアッ!?!」

鈴の声が聞こえる。

だがその声も一瞬でかき消された。

どうやってか一瞬で移動した経公によって鈴が気絶させられたのだ。

しまった。鈴が向こうの手に落ちた。

なんとか・・・何とかして剣を手にとらないと・・・っ!

「ぐ・・・フウウウ・・・ッ」

そうは考えられるが身体が石のようになって動かない。

肩の熱が過ぎ去り、明確な痛みが俺の脳内を犯し続ける。
痛い痛い痛い痛い痛い。

………止めてしまいたい………ッ！

「止まっってはダメだよクーちゃん！ぐっ」

東さんも、経公によつて封じられる。

俺が謎の硬直で動けない間にサラも倒された。

なんで……、なんで。

Bシステムは効いているハズなのに。

経公はその先を行っていると云うのか……!?

血が……止まらない。

流れ出る赤い液体は重力にしたがつて真下の海へと落ちていく。

俺にはそれが止められない。

まさに一瞬で俺たちを倒した経公が俺に向かってほくそ笑む。

これで、文句ないよな？ とでも言うように。

ああ、そうさ。文句なんてあるわけがない。

俺には力がなかった。

鈴を護るだけの力が。

四月のクラス代表トーナメントの日、箒相手にかっこよく見栄張つておいていざとなったらこの様かよ。

くそッ。

欲しい。

力が。

必要なんだ。

だから、くれよ。

何人をも切り裂く絶対の刃を。

アイツを護れるだけの鎧を。

ちくしょう………。

——『初期化』と『最適化』の準備が出来ました。実行します

か？ Y/N

覚悟

・・・なんだ？

身体が、何か温かい液体に浸かっている感覚がある。

口元には呼吸を行うためかマスクらしき器具が付けられていて、俺はそこから酸素を吸っていた。

・・・俺？

いや、僕だ。

僕は・・・ここで一体何をしているんだ？

「おや、お目覚めの時間の様だね。暮刃くん」

くぐもった声が、耳に届く。

液体を通して聞こえるからか、その声は元の声がどのような声なのか判別できないほどに変声されている。

僕が突然射した光に眉をしかめると・・・――

「初めまして、私が君のお母さんだよ」

ザパアと僕が入っていた容器――カプセルがひっくり返り、僕は初めて外界の空気に触れた。

「・・・ハン、どこ？」

「おお、いい質問だね。流星は東さんの息子さんだよ」

目の前に、照明を背に立つ女性のシルエツトがある。

腰に手をあて、僕の顔を覗き込んでいる。

「さっきの質問に答えようか・・・ってあ、質問の意味、わかるかい？」

女性の発言から察するに、この人はタバネと言うらしい。

僕はタバネの発言に少し気を損ねたのか、そっぽを向いて言った。

「・・・それくらいは、わかる」

「ん、よろしい。東さんの英才教育が行き届いているみたいだね」

そう言うのとタバネは大仰に胸を張り、自慢げに言った。

その際に巨大な胸部が重そうに揺れたが、一体あの部位は何なのだろうか。

なぜだか、僕の思考がそこに引き寄せられる。

——甘えたい。

きつと今僕の脳内にある感情を表すのに、これほどピッタリな言葉は無いだろう。

「それで、ここがどこかについてだけれど、今の束さんからは詳しいことが言えない状態なのですよ。強いて言うなら某国の研究所って感じだね」

「研究所……？　なにを、研究しているの？」

研究所、という単語の意味することはすぐに分かったが、一体何を研究しているのか。それは僕の脳内には無い。

そのとき、照明が落とされ、周囲に何があるのか分かるようになる。

突然現れた機械類を眺めるように見回す僕を見たタバネは、少し困ったような笑顔を浮かべて言った。

「そうだね……。これまた強いて言うなら暮刃。君自身をだよ」
「僕自身？」

「そうだよ。君はこれから世界中のどこにでも行けるようになる。だから君はその行く先々で学ぶんだ。己とはなにか。自分自身とはどこにあるのか。何のために生まれ、どうして生きているのか。それがわかったとき、君は力の使い方を理解できるようになる。この広い世界が君の研究所だよ」

タバネの言っていることはほとんどが理解できなかつた。

首をかしげた僕が可笑しかったのか、タバネは口角を吊り上げて笑みを浮かべた。

「そうだねえ、まだ分からないか。まあ、焦ることはないよ暮刃。君はこれから変化するための第一歩を踏み出すんだ」

そう言うときタバネは僕に視線をあわせるようにしゃがみこみ、両手を前につき出した。

まるで飛び込んで来いと言わんばかりに表情は慈愛に溢れ、同時に何故か悲しみまで伝わってきた。

「あ……。ああ……」

僕はそんなタバネにずりずりと近づいていく。

身体的には少年と言える状態にも拘らず、僕の足には一切の力が掛

かっついていない。

手だけの力で床を這い、タバネの胸に抱きつく。

柔らかく、優しい感覚。

長らく求めていたような、けれど初めて感じる感動がそこにはあった。

タバネは、僕、暮刃の母。

そうか、これが母性と言うものなのか——。

「それと……ごめんね。こんなお母さんを許して……っ」

頬に、水滴が落ちる。

何なのか分からずに、僕はそれを拭い取る。

「……タバネ、どういうこと？」

そう問いかけたが、答えが得られぬまま、僕は何者かに抱き上げられ、顔や身体に布が被せられる。

必死に抵抗しようとするが、なにぶん力が入らないため抵抗らしい抵抗もできない。

タバネから遠ざかっていることを直感した僕は自分にできる精一杯を実行する。

唯一出来たこと、それは——

「お母さん！ お母さんっ！」

嗚咽を洩らす母親をただ呼びつつけるだけだった。

@

「——今のはお前が見せた俺の記憶か。瞬龍」

酷く懐かしい記憶を追体験した俺は、ズキズキ痛む頭を押さえながら上体を起こす。

……見慣れた場所だ。

イギリスの国内にあった秘匿研究所第三施設。

その試験場だ。

「——そう、あれは貴方の根底にある、最も古い記憶」

虚空が歪むようにして現れたのは一人の少女。

緩やかなウエーブを描く蒼い長髪に、真っ白な肢体。

服を着ておらず、とても扇情的な姿をしているが不思議と不快感は

無い。

ただただ、美しい。

そう思わせるほどに、彼女は美しかった。

「最も古い記憶って……アレか。俺の記憶が違ってるのはただただ思い出せないだけなのか」

「そう、本来ならあるはずの無い記憶があるのは脳の状態的にも良くない不自然な状態。でも彼女——篠ノ之束が貴方の精神安定を図るために無理矢理記憶を植え付けた」

「なるほどな」

俺は立ち上がり、久しぶりにこの施設を見渡す。

俺の記憶から再現しているのか、壁の傷などが俺の記憶の通りに付けられている。

見下ろすとIS学園の制服を着ているようだが、ここに入る前の戦鬪のせいか右腕がない。

「……さつきは直感でお前のことを瞬龍って言ったが、間違いないのか？」

「その点については肯定するが、一部訂正がある。私は瞬龍という個体名ではない」

「？ 本名じゃ無いってことか。それじゃあ何なんだよ」

そう訊くと瞬龍は少し黙った。

「……エリナ」

「エリナ？ 随分と日本的な名前だな」

てつきり意味不明な単語が飛び出してくると思ったから拍子抜けだ。

「同意するがこの名は私が付けた名ではない。死にかけていた私に束が付けてくれた名前だ。元々私たちには名前という概念はない」

「死にかけていた時に束さんがって……エリナ、お前が超界者の女王ってやつか」

「肯定する」

あ、あっさりと言質取れたな……。

……だけと言質とったとしてもどうすればいいんだろう。

俺が持つてるのはコアとしてのエリナの一部だし、経公や束さんの言葉によればエリナの心は鈴が持っていることになる。……つてこいつの言葉が妙に機械的なのは心が無いからか。

「あー、一体こいつでどこだ？　一瞬でイギリスまで飛べる訳じゃないし、まずあの研究所は無いんだぜ？　どこにいるんだ俺は？　瞬龍の中か？」

本格的にやることを見失った俺は手持ち無沙汰に適当に疑問に思ったことを告げた。

「……そうか。貴方にとっては初めての体験だったことを失念していた。貴方の質問は根本的などころで間違っている。貴方が移動したのではない。私が貴方の心に入り込んでいる」

エリナはそう前置いた。

「私が今貴方の中にいるのは、今現在貴方と瞬龍の間で接続の更新をしているから。このタイミングで私は貴方に聞いてみたいことがあった」

「？　聞いてみたいこと？」

座ったエリナに合わせて自分も床に腰を下ろす。

「貴方は先ほど、強く力を求めた。それこそ束が封じていた接続の更新——『初期化』フォーマットと『最適化』ファッティングを実行してしまうほどに。それはなぜ？」

「……なぜ、か……」

予想外の質問に多少面食らったが、答えは直ぐ様見つかる。

「そりゃまあ、鈴が危ないって言うなら助けなきやならんだろ。人間なら普通に持つてる助け合いの精神だ」

「その説明では不十分。事実、束は死にかけている私を発見すると少し会話をしただけで直ぐ様刃物を入れた。助け合いの精神とは言えない」

「……おい」

束さんの凶行に下を巻いた。

何してんだよあの人……。

「……質問を変える。なぜ凰　鈴音が危ない場合だと限定した。」

それは言葉の綾なのか貴方の随意的な選択による結果なのか、私は知りたい」

「何故鈴なのかって言われてもな……。あいつとは一応ペアとして登録してあるわけだし、それじゃ理由には足りないか？」

「……不十分と判断する。貴方の経験では常に危ない役を押し付け会う二人の女性がいる」

「あー、うん。フォルテとダリル先輩か……」

「そういえばコイツ、いろんなこと知ってるなー」

「まあ、俺と一緒に居たんだからそりゃ知ってるだろうけど……。……一体どこまで見ているのか気になったが訊くのは止めておこうかな。うん。」

「……別に、俺もハッキリとした理由がある訳じゃないんだが、何て言うかだな。……ただの意固地なんだと思う」

「意固地？」

「そう。意固地だよ。俺がアイツを護るのは。お前がこの空間にいるってことは俺の記憶見てるんだろ？俺は昔、鈴のことを護れずに、危ない目に合わせちまつたんだよ。だから俺がアイツと一緒にいて戦うのは一種の罪滅ぼしなんだよ」

「……理解できない。自身を犠牲にした上に他人を立てるなど我々の概念にはない。それは自己陶醉。ただ自分を犠牲にして他人のために生きていくという傲慢な考え方」

「確かにそうかもな。鈴にも怒られたぜそうやって。……でも、過去に壊れそうだった俺を助けてくれたのは鈴だ。アイツには記憶も自覚も無いかも知れんがそのところは感謝してるんだ。だから俺はその恩を返しているだけ。どれだけ身勝手だと言われようが俺は変えるつもりはない。……それにだな」

「それに？」

「——男が女の後ろで腰引いててどうすんだよ。俺は女子は苦手だが決めるところはしっかり心得てるつもりだぜ」

「そういつた瞬間、周囲の風景が変わった。」

『あんたすごいじゃん！』

初めてあった日、アイツは満面の笑みで偽物だった俺を受け入れた。

『はいこれ。束さんが。クレハとあたしで半分こしろってさ』

試験稼働実験終了後、施設の屋上でお菓子を半分に割って食べたこともあった。

二人ともそこそこ大喰らいだったのにお菓子半分とはなんとも寂しい話だったが、そんなことはなく俺は彼女の優しさが純粋に嬉しかった。

『ば、ばつかじやないの!? あたしが料理を練習すんのはあんたのためじゃ無いんだからね!』

ああ、そう言えば中華料理食わせてくれて頼んだこともあったなあ。

まあツンデレじゃなくてマジで食わせてはくれなかったけど。

「……………これが、貴方の記憶か……………」

俺が鈴と経験した時間を一通り見終わったエリナは、深く頷いた。

「そうだ……………つーか人の記憶勝手にのぞいてんじゃねーよ。個人の侵害だぞ」

「そう言わないでほしいクレハ。今ので私は理解することができた。詰まるところ貴方は彼女のことを……………」

エリナが、なにか決定的なことを言おうとしている。

言わせてはいけないと直感した俺は反射的にエリナの口を押さえようと……………したところでエリナが、クスリと笑みを浮かべたので飛び出す寸前のところで止まる。

「……………これは今は黙っておく。今後も貴方とは一緒にいるわけなのだから面白い経験値が積みそう」

「おい、人を玩具扱いするような発言はやめろ。て言うか俺たち死にかけてるんだぞ。今後も糞もあるかっての」

俺はふて腐れたように吐き捨てる。

まるでさっきの束さんとの記憶の中の俺みたいだと思って内心羞恥に悶える。

「聞いていなかったの? 初期化と最適化の準備はっ整っている。貴

方の強い思いが束のプロテクトを破ったのだ。貴方の覚悟次第ですぐにでも実行に移せる」

「覚悟、だど？」

「そう。覚悟。想いは人を強くする。それが束がコア私に組み込んだ唯一のプラグイン。私瞬龍というISは使用者の思いの強さによって機体が強化されていくらしい。今回は最初のパワーアップというわけ」

エリナは俺の心象世界だというのに手元にホログラフイーウインドウを表示させ、今の瞬龍と最適化後の瞬龍のスペックデータを比較する。

明確なパワーアップが見られ、諸々のスペックが俺の戦闘スタイルに合わせられて調整されている。

「それだけじゃない。今の私は貴方の記憶から『心』と言うものを擬似的に得ている。感情と言うのはとても気分のいいものだど理解した。だから私はこの昂りに任せて貴方にさらにサービスする事にする」

「サービス？　へんなものは要らんぞ」

「？　一体何をいつている。本来なら第一形態では使えないものだが、私とより密接に繋がった貴方なら使いこなせる。単一仕様能力、『超越世界』の使用を解禁する」

エリナが画面上に現れた鎖を引きちぎり、何かの警告に迷わず許可を選択する。

瞬間、それまでであった風景が一斉に崩れ落ち、世界が闇に閉ざされる。

「……いままでウンともスンとも言わなかった瞬龍お前がいきなりここまで世話してくれるなんて、なにか裏があるんじゃないだろうか？」

「裏か……。そう言えば人間はよくわからない場面で嘘を吐いていた。安心して別に何も仕掛けてない。……。強いて私の望みを言うなら鈴音を死ぬ気で護ること」

「それこそ安心しろ。誰にも殺させる気はない。でもなんでお前が気にする？」

言っていると次第に視界が揺れいていくのを感じた。

まるで眠りについていくように瞼が重くなっていく。

「簡単な話だ。彼女の中にある私の心は私にとっても重要な物なのでな。絶対に無くさないようにゆめゆめ気を付けることだな」

視界が暗くなっていき、瞼が完全に落ちてくる。

「貴方は耳にタコが出来るほど聞いたかもしれないけれど言っておく。『変わり続けるクレハ』。それが貴方が生き抜いていける唯一の手段だ——」

手を伸ばすも、空を切る。

先程と同じ場所にいるのか分からなくなってきた、自分が立っているのか座っているのか曖昧になっていく。

遂に何も感じることもない虚無の世界にたどり着いたが、たったひとつだけ、胸のなかに暖かな光があった。

これは、きっと。俺の力なんだ。

@

——『初期化』終了。最適化を開始。進行率23%——『最適化』終了。

——IS『瞬龍』起動します。

変化は劇的だった。

海面に向けて落下中だった瞬龍の中で進行バーが埋められていき、一瞬機体が銀色に輝く。

「……なんだっ!？」

鈴を担いでいた経公がその眩さに顔をしかめる。

鈴をラチろうなんて、誰がさせるかよ。

俺は再構成された瞬龍の脚で、空中を蹴った。

伸ばした左手に握られた剣、二式時穿にしきじせうで、急速接近した経公のIS偃月を切りつける。

すれ違い様に見た経公の瞳に俺は映っておらず、ただ驚愕の色ののみが見てとれた。

それもそのはずだ。

今の一撃は完全に相手の認識の外からの攻撃だった。

しかし、それは不意打ちなどではなく真正面からですら相手の認識には入らない。

速すぎるのだ。この瞬龍が。

「ぐっ、クレ坊……。やってくれたじゃねえか……」

小脇に鈴を抱えて浮遊する俺を経公が睨む。

俺のIS瞬龍は最適化の際に外見の装甲も変化させた。

基調となる銀色は変わらずに、所々に入っているのはエリナとの髪と同じ色の蒼。

流麗なラインを描く肩の装甲も更にシャープなデザインになっていて、一目で先の超速度を可能にしている一因だと直感した。

視界の端に映るカウントダウンは恐らく瞬龍の——いや、俺の生きている時間だろう。

意識が戻ってから痛みは無いが、右肩から止めどなく血が滴り落ちている。

約五分。それまでに目の前の男を止めるんだ。

「悪いな、経公。俺は死ぬ気もないし、鈴をやる気もない」

「バカ野郎、ないないで全部が通るレベルはどうに越えてるッ。戦争は既に目の前にまでできてんだよ！ 誰かの犠牲なしに収められると思うなよ！」

それ以上は、喋らせなかった。

瞬時に背後に移動した俺はそのまま時穿を振るい、経公の背部からダメージを狙う。

「ッ!？」

ギンツと短い金属音になり、俺の剣と経公の青竜刀が切り結ぶ。

「……てめえ、さっきの間に最適化を済ませやがったな……？ 篠ノ之のやつ、なんつータイミングの悪さだよ……！」

「絶好のタイミングだったよ。俺にとつては、なッ」

青竜刀を押し退け、経公を真後ろに吹き飛ばすと同時に瞬時加速で更に追撃。

経公を海へと叩き落とす。

Bシステムは今でも効いている。

戦闘による高揚状態が続いているのか、はたまた鈴の意識がまだあり、瞬龍がそれに反応しているのか。

まあ、何でもいい。

今はこいつをぶちのめせる。

それで十分だ。

右手がないので左手で剣と銃を持ち、流桜の特殊弾、炸裂弾を海面へと打ち込む。

次々と高い水柱が上がり、海面を白く泡立てていく。

付近にあつた小島に鈴を下ろした俺は泡立つ海面を見る。

「・・・おい。出てこいよ。この程度じゃねえんだろ」

そういつた瞬間——シュツッ！

勢いよく飛び出した粒子砲が俺の頬を掠め後ろに流れていく。

「良いのか？ 鈴を放置して。大切なんだろ？」

「今はいいさ。まずはテメーをぶっ倒してやる」

余裕ぶつた態度は止めろよ経公。

俺は今からテメーをぶっ潰すぜ。

時穿を握った左手に、右腕ぶんの装甲が展開されていく。

上手く噛み合っていないのか動かすたびにガキガキ音がなるが、

まあいい。

多分エリナが右腕ぶんのエネルギーを回してくれてるのだろう。

今まで以上に瞬龍とリンクがとれている気がする。

「ぶっ倒す？ そんな死にかけてよく言うなお前。さつきは不意をつ

かれたが奇跡は二度は続かんぞ？」

経公も右手に青竜刀を構え、左手を添えた。

まるで日本の侍みたいな構え方だ。

経公の声をききながら俺は——

(全身で五ヶ所の骨折、脾臓損傷。脇腹の痛みはそのせいか……。つとお、こりや腎臓もイッてんな……。)

全身、その隅々をチェックした。

普通の人間なら痛みにのたうち回っているだろうが、生憎俺は普通じゃないんでね。

右腕がないこと以外、普段と変わらねえな。

ていうか、不意なんて突いてねえよ。

真正面から鈴をかつさらっただろうが。

「奇跡なんか俺だって信じてねえよ。ただ——こつからは本気でいくぜ」

鈴が見てないなら都合がいい。

どれだけグロくこいつを処理しようが見てないならトラウマになり得ない。

殺れる。

今の俺なら間違いなく経公を殺れる。

「んじゃ、一つルールでも決めようぜ経公」

「ルール？」

「ああ。先に死んだ方が敗けつていうルールはどうだ？」

そう言う俺は——ドウツツ！

空中を蹴りつけ、回転しながら時穿を振るう。

睨み付けるように狙いを定めると——首もとに——降りおろす。

ガスツツツ！

「——ツツラア!!」

獣のような声を経公が発し、時穿を受け止めたが威力を消しきれず弾き飛ばされる。

今で奴もわかつたはずだ。

今の俺は、Bシステム発動時よりも高い戦闘力を獲得している。

そしてその戦闘力は経公のそれよりも数段上だ。

——振り切った左手が装甲の重みで軋む。

・・・軋むくらいがなんだ。左腕が飛んだら次は口で柄を握るまでだ。

「ッ！」

追撃の為に宙を蹴った俺を見て、経公が息を飲む。

——遅い。

すつ飛んでいく経公の真横に付いた俺はまた、時穿を振るいダメー

ジを与える。

上手いこと空中で姿勢を正した経公は反撃とばかりにスラスタ―を全力で噴射させ、俺に突進する。

「——死ねッ！」

刃を抜くかと思いきや、経公が取り出したのは小型の荷電粒子砲。さつき俺の頬を掠めて飛んでいったやつか。

経公は俺の眉間に狙いを定めて、引き金を引いた。

それに反応した瞬間が、体感時間を大幅に引き延ばし、時間感覚の遅滞を引き起こした。

これは・・・超高速戦闘時に引き起こされるハイパーセンサーのオーバークロック——スローモーションの世界だ。

銃口から放たれた輝く粒子が、俺めがけて飛んでくるのが分かる。

——分かる、と言うことは即ち・・・避けられる。

「斬れ——時穿」

そう発音すると左腕が俺の意思とは関係なく動き始め、粒子弾目掛けて斬空を放つ。

空間の切れ目に吸い込まれるようにして消えた粒子弾を見送った俺は体を捻り、経公の持つ粒子砲を時穿で弾き飛ばす。

経公は粒子砲を弾き飛ばした俺の隙を突き青竜刀を逆手に構えると、下段からの切り上げ——

「——止まって見えるぜ。経公」

絶好の隙を窺つての経公の攻撃は儂くも失敗に終わる。

粒子砲を弾き飛ばした俺は、経公の視線で狙いを悟るとすぐさま時穿を逆手に構え、青竜刀の刃と噛み合わせたのだ。

ギチギチと白刃と黒刃が噛み合っって音をたてる。

そのまま動かないヤツを俺は蹴飛ばすと、あることに気がついた。
・・・左肋骨の骨折が治ってきている。

さつきまで剣を振る度に痛みが走ってたが、今はもうそんな事はなく、全快している。

よく調べればさつきまであった擦り傷や裂傷も治癒している。

骨折や内蔵損傷と言った重症を優先的に生体再生で治し、軽傷は後

回しにしたんだな。

無限に戦えそうだぜ。

「おい。どうだ経公、死ぬのが怖えっていうなら首を一撃で跳ねてやるぜ」

「・・・ハツ、流石は女王の核が使われてるだけはあるな・・・。まさかカスタム偃月がここまで遅れをとると思わなかったな」

「じゃあ諦めてくれるっていうのかよ？」

「冗談じゃないぜ。クレ坊の言う諦めるっていうのは命を、ってことだろ？　そう簡単に捨ててたまるかってんだよ」

「じゃあどうするんだよ。テメーの持つてるのはただの青竜刀にその他もろもろの強化パーツ。戦闘の役に立つようには見えないぜ」

俺は経公の装備を時穿で一つ一つ指しながら言う。

「確かに、今の俺じゃお前には勝てないな。スペック値から見ても、どうせ単一仕様能力使えるようになってんだろ？　なんだそれ嫌みか」
「別にそう言うつもりは無かったんだがな、発動のタイミングが分からなくて使いそびれたぜ」

俺は分かっていた。

経公のこれは、恐らく時間稼ぎ。

ヤツは、何かを待っている。

増援か、救助か、はたまた自分自身をか。

何を待っているにせよ、バカみたいにそれに付き合う気はサラサラ無いぜ？

「——なら今回だけはその気まぐれに感謝しとくぞクレ坊。——
十分だ」

ボロボロの経公はそう言うと言とうと青竜刀を構えた。

「単一仕様能力『Bシステム狂人乱舞』、発動」

経公がそういった瞬間、ヤツから放たれる圧力や殺気が何倍にも増した。

その感覚には身に覚えがある。

——間違いないBシステムだ。

考えてみればこのシステムは双龍の開発だったはずだ。

だから経公が使えてもなんら不思議はない。

だが、元々高かった奴の戦闘能力がBシステムによってどれだけ向上させられるのか、未知数だ。

「今度は、こっちから行くぜ」

渋い声を発した経公は俺との距離を一足で詰めると——ザッ

！
青竜刀を、切るのではなくなんと突きの用途で使いやがった。

重量のある青竜刀で繰り出される正確無慈悲な神速の突き。

ま、まずいぞ。

今の俺でも反応できなくなってきた・・・ッ！

しかし、今なお経公のスピードは上がり続けている。

瞳の表示によれば秒間5回という驚異的な数字だ。

俺のBシステムとは発動前との能力差が比べ物にならないほど大きい。

使用者によって個々まで差が出るシステムだったのか!?

「Bシステムってのはな、元々多対一のシチュエーションを想定して計測された必要エネルギーをたった一体の敵のために費やす謂わば諸刃の剣だ。今の俺は最低五人。ISを纏った兵士五人ぶんの戦闘能力だと思って掛かってこい」

経公は指先をくいくいと曲げ、挑発してくる。
だが。

「・・・くっ・・・」

俺がうめいた瞬間、視界の隅になにやらキラリと光を放つものが現れた。

その物体は俺の真横を螺旋に回転しながら突き進み、まるで吸い込まれるように経公の左胸に突き刺さる。

そこで気がついた。

今のは——ライフル弾だ。

「——でしたら一人くらい相手が増えても構いませんよね」
開放回線からあの声が聞こえる。

こ、この声は・・・！

「すみませんクレハさん。サイレンチエイサーの再構成に手間取ってしまいました」

「ミナトか!」

ミナトだ!

一夏と箒を助けたあとミナト自身も治療を受けているという話だったが回復したみたいだな!

「織斑先生から指示を受けてきました。支援攻撃に支障はないレベルまで回復したので私も戦いますよ」

「おう、スゲー助かるな。俺以外全員昏倒^{スタン}。相手の戦力は未知数だ。隙があったらじゃんじゃん撃ってくれ」

「——はい。ですが先に手は打たせてもらったのですが良かったですか?」

「手……?」

疑問に思い、先程のライフル弾が当たった経公を見てみると——

「なんだ……このウイルス!? 武装が……ッ?」

——ISの装甲の一部が形状を保てなくなり、粒子となって消え始めていた。

「——昨日、ホノルルで会った二人に渡されたUSB、覚えていますか。あの自壊プログラムを撃ち込みました」

ミナトの言葉にハッとす。

ホノルルであるの二人……教官とマキナの二人に渡されたものと言えば、時代遅れのUSBだ。

だが、あの中身はISを自己崩壊に追い込むウイルスソフト。

まさかミナトのやつ、それを弾丸にプログラム処理して撃ち込んだのか!?

「狙いは左胸。胸部装甲左7センチにある接続端子。狙いは正確です」

その狙撃の結果は火を見るより明らかだ。

明らかに偃月は形状を保てなくなってるぞ。

そしてそれを操る経公は隙だらけだ。

「決着は急いでください。私の見立てが正確ならあの I S は約三十秒で消滅します」

「——分かった」

俺は不安定な I S を纏う経公の前にたつ。

「あー、畜生。まさかこんなたち悪いウイルス持つてるとは計算外だぜクレ坊。きたねーな」

「その汚い手段で助かったからあんまり堂々と言えないが、決着、着けようぜ」

「なんの・・・だよ？」

「決まってんだろ。死んだ方が負け。勝てば自分を貫き通せる」

「はん・・・。生憎だが貫き通す自分なんて二年前に捨てちまつてるよ。・・・でもまあ、そうだな。もう一度中華鍋振って炒飯作りたかったなあ」

消滅しかけた青竜刀を強く握りしめる経公。

ウイルスの侵食から逃れた青竜刀は辛うじてその形を失わずに経公の手のなかに収まった。

「諦めんなよ経公さん。生きてればまた店開けるようになるぜ」

「バカ言うなよ。この勝負、どっちに転んだって俺はもう二度と店なんて開けないさ。死人には味見する口がねえからな」

それは自分が敗けると思っっているのか、それともまさに死合に望む際の覚悟の現れだったのか。

どちらにせよ。この勝負ではどちらかの望みが潰え、どちらかの願いが成就する。

俺が望む鈴の未来。

経公が望む世界の未来。

どちらも望むものは同じ未来だというのに争わなければならない現実が俺は恨めしい。

「行くぜ、経公さん」

「ああ、来いよ坊主」

俺は左腕一本で時穿を上段に構えた。

経公はそれに対するように下段に構え、左手を刀の柄に添えた。

「発動！単一仕様能力——」

同時に駆け出した俺たちは同じタイミングで起動用語を口にした。

「狂人乱舞ッ！」

「——超越世界ッ！」
オーバーリミット

同時に発動された単一仕様能力。

下段から振り上げられていく青竜刀には赤く、燃えるようなオーラが揺れ、切り裂いた大気のソニックウェーブが目に見えるほどに速い。

対して俺の単一仕様能力は、いうなればBシステムの上位バージョン。

限界を越えて更なる高みへと至るために編み出された瞬龍の——
いや、エリナの特異能力だ。

その可能性は使用者の思いの強さによって違い、瞬龍が弾き出したスペックでも未知数扱いとなっていた。

つまり、本当に限界などない。

どこまでも真つ直ぐに、自分を貫き通す覚悟。その思いがISを強くする。

「……なるほどなあ。くそつ、娘は嫁にやらねえつもりだったんだが、覚悟が揺らぎそうだぜ……」

俺の背後に佇む経公は、ISを纏っておらずISスーツ姿だ。

消滅したのだ。彼の相棒、偃月は。

「おい、クレ坊。バースはこっちに付いた味方だが、他の超界者は信用すんじやねえ。もし途中で鈴をパクられでもしやがったら恨んで出るぞ」

そう言つて、経公はゆっくりと倒れた。

海面に向かって落下していく経公を受け止める人間は誰もいない。

——いや、そう言えば一人だけ居るよな。彼が愛したたった一人の愛娘が。

「——お父さんッ！」

海に落ちようとする経公の身体を甲龍を纏った鈴がキャッチする。どうやら気を取り戻してから、丁度落下している父親の姿を視認し

たみたいだ。

敵として現れた時と違って鈴は今、純粹に再会と生存を嬉しがって泣いてるよ。

「……さつき経公さんに向けて振るった時穿。

その刃には血の一滴もついてはいない。

「……まあ、なんだ。折角の親子水入らずのチャンスを不意にするのもあれだしな。うん、そうだ。まあ拘束は免れんだろうが殺す必要はないなうん」

「……一体なに言い訳みたいなことしてるんですかクレハさん？」

「……通信でミナトに突っ込まれた。

いやだつてさあ、あそこまで殺すとか死ぬとか言つといて「残念殺せませんでしたー」つてオチはダメだろ。

て言うか本当の親が現れたときの嬉しさはついさつき身をもって実感したんだ。

諸々の暴拳の数々はちゃんと裁判を受けてもらおう。

俺は眼科で気絶した父親の身体を抱き締める鈴の姿を見た。

「……もう一回ぐらい中華鍋振ってもバチは当たらないよ。多分」

@

今回の事件のオチ。

なんで締めくくりがどっかで見たような感じになつていいのかはさておいて、鈴の親父さんの処遇だが、当然だが実刑判決が下った。本人に上訴の意志が見られないからか、裁判はとんとん拍子に進んでたつた二週間で裁判は終わった。

続いて俺だが、単一仕様能力を使った影響か生体再生で治療していた怪我が悪化し、7月の残りの日数は再び保健室に入院となった。だからおかしいだろ。保健室入院。

因みに右腕だが、何とかくっ付ける事ができた。

東さん特製の不思議なお薬のお陰だと、手術に出た医者たちは言つたが皆さん一様に顔が青ざめていたので深く聞くのは止めておいた。

まあその他にもウエルク——の身体に入った超界者、バースさん(♀)の対応や東さんがIS学園教師として採用されたりと様々なこ

とが起こった7月だったが、なんとか終わることが出来た。

あ、そうだな。すっかり忘れてたがナターシャと福音についても対応がなされてるんだった。

彼女らはただ巻き込まれただけということでの非は無いが、福音については残念ながらイスラエル側の開発中止申請があつてかIS学園地下隔離施設にて凍結処分となった。

綺麗なISだったが、それゆえにあれで空を飛べないナターシャさんを見てると辛くなつたぜ。

「……………で、今の状況に何か言い訳は？」

「……………何も御座いません〜！」

鈴の厳しいお説教に思わず語尾が上がる。

今の状況を懇切丁寧に説明するとダルいので一言で済ませると……………。

カオスだ。

まず、三人よれば姦しいとされるのは女。

それも結婚もせずに三十路のラインを越えんとする三人がよればもうお祭り状態。

二年生寮、俺と鈴の自室の床には、千冬さんに束さん、そして何故かナターシャまでもが雑魚寝していた。

次に騒がしいのは酒の臭いに充てられた一年生三人。箒、セシリア、ラウラだ。

三人とも暑い暑いと呻くのでシャワールームに押し込んだら一斉に服を脱ぎ出すし、なんか三人でシャワー浴び出すし、甘い声聞こえ始めるしで死ぬかと思つたぜ。Bシステムの意味で。

そして一夏だが、ヤツはさつきから廊下の方でデュノアと喧嘩をおっ始めている。

原因は確か……………着替え？がなんたらつて言つてたな。デュノアも酔つてたしマトモな喧嘩にはならないだろうな。

そしてついでに現れた雨とフォルテに新聞部部长の黛。

奴らは三人揃つて俺のベッドで寝ていやがる。俺どこで寝りやいの……………？

「……とまあ、初めは俺と雨、二人でやってた快気祝いだっただけと次々に人が増えてな、鈴が帰ってくるこの時間には皆さん眠っておられました……」

「へー、で？　なんでそのウサギ博士と金髪巨乳は裸なのよ？」

「あ、アハハ。なんでだろうな。……ホント、何でだろ？」

「あたしが質問してんの！　あんたが訊いてどうすんのよ!？」

「い、痛い痛い！　マジで痛いから耳はよせ鈴ッ！　話す！　話すからっ！」

必死の説得のかいあつて、俺は自分の耳を引きちぎられると言うグロテスクな刑の執行を回避し、状況の説明を続けた。

鈴は玄関からとことこ歩いて（眠っているのを良いことに千冬さん踏みつけたけど良いや）自分のベッドにその小さなお尻を落とした。

「……あんたも、ココ座りなさいよ」

「……」

はて、なんの冗談だろうか。

鈴が自分のベッドに俺を座らせるなんて何か裏があるとしたか思えねーぞ。

親父さんの裁判関係でもうじき夏休みだと言うのに忙しく走り回ってたからストレスたまってる可能性もあるし……。

あ——もしかして殴られるのか俺。

「いーからそんな怯えた顔してないで早く座りなさい！」

「お、おお」

いきなり出された鈴の声に内心ビビりつつも骨折がなおったばかりの脚で鈴の隣に座る。

……狭い。

酒ビンやらツمامミやらで部屋中占領されていて、鈴のベッドも丁度一人だけ横になれるスペースしかない。

実際鈴は疲れてるみたいだしさっさと休めばいいのに、と思った。

「……はあ」

「相当疲れてるみたいだな鈴」

「当たり前よ。正直受け止めきれないことが多いわ。超界者の件

は公表は控えるって外務省は言ってるけどお父さんが私を・・・その、世界のための犠牲にしようとしていたなんて悲しみより先に驚きの方が沸いてきたわよ」

「そりゃあ・・・。大変なのは当然だな。俺なんかたった二歳の赤ん坊だぜ。親なんかそこでシート一枚で寝てる始末だし・・・、もうなんか色々どうでもよくなるよな」

「・・・どうでもよくなるなんて言わないですよ」
「えっ？」

今、鈴は何て言った？

”どうでもよくなるなんて言わないですよ”・・・？

「・・・」

「・・・」

「・・・あ、まさか鈴。俺が自殺するとも思ってたのか？」

「いにヤッ!? ち、違うわよ!? ベ、別にあなたの出生についてクレハ自身が納得してるなら何も言わないわよ!・・・でも」

「でもっ」

そう聞くと鈴は子供みたいに指をくりくりといじくり回しながらモゾモゾ言った。

健康的に色づいた頬に朱色が差し、照れているのだと分かる。

「——でも、もしクレハが自分を認められないって言うなら、あたしが何回でも何回でも誉めてあげるわ」

「・・・」

・・・鈴は、記憶を取り戻した訳ではない。

女王、エリナの心を植え付けられた代償として研究所での日々を忘れてしまった鈴は全くの無自覚で言っているんだろうが、その言葉は初めて俺の存在を認めてくれたあの日の少女の笑顔を彷彿とさせるには十分すぎる効果を持っていて、俺はつい・・・その、なんだ。

「・・・悪い、鈴——「寝るわっ!」——へっ?」

俺が行動を起こそうと思った矢先、まさかの御就寝である。

「あ、悪いけどあなたの膝、か、借りるわよお!? し、仕方ないわよねえ! ベッドに空きがないんだしさあ!」

「ちよっ、うるさっ！ なんだお前！ 酔ったのかよ臭いで!？」

「うるさあい！ あたしは臭くなーい！」

「酒の臭いですが!? てかなんで半ギレ!？」

臭くなーいと叫んだのち、速やかに鈴は眠りについた。

膝の上で猫みたいに眠る鈴をそつと撫でる。

・・・まあいいか。これで。

俺は膝の上の暖かな重みを感じながら一学期最後の夜を過ごしたのだった。

第四卷

夏的一幕1

「……暑い」

「……うん、暑いわね」

8月に入ってから数日たったこの日。

ほとんどの生徒が母国に帰国して閑散としたIS学園学生寮で俺たちは眩きあった。

夏休みだ。

外国からの生徒がほとんどのIS学園は夏休みには普段の喧騒とは真逆の顔を見せる。

人のいない校舎、人のいない食堂、人のいないアリーナ……等々、まさに学園に残った者の独占状態である。

そんな夢のような状況にあるというのに、俺、柊クレハと凰 鈴音は自室でただただ、だらけていた。

「前にも思っただけけど、この国の夏って殺人級に暑いわね。どうにかなんないの？」

「うるせー。どうにかできるならやってるっての。……ていうか毎年何百人と熱中症で死んでるんだから、その殺人的って表現あながち間違いじゃないな……」

二人してベッドに横たわりながら言う。

俺はいつものようにハーフパンツにTシャツという出で立ちなのだが、鈴は違った。

普通なら暑さを凌ぐために普段より薄着になりそうなものなのだが、いつもノースリーブのユーネックで防御力ガン無視の鈴は何故かいつもより布地が増えていた。

「ああつつう……」

「じゃあその黒いロンティー脱げばいいだろ。なんで着てるんだよ」

「あ、あんたあたしを薄着にしてなにするつもりよ……？」

なにもする気ねーつつうの。

ていうか数日前に見事フラグへし折ったばつかだろお前。

いや、口には出さないけどな。

「アホか。お前が熱中症で倒れたら誰が看病するんだよ。俺はイヤだぞ付きつきりなんて」

「つ、付きつきり・・・あ、それ案外良いかも・・・」

「・・・」

ダメだ。暑さに当てられて思考回路が仕事してない。

俺はベッドから起き上がり、隣の鈴を見やる。

・・・汗はかいてるが別段異常は無いみたいだな。

「・・・何よう？」

「いや、別に？ エアコン直ってないかなと思ってな」

そう言いながらリモコンを手に取り備え付けのエアコンの電源ボタンを押す。

・・・あーダメだな。

どうやらまだ点検中みたいだぞ。

IS学園学生寮の空調設備は現在、数年に一回の点検期間にある。学校中のエアコンが使えないとあって、ほとんどの生徒が国に帰っているのだが、帰る場所のない俺は当然寮に留まった。

鈴の場合は、七月に逮捕し現任栃木の刑務所に収監されている父、凰 経公と面会し、本来なら中国へ帰って諸々の報告をする予定だったのだが、鈴はその全てをキャンセルし、今ここにいます。

一体なんで残ったんだと聞いてみても、「パートナーが居るんだから当たり前でしょ」ってしか言わないし、多分何か別の狙いがあると踏んでいる俺は結構警戒していたりする。

「全くもう・・・。一体いつになったら終わるのよこの地獄！」

「落ち着け鈴。予定では明日で終わりだったはずだから我慢しろ・・・といつても流石にキツイな・・・」

俺は冷蔵庫から保冷剤を取りだし、首もとに当てる。

鈴があたしもくと言ってきたので、もう一個取りだし放り投げる。

「・・・あーキモチイイ・・・」

鈴が幾分かマシになったという顔で呟いた。

外では蝉がけたたましい鳴き声をあげ、温室効果ガスによつて暖められた空気をより一層暑苦しく感じさせた。

そんな時、俺は思わず呟いてしまったのだ。

「……水風呂、入れるか」

ズルツ——鈴がずつこけた。

「おい、大丈夫か鈴。そろそろ正気を疑うぞ」

ベッドの向こうに消えた鈴に声をかける。

するとベッドの縁から顔をだし、鈴はこちらをにらみ始めた。

え、なんなんだ一体？

訳もわからず首を捻る。

えーと、なんで鈴はずっこけた？

「たしか俺は水風呂を入れるといったはずだ。」

水風呂……ユニットバス……一人用……あ。

「おい鈴。流石に大浴場に水張るなんて止めとけよ」

「しないわよっ！」

うおっ、鈴のツインテールが逆立った！

揺らめくカゲロウと相まって激怒する鬼みたいだ。

ヤバイな。

鈴のこういった反応は大体自分の思ってる通りに事が進んでいないときだ。

つまり、途中まではうまくいっていた、ってことになる。

どこだ、どこで俺は選択肢を間違えた……？

「えっと、中国にも水風呂の文化ってあるよな？」

「……あるけど……それがなに？」

「いや……それだけだ」

ふむ、水風呂はある。

夏を乗りきるためには自身の体温を低くするように努めるんだが、水風呂という手段は間違っていない。

……とすると後はその規模について文句があるのだろうか。

大浴場に水を張るようなことはしない、それは鈴が言った。

つまり……。

「……なら、プールでも行くか」

その瞬間、鈴の顔が輝いた。

「——そう、それっ！ うんうん、その言葉を待ってたのよあたしは！」

異様なテンションでベッドから跳ね起き、意気揚々と自分の机からゴソゴソ何かを引っ張り出す鈴。

ビシツと突きつけられたのは……屋内アミューズメントパークのチケツト？

「知らない場所だな……。どうしたんだこのチケツト？」

「ティナがくれたの」

ティナ……、ああ、アメリカのティナ・ハミルトンか。

前に同じクラスのティナがくとかつて言ってたっけな。

「はく、今月オープンしたばかりなんだな。特徴は大型スライダーか……」

「そうそう、それが凄いのよ。構造がドームみたいになってるから、ドームの天辺から滑り落ちてくみたいで凄く気持ち良いの！」

へー、そりゃ行ってみたいなあ……。

っておい。

「……もう行ったのか」

「……あ」

鈴は口を滑らせたらしく、一人で固まった。

「暑い、暑い、と言いつつ、ちやつかり一人でプール行ってたワケですか。そうですか。……俺はおいてけぼりかコノ野郎……」

一体何だったんだ。

二人で暑い暑い言いながら耐えたあの日々は。

時に二人で団扇を扇ぎ合い、時にいつそ我慢大会とか開いたりして……。

……思い起こせばアホなことしかしてない俺ら。

「だ、だってクレハ、束さんの検査とかって居ない日あったし暇だったんだもん……」

「あー、なるほどな。だったら文句言えんわな」

それなら仕方はない。

俺だって瞬龍が最適化した影響を検証するために忙しい時間を過ごしたが、一人部屋で待つ鈴のことを責められはしない。

俺でもどこかに出掛けたくなるわ。

「前はセシリアと行ったんだけど、ちよつと事件があつてあんまり楽しめなかったからもう一回行きたいのよ」

「セシリアと？ 珍しいな」

そう言えばあいつも帰省組だったな。

俺が検査で1日潰してたのは三日前。

なんだ、イギリスで実家の仕事をしてきますわ、とか言ってたけど案外早く終わったらしい。

「まあ、誘う相手がセシリアしか居なかったのよ。一夏だって白式を変化させて書類手続きに忙しいって言ってたし」

「大変だな、公式の操縦者つてのは。・・・で、何時行くんだこのプー
ル？」

受け取ったチケットをヒラヒラさせつつ、カレンダーを表示させる。

「そうね、今度の土曜日にしましょ。予定は？」

「ない。決まりだな」

そう言つて俺はチケットをポケットにぐいと押し込む。

別に鈴の水着が見たいとかそう言うのは無いから。

マジで。

@

翌日の木曜日。

予定通り空調設備の点検が終了し、学校中に涼しい風が吹き始めた。

そんななか、俺は職員棟にある職員室向けて足を動かしていた。

『ヤッホー、束さんだよーっ！ 突然だけどクーちゃん、ちよつと用事があるから束さんのお部屋へHurry up!』

そんなメールが束さんから届いたのだ。

先月の一件で俺の実母だと言うことが判明した篠ノ之束だが、いま

だにあの人を母親と扱うには抵抗がありすぎた。

「つか息子にキラキラのデコメ送ってくる人を母親だとは思いたくねえ……。」

東さんのお部屋についても、あの人はどこに住んでるのか知らないから職員室に足を運んでるんだけど、東さんが教師かあ……。

双龍の一件について、多少の責任を負わされた東さんは、司法取引と言うことでIS学園で整備科の教師をやらされることになった。

人嫌いである東さんがどこまで真面目に教師をするのか分からないが、ぶつちやけ不安しかない。

考え事もソコソコに職員室の前に立つと自動で扉がプシュツと開いた。

「あら、柊君じゃないですか。珍しいですね。なにかご用ですか？」
職員室にいたのは、山田真耶先生だ。

元日本代表候補であり、おっとりした物腰とは裏腹に凄まじい戦闘能力を秘めた人である。

「……まあ、身体的な意味でもスゴいモノを秘めた人ですがね……。」
「あ、いえ。篠ノ之先生に呼ばれたんですが場所が分からないんですよ。どこにいるか知りませんか？」

「篠ノ之博士ですか？ 博士なら多分自室に……第三アリーナ地下の格納庫にいらつしやると思いますよ」

「あ、そこですか。ありがとうございます」

「いえいえ……。それにしても驚きましたね。極秘とはいえいきなり博士自身が教師として赴任してこられるなんて」

「あー、そうですね。驚きです」
口ぶりから察するに双龍の件はやはり伏せられて発表されているらしい。

まあそれもそうだ。

双龍の問題は、言わば日、英、中の外交問題。
超界者の存在も併せて隠しておきたいことが多いのだろう。

俺も保健室で寝てる時に外交官を名乗る黒服男がメチャクチャやって来てビビったもんだ。

「・・・これを切っ掛けに簪かんざしさんの作業も進むといいのですが・・・」
「簪？ 聞きなれない人ですね」

山田先生の呟きに思わず反応してしまう。

「ああ、柊君は知りませんよね。整備科一年の更識さらしきかんざし簪さん、生徒会長の妹さんです」

「そう言えば、入学したって言ってましたね・・・」

あの水色頭を思い出して顔をしかめる。

出来れば今後関わりたくない人間だ。

「彼女、一応専用機持ちなんですけど、どうも問題がありましてISの建造自体停止状態にあるんですよ」

「専用機持ちってことは代表候補生級の実力者なのに、そのISが建造すらされていないってどういうことですかそれ」

そう聞くと山田先生は悩ましげな顔になって、「これは、言っちゃっていいんでしょうか・・・別に箝口令が出されてるわけじゃありませんし、たまには私だって愚痴のひとつやふたつ言わないとストレス溜まるんですよ」などとひとしきり呟いて、

「・・・彼女のISの建造機関、倉持技研なんですよ」

「倉持技研っていうと・・・あ、白式の研究機関ですか」

山田先生の一言で察した。

ぶつちやけたところ国の代表候補生と、男性操縦者。

どちらが重要かと聞かれれば、現在のIS事情においては間違いなく男性操縦者だ。

代表候補生と言うのはまず初めに専用機を持ってからIS学園に入学し、そこで技術を高めるのだ。

恐らく更識簪は結構遅めに代表候補生に抜擢されたパターンだ。

そしてそのISの建造中に一夏の存在が公表され、運悪く彼女の機体の建造中だった倉持技研に一夏のIS白式の建造が依頼され、その後も研究や調査で簪のISまで手が回っていないのだろう。

可哀想だとは思いますが、俺にはどうすることも出来ない。

話に寄ると簪は姉が自分でISを完成させたことを受けて自分で作業を進めているらしいが、その進捗は遅々として進んでいないらしい

い。

「博士が彼女に協力的になつてくだされば作業も大幅に進んで私が I S 委員会へ実験の失敗を報告する手間も減るのですが……、いけませんね、生徒の頑張りを負担だなんて。私がしつかりすれば彼女も幾分、気楽になると思うんですけど……」

そう言いながら手元の書類に目を落とす山田先生は、少しげっそりして見えた。

@

山田先生と分かれ、第三アリーナ地下。

エレベーターの無い薄暗い階段をカツカツ降りる。

……そう言えば第三アリーナってミナトが住んでるところだったな。

先月の戦いで怪我してたし、ちよつと様子見とくか。

足下からの仄かな明かりに照らされた廊下を進むと旧射撃場が見えてくる。

だが……なんだ？

扉の中からミナトの声が聞こえてくる。

『……やあ……ん……うんっ』

ちよつ——！

思わず聞いてしまった声にその場から飛び退く。

戦闘時の力んだ声じゃない。

艶のある耽美な声だ。

声の主は間違いなくミナト本人。

一体この向こうで、なにが行われているのか——！

『だめ……です、私これ以上は……あっ！』

『ほれほれもう限界かな？　ちーちゃんだって昔はこの倍の時間は耐えたものだよ？』

『そ、そんなことを言われましても……』

『……さあ、共にいこうじゃないか。ピリオドの向こう側へ——』

「ちよつと待てや東——ッ！　ミナトに何してやがる!？」

我慢の限界だった。

なんだか止めなければならぬと感じた俺は扉を蹴破り中へと侵入。

共に声の聞こえたウサギの名前を叫びながら腰の拳銃を抜く。

「ありや、クーちゃん。来ちゃったかー。ていうかよく今の状況に踏み込めるね。東さん驚愕だよ」

中には案の定、乱れた服装のミナトの背に手を突っ込み、まさぐる東さんと。

「く、クレハさん……。見ないでください……。」

顔を赤らめ、あくまでも無表情に俺を睨む渚。湊の姿があつた。

……。つてあれ？　なんかミナトが恥ずかしがってるぞ？

春には俺の前で堂々と着替え始めてたくせに……。

それから五分後。

服装を整えたミナトと共に東さんをボッコボコにしたあと、本題に入った。

「や、やだなあクーちゃん。冗談に決まってるのにあんなに殴らなくても……。東さんはそんな暴力的な子に育てた覚えはありませんよ!?!」

「俺だって記憶無いからそんな覚えは微塵たりともねえよ。……。でだ、用ってなんだよ」

「はいはい。クーちゃんがおつかないので本題に入りまーす」

そう言うとき東さんはさつきまで弄んでいたミナトを指し示した。

「実を言っちゃうと彼女——渚 湊さんもまた、超^{イクシード}界者なのでーす。どうどう？　ビックリした!?!」

……。へ？

ビックリしたなんてモノじゃない。

東さんの発表に、俺の身体は石になったみたい固まった。

脳内でミナトと共に過ごした時間が思い起こされる。

そう言えばミナトは専用機持ちであるにも関わらず、アクセサリーの類いを身に付けているところを見たことがない。

それはつまり……。

「お前も、持ってるのか。体内に」

「——はい。クレハさん」

ミナトは——肯定した。

「私は二年前の春に、東さんの命令によってこの学園に潜入していました。監視対象は貴方、柊クレハです」

俺は東さんをジロツと見る。

「……クーちゃん、心配しないで。ミナトちゃんはバースウエルクと同じで、私たちと志を共にしている。クーちゃんには危害はないよ」

「俺には、ってどういうことだよ。誰にやら危害を加える?」

「——現在のIS学園は混沌としています。私たち、超界者を越える實力を持つものたちが次々と現れ始め、我々の立場は狩る側から狩られる側になりつつあります。そして当然、貴方と鈴さんのもつ女王の因子をてに入れようと襲撃をかけてくる輩もいます。私が攻撃するのはそのような人たちです。例えば、それが貴方の友人だったとしても……」

……ミナトのISは遠距離特化型。ブルーティアーズとは違って格闘戦を想定した装甲は積んでいない。

そして世界中で暴れまわる、所謂殺し屋という職業もまた、長距離を得意とする人物が多いのが現実だ。

ミナトは謂わば、対ISの殺し屋。

実際、先月にIS解体プログラムを手に入れた事もあって、彼女に始末できない敵はいないだろう。

よくよく考えてみれば、これ程敵に回った際に恐ろしい相手っていないよな……。

ただ、最後のセリフ。

例えば、俺の知り合いのなかに敵がいたとしても……。

悪いがミナト、その前例は今も学園に居ることを忘れてるだろ。サラだってちゃんと戻ってこられたんだ。

もし他のやつらが同じように襲ってきてきても何とかしてやるさ。

「……そうか。で?」

「で……って……」

「それがわかったところで何か変わるのか？」

俺の飄々とした態度に、逆にミナトが戸惑っている。

「・・・ミナト的には、デカイヤマをぶちまけたつもりなんだろうが、生憎最近驚きの事実が多すぎてなあ。毛ほどにも思っていないよ。」

「別にお前が超界者であろうと無かろうと、俺は何も変えるつもりはない。外見も俺たちと変わり無いし、飯を食うってことは体内環境もほとんどの変わらねえんだろ？」

「は、はい。・・・変わりませんよね？」

「変わらないよー。強いて言うなら心臓自体がコアの役割を果たしていることかなあ」

ミナトの問いかけに束さんが答える。

「だったら俺と変わらないじゃんか。むしろ人間でありながら超^{お前}界者の心臓入れてんだ。俺の方がたち悪いぞ」

「そうさ、知らず知らずの内に生を受け、偽りの記憶を持ったままここに居る俺。」

これ以上に気持ち悪い存在なんかあるもんか。

「他に言いたいことは？」

「・・・」

そう聞いてみても答えは帰ってこない。

強引だったが終わったらしい。

「・・・取り敢えずミナト、お前は人を殺すな。もし襲撃があったとしても俺が何とかする。だから相手を殺すのはアウトだ。IS運用法にも引つ掛かる」

「・・・私は厳密には人間ではないので守る必要は・・・」

「お前は人間だ。守れ」

「———はい」

よし、言質はとった。

「・・・ていうかこいつ、春の一件でサラを対処させてたら殺したんじゃないだろうな？」

よかったー。任せなくて。

「よっし、それじゃあ話も終わったところでもうひとつの本題にいこ

うか！」

「まだあんのか本題・・・」

唐突に発せられた束さんの言葉にげんなりする。

面倒ごととは・・・もう、イヤだ・・・。

「ありますともありますとも！　むしろこっちの方が束さんの的には重要だったりしまーす！」

しゅびつと両手を上げて高らかに宣言する。

「さっきのヤツの付加情報だったりするんだけど、クーちゃんのIS瞬龍は、先月の戦いで最適化を行ったんだよね？」

「ああ・・・そう言えば言ってたな。束さんのプロテクトがどうかかって」

「そうそうそれそれ。エリナに会ったんだよね？　元気だった？」

あんたに心臓抜き取られたんだから元気も何も無いだろうに・・・。

俺は彼女の姿を思い浮かべた。

長い蒼髪の、たった一人で俺の心象世界に住まう少女・・・って。

「・・・なんか、ミナトに似てないか？」

「そのとーり！」

うおっ、急に束さんが叫ぶから鼓膜がキーンと耳鳴りを起こしたぞ。

どんだけデカイ声出したんだよ・・・。

「束さんも後から確認したことだったんだけど、なんとエリナには妹がいまーす！」

あーうん。なんとなく流れ読めたからもう反応しなくていいよな？

「えっと・・・姉がお世話になってます・・・？」

その妹ことミナトは、若干の照れを表しつつ、社交辞令を述べてきたのだった。

姉妹揃って引きこもりって、ダメ人間ばっかだなあ・・・。

@

そして土曜日。

「さあ、行くわよクレハ！」

「はいはい」

俺と鈴は学園外へ出るためにモノレールに乗っていた。

夏休みと言うことで外出許可も比較的簡単に出て、予定通りプールへと遊びに出ているのだ。

……にしても夢にも思わなかったなあ。鈴と二人で遊びに出るなんてな。

鈴はこの間の臨海学校の水着があるという事で買う必要はなかったんだが、俺は今回初めてプールに行く。

記憶の中では家族と一緒にいった覚えがあるのだが、きっとそれもまやかし。

割りきっているとはいえ、顔も思い出せない家族と遊んでるという記憶があるのは気持ちが悪いぜ。

そう言うわけでまず始めに午前中は買い物と言うことになっている。

モデルも兼業している鈴としては秋物のチェックもしたいらしい。俺にはよくわからん。

ゆりかもめ線の発着駅に降り立ち、新橋駅から電車に乗り、原宿駅に向かって走る。

東京デイズニーストリートは開発の進んだ今でも人気のテーマパークで、今回遊びに行くリゾート、アクアマリンは、その一歩手前、新木場にある。

まずは服と水着を見るために原宿で買い物と言うわけだ。

原宿駅表参道口から出ると、目の前に開けた表参道が広がっていた。

「うわぁ……スゴいわね……」

初めて来たらしい鈴が感嘆の声をあげていた。

その反応は仕方ない。

俺だってビビってるもん。

——原宿とは、現代の世界でも流行の最先端と言われている街だ。

オシャレなオープンカフェや有名なブランドショップが軒を連ね、

個性的な雑貨店が内外国人問わず心を掴んでいる。

だから、人も多い。

今日は休日だ。学生にとっては羽を伸ばすのに最適な時間と場所なので、それらしい女の子の姿もちろほら見かけるぜ。あ、こら。カワイイ娘だけをピックアップすんじゃねえ瞳よ。

「取り敢えず、俺の水着はアクアマリンの安モンでいいから、欲しいもの見てこいよ」

「え、あんたはどうすんの？」

モデルとしてのポテンシャルを遺憾なく発揮している鈴。

夏という事で白い麻で丁寧に織られた涼しげなワンピースを黄色いブイネックシャツの上から着て、ホットパンツで脚線美を強調している。足元のスニーカーが鈴の快活なイメージを損なわず、金をかけているワケではなさそうなのに全体が凄くらしく纏まっていた。

ノースリーブのお陰で露出している真っ白な腕から目を背けつつ、「あー、そうだな。俺はソコのカフェでコーヒー飲んでるよ。ゆっくり買い物してこい」

そう言つて駅前のオープンカフェを指す。

ここなら合流もしやすいし、ツーマンセルの時、更に通信手段が確立しているときに二人揃つて人混みに入るのは悪手だぜ。

完璧な状況判断だ、俺。と、自分を褒め称えていると、

「ちつがうわよ、このドバカ……。朴念仁ハクネンよりかはましかと思つたけど、こっちはこっちで重症ね……。」「

なんて鈴が呟いた。

どうも雰囲気的に一人でコーヒーは飲んでいられないみたいだし、かといって鈴の買い物に付き合う理由もない。

どうしたもんかなあ……。と後頭部を搔いていると、ため息をつきながら顔を伏せた鈴が、何かに気づいたようその一点を凝視している。

なんだろうか。すげえ集中してみてるみたいだけど……。

釣られて見てみれば、そこにあつたのは一枚の広告板。

「……クレハ、これに出るわよー」

「……えええ……」

気づけば俺は心底嫌そうな顔をしていた。

だって仕方ないだろう？

遊びに来ておいて一汗かかされるのは、誰だって嫌なもんだぜ。

ところ変わって竹下通り。

先程の表参道よりも更に若者の人口密度が高い通りだ。

しかし、今日の人混みが異様に大きい理由がやっとなかった。

……いや、正確には『カップル』の数が異様に多い理由がやっとなかった。

「……なんだよ。竹下通り400メートルお姫様だっこ競争って」「読んで字の如しでしょ？ あんたがあたしを抱き上げて走るのよ」

集合場所となっていたとあるカフェ……ラ・ドールと言いうらしい店が主催らしく、昼時の開催を狙った成果か、参加するカップルや食事する若者やらでごった返していた。

「つーか買い物終わったんだろ？ 俺に荷物もちさせて。プールいこうぜプール」

「良いじゃない。優勝すれば竹下通りでの買い物半額キヤツシユバックよ。ちなみにこれの優勝見越して買い物したから、勝てなきやプールは無しよ」

「マジかお前……」

ダメだこいつ。

お姫様だっこが孕むリスクとか負けたときの電車賃とか全く勘定に入っていないぞ。

回りを見れば、人目を憚らずいちやこらしてるカップルがイヤでも目につくんだが、今の鈴はそんなことお構い無し。

まるで「ハン、恥ずかしいなら隅っこで震えてなボーヤ」と言われているみたいでちよつと対抗心がわく。

「——あ、あー、聞こえますかー？ ……ん、よし。さあて、始めました！ 去年から始まった竹下通り400メートルお姫様だっこ競争！ 今年の第二回も狙つての出場か、はたまた偶然の出場か、多くの若者が名乗りを上げております！」

主催者であるラ・ドールの店長らしき女性が、張りのある声を通りじゆうに響かせる。

その声に反応した様に、歩道を占領していた人混みが瞬く間に引き、走って競争するぶんには問題無さそうな一本道が現れた。

「ルールは至って単純です！ 自身のパートナーを抱き抱えて、竹下通りの約400メートルを競争し、見事一位を勝ち取ったペアには本日竹下通りでの買い物半額キャッシュバックします！——それでは、出場するカップルの紹介といきましょう！」

げっ、紹介なんかあんのかこのレース！

隣の鈴を見れば、勝つことにしか頭が向かっていないようで、さつきから「体重移動が——」とかつて見事に無駄な計算を走らせている……って、ああ。俺たちの番だあ……。

「——お名前は？」

「えっと……柊、風です」

「可愛いカノジョさんですね！」

……。

おおっと。

これは鈴がオーバーリアクションするか——？

「……。やっぱりクレハの加速力が問題ね……」

してなかったー！

「こ、個性的なカノジョさんですね……」

「あ、いえ、ホント、そうっすね……」

おい、どうすんだよこの雰囲気。明らかに盛り上がり冷めたぞ今。

ところがどっこい、当の鈴は我関せずと言った感じで思案に耽っている。

……ドギマギしてたのがバカらしくなってきたな。

あー、やめだやめ。なに勝手に一人で焦ってるんだ俺は？

お姫様だっこって、前に鈴が俺の上で寝たときにしただろ。

今さら緊張する意味が分からんぞ。

それに、あんまりドキドキしてアレが出たらどうする。

冷静に、活路を見いだせ俺。

そうこうしていると出場者全員のインタビュが終わったらしく（中には結構刺激的なアピールをしている二人もいた）、スタートの準備に入った。

パートナーの女を抱えた男どもが一斉にスタートラインに並び、カノジョにいいところ見せようと張り切っている。

……嫌だなあ。あの辺の人たちと同じに見られるの……。

「ほらっ、行くわよクレハ」

「はいはい」

嘆息し、直立する鈴の肩を持ち、膝裏に手を滑り込ませると一息で持ち上げる。

鍛えてあるぶん、割りとすんなり持ち上がったけど、軽いなお前。

ていうか持ち上げた瞬間、周囲の奴らが「キャーッ」とか「おおう」って声あげただけで、俺、関係ないよね？

「……び、ビックリしたんだけどあんたって意外と……」

「ん？ なんに驚いたって？」

「……何でもないわよ」

腕の中の鈴がそっぽを向く。

あ、これはあれだな。ちよつとずつ恥ずかしくなってきたるな？

「こ、これは嬉しいパフォーマンスです！ 柊、凰ペア、男性が鮮やかなお姫様だつこを決めて会場の女性陣を湧かせます！」

店長が始まってもないのに大仰な実況を入れる。

……俺も恥ずかしくなってきたぞこれ。

……でももう止められない。俺の方の心の準備もできた。

こうなったら、頂いて返るぜ半額チケット！

開始の合図が入ると同時に、スタートダッシュを決める。

マクドナルドを横手に走り出した俺の隣には誰もいない。独走状態だ。

「鈴、後続は？」

「5メートル後ろ！ 二組！」

五メートルか……。結構差は付けられたな。

お姫様だっこ、というか人を抱えて走ると言うのは一般的な生活ではほとんどの起こり得ない状況だ。

だが俺は、学園で訓練された、準軍人とも言うべき存在。人ひとりより軽い鈴を抱えて走るなんて造作もないぜ！

「こ、これは速い！ 一位のペアはまるで他組を寄せ付けない圧倒的なスピードで独走です！」

実況の店長も俺たちのスピードに驚いているようだった。

「——鈴、ちよつと走りにくいからもうちよつと腕を巻け」

「う、うん……。こらう？」

だが、油断は意外なところから現れるようで、俺が鈴の重心を安定させようとしたその指示。それが悪手だった。

むにつ

「!?」

予想外の感覚に全身の力が抜ける。

鈴が腕を絡めて俺に抱きついてきた瞬間、鈴の胸から伝わってきた微かな、だがしつかりとした柔らかな感触に驚き、俺は一瞬注意散漫になった。

それと同時に、俺の隣にまでこぎ着けたペアの片割れが、なんと俺の足元に缶コーヒーを転がしてきやがったのだ。

俺は見事にそれを踏んづけ、転倒する。

怪我がないように俺が鈴の下敷きになったんだが、転けた俺たちの横を大勢のペアが走り去っていつてしまう。

……あー、ミスったな。

でも希望がない訳じゃないぜ。

さっつきのペア、いい度胸してる。

「だ、大丈夫なのクレハッ？ 怪我とかしてない!？」

「——大丈夫だ鈴。……鈴は怪我とかないか？」

「あ、あたしは、あんたが守ってくれたから大丈夫よ……。その、ありがとう」

「ああ。良かったぜ。——よし、レースに戻るぞ鈴」

「も、戻るっていったって最後尾がもうあんなどころに……」

焦って辺りを見回す鈴の頭を優しく撫でてやる。
くすぐったそうに身をよじった可愛らしい鈴のお陰で、俺の鼓動は
更に高鳴る。

「——信じろ。勝つぞ」

——急激な心拍の高まりを感知。エンドルフィンの分泌を
確認。Bシステム^{スタートアップ}起動

絶対的な自身のもと立ち上がった俺は、俺を見上げる鈴を抱き上
げ、そう宣言するのだった。

夏の一幕2

「——信じろ。勝つぞ」

そう言った俺を、鈴が目を丸くして見上げてくる。

激しく脈打つ心音を聞かれないか心配だが、鈴の様子から見るにその心配は杞憂に終わりそうだ。

「ば——、バカいってんじゃないわよ！ それよりあんたを病院に——」

じたばたと腕のなかで暴れる鈴を制するため、俺は鈴の唇に人差し指をあてがった。うわ、自分でやったこととはいえ、ちよつと引くわ……。

「心配するな鈴。俺の身を案じてくれてるのは嬉しいが、俺のことがそんなに信頼できないか？」

「そ、そんなことは……ないけど……」
うきゆうと赤面して縮こまる鈴。

……完全に主導権は握ったな、バーサーク俺。

「それに、せつかく鈴が見てくれてるんだ。ちよつとくらいカツコつけるくらいが丁度良いだろう？」

俺のセリフにさらに鈴が押し黙ったがレースの途中でまた暴れられても困る。

硬直するくらい恥ずかしい思いをさせてやろう。

「——お、お二人とも、大丈夫ですか!？」

と、そこへマイクを持った店長が転倒した出走者を心配して駆け寄ってきた。丁度いいな。

「ええ、大丈夫ですよ」

「そうですか……。あの、レースへは復帰されますか？」

そう言いながら店長は俺を追い抜いていったペアの背中を見る。

……超界の瞳が弾き出した彼らのスピードは秒速4・3メートル。
ル。

大体50メートルを11・5秒で走る計算だ。遅いが、人ひとり抱えてるんだ。それくらいだろう。

「勿論ですよ。ここで引き下がっては格好が付きませんからね」

そう言うと、鈴がピクリと震えた気がしたが……気のせいかな。分かりました。でも無理はしないでくださいよ？ 私が主催したイベントで事故なんて勘弁ですからね」

「はは、店長って言うのも大変ですね」

両手をあげてちよろつと本音を漏らした店長さん。

俺はそんな彼女の手から密かにマイクを拝借する。

「つて、え？ いつの間にマイクを……？」

困惑する店長に向かつて少し微笑みながら人差し指を立てる。ちよつとこれから大事なこと放送するのでお静かに願いますよ。

「——あー、ご来場のお嬢様方。これより少々荒っぽいペアが通りますので、決してその場から動かないようお願いします」

突然響いた低い男の声に顔を見合わせる周囲の観戦者たち。

——多分、これで大丈夫だろう。

さて、始めようか。奇跡の大逆転ってやつをな。

その時の俺はきつと不敵に微笑んでいただろう。

@

マイクを呆然としている店長に返すと、俺はその場を蹴り、空中に跳躍した。

——PIC起動。出力を2%に制限。三次元レーダー起動——

——地形把握完了

同時に送られてくる周囲の状況を空中にいる間に頭に叩き込む。

ちよつとセコいがISを使わせてもらおう。

なに、先にセコいマネしてきたのは先頭のあいつらだ。ちよつとくらい構わんさ。

先頭のペアをマーキングすると視界いっぱい広がったワイヤーモデルが赤く染まった二人を映し出した。

よし、行くぞ。

着地した俺は一番後ろを走る中学生とおぼしき二人組に肉薄する。

男の方は——おお、ガタイがいいな。格闘技でもしてんのか。

俺を邪魔するように左右に揺れて走る格闘家風の男の左肩に手を

置いた俺は、タイミングを見計らって一気に突き飛ばす。

——大丈夫だ。怪我はしないさ。

その確信があつた俺は、もつれた足でその場に綺麗に座り込んだ二人を抜き去る。

瞳から送られてくる情報に従つて、その人の体軸と重心を巧く誘導してやればさつきみたいに上手くバランスを操作するなんて造作もない。

俺は同じように次々とレースの出場者を座らせていく。

周囲の人たちはそんな俺を見てただただ、驚くばかりだ。

そりやそうだ。俺だつてこんなことできるなんて思つてなかつたよ。

「嘘でしょ・・・どんな魔法使つてるのよあの人・・・？」

実況に戻つたららしい店長の呟きがスピーカーから流れる。

一気にごぼう抜きした俺たちに呆気にとられてるらしい。

「——クレハ、7時方向に注意して。多分別格よ」

吹っ切れたみたいにオペレーションを始めた鈴が気になる情報を伝えてくる。

別格・・・？

気になつてチラリと確認してみると——げ、なんだあの二人組。

俺たちの後方から物凄い勢いで迫り来る男女のペアが居たのだ。

あの男の顔は・・・見たことあるぞ。

今年の一月にあつた箱根駅伝に出てた優勝校選手だぞ。

名前は確か・・・東郷とかつていつたかな？

どうやら先頭集団でゆつたり走っていたが、俺に無理やり座らされて火が着いたらしい。

短髪で揃えられたアスリート然としている東郷のスピードはまさかの秒速6・6メートル。

女性一人抱えてその速さつて、駅伝選手は短距離が苦手かと思つたがそれでも無いらしい。

オフシーズンなのか知らないけど、可愛いカノジョ連れて遊びにで

も来てたのかな？

流石に将来有望なランナーとの対決は避けようと、俺は更にペースを上げる。

遂にトップのあの二人に追い付いた俺は仕返しとばかりに、見えないうように出足払いをかけてやった。

見事に背中から倒れたチャラ男の上に落ちる金髪女性。彼女に罪はないさ。

・・・さて、トップになったはいいが、残りは直線距離で100メートル。

背後を見やると東郷もペースを上げてきた。直線で抜き去るつもりか。

頭の中はクリアなのに、肺が、胸が、足がいたい。

ここまで300メートル。途中でスツ転んだ事もあってペース配分がガタガタのまままでここまで来た。

いよいよ限界が近づきつつあるらしい。

背後から迫った東郷が——隣に並んだ。

チラリと様子を伺うと、ニヤリと笑って俺を見ていた。

良いぜ。その勝負、受けてやる。

相手方も息が上がって辛そうだ。スプリント短距離走とマラソン長距離走の違いに戸惑っていたのはあつちも同じらしいな。

「——ッ！」

俺は悲鳴を上げ始めていた脚に更に力を込め——地を蹴る。

鈴は俺が勝つことを信じているのか、視線はずっと前を見たままだ。

東郷が支える女性も同じように、視線は前に。

見ず知らずの相手とこんなキツイ勝負をするとは思わなかったぜ。

SoLaDo原宿を越えた——残り50メートル。

鈴を支える両手に力が籠る。

鈴も同じように俺の服を掴む左手に力が籠っているようだった。

「ラストスパートオ！」

隣の二人組が吠える。

なんつーか、面白い組み合わせだなあんたら。

東郷が前に出る。

俺も負けじと食い下がる。

残り30メートル。大学生ランナーをトップにその後を俺が追う。

行ける。最後の瞬間だ。最後に、決めろ！

ゴールしか見えていない視界の端で鈴のツイントールが揺れている。

だが、その瞬間。俺と東郷が同時にバランスを崩した。

妨害的なモノじゃない。ただただ生身の限界が来たんだ。

「——ツア！」

前屈みに膝を突きそうだった俺たちは同時に右足をだし、ギリギリ転倒は防いだ。

東郷はそのまま体勢を建て直し、走り去るだろう。

だが俺がそれをやるより、日常的に走っているランナーの方がどうしても体勢の建て直しを早く終えてしまう。

つまり、俺の方が一手分——遅い。

流石だな。東郷選手。

Bシステム使ってる俺に勝てるってのか。

だが、俺も意地があるんでね……。

(ちよつと無茶だが、こうすれば——)

——鈴の目の前で負けてらんないんだよ。

俺は倒れつつある上半身を、あえて直さない。

しかし、右足は地面を蹴り、前に出る。

まさに短距離走のスタートダッシュみたいに姿勢を低くした俺は、そのまま前に出た。

鈴を抱いているからか、上半身のバランスがうまくとれない。

でも、ゴールまで20メートル。それだけ持てば十分だ。

「く、クレハッ!？」

地面すれすれを滑るように移動する自分にビビったのか、鈴が涙目で俺を呼ぶ。

大丈夫だ鈴。意地でも落とすはしないよ。

普通ならこんな危険な手には出たくはなかったが、Bシステム特有の負けず嫌い&自信たっぷりな俺だ。

強行策も難なくとつちまうのさ。

「くッ!?!」

勝てると思っていたのか、隣に現れた俺を見て東郷はその端正な顔立ちを歪めた。

後は——ただ前に出るだけだ。

これ以上はスピードを上げることできない。

ISにも頼るわけにはいかない。

俺自身の、俺だけの力で成し遂げてやる。

「——おおっ!」

そして遂に、明治通りに出た——。

通行規制のされていた歩道には誰もおらず、走るのを止めた俺だけが立っていた。

ゴールテープを切ったのはほとんどの同時だったはずだ。

——勝敗が、分からない。

鈴も俺と同じようにキョロキョロしていた。

「・・・あんた、あそこで立ち直さないと、ただのバカだろ」

後ろからした声に振り返る。東郷だ。

頬に伝う汗を抱きかかえた女性に拭って貰いながら俺たちに語りかける。

「東郷こそ、よくあそこから追い上げてきたね。俺はもう勝ったつもりでいたのにな」

「はっ、うちの大学じゃよくやる練習だったからな。ちよつとやそつとじゃ諦めねえよ」

抱えていた女性を下ろしながら東郷が言う。

「——でもまあ、今回は負けてやる。あんたスゲーよ。超カッケー」

東郷から送られた賛辞だけでは、理解できなかった。

同時に起こった歓声。

IS学園での試合にも負けない声がそこらじゅうに響き渡る。

『激しい攻防を制したのは——柊、凰ペア！ ラストはまさにデッドヒート！ 原宿のイメージにそぐわないアツい戦いでしたが見事に盛り上げてくれました！』

店長のアナウンスが聞こえてようやく理解できた。

「・・・勝ったんだな、俺た——「クレハあつ！」——ぐふつ」

鈴、いきなり体重を俺の首にかけるの止めてくれよ……。死ぬかと思っただぞ。

「やった！ やった！ 優勝じゃない！ スゴいわよこれ！」

俺に抱きついて目一杯喜ぶ鈴。

Bシステムは解かれちゃったが、今はもう鈴の柔らかさにテンパる気力もないよ。

「ちよつと、落ち着け、おい。周り見てるぞ」

「——え？」

辺りを見ると、去年の受けがよかったのか、取材に来た記者らしき人物が俺たちの写真を撮りまくっていた。

やれやれと嘆息しつつその事を教えてやると、ギョイン。

速攻で顔を赤く染めた鈴がアワワと焦り始める。

そして、自分が俺の首に腕を回して抱きついている状態を確認して

——あ、嫌な予感。

「こんのオ・・・スケベッ!!」
がいん。

珍しくISを展開しなかった鈴の拳が、俺の顔面に突き刺さった。
なんでだよ。

@

当然ながら、俺たちの勝ちに文句を言うやつもいた。

なんせ最下位からの逆転勝利だ。そりゃ不正を疑うわな。

実際ちよつと不正を行っていた（ISによる跳躍と地形把握）俺は終始黙秘を続けたが、鈴がISの操縦者であることが露見すると俺たちを擁護してくれていた店長の旗色も悪くなる。

やむ無くして俺たちに贈られるハズだった半額チケットは二位で

ある東郷たちに贈られ（悪いなど言って意気揚々と買い物に出掛けていったよ。畜生め）、結局俺たちは試合に勝って、勝負に負けたって感じになった。

ちっ、あの不正不正騒いでたペア。俺たちを転ばせた不正第一号者じゃねーか。

逆にその事を訴えてやろうかと思っただが、あの二人と同じ土俵には立ちたくなかったので文句は言わなかった。

俺たちに感謝してくれてた店長さんには悪いことしたな。

そしてやっとの思いでたどり着いた屋内遊泳アミューズメント施設、アクアマリン。

所持金の問題で水着を借りられなかった俺は、上着を脱いで水着の鈴を追う。

「クレハ〜見てみて！ 海みたいよ！」

甲龍と同じ赤紫色のフリル付きビキニに身を包んだ鈴は、遊泳場でると直ぐ様水辺に駆け寄った。

「あんまり走らせるんじゃないよ。こちとらクタクタだつーの」

「なによテンション低いわね、折角のプールなんだから遊ばなきゃ損じゃない」

ああ、損だな。ここまで来て泳げないって何の冗談だよ。

そんな俺のことは気にも留めてないのか、浮き輪を装備した鈴は人工波に揺られてプカプカ浮いてやがる。畜生、世界なんか滅んじまえ。

・・・にしても、オープン直後と言うだけあつて人が多いな。

辺りを見れば嫌でも際どい水着が目に入る。

おい、ソコの女子大学生。ちよつと派手じゃないですかね？

Bシステム停止直後だといって油断は出来ない。

俺だつてそう言うのに興味がない訳じゃないんだ。

油断してBシステムが始まってしまったら、例としてナンパ、あわよくばその後まで直行しかねんぞ。

そしてその後待ち受けるのは冷たい檻に直行ルートだ。

将来の不安を感じた俺は思考を立ちきつて近くのベンチに座る。

周囲の喧騒のせいで寝ようにも眠れない俺は一人、クタクタの体をだましましたまじ動かし続ける。

あ、鈴が遠泳始めた。

別に特別ここの奥行きが長いって訳じゃないが、泳ぎたい人には十分な広さがある。

運動が好きな鈴は泳がずには居られなかったんだろう。

・・・いや。ほつとこう。

そうして、キヤツキヤ独りで騒ぎ続ける鈴を見ていると・・・。

「——キミ、大丈夫？ 親御さんは？」

なんて声がすぐそばで聞こえた。

声の主は・・・ライフセーバーのお兄さんか。浅黒く、逞しい体を覆う黄色いTシャツが限界まで引き伸ばされていてイヤな迫力があるな。

「ええと・・・」

そのお兄さんから少し視線をずらせば、小さな女の子が目に入った。

輝くような白い髪に紺碧の瞳。唇は小さく秋桜の花弁みたいにピンク色だ。鼻筋が通っていて、トンでもなく綺麗な顔立ちだ。

しかし、この世のものとは思えぬその風貌に俺は何故か身震いした。

関わりたくない、そう感じた俺は直ぐ様視線を外して元の体勢に戻る——が。

「——！」

一瞬、ほんの一瞬だけであるが、キョロキョロと視線を右往左往させるその少女と目があってしまった。

相手がどう思ったか知らんが、俺は目なんかあっていない風を装って鼻唄を歌ってやる。

すると・・・。

「——大丈夫、です。兄を見つけた、です」

ただたどしいしゃべり方で、その少女が声を発した。外見相応の幼い声だ。

(なんだ、俺が過敏になっただけか……)
最近は何々ありすぎた。

戦闘に次ぐ戦闘で、驚くような事実が多く明らかになった。
そのせいかな、何にでも繋がりがあると考えてしまいうイヤなクセでも
付いたらしい。

変な考えを振り払うように頭を振って、暫くすると……。

(あ、なんか寝るチャンスかも……?)

さつきは強力なエリート選手に追いかけて回されたと思ったら次は
睡魔が迫ってきた。

抗えない俺はそのまま睡魔に身を任せ……。寝た。

その瞬間、鈴の音が聞こえた。

「いつまであたしを独りで遊ばせる気よ!?!」

いや、マジでキツイんで。勘弁してください。

@

どのくらい時間が経っただろうか。

(……ん)

不意に目が覚めた。

透明な天井から降り注ぐ西陽が眩しい。

だけど、何だろうか。

まだボヤけてはつきり見えないが、目の前に何かがある。

俺は鈍った意識で、半無意識にその物体を撫でる。

……すべすべしてて、ちよつと硬い部分がある。

気になってソコをスリスリ撫でると……。

「……んっ……」

なんてドキツとする声が聞こえた。

本能的にまずいと思つた俺は、そこから手を離し下に降ろす。

暖かく、規則的にトクトクと脈打つ、触れれば折れてしまいそうな
ほど細い何か。

肌触りがいいので感触を堪能していたら、モゾモゾと俺の頭の下が
動いた。

膝を擦り合わせるような、くすぐったそうな反応だ。

「え、えーと・・・クレ・・・ハ？」

面白いので更に触れる場所を変える。

トクトク脈打つ箇所から更に手を降ろすと、何やら紐のような物体に、さらさらした生糸の束のような物が手に触れた。

「・・・クレハ？」

生糸の束は意外と長く、病み付きになりそうなほど指通りがいい。試しに匂いを嗅いで「ちよっ、クレハ・・・ツ」みると、これまた芳しい香りがして、まるで鈴の髪みたいな――・・・。

――じゃねえだろ俺！

一気に意識が覚醒した俺は、目の前にある鈴の顔を見て打撃を覚悟した。

恥ずかしがってるような、怒っているような、だ。

始めに俺が触れていたのは鈴の頬。そして次にスリスリと撫でたのは、鈴の耳のしたから顎にかけての骨の部分。トクトクと脈を打っていたのは細い首で、水着のヒモの部分に髪まで堪能してしまった。

「え・・・と、お早う、であってるか？」

「そうね、お早うクレハ。そして2つ選択肢を上げるわ」

うっ、鈴の声が近い上にビックリするほど低い！

さらにイラだっているのか、頭の下にある膝がガクガク揺れている。よ、酔う・・・ッ！

「まずひとつめ。あたしに殴られる」

「直球かよー！」

「ふたつめ。千冬さんに殴られる」

「生存ルートをくれっ！」

どっちを選んでもただでは済まないだろこれ！

でも、鈴にしては今回の拳骨制裁、かなり良心的だぞ。

どっちにしる死ぬとはいえ、選ばせてくれるだけの理性があるってことだ。

ソコを突けば活路が見いだせるかもしれないぞ俺！

「――だったら上げるわ。みつつめ。今度女装して一夏とここで遊

ぶ。——もちろん水着よ」

「……………1でお願いします」

選択肢を告げる鈴の瞳は、ハイライトがなく、所謂死んだ目状態であつた——。

@

「なあ、悪かつたつて。でも疲れて寝ぼけてたんだから私服でプールに叩き落とすことはないだろ」

「ふん、当然の報いよ。あ、あたしがせっかくひ、膝、ま、膝枕してあげてたのにいきなり身体まさぐつてくるなんて信じらんないわよ。クレハのアダ名を忘れてたわ」

「おい、不名誉なアダ名の話は止めてくれ。……ていうか言われた通り@クルーズの限定パフェ、奢つてやっただろ。いまさらグチグチ言うなよ」

「べ、別にグチグチなんて言っていないじゃない！ あ、あたしだってちよつとやり過ぎたと思つてるわよ」

「へー」

鈴の言い分に適当に相づちを打ちつつ、@クルーズで買ったアイスコーヒーを飲む。

いやあ、意外だったな。

ラウラとデユノア。最近昼間学校に居ないと思つたら、夏休み中はバイト入れてんのか。

——先ほど足を運んだコーヒーショップ@クルーズ。

俺は鈴の機嫌を取るためにその夏期限定パフェを食べようと画策し、足を運んでみれば意外なメンツが意外な格好をしてお迎えしてくれた。

メイドのラウラに、執事のデユノアだ。

どっちも@クルーズの制服らしく、よく見れば他のスタッフも同じかつこで店内を慌ただしく駆け巡っていた。

勤務時間だというので長くは話せなかったが、話によると以前ここで起こった問題を手際よく解決してしまったため、ここの支店長と懇意になつてしまったのだと言う。

そういう経緯があつて、たまにヘルプを頼まれたりするようになったのだと言う。

「……ラウラがメイドでデュノアが執事なのは分からんが、まあそういうことなのだろう。」

「——ねえ、聞いてるクレハ!?」

「うおっ」

しまった。少しボーツとしてみたいだ。

「べ、別にあんたなら嫌ってわけじゃないのよ……? でも、いきなりは、その……ちよつとビックリしちゃうし、寝てるときに触られるなんて考えてなかったから……でも、意外に優しかったし……」
あ、まだその話題ですか。

フラフラ歩く鈴を尻目に、海の方へ目をやる。

「……現在俺たちは帰りは豊洲のほうからゆりかもめに乗ろうと言うわけで、有楽町線のに沿って海岸線にある遊歩道を歩いていた。」

西の空が真っ赤に染まっている。

この時間になると夏の暑さも和らぎ、涼しい海風が吹き始める。

「……この風で、鈴の頭も冷めてくれたら良いのになあ……」

そんなことを考えていたときだ。

海猫か、カモメか分からないが、海鳥が二、三羽飛んでいて思わずそれを目でおってしまった俺は、一瞬だけ回りへの配慮を欠いてしまった。

「……」
「おっ?」
「えっ?」

「……」
「おっ?」
「えっ?」

俺は反射的に鈴の背中に右手を回し、転げないようにぐいと引き寄せる。

だが鈴は鈴で、右足を一步引き下げて踏ん張っていたため、俺の引き寄せる力に負けて、今度は前にバランスを崩す。

すると——トン、という軽い衝撃と共に……すぽ。

鈴の身体は俺が受け止めることができ、お互いに怪我することなく

事を終えることが出来た。

……出来たじゃないよなあこれ！

「！」

前につんのめった鈴はもの見事に俺の胸に寄りかかり、背中に添えた俺の手がまるで鈴を抱き寄せたみたいな状況を作り出しちまつた！

「~~~~~ツ！」

しかも二人とも硬直しちまつたし……。

どちらとも動けずにいると、次第に変な空気が漂い始める。

い、今さら思い出したんだが、この遊歩道。人通りは結構あるくせにその大半がカップルなことでも有名な、所謂デートスポットだぞ……！

どうすればいいのかわからず、背中右手を離そうとしたら……。

「あ、ちよ、ちよつと待って！ こ、腰が……！」

鈴が本気で焦った声を発したので、ぎゅ。

更に力を込めて抱き寄せちまつた！

「っ！」

より身体が密着したことに驚いたのか、鈴の息を飲む声が聞こえる。

薄い夏服越しに、鈴の暖かな体温を感じた。

足元を見ると、確かに鈴の足には力が入っていない。いきなりのとこで腰が抜けてしまったらしい。

どこかで鳴く海鳥の鳴き声が聞こえる。

それほどまでに辺りは静かで、夕陽に染まった海辺の景色が幻想的な雰囲気醸し出しているようだ。

まるで俺と鈴だけが世界に存在しているような錯覚がはじめて、不安げに見上げてくる鈴の濡れた瞳に俺の思考はメチャクチャに掻き乱される。

可愛い。それ以外に彼女を的確に表している単語がない、と思ってしまうほどに今の鈴——いや、凰　鈴音は魅力的だった。

コーヒーを取り落としたお陰でフリーとなった左手がまるで別の意識を持つているかのように、鈴の肩を掴んだ。

自分でも分からない欲望が俺のなかに渦巻き、思わず唾を飲み込む。

鈴が——目を閉じた。

俺にすべてを委ねるような鈴が堪らなくいとおしく思える。

俺は、そんな鈴に——

(だ、ダメだろクレハッ！ 相手は鈴だぞ！)

——何も、しなかった。

一瞬外れそうになった理性を何とか保つ。

おい、クレハ。お前は人を死なせている身空で、何を考えているんだ。

確かに双龍の頭は捕らえたが、まだ、ダメだ。

なにがダメなのかはハッキリと纏めることは出来ないが、俺の直感が告げていた。

——俺は、まだ自分を赦すことができない。

どん、と鈴が俺の胸を押し退けた。

どうやら立てるようになってたらしい。

——だが。

「ふ、ふぎけないですよ……。あ、あんたはいつもそうやって……っ

！ 人をその気にさせて悩ませておいて——何なのよッ！」

泣いて、いる。

大きな瞳いっぱい涙をためた鈴が、俺に向かって何かを訴える。

いつも通りの気丈に無る舞う鈴かもしれない。だが、彼女の剣幕がそうではないと言っている。

「分からない……分からないのよクレハが……。っ。あんたにとつてあたしって何なのよ……。なんであんたは優しいのよ……。っ。なんで、なんで、クレハのことであたしがこんなに思い詰めてるのよ……っ？」

止めどなく溢れ出した涙を手の甲で拭う鈴。

彼女の動きに合わせてツイントールが踊るように揺れる。

「・・・鈴、俺は――」

「――帰る」

言い終わる前に、鈴は俺に背を向けた。嗚咽を漏らす鈴は振り返ることなく去ってしまった。

伸ばそうとした手は誰にも向けられることなく重力に引かれて垂れ下がる。

段々と暗くなっていく空。

そしてついに、夜のとばりが降りてきた。

・・・何だったんだ今日の出来事は。

混乱する頭で、さっきの鈴の姿を思い浮かべる。

俺の腕のなかに居た鈴。

何かに期待するように閉じられた目に応えられるようなことを、俺は出来たんだろうか。

・・・いや、そんなはずは無い。

きつと、傷つけてしまったんだ鈴を。

俺に向かつて激昂する鈴。

自分でも全部が把握できていないにも関わらず、俺に何かを訴えようと必死で言葉を探していた。

俺はそんな鈴に、必死に言葉を探して思いを伝えたか？

いや、ただ逃げたんだ俺は。

「・・・ゲス野郎じゃねえか・・・」

ベンチに座り、独り打ちひしがれる。

頭では分かっているが、何かが邪魔をする。

お前は一生苦しむんだと、何かが告げてくる。

胸の中のISか、それともあの日の記憶か。はたまた、遺伝子を弄くられて生まれてきたこの身体自体か。

何にせよ、俺はアイツに伝えてやることが出来なかった。

今日のなかで一番ハッキリしてるのは、それくらいのもんだよ。

@

重い脚を懸命に動かして、学園に帰ったのは8時半。

寮に戻っても誰かが帰ってきた形跡はなく、静かなモノだった。

久しぶりに大浴場に行き、気分を変えようとしたがイマイチ効果はない。

風呂から戻った俺はベッドに腰かけると照明を落とす。

多分、鈴は帰ってこない。

俺にとつても今はそれが良いし、アイツもそうなんだろう。

ベッドの間に設置された仕切りを閉まってみても、その向こうにいるはずの鈴はそこにはいない。

「……どこいったんだよ鈴……」

その夜は眠ったのか眠れてないのかハッキリしなかった。

迷走

翌日の日曜日。

俺は部屋のドアを叩く音で目が覚めた。

時間は・・・9時ちようどだ。

頭いてえ・・・。

くらくらする頭を労りながらベッドから降り、ドアに手を掛ける。

・・・鈴、じゃねえよな。

アイツならこのカードキーを持っているはずだし、多少の気まづさはあっても今更ドアをノックなんてしないだろう。

取り敢えず覗き穴から訪問者の顔を確認すると・・・げ、セシリアだ。

ドアの前に立つ制服姿の金髪美少女は、なにやら忙しくモジモジしている。

少しだけ紅潮している顔から視線を落とせば、目に入るのは手に持ったバスケットだ。

・・・あれ、間違いなく食いもんだよな・・・。

ったく、アイツまた変なもの作ったんじゃないだろうな。前みたいな味だけゲテモノサンドイッチとか止めてくれよホント。

第一、弁当系ならセシリアよりずっとアイツの——。

？

急に、そこで思考が止まる。

(あれ、俺は一体誰の顔を思い出そうとしてたんだ・・・?)

今まで俺が食ってきた料理と言えば、食堂のキツネうどんに鈴の中の華料理。

鈴がいるからこそ最近は食堂の利用回数が減ってきたが、あそこのうどんは結構うまい。

・・・なにか他に食べてる気がしたんだが・・・、思い出せない。既視感を味わっているような、言い様の無い感覚。

・・・まあ、気にすることじゃないか。

思い出せないことの内容はどうでも良い。

今重要なのは目の前に生物兵器（仮）を所持するというトンでも無いことをしている英国淑女への対応だ。

・・・体調的にもう一度あのレベルのサンドイッチを食べたら今はアウトだ。

何時もなら未だしも、寝不足で抵抗力の落ちている今、アレを体内へ入れる訳にはいかないッ！

一緒に弁当食おうと提案されたら最悪、時穿で作った亜空間へ弁当ごとセシリアを突っ込んでやろう。

俺は意（胃）を決してドアノブを捻る——！

「おはようございますクレハさん！ 今朝のご機嫌は如何でした？」

「よ、ようセシリア。どうしたんだこんな朝早くから制服なんか着て補習でもあんのか？」

うう、セシリアの笑顔が今の俺には眩しい・・・！

取り敢えずバスケットには触れないように話題を制服へと持っていく。

「い、いえ、そう言うわけでは無いのですが・・・。実は、少しクレハさんにお問い合わせが有ります・・・」

「お願い？ ——！ りよ、料理の味見なんかはしないぞ!？」

しまった！

お願いと聞いて、思考が完全にバスケットの方に向いちゃった！

自爆ぎみに料理のことを口走った俺は背筋をかけたのぼった悪寒に耐えながらセシリアの言葉を待つ。

「え・・・？ い、いえ！ そ、そのようなことではありませんわ！」

そう言うときセシリアは、ぼっ。

バスケットを自身の後ろに隠した。

なんだよ、バスケットの話はセシリア的にも触れてほしくなかったって訳か。

「ただ少し・・・っ、っ、付き合ってくださいませんかっ？」

セシリアはいっぱいっっぱいって感じで顔を赤くして言った。

・・・もとが白いだけに綺麗な桃色だなおい。

「あー、セシリア？ 具体的に何に付き合えば良いんだ？」

「あ、あらこれは失礼いたしました！ 緊張のせいで少し混乱してしまいましたわ」

「ん、まあ焦るなよ。今日は日曜だし一日中暇だから大抵のことには付き合ってやれるぞ」

寝癖をグシグシ正しながら言う。

「そ、それは本当ですか!？」

「嘘ついてどうなるんだよ」

ずいっと詰め寄ってきたセシリアの迫力に気圧される。

……息巻いて言ったせいかわらんが、こちら辺り帯の空気がセシリアの放つ桃っぽい呼気に染まった気がする。

——— 実際、今日はなんの予定もない。

鈴の行き先は気になるが、今アイツの心配をする意味はないし、あの種の喧嘩見たいな状態だ。昨日の鈴の様子から下手に声をかけない方がいい気もする。

アイツとはただのパートナーっていう間柄なだけで、居場所がどうか俺には関係ないし、第一、鈴の当初の目的である双龍がらみの件は解決したんだ。

超界者とか気になる問題はあるが、そっちの方は大人たちが何とかしてくれるさ。

つまり、俺たちのペアの存在意義は限りなくなってきたと言っていることだ。

「たしかにそうですね。でしたら、お頼みしても宜しいですか？」

「おう、取り敢えず聞くだけ聞いて、その後判断する」

俺がそう言うのとセシリアは真摯な瞳で、ちよつと恥ずかしそうにお願いの内容を告げてきた

「——— 実はわたくしは———」

@

ところかわって I S 学園、第五ブロック内にある武道場。

壁には剣道部の面が干されていて、少しだけ汗のにおいがする。

普段はクラブ活動の施設として利用されているここに、俺とセシリアは立っていた。

俺たちは畳三畳分の間隔を空けて立ち、心を落ち着かせる。セシリアを見やると、いつもと違う格好に少しだけ物珍しさを覚えた。

——袴、なのだ。俺達が着ているのは。

白い武道着に紺色の袴。

IS学園の柔術部が使用している規定の服装だ。

金髪でスタイルのいい完全無敵の外人さんであるセシリアが着ると締めた帯がくびれを強調し、礼節を重んじる日本武道の場であんなかつこして怒られないかと心配になる。

「じゃ、行くぞセシリア。時間は一分。先に背をつけた方の負けだ。型に囚われずに自由にやってみろ。バーリ・トウードウってヤツだ」
「わ、分かりましたわ」

緊張した面持ちのセシリアが力強い返事をする。

ビーツ！

セットしておいたタイマーがブザーを鳴らし、一分間のカウントダウンが始まる。

「————ッ！」

緊張しているようだったので出遅れるかと思ったが、セシリアの反応は意外と速かった。

……セシリアの頼み事とは、詰まるところコレ。

先月の戦闘で格闘戦が不得手なのを深刻に思ったセシリアは、ISで拳による格闘戦を行う俺に練習に付き合ってほしいと頼んできたのだ。

スタートは上々。

一応格闘訓練もしていると言うだけのことはあった。

さて、ここからだが——。

詰め寄ってきたセシリアは意外や意外。なんと鋭いワンツートを俺に放ってきた。

足の踏み込み、身体の角度、視線。間違いない。ボクシングだ。

女対男で腕力勝負のボクシング。

セシリアの判断ミスかと思ったが——そうではないようだ。

「はあッ！」

頬に向かつてえぐり込むような右ストレートが放たれる。続けてワンツーワンツーとリズム正しく放たれるジャブを受け流している内に気がついた。

セシリアの拳はただの牽制ではない。

一発一発に体重が掛けられた紛れもない本気の拳。

教科書通り過ぎる嫌いはあるが、食らえば吹っ飛ばされるかもしれないな、アレ。

「行きますわよッ！」

右側に放たれた拳に反応して、俺の重心が左へ寄った瞬間。

「!?」

超界の瞳が俺の左足に迫るセシリアの右足を捉えた。

(拳はブラフで、蹴りが本命か——！)

Bシステムも発動していない俺に、そこからの回避が出来るわけもなく、蹴りが俺の脚にヒット。

膝かつくんのように完全に重心をずらされた俺はその場に膝をついた。

「……おいおい。」

格闘戦が不得手というわりには巧いな。技巧タイプってどこか。

だが、負けた訳じゃない。

似合わないファイティングポーズを取っているセシリアが少しだけ微笑んでいる。

「申し訳ありませんでしたクレハさん。実を言うとなたくしボクシングには多少の心得が御座いますのよ」

「ホラ吹いてんじゃねーよセシリア。お前『ISでの格闘』が苦手なだけだろ」

「ご明察ですわクレハさん。——初めはちゃんとしたIS格闘をご教授願おうと思っていましたのですが、クレハさんが『大抵の事なら付き合ってやれるぞ』なんて仰るモノですから……少しだけいたずら心が沸き上がってしまいましたの」

そう言つてセシリアは拳を構える。

身体を半身にし、利き手を身体の後ろで握る独特の中国拳法のような構えだ。

見たことない——多分オリジナルだ。

「——春のリベンジ、と行きますわよ」

その宣言でハツとさせられる。

今年の四月。入学早々俺に喧嘩を吹っ掛けてきたセシリアは、前半調子に乗りまくり、後半で見事に敗北を喫すという凄まじく恥ずかしい負け方をしている。

プライドの高い英国貴族のセシリアだ。どこかで根に持っていたんだらう。

一度負かせた相手からのリベンジマッチ。

正にボクシングの防衛戦みたいで、男としてはテンションの上がる展開だ。

(だが、セシリアが大人しく組んでくれるかどうかだな)

セシリアがボクシングなのに対して、俺が基本とした動きは、投げ、極め、締め、柔道だ。

幾らか手を加えて打撃もある柔術寄りになってはいるが、それでも相手がボクシングでは間合いに入るのは難しそうだ。

(Bシステムはナシ。久しぶりに負けるかな・・・?)

想像して冷や汗が垂れる。

ここで負ければ惨めな王座失墜。きつと嫌でも噂が広がり下級生に負けた下負け野郎として後ろ指刺される事態になるだらう。

——絶対にイヤだな、うん。

「よし、セシリア。そのリベンジマッチ、受けてやる。掛かってこいよ」

内心ビビりつつ、くいくいとセシリアを挑発する。

負けたときは——土下座でも何でもしてここでの事をうやむやにしてやろう。

「——レディーファーストとは、さすが紳士ですわねッ！」

セシリアが拳を——放つ！

狙いは視線からいつて俺の正中線を的確についている。

後ろに引いた拳を全力で放つ姿に悪寒を覚えた俺は、その場でしゃがむ。

すると――

――ヒュッ――パンツ！

「ちよつと待てや！ 今の音おかしいだろっ!?」

く、空気を切り裂いた上に戻したときのパンツで音何だよ!? J E

Tピストルかよ!?

「? 今の、おかしなところがありましたでしようか?」

当のセシリアは今のスピードに違和感を覚えていないらしい。

身体を半身にして後ろに拳を引いたのは、全身の筋肉を使って超速の拳を放つためだったってわけか。

人外が・・・、人外がここにもいたぞ！

次々と繰り出されるセシリアの超速パンチに、俺は防戦一方となる。

速い分体重は乗ってないが、あんなの食らったら只じゃ済まんだろ

！

「――踊りなさい！ わたくし 私とこの拳が奏でる愛らしい小舞曲と共に

！」

か、回歸してやがるアイツ！

口調は優雅だが、今のセシリアは丸つきり激しいビートを刻むデスマタもかくやという激しさだ。

このままじゃじり貧だな。

狭い柔道用の畳の上じゃ逃げるのにも限界がある。

何としてもセシリアの背中を畳につけて、勝つしかない！

俺は右足を畳につけた瞬間、親指に力を込めて直角に身体の向きを変えた。即ち、セシリアの正面に。

「ツラァー！」

セシリアの拳は、放つと一度完全に引き戻す砲撃のようなパンチだ。

だから連射が効かないと判断した俺は一か八か懐に飛び込むように奇襲を掛けたのだ。

踏み込むと同時に放った俺の拳が、セシリアに迫る。

「相も変わらず、洞察とタイミングは完璧ですわね。ですが——！」
放った拳をパンツという音と共に引いたセシリアは、眼前に迫った拳を見ても尚も微笑む。

そして、重心を左足に掛けたセシリアを見て、俺は自分の失策を呪った。

セシリアの左足。それはセシリアの軸足であってつまり——
「身体の使い方ならわたくしの方が上手のようですねッ！」

——回し蹴り——！

回転するセシリアを追うように金髪が揺れ、俺の視界を覆い隠す。
そして俺の拳はセシリアの蹴りによって左へと弾かれ、勢いあまり、俺の身体がその場で一回転する。

(だったら——ッ！)

セシリアの蹴りによって一回転した俺はその回転力を次に繋げるべく、左手による裏拳で回し蹴りの残心を決めているセシリアの背後を狙う。

しかし——当然、受け止められた。

……なんつーこった。

普段の俺と、コイツら代表候補生はこんなにも差があつたのか。

伸ばした左手を易々と握ったセシリアは俺を見て不思議そうな顔をした。

「……本気、ではないようですわね……」

Bシステムの事を知らないセシリアは俺が手を抜いていると思つているらしい。

だが、それは間違いだ。

全力だよ。今の俺の。

「……」

何も言わない俺をじっと見ていたセシリアは掴んでいた俺の左手首を放した。

「どういった事情かは存じませんが、今のクレハさんを倒したところで面白味なんてありませんわ。勝敗はまた次の機会に致しましょう」

セシリアは嘆息混じりにそう言うどくるつと俺に背を向けた。

「……強くないクレハさんなんて、わたくしは認めませんわ……」
そう言つて更衣室に消えていったセシリア。

——強くない、か。

そうだな、弱いよ俺は。

だから変わることを求めた。

弱さを自覚していたから、強さを求めずには居られなかった。

誰かを守ろうなんて高尚な志なんてない。

誰かに見えてほしかった。

母親たばねさんに、鈴に自分という存在を見てほしかったんだ。

だが、ただ見えてほしかったという理由だけで頑張れたあの頃とは違う。

二年とは言え、俺も成長し誰かに依存する子供のような精神はとつくに捨てた。

今の俺には近くで見えてくれる人間もない。

束さんも、ウエルクさんも、そして鈴すらも。

別の何かが必要なんだ。

見えてほしいと言う顕示欲にまみれた目的じゃない。別の、何か

が。——兵器を駆る以上、理由もなく乗ってるなんてバカみたいだろ。

@

午前中なのにくたくたに疲れた身体で部屋に戻ると、鈴のベッドが膨らんでいた。

……帰ってきたのか。

安心すると同時に、どうすればいいのかわからなくなってしまふ。

寝ているのか、すうすうという寝息が小さく聞こえて、すこし脱力する。

……取り敢えず、シャワー、浴びよう。

部屋のユニットバスでシャワーを浴びながら考える。

今、隣には鈴がいる。

だが、俺はこういう場合どうすればいいのか見当もつかない。
アツチが話しかけてくるのを待つのか、こつちから声をかけるべき
なのか。

考えが纏まらないままシャワーから上がり、服を着て携帯電話を手
に取った瞬間思い付いた。

(・・・フォルテは、ダリル先輩とどうやって仲直りするんだろう
な)

思い立ったが吉日だ。

直ぐ様フォルテの番号を呼び出し、コールする。

『Hello, もしもし？ フォルテっすけどなにかな？ this is forte.』

「ああ、フォルテか。俺だ俺」

『——オレオレ詐欺つてもう古くないっすかクレハさん？』

「テンプレな反応どうもな。ちよつと聞きたいことがある。いま良い
か？」

『えー、いまっすかあー？ あと五分でダリル先輩と約束あるんすけ
どー』

「そいつはちようどいい。その約束、ちよつと破ってみてくれよ。そ
んでダリル先輩と喧嘩してくれ」

『どういう神経してんすかアンタ!? いきなり凸電してきて仲良しペ
アの仲引き裂こうとするなんて正気の沙汰とは思えないっすよ!』

「ああ、悪い。言い方が悪かったな。俺はただペアと喧嘩したらどう
すりゃいいのかわりたいただけなんだ」

『ペア？ 喧嘩した？ クレハさん今中国代表候補生さんと喧嘩して
るんすか？』

「ちよつと込み入った事情があつてな。ほつときや次第に機嫌が良く
なると思つてたんだがどうにもいかないらしい。助けてくれ」

『え、エライ素直っすね今日のクレハさん・・・まあ、クラスメートの
悩みとあつちや無下にするわけにもいかないつすからね。こちら
辺でクレハさんに一つ貸しを作っておくもの悪くはないっす』

「貸しって・・・。——わかつた倫理的にオーケーな事なら一つだけ
言うこと聞いてやるからアドバイスくれ」

『さつすがクレハさん！———そんなじゃえーつと、端的に言えばクレハさんと中国———凰さんは幸運にも男女のペアつす。私たち女同士よりちよつと複雑な間柄ですから方法としては私たちとはガラツと変わるんすけど良いつすか？』

「まあ、参考程度に聞いておくよ」

『そつすか。それじゃ、一緒にどこかに出掛けてください』

「その帰りに喧嘩したんだが、また誘って大丈夫なもんなのか？」

『———』
「……おい、黙るなよ。」

『一体どういう状況になって喧嘩したつて言うんすか……？』

「声が深刻そうだな。そんなに難しい状況なのか？」

『当たり前つすよ！ デートして喧嘩とかもう最悪じゃないつすか！』

「デートじゃねえ！ 普通に原宿でお姫様だつこしたり、普通にプール行つただけだ！」

『ふざけんじやないつすよ！ このリア充め！ この主人公野郎！ あとお姫様だつこつてなんすか!? 超気になるつす！』

お互いに電話で激昂してしまつたので数秒間クールダウン。

『———当然、水着は誉めたつすよね？』

「いや、誉めずに、寝た」

『あり得ないつす……』

「そんで、帰りにちよつといぎごぎがあつて、喧嘩別れしたんだ。昨日のことだ」

『いぎごぎの内容も気になるんすけどまあいいつす。———私が聞いたところクレハさんのデートの評価は多分良いところ5割、悪いところ5割つてとこつすね』

「半々かよ。つーかデートじゃねえし……」

『クレハさんの言い分はどうでもいいつすよ。大事なのは女の子の心つす。もうちよつとクレハさんは自分に正直になることをお勧めしますよ』

「おすすめされてもなあ……。じゃ、今できることは？」

『ないっすね。ホントに。マジでちよつと放っておくのが一番かと』
「高い代償払って得た答えが現状維持って……」

腹立ったので電話をぶち切る。

通話時間十分越えてるな。約束に遅れて喧嘩しちまえ。

携帯をポケットに納めた俺はシャワー室から出る。

ベッドを見ると未だにもっこりと山が出来ている。

……あー、考えてたって始まらねえな。

俺はフォルテのアドバイスをガン無視して、ベッドにツカツカ歩み寄る。

寝息は……聞こえんな。

息を潜めてじつとしていているようだ。

こうなりや自棄だ。取り敢えず顔をあわせてみないことには何も始まらない。

俺は布団に手を掛けて——引き剥がす！

「……………ッ！」

「……………え？」

——そつと布団を戻す。

……なんだ今の。

鈴じゃない、見たことない奴が居たんだが、なに？ どうしたんだこの部屋？

俺は先程見た光景を思い出す。

ベッドがあり、そこに横たわるのは小柄な少女。

多分、鈴やミナトより小さいガチの小学生レベルの身長。

白く短い、セミロングの髪に、紺碧の瞳。

……ってあれ、見たことあるなこの特徴。

「……………」

「……………」

なんとも言えない不思議な沈黙が降りる。

「……………おい」

「!!」

ビクッと布団が震えた。

「お前、昨日プールにいたやつだろ」

「!!! (ふるふるふる)」

核心を突いた質問に、ベッドの山が左右に揺れる。

違いますよーってことらしい。

取り敢えず瞬龍を準待機モードでセットしてワンアクションで起動できるようにする。

念のため腰から抜いたM1911もハンマーを落とし、突発的な事態に備える。

敵か味方が分からない状態だ。

カードキーがないと入れないこの部屋に居るのも気になる。

「動くなッ」

バツ、と。布団を捲った俺は少女に拳銃を突きつけながら警告する。

左手を使って少女の両手首を一纏めにして頭の上で押し付ける。

白い薄手のワンピースを纏った身体を一通り見た感じとしては、武器などの所持は無さそうだが、安心するわけにはいかない。

こちらら体内に殲滅兵器を積んでるんだ。警戒は怠らないさ。

暫くして、少女がなんのアクションも起こさないのでちらと顔を見てみると……。

「ふ、ふえ……うええ……」

あ、あれ？ちよつと泣きそう？

少女は大きな緑色の瞳に涙をため、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

や、止めてくれよそういう顔。

俺が悪いことしてるみたいになっちゃうだろ……？

ていうか今の状況。人に見られたら結構なことに——がちや。

「あのー、クレハさん。今朝は誤魔化してしまったのですけれど、やはりわたくしのサンドイッチ食べて——」——はいい!?

ノックもせずいきなり入ってきたセシリアは、俺の顔を見て、次に組敷かれてる少女の顔。そして俺の顔を見た。

「おい、待て。話せばわかる。いや、俺自身今の状況を説明しきる自信

は無いんだが、取り敢えずその握った携帯を置こうかセシリア」

「———け、警察を！ 警察を呼びませんと……ツ！」

「頼むから待ってくれよ!？」

@

「———ちよつと待ってセシリア。状況が読み込めないのだけれど?。」

急遽セシリアに呼ばれたサラは、曖昧なセシリアの説明を聞いて頭を悩ませた。

「ええと、要約するところ言うことかしら? 部屋に入ると柊君がいたいな少女を押し倒していた、と。変態ね」

「ええ、その通りですわサラ先輩」

二人の誤解に満ちた納得にも俺は黙っているしかない。

件の少女と共に正座させられた俺の回りには何やら青い筒状の物体が向けられているのだ。

言わずもがなブルーティアーズである。

しかもそれが六基。つまり、ミサイルすらも俺に向けられている状態だ。

「はあ、いきなり呼び出されて何事かと思いきや、遂に貴方を滅する時が来たようね」

「いや、あの……いろいろ弁明つつーか、説明したいんだけどダメ……すか?。」

「ダメよ」

ちゃんと挙手しつつ言った俺の請願はバツサリと切り捨てられた。

……つーかサラ。

お前目の奥が笑ってんだけど普通に俺を弄って楽しんでるだけだろ。

セシリアを焚き付けて暴走させるクセも直ってないみたいだし、焚き付けられるセシリアもセシリアだな。あとで先輩として何とかせねば。

「……っ」

因みにだが、俺の隣に正座するチビツコだが、さつきから俺が視線

を向けるたびにビクツなってる。

なにか悪いことしたかなと考えたら、いきなり銃を突きつけてしまったことを思いだし反省する。

・・・仮に彼女が犯罪者の一端だったとしても、今の状況でなんのアクションも起こさないのは不自然だ。

学園生徒三人に囲まれた上に、一人は知られていない男子生徒である。

俺に対する驚きとか、状況を打破するために一手打ってきてもおかしくないのだが、その様子はさつきから全くない。

むしろ瞳から送られてくる少女のバイタルサインからしても、怪しい所は一切なし。何かを隠している様子も、芝居を打っている様子もない。

それじゃあ、この少女は一体何なのか？

・・・ほんと、何なんでしょね。

「——まあ、柊君を私刑に処すのは後回しにしましょう。・・・それよりもまず、彼女の問題よ」

そう言つてサラは少女と視線を合わせるように眼前にしゃがみこんだ。

おいおい、お前が真剣表情していると少なからず相手を威嚇してるみたいだな眼力が出てくるんだから止せよ。

あーあ、またびくってなったぞ。

「いくつか質問するわ。一つ、貴女の名前は？」

サラの問いに会わせてセシリアがBTを一基少女に向けた。

少女はというと、突然向けられた砲口にまたもや涙目になり、うるうるとした目でこちらを見上げてくる。

——どうすればいいですか？

そんな声が聞こえた気がした。

「サラとセシリアは取り敢えず武器を下ろせよ。相手は丸腰だぞ」

一度は拳銃を突きつけて迫った俺だが、棚上げはお手のもの。そう言われた二人は唇を尖らしながら武器を納めた。

やれやれ、普段から武器で脅すしか選択肢のない生活を送ってるも

んだから異常性に気づきにくくなってるんだな。

「で、だ。お前は一体——」 きゆるるるるる

その場の空気が俺に任せる見たいな流れになったため、質問を始めようとしたその矢先、なんとも気の抜ける音が響いた。

じとつとした目でイギリス人二人を見るが、ふるふる。首を振って否定した。

それじゃあ——。

「ちっ、違うん、です！ その、今のはお腹の音なんかじゃ……無くてっ！」

白い顔を赤く染めてお腹を抱えるハングリーリトルガールがそこにはいた。

「……食堂、行くか」

そうだ。よく考えれば飯時だったぜ。

@

人間、慣れとは恐ろしいもので、銃を突きつけて対話する事に疑問を抱かなかつた他に俺は別の異常性に気がついた。

寮に隣接する食堂の窓際の六人がけシートに座った俺たち四人は、其々のメニューを広げた。

まず俺。いつも通り狐うどんをメインにいなり寿司がサイドを飾っている。栄養的には偏るものの、隙のない完璧な布陣である。

続いてサラ。

サラは和食が気に入っているらしく、割と肉を好んで食べる傾向がある。よってサラが選んだのは親子丼だ。

レンゲを用いて熱々のを頬張る姿はクールなサラの違った一面を見せている。

そしてセシリア。

午前中にちよつと摩擦があつたため食事を同席するのはどうかと思つたが、セシリアの「お食事でしたらわたくしのサンドイッチをどうぞ(ハート)」という発言を俺とサラはガン無視したためセシリアも渋々昼食に参加。今は少女とサラを挟んだ向こう側でチュルチュルうどんを啜っては、ハムツとかき揚げにかぶり付いている。

「……英国貴族二人が揃って庶民飯って……。
ていうか、セシリア。食ってる時くらいジト目は止めなさい。」

「……女性二人と食事を共にするなんて緊急時でもない限り絶対にしないことだが、今はその緊急事態なのである。」

サラとセシリアの体臭が混ざったなんとも言えぬ香しい香りのせいで食事に集中できない俺は、俺とサラの真ん中に居る少女に目を移す。

「……ちゆるちゆる……はふう……」

流石に男子高校生の胃袋を満たすうどんを一杯食いきれと言うのは無理な話なので、俺のどんぶりから小皿に分けてやったのを少女は幸せそうに食べている。なんだこいつ。異様に可愛いぞ。

少し楽しくなった俺は、意外に食べる少女にいなり寿司を分けてやったりうどんを追加してやったりして昼飯時を過ごした。

「……ロリコンは犯罪よ」

今、サラが呟いたことは聞かなかった事にしよう。

そして、料理も食べきり、一息ついたところで俺は例の異常性に気がついたのだ。

「……なんか、和んじまったな」

「そうね」

「……同意しますわぁ……」

「……けぶっ」

敵か味方が分からない相手と共に飯を食ってる異常性。

隣で満足そうにげっぷする少女に敵意は無さそうだが、色々不明な点が多すぎる。

ホントならその色々を聞き出さなければいけないのだが――

「……日向ぼっこするにはいい天気だな」

「そうね」

「……同意しますわぁ……」

「……すうすう」

——なんか、色々だらけてきている俺たちだった。

サラもセシリアも、姿勢正しく背もたれにもたれて気持ち良さそうにトロンとしている。

一応危機感はあるのだが、満腹なのと心地よい疲労感が相まって何もする気が起きない。

まあ、コーヒーの一杯くらい飲んでからでもいいかな。

「そうね」

「・・・同意しますわあ・・・」

「・・・んにゅ・・・うん・・・」

数日後、四人揃って日向ぼっこする写真が新聞の一面を飾るのだが、それはまた未来の話である。

正体

30分後。

コーヒーと紅茶のカフェインで完全に覚醒した俺たちは今一度問題に向き合った。

「ていうか、なんでこの子俺の部屋に居たんだよ？」

「知らないわよ。それを今から聞き出そうとしているんじゃない」

部屋に戻った俺達は壁際の簡易テーブルを引っ張り出して、座っていた。

食堂で寝てしまった少女は起きそうにないのでそのままベッドに寝かせてある。

「名前も聞き出す前に眠ってしまいましたから、搜索願の確認も出来ませんわね・・・」

「・・・やっぱり千冬さんや束さんに報告すべきだったかなあ・・・」
飲み干したインスタントコーヒーのカップをテーブルにおく。

・・・教師に報告っていうのは実は真っ先に思い付いた選択肢だが、俺は二年生。

IS学園では一年次を教育期間として、二年次を実習期間。そして三年次を実戦期間として見ている節がある。

だから通例、二年の生徒は基本的に訓練のメニューや任務の受注発注は学校が取り仕切るのではなく、個人でやらされる。

将来、どこのIS企業でも一人でやっていけるように自立を促されるのだ。

そしてそれは任務中の問題についても同じで、俺達は基本的に教師の手を借りることをあまりしない。

この前の福音事件のような外交的思惑が絡む事件ならそうはいかないが、よほどのことじゃない限りは、自分の力で状況を打破しなくてはならないのだ。

「やはりそれが一番良いんじゃないかしら。情けない話だけれど、学園寮にこんな小さい娘が入り込んでるなんてどう考えてもおかしいことだわ」

「やはりそうですわね……」

二人の意見は揃ったようだが、俺はまだ少し考えていた。

この少女は、昨日アクアマリンで見かけた少女だ。

その少女が俺の部屋にいた。

本当に偶然か？ 教師の方に丸投げして解決する問題なのか？

俺の脳裏には昨日感じた嫌な悪寒が甦っていた。

……決まりだな。

「俺は、まだ少しこの子から何かを聞き出した方が良いんじゃないかって思う」

「……貴方、よく分からないイレギュラーを放置するって言うの？」

「それに関しちや言われる筋ないぞサラ。一緒に食堂で飯食った上に眠りこけたのはどこのどいつだよ」

「なっ……それは確かにそうでしょうけど……。ていうか、見てたの？」

サラが手の甲で口元を隠しつつ、なんでか俺を睨んでくる。

「おかしいわね……。柊君より後に寝て、先に起きたはずなのに……写真も……」なんて言ってるサラは放置し、セシリアにも確認をとる。

「サラに同意って感じだったが、お前はいいのか」

「……わたくしも危険分子は早めに取り除いた方が良いと思います
が、先程までのこの子の様子を見る限り、わたくしたちにとって危険に感じられるような事は有りませんでしたわ。話を聞くというなら、
反対は致しません」

「そうか」

……セシリアはその生まれからか、物事をハッキリさせることに躊躇いが無い。

新聞部部长、黛 薫子のデータによれば……セシリアの実家、オ
ルコット家とはイギリスの貴族の家柄で、セシリアの祖父が男爵家の
位を賜ったらしい。

そしてその祖父が他界し、そのすべてを相続していた親夫婦も双龍
の事故で命を落とした。

するとその遺産はどこに行く？

一人っ子であるセシリアは若くして莫大な遺産を相続し、家名を護るために年齢にそぐわない立ち振舞いを身に付けたという。

そのせいも、高圧的な態度と口調で相手を圧倒する人格が形成され、大人の世界で培った高い判断力と分析力を買われてI Sのテストパイロットになったのだ。

「……まあ、セシリアがいうなら私も敢えて反対意見は出さないわ。言っておくけれど、私はセシリアの意見に賛成したのであって、貴方の意見に賛成した訳じゃないわよ」

「いや、そこ確認する必要なくね……？」

そういうセシリアの生い立ちを知っているからか、サラもセシリアの考えには耳を貸す。

よし、方向性は決まったな。

俺は何となく、ベッドで眠っている少女を見る。

……普通の女の子だ。

風貌こそ現実味のない輝くような姿をしているが、眠っているあどけない姿はともじやないがここのセキュリティを掻い潜って来られるようなやり手には見えない。

つーかなんだろうね。

殺伐とした雰囲気学園にこんな子供っぽい娘がいるとすげえ違和感感じるんだが、それと同時にすげえ癒されるね。

毎日毎日鈴やセシリア、サラや千冬さんと言った「クレハ絶対殺すウーマン」どもに囲まれた生活を送る俺にとってはとてつもなく重要な時間だよ今。

「はぁ……天使かよコイツ……」

「……キモいわね」

「やっぱりわたくしの見立て違いだった様ですわね……気持ち悪いですわ」

外野の発言を華麗にスルーしていると、起きそうなのか少女が身じろぎし始めた。

「ん……んう……」

そして、ごっそごそ。

何かを探すようにベッドのシーツをまさぐり始め・・・ぎゅ。
ベッドの縁に手をつけていた俺の人差し指を握りしめた。

「・・・赤ちゃんみたいな子ね・・・」

「クレハさんに襲われなにか心配ですわ」

「流石に傷つくぞセシリア・・・。つーか、これ。どうすればいいんだよ？」

思いつき振りほどくわけにもいかず、おろおろしていると少女が握った指を顔に近づけて匂いを嗅ぐようにフンフンし始めた。

寝ぼけているのか起きているのか知らんが、身体を勝手にされるのは気分の良いものじゃない。

そう思った俺は少しずつ指の解放に向けて行動を起こそうとしたが、その時。

——はむっ

・・・何の擬音かというと、俺の指が少女の口に消えた音だ。

いきなり俺の指をくわえた少女は、まるでアメでも舐めるかのように舌で指先を転がし続ける。

「う、うえっ!? ひ、柊君って・・・もうッ!」

「し、知らん知らん! 俺が突っ込んだわけじゃないぞ!」

突然なことに仰天したのか、若干キャラが変わったサラは少女を止めるでもなく——は、え? なんか、スケッチブックを取り出して絵を描き始めたぞ!」

「おい、ちよつと待てお前! なに描いてやがる! ——は、おいやめろ! アレにするのは止めろ!」

「黙りなさい柊君! もうこれは仕方がないわ。一種の罰なのだから甘んじて受けることね。新刊は二限で売り出す予定だから、おまけとして出してあげるわ!」

「おまけ扱いかよッ!」

サラの行動の真意が察せてしまった俺は必死になって指を抜こうとするが・・・イテテテッ! 歯が引つ掛かって抜けないぞ!」

サラと言い合いをしている間にも少女の寝ぼけ方は酷くなってい

く。

「ちゅびっ・・・ああんふ・・・あふ・・・」

おい、おい待て。それ絶対にアメの食い方じゃねえぞそれ！

アメの舐め方からソフトクリームを舌先でなぞるようにし始めた少女は未だに寝ぼけた目のままだ。

まずい。このままでは非常にまずい。

なんか知らんが瞬龍が反応して、胸が痛いほど脈打ってやがる。

このままじゃ、Bシステムの起動条件を知っているサラにはロリコン性犯罪者の汚名を着せられ、フォルテによつて拡散され、セシリアには白い目で見られてしまう！ いや、最悪全生徒からそういう目で見られてしまう！

——そんな時だった。

バタンツ！

「——お願いリヴァイヴッ！」

力強い声と共にIS、ラファール・リヴァイヴカスタム2の装甲をまとい、顔を真っ赤にしたデュノアが部屋に現れた。

ドアを蹴破つて出現したデュノアは、俺に55口径アサルトライフル、ヴェントを向け——む、向けられた!?

「ちよつと待てデュノア！ これはだな——」

「クレハがこれ以上暴走しないためにも、ここで終わらせるツ！」

——なにをだ!?

言い終わると同時に引かれるトリガー。

突如人生の危機に陥った俺はなすすべもなく飛翔する弾丸を見つめるしかない。

これ以上暴走つて・・・一番暴走してるのお前じゃねえの——

!?

顔を守るために突き出した両腕に——弾丸は飛んでこなかった。

痛みもない。

衝撃もない。

恐る恐る目を開けようにも・・・なんだこれ。瞼が重くて中々視

界が開かない。

「——全く、監視者が一番先に取り乱してどうするシャルロット。監視対象のいる部屋に飛び込むなど言語道断だぞ」

やつとこさ開いた目に写ったのは、黒く、巨大な腕。

このISは・・シユヴァルツエア・レーゲン。

とすると俺を守ってくれたのは・・・

「怪我はありませんか兄さん」

「あ、ああ。ナイスタイミングだ妹よ。ラウラ助かった」

デユノアと同じようにドアから現れたラウラは発射された弾丸を

俺アンチ・イナード・キャンセラごとA I Cで止めていた。

いきなりだったからか停止結界の効果範囲設定が出来なかったらしく、俺ごと止めたようだが・・。ラウラ、A I Cの扱い上手くなつてんな。複数対象の同時停止・・、出来るようになってんじゃん。

マジで命の恩人であるラウラには兄としてハグの一つでもしてやりたい所だがラウラ、これ早く解いてくれないかなあ・・・。

ラウラは俺が無事だったことに胸を撫で下ろすと、「そう言えば・・。」と言って部屋の四隅を興味深そうに眺め始めた。

なんだよ。間取りは一緒だぞ。

眺めるだけでは終わらないのか、椅子を取り出したラウラは眺めていた部屋の壁や天井を確認していく。

一連の行動を理解できない俺とサラとセシリアがハテナマークを浮かべる中、デユノアが一人だけ「ギクツ」て言った。

その瞬間、一時的にだがBシステムが発現しかけた俺は瞳の処理能力を使って高速で思考する。

・・・寮のセキュリティは確かに堅牢だが、実は建物にはいるのが難しいのではなく、個人の部屋にはいるのが難しいのだ。

そこにいる少女は俺の部屋に居たのだから何らかの方法でそのロックを解除したと言うこと。

考えられる方法は二つ。

まずひとつ目に、少女特有の特殊能力。

超界者なんてトンでも生命体がいるんだ。考えられない方法じゃ

ない。

次に、第三者の介入。

少女自身にはなんの技術もなく、部屋への侵入が困難な場合、第三者が関わっていることは間違いない。

その第三者として考えられる人物の条件は、部屋の鍵を開けられる人物であること、そして俺の部屋に入る必要がある人物であることだ。

少女の様子から言って、第一の方法ははずしていいだろう。もし特殊な能力があったとしても俺の部屋には言った時点で何かしらのアクションを起こしていたはずだし、呑気に昼寝する訳もない。

だとしたら必然的に二つ目の方法になるわけだが……。

「……おいデュノア。午前中何してた」

「ギクツ」

二つ目の方法における第三者の人物像において当てはまるのは二人くらいしかない。

まず鈴だが、これは無いだろう。帰ってきてたらわかるはずだし、帰ってきてたら多分そのまま寝てる。この部屋にいないと言う時点で鈴は帰ってきてないし、部屋に入ってもいない。

次に出てくるのは、カードキー無しでも部屋には入れるデュノアだ。

こいつは六月にラウラの部屋のセキュリティを突破している。一度できたんだ。二度目は造作もないだろう。

部屋に入る理由は知らんが、入れると言う時点で疑うには十分だ。

「……デュノア、何してた」

「……ッ！」

ダラダラと汗をかきはじめるデュノア。

マジかコイツ……。

両手をクロスし、何かに備えたようにデュノアに語りかける俺と、汗を垂れ流し続けるデュノアという現実味のない（悪い意味で）光景が展開される中、何かを発見したラウラが言った。

「……流石だなシャルロット。私でも見つけるのに苦労するとは

並大抵の技術ではないぞ」

椅子から降りてきたラウラの手にはなにやら四角い機械が……つて。

「……トレプス製の超高度集音マイクを搭載した盗聴機、マイクロフォンね。部品から受信端末共々、秋葉原で買い揃えられるわ」

「おう、サンキューなサラ」

「べ、別に大した情報じゃないわよ……」

エンピツをサラサラしながら付加情報を提供してくれたサラに礼を言う。

素直に礼を言った俺に戸惑いを覚えたのか、サラがスケッチブックで顔を隠したが……違うからな？

今の俺はコイツへの怒りに駆られて色々どうでもよくなってる状態だからな？

仕掛けた盗聴機がまさか友軍ラウラに発見されるとは思っていなかったのか汗に加えて震え始めるデュノア。なんだその振動。バネでも仕込んでるのか。

「ラウラ。それと同じやつあと何個くらいありそうだ？ 電波傍受出来るだろ」

「はい。シャルロットの端末を見た際に確認できたカメラの数は11台。マイクの数も6台あります」

「ら、ラウラ。秘密にしてくれるって言ったよね……」

正直なラウラの証言に、デュノアが涙目で訴える。

ふっ、今のラウラに泣き落としなんか効くもんか。

今現在、俺からラウラへのプレッシャーは千冬さんの通常状態のそれを裕に越している。

そんな俺を前にラウラが逆らえるわけがない！

——と、その時。

「……ほえ？」

少女が、目を覚ました。

周囲の喧騒のせいかもしれないが、そう言えば俺は少女の口から手を無理やり引き抜いている。そのせいかもしれない。

・・・ちつ、命拾いしたなデユノア。

少女に対して警戒心を持ってしているサラはISを展開するそぶりを見せたが、俺がそれを制する。

「まあ待ってって。イザとなったら俺が対処する」

そう言った俺に、サラは渋々ながらも取り出していたサニークラバー（今は体外にありネックレスの形態を取っている）を胸ポケットに納めた。

少女はいきなり現れた集団にビビってるのか、キョロキョロして忙しない。

・・・さて、質問を始めようかね。

俺は少女と視線をあわせるためにベッドに腰かけた。

「おい」

「っ！」

「いや、そんなビビるなよ。遅くなったがさつきは悪かったな。いきなり銃なんて突きつけて」

「そ、その事は気にしてない、です・・・」

おお、会話できてる。

さつきまでは一言も喋らなかったが、腹が脹れたのと一眠りのお陰で幾分か精神状態も安定しているようだ。

「会話は出来るな？ どうしてこんなところにお前はいたんだ？」

「どうしてって・・・」

俺を見る少女がキョトンと目を瞬かせる。

何かを言い淀んでから、周囲の顔を見渡すようにして、また黙る。

？ なんだ？

不可解な素振りに俺は頭を悩ます。

「はあ、どうやらその子自身、なんでここにいるのか分かってないみたいね」

「どうにもそうっぽいんだよね。ボクが工作しに来たときもドアの前でポーツとしてただけだし」

サラがため息をつき、デユノアがなんかもうぶっちゃける。

「ドアの前でポーツとしてた？ 午前中の話か？」

「うん、なんだか入りたそうにしてたからクレハの親戚かなにかだと思つたの。いろいろ聞いてみようと思つたけど、喋らないし、ボクも仕掛けるのにいっぱいだったから……」

しゅんと肩を縮こませるデュノア。

いや、他に何か気にかけることなかったんか。倫理とか。

「えーっと、この部屋にはそこのお姉ちゃんが入れてくれたってことでいいの？」

そう確認すると、こくこくこく。

小刻みに首を降つて肯定する。

「……どうする？ 特に問題も無さそうだし、このまま迷子つてことで警察呼ぶか。色々不可解な点はあるが、それらは専門に任せようぜ？」

後ろを振り替えて皆に確認する。

一様に眉を寄せているが、それが最善の手だと解っているらしく、誰も異を唱えない。

さてと、そんじや千冬さんかね……。

と、思つてた時だ。

『えーっと、校内にいる各学年の専用機持ちは至急第二整備室に集合。二学期にあるキャノンボールファスト用のパッケージが届いた、とのことなんで急ぐように。以上。』

天井のスピーカーがジジジとノイズを発したと思つたら、続けて大倭先生の気だるげな声が流れた。

放送を聞いた一同は直ぐ様端末を開いて、諸々の確認を取つていく。

「こんなタイミングで悪いけれど、私たちは行くわね。一応『明日を奪うもの』のパッケージもイギリスが用意してくれてるの」

「ん？ サニークラバーって双龍が独自開発したんじやねえの？」

「バカね。甲龍だって中国が面倒見てるでしょう？ 双龍が作戦系統経を失ってから、イギリスが拾ってくれたのよ」

「ああ、そういやイギリスも一枚噛んでたんだっけな……」

そう言つて俺の部屋に溢れていたメンバーは波が引くように居な

し。我々としての集合意識は健在なのですが、現在私が受けている指令の内容が思い出せなくなってるんです。良ければ接続してリストアしても宜しいですか?」

・・・これは、なにか変なものを招き入れたみたいだぞ。

言ってることの半分は分からんが、なんだかこいつ、言ってることが機械じみている。

もつとだ。もつとしゃべらせて情報を吐かせろ。

Bシステムも使えない俺に腹芸が出来るとは思えんがやるしかない。

「問題ってなんだ。何が起こった」

「分かりません。ただ、気がついたときにはあの場にいました」

あの場、と言うのは聞くまでもなくアクアマリンだろう。

「直前の記憶のみ欠落してたため、状況を把握すべく周囲のコア反応を探查しました。その結果、最も近かった反応が貴方にあつたため、合流したのです」

「・・・だが、今の俺は単独行動中だ。分隊に戻ろうとしてもお前の所属は分からねえぞ」

「構わないでしょう。私たちは私たちがすべきことをして、成すべきことを成すだけです。女王の復活と言う大願を掲げて、そこに至るまでの過程は特に重視されません。組織される隊も形だけのことで特に統制はされていません」

「それじゃあ何か? 必要と思うことをしているってだけなのか」

「そういうことになりますね。過去に人類と手を組んだ派閥も有つたようですが、我らが女王を崩御せしめたのは彼ら。手を取り合うなど女王への侮辱同然です」

「なるほどね」

話の端々から察するに、この少女もミナトやウエルクと同じ『超界者』だ。

しかし、どうやらコイツ。

もといた部隊から迷子になっているようだ。

超界者とは、彼らの女王を復活させるために俺と鈴の身を狙う

生きたISとでも言うべき存在。

その心臓はコアとして機能し、肉体はそのまま装甲として形を成す。

現在のISの基盤となった技術を持つ特殊生命体だ。

その超界者が、今、俺の後ろにいる。

さらに言えばどうやら人間に対しては対立的。

俺のことはどうも超界者と勘違いしているようだが、人間な上に攻撃対象だとバレたら速攻で銃口がお目見えするだろうよ。

サラ達の前では無口で通したのも数的不利を危惧して情報を与えないためだろう。

記憶がないから行動できない的なことも言ってたが、どうやら超界者達の作戦とは結構適当らしく、やりたいことをしてもいいって感じだ。

そう言うわけでどうしようかと迷ってたときに俺が現れたんでそのままついていこうって思ったのか。

・・・さてと、コイツの事情は分かったわけだがどうしたもんかな。

上手いこと自分のことを偽れたみたいだが、今の俺を「次の行動に向けて待機中の超界者」としたせいで、付いてくるっぽいぞ。この子。

接続してリストア同期的なことも言ってたが、接続なんてどうすればいいのか皆目見当もつかん。

ていうか、直したら直したで更にめんどくさいことになりそうだし止めとこう。

「そう言えば、名前はあるのか？ 俺の場合、必要だったんで自分でつけたが」

名前を聞いていないことに気がついて、適当に取り繕って聞いてみる。

「そうですね・・・」

考え込む辺り、持っていないんだろうな。名前。

ていうかコイツらって、名前すら持たずに女王女王言ってるのな。デユノアじゃないが、もつと気にすることあるだろ。

名前をつつたら第一に自分を定義するモンだぞ。

よく無しで生きていられるもんだ。

少女は周囲を見渡して何か名前になりそうなものを探している。釣られて視線を追っていると、窓の外で視線が止まった。

「……………」

窓の外の空を、食い入るように見つめている。

夏らしく、昼間の空には雲ひとつなく、青い空がどこまでも広がっている。

「……………安直に碧^{アオ}ってどうよ」

「——驚きました。貴方には思考を覗き見るプラグインでも積まれているのですか?」

「ねーよ。んなもん」

どうやら少女も同じように考えてたらしく、アオ、アオと繰り返して呟いている。

……………気に入ったみたいだな。

「それではアオは貴方と共に潜入状態での待機に入ります。カムフラージュのために人類における親族の設定を通した方が良くアオは判断しますが、どうしましょうか」

「要らないだろ。さつき話してたみたいに迷子設定を通してろ。搜索願なんて出てるわけないんだし、なあなあで此処に匿ってやるよ」

「そうですね。分かりました」

迷子設定を了承したらしく、そのままアオはぼけーっと外を眺め始めた。

……………思わぬ出会いをしちまったな、俺。

でも、俺がコイツを匿うのはアオに俺が女王のコアを持っていると悟らせない為だけじゃない。

逆に監視してやるんだ。超界者という存在を。

コイツと話してみてはつきりとわかった。

未だに、俺と鈴を狙う奴等はごまんという。

喧嘩なんかしてる場合じゃねえな。今後の身の振り方を考えないとだな。

そう言えば、と、俺は少し気になったことを聞いてみることにした。「なんであのプールで俺のことを兄呼ばわりしたんだ？ 取って付けたのか？」

「……そんなの決まってるじゃないですか」

そう言つて、アオは少し安心したように微笑んだ。まるで家族に会えた素朴な喜びを感じたように。

「超界者にとって、同族、仲間というのは兄弟かそれ以上の関係だからですよ」

接続の意味

「ちよつと出るぞ。付いてくるか？」

アオの名前が決まってからすぐ、俺は次の行動を考えた。

アオは超界者である。

今はその素性を隠し、俺と行動を共にする気みだいが、いつ俺の嘘がバレるとも限らない。

よつて俺はその嘘に協力者を付け加えることにした。

餅は餅屋。超界者には超界者を、だ。

職員室に行く前に、アオのことを知らせておこうと思って向かうのは毎度お馴染み第三アリーナ、旧射撃訓練場。言わずもがなミナトの住んでる部屋だ。

俺の誘いに無言で頷き、後ろをついて歩くアオは外の風景に強い興味を持っているらしく、アリーナに入った今も揺り鉢状の観客席を仰ぎ見ている。

コツンと足元に何かが当たったので見下ろしてみると・・・げ。どこのどいつか知らんが、でっかい空葉莢がゴロゴロ転がってやがる。

弾種だけでも数十種類あり、それらを一度に扱えるのはラフアー・リヴァイヴくらいなもんだ。

誰かが訓練機使ってから片付けしてないんだな。

俺はそれを蹴散らしながら地下階段へ急ぐのだが、背後から「ぐびゃ」という悲鳴が聞こえたので振り返れば、案の定アオが転んでいた。

その際、短いワンピースがM字に開かれた足のせいで大変なことになっていたが・・・つて、白っ！

転んだ拍子に捲れたスカート部分から覗く真っ白なアオの太股が目に見え込んで、俺は驚きのあまり思わずその場から飛び退いた。葉莢踏んづけて転びそうになっちまったよ。

だが、幸いにもその奥は見えていない。大丈夫だ。つーか幼女に興奮してどうする。

「おい、大丈夫か。競技用の第三アリーナでは珍しく散らかってるが、他じゃよくあることなんだ。蹴りながら歩けよ」

アオに手を差し出すと、その手を見たアオはキョトン。またもや首をかしげた。不可解そうな、意外そうなだ。

「何だよ。手を握るのがいやだっつてか」

「い、いやそういう訳じゃないんですが、アオには経験上初めての事だったのだから……」

「あー、どうすればいいか分からなかっただけか」

アオを引つ張り起こしながら納得する。

記憶が一部ないんだっけか。超界者には握手とかの風習は無いのかね。

だが、少しだが分かるぜその感情。

俺の場合、記憶はあるが、そのすべてが偽物だっつて言うんだから驚きだ。いやになるね。

「よし、アオ。一つだけ教えておいてやる」

「教える……？ ああ、接続ですか？ それなら後で……」

「違う。そうじゃない。耳で聞いて、頭で覚えろ。それが人つてもんだ」

「……私は人じゃないんですが」

「て、敵のことを知るのも重要なことだろッ」

いかん、早速疑われつつあるぞ。

俺は一つ咳払いするとアオに教えてやる。

「目の前の相手から手を差し出されたら取り敢えず握っとけ。握手つてやつだ。仲間や同族が大事だっつていうならそれが親愛の証になる」

「親愛、ですか？」

「そうだ。敵味方、皆仲良くつていうのは無理かもしれないが、せめて仲間内だけでもイザコザは無い方がいいだろう？」

「……そうですね。一つ一つが独立しているのがアオたちとは言え、互いに連携をとる必要も増えてきていますしコミュニケーションは大切かもしれませんね。新しい概念です」

現在進行形で仲違いしている俺の言葉に、アオはウンウン頷いてい

る。

いや、別に連携の話じゃないんだけどなあ……まあいいや。理屈は通ってるんだし。

その後、どうしてかは知らんが、急にアオからの質問が増えた。

「この施設は？」「戦闘訓練所だ」「どうして楕円形に？」「しらん、設計者に聞け」「そういえば貴方の名前は？」「クレハだ」「どうして男性体である貴方が作戦に？」「男女差別はよした方がいいぜ」……などなど。

気がつけば聞かれるままに答えてやる状態になっており、アオの質問攻めはミナトの部屋の前にたどり着くまで続いた。

「おい、ミナト。入るぞ」

前に入ったときは蹴破った扉を丁寧に押し開ける。

「クレハさん……と、そちらの人はどなたですか」

部屋の中ではミナトが重火器の手入れを行っていた。

拡げられたブルーシートの中央にちよこんと座っているミナトの回りには、バラバラにされた各種兵装がピカピカに磨かれて並べられていた。

「あー、今日はちよつとこの子の用事で来たんだ。超^{アッ}界者^チ絡^ミみだ」

「超^{アッ}界者……ですか」

油を塗布するために使っていた布巾を折り畳んだミナトは、右目前にホログラフウィンドウを表示し、それ越しにアオを眺めた。

人見知りの性格をしているのか、アオが俺の背後に少しだけ隠れる。

それを見たミナトが……なぜか、不機嫌そうに眉を寄せた。微妙に。

何だろうか、あの目。

普段なら「ビットたりとも情報を発さないミナトの瞳が「アタイのモノに触るんじゃないよ」的に怒ってる気がする。

何で俺が所有物扱いになってんだ、と此方からも視線で返すと、っーん。いつもの無表情に戻ってそっぽ向きやがった。反論すらさせてくれないんだな……。

「確かにその少女の体内からエネルギー反応が見られます。どういった事情ですか」

「お前と同じだ。もともといた部隊とは別行動中らしい」

俺はミナトに「話を合わせろ」とまばたきで和文モールズを送る。

訳すのに手間取っているのか、しばらく返答がなく――

「分かりました。つまり私の時と同様に身分偽装のために一枚噛め、と言うことですか」

「話が早くて助かる。やってくれるか」

「問題はありません」

よし、ミナトの協力は取れた。

適当に名前と設定をミナトに伝えようと、ミナトはこの場ですぐに戸籍情報の上書きを始めた。

去年の入学の際、不測の事態に備えて東さんに架空の戸籍を幾つか作って貰ってたらしい。

「そう言えばクレハさん、風さんと喧嘩されたそうですね」

キーボードを叩きながらミナトが言ってきた。

「・・・ん、ちよつとあつてな。部屋にも帰ってこないんだ」

射撃のレーンを弄くっているアオを放って、自分も適当にその辺にあつた銃器を手取る。

IS用に一回り大きくグリップが作られたこのハンドガン、『シユタイナー』は、44口径マグナム、S&WのM29をモデルに設計されたリボルバータイプで、なんと一般的な大きさの銃弾がそのままコレにも使える。その流通のよさからテロやゲリラで使用される野良ISの代表的な拳銃と言うことで知られている武器だ。

さらに特筆すべき点といえば、この拳銃はバレル内部にレールガン機構を備えており、一般的なサイズの銃弾でもISに対抗しうる威力が出るという点だ。言ってしまうえばラウラのIS、シユヴァルツェア・レーゲンの大型レールカノンの縮小版みたいな感じだ。・・・こんなゲテモンまであんのかよここは。

「まあ、彼女の性格から考えるにすぐに仲直りとは行かないでしょう」「だよなー。俺もちよつと焦ってるんだが、居場所に心当たりが無い

んだ。なにか知らないか」

「手持ち無沙汰を埋めるためにガチャガチャ弄つてると・・・うおつ。シンリンダー出てきた。」

「クレハさんが知らないことを私が知り得るわけがありません。・・・ですが——」

「ですが？」

「そう聞き返すと、チラツとこつちを見たミナトが一つウィンドウを滑らせてきた。」

「真意が読めず眉を寄せ、それを見てみると・・・なんだこれ、学校の上空写真か。」

「——最近の学園の様子です」

「見りやわかる。コレがなんだよ？」

「普通に見ても異常は見られませんが、こうすると・・・」

ミナトが一つキーを叩くと、画面が切り替わる。

「あまり変化が内容に見えるが、よく見ると島を囲むように赤い線が僅かに見える。」

「まるで何かの残留物のように僅かな反応を示すそれは、まるで戦場に置ける防衛線を彷彿とさせた。」

「——そのラインはシールドエネルギーの残滓です。今年の夏休みに入ってから島の周囲を覆っていました。今はもう用済みなのか反応が薄れていますが、この夏休みの間に何かの細工がされていたのは間違いありません」

「ミナトが予想立てた反応の変化を辿っていくと・・・なるほど、丁度夏休みに入った日にシールドが展開された計算になる。」

「細工についてなにか調べてみたのか？」

「はい。ですが今のところ何も異常はありません。その彼女に関係するとしてもシールド・・・いえ、あえて結果と言いますが、これが張られた時期は8月初旬。関係性があるとは考えにくいです」

「ミナトはそう言いながら整備の終わった『サイレント・スコール』をスチャツと構え、その照準を静かにアオに向けた。スコープに当てた右目でチラツと俺を見たミナトからは「・・・排除できますか？」と

いう雰囲気を感じられた。

流石に速攻で撃つことはないだろうと鷹を括っていた俺も、ミナトの分かりやすい敵意には内心驚き——

「おいおい、待て、やめろ。超界者^{お前}は只でさえ数が減ってるんだろ？無害なやつを撃つ必要はないだろ」

——アオに気づかれないうちにそつと銃身を上から押さえる。

その対応にミナトは一瞬眉を寄せつつ、

「……ウエルク・ウエルキンの時のように何か考えがあるのですか？」

「いや、アオが本当に敵として俺の前に立つならその時はホントに剣でも交えるさ。ただ、今はなにもしない。十分な警戒を払いつつ、超界者つてもものを観察するんだ。弱点の一つや二つくらいなら拾えるかもしれないだろ？」

「……超界者という存在自体に綻びがあるなら超界者^{わたし}が始めに挙げると思うのですが」

「……」

ミナトの呟きに一瞬ウツとなったが、一度決めた方針は貫くぞ。別にミナトの発言に意地になってる訳じゃない。

「とにかく、暫くは様子見だ。俺はアオを見張るからミナトは学園島に何か異常があればすぐに報告しろ。取り敢えずは夏休みいっぱいだ。——それと、千冬さんや束さんにはこの事を秘密にしとけ。あの二人結構嘘つけないタイプだからな」

早口でそう巻き上げる俺をシラーつと見つつのミナトが、「……了解」と呟くのを確認した俺はアリーナを後にする。

さて、次は職員室———と思ったが、よく考えれば迷子だ、といったところで学園で保護できないのは自明の理。アホか俺は。

迷子つつつて報告しても警察に保護されて終わりだし、とすると部屋で密かに匿うしかないのだが……丁度いい。鈴は暫く帰ってこないだろうし、超界者と接触することで鈴の脳内に刻み込まれた『女王の心』が変な反応を示さんとも限らない。

いつかは説明しなければならぬと思うが、取り敢えず今は鈴がい

ないこの状況を有効活用させてもらおう。

アリーナを出た俺たちはそのまま部屋には戻らずに、島外に脚を運んだ。

理由はもちろん生活必需品の調達である。

アオの持ち物といえばワンピース一着に下着のみ。

下着について尚も言及しちやえば、昨日から付けっぱなしの状態であって、衛生上も宜しくない。

しかも上の方は着けてらっしゃらないというデンジャラスな出で立ちだったので俺は早急に決断を下し、幼女連れて台場のアクアシティに行くことにした、と言うわけだ。着の身着のまま過ぎますよアオさん……。

学園島から直で行ける青海駅に降り立ち、バスで移動している最中のアオはまるで普通の子供のようだった。

ダイバーシティの横を通過する際にちよつとだけ見えた実物大ガンダム像が気になったらしく、なんとアオはそのままダイバーシティでバスを降り、ガンダムを見に行くと言ってきたのだ。

しょうがないから俺も連れ添って下車して、いまだに人気のあるガンダム像をアオと一緒に見てやった。

タイミングよくガンダムが光ったりしてくれただからアオは大喜びで満足してくれたみたいだよ。

一通りガンダムを満喫したので、午後の散歩がてらフジテレビの横を歩いてアクアシティに向かう。

潮風に白髪を靡かせながら、家族で遊びに来ているらしい同年代の女の子とゴキゲンで手を振り合ったアオは新鮮味に溢れた体験ができてご満悦のようだ。

「……そんなに楽しいか？」

「はいっ、待機任務中だと言うことを忘れてしまいそうなほどに刺激的な体験が来ています！ あっ、見てくださいモノレールですよ！」

はー、今時珍しいくらい感受性豊かな子だなあ……。

アオのハツラツぶりに、「さつき乗ってきただろ」と言えない俺は財

布からカードを取り出してアオに渡す。

「・・・これは？」

「二応、二万円分使えるように設定してるが必要なと言ってくれればもう少し出す。それを資金に必要なもの買ってこいよ」

「・・・？」

アオが気兼ねしないようにお小遣い気分でも渡してみたんだが、アオに渡したあのカードはプリペイドカード。

俺がこなした仕事の報酬が入ってる口座には、この間の福音事件並びに双龍事件の解決報酬が十二分に振り込まれていたもので、学園を出る前に今日の活動費に、と作っておいたのだ。

贅沢する気はないが、今の俺に一万や二万は軽い軽い。

だが、察するにアオはそのカードが何なのか分かっていない様子。

くるくる回して下から覗き込んだり、太陽にかざしてみたり、二つに割ろうと——おいおい。

「資金だよ資金。任務には必要経費が付き物だろ」

「資金、ですか？」

「そうだよ。買いたいものレジに持って行って電子処理機に押し付ければ、それで決済されるから心配するな」

「ほ、本当ですかそれは！ 凄いです！ カードでお買い物なんて！

普通のお買い物だって未体験なのですよ!？」

アオはそういつてキラキラした目でカードを見つめる。

そのはしゃぎっぷりに少しこそばゆい気分になった俺は、

「あー、わかったらさっさと行ってこい。俺はここで座ってるから」
そばの段差に腰かけて、さっさと行ってこいと促す。

だが、アオは俺がついてくるものと思ってるらしく・・・。

「え？ 一緒には来ないのですか？」

なんて言ってくる。

「・・・いくわけないだろ。見た目10歳くらいの女児の買い物に付き合う高校生なんざ、いまの日本から見りゃ即職務質問してくらいにアヤシイんだよ。アオは確りしてるみたいだし、一人でも大丈夫だろ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・うう、すげえ分かりやすくしょぼんとされてる。心なしか白い髪の毛までふにやりとしぼんでる気がする。でも実際マズイのだ。」

「今は夏休みでショッピングモールや何やらに人が集まる昼下がりで。まず、間違いなく学園の生徒に出くわす。」

「国際的な学校という雰囲気ので誤解されがちだが、IS学園の生徒の約七割は日本国籍を持つ生徒なのだ。」

「もちろんここ、東京を地元とするやつもいるし、普段から此処にきているという女子もクラスメイトに六人ほど居ることを俺は知っている。」

「もしそいつらに、アオと一緒に女物の子供服を物色している所を見られたらしよう。」

「アオはちっこい上にちっこいゆえの可愛さを備えている、見る人が見れば一発で誘拐さらわれちゃうような子供だ。」

「間違いなく誤解されて、俺の立場はさらに危ういものと成るだろう・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・」

「————だが、アオの瞳は「一緒に来てほしい」と無言の訴えを放っている。」

「コイツ、ガキのくせに高校生の保護欲を煽るとはナマイキだな。そんな目で見られたら拒絶することも出来ん・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・」

「あー、もう。畜生。ズルいだろそれ。」

「・・・・・・・・・・道案内くらいは年上が担当すべきだな」

「俺はそうぼやいて立ち上がる。」

「ほら、行こうぜ。誘っておいでなんだが、ほしい服とかがあってあるのか？」

「店選びの参考とするためにアオの趣味的なものを聞き出そうとしたんだが、俺と一緒に来る流れになったからか、アオは満面の笑みを浮かべるだけで答えてくれない。」

あー、腕にくつつくな。身長差で歩きにくいんだよ。

@
店選び？

よくよく考えれば俺が女物の服を売ってる店なんてチエックしている訳もなく、ウインドウショッピングという方向性に決まった。

だが、当初俺はアオが迷子にならないための目つけ役か何かだと思っていたんだが、

「クレハっ！　これなんてどうですか？」

そう言つてハンガーに掛かった服を自分の肩に宛がうアオ。

初めに着てた清楚なワンピースも中々の物だったが、今手にしているポップでガリーな感じの服も、澆刺としている今のアオに似合つていて申し分ない。

「ん、まあ。良いんじゃないのか？」

生返事を返した俺に、アオはちよつと不満顔。

いや、だつてねえ……。

俺は店先に掲げられた店舗名を見上げる。

……ここ、俺でも名前知ってるくらいに有名なブランド店なんですけど……。

確か原宿にも同じ店があつたぞ。

気になつて手近な値札をくるつと見てみると……げ。秋物なのか店頭のマネキンに掛けられた薄手のコートの値段が四万弱つて……。金が吹っ飛ぶぞ。

しかし、アオはアオでちゃんと値札を見て購入を検討している。

今ある限度額が二万円と言うこともあつてか、気に入つたと見られる服の値段を見てそつとハンガーラックに戻してる。

ごめんな、買ってやれなくて。

しばらくすると買い物のコツを分かつてきたのか、アオは安い店を狙つて買うという所帯染みた買い物テクを身に付け始めた。

すると貯まるわ貯まるわ紙袋が。

複雑な構造の建物も大体覚えたのか、俺が教えなくても一人で歩いていく。

ノイタミナショップの前を通ったときは怪訝そうに顔をしかめたけどな。

「はー、疲れましたあ」

どっかりと腰を下ろすアオ。つっても地面に足ついてないけどな。アクアシティで一通り買い物を終えた俺たちは屋外に出て、自由の女神像のミニチュアが眺められる展望デッキのベンチに座った。

俺のとなりに座ったアオは買った物の袋を眺めてニコニコしながら、新品の女の子っぽいスニーカーを履いた足をぶらぶらさせている。

・・・幸運にも、知り合いには会わなかったな。ひと安心だ。

ただ、行く先々の店員さんからは兄弟見たいに見られて凄くむず痒かったけどな。義妹なら別にいるんで。

これからどうすつかなあーと悩んでいると、アオがこつちを見ていることに気がついた。

「・・・随分と楽しそうだったな」

「当然です。初めて見るのにも初めて体験すること。楽しまずに居られましょうか！ それに、クレハも一緒に来てくれたので、尚楽しかったですー！」

「そいつは良かったな」

そう返して、スタバのコーヒーを口につける俺。

ちよつとぞんざいすぎたかな？と思つてると、案の定アオは少しご機嫌を損ねた様子だ。

・・・折角楽しんだのに、機嫌損ねるのもアレだな。

俺にしては珍しく、ちよつと気を利かせてやろう。

「よし、アオ。学校に帰るぞ」

「分かりました」

ちよつと疲れた様子のアオが立ち上がって歩き出す。

俺はその背後からアオの胴を掴み、頭の上に持ち上げる。

「きゃ、ギャーっ！」

「う、うおっ、案外キツいなこれっ！」

突然のことで驚いたアオが頭上で暴れたが、俺は何とか体勢を保

ち、アオを肩車する。

転けたら格好付かないだろうからな。

「——ッ……って、え？」

落ち着きを取り戻したアオが頭の上で何かに気づいたように呆ける。

……時間的には危ないかと思ったが、大丈夫だったみたいだな。

アオの目線の先にあるのは西の空。

丁度、東京のビル群の向こうに太陽が落ちようとしていた。

「……キレイ、ですね」

「だろ？」

アオよりも低い位置からその光景を見ながら、俺は言った。

アオは超界者だ。

自分達の女王を甦らせる為にこの世に現れ、破壊する正体不明の生命体。

だけど、コイツらはなんの因果か人の形を取っている。

それがどういう事なのか、俺の頭では考えられないが、少なくともアオやミナトと言った超界者たちはこの世界にたいして攻撃的な感情以外の感情を向けることが出来る。

今日を振り返ってみても、困惑や安心、喜びや不満と、様々な感情をアオは見せた。

だから、知ってもらいたかった。この世界を、人を。

果たしてこの意図がどこまで伝わってるかは知らんが、取り敢えず今日はやれることをやりおえた。

「よし、帰って晩飯食べようぜ」

「——ですね」

そう言って俺の頭を細い腕で抱えるアオ。

歩き出した俺の頭の上にいるアオは凄く優しい笑顔を浮かべていた。

@

人の少なかつた昼とは違って、夜になると相応に食堂を利用する生徒が多くなる。

だから俺はアオの事を尋ねてくる女子たちに「先生に言ったら殴るぞ」と脅して口を封じた後、昼間同様に一つのうどんを二人で分けて食べた。同じ釜の飯を食うとか言うし、なかなか信頼されてきた感じだ。

飯をくって部屋に戻った後、アオは

「接続のために身体を洗浄します」

なんて意味わからんことを言ってその場でワンピースを脱ぎ捨てかけた。ので、

「服は風呂場で脱ぐもんなんだよ」

——と言ってシャワールームに押し込んだから現在部屋には俺だけの状態だ。と言っても隣から水音が聞こえるが、鈴のお陰で慣れたもんだよ。

暇潰しにチャンネルをくるくる回すんだが、日曜洋画劇場も今週はやつてないみたいだしで非常に暇だ。

ISの簡易メンテナンスでもしようかと思つてパソコンを立ち上げたんだが、いつの間にか全く関係ないサイトを観たりしていた。

いつそ今のうちに例のアレを確認しておくか、とサラに教えられたサイトを一通りチェックしてメモを取り終わるといよいよする事が無くなった。

まだ夏休みだし、久しぶりに早寝するのも一興か。

そう思つた俺は、今日は大浴場が男子の日だったことを思い出して、ひとつ風呂浴びに大浴場に向かう。

前回内緒で使つたときとは違って凄いやつくりできて良かったよ。

身体の疲れも取れて、今ならセシリアにも勝てるんじゃないの？つてくらいに回復した俺が意気揚々と部屋に戻ると・・・あれ、電気が消えてる。

常夜灯は点いていたので、アオが先に寝たのかな？　と思ひながらベッドを見ると確かに窓側のベッドではアオが静かに眠っている。

折角眠ってるんだし、俺が騒音を出して起こすのも忍びなかつたの

で、アオ同様に大人しくパジャマに着替えてベッドに潜り込む。

いい加減、鈴の居場所も突き止めて合流しなくちやならんし、ミナトの言ってたシールドエネルギーの残留反応も気になる。アオの事だつて気にかける必要がある。

(ぜんっぜん休まらねえ夏休みだなあ・・・)

襲ってきた眠気を受け入れるように大あくびをぶちかますと、モゾモゾ。

隣のベッドから、身をおこす音がした後、

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・なんか、アオが無言でこっちの布団に手をかけた。

「まてまてまて、なんでこっちに移ってこようとする？ そっちで寝ればいいだろ！」

「？ 接続するために、そっちにしようとしてるだけですよ？」

そう言いながらアオは・・・プチ、プチ。

今日買ったばかりのチェック柄のピンクいパジャマのボタンをはずし始めてる！ なんて!?

ね、寝てると思ってたが、狸寝入りだったわけか・・・!

「せ、接続って、なんの話だ!」

「昼間に言ったじゃないですか、アオのデータベースには異常があつてここ数日間の情報が無いので接続して再構築リストラして欲しい、と。忘れたんですか？」

アオは咎めるような目をした後、俺が布団の端を押さえているので潜り込めないと判断したのか、うつ、上に乗ってきたぞ・・・!!

なんだ、何が起こっている。さつきはセシリアにもリベンジ出来るかとも思ってたが、いきなりアオに組み敷かれてるんだけど!?

動揺している俺をよそに、アオはどうやってかは知らないが、動くために力を入れる要所要所を布団の上からでも的確に抑え、身動きを取れなくしてくる。

ちっこいアオは俺との身長差のせい、自分の足で俺の足を抑えているため、胸に顔を埋めるようにして俺の上になぞべってくる。

夜の時間帯のIS学園ではお馴染みである女子特有の風呂上がり

の香り。

鈴の使ってるシャンプーとは別に、アオ自身の体臭であると推測される若草の爽やかな香りが鼻先をくすぐり、アオの存在をより近くに感じさせる。

ああ、変な分析をしてる間にも両手まで固定された・・・っ！

「では先ず、口腔内粘膜から・・・」

アオはそう言っただけで赤くなった頬を隠すためか、伏し目がちに俺を見つめ、

「――！」

キス、をしてきた。

身長差を補うために精一杯背伸びしているアオ。

――はあ・・という甘い吐息を交えながら唇を離れたアオは、赤らんだ頬を隠そうともせず、先程より堂々としている雰囲気がある。俺はというと、いきなりのことだったからか、余り胸の高鳴りは感じない。今の段階では困惑の方が勝っているようだ。

「――接続には粘膜接触が一番効率が良いのでまずは口腔内粘膜から、と思ったのですが失敗のようです」

そりやそうだろうな。唇を合わせただけでは粘膜接触をしたとは言えない。

どうもちよつとませてる性分をしていたみたいだが、これ以上好きにさせるわけにはいかないッ――なんて思っていたら。

「――もう一度行きます」

再びのキス。

しかし、今度のは違った。

アオは俺の抵抗を押しきり、その小さい舌を絡めて、より深く、激しく俺と繋がろうとしてくる。

俺の後頭部が枕に埋まるほど、強く押し付けられるアオの唇。

比べるのはどうなんだ、と言われてしまいそうだが、あの瀕死の鈴の唇よりも温かく、柔らかい。

美人の卵。美しい貌かおと艶やかな白髪を持つアオの唇が俺に押し付けられている。

そう実感してしまったのが失敗だった。いや、実感するしかないだろうなこれは。

鼻梁の通った白く、美しい顔が俺の目の前にある。閉じられた目を縁取る睫毛、形のいい眉。さらさらの髪。

その全てが、俺の手の届くところにある。

手が動かせないのがもどかしい。思わずそう思ってしまった所で

ドグン

——来たぞ。胸の痛みが。

心臓の一拍一拍が手に取るように分かり、視野が狭まっていく。

今回ののは、あれだ。間違いなくセシリアパターンだな。アオが気に入ったかエリナ。

ぷは、と唇を離したアオ。

「はっ、はっ……また、しっばいみたいですね……」

荒くした呼吸を落ち着かせながら、垂れた唾液の糸を拭いながら呂律の回っていない台詞を口にする。

失敗、つまりは次がある。

アオの言っていた接続は、人体の粘膜を接触させることで成立する行為らしく……つて、まずいだろこの流れ。いやもう詰んでるかもしれないがとにかく——

——人体において接触させられる粘膜組織は二ヶ所しかないんだぞっ！

「おい、待てっ！ 次はダメだ！ 本気でマズイ！」

「？ どうしてですか？」

その二ヶ所を知っているであろうアオはその事実にもノーリアクション。

ダメだ……そう言うことに対する観念が違いすぎる！ これが超界者か!?

いい加減、胸が痛い。苦しくて息が荒くなる。もうなんでもいい……とは言わないがどうかして切り抜けねば。

俺がただ汗をかいて二の句を探していると……

「ああ、怖いのですねクレハは。心配ないですよ。初めては誰だつて怖いものです。事実、私だって初めてに恐怖を感じています。ですが、相手がクレハなら安心して臨めます——」

なんて、アオは怖くなんてありません風に俺を諭してくる。

そしてアオは俺の腕をまとめて、片手で抑えようと、空いたもう一方の腕で俺の上から布団を剥ぐ。

おい、頼むから下半身の布団までは剥いでくれるな。見られたが最後俺は死ぬぞ。

布団を剥いで、露になった上半身のパジャマのボタンを外したアオは同じように自分のボタンも遂に外しきった。

露になったのはライムグリーンの下着に包まれた慎ましやかな胸。

畜生、小学生程度の体躯のクセにちゃんとありやがるぞ……！

「では、次は下に……」

俺の願い虚しく、アオの視線が自分が跨がっている部分に向けられた。いやいよ限界だ。もう何の動悸かは分からないが激しく脈打つ心臓。

そして、アオの手が布団の下の下に潜り込みかけたその時——

—— Bシステム、起動します。

—— エラー。対象のコアとネットワークを構築出来ません。対象のコア識別……不可

珍しく、瞬龍がエラーを吐き出した。

だが、しっかりとBシステムは起動してくれたので……

「——アオ。少し俺の話聞いてくれ」

右腕の指先に展開したキーボードでエラーをチェックしつつ、時間を稼ぐ。

「なんですか？」

「アオはこの学校での経験が浅い、言わば新入生だ。だから、先輩が一つ教育しようと思うんだ」

「教育、ですか……？」

よし、良いぞ。興味を持ったのか、アオの意識がこつちに向いた。熱に冒された様に赤い顔だが、話は聞いてくれそうだ。

「ああ。教育だ。——一つ、地理の勉強だ。この世界には多種多様な文化があり、それぞれがそれぞれの特徴的な文化を発展させてきたんだ。さつきやった接続方法の一種、口腔内接触にも文化によって様々な意味を持つ」

「……自分で言ってるんだが、凄い雲行きが怪しいぞ。この勉強会。」

「——我々にとっては自分を保つための重要なプロセス。もしくは女王のみが行える種の繁栄という意味を持っています」

「——確かにそうかもしれない。だが、俺もこつちの暮らしが長くなったんでね。郷に入りては郷に従え。こつちの世界での意味の方が情熱的で美しい。俺はそう思うんだ」

アオの気を引きながらさっきのエラーの詳細を確認する。対象となったコアは間違いなくアオの心臓だ。だが、なぜセシリアのブルーティアーズよりも、素材的な意味での親和性が高いであろうアオのコアが弾かれたのか、俺はそれが気になる。

「い、一体何なのですか、こちらの意味は……？」

これは、賭けだ。

うまくいけば俺を信頼しているアオを傷つけずに済み、失敗すればきつとアオを傷つける。

アオはまだ幼い。口ぶりは大人びていても中身は見た目相応だ。

子供の手は大人が引いてやらねばならない。

それに、きつとこの言葉はアオを含めた超界者全員に理解できるだろう。彼らは仲間意識の強い、お互いを想える人たちなのだから。

「——あなたを、愛している」

——そう、言い切った次の瞬間——ぼんっ！

俺の言葉を理解したらしいアオが爆発したように身体を揺らした。って、マジで爆発したんじゃないだろうな。頭から湯気出てるぞ。

「あつ、あ、あ、あああ、あい!? 愛!? そ、そんな積極的な意味だつ

たのですかツツツ!？」

マシンガンのように「あ」を連呼したアオは、フラフラく、ドテン。ゆらゆら上体を揺らしたあとベッドから転げ落ちちゃったよ。どんだけ動揺してんの。

「そ、そんなまさか・・・アオはもうそんな事まで・・・!?」

自由になった両腕ではだけたパジャマを正すと、俺は極力見ないようにして、呆然としているアオのパジャマも直してやる。

・・・どこまで重要な意味を持つ言葉か分からなかったが、予想以上の効果だなこれ。

「う、ううう。でもアオは、アオはただの一兵士ですし、そんな女王の領域を犯す事なんて・・・ッ!」

未だ、動揺のアリ地獄から抜け出せないアオを見てると、なんか、こう。やっちゃった感あるな。言うなればアオが大事に大事に取っておいた物を無理やり奪っちゃった感じ。

続けて、挨拶程度の意味も含むって言おうと思ってたんだけど、言っても意味無さそうだしなあ・・・。

アオの変化にすっかり落ち着きを取り戻した俺は目をグルグルさせているアオの前に座る。

Bシステムも止まったみたいだし、どうしようかな。

「・・・まあ、さっきの言葉の意味については一晩ゆつくり考えてみるよ」

フォローに詰まった俺は伝家の宝刀、現状維持を抜刀と同時に降り下ろす。

よし、寝よう。あとは明日考える。

アオはアオでマジで何事か考え込んでるらしく、ぷしゅーと知恵熱まで出しちゃってる。

ベッドに寝かせて、はい終わりく。

明日からは鈴の足取りも掴まないといけないからハードな日々になるぞ。

今のうちにしっかりと寝溜めしておこうかな!

襲撃

翌日になると、隣のベッドからアオが消えていた。

昨日買ってやったスニーカーもないところを見ると、自分の脚でどこかに行ったみたいだが、その場所にまで心当たりはない。

着替えをしながら携帯を開いてみると——メールの着信が一着。デユノアからだ。

『お早うクレハ。シャルロットだよ。今朝起きてみたらあの子がボクの部屋を訪ねてきたんだけど、何かあった?』

どうやらアオは唯一の顔馴染みと言えるデユノアの部屋に逃げたみたいだ。

まあ、昨日あんなに取り乱したんだ。

暫く顔は合わせツライよな……。

悪いがしばらく任せる、アオって呼んでやってくれ。というメールを返信して、着替えを済ませると朝一番にミナトの元へ向かう。

アオが居ない内に出来ることをやつとかないな。

アリーナの階段をたんと下り、ミナトの部屋の前に立つ。

「おーい、ミナト起き——」

「——ているので大声は控えてもらえますか?」

ドンドン扉を叩くと、それを制するかのようにな機嫌そうにミナトが現れた。

多分、寝起きなのだろう。青い丸首のTシャツに枕を抱えているという、とつても分かりやすい寝起き姿だった。

というかお前、それ下穿いてるよな……?」

「それで、私に用事みたいですが……ああ、例のシールドの件なら今のところ報告出来ることはありませんよ。エネルギータイプから機体のコアを算出しているところですが学園に登録してあるコアではないらしく、容易にはいきませんので」

「お、おう……なんか、機嫌悪そうだな?」

いつも以上に口数の多いミナトは少し不安になるほど怖いオーラを放っていたので、こわごわ聞いてみると……。

「すみません。私、寝起きが悪い方なので朝は少し印象と違うかもしれません」

「あー、低血圧か、お前」

「そんなところですよ。朝食を摂り終える頃には覚醒すると思われるので、その時まで待つていただければ普通に話せますが?」

そうやってシャツの下からシリアルの袋を取り出すミナト。

その際シャツの裾が際どいところまで捲れ上がったので視線を逸らす。

袋を取り出したミナトは「牛乳もちやんとあります」なんて、ポイポイ牛乳やら深皿やらスプーンやらを取り出すんだが……なにそのシャツ、四次元ポケット? ていうか渡された牛乳、なんか生暖かいんだけど……。

「って、朝食? これがか?」

「はい。今は夏期休業中なので訓練もありませんし、これで十分かと」
……そう言えばミナトは束さんが密かに送り込んだ俺を監視するための работник。正規の手続きを踏んでいないため予算に関してミナトに割く分が無いのは俺と同じなのか。

そう言えばたまに俺の仕事に付いてくるし、食堂で飯食うのも俺が奢るときだけだし、コイツはコイツで苦労してるんだなあ……。

そう考えると今の状態が可哀想に思えてきたな。束さんに捕まったのが運の尽きとは言え、俺を監視するためだけに極貧生活を強いるのも目覚めが良くない。

「十分って、まさか今までこれしか食ってないとか言うなよ? あんまり朝食を食べない俺が言うのも何だが、食生活はキチツとしろよ」
そういった瞬間、不自然な疼きが頭に走ったが、それは一瞬のこと。血糖値下がって身体に影響でも出たのかね。

俺が注意するとミナトは途端にシリアルの素晴らしさについてペラペラ語り始めてしまった。

穀物の組み合わせがどうの、鉄分やミネラル分がどうのとよくもまあ口が回るものだと感じ始めていたが、それを長々と聞かされれば段々とウザいと思うようになってくる。

「わかった、分かったから語るのを止めろっ。あとそのアメコミ調のトラの絵のある箱を押し付けるな! —— そうだ分かったぞ腹減ってるんだな!? そうなんだな!」

頭ひとつぶん小さいミナトがグイグイとケロツグ・コーンフレークの箱（今どき珍しい・・・）を押し付けてくるので押さえつける。

「——とりあえず、今のところ目立った変化は無いんだな?」

「はい、ありませんよ。クレハさんが小さい女の子を連れて校内を闊歩しているというネタが新聞部に取り上げられたこと以外には。そういう日は彼女の姿が見えませんが、どこに?」

「アオならデュノアの部屋に行って寝てる。ちよつとゴキゲンななめみたいだ」

接続云々は超界者であるミナトには言わない方が良いと思っではぐらかしたが、ミナトは目ざとく勘ぐってきやがった。

「……昨日の晩、何かあったんですか?」

「いっ……いや、何も無いぞ? 朝起きたら既にアオは居なかったんだぜ?」

「……そうですか」

そう呟くとミナトはキロツと俺の口許を一瞥し、

「……先も述べた通り、今のところ異常は認められません。島を覆っていたエネルギー自体が異常とも言えますが影響が計り知れない分、迂闊なことはいない方が良いでしょう。学園側でもエネルギーの残留反応を観測した動きがあります。そちらも合わせて報告するように努めますが、クレハさんの方でも何かあれば言ってください」

そつぽを向いて言いながら、何かを渡してきた。

……何これ。新聞?

開いてみて分かったが、どうやらこれ、新聞部発行の校内新聞だぞ。

本日の一面を確認してみると、その見出しは……「最悪のロリコン現る! 柊クレハのただれた昼下がりに!」……とあり、昨日の昼食後に昼寝をしたあの風景が写真に収められていて、でかでかと載っていた。

……。

……ふう。

まあ、黛に拳骨ぐらい喰らわせとこうかね。

俺は新聞を畳ながらそう思った。

@

二学期分の生活費を学園に渡すため職員室を訪れた俺は、千冬さんを始めとした教師数人が物々しい雰囲気醸しながら何やら話している現場に遭遇した。って、なんだあの着ぐるみ女。

狐みたいな着ぐるみ、いやパジャマか？ を着た少女が先生に囲まれて忙しくキーボードを打っていた。

近いとこにいた千冬さんに振り込みの件を伝える。

「ああ、食堂費ならいつもの金庫に入れておくように」

俺に構っている暇は無いとばかりに早口で捲し立てられた。

几帳面なこの人が金の扱いをぞんざいに行っているのだからそれなりの問題なんだろう。

さっさと規定の金額を入れた茶封筒を金庫に仕舞い、関わるまいと退出しようと思ったのだが、

「うえええん！ ムリだよ！ こんなので！」

背後から特徴的な声が聞こえてきたので止まらざるを得なかった。

振り向けば、キャスター付きの椅子でくるくる回転しながら頭を抱えている狐女の姿。

今の声で分かったぞ。あの女、この間一夏と一緒に食堂に入ってきた奴だ。

名前、何て言ったっけ？ 確か……のほほんさん？ そうだ、全身寝装とかって言った俺。

自身が懊悩する姿を俺に遠巻きに見られていた事に気づいたのほほんさんは、突然見た目にそぐわぬ速度で俺に突進してきた。

「せーんぱい！ 助けて！ もう指先が疲れたよ！」

思いつきり腹部に頭突きを喰らった俺は「ぐふっ」と変な声を上げつつも倒れないように踏ん張る。てめえ、何か食ってたら間違いなくゲロってたぞ。今。

危うく後輩女子に胃液を浴びせそうになった俺に対する労りの姿

勢は皆無で、スルツと背後に隠れるのほほんさん。

そんな彼女を追うように教師陣が俺に視線を向けてきた。

「あー、えーと俺これからやることあるんだが・・・」

「ん！ ん！」

腰のベルトをダブ袖でガツチリ掴んだのほほんさんは、逃がすまいと口をへの字にして訴えてくる。

いや、でもな？ 俺だって都合があるんだし、こんな面倒ごとはごめん被りたいわけで・・・。

ていうか、ほとんどの初対面の先輩にここまで食いつけるのほほんさんの気軽さが凄い。

「布仏さん。私だって寝てないんですから頑張ってください！」

のほほんさんの対面のデスクで同じようにキーボードを叩いている山田先生が死んだような顔で、「さっさと仕事しろ」的に激を飛ばす。

そんな山田先生の言葉にたいして、ただ俺の後ろで首を振るのほほんさん。なんか狐っぽいのか猫っぽいのか、わかんないなこれ。

まあ、なんだ。こんだけ切羽詰まった状況にスルー決め込むわけにもいかないし、第一このままではのほほんさんがベルトを放してくれそうにない。

それに、鈴の所在についても先生に尋ねたほうが手っ取り早いだろうから、取り敢えず話くらいは聞いてみるべきかもしれない。

ベルトを放すように言っても涙目で首を振るだけなので、のほほんさんを引きずってデスクに近づく。

「一体何について話してるんですか？ 山田先生が死にそうなんですけど」

「教師相手に死にそうなんて言うな柀・・・。整備科でもないお前に解決出来るとは思えんが、ちよつと覗いてみる」

そうやってディスプレイを顎で示す千冬さん。

大倭先生が見ているディスプレイを隣から覗きこんでみる。

「・・・打鉄うちがねですか？ 訓練機？」

画面に表示されていたのはISのDNAとも言うべきデータ、フラ

グメントマップだ。

ISは、自己進化をプログラムされていて、搭乗者の戦闘データを元に独特のフラグメントマップ、つまり進化の軌跡を構築する。

「え、柊くんなんで分かったの!?!」

なんか、大倭先生に驚かれた。

しかし俺も一応マップを見て、機体を大別出来るほどの知識はあるが、それだけでは何が問題なのか分からんぞ。

そう思っていたのが表情に出たのか、黙りを決め込んでいたのほほんさんが口を開いた。

「…そのフラグメントマップはあ、学園のISらしくない進化を辿ってるんだ。学園でつかわれてるISは特定の個人と最適化を行わないよーに自己進化機能にガツチリロックが掛かってるんだけどお・・・、ほら、ここと、ここ」

多分、状況を見るに、のほほんさんは整備科の生徒だな。説明する口調は頼りないが、どこかこなれてる感がある。

のほほんさんが別に表示した打鉄のマップを見れば、幾何学的な模様を描いたマップの数カ所に似たような図形が有るのが見えた。多分、これがロックが掛かったままで運用した結果、構築された箇所なんだろう。

「それでねー、こんどはこっち」

次に示されたのはさっきのマップの方だった。

うお、のほほんさんが身を乗り出して示したせいか、背中に体重と柔らかな熱を感じる。職員室が冷えてて助かったー。

「このマップなんだけどー、ロックが掛かって無いみたいなんだよね」

探してみると、なるほど、確かにさっきみたいなワンパターンの模様はどこにも見られない。

言われてみれば、さっきのマップとこのマップ。マップの密度がかなり違う。

ロックのかかった方のマップはシンプルな模様で読み取り易いが、このマップは複雑すぎてごちゃごちゃしている。

しかし、問題はソコじゃない。その事を雰囲気で感じ取った俺のはほんさんに先を促す。

「マヤマヤに言われてこのISを調べて見たんだけどー。どーもおかしいんだよねえ。ここまで特徴的なマップをこーせーしてるのに、外見どころか性能まで訓練機と同じデータなんだよ。それで詳しく調べようと思ってセンサー達と調査ちゅーってわけなんだあゝ」

そう言うとのほんさんはカタカタ。デスク前に陣取り、再びキーボードを叩き始めた。・・・案外適当なように見えて、結構生真面目タイプか。

「――まずは使用履歴から当たって見たが、これが最初の壁だった」
「壁、ですか」

のほんさんから引き継いで説明を始めた千冬さんに聞き返す。

「ああ、結論から言うと、この打鉄は学園のISじゃない。恐らく何者かの介入によって学園のISデータ自体に改竄が為され、訓練機に紛れ込ませた未登録のISだろう。IS自体にも訓練機としての偽のデータが被せられていて、昨晚から解析を始めたがやっと入手出来たのが、あの打鉄本来の使用履歴だった」

「本来のことは使用履歴にすら訓練機としての別の記憶領域があったんですか？」

偽とはいえ、IS二機分のデータを詰め込める機体なんて、とんでもなく高性能だぞ。どういう理由でここのあるのかは知らんが山田先生を始めとした技術者気質な人にとっては格好の研究対象だ。

「そうだ、一応お前にも見せておこう。件の使用履歴だ。約二年前が最後の記録になっている」

千冬さんは遂に机に突っ伏した山田先生を押し退け、一つのリストを開いた。

一番古いデータら順に新しくなっていく、その間に表示された名前はどれも見知らぬ物だったが、やけに日本人が多かった。未登録のとはいつても多分学園には、って意味だ。日本の企業に割り振られた純正品のコアだろう。解析が終わって所属が分からなければ、その企業から強奪または委員会に返還されたものって言うことになる。

そしてやけに長いスクロールが終わり、最新のデータ、つまり今のこのISの搭乗者ということになる名前が表示された。

そこにあつた名前、それは――、

『篠乃歌雨』……？ 知らない名前ですね」

思つたことを率直に述べる。

篠乃歌雨なんて名前、俺は知らない。恐らく、聞いたこともない。「はあ、やっぱりか。我々教師側も全ての名前について調査してみたが、この名前の人物以外全員死亡扱いとなっている。恐らく全て偽名だろう」

千冬さんは俺の反応を予想していたようで諦めたように息を吐いた。

「偽名つて、じゃあどうするんですか？ 束さんでも頼りますか？」

「いや、束は一応日本政府によって処分中の身だ。こういう調査には使わない方がいい。いろいろかきまわる内に足がつかないとも限らないからな」

「まあ、あの人の場合機体の性能だけ調べ尽くして、あとのデータを初期化するくらいやりそうですしね……」

今頃地下に籠って新技術開発（暇潰し）でもしている人物の姿を思い浮かべて、絶対に関わらせちゃダメだと言ふことを再確認する。

「それじゃ、調査頑張ってください。俺はこれで」

「ん？ なにか聞きたくて私たちに関わったんじゃないのか？」

あ、そうだった。意外に話が重かったからすっかり忘れちゃまつた。

「鈴なんですけど、外出届けとか出してませんか？」

「ああ、そのことか。お前たち、喧嘩したそうだな。職員室でもチョツとした話題だったぞ」

思わぬ息抜きが出来たぞ、と可笑しそうに語る千冬さん。

――IS学園のペア制度を使っている生徒は少ない。

なぜならISの機能向上に従って、チームで戦う必要が無くなって来たからだ。

ISの主流世代が第二世代になってから、ISには装備換装によつ

て様々な局面に対応できる機能が付いた。リヴァイヴがいい例だ。

第一世代が主流だった時代、つまり学園の発足当時はお互いの不足をカバーするためのペア制度だったみたいだが、今現在はダリル先輩とフォルテのような変わり者同士が好んでペアを作るだけの制度となっている。形骸化ってやつだ。

俺と鈴の場合は本当にペア、というか協力相手が必要だったため組んでいたんだが、どうも職員室では変な勘繰りがされてたみたいだぞ。

「ホント、ホント！ 私のところに書類が来たときなんて青春してるな〜って思ったわよ！」

飛び起きた大倭先生は無視してやる。今度ヒミコ先生って呼びますよ。

「喧嘩したのは事実ですけど、冷やかさないでくださいよ」

「ふっ、いやなに。お前たちが普通の学生として生活できていることを私は嬉しく思っているだけだ」

「・・・なんか千冬さん、保護者みたいですね」

「？ そうか？」

千冬さんは少し照れたようにはにかむ。

・・・双龍については、千冬さんも思うところはたくさんあるだろうが、俺たちが普通に生活していることを本当に嬉しく思っているような顔だ。うん、やっぱり姉って言うか保護者って感じだな。

「それで、鈴の所在なんですが」

「ああ、それについては口止めされていたことがあってだな、凰はいま中国に帰省中だ。父親の送還がこの間決まって一昨日の夜から日本を発っている。一緒に捕縛した男のIS乗りも近日中、恐らく今日にでも日本を出るだろう」

中国か・・・。

学園内にはいないと思っていたが国外とは。

一昨日の夜からってことは、あの遊歩道で別れたあと、すぐに出発したのか。ていうか口止めて・・・。

「こつちに戻ってくるのはいつなんですか？」

「未定、みたいだな。予想だが、母親との面会の予定でもあるんだろう。織斑からの又聞きだが、入院しているそうだな」

面会か……。それなら中国まで帰る必要があるだろうが、俺に一言あっても良かったんじゃないのか。

経公の母国送還にしても同じだ。

……。信頼、されていけないのか……？

「……そう悲しそうな顔をするな柊。考えていることが顔に出すぎだぞ」

「……そんな分かりやすいですか俺」

自分で自分の頬をグニグニしてみるが、別に強張ってるわけでも緩んでいるわけでもない。

「ああ、まるわかりだ。その辺、もっと上手く立ち回ってみろ」

千冬さんはそう言って、意地悪そうに口角を吊り上げた。

「自分がどうしたいか、もっと正直になってみたらどうだ」

@

昼近くになり、デュノアたちの部屋にいるアオの様子でも聞いてみようかと電話を掛ける。

「……」

出ない。

もう一度掛けるが、今度は留守番に繋がった。

うー、部屋に携帯忘れて飯でも食いにいってるのか？

デュノアだけでなく、ラウラの端末にも掛けてみるが結果は一緒だ。

昼飯かー。朝食ってなかったし流石に空腹を感じる。

食堂で合流すれば良いし、食費も出した。

よし、行ってみるか。

そう考えながら食堂へ通じる寮の通路を歩く。

……と、

「お、サラ。お前も昼か？」

「……奇遇ね。そう言う貴方も？」

部屋から出てきたサラに出くわした。

見ればどこかやつれた表情で……なんだあれ。前腕部に腕抜きをしている。

「あっ……」

その事に気づいたらしいサラがはつとして、部屋に駆け込む。

「失礼したわね、行きましようか」

「あ、ああ」

部屋から出てきたサラの腕に、さっきの腕抜きは無かった。それに、髪もちよつと整えた感じが出てるし、目の下の隈が消えている。

今の短時間で髪を整え、ファンデーションまでしてきたのか……。俺も一年の頃、徹夜を隠すために使ってたなあ。

「昨日の子はどうなったの?」

「あー、お前らが出ていったあと色々あつてな。ミナトと話してちよつと様子を見ることにした」

「そう、よく考えれば迷子つてだけじゃ警察に保護されるだけでしょうし、それがいいでしょうね」

「だろ、アオつていうらしいぜ。て言うか付けた」

「な、なによそれ。あの子妙にしゃべらないと思つたら、記憶喪失か何かなの?」

「そうみたいなんだ」

「なら、なおさら部屋に入つてた理由が分からないわね……」

近況を報告しながらサラと食堂に行く。

入り口の扉を開けようとして取っ手に手を伸ばすが、手が触れる前に勝手に扉が開いた。

「お?」

「あっ、柊先輩……」

目の前に現れたのは、短髪の小柄な女子。首もとのタイが青だ。一年か。

見れば手にしているのは定食の乗ったトレイ。

扉を開けたのは別人か?

「清香?どうしたの……って柊先輩にウエルキン先輩?」

トレイを手にしたまま立ち尽くしている女子の隣からヒョコツと

顔を出したのはやはり女子。一年だ。

青みのかかった髪をヘアピンで纏めているのが特徴だ。

「ああ、悪いな」

手が塞がっているようなので一步身を引き、扉を手で押さえる。

二人は俺の脇をすり抜けるようにして出ていき、代わりにサラが食堂へと入る。

あ、思い出したぞさっきの二人。たしか一夏のクラスメイトに居たな。

名前は・・・清香と呼ばれた方が、相沢清香で、顔を出した方は鷹月・・・静しず寐ねだったかな。

相沢の方はハンドボール選手として有名で、鷹月は去年の中学全国模試で100位以内に入ってるって一夏がいつか言ってたっけ。

「あ、あの。ありがとうございますっ」

背後から掛けられた相沢の声に振り返ると、トレーを持っていない鷹月は深々と、相沢は軽く会釈するようにお辞儀した。

それに「いいよ」と軽く返すと二人はスタスタ、くる。

数歩歩いてこの場を離れたかと思ったら二人同時にこっちを振り返った。

・・・と思ったら、二人の行動にはてなマークを浮かべた俺と目が合い・・・たたたっ！

ビクツと震えたかと思うときやーって感じで走り去っていった。なにあれ。

一組の二人は置いておいて食堂に入ると、今までの光景を見ていたらしいサラが俺をじとつとした目で見ていた。

「なんだよ、イギリス人は食事の時にジト目する習慣でもあるのか」

「なんの話よ」

ふんっ、と鼻を鳴らしたサラが食券の列に並ぶので俺もその後ろに付く。

「貴方、二年生以上には嫌われてるくせに、どうして一年生にはそれなりに人気があるのよ」

「去年のこと聞いてはいても見てないからだろ。ていうかそれでも校

内3分の2には嫌われてることになるんだが・・・」

クラスメートはそれなりだが、今でも他のクラスのヤツとかにスゲエ目で見られることあるぞ?」

今だって微妙に隣の列と距離を開けられたし。

「それでもよ。整備科の実習に出ると絶対貴方の事を訊かれる私の身にも成ってみなさいよ。せつかく美人な娘ばかりなのに不快で仕方ないわ」

「あーはいはい。すみませんでした」

しょうが焼きの食券をピツと買うと、デユノアたちの事を思い出し、カウンターに行くついでに辺りを見回す。

・・・あれ、居ないぞ? どこいったんだ。

「何してるの。席、開いたわよ」

「ん、あ、ああ・・・」

おばちゃんからしょうが焼き定食を受け取り、サラを追っかけて席に付く。珍しくテーブル席だ。

「で、さつきから何を気にしているのよ貴方は。落ち着いて食べられないわ」

「いや、ラウラやデユノア見てないか? それとアオも」

「・・・様子を見ると言っておいて早速育児放棄かしら? 将来が思いやられるわね」

「いや、ふざけてるんじゃないやなくてだな、本当に電話にも繋がらないし、どこにいるか分からないんだよ」

するとサラは少し思案顔になった。

「・・・ISのコア反応は追跡したの?」

「いや、未だしてない。ていうか一応校則違反だぞ」

「四の五の言っていないで早くやりなさい。——そのアオって子がいる限り、何が起こるか分からないのよ? 慎重に慎重を重ねるべきだわ」

・・・言われてみればそうかもしれない。

サラには言っていないが、アオは記憶のない超界者なんだ。

もしかすると何かあったのかもしれない。

俺が気づいた事に気づいたらしく、煙の中から一筋の光が現れた。

——荷電粒子砲ツ！

アリーナの隅に降下しようと思っていた所に砲撃。

ギリギリかわしたが、目の前を粒子ビームが通りすぎていく光景には肝が冷えたぜ。

でも、今の攻撃で相手の正体に確信が付いた。

でも、やつは今自衛隊に拘束されているハズだ。市ヶ谷駐屯地からどうやって……。

「——どうやって逃げてきたんだ。ウエルク・ウエルキン」
相手の名を、口にする。

「ツハハハハッ！ 君は今でもボクを『ウエルク』と呼ぶのかいクレハくん！」

敵が、姿を現す。

赤い装甲に右手の杭撃ち機。

アイツは、七月の福音事件で捕まったはずの双龍に所属する超界者。

本名を——

「——私のことはバースと呼びなさいよ」

そう言つて襲撃者は女性の顔で不敵に微笑んだ。

@

「随分と見た目が変わったな。整形でもしたか？」

俺は『二式時穿』を展開しながら尋ねる。

「うーん、まあそんなところね。器を心の形に合わせたの」

……確かバースの体は元々サラの兄、ウエルク・ウエルキンのモノだ。

俺が引き起こした事故のせいで死んでしまったウエルクさんの体を双龍が回収、細工しバースと言う超界者の身体に作り変えたのだ。

七月の時点では見た目はウエルク、中身はバースだったのに、今じゃすっかり女性体へと変わってしまったている。声や仕草までもが本来の性別へと切り替わっていつてるみたいだ。

視界の端に、アリーナの捲れた地面に倒れているデュノアとラウラ

の姿を確認した。

二人ともISを装備しておらず、エネルギーも枯渇しているようだ。

「しかし、こんな目の付くところで単一仕様能力使うってことは、俺を誘ってやがったか？」

こいつのIS、『牙龍』の単一仕様能力は「革命者^{リベレーター}」。

周囲に爆発を起こし、更にシールドエネルギーを吸い上げ自身の物にする能力だ。

さっきの爆発はこの能力のせいだろう。二人のエネルギーが尽きているのも納得できる。

「いいえ、本当は『心』の方を誘っていたのだけれど、違う方が釣れちゃったみたいね」

「残念だったな、鈴なら今は中国だ。ここには居ないぞ」

俺が相手をしてやるとばかりに剣を構えるが、バースはなにもしやうとしないで、ただ佇んでいるだけだ。

「悪いけれど、一度負けた相手にもう一度挑むほど愚かじやないのよ私。折角逃げられたのにまた捕まるのもゴメンだし。————」
「だ
から、貴女がやりなさい」

戦う気が無いらしいバースは、俺の背後へと視線をやり、誰に向かつてか話しかける。

（仲間がいたのか!? コア反応は無かったはず——）

振り向くと、そこにいたのは一人の少女。

灰色の装甲の打鉄をまとい、気を失っているアオを抱き上げてい
る。

「貴女も二年ぶりで機体が鈍^{なま}っているでしょう？ 存分に見せてやりなさい。亡国企業^{ファントムタスク}の力を！」

アオを抱いて、俯いていた少女が顔をあげた。

前髪で隠れた目元には何かにすがるとような表情が浮かんでいる。

気の弱そうな、大人しい印象を受ける少女だ。

だが・・・

この感じ、どこかで俺は会ったことがある・・・？

思いがけない既視感に戸惑っていると、前髪少女は前髪の奥の瞳を悲しげに伏せた。

「言ったでしょう？ クロエの改竄は完璧だつてね。さあ、これだと思
い残す事は無いハズよ雨^{あめ}」

雨？ もしかして篠乃歌 雨つてこの女の何か!?

そう言えば午前中に千冬さんたちが調査していた打鉄、第一アリー
ナに格納されてたぞ。

もしその打鉄がそうだったとして、どうやって持ち出したんだ。

格納庫には三層の防護壁とID認証があつたハズだ。そのどちら
かが、何らかの方法で破られた――！

「――起きて、打鉄零式^{トライアル}」

雨と呼ばれた少女がISの名を呼ぶ。

すると、打鉄の装甲にヒビが入り、ボロボロと粒子となり解けてい
く。

俺が使う『二重同時展開^{ダブルキャスト}』じゃなく、外装が剥げていくように秘め
られたISが姿を現す。

「システムチェック。生体認証完了。ハイパーセンサー、三次元レー
ダー起動を確認。各種ブースター、オンライン。近接特殊ブレード
『時繫^{ときつなぎ}』展開完了」

灰色から黒へ。シユヴァルツエア・レーゲンのように黒い機体だ
が、フォルムには打鉄の名残がある。

両肩に浮いた実体シールドユニットが消え去り、ぱっと見はミナト
のサイレン・チェイサーより装甲が薄い。

だが、分かる。

あれは第二世代IS『打鉄』の試作機^{トライアル}。

昔、東さんが言っていたが、龍砲を始めとする空間操作系の武装を
最初に開発したのは実は中国ではない。

龍砲として完成させたのは中国だが、試作自体は世界中で行われて
いた。

そして、日本でも例外なく研究が進められていて、試作機が積みま
れた機体が第二世代IS打鉄試作機『零式』。

第二世代初期に作られた機体で今では名前自体聞くことも稀だが、実際に動いているところを見ることが出来るなんてな。

スリムな装甲に黒光りするペイント。とても二年前の機体とは思えない迫力を俺に与えてくる。

更に零式が暖気運転をするにつれて、その迫力すらも増していく。

「——零式。行きます」

そして、漆黒のISが完全に息を吹き返した。

記憶の欠片

——初めに認識したのは、真っ白な刀身だった。

「!?!」

一瞬で距離を詰められたと気づいたときには既に、俺は雨の攻撃によって吹き飛ばされていた。

PICで姿勢を制御し、雨を見据えると・・・先程まで抱えていたアオの姿がない。

「いったいどこに、と視線を廻らせると眼下に落下していくアオの姿を見つけた。

攻撃するために躊躇わず落としやがったのか・・・!

「ツー」

バリアードで構築した足場を蹴り、スラスターの加速も使って何とかアオを抱き留め、アリーナに着地する。

アオは・・・眠っているみたいだ。怪我もない。

「——貴方がその子に怪我させるわけがないって、分かった」

頭上から、漆黒のISを纏った篠乃歌雨の声がした。

見上げると、ゆっくりと降下してくる雨の瞳には確かな確信と悲しみの色が浮かんでいる。

「・・・知った風な口を利いてんじゃねえ・・・、何が目的だ」

突如学園を襲撃した超界者バースと、訓練用ISに偽装した第二世代試作機『零式』を駆る少女。

今日にも中国へと送られるハズだったバースが逃げられたのはこの少女の仕業らしく、バースはその少女のIS、『零式』を亡国機業の力だといった。

バースと篠乃歌雨がどういう関係かは知らないが、専用機持ちであるラウラ達をスルーしてまで同じ超界者であるアオを拐ってるんだ。

何か計画があるのかもしれない。

そう考えて剣呑な雰囲気ですべて訊いてみたんだが、

「・・・別に、私は・・・ただ命令されただけ」

「命令だと?」

「…ええ、そう。学園を襲い、そのなかの超界者を奪取するように、つて」

着地した雨は、案の定と言うか、存外気の抜ける返答をした。
め、命令されただけ？

上空に留まっているバースに動きが見られないので俺は更に聞いてみることにする。

「超界者を知っているってことは——政府の人間か」

「…うん、そうだよクツちゃ——、そう。私は事実上双龍が崩壊した二年前に、双龍の代わりに創設された超界者対策組織の一員。主な任務は超界者の捕縛と研究」

超界者対策組織……。なるほど、研究対象が近くに居たから捕まえに来たって訳か。

「なら、どうしてバースと一緒にいる。ヤツだつて超界者のはずだ」

「彼女は今回の作戦においての警戒対象である貴方の排除を目的に連れてきたのだけれど、気が乗らないみたい」

「政府の組織つて割りに、自由奔放な配置だな」

「それは仕方ないよクツ——し、仕方ない。彼女は仕事があるとはいえ、私たちの組織と協力関係を結んでいる組織の一員。あまり強要するわけにはいかない」

……。なんか、所々気の抜ける会話だが、何となく概要はつかめた。

今回の事件は日本、というか国が絡んでいる問題だ。

どこの国かは予想でしかないが、とにかく雨の所属する組織が計画した襲撃で、目標はアオの奪取。

バースが居るのは、スポンサー組織の一員なものと、俺対策に連れてきたみたいだ。

だが、バース自身はラウラとデユノアを倒したことで満足してしまっただのか俺を相手にする気もなく、二年ぶりの復帰戦も兼ねて雨が戦おうってわけか。

アオを連れていこうとすれば俺が邪魔をする。

それが分かっているのか、雨は俺に向かって時繋の切っ先を向け

る。

時穿とは対照的な白銀の刃を構え、俺を見据えた雨は――。

「――気を付けてねクツちゃん……零式の本領は刹那の一撃だから――」

なんて、俺を気安く呼ぶと……姿が掻き消えた。

そして次の瞬間、視界の右下に雨が表れる。

しまった――！

片手でアオを抱き、反射的に時穿で斬撃を受けるが、お、重いッ……

！

アリーナの地面を擦って停止した俺に、雨が追い討ちを掛けてくる。

くそっ、こっちはアオを抱いたままだぞッ！

普段のBシステムが使えていない以上、通常状態の瞬龍で戦うしかないが、俺自身のスペックも含めて荷が重い。

それにさっきの瞬間で距離を詰めての切り上げ、どうなってるんだあれは。

瞬時加速を用いたとしても、あれほどのスピードはまず出ないぞ。

アオを守りながら戦う俺に次々と斬撃が浴びせかけられる。

なんとかダメージは軽減してるが、尽きるのも時間の問題だ。

銃を抜こうにも、きつと集中した瞬間に一太刀喰らう。

銃を抜く暇がなく、かといって大振りに剣を振るうわけにもいかないこの状況。

「――ッ！」

一瞬で背後に回ってきた雨が降り下ろしてきた剣を、カンだけで受ける。

「……ふうん、今のを止められるんだね。てつきり瞬龍のスペック頼みかと思ってたけど意外と力はちゃんとあるみたい」

「褒められてると受け取っていいんだよ……？」

峰を方にあて、テコの要領で時繫を弾き飛ばすと、そのまま左向きに回転し下から上への切り上げを放つ。

この機に乗じて攻めに回るんだ。

相手が想像以上の機動力を持っている以上、距離を取るのは愚策だ。

だからここは一気に――

――前へ!!

「ウオオオッ!!」

俺の放った切り上げを同じ様に刃を当てて受け流した雨に向かって、全力の瞬時加速を使用する。

眼前に迫るやけに前髪の長い顔。

その姿にまたもや既視感を覚えつつも、連続で剣を降り下ろす。

左手にお姫様を抱いてるんでバランスがとりにくいが・・・問題ない。

そこで気づいた。

俺は、いつの間にかBシステムを発動させている。

しかし、攻めに転じた際の微妙な興奮状態を感じ取ったか知らんが、掛かりが甘い。

ヴォーダン・オージェ
超界の瞳との併用で何とかイケそうだ。

俺の連続攻撃をかわしたり、弾いたりする雨の動作を読んで、斬撃で巻き上げた砂を上手いこと雨に被せることに成功した俺は砂が目に入り視界がつぶれた雨を尚も切りつける。

「ッ！　さ、流石だねクツちゃん・・・！」

雨も雨で網膜投影された警告カーソルで俺の斬撃を受けているみたいだが、明らかに攻撃が成功する回数が増えている。

一撃だ。一撃入れて距離をとれ。

こつちにアオがいる以上不利な状況は変わらないから、どこかで戦場から出さなきゃ雨は倒せない。

段々と視界が戻ってきたのか、剣を突き出すような攻撃的な仕草を始めた雨の時繋を一太刀で弾き飛ばすと、続けてぐるりと回転し、バックスピンキックを決める。

今のうちにアオをどこか安全な場所へー！ーと思ったが、ぶっ飛んだ雨が地面へ片手をつけて両足で着地をしたのが見えたので断念する。

さつき弾いた時撃とは距離があるので、無闇に取りに行こうとはしないだろう。

そう思った矢先、雨は自身の拡張領域から見たことあるマグナム拳銃——「シユナイダー」を召喚した。

レールガン機構で加速した弾丸が発射され、空気を切り裂いて飛翔する。

流星にレールガンは避けられないので幾重にも張ったシールドで受け止めようとしたら——土手っ腹に喰らった。

絶対防御のお陰で直撃はしてないが、シールドエネルギーがほとんど削られちまったぞ。

なんだあれ。聞いてたヤツより何倍もスゲエ威力だ。

直撃はしてないとはいえ衝撃まで和らげる機能は絶対防御にはないので、分散しきれなかった衝撃に苦悶を上げる。

込み上げて来たモノに咳き込むと、案の定吐血した。

畜生め。胃か何かを痛めたな。

ISでバイタルチェックをすると、胃の上部に当たる噴門と横隔膜に損傷を確認した。深く息が吸えないのはそのせいだ。

元々テロで使われる非合法の武装とはいえ、この威力はやりすぎだろ。改造したやつ出てこい。

時撃を拾った雨がこちらに歩み寄ってくる。

「……その超界者をこちらに渡して。それでこの件は済む」

飛び散った瓦礫を踏み砕きながら歩んでくるその姿は正に死神だ。

しかし、その姿に反して俺を諫めるような目で見てくるのはどういう理由なんだ。

どこか優しさを感じる雨の立ち振舞いに一瞬呆然とすると、アオを連れ去ろうとしている事実を思い出し、警戒する。

「——ここでハイそうですかって渡したら、なんで戦ってるか分からないくなるだろ」

強がってみせたものの、俺自身のダメージは深刻だ。

内蔵破裂のせいだ、腹部の圧迫がキツくなってきた。デファンス、というやつだったか。

「——貴方には初めから戦う理由なんてないはず」

「・・・チツ、ム力つくなお前」

強がりと言ったことに真面目な返答が返ってきて——なおかつ的を射ていることについて。

「確かに今回の件、俺には何の利もないな。全くもって骨折り損だ」

アオは超界者。俺のもとには災悪しかもたらさない。

政府が引き取ってくれるならこれ以上はない。

だけど、それでも。

俺は今なお倒れているラウラとデュノアを見やる。

「二人が守ろうとしたんだ。俺が簡単に諦められるかよ。それにな——」

・・俺自身、アオと関わりを持ちすぎた。

たった一人の迷子。自分の立ち位置も分からずに、誰かにすぎるほかなかったアオ。

俺はそんなアオに、ほんの少しだけ、同情した。

自分と似た境遇だったからかもしれない。一緒に遊び、過ごし、アオにほだされただけかもしれない。

だから、俺はこう思う。

「ここでアオをあんたらに渡したところで、俺自身が納得しそうにないんでな！」

「——よく言ったわっ！」

懐かしい響きを持つ声のあと、上空からワインレッドのISが降ってきて、砂煙を立てた。

衝撃と砂からアオを守ったまま俺はソイツの後ろ姿を見上げる。

「つたく、何処から聞いてやがった」

「飛行中に全部聴いてたわよ」

揺れるツインテール。黄色いリボンを懐かしく思うと同時に、彼女のISが一部変化していることに気がついた。

前方に鋭く突き出した胸部装甲に、足裏から脹ら脛に掛けてのスラストーナユニット。衝撃砲が真横を向いていてまるで羽根のように見える。

内蔵割れてるのに容赦なく膝をぶちこんでくる鈴を「いつもの鈴だなあ」とか思ってる俺は色々ダメかもしれないが、なんとなく分かる。俺たちは、まだパートナーとして戦える。

「・・・ふう、クレハ。あたしがあの赤いのをやるわ。あんたはそっちの黒いのを」

「大雑把だな・・・まあ、異存はねえ」

俺たちの雰囲気を感じ取ったのか、相手方がぐっと構える。

先に仕掛けてくるかと思つて身構えてると、急に鈴がくるつと俺の方を振り向き——徐にアオの頬つぺたを引つ張つた。

「それと、あんたもいつまでクレハに抱かれてるツモリよ？ いい加減下りなさい！」

「ふ、ふうええく!? 痛いー！ いたいれふー！」

悲鳴を上げるアオ。

つーかおい。

「起きてたのかお前」

今まで何の反応もなかったからつつきり気絶してるものかと思つてたが・・・。

「ち、違うん、です！ クレハが妙に必死に成るものですからついで・・・」

そう言つてふいつと視線をずらすアオ。狸寝入りがばれたせいか、ほんのり顔が赤い。

そんなアオを見て何かにイラツとしたらしい鈴が、腕の中のアオに向かつて更に吠える。

「いい!? クレハは誰にだつて優しいの！ ただ八方美人なだけ！ ちよつと優しくされたぐらいで騙されてちや痛い目見るわよ!」

「おい、ちよつと待て鈴。反論させる。八方美人つてワードには納得いかんぞ」

あとお前の言い方だと俺がすごい悪者に聞こえるんだが・・・なに？ ヘイトスピーチ？

『私的にはいくら騙されても構わないのですが』

「オメーはちよつと黙つてろツ!!」

突然開放回線で呟かれたミナトの声に二人でツツコむ。

「……ていうか、ミナト先輩？ 一体どこに……？」

『はい。現在地点、東第一校舎の屋上にて伏臥姿勢待機中』
スナイプスタンス

「なんだよ、お前も見てたのかミナト。支援砲火ぐらいできただろ」

『いえ、少し思うところが在りまして、邪魔するもの野暮かと』

「……野暮？」

意味がわからず聞き返すと、隣で鈴が「あー、なるほどね」と声を上げる。

『——男性が格好つけている時、それを邪魔する女はいません』

……その言葉の意味がわかった瞬間、俺もいつもの鈴ぐらいの速度で顔を熱くした自覚があったが、逃げ道を探すために鈴とアオの顔を見たのがまずかった。

「(サツ)」

「(サツ)」

ふ、二人して顔を背けるなよ！

なんか急に恥ずかしくなってきた！ つーかミナト！ てめえよく当人に向かつてそんな事を臆面もなく言えるな！

「と、とにかくアオは下がってる。狙いはお前なんだ。俺と鈴に任せろ」

「そ、そうね。何時までも漫才やってる訳にも行かないんだし、そろそろしびれ切らしてくるわよ」

現在の俺たちの立ち位置は、トラック状のアリーナを三等分した場合の端の部分、曲線の部分だ。

俺の正面には四角形のフィールドがあり、その上空には雨とバースが浮いている。

背後には客席とアオ、ラウラ、デュノアの三人だ。

「いいか、鈴。後ろには流れ弾一つ通すなよ」

「ふん、上等よ」

鈴が双天牙月——幅が小さくなり、少しだけスリムになった印象がある——を抜き、バースに向ける。

「それにしても、ちよつと説明が欲しい相手ね。どうして篠乃歌 雨

が『零式』なんて乗ってるのよ」

たぶん、何気なく言った一言。

だが、突然すぎるその発言に俺は動揺した。

「し、知ってるのか鈴。あいつのこと・・・!?」

「何狼狽えてるのよ気持ち悪いわね。あんなだけ親しそうに戦闘中も会話してたくせに知らないなんて言わないわよね？」

鈴が半眼で俺を見てくる。

「い、いや。俺は知らない。知らないのに・・・、鈴が知っている——!?」

「・・・その様子じゃあたしが居ない間になにか仕掛けられたか、もしくは影響の侵食中に中国に飛んだお陰で完全に掛かるのを免れたかのどっちかね」

一人で勝手に納得している鈴に説明を求めようとした瞬間——。

「——貴女が覚えていることは予想外だったよ。凰さん」

「つてことはこれは全部あなたたちが仕組んだことって認識で良いのかしら篠乃歌先輩？」

黒と朱のISがぶつかり合う。

「・・・おいバース。ちよつと理解出来ないんで説明してもらえるか？」

「イヤよ。なんで私がそんなことしなくちゃ成らないのよ」

「・・・だよなあ」

ふざけてバースに助け船を出したが、残念ながら説明はしてもらえなかった。

「まさかクロエの記憶改竄能力に経過劣化なんて欠点があったなんてビックリだよ。本来なら私は誰も正体を知らない襲撃者として超界者を拐い、二学期から普通に戻るはずだったのに」

「残念ね。貴女の姿をここであたしが見たからには、黙って学園には戻さないわよ」

「・・・私、凰さんのそう言う生意気なところ、大嫌い」

「・・・な、なんだこれ。なんで鈴が襲撃者と親しげに話してるんだ？」

子供みたいに頬を膨らました雨は、俺の視線に気づくと「あわわ」な

んて言つて澄まし顔に戻る。

「偶然ね。あたしもクレハの金魚のふんみたいな貴女がずっと気に入らなかつたのよ。幼馴染みを自称して……、クレハに幼馴染みなんて居るわけが無いのよ」

お、幼馴染み……!?

「い、いい加減説明しろ鈴。幼馴染みってなんだよ」

「あんたは黙つてなさい。あたしは今この女と話をしているのー!」

うおっ、なんか知らんがいつも以上にヒートアップしてやがる。

幼馴染みか。

そんなの、居るわけがない。

俺は現在、生まれて二年ほどの遺伝子調整体^{アドヴァンストド}。

篠ノ乃東の遺伝子を用いて作られ、鉄の子宮から生まれた試験管ベイビーってやつだ。

自分のことながら他人事のように捉えているが、実感がないのは確かだ。

だが、二年という時間における俺の記憶はハッキリとしている。

その中に、シノノカ アメ、などという名前の人物は居ないのだ。

だから、あり得ない。

目の前の敵、篠ノ歌雨が俺の幼馴染みだということは。

「……クレハ。混乱しないで。確かにあたしはこの女と面識がある。

けれど、それはアンタも同じなの。多分、サラと同じように、何らかの方法で記憶が書き換えられてるんだわ」

「記憶が書き換えられてるって……、まさか、その為のフィールドか!」

夏休みに入ってから、この島全体を覆っていたと言う特殊エネルギーフィールド。

その正体は学園にいる人物全員を騙すための工作だったってわけか。

さらに、二人の会話から察するに、その書き換えはじわじわと進んでいくようで、途中で中国へ渡った鈴だけは雨の事を覚えていると言うことらしい。

そ、それじゃあ、本当に雨は、俺が覚えていない誰かってことなのか……？

「アンタたちがなに考えてるか分からないけれど、学園に対して特定の国家が働きかけるのは条約違反のハズよ。大人しく退きなさい」

「……もう、そんなこと言ってられる状況じゃ無いんだよ鳳さん。戦争は目の前に迫ってきてる。超界者達の目的は、貴女とクツちゃん。女王なの」

今更な事実を、雨が辛そうに確認する。

……あいつの目、俺を慮る様な言動は、俺を知っているからできると言うのか。

俺は知らないことが多すぎると知っていた。

だが、知っていたことすらも忘れていたと言うことについて、初めて後悔した。

「じゃあなんでこの子を狙うのよ」

「……当人だから言うけれど、その子は戦争を終わらせられる唯一の存在、とだけ聞かされてるの。だから、その子が居れば、二人は助かる」

「……アオ……がが？」

雨の言葉に顔を上げた俺は、背後にいるアオを見る。

いや、まて。そんな都合のいい解決策があるわけない。

雨もいった通り、起ころうとしているのは戦争だ。

不条理や不道德がはこびる戦争なんだ。

「……何に、使う気なんだ」

俺は思わず、バースに問いかけていた。

アオが戦争を解決してくれる、という前提ではなくアオを使って戦争を解決する、という前提で。

アオのその後までは聞かされていなかったらしく、雨も同じようにバースを見上げる。

周囲の視線を一身に受け、バースはさも当然のように言った。

「決まってるじゃない、器として使うのよ。心は別に用意があるの」
器。

女王の器。

それは即ち、俺のIS、瞬龍に組み込まれているコアのことであり、鈴の脳内にデータとして記録された心と組み合わせることによって女王が復活すると言う。

この話は、以前鈴の父親、凰経公から聞いたことだ。

バースたちは、それを別のコアと心でやろうとしているらしい。

だが、だが、心が剥がれても、エリナとしての意識はコアの中にあつた。

そして心と一体化する際には、どちらの意識が優先されると言うのか。

つまり今の状況でいうと、アオと女王の意識、どちらが消えてどちらが残るのか。

「捕まっていたから報告が入るのが遅れちゃったみたいだけれど、その子は女王の器として日本政府が造り上げた人造の超界者。機械に人の意識を植え付けた化け物らしいのよ。私にしても、気味が悪かったからこの仕事には関わりたくなかったのだけれど、仕方ないわよね。お仕事なんだから」

・・・おい、おい、今なんて言った？

人造の超界者・・・？

思わず、アオを振り返る。

「・・・え・・・ッ・・・!?!」

酷く狼狽している。

ち、違うぞ、あの目は・・・。

自分が作られた存在だったと言う事についての驚きじゃない。

もつと、これまでの自分を全否定されたかのような———記憶

の全否定———!

バースが、アオに向かって手招きする。

「だから、いらっしやい。あなたは女王の器になる為に造られた、超界者とは異なる生物。いや、生物でもないかもしれないわね。モノはモノらしく、自分の役目を果たすしか無いのよ。こっちに、来なさい」
催眠術でもかけているかのようなねっとりとした口調に、人格を壊

し尽くす辛辣な言葉。

その言葉を受けて——アオが立ち上がった。

「・・・おい、待てアオ・・・。なに考えてやがる・・・ッ!？」

「——結局、アオはクレハに騙されていた、と言うことですね」
ゆらりと一步踏み出したアオは、突然そんなことを言い出した。

「アオが自分の任務だと思っていた女王の復活、その重要なファクターはクレハ、貴方だったのですね」

アオと部屋で遭遇したあの日、俺は自分が女王の器であると知らせず、アオに嘘をついていた。

「ち、違う・・・あれはッ!」

「分かっています、クレハ。クレハにも守りたいものがあつた。超界者と戦うためにも情報が欲しかったんですよ」

今や全てを理解していると思われるアオが一步一步、バースに近づいていく。

「アオにも、守りたいものが出来ました。ここで食べた小麦粉の麵類——うどん、と言っていましたね。アオはあれが気に入りました。それに、クレハと買い物に行った際に見た夕陽も、とても綺麗で目を奪われました。なんてきれいな世界なんだろうって」

アオは、俺と過ごすうちに、ここでの生活を楽しみ始めていたんだ。記憶や経験が失われていたからじゃない。アオにとつても、この世界は綺麗なものに見えていたのだ。

「そして、そんなことを私に教えてくれたクレハも守りたいのです。クレハが戦いから遠ざかると言うなら、アオは進んで器になります」
宣言したアオを、俺は止めることができない。

雨が、今にも泣きそうな顔で俺の行く手を阻んでいるのだ。

「ごめんなさい・・・。ごめんなさいクツちゃん・・・。これしか方法が無いの・・・っ!」

うるせえ、邪魔だ。退け。

アオを止めるんだ。

きつと、アイツには確信がある。

自分は消えてしまう。その確信が。

「あの夜は、凶らずも行動で示しましたが、今ならハッキリ言えます。クレハ、アオは、クレハが——」

「——バカなこと言ってるんじゃないわよ。誰もさせないわよそんなこと」

俺が動けない間に、アオを止めたヤツがいた。

「アンタはラウラやデユノア、それにクレハが必死で守ろうとしたのよ？ その努力無駄にする気？ それに、今の台詞完全に死亡フラグだったから割って入らせて貰ったわ」

胸を張って言う鈴を、アオは呆然と見つめる。

「で、ですが、アオが器になれば貴方たちは……」

「そんな話、本当にうまくいくと思ってるわけ？ 難しい話は……正直、分かんなかったけど……、超界者の問題はあたしとクレハの問題。あたしより小さい子に丸投げして知らんぷりは出来ないのよ。責任ぐらい取らないと気持ち悪いったらありやしないわ」

少しツンデレた様子を見せた鈴は、両手に双天牙月を召喚する。

「クレハはね、どうしようもないくらいお人好し。だからアンタが犠牲にクレハを救っても、喜びはしないし感謝もしないと思う。ただただ、自分を責める。アンタはそんな重荷をクレハに背負わせたいわけ？」

「……そ、そんなことは……！」

「だったら早い話、その二人を撃退すれば良いのよ」

おい。

簡単に言うなお前。

「何をグズグズしてるかと思ってたけど、そいつらが居なくなれば何とか考えも纏まるでしょ。切羽詰まった状況で考えたって正面突破以外考え付かないモノよ」

鈴は、自分の背後にアオを庇いながら言う。

「だから——」

「……？」

なんだ？

鈴がこつちを睨んで——いや、見てくるぞ。

・・・まさか。

じよ、冗談だろ鈴？

「——取り敢えずは、任せたわよクレハ」

そういうと鈴はアオを抱いて上空へ——り、離脱したっ!?

「——ッ！ 逃がすわけが——!」

バースが焦りを見せ、背後の龍砲をスラスターのように使って加速する鈴に杭打ち機を向ける。

「っあっ!？」

杭を射出しようとした瞬間、右腕に俺の放った炸裂弾が当たり、悲鳴をあげるバース。

「させるかよ」

流桜を持っている左とは逆の、右腕の時穿で今まで逆に動きを封じられていることに気がついた雨が、目を見開いている。

ちっ、バレたか。

しかし、そろそろだな。

俺はバースにならって、空をかける鈴を見やる。

・・・龍砲から溢れたエネルギーが羽根のように広がり、まるで蝶のような様相をみせる甲龍。

素直に、きれいだと思っただ。戦闘中にも関わらずに。

アオが戦場を離脱し、残っているのは俺と敵二人。

鈴はアオを何処かへつれていったあと、ラウラ達の救出もするのだろうか。

当然、二人は邪魔をしてくる。

だから、それを妨げるのは俺の仕事だ。

「——掛かってこいよ。二人がかりでいいぜ」

雨を弾き飛ばした俺を、二人が険しい表情で見ってくる。

任務を優先するか、障害を排除するか迷ってるみたいだな。
生体再生で、内臓の損傷もなおった。

さあて、やるぞ。瞬龍。

@

「上等ッ!」

雨が逡巡しているしている間に、というか真つ先に俺に飛びかかってきたのはバースだった。

俺より少し上から下向きに、轟音をたてて射出された杭を紙一重でかわした俺は、続けて振り下ろされた銀剣を——これまた、身を捻ってかわす。

・・・さつきは二対一になるかとも思ったが、雨があのまま動かないのではバースとの再戦って感じだ。焦る必要はない。

「——チッ」

部が悪いと見たバースは、銀剣を拳銃型の荷電粒子砲に持ち変え、十字に凧ぐように射撃する。

断続的に射撃された加速粒子が十字を描いて俺に迫る。

・・・弾道から見て、全ての着弾点が俺に来るように狙って射撃されている。

一つでも撃ち漏らせば、ダメージは確定だ。しかし、俺には先の雨との戦闘で、シールド分のエネルギーが減っている。

絶対に避けられない絶体絶命。

ビームの向こう側で、バースが笑んでいる。

狙って追いついたならバースはとんでもない戦術師だな。

でも、俺は鈴に足止めを任された。

彼女の期待に答えてやれなかった俺をまた、信頼してくれているのだ。

・・・応えなきや、男じゃねえよな。

俺は無意識のうちに、両腕を前方向に突き出す。

Bシステムが推奨した対処法は、轟砲を使つての対処だった。だから、きつと。

両の手のひらを付き合わせた俺は、轟砲にエネルギーをチャージする。

ぶつかった瞬間、俺の前方向だけで爆発するように設定して。

粒子ビームが、衝撃砲の爆発圏内に入った。

（——ここだ）

その瞬間、俺は轟砲を轟かす。

発射された不可視のエネルギー弾は、俺の真正面でぶつかり合い、当たり一面にエネルギーの余波を造り出す。

——ISから放たれ、空中に散らばったエネルギーは可視の粒子と言う形で辺りを漂う。

この性質があるから、瞬時加速時にはスラスタ付近に虹色の靄が発生しているし、ISの展開時に使用したエネルギーの余剰分が周囲を飛び交う幻想的な光景が出来上がる。

この粒子砲の対処法はその性質を使って、粒子の壁で収束された粒子を拡散する方法だ。

名付けて、「乱雲」。

俺の目論み通り、衝撃砲のエネルギーが爆発し飛散した残留粒子が壁となつて、バースの粒子ビームを拡散させていく。

射撃されたビームを全て、残らずだ。

周囲から見れば、俺が両手から虹色の霧を噴霧し、それによってビームが消滅したように見えるだろう。

しかし、これ。

レーザーと違って大気減衰しないビームを避ける手間が省けるのはいいが、視界が潰れるのは考えものだな。

そして乱雲の特徴は、ビームを乱すことではなく——稲妻を発生させることにある。

素早く時穿を手にした俺は、目の前の乱雲からエネルギーを回収しつつの瞬時加速で、正に稲妻のような速度で飛び出す。

攻撃用のエネルギーを瞬時加速に転用したんだ。出し惜しみつつ使う防御用シールドエネルギーとは速度が違う。

超界の瞳が銀色に輝きながら体感速度を調整するなか見えたバースの顔は——思わず苦笑いしそうなほど驚いた顔をしている。

一瞬で距離を詰めた俺を風ぎ払おうと、ガツチョンと伸ばした杭を横に薙ぐが——遅い。

ガツ——キンツッ！

体の横で立てた時穿と杭がぶつかった瞬間、初めは鈍い音を、最後には小気味良い快音を響かせて杭が切断された。

続けて振るった剣で、相手の技を写す謎の銀剣も叩き折る。

「チェックメイトってか？ バース」

ニヤリと荒々しい表情をしているのが、自分でもわかる。

Bシステムになると、戦闘自体はほとんどの反射的にこなせるようになるが、性格が変わるのが少し怖い。自重。

「——いいえ、まだチェックよ」

首に刃を宛がわれたバースがそう呟いたとき——ヒュンツ！

俺の首もとでも刃が閃いた。

あぶねえ、今のも反射的に首を反ってなけりや死んでたぞ。

見下ろすように斬撃の主を見る。

やはり、篠乃歌雨。零式の超速移動だ。

二転三転、宙でシールドを足場にバック宙を切った俺は雨を睨む。

……遂に動き出しやがったか。

この場における一番のアンノウン。

俺の幼馴染みらしいが、俺には記憶がないし、そうであるはずがない。

俺の首を切り損ねた雨は、バースには目もくれず剣を構える。

……どうやらバースを助けた訳じゃなく、俺に攻撃したことで結果的にバースを助けたって感じか。

「……気持ちの整理は付いたかよ？ 篠乃歌雨」

「……すす」

「す？」

激しく狼狽しているようだったから、Bシステム特有の相手を煽る口調でつい聞いてしまったが、答えが聞こえなかった。

雨はただ、俺を見て何事かを呟いている。

「クツちゃんを殺して……私も死んだあとあの女を殺すツ！」

……あー、聞かなきゃ良かったかな。

「せやあつー！」

どこをどう接続したらそんな結果が出たのか知らないが、時繫を構えた雨が瞬時加速で突進してくる。

空中で刃を噛み合わせた俺たちは、火花を散らせながら鏝競り合

う。

ていうか、なんだほんとにこの女。

さっきまで俺にたいして謝ってた人物だよなあ？

どうしてそうなった。

鬼のような形相で睨み付けてくる雨が怖くなったので、腕自体に瞬時加速の運動エネルギーを乗せ、振り切る。

ばっ、と身を翻した雨が姿勢を整えることなく、姿を消す。

来るぞ。斬撃が。きつと刃が体に当たるまであとコンマゼロイチ秒もない。あれは正に、刹那の一撃だ。

そうこうしているうちに——気配。背後。左斜め上！

「——ッ——」

人智を越えた反射で、俺は左のマニピュレーターで斬撃を受ける。激しく損傷した腕にエラーが出る。

幾ら操作しても、手の開閉すらままならない。無い方がマシなレベルの損傷だ。

左腕を犠牲に距離を取った俺は、そのまま壊れた腕をパージし、投げつけると同時に飛び出す。

相手の眼前で腕を撃ち、爆発させ簡単な目眩ましを作ると右利きの相手が反応しづらい右側に回り込み、斬空を放つ。

波のように進む斬撃は、乱射されたシユナイダーの弾丸で無効化された。

……やっぱりターゲットカーソルか。

相手方のエネルギーを感じ取って警告を示すハイパーセンサーは、視界内にホログラフィー表示されてる様に見えるが、実際は網膜に直接光情報が送り込まれているので、目を閉じてても相手の方向は分かる。

雨はそれのお陰で俺の攻撃を察知しているが、雨の斬撃はハイパーセンサーすらも反応できないエネルギー余波の感じられない攻撃。寄ってカーソル表示がどうしても攻撃の後に来ってしまうのだ。

いろいろ考えたなかで、俺とBシステムと瞳が導き出した零式攻略法は、最低でも相手の攻撃と同時にこちららも攻撃を放つこと。攻略法

じやねえよこれ。ようは真正面からぶつかれてることじゃん。

鈴のいった通り、真正面からぶつ倒す以外に方法が見つからないことに愕然としていると、体勢を立て直した雨がこちらを見ていた。

……目、逝ってますがな、あれ。

「どうしてあんな女がいいのクツちゃん……？　ただ二年前にちよこつと関わっただけの薄っぺらい関係のあの女がどうして選ばれているの？　経験と記憶なら私が一番なのに……っ!!」

呪詛のように繰り返される、小声だがしつかり聞き取れる声。

様子が、今までになく変だ。警戒していくぞ。

「仕事、これは仕事だから仕方なくやってるのクツちゃん……大丈夫。死んでも労災保険は下りるからあッ」

「お前の仕事なら下りるのはお前の労災だよッ！」

あと、誰が受けとるんだ。労災。

突如召喚された大型粒子砲の砲撃を乱雲で拡散しつつ瞬時加速で円運動を開始。攻撃のタイミングを探しだす。

雨は多分、キレたら行動だけは冷静になるタイプ。口頭では混乱しているように見えて、何をすべきかはキチンと把握しているタイプだ。

だから――

「逃がさないよクツちゃん」

粒子砲を射撃したまま、大量のエネルギーが消費されるのもいとわずに、俺の動きに合わせて器用に砲口を動かし続ける。

アリーナのシールドが破られ、客席が破壊されていく。

一瞬、ラウラたちのことを思い出してヒヤッとしたが、鈴のお陰で救出済みみたいだ。

蛇のようにうねる粒子砲を掻い潜り続けていると、粒子砲のエネルギーが尽きたらしく、宙に霧散して射撃も止まった。

徒に攻撃してエネルギーを消耗させた自覚があるのか、剣の構えかたが防御寄りだ。

「私は幼馴染みなのに幼馴染みなのに幼馴染みなのに幼馴染みなのに……幼馴染みなのにイ！」

さつきからずつと呟き続けている幼馴染みというワード。百歩譲って、俺の記憶が弄られているとしよう。

しかし、幼馴染みと言うのはどういうことなんだ。

俺が今まで生きた時間はたったの二年ちよいだ。

幼馴染みなんて、あり得ないのだ。俺からすれば。

「……お前は、一体誰なんだ」

通じるとも思えないが、聞いてみるしかない。

「……クツちゃんからそんな質問をされるなんて、昔の私じゃ考えられなかっただろうね」

「昔の私なんて言われても、俺はお前のことを知らないんだ。同意は出来んな」

そういうと、雨はまた悲しそうな顔をする。

その表情がどうしてか胸のうちに引つ掛かり、またぞろ偽りの過去を思い返してみる。

「……お前が俺を知っているのは本当みたいだが、俺は本当に知らないんだ」

改めて記憶と言うものの不確かさを思い知らされる。

偽りの14年間を刷り込まれ、更に人ひとりの記憶を抜き取られている。

「クロエちゃん的能力は残酷だね。一度間違えれば元には戻れないんだもの」

そのせいで、苦しんでいる誰かと剣を交えなければいけないと言う事実が、俺にのし掛かってくる。

「それは、仕事の後で記憶を書き換えるつもりだった、つてことか」俺の問いに雨が首肯する。

「だから、私にはあの子が必要な。仕事を終えればまた記憶を書き換えてくれる。そうすれば、私はクツちゃんの隣に戻っていける！」

雨が攻勢に出た。

瞬時加速を併用しての斬り込みを回避すると、視界の隅に雨が現れ、切り上げをモロに受け弾き飛ばされる。

……実は今の攻撃。攻略する糸口はある。

瞬龍と瞳が示した相手と同じタイミングで攻撃を放つと言う事は可能だと俺も思う。

ただ、どこから現れるか分からない雨に、いつもの攻撃で対応してもダメなことは明白で……

——装備構築中40%

その為の装備を瞬龍は現在、急速に構築しているところだ。

両手をつき、受け身をとって着地すると右足のスラスタに刀傷を付けられているのが分かった。

や、やっちゃまった！ 機動力を奪われたぞ。

動揺している間に、雨が接近してきて剣戟が始まる。

ISらしくない、剣道のような打ち込みを片手で受けきるのは想像以上に苦しくて、剣で押し込まれると同時に膝をついてしまう。

「降参して、クツちゃん。そうすれば命までは取らないよ」

ぐぐつと、体重の乗った時繫が時穿を押しきろうとするギチギチという異音が目の前で鳴っている。

パワー補助のない左腕を添えても意味を全くなさない。

その時だ。

「——残念だけれど、どちらにしる貴方の命はここで終わりよ」

バチバチという放電が雨の背後に見え、バースが再び紅い杭を構えているのが見えた。

いや、ただの杭じゃない。俺はさっきアイツの杭を切り落としたはずだ。

「限界を無理やり引きずり出す再大出力形態^{バーストモード}。初めて使ったけれど、案外心地いいものね」

バースの構えた杭は、俺が切り落としたモノとは様子が変わっていた。目を見張るのはその巨大さ。

直径1メートルはあろうかという杭が地面に突き刺さったアンカーを便りに今にも飛び出そうとしているのだ。

「待って、バース。このまま行けばあの子を回収できる。私に任せて

——」

「——その必要は無いわ。貴女はこの任務から外されたの」
「え……?」

一瞬、雨が呆けた。
「どう言うこと。バース」

「そのままの意味よ。貴女は見限られたのよ。何のためにその機体を託されていると思っているの? 仕事をきつちりとなすためでしょう? でも、今の時点で任務遂行時間を十分オーバーしてるわ。指揮官としては失敗も同然よね」

「待って……。待ちなさいっ! 貴方には引き継ぐ権利なんて有るわけがない!」

俺を押さえ付けている雨を見たまま、バースが杭に込めるエネルギーを更に上げる。

まさか……雨ごと俺を貫く気か!

「しっかり押さええていなさいよ。じゃないと貴女が死ぬ意味がないわ」

その言葉を最後に、バースとの回線が途絶える。

くそっ、このまま潰されてたまるかっ!

組織に捨て駒扱いされた雨の腕には全く力が入っておらず、右手一本で押し退けると同時に起き上がる。

その瞬間、杭が射出された。

あとは俺が脱出するだけだが、目の前にいる雨は迫る来る杭を凝視しているだけだ。逃げるそぶりが見えない。

きつと雨は、記憶を書き換えて、元の生活に戻ることを希望に、この仕事を続けてきたのだろう。

そして、その希望が今、途絶えたのだ。

因果応報だな。篠乃歌雨。

お前は元々学園の俺たちと親しい仲にあつたみたいだが、それを裏切って襲ってきたんだ。

組織から裏切られることもまた、覚悟はあつたんだろう?

だから、助けないぜ。俺は。

離脱しようとした一瞬前、横から見えた雨の呆けた横顔に心の仲で

そう告げる。

そして、雨の唇が最後に何かを紡いだのが見てとれた。

『約束、守れなくてゴメンね、クツちゃん——』

「——ッ！」

——武装の構築が完了しました。出力、開始

左手に現れた硬い金属の手触り。

そこに吸い込まれるように右手の時穿が吸い込まれていく。

触れた瞬間、この武装の意味が理解できた。

そうか、本当にスピード勝負って訳だな。

瞳が俺の体感速度を何倍にも引き上げる。

スローモーションで見た世界では、俺と杭との距離はもうメートル

もない。

とてつもなくゆつくりとした時間のなかで、俺は雨を背後に前に出

る。

構えろ。俺。

刹那の瞬間に単一仕様能力「超越世界」が発動し、鞘のなかで刀身が輝きだす。

Bシステムと併せて、普段の俺の五倍近い身体能力が出せるようになった。

そして更に、新たな武装である特殊鞘の内部機構が唸りをあげ、いつでも剣が抜けるようにセットされる。

杭と俺の体が触れあうその瞬間——！

（——閃刃!!）

左手が時穿の鯉口を切り、右手で一気に引き抜く。

居合い切りの要領で刃を鞘に滑らせると、内部にある二本の電極と電機子に電流が流され、刃がレールガンの様に押し出される。

押し出された時穿が杭に接触すると、まるで何もないかの様に刃が吸い込まれていく。

あまりの摩擦熱で赤熱化した杭が上下に広がって冷えていく。

それほどまでに、この居合い抜きは速かった。

本来なら、原理的には光速まで加速が可能な閃刃だが、瞬時加速を

逆に使用して無理やり超高速の域に留めたのだ。

俺たちを貫いたと思っていたバースが、逆に自分の杭が破壊されたという事実を目を丸くしている。

「う、クツちゃん・・・今の・・・」

あー、コイツらには俺がただの居合いで杭を切り裂いた様にでも見えたらしいな。

だが、それを説明してやる気はさらさらない。

「・・・約束、したからな。操縦教えてやるって」

「ツー」

俺の言ったことに雨が涙ぐむ。

そう、あれは夏休みに入る前、ハワイへ発つ前に俺は誰かと約束をしていた。

『わたし・・・クツちゃんにIS操縦・・・教えてほしいなーって・・・だめ?』

そう頼んできた顔のわからないヤツに、俺は何て言ったんだったか。

『ああ、分かった。約束するよ』

俺の顔を見て喜ぶ顔と、目の前で泣いている顔とがピタリと一致する。

それを発端に、封じ込められていた記憶の蓋が弾けた。

幼い頃の記憶。

久しぶりに甦った偽りの記憶になかに、雨の存在はあった。

一緒に遊んだ記憶も鮮明に思い出せる。

なんと言うことだ。

雨は・・・目の前の少女は、この記憶を一人抱えたまま、俺たちを攻撃していたのか。

自分に課せられた仕事という強制力に屈服して。

「約束を忘れていたのは謝る。だが、もう忘れたりなんかしないぜ雨」

そうだ。俺が自分の記憶が偽りだったと分かっても雨を幼馴染みとして認識できたように、雨もまた、自分だけが持つ偽りの記憶のせいで俺を幼馴染みとして認識せざるを得なかったはずだ。

恐らく、雨が学園に居たのは俺の監視のため。

自分が遺伝子強化体だと悟らせないために、政府が送り込んだ監視官だったのだ。

そういう事情があったから、俺が実家に戻るといったとき、強く反対した。

4月に俺が一週間休んだときも、俺の足取りを島の外で探していたんだろう。

植え付けられた記憶だとしても、それを一緒に共有しているということでは生まれた感情は本物だったはずだ。

だから、俺は思う。

「今まで無理させたな、雨。だけど俺が、終わらせてやる。訳のわからない仕事なんかやめちまえ。俺が責任をとってやる」

幼馴染みとして、お節介を焼いてくれた女の子に、少しくらい返さないで申し訳ないってな。

「ツ——!? クツちゃん今せ、責任って・・・!?」

「ああ、任せろ。泣かせちまった償いぐらいはするさ」

それに、そろそろ食事に物足りなさが出てきたところだしな。

「クソツッ！ またお前が阻むのか終クレハ！」

「悪いなバース。ついでにクロエってヤツにも伝えておいてくれよ」

再び時穿を鞆に納める。

頭の中で指示を出すと、簡単にその形態にする事が出来た。

バチツツツ!!とひととき強い放電現象が始まり、時穿が最大出力形態になったと分かる。

バースが折れた銀剣を手に、掛けてくるのが見える。

この攻撃に、距離は関係ない。ただ、目の前のものを切り裂く一閃

——

「——次来るようなら、今度はテメーの顔見せろってな」

全力で、剣を引き抜く——!

閃刃の上に斬空を重ね、高威力で飛翔する見えざる斬撃!

触れたバースの銀剣が切り裂かれ、牙龍のシールドを無効にする。

閃空刃が破壊したのは、バースの胸部装甲と、背後の実体シールド

ユニットだったが、そのダメージで牙龍のエネルギーは尽き、無理を
して操縦していたバースの意識も牙龍自身がシャットダウンさせる。

そして響き渡る、バースが崩れ落ちる音。

この様な結末をもって、IS学園襲撃事件は収束したのだった。

夕日の光景

ガシャン・・・ガシャガシャ・・・

閃刃と斬空の併せ技である閃空刃を放った右腕の装甲が崩れ落ちる。

電磁加速による圧力と、ブレーキとして使った瞬時加速の圧力に耐えられなかったのだ。

剥き出しになった右腕も、青く痛ましい圧迫痕が残っていた。

「クツちゃん・・・！ 大丈夫なの!？」

「なん・・・とかな。ちょっと無理しすぎたかもだ」

不利な状況下での戦闘に加え新技三本という無茶をすれば、ISにもダメージがでるし、リンクしている俺にも心的ダメージがでる。

かなりギリギリだったけど、なんとか勝てたな。この戦い。

「ごめん・・・！ ごめんなさい・・・！ わたしクツちゃんに酷いことを・・・！」

ISを解いた俺の横で、同じように零式を解いた雨が泣きじやくる。

俺はその震える頭を左手で軽く撫でてやった。

「まあ、なんだ。なんでもかんでも仕方がないで済ませる気はないが、今回ばかりはお前だけのせいじゃないと思うぞ。だから、気にしなくていい」

記憶がしっかりした状態で俺と戦っていたのだ。精神的にも辛かったと推測できるので雨を責めることは出来ないだろう。

「もし、他のやつがお前を虐めたりしたら俺に言え。責任はとるよ」

俺は、記憶を書き換える手段を断ち切ったんだからという意味で言ったのだが、凄く赤面してる雨を見て、ハッと気づく。

「も、もちろん幼馴染みとしてだぞ!? 知り合いが虐められてるのを無視はできんし、幼馴染みだったら尚更ほっとくわけにはいかないからな!」

慌てて追加した文句をきよとーんとした顔で聞いている雨。

あー、なんか蛇足だったのかな・・・。

・・・なんて思っていると。

「ふっ。ふっ。ふっ。焦りすぎだよクツちゃん。そんなに慌ててる
ころ初めて見たかも」

雨は、笑った。

俺の焦りようがそんなに面白かったのか、肩を震わせて憤まじやかに
笑いをこぼす。

それを見て、俺は安心した。

「・・・俺だって、お前が涙溜めて笑うとこなんか久しぶりにみただ
自分の恥ずかしいところを笑われたので、嫌みっぽく言う。

雨は、そっぽを向いた俺の背中を見ているらしく、背中に視線を感
じる。

「・・・うん。こんなに笑ったのは初めてかもね。わたしの人生初だよ」
そんなことは無い、と言おうとして止めた。

俺の記憶のなかでは、雨は太陽のような笑顔を浮かべて生活してい
るが、それは偽物。

今の時点で政府の一員として仕事をこなしてきた雨に、あんな幼少
期は無かったのだろう。

だから、初めて。

初めて雨は心のそこから笑っていると自覚したのだ。

「ねえ、クツちゃん。約束、守ってくれる？」

「ああ、IS操縦だろ？ 任せとけよ。リヴァイブは散々だが、瞬龍な
ら——」

「——ううん。約束。護って、くれる？」

そう訊いてきた雨の顔は、俺の記憶にある太陽の様な笑顔を浮かべ
ていた。

質問の真意が理解できた俺は気恥ずかしさを覚え、一瞬答えに窮す
るも、なんとか応える。

「ああ、任せとけ」

「・・・ありがとう、クツちゃん」

まあ、なんだ。結局のところ雨が言っていたように、経験と記憶で
は一番多くの時間を過ごしているのが雨だ。

いまさら黙って居なくなられるのもイヤだし。学園にいる間から
いは、俺が護ってやるよ。

心労と疲労で気を失う一瞬間。

俺はそんなことを考えていた様な気がするが、抱きついてきた雨の
感触で全て吹っ飛んじまったよ。

—— I S、零式。特殊コアネットワーク構築。登録、完了。
………あーあ。

@

目が覚めると、保健室のベッドの上だった。いい加減併設の病院連
れてけよ。

外を見ると夕暮れだったが、保険医の先生によると戦いが終わった
昨日の昼から、丸1日以上眠っていたのだという。

山田先生から送られてきた瞬龍のダメージレベルはB+。

束さんによる完全解体修理中だっけさ。

起きてから初めに面会に来た千冬さんによると、あの日教師部隊に
は自衛隊最高指揮権を有する日本国首相、稲村十志から秘密裏に嚴重
な待機命令が出されていて動くに動けない状況だったらしい。

『我々はI Sの運用に国際的な責任を以てあたっている。幾ら母国と
は言え国が干渉するのは条約違反だが、どういわけか委員会でも問
題視されていないようだ。連中が言っていた亡国機業という組織、根
が深いみたいだぞ。気を付けろ終』

そう言っって保健室からかっこよく出ていった千冬さん。

……でもさ、俺が割ったガラスの修理費を負わされたからって膨
れっ面はねーよ。内心大爆笑だったよ。

と、あの顔を思い出してまた吹き出しそうになった所に。

「クレハっ！ 無事で……無事で良かったです……！」

すとーんと頭から突っ込んでくる小さい人物。

「おフツ」なんて変な息を洩らしつつ、膝の上うつ伏せになったソイ
ツを抱き上げる。

「おい、アオ。てめえ、良くも胃に頭突きなんかかましてくれやがった
な……!?!」

「そこでキレル元気があるなら大丈夫そうね」

はあ、と安心したのか呆れたのか分からない息を洩らしたのはサラだ。

サラはパッケージのインストールが未だに終わっていないらしく、パーソナルロックされたサニーラバーを首に着けていた。

昨日も戦闘自体出来なかったらしく、なんで加勢に来なかったと責めてやる気満々だったのだが……このやり場の無い憤り、どこに向けてやろうか。

そばにあつた丸イスに足を組んで座ったサラは、俺をじつと見てくる。

「……バースと戦ったのよね」

「ああ、今度は日本にも中国にも引き渡さずに、委員会と学園で見張るってよ」

「そう……」

そう呟いたサラはなんだかよく分からない微妙な顔をしていた。

バースの身体は元々サラの兄、ウエルク・ウエルキンの身体だったのだ。

今回の戦いで女性体になったバースには最早ウエルクさんの面影がなくなっていた。

だから、俺には想像もつかない感情を抱いているんだろう。

下手に声をかけると失敗しそうなので放っておこう。

しばらく、アオをグリグリ弄くりまわしていると外から騒がしい喧騒が聞こえてきた。

——あ、あんたたち！押さないでよっ！——そうですわ！わたくし、別に心配など——はいはいお二人さん、ちよつとは素直になつた方が身のためだよー？——シャルロットの言う通りだな。それに兄さんは一度の喧嘩を引きずるほど狭量ではないから心配するな。ほら、箒も急げ——何故私まで見舞わねばならんのだっ！

「……」

「……」

「……あー、サラ。とりあえず落ち着かせるの頼めるか」

「便利屋みたいに使わないで頂戴」

そう言いつつも保健室の外へと足を向けるサラ。

扉から出る前、こちらを振り返った。

「・・・ええと、柊君。今月の末は・・・」

「分かってる。今回もちゃんと手伝ってやるから心配すんな。この間カタログも通販しておいたし今度持つて行ってやるよ」

「そう、悪いわね」

そう最後に言うのと扉の向こうへ姿を消すサラ。

・・・時期にあいつらが来る。

顔を会わせるのは正直言つて気まずいが、いつまでもギクシヤクするのもあるが、心準備くらいはしておこう。

そう考えながら、アオの頬つぺたをぐにぐにむにむにしていると、だ。

「・・・アオは完全な機械、というわけではありませんでした」

膝の上で、アオが喋りはじめる。

「篠ノ之博士に診てもらったところ、超界者特有の遺伝子構造は見られませんでした。博士の弁に依れば、アオもクレハと同じように、生後間もなくコアを埋め込まれた特殊適合者、とのことですよ」

「特殊適合・・・？ 人工的なIS適性者か」

「はい。クレハが男性のまま操縦者となっているもの、博士の実験的な試みだったようです」

おいおい、じゃああれか。

半年ほどコアと一緒に育てていると男性でもISが扱えるように成長することができて、俺の場合それでも暴走が起きたから体内に埋め込んだって訳か。

そう要約すると、アオが頷く。

「そういうことになりますね。しかし、現代では男性操縦者の発掘より、高い適合者を発掘する方が優先される傾向にあるので、進んで博士のようなマッドな研究に勤しむところは無いと思います」

つまり、俺や一夏、経公のようなケースは本当に稀なことか。

話題が終わり、再び静かになったところで、アオに聞いてみる。

「なあ、不安じゃないか？ 自分の今までを否定されて」

「不安じゃありませんよ」

意外にも、アオは即答してきた。

「聞かされた時は流石に怖くなりましたけど、よく考えればアオはもとも記憶が無かったですし、女王の為に動くことしか知りませんでした。それに、記憶云々ならクレハが先輩とされていますから。アオはちつとも不安じゃありませんよ先輩」

「・・・？」

少しニュアンスが違ってそうな『先輩』に首をかしげると、
がらがらがら——

「その子。学園で預かるみたいよ。表には出さないけれどインターン扱いで」

サラが、背後に一年ガールズを連れて戻ってきた。

「やつほークレハ。元気そうだね」

「この有り様で元気はないだろデユノア」

「昨日は無様な敗戦をお見せしました兄さん。この次は、必ずや」

「お前はどこの魔王配下だ」

「・・・ふ、ふんっ！ 一夏ならばあんなやつら、一掃していたぞ！」

「お、おう。一掃する中に先輩居るけどな？」

個性豊かな見舞いの文句をそれぞれが口にするなか、揃って素直
じゃない二人がいた。

「・・・手こずった様ですわね」

「・・・べ、別に心配なんて始めからしてなかったし！」

セシリアとはこないだよくわからん喧嘩をして気まずいし、鈴とは
プールの一件以来昨日まで話してすらいなかった。戦場のテンション
が無ければ言葉につまってしまうのだ。

しかし、チラチラ俺の顔を窺っているのは分かるから、心配はして
くれてるんだろうが・・・。

「——ひいっ」

アオに向けられる二人の睨みがすごいことになってる。

怯えたアオを、アオが気に入ったらしいサラに預ける。

「お前ら、そんなに睨むなよ。かわいそうだろ。そう言えば一夏はいないのか？」

珍しく顔を見ないので気になって二人に訪ねる。

「……一夏さんなら一昨日から実家に帰省しているそうですわよ。なんでも、掃除をしなければならぬだとか」

「主婦かあいつは」

帰省の理由に呆れていると、鈴がなにか言いたそうに俺を気にしているのがわかった。

「少し、鈴と話がしたい。外で待つて貰えるか？」

「——ッ！」

「良いけど……あつ」

「デュノア、そのニヤニヤ顔やめろよ……」

「なんのことかなあ？」

デュノアはイヤな笑顔を浮かべながらも、部屋にいる皆を廊下に追い出し、その後自身も扉も向こうに消えていった。

追い出される全員が全員、俺と鈴を睨んでいたが……。

どうも、互いに変な抑制があつたらしく大人しくデュノアに従っていた。

「……」

「……」

そして出来上がった二人きり。

おいおい、なんだよこの雰囲気。

ちよつと話がしたかったからとはいえ、自分で自分の首絞めることはなかったな……。

「ま、まあ座れよ」

「……そ、そうねっ」

ぎくしゃくぎくしゃく。

そんな擬音が着席する鈴の動作から聞こえてくるようだ。

話を切り出すタイミングが見つからず、視線を右往左往させる俺。そんな俺を鈴がチラチラと見てくる。

何かを期待している。そんな目だ。

「……あー、一先ず、昨日は助かった。ありがとな」

取り敢えず発した俺の言葉に、鈴がホッと一息つくのが聞こえた。「お、お礼を言われるようなことじゃ無いわよ。が、学園のトラブルなんだから、私だってできることはしたいし……。それに……」

「それに……?」

我ながら意地の悪い事をすると言いつつ、聞き返した。

「それに、クレハと仲直りしたかったし……!」

そういつた鈴が、下唇を噛んで顔を赤くする。

あ、こら。シートとるな。顔隠すなら言わなきゃ良かっただろうに。

俺も鈴と同じように、鈴の言葉で少し安心した。

仲直り。

俺も、それをしたかったと思ってたからこの場を設けた。

仲直り出来なくとも、何とかして糸口は掴めないかと考えていた。

思い起こせば、鈴とプールへ行ったあの日。

俺は、鈴が求める何かを見誤って鈴を傷つけた。

「……俺も、鈴と仲直りしておくべきだと思ってたんだ」

俺生来の見栄っ張りだが、口にしようと思っていた言葉をねじ曲げる。

ああ、くそつ。やっぱり、鈴の前だと素直に成りきれない。

どうしたいか心では分かっているのに、理性が邪魔をする。

あのときと同じだ。

俺の煮え切らない台詞に、鈴が顔をしかめる。

きつと鈴も思い出したのだろう、あの日の夕暮れを。

偶然にも今も夕日の見える場所にいる。

あの日と同じ。

でも、きつと口にする言葉があの日と同じでは、俺たちの溝は埋まらないままだ。

だから――

「……鈴、俺はお前に言わなきゃならないことがあるんだ」

「・・・？」

そう前おいて、語り始める。

「今の俺では、お前の期待に応えてやることはできない」

鈴の顔が歪む。

違う。分かっていたとはいえ、俺は鈴を悲しませたい訳じゃない。

「俺は・・・、産まれて二年しか経っていない遺伝子強化体だ。しかもその二年の間に色々な出来事があった」

まずはその事を打ち明ける。

鈴が驚くのを見ながら、今までのことを思い出す。

成長促進装置から出てきた直後に見た、母さんの顔。双龍の実験で俺が殺めた命。超界者の存在と俺と鈴の関係。

こんな俺が、鈴と一緒に居られるのか？

そんなことを何度も考えた日もある。

「詳しくは話したくないんだが・・・その過去のしがらみのせいで俺は、自分を許すことができない」

鈴と再会したのは全くの偶然だった。

双龍を追いかけるためのパートナーとして、鈴に選ばれたのも俺の力の及ばないことだ。

しかし、共に過ごすうちにいつしかそれが当たり前になっていた。

二年前のあの日々に戻ってきたかのような錯覚だった。

そして、それが今。

その日々が今、俺のもとから去ろうとしている。

考えてみれば、当然の帰結なのかもしれない。

俺と鈴が別々にいれば、それだけで女王の因子が二つに分かれる。

俺が学校を辞めてドイツ軍にでも戻れば超界者との戦いは収まるのかも知れない。

「昨日の奴等がアオを狙ったことから、女王の復活に一番近いのは俺を捕らえることだ。だから危険度的に言えば俺から離れることが一番安全なんだと思う」

「で、でもそれじゃああんたは・・・」

「俺なら心配は要らない。自分の身ぐらい自分で守るさ」

肩をすくめて心配ないとアピールすると、真正面に鈴の浮かない表情があった。

——しまった、と思った。

俯いて、剥き出しの肩を震わせた鈴が、ガバツと顔を上げる。

「そう。じゃあ、クレハはあたしなんか要らないってわけね」

「……」

鈴の言葉に、言葉を返せない。

返す言葉を持ち合わせていない。

仲直りしようとしたはずが、糸口すら掴めないままに終わろうとしている。

鈴が席を立つ。諦めたような、自分達は終わってしまったのだと解っているような足取りだ。

……事実、俺の前に鈴が居ないことは、鈴のためにもなり、俺のためにもなる。

しかし、分かれるとしても、こんな形では納得できない。

どうにかして鈴を止めるんだ俺。

自分の素直な感情はなんだ。頭で言葉を並べるのは簡単なのだからそれを——

「……!!」

——そう、考えていたのに。

気づけば俺は立ち上がり、鈴の腕を掴んでいた。

口より先に、行動してしまった。

自分を引き留めた腕に驚いた鈴が、目をまんまるにして俺を見上げる。

汗が吹き出るようだ。

何を言えばいいか考えていたのに、一気に吹っ飛んでしまった。

鈴の、不安げに濡れた瞳に引き込まれそうな錯覚がする。

つまり、俺は鈴の瞳を直視出来ている。

今しかない、と思った。

「——俺は、お前に負い目を感じていたんだ」

俺の独白を、鈴は黙って聞いている。

「お前は、強い。自分に正直に、相手に立ち向かえるその強さが、堪らなく眩しかった」

両親のため、正体不明の組織に単独で立ち向かえる鈴は、間違いなく強い。

ただただ、力を振るうだけの俺とでは、比べ物にならないくらいに。「でも、今は違う。感謝している。鈴のお陰で俺は、自分の過去を知ることができた。俺自身がその過去を飲み下せなくとも、その事実は変わらない」

何も知らずに、ただ記憶から逃げていた俺にちゃんと向き合うチャンスをくれた。

散々好き勝手に振り回されたが——それだけは本当に、感謝しているんだ。

「だから、鈴。俺のパートナーとして一緒に居てくれ」

意外に、口を突いて出た言葉は素直な気持ちだった。

言ってることは無茶苦茶だ。別れた方がいいのに、そうはしたくないと言っている。

鈴と離れたくない。二年前に抱いた感情を引き摺っているのかもしれないが、そう思ったのだ。

「……今度も、クレハから誘ってくれたわね」

「……そう、なるな」

鈴も思い出したのだろう。5月末の月夜の事を。

あの時も、俺が鈴を追いかける立場だった。

まるで俺を待っていたかのような演出だったが、あの夜に俺と鈴は確かなパートナー関係を成立させた。

そして、今度も。

「まあ、あれだ。学園に提出した書類の類いもあるしな。途中でペア申請破棄したってなったらウワサになる」

「はっ」

捲し立てて並べた建前に、鈴がキレ気味の声を出す。

うおっ、さつきまでのしつとりした雰囲気どこだ。目の前にライオンいるみてーだぞ。

内心ビビった俺が、顔を引き吊らせていると……。

「……はあ、あんたって、ほんつとに素直じゃないわね」

「……ツンデレが言うなや……」

「誰がツンデレよ」

「お前だこのツンツン女」

いつもの調子で掛け合いをすると、呆れた表情だった鈴がふつと微笑む。

「そう、だったらちよつとデレてあげるわよ——クレハ、あたしの味方になつてくれる？」

その台詞と表情に、どきりと俺の心臓が跳ねた。

そう言えば、あの日の宣言、開放回線に流れてたんだっけな……。

今度の鈴は、不安そうな顔をしていない。

俺の答えが分かかっていて、それを待っている。

「ああ、俺は鈴の味方だ。超界者だろうが何だろうが、お前と一緒に戦って、一緒に解決する。絶対に離れたりしない」

鈴の目を見て、言い切る。

これからきつと、俺たちを取り巻く状況は激しい変化を迎える。

だから、乗り越えていくんだ。鈴と言うパートナーとともに。

その覚悟が、ようやく決まった。

そんな感じだよ。

自然と、俺たちはお互いに笑みをこぼす。

だが、俺はその時、見つけてしまった。

——鈴の背後に……忍び寄る影——!?

「……えつと、クレハは……その、前の遊歩道での続きイイ——ツ!？」

その影は、何かを言おうとした鈴の首を締め上げ、一瞬の間に絞め落としてしまった!

き、キレイに極ってたな……というか、部屋にまだ誰か居たのか? この会話を聞かれてたのなら恥ずかしいことに——!

「——心配しないでクツちゃん、ここに居るのはわたしだけだからねエ」

鈴の首をチョークで絞めたのは、俺の幼馴染み雨だった。

「わたし、人様に言えないようなお仕事も多かったから、気配を隠すの得意なの。それで、ちよーつと高校生の節度を外れた兆しが見えたからね。お邪魔させてもらっちゃった。あ、お邪魔じゃないか。別に大事な話じゃ無かったもんねえ鳳さん？」

「……………」

カッ開いた目で鈴をガクガク揺する雨。

お、おい……鈴を揺すったらヤバイんじゃ……！

俺が雨を止めようとしたとき、

————バツツツツツ!!

保健室のドアが、何かで弾き飛ばされる。

い、今の炸薬音は……ラファール・リヴァイヴの灰色の鱗殻グレースケール！
つてことはつまり……。

「よく見ておいて下さいねクツちゃん————これが嫉妬に狂った女の姿だよ」

雨が訳のわからない事を言った後、どうやら一発で弾切れになったらしいシールドピアスをガツチャンと棄てたヤツを先頭に、全員が姿を現した。

「扉の外で聞いてはいたけど……ちよつと糖度高すぎだよね……。……カロリー消費のために運動しようよクレハ。今すぐ。そう、今すぐツ！」

「ふ、フフフ。わたくしのブルーティアーズがもつと痛め付けろと囁いてきますわ……。フフツ。クレハさんはどれだけ撃てば穴だらけになるのでしょうか。わたくし、気になりますわ」

「わ、私がペアを組んでいたと、あんなこと一言も言っただけならなかったと言うのに……。何故ですか！ あの頃のストイックな兄さんは一体何処に！」

「————殺すわ」

「アオがクレハを殺して、女王となった暁には世界を壊してアオも死にます」

「わ、私は何もしていませんよ!? 知らぬ間に全員がおかしくなっ

いたのです！」

きつと散々皆を止めるために手を尽くしたのだろう。箒が可哀想だ。

あとサラ。お前が一番怖い。

それぞれがそれぞれのメイン装備を展開しつつ、俺に向かって歩み寄ってくる。

こ、コイツら……。

俺はというと、ぶつ壊れた瞬龍は整備中で展開できず、後ずさった際にベッドの縁に躓き、その場に座り込んでしまう。

用心のために持っていた銃も……ない。

「それじゃあみなさーん。まずは明るい新婚生活のため、浮気なんて出来ないようにしっかりと旦那様の心に鎖を付けておきましょうね」

「……はい！ 先生！……」

「そして。幼馴染みの間を引き裂くべったんこはくこう！」

お、オイッ！ 鈴！ 窓から投げ捨てられたぞ!?

気を失っている鈴はなす術なくベランダから落下していく。

外でドチャツツという気味の悪い音が聞こえたが……そ、それどころじゃない。

目の前に迫った悪魔たちに滅多うちにされる！

瞳も諦めているのか、活路を計算しようともしないで——

——病院へ予約の電話をしますか？

なんて言ってるやがる。

「……よし、殺ろう」

その後、俺はガチで島外の病院へ搬送された。

夏の終わりと終わらない騒動

八月末日。

入院生活が終わり、気がつけば夏休みも残り一週間もない。

夕日が傾く時間に病院から一人帰ってきた俺は、自室のドアを開けた瞬間、立ち込めるシャンプーの香りに顔をしかめた。

「あらクレハ。タイミング良いじゃない。丁度みんな出たところよ」

三階からぶん投げられていたハズの鈴が、ベッドに腰かけてその艶やかな髪をタオルで撫でながら言う。

「……俺は病院に担ぎ込まれたつてのに、なんでこいつは無傷なんだ。」

「あ、クレハ。お帰り。ごめんね。僕あの時ちよつと動転してて……」
「入院中の見舞いでイヤというほど聴いたから、もう謝るなデユノア。キリがないぞ」

鈴の口ぶりから察するに、何人かで風呂に入っていたらしく、首にタオルを掛けたオレンジジャージ姿のデユノアが申し訳なさそうに俺の入院中の荷物——鈴に借りたポストンバックだ——を受けとる。
せめてもの罪滅ぼしのつもりか知らんが、どうせなら病院まで迎えに来てくれれば良かったのに。

ポストンバックつて言っても、折れた肋骨にキくんだから。

そんな俺たちのやり取りを椅子で本を読みながら聞いていたラウラが、読書を止めて足を組んだ。こいつはこいつでロングTシャツ一枚というミナトの寝巻きと同じ服装で日中を過ごしている。おい裾捲れるぞ。

「ふふん、だから言っただろうシャルロット。私の兄さんは寛大だと。部下の不始末の責任を体でとれる、それが上官の素質だ」

「テメーらは部下でもないし、俺は上官でもないぞ……っつて——」

あー、疲れたと、肩をぐるぐる回しながら見渡した俺の部屋。

あまりにも馴染んでいたため、違和感を感じなかったが、百歩譲ってデユノアとラウラがいるのはいい。

鈴と同じ一年だし、遊びに来ることもある。

だが、今回はそれだけでは終わっていなかった。

「——なん、だよこれ……」

俺は部屋に横たわる四つのベッドを見る。

四つと言っても、横に並べられる訳もなく、二つで一組の二段ベッドが部屋に置かれていた。

「ああ、これ？ 二人ともこの間の襲撃で部屋壊されちゃったから一時的にウチに来てるのよ」

鈴は元のベッドと同じ位置にある窓際の下段で、ツインテールを結う。

その上がラウラで、隣の上がデュノア。となるとその下が俺の場所か……。

にしても、スゲー圧迫感だな二段ベッド。

在るだけで部屋の狭さが普段の二割増し位に感じる。

「学園はなにもしてくれなかったのか」

「あー、えーと。一応ウエルキン先輩のところに行くようには言われたんだけど……」

「？ なんかあったのかデュノア。サラのやつ、一人部屋だっただろ？」

「いや、アオちゃんが同室になったんだよ。ほら、ウエルキン先輩かなりアオちゃん気に入ってるみたいでね……」

顔に影が射したデュノアによると、サラは部屋にいるときはずっとアオにべつたりな状態らしい。

人形のようにとまではいかないが、まるで妹であるかのようにアオを可愛がるもんだから部屋に居づらいのだと言う。

「あー、アイツなら飛び付く外見だもんなあ……アオって」

アオにストレスが溜まっていくと思うが、サラに捕まったからには諦める他ない。

「そこでウエルキン先輩の部屋の前で佇んでる二人を見つけて、ここに来ることをあたしが提案したってわけよ」

鈴がフンと自慢気に言ったが、それをスルーして、下段のベッド

へと潜り込む。

優しさを自慢するなよ鈴……。

試しに寝転がってみると、案外悪くないと思った。

手の届く距離に上の段のベッドがあり、この閉塞感に安心を覚えてしまう。

「なに？ アンタ気に入ったワケ？」

「ああ、案外元のベッドで寝るよりか熟睡できるかもだ」

「変わってるわねえ」

最後にツインテールの両房を手で整えた鈴が「よし」と満足げな声を出す。

「さて、クレハ。あたしたちは既にご飯も食べたしお風呂にも入ったわ」

「ん？ ああ、メシか。んじゃ俺は食堂で——」

入院した日から逆算して今日の日替わり定食を思い浮かべながら起き上がる。

「——と言うわけでこの四人で徹ゲーするわよ」

「ふざけんなテメエ」その言葉、待ってたよ鈴！」「ふっ、遂にこのマイコンの出番ということか……」っておい二人とも。なに意気揚々とハード用意してんの？ 俺は食堂にいくぞぞ？」

ヤバイ空気を肌で久々に感じた俺は、着替えも程ほどにして逃げるように部屋から出ようとする。が、鈴に指示を出されたラウラに俺は停止結界で動けなくされた。

四肢が動かせないため眼球だけでラウラを睨むと、その際、部屋にある様々な変化によりやく気づくことができた。

まず、部屋の中央に置かれていたハズの小ぶりなモニターがいつの間にか一般家庭に置かれているような大型のものになっている。配線回りも完璧だ。オンライン接続のための有線ケーブルが壁の接続口に刺さっていて、無線LANが各部屋に備え付けてあるにも関わらず有線にすると言うことはラグを嫌うガチゲーマーの仕様だと見える。

こ、この周到な用意は……！

ゲームで夜更かしする鈴を主導に、軍で稼いでいるラウラが高額機材の調達、エンジニアとして優秀なデユノアによって適切に整備されたシステム。

文句なしのゲーム環境が、俺のいない間に出来上がっていた。

「ほら、やるわよクレハ。この間の一件で学園からお小遣い貰えたからソフトは心配ないわよ」

鈴の格好が前のように薄いものになっているため、ディスクを入れる際の四つん這いの姿勢にヒヤリとさせられる。

黒のピッチリしたノースリーブは、鈴の残念な部分をこれでもかという程に強調しているが下のホットパンツから伸びる太ももが、ほっそりとした艶かしさという言語化しにくい魅力を放っている。

ついでにディスクがうまく入らないのか、小ぶりなお尻をフリフリするもんだからたまらない……いい、いや耐えられない。

「あれえ？　もしかして負けるのが怖いのかなあクレハは？」

いつの間にか俺のベッドに寝転がってコントローラーを握っているデユノア。

身体の下に敷かれた俺の枕によってデユノアの胸が持ち上げられ、緩んだジャージのジッパー部分からふっかぁーい谷間がチラチラと見えたり見えなかつたりしている。

肩から前に垂らした長い金髪が女子らしさを更に高め、ジャージという一見ダサイ服装を「無防備さ」という強力な武器へと変えている。なにをいつてるんだ俺は。

挑発するデユノアの妖しい表情が違う意味を持っているような気がし始めた俺は、男に対して毒過ぎる二人に奥歯を噛み砕く勢いで歯軋りをしつつ、ラウラに逃げ場所を求めろ。

「わびとさびに始まり、ゲームと言えば日本を代表する文化の一つ……。クラリツサに教え込まれたウメハラ持ちを見せる時です」

左手で俺の動きを止めつつ、もう片方の右手で靴を探るラウラ。

水平に構えた左腕は、靴を漁るために姿勢を低くしたせいかやや斜め上になっており、俺の方から手首下部、前腕下部、上腕下部と、真っ白なラウラの腕が一望できるポジションにある。

加えて、ラウラの着ているTシャツは誰のものか知らんが男物でラウラには大きすぎ・・・余った袖口からラウラの腋まで見えてしまった。

じよ、女子の腋って案外綺麗なんですね・・・。

いつものISスーツではおっぴろげにされている部分だが、なまじシャツで隠されている分輝きが違う。

つか、なんでお前アケコンなんか持ってたんだ。

女子三人のあられもない姿——勝手に俺が注視してしまっただけだが——から目を閉じて己の精神を静める。

そうだ。今日は退院直後なんだ。キレて身体に無理を掛けるのも良くないことだ。

完全に心を滅した俺は目を開き、ラウラに解除しろと伝える。

解放された俺は鈴の言うように大人しく座布団に座る。

まあ、一戦やってコイツらをボコれば大人しくなるだろう。

食堂がしまる時間まで十分にある。一戦くらいなら些末な問題だ。そう軽く考えて呑気に定食の予想を再開した俺には、この三人が夜な夜なゲーム大会を開いて、ゲームの腕をしこたま磨いていたことなど知るよしもなかった。

@

翌日、床で寝落ちした三人をベッドに放り投げた俺は、部屋の引き出しから本屋のロゴの入った紙袋を取り出すとサラの部屋にむかう。

それにしても、あいつらのせいで寝不足だ。

空腹の方は買い置き菓子パンで凌いだが、こればかりはどうしようもない。

メジャーな『IS／VS』に始まり、古いゲームアーカイブから引つ張ってきた格ゲーにレースゲーム。取り分け格ゲーが一番白熱したな。

ラウラのやつ、マジで奥義13連撃を相殺するとは思わなかったぞ。もちろん全部通常攻撃で、だ。ウメハラの再臨かもしれないな。

格ゲーでは歯が立たなかった三人に、仕返しとしてレースゲームで青甲羅を全部当ててやった記憶に浸っているうちにサラの部屋につ

く。

「……静かだな。」

時刻は8時。夏休みの朝としては静かなのも頷けるが、ここはあの生真面目なサラの部屋だ。

いつも通り6時には起きているはずだが……寝てるのか？

取り敢えず、ドアをノックする。

木製のドアの柔らかな音が二回響いてしばらく、反応がない。

あれ？ 留守か？ アオも居るんだよな？

仕方ないので携帯に連絡を入れようと取り出したところで――

――ドアが開いた。

「は、はい……どちら様ですか……？」

もともと細かい声を更にか細くして出てきたのは――アオだ。

ドアノブに寄り掛かる様にして体を支えるアオは、俺よりも体調が悪そうに見える。

「ああ、クレハですか……おかえりなさいです……」

「お、おう見舞い以来だなアオ……大丈夫か？」

「は、はい、少々血糖値が危険域を越えるほどに減少してまして……おうどん食べたいです」

希望を言い切ったアオは、ふらふらくぱたん。い、行き倒れた……

一体何やってるんだサラのやつ。ルームメイトの体調くらい見てやれよ。

「サラー？ 入るぞー」

アオを小脇に抱え込み、紙袋を持った手でドアを開く。

散らかった部屋を慎重に進むと、大量の布に埋め尽くされた部屋にサラはいた。

「……あら、退院したのね……。おめでとう」

「……こいつもこいつでげっそりしてやがる……」

「何してるんだお前ら？ 三日目は明日だぞ。体調整えろつつつたのサラじゃねえか」

「……そう、もう明日なのね……」

作業をしていたのか、手にした布と針を見ながらしみじみと呟くサ

ラ。

アオをベッドに寝かし（なんで朝っぱらから四人も介抱してるんだ）ポケットのあめ玉をアオの口に押し込んだあと、サラの様子を伺う。

手にしているのは針と布・・・というよりは、どこもかしこもヒラヒラした未完成の服のようだ。

サラはそれらを手に、ふふふ、と虚空に向かって笑っている。ヤバい。コイツヤバい。

「・・・もしかしてこれ、コスプレってやつか？」

サラの口にも飴玉を放り投げ訊ねる。

しばらくもぐもぐ糖分を補給したサラは、幾分か楽になった様子で答える。

「ん・・・そうよ、明日は勝負の日。コミックマーケット三日目よ」

——と、サラはキメ顔でそう言った。

・・・いままで明言は避けてきたが、サラは一年の頃から漫画を描いている。

ジャパニメーションについて詳しくかった兄ウエルクさんの影響か、サラはドイツのクラリツサ並みに濃い知識と情熱を持つ玄人だ。

本の趣味は主に女性間での恋愛。サラらしい綺麗な絵柄で人気もある。

なんで知っているかと言われれば、去年その本の売り手を手伝ったからだ。

「三日目にコスプレって・・・売り子どうするんだよ。去年はフォルテが手伝ってくれたがアイツは今ダリル先輩とアメリカだぞ」

「売り子についての心配は要らないわ。今年は印刷部数も少なめにしたし、私たちが十分に捌ける量よ」

「・・・じゃなんでコスプレなんか・・・」

そこで気づいた。

サラの持っている服。

肩幅が、サラが着るには大きいサイズだ。

「・・・柊君、貴方去年はなんの服装で参加したかしら？」

「え？ ああ、確か夏服だったな。男物持ってなくて」

男だとバレて直ぐに手伝えと命令されたので、仕方なく学園の制服を着て参加したんだっけな。

あっけらかんと言うとサラはため息をついた。

「貴方、自分が公の立場に無いと解っているの？ コスプレだと思っ
て貰えたから良かったものの、場所が違えば一気にバレるわよ」

「・・・もしかして俺、危ない橋渡ってた？」

こくと頷くサラ。

その脇には今縫っているジャケットと同じ色のスラックスが見えた。

「今年は私服もあるでしょうけれど、折角なのだからこれを着て参加してみなさい。午後には回る余裕もできると思うからコスプレブラスに行つて写真でも撮りましょう」

刺繍をしていた糸と裏側で丁寧に切り、朝日に照らしてジャケットの完成具合を確かめる。

「・・・俺が着る服なのはいい。去年の時もコスプレの写真とりに嫌々見に行つたからどうすればいいのかわかる。」

だが・・・でもな・・・。

「・・・そつちのアイドル見たいな服は絶対に着ないからな？」

「ツッ！」

布の上に畳まれた状態で置いてある赤と白のフリフリ衣装。

それを素早く片付けたサラは、後で俺が逃げられない状況を作るつもりだったのか悔しそうな顔だ。

「・・・ある程度予想していたが、現在進行で作っている服が男物だったので油断していた。材料布をカムフラージュに使ってやがったぞ。」

何も言わないサラに止めを刺す。

「・・・まさか、お前が着るのか？」

「ツッ！」

自分が着た姿でも想像したのか、顔を真っ赤にしたサラは衣装を鷲掴みにして——バストゥー！

ゴミ箱に投げ込みやがった。

あーあ、もったない。

その後、俺の衣装を握りこんだ拳が、お俺の顔に叩き込まれた。ありがたい。イベント終わったらお札に仕返ししてやるからな。楽しみにしてろ。

@

そして翌日。

朝、9時。

俺は去年と同じ光景にゲンナリしていた。

「朝からすげえな・・・」

「同感するけれど、私たちはサークル参加よ」

西ゲートのサークル専用入り口から、一般入り口に並ぶ列を見て、俺は呆れともつかない声を出した。

声がちよつとイラついてしまったのは、抱えている段ボールが重いからだ。

段ボールに入っているのは、先日サラの閃きによって追加された頒布物で、四ページ程の冊子となっている。

パラツと開けばアオに似ているような似てないような女の子がチュツパやらうまい棒やらを口に含んでいる絵がお目見えするのだが、実際の人物を題材に描くのはどうなんだサラよ。

ついでに言えば、今日は異様に暑い。

午前中だと言うのに30度に迫る勢いだ。

後で着替えるので取り敢えず服装はシャツにサマーベストを着てきたが、軽装にも関わらず汗がだくだく出る。

「はい、入場パスよ」

そう言っつてホルダーを渡してくるサラは全く汗をかいているようには見えない。

青いワンピースのお陰か、視覚的にも涼を与えてくれている。

しかし、いつもの涼しげな表情が今日は一段と鋭くなっているところを見るに、暑くないなんてことはないみたいだ。

サラから手渡されたホルダーに入ったサークル専用パス。

俺はそれを首にかけたあと、荷物を持ち直してサラの後を追った。

幕張内部に入ると、外よりは幾分か暑さも和らぐ。日差しがないからだ。

サラが応募して勝ち取ったスペースは所謂『島』で、隣のスペースの人と挨拶を交わす珍しいサラも見ることができた。

つと、ぽけーつと突っ立ってる場合じゃない。

段ボールからテーブルクロスを取り出すと、机に敷き、ソコに本を数冊置いておく。

新作だけじゃ足りないので、過去の本も並べておいていく。

うう・・・は、肌色が多すぎる・・・。

百合本なのが災いしたのか、肌色率が通常の二倍だ。

それに追加してアオがモデルの表紙まであるぞ。もう逃げていい？

「設営は終わったかしら？」

「ああ、今終わったところだ。全部裏返していいか？」

「ダメに決まってるでしょう。そうね・・・開場まで二十分だし着替えてきてはどうかしら？」

「あれをホントに着るのか？ いっちゃなんだが中二臭さ全開なんだが」

「大丈夫よ。普段の貴方も十分に中二臭いわ。ほら、いつも斜に構えている所なんて痛々しくて——」

「——わかったっ！ 着替えてくる！」

サラが差し出した衣装をふんだくると、表示に添って男性用更衣室を目指す。

・・・こうしてみると色々な人がいるな。

スタッフにコスプレイヤーにガチガチに緊張したサークル参加者。

多くの人がこのイベントに参加し、楽しみを求めているのだろう。

そう思うと、自然と口元が緩むのを感じた。

・・・二回目にして俺も空気に慣れ始めたって事かな。

寮を出る前にトイレには行っておいたので、更衣室のある階へ行くとうと階段に差し掛かる。——と。

「ん？ あれ、柵？ なにやってんのこんなところで」

「お、大倭先生ツ・・・!?!」

丁度、下から上がってくる大倭先生と鉢合わせた。

し、しかも服装が・・・!!

「ああー、柊もコスプレ? いやー、ビックリだね。あたしも今回はサークル参加でコスプレ担当!」

「いや、テンション上げてる場合か先生!? 生徒にメイド服姿見られた教師ってそんな気楽なのか!?!」

「いやーねー、今のあたしはヒミコよヒミコ。本名だけど源氏名なら名乗れるわ」

先生は、メイド服だった。

俺のイメージではメイドはもつと慎ましい存在だと思っていたが、こ、この人の衣装はどこもかしこも短いガチのコスプレ用だ。

大人の成熟した肢体がこれでもかと強調されて、目のやり場に困る。

しかも俺は今見下げているんだ。

視界の中には否応なく先生の胸元が目に入り、デュノアと同等か、束さんサイズの谷間が見えているツ!

す、すげえな。ジャージのチラチラ感も強力だが、逆に見せつけることで大人の余裕を演出することができている!

・・・いや、この際凄いと讚えるべきは大人と対等に渡り合えるデュノアの方か。さらに一説には箒は別格だと言う噂をフォルテから聞いたことがある。

「で? で? 君はどんな衣装なのかな? コスなのかなーツ?」

放心している俺からすると衣装を抜き去る大倭先生改めてヒミコ。

流石はIS学園教師といったところか、反応が出来なかったぞ。

階段の踊り場まで後退した先生はそこで衣装を広げる。

「うっわ、凄い出来じゃない。誰が作ったのよ?」

「・・・本人があまり言いたがらないので言いません」

「とするとあたしにバレる危険のある人かー、生徒なのは間違いなさそうね」

今回の衣装は、ドイツ軍の軍服風なものになっている。

何がインスピレーションを与えたのか、サラは時たま『Briah!』^創や『Atziluth』^造《流出》!』なんて眩きながら作っていたとアオは言っていた。

更なる高みへと導かれちまったみたいだな。

先生から衣装を引いたくるとさっさといけと視線で訴えかける。

「それにしてもいいコス作るわねこの人。作品選びもなかなかお目が高いわね——つと、そんなに先生を睨まないでよ。言いふらしたりしないから大丈夫よ」

「・・・俺が先生をバラす可能性はありますけどね」

「あははっ、そんなことしたら——殺すわよ」^{バラ}

そう言っって先生はミュールの脚でスキップしつづつ去っていった。

・・・あの目、殺りかねんな・・・。

@

今年の夏コミは、発表によれば会場の事故とかで例年通りの盆辺りには行われず、やむ無く月末にずらしたらしい。

お陰でサラも頒布物を作る余裕が出来たとか嬉しがっていたが、ネット上では嘆く声も多く見かけた。地方民ってヤツか。

そして午前十時。開場の時がやって来た。

日にちがずれたとはいえ、約20万人もの人が参加するイベントだ。

開場時の勢いには戦くものがある。

一斉に開かれたゲートに人が飛び込み、目的のサークルまでダッシュで駆けていく。

スタッフの声なんかガン無視で駆けていく彼ら彼女らは闘牛を思わせた。

数十年前にあったと言う注意書には『押さない駆けないドラゲナイ』^イってのが有ったらしいが、何なんだ。ドラゲナイ。

「呆けないで！ 第一波来るわよ！」

「わかってる！」

サークルからサークルへと移動する人たちに片っ端から声を投げ掛けていく。こんな肌色、さつさと売れてしまえ。

時折ここを目当てに買っていく人もいて、サラが案外名の知れた人物だと再認識する。

しばらくすると忙しく駆けている人も見なくなり、落ち着いた雰囲気会場内に流れ始めた。

「さて、しばらくは落ち着けるわね。私は後から委託版を買うつもりなのだけれど、貴方は？」

「俺は買うつもりはないよ。どこか行きたいなら店番は任せとけ」

新刊売り切れの札を出したサラが、なぜかソワソワしながら言う。泳ぐ視線を追いかければそこには・・・見慣れない段ボール。

「・・・追加分なんかあったのか？と思いつつそれに近寄っていくと・・・」

「そ、それにはさわらないでッー！」

サラが、叫んだ。

あまりの大声だったので近くのサークルの人たちも驚いており、サラは顔を伏せて「すみません・・・」と座った。

しかし、目だけで「さつさとどっか行けコノヤロウ」と凄まれるので、俺は。

「あー、んじゃ俺はコスプレ会場にでも行ってみようかな・・・しばらく回ってくる」

そう言ってスペースから出ていく。

・・・アイツがあそこまで焦った声を上げるとは思わなかったな。去年はどこかでよそよそしい感じの手伝いだったから新鮮な感じだ。

でも、サラは何に焦ってたんだ？

コスプレ会場までの道のりでも、そのなにかを俺は導き出すことはできなかった。

@

屋外に指定されたコスプレ会場は、カメラを持った人たちが溢れかえっていた。

場所が場所なだけにもっとコスプレしてる人とかもいて良いと思うのだが……。

「視線くださいーい！」

「肩組んで！　そうですー！　もっと攻め受け意識して！」

「ローアングラー？　つまみ出せ！」

……多分、あの壁の向こうなんだろう。

カメラに囲まれたコスプレイヤーがいる反面、囲まれていないコスプレイヤーももちろんいる。

道端でどうすれば良いのかわからずにおろおろしているやつが一人いるが、隣のメイド服を見てみる。

年齢30に達しそうにも関わらずノリノリでポーズ決めてるぜ。関わらんとこ。

もともと来るつもりは無かったのに、サラの視線に耐えかねて逃げてきた俺だ。

同じようにする事もないので、道端に佇む。
暑い。

日差しがきついつて言うのに、サラに渡された衣装は長袖の軍服だ。

色も黒いのでガンガン体感温度が上がっていく。

しかし、被っていた制帽を脱ぎ、汗をぬぐってかぶり直したときだ。

「……く、くず兄さんだ」

「あ、ほんとだ。くず兄さんだ」

「キルヒアイゼン卿は？」

「いやいや櫻井ちゃんでしょー」

「どうでも良いけど、完成度高くない？」

「ホントだな。くず兄さんらしさでてる」

「くずっぽい！　くずっぽい！」

……なんて罵倒が囁かれ始めた。

聞こえはしないが、超界の瞳が全て文字に起こしてしまうのだ。

っーかクズクズって……。

思わず入学してからの自分を振り返って納得しかけたじゃねーか。

たぶん、彼らが言っているのはこの服装のキャラについてなのだろう。

後半の数人の発言については俺自身の素体についても言ってるみたいだが、安定のスルーだ。

「クズだ……」

「クズだ……」

「クズよ……」

……スルー……してやる……!

聞こえるたびに、自身の覗きやセクハラまがいのことといった罪を思いだし、テンションが下がっていく。

自分を保つために必死に周囲からの囁きに抵抗する……だが。

「あの、写真撮っても良いですか!？」

「……そうか……俺は……いや、僕はクズだ……」

「台詞ありがとうございますア——ツ!」

俺は、罪の意識に完敗していた。

ははっ……どうせクズですよ……もう殺せば良いんだ……。

……

……

……

「……貴方、意外とノリノリね」

「ツ!」

気がつくと、目の前に呆れ顔のサラが立っていた。

何故か俺の目の前で写真を確認しつつ、「よし……げつと」と小さく

呟いている。

「お、俺は……いったいなにを……!？」

「覚えていないの? あれだけファンサービスしておいて?」

サラが俺のポケットを示すので、手をつ突っ込んで中の紙を取り出す

と……。

「……名刺、か?」

「そう。こんなに人気出るなら貴方も作っておくべきだったわね。活動の幅が広がるわ」

「……いや、このままレイヤーとして生きていく気はないんで」
冷静に思い返してみれば、少しだけ思い出せるぞ。

人から教えられた長台詞をつらつらと唱える……。俺の姿が、
自分のしたことに愕然としていると、時計を確認したサラが訊いて
きた。

「もうお昼ね。私の方は予定が終わってしまったのだけれど、貴方、食
事は？」

「要らん……。食欲ねえ……」

正気になった拍子にいままで感じていなかった暑さにあてられて、
ちよつと吐きそう。

サラが空いているかも分からないトイレにいったので、木陰に座り
込み休んでいる。と。

「……なんだこれ？」

会場の隅に置かれたコンテナを見つけてしまった。

デカイコンテナだな……。車の走行コースだったかここ？

辺りを見ても、コンテナの持ち主らしき人は一人もいない。

……。なんか、嫌な予感がするな。

元々このイベント。

延期になった原因が発表されおらず、ネット上では様々な憶測が
飛び交っていた。

事故と言われても単なる事故では納得がいかず、実際に会場に赴い
た人もいた。

そいつらは揃って同じことを言っていた。

明らかにスタツフじゃない人たちが走り回っていた、と。

会場の事故なんだからイベントスタツフ以外が居るのは当たり前前
だろうと思っただが、こいつを見るとあれらの書き込みがただのお騒が
せ情報とは思えなくなってきたな。

それに、春の例もある。

いちおうセンサーで改めたところ、内部にIS反応は無し。

今のところ動きがないので、今のうちにサラに連絡しておこうとI
Sの回線を開いた——その瞬間。

「ッ!？」

内部から巨大なアームが突き出てきて、俺に向かって手を伸ばしてきた。

瞳が反応しきれない高速過ぎる起動に、不意を突かれた俺はその手に掴まれ持ち上げられた。

まさか、ISがあつたつて言うのか？

頭をよぎるのは四月の出来事。

あの時逃がしたゴーレムの残りかと思つたが、こ、これは・・・違うぞ！

突然の出来事に、周囲の人たちが蜘蛛の子を散らすように走り出す。

そんな中、コンテナから全貌を明らかにしてきた敵の正体は異様の一言に尽きた。

ISではない。

瞳もIS反応を認めてはいないし、これ程巨大なISを俺は見たことがない。

ゆうに五メートルは越える全長に、アメフトの防具のような肩。

まるでこれと同じサイズの敵と戦うために作られたかのようなデザインだ。

加えて、印象的なのが胸の中央で輝く青い光と、赤と金色の装甲。

装甲の素材は金とチタンの合金。硬く、コーティングがなされているようだ。

敵のロボットは、胸と同じく青く光るアイカメラで、俺の顔を見ている。

『・・・おお、これは驚いたな。ボクにしては珍しく運が良いようだ』
外部スピーカーを通して聞こえたその声は、変声か掛かっているか
手が読めない。

体の内部に人の反応は・・・ナシ。遠隔操作か・・・ッ！

「何の運が良いんだよ・・・。機嫌良いならこいつを放してくれないか・・・ッ?！」

『それは無理な相談だ。ボクは君を探すためにここにいたんだから』

「そうか・・・——ソイツは良かったな！」

放す気がないと分かったので、瞬龍を緊急展開——あ。

「——あ、IS・・・整備中じゃねえか・・・！」

ISを展開し、こいつの手のの中から逃げてやろうと思っただが、先日の戦いで壊れた瞬龍は束さんが整備中だ。今、俺の中にはない。

『？ どうしたんだい？ 君の武器があるだろう？ はやく展開する
といい』

「・・・生憎、あんたみたいな名乗りもしないヤツに見せる武器は
持つてなくてな。出直してこいよ」

相手はどうやら俺を知って狙ったようなので、適当に話を伸ばす。
時間を稼いで、サラの到着を待つんだ。

「——ああ、これは失礼したねミスター柊。社交性の大切さは父さん
から学んでいたはずだったのに失念していたよ」

ロボットが大きな仕草で自分を指す。

『——ボクがアイアンマンだ』

「・・・ぜ、前時代のヒーローが俺にケンカを吹っ掛けてきやがっ
た・・・。」

新たなる敵と夏祭り（前編）

「——ボクがアイアンマンだ」

堂々と、そしてハッキリと告げられた敵の名前に、俺は目を見開く。
——アイアンマン。

鉄の男の異名をもつその人物は、四半世紀以上前に最盛した兵器製造会社『スタークインダストリー』の若き天才エンジニアだ。

スタークインダストリーとは、パワードスーツを世界で初めて実用化した会社で、アイアンマンの実用を機に世界中でスーツ開発の波が訪れたのだ。

そして十年前。

各国企業で次々とスーツの開発・実用が繰り返され、スーツ開発会社としての立場を失いかけていたスタークインダストリーに追い討ちを掛ける形で束さんのIS発表や、CEOの交代等があり、完全にヒーローとしての活動を辞めていたと思っていたが……

まさか、未だに旧式とも呼べるスーツ開発に勤しんでいたなんて思ってたなかったぜ。

「単刀直入に言おう。キミのISのデータを渡せ。ボクはそれが欲しい」

「……はっ、天才エンジニアの名が泣くぞ、アンソニー・エドワード——」

「ボクはあの人じゃない」

スピーカーから流れる、人のモノではない合成音声。

元の声は想像も付かないが、妙に強く否定した。

「じゃあ、誰だよお前」

「キミが知る必要はない。ボクが今のアイアンマンだ。会社の為にも、キミの秘密が知りたい」

だったら俺を拐って調べればいいだろうに……と思ったが、実際やられると困るのは俺の方なので黙っておく。

俺は今も、ヤツの巨大なスーツに握られた状態だ。

逆撫でするような発言は控えるべきだろう。

しかし――

目の前のスーツの操縦者は、どうも父親を嫌っているようだ。父親の欠点だった社交性のなさに気を払っているような発言もあったし、俺が父親の名を出そうとすると遮る始末だ。

理由はしらんが、そこに脱出のヒントがあると見たぜ。

「……あんたの会社の噂はほとんどの聞かなくなったが、息子がこれじゃあ落ちぶれるのも無理はないな」

「……なんだと？」

「会社の為とか言って白昼堂々襲撃してくるヤツが、どうしてヒーローなんかやってられるんだよ」

「――ツ―」

よほど煽り耐性がないのか、俺をつかむ手に力を籠めていくアイアンマン。

く……苦しい。

たった今思い出したが目の前にあるスーツ、歴史の副読本で見たものとは多少違いがあるが、アイアンマンの中で最も攻撃力のあるとされるマーク44だぞ……！

このまま握り締められたのでは俺はきつとトマトのようにくちやぐちやになってしまうだろう。

だが、俺の目論み――時間稼ぎには成功した。

高速で近づいてくる飛行物体――

「――ヒーローたる資格がないなら、斬っても問題ないわね？」

急に、俺の身体が宙に浮く。

俺を掴む腕が綺麗に斬り落とされたのだ。

すれ違いざまにアイアンマンの腕を切り落としたのは、『明日を奪うもの』の金色の装甲を纏ったサラ。

その姿は騎士のように輝いている。

アイアンマンを挑発し、介入するタイミングを作り出したのだ。

なんとか着地した俺は回線を介してサラに話しかける。

「助かったぜサラ。なんか異様に遅くなかったか？」

「貴方からの救難信号を受け取ったとき、入ってたのよ」

「……どこに？」

「——個室ッ！」

思わず聞き返してマナー違反を犯した俺を余所に、サラはアイアンマンと激突する。

カメラを潰すために回り込んで頭を狙うようだが……アイアンマンも巨体に似合わず動きが速い。

そのアンバランスなスペックに翻弄され、上手く立ち回れないでいる。

「——つあッ！」

振り回される巨腕がサラを薙ぎ払い、地面に墜落させる。

「もう一機居たみたいだが、ボクの予定は変わらない。ついでの研究材料が出来たな」

背後のコンテナから、切り落とされた腕の予備スベアを取りだし、ガシヤン。

アイアンマンの腕が真新しいものに換装された。

「おいつ。大丈夫かサラ！」

「……大丈夫よ。でも今のは痛かったわね。修理後だと言うのに装甲の10%が機能してないわ」

バカ力ぢからよ……と呟くサラ。

俺たちの纏うISは、空を飛び回れる分火力に置いては若干弱いところがあ、稀に近代兵器にも劣る装備がある。

しかし、ならばなぜISが近代兵器を凌ぐ存在だと言われているかというと、携行性や飛行性能に大きなリーチがあるからだ。

実際、高性能な日本の10式戦車なんかは地雷携行性や戦闘機飛行性能で難なく潰せる。

そしてISは、その戦闘機や地雷すらも蹴散らせる現代の超兵器。陸戦、空中戦に対応した汎用兵器なのだ。

——だが、今相手にしているのは陸戦に特化した特化型兵器。時として汎用が特化に負けることも否定できない事実なのだ。

「重装甲に高火力。おまけに動きも速いわ。一応粒子砲もあるけれど、ISを狙ってきたのならなんらかのコーティングはしてるでしょ

うね」

「加えて並木が邪魔で自由に飛べないと来た。狙ってここで待ち構えていたなら上手いな」

「他人事みたいに……って、なんで貴方は隠れているの!？」

「いや、瞬龍整備中で出せないんだよ。だから、任せた」

「任せた……って、柊くんツ!？」

コソコソ通信していると、しびれを切らしたアイアンマンがサラに向かつて拳を降り下ろす。

それをサラは跳躍してかわした。

「ちよこちよこして目障りなヤツだな……。作戦は決まったのか？」

「……私としてはこのまま退いて欲しいのだけど……」

アイアンマンが腕の装備をバスターソードに切り替えるのを見て、冷や汗をかくサラ。

「——まあ、無理な話よね」

@

降り下ろされた刃を刃で受け止めるサラ。

刃が噛み合って火花を散らす。

「セアアツ！」

力比べでは勝てないと察したサラが、刃を逸らすように振るう。

前のめりにいとも簡単に崩れた体勢の隙をつき、背後にまわるサラ。

「全身装甲の旧式パワードスーツなら——ここッ！」

直上に飛んだサラが首筋に刃先を向け、装甲の切れ目——うなじに突き下ろす。が。

——キインツ！

「エ、エネルギーシールドッ!？」

「違うね、ボクのはエナジーシールドだ！」

動揺するサラを振り向きざまに掴むアイアンマン。

サラの大剣を阻んだのは旧型の電磁斥力エネルギーシールドだが、現行するISにも劣らない強固なものらしい。

サラを掴んだ手のひらが、輝きを放ち始める。

何かを・・・チャージしているような眩い光だ。

「ISには絶対防御なる保護機能が付いているみたいだど・・・至近距離でのこれは、防げるのかな？」

胸の中心で輝く光が、腕に伝達し、手のひらに集束する。

あれは、きつと必殺技の類いだ。

シールドで防御しようにも、密着した状態ではシールドも絶対防御も意味をなさない。

ISにおける防御の死角に、敵を入り込ませてしまった――！

「――リパルサーレイ――ツ！」

天空に向かって放たれた光線に、サラの姿が呑み込まれる数瞬前――

（わ、笑っている・・・？）

サラの顔がニヤリと、微かに笑っていたのに俺は気がついた。

――バアアアアツアツ！

青い光線に、サラの姿が呑み込まれる。

攻撃に手応えを感じたらしく光線は長い時間照射され、サラが受けたであろうダメージは計り知れない。

上空から、ビームによって巻き上げられたサラが、辛うじてISを纏って落下してくる。

俺は慌てて飛び出したが、サラは俺にぶつかる前にPICを起動し、フワリと着地する。

「――お、おいっ！なんで逃げなかったんだ！」

「ツ・・・流石に効くわね。・・・良いのよこれで。試すにはちようどいいダメージだわ」

腹部に直撃したと見られるビームによって焼け焦げた装甲を棄^すてつつ――サラは立ち上がる。

「た、試す？ 何をだよ」

「――ひとつヒントよ。このISは元々どこが造ったものかしら？」

突然のクイズに俺は面食らうが、当然答えられる。

「双龍なんだろう？ だけど、それが――」

——どうだって言うんだよ？ と続けようとした俺の言葉は遮られた。

アイアンマンの接近を見てサラが制したのだ。

「説明するより、見てもらった方が早いわ」

そう言っただけで立ち上がると、大剣を掴み上げる。

ダメージは甚大。装甲も殆どを失った。

IS学園からの救援は……場所が場所だけに難しいだろう。

この状況なら戦うよりも逃げる方が良く素人でも分かるのに、サ

ラは敵と向き合っている。

勝てる勝算があるのか。

その時、超界の瞳が敵とサラの力量を見て、勝率を弾き出した。

——サラ・ウエルキンの勝率、95%

サラは……何をしようとしてるんだ……？

「——貴方の装備、かなり強いわね。私のISじゃあ、総合的に劣っている」

「だったら大人しく諦めてISを渡したらどうだい？ 女性をムダに

傷つけるのはボクの趣味じゃあない」

そう言ったアイアンマンに、サラは微笑みかける。

経歴上——普段全く笑みを見せないサラが笑うとき……

それはイラついているときだ。

「戦場で余裕を見せるなんてとんだ素人ね。——さっきの攻撃も、多

めに見積もって七割ってところの出力でしょう？ それが分かって

いたから敢えて受けてあげたものの、やっぱり受けるべきじゃ無かつ

たわね」

サラが一步踏み出すと、アイアンマンの巨体が一步退く。

……サラのやつ。

殺気だけでアレを圧倒してやがる……！

「意外と痛かったわ。せっかく修理したサニーラバーが台無しよ。お

まけに中途半端に攻撃しておいてから女性を傷つけるのは趣味じゃ

ない？ ——随分と舐めた口効いてくれるわね」

こ、こええええええツ!?

客観的に見て思ったが、サラのマジギレは学園の中でも一、二を争うレベルかもしれない。

マジで寒気がする……！

サラの殺気にたじろぐアイアンマンは、「う、ううう……」と呻き声を洩らす。

痛いところ突かれて言葉も出ないらしい。

しかし、周囲を観察する余裕はここで終わった。

バチイイツ！

次の瞬間、何らかの行動を起こしたのか、サラのISの周囲に放電現象が始まったのだ。

……最大出力形態……では、ない。

もつとシステム的で、計算されて余ったエネルギーが漏れ出している感じた。

……そう、まさにラウラの——

大剣を腰に据え、まるで居合い抜きでもするかのように身を屈めるサラ。

そして、呟いた。

『Valkyrie Trace System』、発動」
瞬時に膨れ上がったサニーラバーのエネルギーが、サラの背後へと噴射される。

「——貴方はヒーローでもないし、戦うには戦場を舐めすぎよ」

宙に漂った金色のエネルギーを吸収し、瞬時加速を行うサラ。

それを、二回。二重瞬時加速だ。

踏み込んでからの必中の距離。

その時初めてサラは剣を抜いた。

大剣の振り方ではない。

もつと鋭い、刀のような振り方。

明らかにサラの太刀筋ではないが、ずいぶん様になっている。

スパツと、一太刀で両足を切断されたアイアンマンが、背中から転がる。

続けて飛び上がったサラは空中で二度と剣を振り、上空から真下に

向かって両腕を切断していく。

・・・切断面が、綺麗に溶けている。

金とチタンの合金だぞ。

それを一撃で切り裂くなんて・・・。

ラウラの時、VTシステムは暴走状態にあり、その実態を見ることは出来なかったが、今確認した。

サラのISは双龍が造ったものだ。

当然、超界者に対抗できるように独自のシステムを組み込んでいる。

サラが発現させたVTシステムは正常に機能したらしく恐ろしい強さを見せつけており、日本の剣術を手本としているような動きは、さほど詳しくない俺でもそれが達人のものだとわかる。

「この中にいなくせに、悲鳴を上げると言うのはどういうことかしら？ ずいぶんと肝の小さい男ね」

「ううううう、ううるさい！ 今日準備不足なだけだ！」

「おまけに諦めも悪いとなると・・・もう見る価値もないわね」

・・・えーと、サラさん？

相手、泣きかけてませんか？

赤い装甲を持つアイアンマンを、ダルマのように転がしたサラは、その腹の上ののって操縦者を虐めている。

ひでえ・・・アイツひでえ・・・。

精神的に言えばマジでガキっぽい相手にここまで非道になれるとは。

最近、電話で話したフォルテに「クレハさんって年下には甘いつすよねー。○リコン？」とかって言われた俺も見習うべきだろうか。

そうこうしているうちに、マーク44の装甲上部がバシユツと開き、何かが飛び出た。

『—————、今回は負けてやるが、次あったときは覚悟するんだ！』
そう叫んだ物体は・・・お馴染みのアイアンマンの形に一番近く、アレがこの巨体の本体だと言うことが窺えた。

残りのパーツや、コンテナさえも瞬く間に飛び上がり去っていった

アイアンマンの後を追う。

周到なやつめ。

別に無くて困らないが、自分の部品をひとつ残らず回収していきやがったか。

装甲が全て飛び去る拍子にサラは地面に転がり落ちた。

今はISを解き、立って腕の出血を押さえているが・・・ダメージが大きそうだ。

「お、おい。座つてろよ・・・。救急車呼ぶぞ」

「・・・いいえ大丈夫よ。このくらい・・・」

俺が取り出した携帯を閉じるため、一歩踏み出したサラがふらつく。

「バカ言え。あれだけの質量のビームだぞ。平気なワケがあるか。いから座れ」

俺にしがみつく形でしやがみこむサラ。

ISの補助も無くなってるんだ。

それに、あれだけの強さを引き出せるVTシステムなら身体への負担も大きいのだろう。

「・・・滅茶苦茶になってしまったわね」

「ああ、この分だとこれで切り上げかもな」

周囲の惨状を見て残念そうに呟くサラ。

アイアンマンのあの巨体で動き回ったのだから、路面はボロボロ。

並木は薙ぎ倒されてるし、ビッグサイトの壁も一部ぶち抜かれている。

・・・楽しんでたみたいだし、一層悲しいのかもな。

「・・・まさかあんな相手とまで戦うことになるとは思ってなかったわ」

「同意するぜ。今じゃほとんど聞かない名前だから予想だにしていなかった」

遠くからストレッチャーの転がる音がする。

案外早い。あらかじめ学園が手配しておいたのだろうか。

「あのぶんだと米国安全保障局のお抱え組織も存在するかも知れない

わね」

「……S. H. I. E. L. D. ってどこか」

「……S. H. I. E. L. D. とはアメリカの持っている特殊組織の中でも一番謎で、底が知れない組織だ。」

過去に二度ほど表舞台に立ち、国難に立ち向かったとされているが、情報もバラバラで信憑性にかけるのだ。

そして、そのS. H. I. E. L. D. の実戦部隊というのが――

「――『復讐者たちアベンジャーズ』。アイアンマンの例で言うとISは彼らの仕事を取ってしまったみたいだし、イヤな名前ね」

「もし本当に仕掛けてきたら勝てないかもな。神様とか巨人が居るって話だぜ」

ストレッチャーと救急隊員が到着し、サラをストレッチャーにのせる。

サラは疲れのせいか、意識が朦朧とし始めているみたいだ。

「でも、良かったことがひとつあったわ」

「良かったこと？」

聞き返し、今日のことを思い返す。

「……はて、不運にしかあつてない気がするが。」

なにが良かったんだらうか。

「――あ、貴方と織斑くんの……性転換ユリモノ……午前中で――」

「……は？」

サラが何をいったのか分からなかった。

呆けると、一瞬でサラは救急車に運ばれて俺だけが残される。

気づけば、たった一人で夏の暑い日差しを浴びていた。

「……気を失う前、キレ顔が笑顔に取って代わられていると噂の

サラは――めっちゃ嬉しそうに笑っていた。

「……ふう。」

「……売れたんだな。午前中で。」

そりゃよかったよ。畜生め。」

夏休みもほとんどが終わり、あとは二学期への準備期間。
新たな問題の発生と共に、俺はサラへの復讐を誓ったのだった。

第四巻終了。

番外編『真夏の夜の夢〜クレハエピソード〜』

……いよいよ暇になってきた。

学園襲撃から入院中の俺は、一人個室で限界を感じていた。

壁のカレンダーに目をやると、日付は8月15日。

そう。お盆だ。

病院の廊下からでも夏祭りやらなんやらの話題が聞こえてきて、誰かのお見舞いにでも来ているらしい数人の集団が遊びにいく算段をつけていたらしくケツてなった。

世間のお祭りムードから逃げるため、朝からISスーツを新調したりと有意義な時間を過ごしていた俺だが、とある天才——天災の一言でその平穩はぶち壊された。

「クーちゃん！ お盆だよお盆！ 日本人はお盆にすることがあるのですが、それはなんでしょーか！」

「病院だぞ束さん。もう少し静かに騒いでくれ」

突然部屋に飛び込んできた母親束さんの額を押し戻しつつ、冷ややかに返す。

「くうーっ、静かに騒げなんて矛盾した難題を束さんに突きつけるとは！ 流石我が息子だよ！」

「だったらその息子のためにもうちよつと静かにしてくれませんかねえ！」

テンションが上がってきているのか、今日も今日とて着ている暑苦しいドレスのスカートをバツサバツサする束さん。

……一発殴って鎮めるべきか。

そろそろ口煩い看護師さんが来ちまうぞ。

「——さて話は戻すが我が息子よ。東さんは実家に帰ることにしました！」

「ホント突然だな！　んなこといちいち——って、え？　実家に？」

「思わず東さんを二度見すると、何故かドヤアと決めている。

「いやあー、折角の盆だしね。叔母さんにももう一度会いたいですあ……」

そしてふつと……申し訳なさそうに笑う。

「——箒ちゃんにも、謝っておかないとだからね」

そう言われて思い出したが、篠ノ之姉妹は不仲だったな。

一夏づつに聞いたことだが、東さんがISを作っちまったせいで、家族が離散状態なんだとか。

「ご両親はどこにいるのか分からないらしいが、当時幼かった箒だけが叔母の住んでいる篠ノ之神社に引き取られたらしい。

「……もしかして箒に紅椿を与えたのも、その負い目か？」

「うーん。そうとも言い切れないし、違うとも言いにくいなあ……」
眉を寄せる東さん。

「でも、まあ妹の初めてのお願いだったからね。お姉さんとしては叶えてあげべきだったと思ったの」

今度は一転。軽く微笑む。

表情から、自分のしたことに対する正誤の迷いが見えた。

「……まあ、そういう風に思っ上げて上げられたなら仲直り出来るんじゃないのか——つと、ここに来たつてことは俺も連れていかれるんだろ？」

ベッドから降りながら東さんに聞く。

「勿論だよ。クーちゃんは東さんの子供だからね！　親戚の集まりに呼んであげないと！」

「騒ぎになるのが目に見えてる……って、なんだこれ？　外泊届？」

立ち上がって体の調子を見ていた俺に差し出された一枚の紙。

上部には外泊届とあり、俺の名前とこの病院の院長の名前があった。

「凄いな。こういうのって当日に取れるモノなのか？」

「ううん！ 偽造！」

「正式に申請してこいやー！」

その後正式に許可が降りた俺は、2日だけ外泊を認められたのだった。

最後にキレたせいで折れた肋骨が微妙にズレたが・・・東さんマジックで元の位置に戻された。

死ぬほど痛かったがな。

@

初めて来た篠ノ之神社は、祭りの前日と言うことで準備に慌ただしかった。

国際免許を持つと言う東さんの運転するレンタカー——金持ちの割りに車持ってないらしい——で都心から少し離れたここまで来たが・・・案外祭りの規模は大きいようだ。

篠ノ之神社は小山の頂上に御神体を祀っていて、それを囲むように敷地が広がっている。

故に、広い。

「やーやー、懐かしいねえ。東京大学を中退して研究所に引越した以来かな？」

その広大な敷地を石階段の前で見上げつつ、隣で東さんが声をあげた。

「つーか、本当に来て大丈夫だったのか？ アポ取ってないんだろ？」

「そこはホラ、サプライズ？」

「不安しかねえ・・・」

とにかく、先んじて階段を登り始めた東さんの後を追う。

階段を鼻歌歌いながら登る東さんだが、妙にソワソワしているらしくいつもの元気も空回りきみだ。

屋台の設営をしている人たちの間を抜けて、社に向かうんだが・・・

「おっ、おっちゃん久しぶり——！ 元気元気い？」

なんて、一人一人に声を掛けて回るもんだから気が気でない。

誰も彼も驚いてるし、後ろの俺には変な視線が投げ掛けられる。えつと、マジでどう紹介する気なんだこの人……。

なんとか屋台ゾーンを抜けて、静かに篝火が用意されている社前に着くと……

「……ただいま」

急に束さんの元気が静まった。

俺からは見えないが、どうやら誰かいるらしい。

「——あら、あらあら。びつくり。いつぶりになるのかしら？束ちゃん」

そこにいたのは着物に身を包んで柔和な笑みを浮かべている女性。

歳は——束さんの年齢からすると、母親と言うには若すぎる気がする。

つまり、この人が——

「……久しぶり。雪子叔母さん」

驚くほど丸くなった束さんが女性の名を呼ぶ。

この人が篠ノ之姉妹の叔母さんか……。

事前に聞いていた年齢だと今年で47歳になる、という話だったが実年齢より落ち着いた印象がある。

「本当に久しぶりね。あらあら大荷物。しばらくはここにいるつもりなのね？」

「……うん。盆の間くらいはここにいます」

「そう、そう。近所の皆も喜ぶと思うわ——あら。こちらの方は？」

うっ、遂に気付かれた。

束さんは自分で紹介すると言っていたが、正直にいったら騒ぎになることは目に見えている。

正直なところ、俺は束さんのことをまだ母親だと割り切れていないので、嘘をついてもバレない自信はある。けど、束さんがぼろ出しそうなのがするんだよなあ……。

「あつ、え、えーと、雪子叔母さん。この人は——」

@

・・・結果として。

「さあさあ、お上がりください。東ちゃんのお手伝いさんなんて大変でしょう？ 明日のお祭りも楽しんでいってくださいな」

「は、はあ・・・。どうも・・・」

東さんは真実を言うことは無かった。

どういう理由かは知らないが、俺のことを自分の助手だと紹介したのだ。

そして、社から離れたところにある篠ノ之家本家に案内されたのだが・・・。

「すみませんねえ、ウチは畳なもので・・・スリッパは用意して無いんですよ」

「あ、いえ。俺もスリッパは履き馴れないので、お構い無く」

何でか知らんが、凄じ緊張する。

考えないようにしてはいるのだが、言っちゃえばここは俺の祖父母の家でもある。

篠ノ之姉妹の両親はいないので、叔母さんである雪子さんが住んでいるのだが、なぜか異様に意識してしまう。

あー、落ち着け。俺。

ここは他人ン家なんだ。そう思うように努めろ。

東さんも俺の正体を隠したことだし、そうした方が不審な部分は隠せるぞ。

入って案内されていると、次第に造りも覚えてくる。

篠ノ之家は純日本造りで、畳敷きの大広間を襖で幾つもの部屋に分割している。全部の襖を取っ払えば、大奥のあのシーンが完成するかもしれない広さだ。

俺たちは、何故か筥の部屋にまで案内してくれちゃった雪子さんの後を追ひ、本家に追加で増設された一面に案内された。

真新しく、内装も旅館の一室みたいだ。

崖に隣しているらしく、窓から田舎の風景を一望できる。まあ、森だらけだけだ。

「しかし、男女が同じ部屋とはいかがなものかね」

「あらあら〜？ クーちゃんは束さんと同じ部屋で困ることもあるのかな〜？」

雪子さんが、お祭りで神楽舞に使う舞台を見てくると言って俺たちをおいて去ったあと、それぞれリラックスして腰を落ち着ける。

「別がないが・・・。この年で母親と同じ部屋ってなんかむず痒いんだよ。ついでに言えば——失礼な言い方になるが、俺はまだ、束さんが母親だって言う自覚は無いしな」

母親だと思えず、見方を変えれば普通に女性と部屋を同じくしていると云うシチュエーションに不安を感じてしまう。

鈴と同室なのは、アイツがガサツすぎるのどこっちが遠慮する必要がないんで慣れたが、流石にいきなりこの状況はビビる。束さん美人だし。

「・・・まあ、しようがないよね。束さんも母親って呼ばれる資格があるって思ってる訳じゃないからね」

腕を頭の後ろで組み、座椅子に体を預ける束さん。

・・・さて、どうしようか。

束さんは何やら思案顔になっちゃったし、雪子さんも舞台に行っちゃった。

正直、居心地が悪い。

・・・質問攻めに会う覚悟で、祭りの準備にでも出てみようか。いや、止めとこう。

屋台の準備していたおっちゃんたちの眼は完全に俺を敵視してる眼だった。俺が何をした。

俺は束さんに許可をもらうと、家のなかを見て回ることにした。

束さんは笑顔で「雪子叔母さんにはうまくいっとくからいーよ」と言ってたので、俺は落ち着いて——よく知らない母親の実家を見て回り始めた。

部屋を出ると、正面には15メートルほどの廊下があり、左にはトイレへと続く薄暗い廊下がある。

廊下を渡りながら右を向くと中庭で、松の樹やら紅葉が植え込まれた日本庭園が広がっている。因みにその中庭を挟んだ向こう側が箒

ので、俺は何度も何度も往復し、客席を運んでいく。しかし、しかしだ。

倉庫を出るたびに箒の部屋が気になってしまう。

(・・・そう言えば、箒は束さんの妹。俺は束さんの息子。てことはつまり・・・)

俺は再び発覚したオドロキの親類関係(初めはラウラ)にショックを受けつつ、箒の部屋に歩み寄る。

・・・まあ、なんだ。

親戚だと思っちまえば覗きの罪悪感も軽くなるかもだ。

それに、篠ノ之姉妹の仲の悪さは周知の事実だが、プライベートではどうなのかも気になる。実は仲良しだったりしてな。

そう言うわけでテキトーな言い訳を並べつつ、箒の自室観察の続きだ。

アイツには一夏自慢で割りとめんどくさい目に遭わせられてるかな。

弱みの一つでも握ってやれ。

前に模擬戦で一夏に勝ったと言いかけたら竹刀で打たれたし。理不尽すぎる。

箒の部屋は、至って普通だった。

畳に、普通の勉強机。

まだ処分していないのか、中学の制服とおぼしきセーラー服が掛けであるが、それ以外に目立った特徴はない。

タンスの上に写真たてが置いてはあるが、どれにも写真は飾られていない。

中学の友達の写真でも飾っていて、学園の寮にでも持っていたのかと思っただが・・・多分、違う。

・・・あそこには恐らく、家族の写真が飾られていたんだ。

束さんの発明により、散々になってしまった篠ノ之一家。

今でもあるその関係の空白が、写真のない写真たての正体。

もちろん俺の臆測なので、本当に正しいと思ってるわけじゃないが・・・。

やっぱり、実は仲が良いなんてわけじゃ無さそうだ。

俺は、壁に掛けられたコルクボードのくしゃくしゃの新聞を見ながらそう思った。

見出しは——篠ノ之束、失踪。

@

「いやー！やっぱり雪子叔母さんの料理はおいしいねクーちゃん！仕事の後だと尚更おいしいよ！」

束さんが箸を振りながら雪子さんの手料理を礼讃する。

・・・その後、仕事に戻った俺はベンチの運搬を続けた。

途中束さんが手伝いに現れて、例の多機能コンソールを召喚し屋台の設営を手伝い始めたが、仕事の邪魔だ！という声が多数寄せられ敢えなく中断。多機能ゆえの巨体が仇になった。

その後は社の掃除や石階段の掃除で懸命に働き・・・夕方になり夕飯を頂いている、と言うわけだ。

て言うか、汁物摘まんだ箸を振り回すな。散る。つーか散ってる。

「こら束ちゃん。喜んでくれるのは嬉しいけどお行儀よく、ね？」

座卓に散ったお吸い物を拭きつつ、雪子さんが叱る。

叱られた束さんは、こりこり。静かにたくあんをかじり始めた。

なお、今の束さんは風呂で汗を流した後なのでいつものうさ耳ドレスではなく、淡い青の浴衣となっている。珍しい。

「どうですか暮刃さん。お口に合いますか？」

「はい。とても美味しいですよ」

家の畑で採れたらしいカボチャの煮付けを食べていた俺にも話の矛先が向いたので素直に答える。

・・・いや本当に美味しいのね、これが。

和食と言えば雨の料理。

しかし、アイツは俺の運動量を知っておいてもなかなか濃い味付けをしてくるのだが、雪子さんの料理は淡泊で薄味。

素材の味を活かした、健康に良い料理だ。

「そう言えば束ちゃん。神楽舞はどうするの？」

「どうするって・・・私が居なくても箒ちゃんがやってたんでしょ？」

「じゃあ大丈夫じゃないの？」

「そうだけどねえ……折角だから踊っていけばいいじゃないの。束ちゃん賢いから踊りは覚えているんでしょう？」

「うー……覚えてはいるけど……」

歯切れ悪く、答えを渋る束さん。

箸をくわえながら答える様は弱々しい。

ていうか、覚えてるのか神楽舞。

何年前の記憶だよ。

「どうしたんだよ。覚えてるなら参加すれば良いんじゃないのか？」

「クーちゃんはあっけらかんと言いますが、束さんだってプレッシャーや負い目とか感じてるんですよ？」

両の手をうさ耳っぽくぴよぴよこ動かす束さん。

あー、やつぱり――

「――おばさんもね、箒ちゃんと同じで束ちゃんに言いたいことがないわけじゃ無いのよ」

突然の雪子さんの声に、目を瞬かせる束さん。

お、俺もちよつと驚いた。

穏和な雪子さんが、束さんの心情を察し、それでもなお「貴女に文句があります」と言ってきたのだ。

「確かに束ちゃんの造った物はとても素晴らしい物だとおばさんも思うわ。でも、それで不幸になった人もいるの」

「そ、それは……分かってる……」

「……その反面、すごく助かった人がいるのも事実じゃない？ ほら、あの白騎士事件。報道の仕方が白騎士の正体に偏っていたけれど、あれで大勢の人が助かった。束ちゃんは胸を張っていいし、おばさんも鼻が高かったわ」

――白騎士事件と言えば。

10年前に束さんが発表したISの強さを、絶対的なものにした事件だ。

詳しい説明は省くが、事件の全容を簡単に説明すると……世界中の約2000もの大陸間ミサイルが一斉にハッキングを受け、日本

に向かって射ち出された前代未聞の事件だ。

これにどうISが絡んでくるかというところ、後に白騎士と呼称される一機のISがそのミサイル全てを撃ち落としたのだ。2000発のミサイル全てを。

そのISは小型粒子砲やPICなど、当時実用化されていなかった技術を全て世界中に見せつけ、ISの強さを世界中に知らしめたのだ。

因みに、白騎士の出現に伴ってスクランブルの掛かった空自や米空軍の戦闘機を全て撃墜してしまったことも強さを知らしめる要因となっている。

当時はISの存在と共に、白騎士の正体についての番組しか見かけず、言われてみれば（俺の偽の記憶上）ISによって助けられた、などという報道は殆ど見掛けなかった。

結局、事件を起こした犯人も白騎士の正体も分からず、現在では殆ど捜査は行われていないらしい。

・・・本来なら、束さんは称賛されるべき人間だ。

だが、束さんは姿を消した。

そして次に現れたのが双龍のIS開発実験の時・・・ということだ。なぜ姿を消したのかは俺も知らない。

ISが完成し、超界者が出現してから10年。

双龍が活動を始めたのが2年前なので、間の8年間。

この間のことは俺も教えてもらえず、束さんしか知らない。

「だから、束ちゃんは自分を誇りなさいな。束ちゃんのこと正しいと言ってくれている人が居るじゃないの。世間様は無責任だなんだって束ちゃんを言ってるけれど、気にすることはないのよ」

「でも、私のせいで両親は——」

「箒ちゃんなら、分かってくれるわ」

雪子さんは、強くそう言った。

それきり束さんは口をつぐみ、モソモソとエンジンのきんぴらを食んでいる。食うんかい。

・・・迷っているのか。束さん。

完全に壊れてしまった姉妹関係を修復することを。

雪子さんがお茶を沸かしに席をたつてしまったので、

「・・・箒もあんたのISで助かった事実があるんだ。多少なりとも今の関係に悩んでるだろうさ」

なんてフオローをしてみる。

すると、コクン。頷いた。

ま、これ以上は当人同士の問題かな。

箒もここで神楽舞するらしいから明日には来るだろうし、話し合うチャンスはきつと来る。

(・・・ていうか、なんで俺母親と叔母の關係にここまで苦心してるんだろうなあ)

食事を終え縁側に出ると、背後に突いた手に上体を預け、軒下から月を見上げる。

明日は神主として、午前中を御守りとか売って過ごす予定だ。

箒が来るのは夕方ごろになるらしいから、それにあわせて俺も夏祭りを回っていいと言われた。

別に祭りを一人で回る趣味はないので、どうしたもんかと頭を悩ませる。

・・・誰か誘うか・・・。

うん、そうだ。それがいい。

一人で人混みをぶらつくのは危機管理的に甘いと言わざるを得ない。

ツーマンセルを基本として、出来れば四人くらいの小隊を作りたいところだ。

すると、誰を呼ぶか。

セシリア——は、金髪が目立つ。

同様にデノアもパートナーから除外。

ラウラはクラリッサとかからふざけた日本文化を埋め込まれている可能性があるので、逆に騒動を起こしかねん。除外だ。

すると、水色頭とツインテールが目に見え浮かぶのだが、水色頭は今仕事で国外のはずだ。

二学期から復帰するとのことなので憂鬱だが——消去法で呼ぶのは鈴だな。

頭のなかで「素直じゃないのはテメーだろ」という誰かを封殺し、取り敢えずメールを送る。

『篠ノ之神社。午後7時。紛れるように浴衣で集合。有事に備えろ』
つと。こんなもんか。

戦闘のパートナーとしての鈴を、周囲に溶け込むように浴衣で呼び出し、もしも襲撃があつた際に備えて武装させる。

完璧な文面だろう。

よし、送信つと。

メールの送信を確認して携帯を閉じると、背後から喧騒が聞こえてきた。

遅れてやってきた篠ノ之家の親類と、束さんが酒を呑み交わしているのだ。

おいおい、おじさん方。

その人、酔うと寝るタイプだぞ。

運ぶのは俺の仕事になるんだから、あまり酔わさないでくれよ？

虫の鳴き声と共に、夏の夜が更けてく。

束さんの酒を飲む酔った笑顔を見ながら、俺はため息をついた。

明日は祭り本番。

綺麗な花火が見られると良いなど、柄にもなく思った俺だった。

新たな敵と夏祭り（後編）

翌日。今夜は夏祭りだ。

今朝、目覚めると隣に寝ていたはずの東さんが布団から居なくなっていた。

時計を見ると7時前。

東さんの生活リズムがどうかは知らんが、行動するには早い時間ではないだろうか。

不思議に思い、着替えて家のなかを探し回っていると・・・見つけた。

東さんは舞台に立っていた。

白装束に身を包み、長い髪をきらびやかな簪かんざしで留めている。

・・・あれが、神楽巫女としての東さんか。

早朝の静けさのなかに佇む東さんは普段より近寄りがたい感じにして、声をかけるのを躊躇ちゅうちゆってしまう。

——舞が、始まる。

両手に携えた刀と扇を操り、見事な舞を披露する東さん。

小鼓も笛もないのに、音楽が鳴っているような錯覚まで覚える。

・・・どうやら本当に神楽舞については全て記憶しているらしい。

後で聞いた話だが、篠ノ之家の神楽舞に使われる太刀と扇。

これらの装飾は篠ノ之流古武術の型、「一刀一閃」に由来するもので、今では本当に篠ノ之流剣術の型に「一刀一扇」とあるらしい。あ
東さんが扇を振るうたびに鈴の音が鳴り、次第に舞が剣術らしい勇
ましいものになっていく。

扇で払い、受け流し、刀で斬り、突く。

そんな、息を飲むほど鋭く絢爛な舞がしばらく続き——東さんが
得物を同時に腰に納める。

「・・・・出てきてもいいよクーちゃん」

「・・・・なんだよ。やっぱりバレてるのか。昨日も雪子さんに見つ
かったんだが、どうして気づかれたんだ？」

盗み見ていたのを恥じながら東さんに訊いてみる。

するとフフツと笑った東さんは、

「ウチの御神体は刀なの。お盆期間中は丁度クーちゃんの後ろに飾つてあるから隠れても刀身に映るんだよ」

「……そう言うことだったのか」

背後をチエツクすると……確かに抜き身の刀が祀られている。

これが御神体か……。盗まれても知らねーぞ？

「随分と……その、様になってたな」

「素直に誉めればいいのに。ちゃんと覚えてたでしょ？」

いやんいやんとばかりに身体をくねくねさせる東さん。

格好いいと思つてたのに台無しだな。やっぱり東さんか。

「んー、そうだね。クーちゃんも持つてみる？」

「はっ？ えっ？ ちよっ！ 刀投げんなよ!？」

東さんがぼーいと持つていた刀を投げてきたので、慌てつつもなんとかキャッチする。

全く、鞘に入つてたから良いものの、真剣だったらどうするつもりなんだ。

続けて投げてきた扇もキャッチして、東さんと同じように構えてみる。

……この模造刀、女性用に造られているらしく柄が細く、軽い。装飾がシャラシャラ鳴るが、振るのに邪魔になることは無いようだ。

篠ノ之流の一刀一扇は、扇で、「受ける」「流す」「捌く」を担当し、刀が「斬り」「突き」「断ち」を担当する。

大まかに分類してしまうなら小太刀二刀流というべき、れっきとした戦闘スタイルである。

俺の場合、時穿と流桜の一刀一銃になるんだが……応用が効くかな？ どっちも攻撃武器だけど。

構えの特性をあらかた検証した俺は、東さんに刀と扇を返す。

すると――

「っ!？」

「ごめんねクーちゃん。けど、少しじつとしてよ」

いきなり、本当にいきなりだ。

腰に刀を納めた束さんが、俺に抱きついてきたのだ。

動揺は一瞬で——次の瞬間には束さんの甘い香りが鼻をくすぐった。

「・・・仲直り、やってみるよ。クーちゃんも大事だけど、箒ちゃんも束さんの大事な妹だもん」

俺の耳のそばで、くすぐるように囁かれる声。

その声には不安と覚悟が感じられた。

「クーちゃんは経公相手に、頑張ったよ。だから、次は束さんの番。・・・頑張るなんてしばらくぶりに口にするけど、案外恥ずかしいねこれ」

「・・・そりゃ、アンタは天才だからな」

どう声をかけたらいいのか分からないので、そんなどうでもいいことしかコメントできない。

「昨日も言ったが、箒だつて今の関係を気にしてる。そこで天才のアンタが頑張るんだ。悪い方に動くわけがないだろうよ」

「・・・ふふつ。息子に励まされるなんて、天才の束さんの人生においても稀有な出来事だよ・・・なんてね」

ちよろつと表面が出たのを最後に、束さんが離れる。

「——さて、クーちゃん！ 朝ごはんだよー！」

腰に手をあて、ふんぞり返る束さんは、完全に吹っ切れた清々しい笑顔だった。

@

「・・・けっ」

夕方になり、神主の手伝いをしていた俺は二人して恋愛守りを買っていたりア充にネクラっぽい視線を向けていた。

チクショウ。結構マイナーな祭りかと思つてたが、ここの神社、祀つてあるのが女性の神様だけに恋愛運に定評があるらしい。不幸に定評のある俺が参拝すべき神社はどこですかね？

午前中から行っている、効果の高そうな開運お守りの選定を再開していると、来たぞ来たぞ。浴衣の女子の集団が。

どいつもこいつもキャツキャと楽しげに祭りを謳歌しているのをじとーっと見ていたのを心配したのか、隣から……

「柘先輩、もう少し愛想よく出来ないのですか……っ?」

なんて俺と同じ袴姿の箒が声をかけてくるが、四六時中愛想のないお前に言われちゃオシマイだな。

因みに、箒はこのあと六時から神楽舞を束さんと一緒に舞い、その後またお守り販売の手伝いに入ってもらったことになっている。予想以上に混んでいるため、販売の仕事を手伝ってもらっていたのだ。

なぜか俺をチラチラ見つつ、隣の箒の案内でお守りを購入した女子の一人は、これまた俺の方をチラチラ見ながら去っていく。

二人して集団に一礼しながら、少し反省。

しまった。睨みを効かせ過ぎたか。

しかし、一人だけ礼を返して去っていった礼儀正しいヤツがいたので少し気も治まる。かいちよーとかって言われてたから、どこかの学校の生徒会長なんだろうか。

時間が来たので、箒は神楽舞の準備に向かい、俺が一人で販売を受け持つ。おい、途端に客足が鈍くなるのやめろ。

一応バイトとして給料も出るので、携帯いじるわけにもいかんし、接客がないと暇だ。

どこからか聞こえる祭り囃子ばやしを聞きながら、遂には自分の金でおみくじを引き、凶を引き当てて自分でテンションを下げ始めた俺の前に

「うっわ。目付きの悪い神主ねえ。もうちよつと朗らかにならないの?」

カツツと赤い鼻緒の下駄を響かせ、鈴が——って。

「……ん? どうしたのよ? フリーズ? クレハが来いって言ったから来たのよ?」

ヒラヒラくつと手をふる鈴なんだが……

……か、カワイイぞ、凄く。

前に見た浴衣のモデル写真では、黄色の浴衣でガキっぽく決めていたが、今の浴衣は大人な紺色に甲龍を思わせる朱い牡丹柄で……な

んというか、凄くイイ。

どっちもカワイイに変わりはないが、予想とは大分違ったためやっぱりインパクトが大きい。

人込みに紛れるように地味な感じにしてきたんだろうが、逆に目立つちまつてるぞ。

「・・・あつ、時間！ 時間どうしたんだよ？ 約束は7時だぞ。十分も早く来たのか」

「べつ、別にいいじゃない。いつ来たって・・・ていうかアンタもなんでそんなことしてんのよ？」

「バイトだよバイト。東さんの付き添いでここに来て、手伝いしてるんだ」

「へー、あつそ。いつ終わるの？」

「わからん。向こうの舞台で今箒と東さんが神楽舞をやってるからそれが終わったらこっちも終わっていいだよ」

「へー」

へーって・・・。

「見に行かないのか？」

「別に。あんまり興味が無いわよ。・・・それにしても日本のお守りって慎ましいわね。もっと派手なのないの？」

棚に陳列されたどれもこれも地味なお守りを、つまらなそうに見る鈴。

・・・棚に近づくと、身長のせいで見えなくて生首状態になるんだな。

鈴の母国の中国のお守りと言えば、真つ赤で唐辛子の飾りがジャラジャラ付いたものを連想するんだが、確かに派手さで言えば向こうの方が圧倒的に派手だろう。

「無い。ここのお守りは藍色一択だ。恋愛なんかにご利益があるらしいぞ」

「れっ、恋愛？」

おっ、鈴が目を瞬かせた。

そして、ギロツ。

爆弾でも探すような目付きになってお守りを見渡す。

さ、さつきよりも熱心に見てるな・・・。

やっぱり女子って言うのは、なんだかんだ言って恋愛守りを持って
いたいのだろうか。

鈴は恋愛成就と書かれた藍色のお守りを買ひ、それを巾着袋にしま
う。

「そ、そう言えばここっておみくじはあるの？ あたしやりたい」

「あるぞ。百円だ」

鈴のちっこい手から百円を受け取り、代わりに六角形のアレ（名前
は知らん）を渡す。

鈴は真剣な顔でそれを上下に振り、出てきた一本の数字を告げる。

「26よ」

「はいはい、26・・・26・・・これか」

背後の棚から26番のおみくじを取りだし、鈴に渡す。

その場で開いて確認しているので、俺も見えるんだが・・・ぷつ、
鈴のやつも凶引いてやがる。

日頃の行いの悪さだ。他の運勢も悪いに違いない。

どれどれ・・・願望、叶い難し。ほら見ろ。

その他の運勢も微妙なものが続くなか、鈴の目が一点に集中してい
るのに気がつく。

視線を辿ると、れんあ——・・・。

「——ムウリイイイイ！」

突然、鈴が絶叫した。

顔を真っ赤にして天を仰ぐ鈴の姿は、浴衣の可愛らしさを帳消しに
するほどの迫力を放っている。

え、なに？ アイツになにが起こった・・・？

叫んで息が切れた鈴は、鬼のような形相でおみくじを——や、
破った！

「お、おい。悪かったならその木に結ばば——」

「——うるさいッ！」

「ええ・・・？」

わ、分からない。

なんでいきなり切れたんだ？

だが、触らぬ鈴に祟りなしだ。できるだけスルーしていこう。

「出来るか出来るか出来るかあッ！」と呟きながら細切れのおみくじを踏んづける鈴。

それを不思議に思っただけで見ていた俺と目が合うと……。

「……ッ！」

変な感じに喉を鳴らし、くるっ。

幾分か落ち着いた様子で屋台の方に体ごと意識を向ける。

……マジで変なやつだな。

すると、舞台の方から慎ましい拍手が聞こえてきた。

舞が終わったらしく、舞台の上では東さんと同じように神楽巫女の格好をした箒が舞台袖へと消えていくところだ。

さて、舞が終わったんだしこっちも着替えて祭りに繰り出そうかな。

俺はそっぽを向いて、顔の辺りをパタパタしてる鈴に声を掛ける。

「——おい鈴。終わったみたいだし、俺たちも行くか？」

「う、うん」

鈴は頷いた。

鈴らしからぬ、素直な表情で。

@

「やっぱり祭りだなあ……」

「そ、そうね……」

ぎこちなく答える鈴。

さっきのアレ以来、どうやら緊張してるみたいだが外見には緊張してると臭わせる要素はない。

両手に持った綿あめとりんごあめ。

頭に被ったヒーローモノのお面。

全力で祭りをエンジョイしているようにしか見えない鈴がソコにはいた。

あれから着替えて十分ほど、小山のふもとの石段から歩いてきたん

だが、鈴には本当に振り回されっぱなしだ。

なんせ表情とは裏腹に、身体が遊ぶ気まんまんなのだ。

いつの間にかフラフラくつと綿あめを買いに行き、お面を被って現れたときには「迷子？」って素で聞いちまってデンデン太鼓みたいにツインテールで頬を叩かれた。

それから鈴の買い食いには止まらなかった。

焼きそば、焼きいか、かき氷。

やめろと言ってもなぜか鈴は止まらないので、しかたなく二本目の綿あめを買ってきた際に財布を取り上げることになり強制的に止めさせた。

しかし財布を返せと暴力に訴えてきたので、心配しつつも返したが、いったそばからりんごあめを買ってきたのもう諦めた。IS乗りとして、急激な体重変化は避けるべきだろうが、もう知らん。好きに太れ。

「……なにをそんなに緊張してるんだ？」

「別にしてない！」

いや、してるだろ。

綿あめに顔を突っ込む勢いでカツ喰らう鈴を見てため息を吐いていると……。

「あれ？ さっきの神主さん……？」

鈴が来る直前に、お守りを買っていった浴衣集団の女子が一人でキョロキョロしていた。

赤い髪をヘアバンドで纏め、ポニーテールのように後ろに垂らしているサバサバした外見の女子だ。

あ、よく見たら唯一ちゃんと礼を返してきた女子だ。

「売店にいないいいんですか？」

「俺はバイトだよ。終わったから祭りを見てる」

「へえ、そうなんですか……って、え!？」

ヘアバンドが、何かに気づいて驚いている。

見ているのは……わたあめにつつく鈴？

「……おい、鈴。知り合いか？」

「ん？ 知り合い？ こっちで知り合いなんて五反田のやつらくらいしか・・・って、はっ!?」

わたあめから顔を上げ、ヘアバンドの顔を確認する鈴。

「なんで蘭（鈴さん）がここに居るのよ！（居るんですか!）」
揃って声を上げる二人。

周囲の視線が一気にこちらを向く。

「二人とももうちよい静かに喋ろうぜ?」

「・・・出来ないわクレハ。コイツとは着けなきゃならない決着があるの」

「そうです神主さん。いくら神社の人だからって邪魔するなら容赦はしません」

「俺は静かに喋れって言ったただけだろ・・・」

なんか知らんが、いきなり険悪なムードだ。

二人にあわせて、周囲の雰囲気もちよつと悪くなってるんだが、それに気づかないほど興奮しているらしい。

さすがに一般人相手にISは使わない・・・使わないと信じたいが、それでも鈴と喧嘩なんか始めたら手がつけれなくなる。

このヘアバンドが何者か知らんが、止めるしかないな。祭りの評判にも響く恐れがあるし。

「中学の時はよくもいじめてくれたわね、下級生のくせに!」

「鈴さんこそ! 私が一夏さん近づくとびに邪魔をして!」

「ふん! それで弾を使って仕返しとか情けないっいたらありやしなかつたわ!」

「く、くう・・・あのバカ兄さえしつかりしていれば・・・!」

あー、これ一夏が関係してるパターンか。

二人をどう止めるか考える。

「もう我慢なりません! IS学園に入ってるって聞きましたから手加減はしません!」

「候補生相手に喧嘩を売るなんて大した度胸ね。良いわ。買ってあげる・・・ッ!」

二人が同時に飛び出す。

超界の瞳が処理した映像が、スローモーションのように脳内に浮かび上がる。

僅かに先行して飛び出したのは、ヘアバンド。

下駄で蹴りを入れるつもりなのか（容赦ねえな・・・）やや前方向に飛び上がり、脚を上げ始めている。

鈴は予想していたのか、巾着の中身を袖に移し、空っぽの巾着袋をグローブのように手に巻いている。受け止めるつもりか！

鈴 vs 雨や、鈴 vs 箒ならどちらかが尽き果てるまで放っておくんだが、今は祭りな上に衆人環視の中だ。迷惑を掛けないためにも止めるしかない。

蹴りを受け止めようと構えている鈴は置いておいて、止めるならヘアバンドだ。

俺は鈴の前にPICを使って身体を滑り込ませると、ヘアバンドの蹴りと向かい合う。

しかし、ソコでハプニングだ。いや、この場に限っては幸運とも言えるかもしれない。

ヘアバンドは高く飛び上がり、特撮ヒーローのような蹴りの姿勢に入っている。

即ち、それは脚を大きく開いて伸ばすような蹴りで・・・。

右前にした浴衣の裾が、脚の動きによって開いていく。

^{あらわ}露になっていく脹ら脛に、すね。

そして遂に白く細い女子っぽい太ももが目に見え込んでくる。

——Bシステム、起動します

初対面の人間に微かでも興奮を覚えてしまった罪悪感はともかく、せっかく起動したBシステムだ。この場を穩便に済ませるため、活用させてもらおう。

・・・改めて状況を整理する。

前から飛んでくるヘアバンド——鈴は蘭と呼んでいた——の下駄。

アレが一番危険だろう。

俺の顔の高さにまで飛び上がった蘭の下駄は、予測だと鈴の顔を直

角に捉えているコースだ。

人ひとりぶんの体重を完璧に受け止めきれるとは思えないし、受け止めたとしても、あの中着じゃあ怪我は免れない。

やはり、俺が止めるしかない。

迫り来る下駄に俺は手を伸ばし、それを掴む。

このまま脱がすのも手だが、それだと蘭の姿勢が崩れて落下してしまふ。これも怪我をするからダメ。

だから俺は咄嗟の判断で動く。

俺は蘭の蹴りの勢いを殺さずに、下駄に触れたまま腕を引く。

手首で勢いを殺し、肘関節で更に緩和。

肩まで使って蘭の勢いを完全にゼロにする。

蘭の下駄を持ったまま、背中を反る姿勢になった俺は、蘭の勢いがゼロになった瞬間を感じ取って――

――蘭の股関節が正常な位置に戻るように、下から勢いよく持ち上げる。

都合、俺の手の上に蘭が立っている姿勢になったが、このままでは不安定なので、もう一方の足も揃えて持ってやる。

……なんとか衝突は避けられたが、余計目立つ状況になっちまったな。

今、俺は両手を上に伸ばし、その手の上に蘭が立っている状況だ。

上にいる蘭もポカーンとしているが、きつと周囲の視線を一身に浴びていることだろう。

なんせ喧嘩だと思ったら大道芸が始まったのだ。驚かないわけがない。

「……えっ？　ちよつ、なにこれえ!？」

上から蘭の情けない声が聞こえる。

ははっ、ちよつと我慢してくださいね。喧嘩しようとした罰だ。しかし、ここで俺は単純なミスをおかした。

鈴が、受け止める？

この鈴らしくない対応に俺が違和感を感じた瞬間――ガッ!

……腰に、衝撃。

巾着袋に包まれた鈴の拳が俺の腰に突き刺さり、身体がくの字に折れる。

あ……やべ。蘭を支えられない。

いつの間にか、Bシステムも止まっている。やはり興奮が微かだったためすぐに止まったのか。

上から降ってくる蘭のオシリを見ながら、さっきの反省をする。

そうだ。鈴が喧嘩で防御から入ることはない。

いつだって先に殴りかかる。

拳に巻いた巾着袋は受け止めるための緩衝材じゃない。

殴る際に拳を痛めないように巻いた、マジモンのグローブだったんだ。

蘭のオシリと、石畳に挟まれるまで、残り0、2秒。

蘭の蹴りから守ってやったと言うのに構わず拳を放った鈴。

テメーだけは許さね——むぎゆ。

@

気がつくとき、夜風の気持ちいいベンチに横たわっていた。

「……気がついたみたいね」

「なにが気がついた見たいね、だよ。誰のせいだと思ってる」

「あんたが出てこなきゃ、穏便に済ませたわよ」

……嘘つけ。

絶対に殴ってただろ。蘭を。

起き上がり、隣のベンチに座っていた鈴の様に腰かける。

「……あのヘアバンド、誰だ？」

俺の質問に鈴はハア、とため息をつき、

「年下に甘いクレハだから説明したくは無かったけど……あの娘は五反田蘭。中学の時の後輩よ」

「日本のか」

「そうよ。前にも言ったし、一夏からも聞いたと思うけど……あたしは二年と少し前まで日本で生活してたの。その時よくつるんでたのが、一夏と蘭の兄の五反田弾よ」

鈴の話によれば、蘭のオシリに潰されて気を失った俺を縁日から連

れ出しここまで運んだのが、その弾と言う人らしい。

「蘭とはよく喧嘩してね。お互いに簡単な罨張りあったり、ヘイトスビーチもよくしたわ」

「おい、そんな恐ろしい過去をしみじみと語るな。思わず『仲良かったんだな』とかつて思っちまっただろ」

なんでそんな事も無げに語れるんだ。

「そう言えば蘭、あんたのこと相当警戒してたわよ。いきなり足もつて持ち上げるのはやり過ぎたんじゃないの？」

「うるせ。急に喧嘩しそうになったから止めようと思ったんだよ」

「完全に逆効果だったわね。・・・ねえ今度五反田食堂つてところ行かない？」

「絶対に嫌だ。名前からしてその兄妹の家だろ。会わせるつもりか」

「謝った方がいいかと思っただのよ」

「・・・」

鈴にしては珍しくマトモな考えだったため、俺は言葉を濁す。

地面にあつたビニール袋に気がつき、中身を見てみると・・・

「・・・フランクフルト？」

「蘭からよ。一応喧嘩沙汰を未然に防いでくれたんだし、感謝の印だって。あの娘、中学の生徒会長らしいから」

「・・・」

袋から棒つきのフランクフルトを取りだし、食べる。

・・・まあ、これの礼ぐらいは言つとかなないとダメだなんて気はしてきた。

これ以上さっきのことについて話すのも面倒だったので、話題をそらす。

「・・・そう言えばおみくじ、なんて書いてあつたんだ？」

「・・・」

おっと。

今度は鈴が黙るか。

能面の様な顔をして、花火がうち上がる空を見ている。

・・・ちよつと強引に行つてみよう。

「なあなあ、なんて書いてあったんだ？ 胸——」

「殺すわよ」

——でも大きくなるって書いてあったのか？

「じゃあ、チビ——」

「殴るわよ」

——じゃなくなるって書いてあったのか？

そう言おうとした矢先、鈴に遮られる。

なんつー、反射神経だ。

・・・じゃあ、

「じゃあ——」

ドンッ！

——恋愛でも上手く行くって書いてあったのか。

そう言おうとした矢先、今度は花火によって遮られた。

いうタイミングを損なった俺が、鈴の方を見てみるが、既に鈴は花

火に意識が向いている。

色とりどりの花火が上がり、赤や黄色の光が鈴の顔を照らす。

参ったな。他に鈴が取り乱すおみくじの内容が思いつかない。

花火がドンドンうち上がる音を聞きながら、考え込んでいると、隣

に鈴が座ってきた。

その顔は赤いが、多分花火のせいだ。

「・・・クレハ」

この距離なら、花火に邪魔されず、鈴の声を聞くことが出来る。

俺の名を呼んだ鈴が、言いにくそうに口元を強く結ぶ。

言おうとするたびに声を出せなくなるのか、鈴が恥ずかしそうに口

を開いては閉じるを繰り返す。

これから鈴が言いそうなこと。

幾つかは予想がたってるし、言われた場合の対応も思い付く。

だが、その中の一つだけ。

言われたとしても、未だにどうすればいいのか分からないパターン

がある。

もし言われたとして、俺はそれに答えられるのか。

言わずとも、鈴は察してほしいと願っているのかもしれない。
でも、それはとても危険なことで、最悪また鈴を傷つける結果にな
りかねない。

だから、言葉にされれば、鈴の思いが告げられれば、答えざるを得
ない。

「……俺の思いをぶつけるしかない。

そういう覚悟で、鈴の言葉を待つ。

一際大きい破裂音が鳴る。

多分、花火大会に終止符を打つ、最後の花火だ。

大空にうち上がった大輪の花に、俺たちは意識を奪われ——言葉
にするタイミングをまた失ってしまう。

「あ……」

「あ……」

お互いに空気に耐えられなかったらしく、苦笑いだ。

祭りが終わった夜に、寒々しい風が吹く。

「……寒いな……」

「そ、そうね……」

「今、篠ノ之家に泊まってるんだけど、今晚泊まって帰るか？ おばさ
んに頼んでやるけど？」

「い、良いわねそれ。今日は少し疲れたと思ってたところなのよ」

そして、どちらかともなく、ため息。

すると、謎の疲労感を感じている俺の耳に聞き覚えのある声が聞こ
えてきた。

「おーい！ くうちやあん！ どこおー？」

「ね、姉さん！ そんなに大声を上げては迷惑です！」

「束さん……こんなに買って、食べきれるんですか？」

ベンチから見下ろすと、階段を登ってこつちに来る人影が3つ。

束さん、箒、一夏だ。

「やーっぱり一夏は箒と一緒にかあ……」

隣の鈴が口元に無理やり笑みを浮かべて呟く。

「羨ましいのか？」

「ううん。今は・・・その、違うからっ」

なにが違うのか告げないまま、鈴は階段を下っていく。待っているのはあの三人。

俺も鈴のあとを追って階段を下っていく。

「やつぱり東さんは天才さんだね！ ホラ！ あれだけ頑固だった箒ちゃんもこの通り！」

「わ、私は汚れですかっ！」

一夏の隣を歩こうとする箒の背中に、東さんが抱きつく。

あの姉妹の様子を見るに、仲直りも出来たようだ。

「ちよつと一夏。その袋からいいにおいするわね。少し寄越しなさいよ」

「だ、ダメに決まってるだろ鈴。これは東さんの——っておい！ 袋を引っ張るな！ やぶけるぞ!？」

鈴はいつも以上に笑顔を振り撒き、一夏は袋を狙う鈴から逃げている。

・・・少しだけ、一夏が羨ましい。

偽りのない過去があり、付き合いの長い友人がいる。

俺にも場面の記憶はあるが、その時の感情の記憶が無いのだ。

雨には悪いが、泣いていても笑っていても、悲しかったのか楽しかったのかハッキリしていない。

だから、今感じている疎外感が重くのし掛かってくる。

「・・・別にクーちゃんを仲間はずれなんかにはしないよ」

「・・・なんで心が読めるんですか」

「んー、やつぱり母親だからじゃない？」

また適当なことを・・・。

いつの間にか、一夏を鈴が追って、鈴を箒が追っている。

あいつら浴衣なのになんで走れるんだ。

まあ、タイトスカートで駆ける教員も居るから深く考えるのはよそう。

「確かに、クーちゃんは生まれが特殊だけど、それは生まれだけの話だよ。だから、クーちゃんも他の人と同じように時間を重ねていける

よ」

隣に立つ束さんが諭すようにいう。

「取り敢えず、フツーに恋愛して、フツーに結婚して、フツーに孫の顔見せてくれれば束さんの問題は無いのですよ」

「そりゃ難しいことをいうな」

わりとガチで返した俺に、束さんはクスツと笑い、

「はてさて、そう思ってるのはクーちゃんだけかもね」

カサツとなにやら紙片を俺に押し付け、追いかけてここに加わりにく。

・・・フリフリドレスで追いかけてっこしてる人が親なんだよなあ、俺。

手の中を見てみると、そこにあつたのは千切ったものを復元したよ
うな、セロテープだらけのおみくじ。

吉凶は読めないが、一つだけ読める運勢があつた。

——恋愛、ためらわず告白せよ

思わず空を見上げる。

あー、ちくしよう。

今この時を夢にしているから、明日もう一回同じ日を送らせてくれよ。

無性に、そう思わずには居られない気分だった。

セミの鳴き声が響く真夏の夜。

やりきれない思いと共に夏祭りが終わった。

真夏の夜の夢くクレハverく了

第五卷

新学期と悩みの種

アイアンマンの襲撃があった次の週、夏休みが開けた。

先日の件に関してはアメリカ人のダリル先輩に探ってもらったところ、

『ウチの政府は関係ねーよ。シールドって言うのは、自分勝手に活動する気紛れ部隊だよオ・・・アベンジャーズのリーダー・・・ああ、先代のアイアンマンな？　は、今じゃペンタゴンの技術開発のトップってハナシだ』

——だからアメリカに弱味を作るような安い攻撃は仕掛けてくるはずがない。

だそうだ。

そうすると、あの襲撃は本当にあの子供っぽいアイアンマンの独断行動って線が有力だが・・・、また来るとか言ってたし、今度はお仲間を連れてくるかもしれん。要注意案件だ。

そんなことを考えつつの始業式が終わり、IS学園はいきなり授業へと移る。

今日は実習のない教科授業の日なので、クーラーの効いた教室で授業を受ける。

ちなみにだが、あの夏コミでの戦闘、学園内じゃ全く噂になってない。

だてに普段から銃器やら刀剣やらに触れてるぶん耐性があるし、クラスによってはガチの戦争経験者がISの教育を受けているのだ。

一年ならまだしも、二年になってドンパチで騒ぐようなヤツは居ないのである。

外から聞こえるISの駆動音や銃声、剣戟の音に混じって、ドオン、ドオンという破碎音が微かに聞こえる。

あれは、衝撃砲の着弾音だ。

たしか午前中は専用機持ちの一年で実戦訓練が組まれていたはず。

つーことは今戦ってるのは鈴とアイツらの誰かか・・・。

「――この積分問題を・・・今日は3日だし三番、安住。やってみなさいよ」

「はい」

大倭先生に指された安住が黒板に立ち、見事正答する。

・・・授業の合間に度々聞こえる衝撃砲の音。

なんか花火みたいに聞こえて、妙な記憶が掘り起こされちまうな。

イカン、集中だ集中。

数学は苦手教科だし、呆けてると新学期早々にチヨークをくらうぞ。

背筋を伸ばし、数学の授業なのに妙に気合いの入った俺をクラスメイトが意外そうに見てくるが、そんなの気にしてられん。だって積分、分からないんだもの。

しつかりやらねば中間で赤点だろうし、なによりあの異常に勉強のできる一年女子どもに舐められたくない。

確かなプライドを胸に、黒板の板書を書き写す。

「え、ええと、柊くん？ 熱中症なら保健室行く？」

「・・・・・・・・」

早々に大倭先生に茶々を入れられた。

@

要らん心配をしてくる教師の授業を終え、昼休み。

食堂に向かうため、渡り廊下を歩く。

今日の日替わり定食、サバの味噌煮らしいから早く行かねば売り切れしてしまう。

IS学園食堂のババ様のサバは最高だからな。

なんて、いまだに真夏の様相をみせる海の風景を見ながら歩いていくと・・・、

「――フフツ、久しぶりね。柊クレハくん」

ゾクツとくる吐息の掛かった声。

声の主はどうやら俺の背後に立っているらしい。

いつの間に？という疑問は持たなかった。

この女なら俺に気づかれずに接近することができるといふ候補がちゃんと居るからだ。

「ああ、久しぶりだな——更識楯無」

首に添えられた青い扇子を払うと同時に背後へ肘鉄を繰り出すが——避けられた。

「相変わらず喧嘩っ早いわねえ……もつと余裕を持たなきやダメよ？

女の子逃げちゃうじゃない」

「さっそくイラつくセリフをどうもな。だけど安心しろ。猫女は女の子の範疇に無いからな」

振り返った先にいる女子生徒。

口元に『挑発』なんて書かれてる扇子を広げ、不敵に笑うこの女こそ、青髪こと更識楯無。

学園最強の名を持つ生徒会長様だ。

長袖の制服を肘まで捲し上げて立つその姿は今の俺の素人目で見ても隙がなく、撃ち込んだところでカウンターを喰らいそうな迫力がある。

「あら、いつてくれるじゃない。半年振りなのに私のこと覚えてくれるようで良かったわ『女装男子』君？」

「いつまでそのネタ使ってるんだよ。いい加減に昔のことは忘れようぜ生徒会長サマ？」

……見てわかる通り、俺たちは仲が悪い。

理由としてはスツゴいくだらなないんだが、とてつもなく難しい事情があつたりする。

「長期任務、無事終わったようでは何よりだぜ」

「えええ、無事に終わったわ。私の活躍で！ 私の働きで！」

「ああーうるさいうるさい。あと扇子を振るな。熱風がマジでキツイ！」

更識のあの扇子。

アイツのISの待機モードだったりするんだが、紙の面に普通に文字書いてあるし、大丈夫なんだろうか。

「で？ 何の用だよ。俺はこれからサバを食いに行くんだ。邪魔する

なら無理やり通るぜ」

「あら、それなら急いだほうが良いわね。今日は生徒会の面々が友達誘って食べに行くって言うってたわよ?」

「・・・あくまで邪魔をするつもりか更識」

「何のことかしら? 私はただみんなにサバの素晴らしさを語っただけよ?」

「俺がサバ好きだって知ってて語ったんだろ。確信犯じゃねえか」
俺の中でイライラが高まっていく。

さて、落ち着け。俺たちの間じゃ精神攻撃は基本だ。

だから・・・耐えろツ!

だが、更識は嫌な笑みを浮かべて懐から何かを取り出す。

「そしてこれが——今日最後のサバ定食の食券よ」

「食べ物への恨みを舐めるなよオ!」

更識の持つ食券に狙いを定め、飛び掛かろうと足に力を籠める。
が。

「アホなことしてんじゃないわよクレハ。暑いのにさらに暑苦しく感じるわ」

「放せ鈴。俺はこれからあの女に食べ物への恨みを——」

「それをやめろつつてんのよ」

いつの間にか横に立っていた鈴に頭をシバかれた。

「それで? アンタだれよ?」

鈴が懐疑的な目を更識に向ける。

「ふふつ。誰とはご挨拶ね。中国代表候補生、凰鈴音さん?」

「一学期からいるけど、アンタみたいな目立つ頭初めて見るつての」
目立つ頭・・・まあ確かに色彩豊かになってきた日本人だが、金髪や茶髪は多かれど青髪つてのはほとんど居ないな。

・・・あ、いやそーいやミナトが青いが、あいつは超界者だ。例外例外。

「あー、鈴。こいつは——」

「良いわクレハくん。こういうちよつとナマイキな感じは好きだけれど・・・ちよつと教育してあげる必要がありそうな娘ね」

更識が、それこそ猫のように目を細め、鈴をみつめる。
いや、見つめるなんて生易しいものじゃない。

鈴も、どうしてかは知らんが攻撃的な構えを取っている。

や、やる気が二人とも……。

「やめろ鈴。さつきはちよつと挑発に乗っちゃまったが……更識とは止めとけ」

「うるさいわよクレハ。あの女とはやり合う必要があるわ」

「な、なんでだよ……？」

鈴の意図が分からず聞き返す。

鈴はちらつと俺を見て……更識に向き直る。

「……あたしもサバ狙いなものよ」

「……ああ、そう」

よく見れば鈴が見てるの、食券だわ。

いつの間にかサバの評判が広がっていてうれしい反面、なんでこれで争いが起こっているのかすげえ不思議。

「良いわね。それじゃあ掛かってらっしゃい鈴ちゃん。おねーさんに勝てたら食券をアゲル」

更識がビツと扇子を突き出し、迎撃の構えを取る。

「その言葉。忘れるんじゃないわよ——！」

鈴が床を蹴り、ツインテールをなびかせて真正面から更識に迫る。

更識はクスリと笑うと、扇子で払うのか握っている右手を左肩に寄せた。

「——見えてるわよ」

更識の腕が届く70センチ手前、鈴が払われた右手をよける。
い、今の……。

角度のある前傾姿勢だったのに、急停止からのバックステップを完全に制御しきっていた。

更識と鈴は性格が猫みたいと評されているが、鈴の場合、身体能力も猫みたいに柔軟だ。

バックステップで更識のカウンターをやり過ごした鈴は、シューズを鳴らして回転し、更識の左側から手を突き出す。

狙いは——襟。

いいぞ。鈴。

突っ込んでくる相手へのカウンターが得意なヤツに対しては、できるだけ距離を開けないのが鉄則だ。

できるだけ相手に付いて動く。そうすることで相手の動きも封じられるし、得意な技も封じられる。

だからなんとか接近して投げ技に持ち込んだのはいい判断だと言える。

しかし——それが学園最強の異名を持つ更識の場合、悪手になりえる。

「速いわね鈴ちゃん。足運びも良いし、戦い方をよくわかってる」

更識が扇子を放り投げ、空いた右手で鈴の腰を固定する。

二人の顔が近くなり、更識が勝利を確信する。

「——でも、私だって得意なのよ？ 投げ技」

更識が回転し、身長の低い鈴を腰に乗せてブン回す。

——跳ね腰。

大きい相手が小さく素早い相手と戦う時の技を、片手だけでやりのけたのだ。

しかし、お前ら。

投げ合うなら下になんか穿け。

宙を舞う鈴が地面に叩きつけられる際、更識が左手で鈴を引き寄せ、衝撃を軽くする。

そのおかげか着地した瞬間、両手で更識を弾き、鈴は跳ねるように距離を取った。

「……ッ」

見かけは完全に鈴の負け。

組み手で負けて、投げられた後も手加減されたのだ。

だが、顔をゆがめたのは——更識だ。

「……やってくれるじゃない」

「こっちのセリフだったの。初めにアンタに掴み掛ったとき、もう食券を狙ってたのに」

そう言つて立ち上がる鈴の手には——食券。

そういうば・・・更識は鈴の身体を左手で引き寄せていた。

右手には扇子があつて、鈴の腰を固定していた。

すると左手は食券が握られていて、自由に使えないはずだった。

「近づけば、あんたの左手に届くと思つてたけど・・・投げられたのは予想外だったわ」

鈴は勝つて食券を手にししようとしたのではなく、始めから食券を狙つて勝負していたのか。

更識の左側から迫つたのも手の長さや身長の手を補うため。

急接近したのも食券を奪取するため。

始めつから鈴のヤツ・・・食欲のために戦つてやがった！

「驚いたわ。試合に勝つて勝負に負けたのは初めてよ。」

制服をパンパン叩きながら語る更識は・・・笑っている。

更識のヤツ、アレはアレで負けず嫌いなフシがあるから、鈴に出し抜かれたこと、結構気にしてるっぽいぞ。

「まあ良いわ。今回は負けを認めてあげる。けど——またやりましょ」

そう言つて、更識は食堂とは反対方向に消えていく。

「ふん、別にあたしはキョーミないつての」

鈴はその背中に向けて、ベエーっ。

思いつきりアツカンバーを繰り出していた。

@

「お前、スゴいな。更識相手に・・・」

更識が消えたあと、食堂に足を向けた鈴を追いかける。

「別にスゴくないわよ。あの女、本気じゃなかった」

・・・だろいな。

更識が本気を出せば、鈴なんて相手にされてなかつただらう。

更識楯無。

アイツはロシア代表のIS操縦者で、IS学園の生徒会長だ。

候補生ではなく、立派な代表と言う立場で・・・それ故に仕事で学園を空けることが多くある。

去年の12月から長期任務で海外に出ていて、どうやら今日が学園復帰の日だったらしい。

ちなみにだが、この学園における生徒会長と言うのは一つの事実を体現する存在だ。

それは、最強という存在。

学園の創立時からのしきたりで、生徒会長はその年の最優秀の人物が努めることになっているのだ。

それで、更識は去年前生徒会長を私合で倒して生徒会長になった。いつでも誰でも生徒会長に襲い掛かれるという校則もあって、アイツのまわりにはよく倒された生徒の屍（過剰表現）が転がっている。生徒会長にもっとも強い人物を据えるというこの学園のシステムも、恐怖政治みたいなのを産みそうに十分にトチ狂ったシステムなんだが、意外と上手いこと回っているのはヤツの人望のおかげなんだろう。……俺はゴメンだね。アイツの近くに行くなんて。

「じゃ、なんでクレハはあの女と喧嘩してるワケ？」

対面に座ってメシをかつ込む鈴が、箸をくわえて訊いてくる。

それに、後からやって来た一年の面々が加わった。

「だね。聞いていれば、学校の生徒会長さんなんでしょその人？ 何かしたの？」

「……」

興味深そうにしているデユノアは、ラウラと一緒にカツレツを食べている。

一方ラウラは俺の話なんか目もくれず、もくもくと食べ進めている。まあ、ラウラは知ってるもんな。

「いや、俺がしたってワケじゃないんだが……」

「じゃあ向こうが勝手に私怨をぶつけてきたってワケ？」

「いや、そう言うわけでもないんだ」

どう説明したものかと悩む俺を見かねたのか、

「……ならば私から説明いたしましょう。兄さん」

「……だな。頼む」

ラウラが察して助けてくれたので有りがたく便乗した。

コホンと咳払いをして、ラウラは説明を始めた。

「・・・あれは兄さんがまだドイツ軍にいた頃の話だ。バデイを組んでいた私と兄さんのいる部隊は、ロシア軍からのIS技術開示要求に拒否するために直接、ドイツのシュヴェットまで出撃していたのだ」

「・・・思い起こせば、あれは俺がドイツ軍にいた二ヶ月の中でも最悪の悪夢と言えるなあ。」

「シュヴェットは当時ロシアと技術共有を図っていたポーランドとの国境の街だ。隣には雄大なウンターレスオーダータール国立公園が存在し、素晴らしい自然が・・・」

「いいから。そう言うところ」

「・・・分かった。続けよう。——簡潔に言えば、奴らはこちらのISを鹵獲する気でいて、それを察した我々と交戦したのだ。ロシアが送り込んできたISは、専用機一機にその元となった試作機体が五機。対して、こちらの編成はドイツの量産機『シュヴァルツェア』が三機と歩兵が十。数だけで見れば圧倒的に不利な状況だった」

ロシアが送り込んできたIS六機とは、総数が隠されていて分からないが恐らくロシアが持つISの半分の数だ。

ドイツはIS技術に関して閉鎖的だったから、なにが何でも手に入れるつもりだったのだろう。

「奴らは深夜の闇に紛れて行動し、我々の陣地に忍び寄った。運良く私の瞳が気づいてくれたが、次の瞬間にはグレネードが投げ込まれ、歩兵の半分が吹き飛んでいた」

あー、思い出すなあ・・・。

街の郊外にキャンプしててホントに良かったと思うぜ。じやなきやアレはマジで街ぶっ壊してた。

俺が腕を組んで思い出に浸るなか、ラウラは淡々と続ける。

「我々もISを展開し応戦したが、当時AICは未完成。着実に戦力は削られていった」

「・・・なに？ そのまま負けるわけ？」

鈴がジト目で投げ掛けるが・・・良く考えろよ鈴。

負けてたら俺とラウラはここにはいないんだよ。

「なんとか撤退戦に持ち込み、撤退に成功した我々だったが、帰還の途中にあることに気がついた」

あー、来たよ。

俺のトラウマ第二号が。

「朝日が昇る空を飛行中に、当時の最年少13歳で戦略部隊に配属となったクレアレット・フォーハウンド準尉が言ったのだ——」

——すみません、クレハ特佐を拾い損ねました……

「「マジで!?(ホントですのツ!?)」」

五人の声が揃う。

「……ああ、マジだよ。脱出用コンテナなんて無かったからな。作戦では緊急時の離脱にはラウラが敵の侵攻を食い止め、歩兵回収班が歩兵を抱えて脱出するはずだったんだ」

ISは三機。グレネードで歩兵の半分が吹っ飛んでたから数は五人。

IS一機に二人以上を抱えれば脱出出来るはずだった……んだが、

「クレアレットはこの任務が初陣でな、相当に混乱してたらしい。脱出するのを優先して兄さんの存在を忘れていたと言うわけだ」

「じゃ、じゃあどうやってクレハさんは生き延びたのですか!?!相手はIS六機なのでしよう!?!」

「あー、えーとだな……」

俺はラーメンのスープを飲み干し、コトンとテーブルにどんぶりを置く。

「まあ、なんだ。俺たちの陣営には歩兵が居たわけだから、電磁パルス弾や大型貫通弾とか歩兵用の対IS装備が一応なりともあったわけだ。おいてけぼりを食らった俺は、それらを使って一晩生き残ったつーハナシだよ」

「それだけでは無いでしょう? 兄さん」

「おい、もうこれでいいだろ!?!」

「まだよ。あの女との関連は?」

「ぐ……」

鈴の奴め……。余計なことを……。

「私が街に戻ったとき、ソコには——」
「やめろ」

ラウラが話そうとしたその先を、俺は鋭い口調で止めさせる。

ここまではいい。

ここまでは良いんだが、これ以上はダメだ。

俺にだって言っただけほしくない事はある。

「とにかく俺はあの夜、なんとかして生き延びただけだ。流れで分かるかもしれないが、相手には確かに更識がいた。アイツは初めからロシアの候補生だったわけだし、いても不思議じゃないだろ。更識は俺を仕留めきれなかった事を根に持つてるだけ。オーケー？」

「あ……うん。わかったわよ……」

俺の勢いに気圧されて、鈴が首肯する。

「ラウラも。これ以上は言うなよ」

「分かりました。兄さん」

よし、これで良いだろう。

シメるつもりで睨みを利かせて言ったからか、皆少しだけビビってるようだ。

女尊男卑の世の中だが、睨まれてビビるのはいつの時代も一緒ってことか。

だが、何故かセシリアが未だに興味深そうに俺を見ている。

「……なんだセシリア。これ以上は言わないぞ」

「あつ、いえ……ふ、ふんっ」

両手をパタパタとふり、思い出したように顔を背けるセシリア。

そう言えばセシリアとはまだわだかま蟠りがあったんだっけ……。

話題が終わると、各々の食事に戻る。

話題はお菓子の話へと移っていった。

@

「おーい。東さんいるかー？」

昼休みが終わり五時限目。

授業を久しぶりにサボった俺は、第三アリーナ地下。

束さんの工房を訪ねた。

「おー、クーちゃん。なんかよう？」

「なんかよう？じゃないだろ。つーかごちやごちやし過ぎだ。片付けろよ」

足場のないほどに散らかった工房内をなんとか歩いて束さんを探す。声が聞こえるから居るんだろうが……どこだ。

カンカンキリキリと工具の音が聞こえる方に歩いていくと……いた。

「治ったのか？」

「うん、瞬龍ならばつちり仕上げといたよ。最後にデータ計測したの二年前だからクーちゃんの身体データも微小ながら差異があったし、コアからのエネルギー伝達処理も初期化と最適化の影響で圧迫されてた。多分結構使いやすくなったと思うよ」

「おお、ありがとな束さん」

珍しく油まみれのツナギ姿でいた束さんが、装甲だけ取りはずした瞬龍を見上げながら言った。

「……普通、ISの整備は待機形態のISをポンと渡せばそれでいいのだが、俺はそうもいかない。

心臓とコアが一体化している俺の場合、一度展開してから脱ぐ必要がある。

だから、格納する場合にも一度着て展開を解除しなければならず、ちよつと面倒くさいのだ。

制服のまままでコックピットに座り展開解除を指示すると、瞬龍は粒子となって消え、俺の体が宙に浮く。

「よつと」

「ちよつとくらい動かしてみればいいのに」

「この狭い整備室でどう動かさせていうんだよ」

アリーナにできれば良いんだろうが、今は五時限目。

俺はサボってここにいるのだ。

「……で？何の用でクーちゃんはサボってきたのかな？」

「……」

そう、瞬龍を取りに来たのはあくまで次いで。
本題は別にある。

俺と束さんは手近なパイプ椅子に腰かけると、俺のほうから切り出す。

「あんたは盆からこつち、ニューヨークの委員会にいたから知らないと思うが……アイアンマンが攻撃してきた」

「……へえ……」

あの夏祭りからこつち。

束さんは国連にあるIS委員会の呼び出しに応じ、連合本部のあるニューヨークに渡っていた。

きつと経公が委員会で超界者について証言したために呼び出されただんたろう。

「先週なんだが、お台場にアイアンマンのマーク44あたりかと思われる機体がコンテナに梱包されて置いてあった。おそらく遠隔操作だと思って撃退したが、敵にかかわる物体は回収できなかった」

「だろうね。スターク氏とはペンタゴンで会ったっけれど、そんな話は聞かなかつた。息子がいたという話も聞いたことがないし、そういう情報管理がうまい人か、はたまたアメリカ全体で行った攻撃なのか……」

「……息子がいない?」

「え?…あ、うん。先代のアイアンマンは無精子症でね。妻はいるけれど子供はいないって聞いているよ」

束さんの言葉に首をひねる。

…あいつは自分を息子のように喋っていたが、あれはブラフだったのか?

「……まあ、今はいい。それより、奴はまた来るとも言っていた。なにか情報はないか?」

「情報って言われてもねー。間違いなくアイアンマンのアーリアクター技術はISからすれば時代遅れも甚だしい技術だし、超低速口ケットミサイルも多重追尾システムもアイアンマン自身が技術提供マルチロックオン

をアメリカにしている。もう今更言えるような事実はないんだけどな」

「そうか・・・」

落胆の気持ちとともに束さんの工房を出る。

とりあえず束さんには新情報があったら伝えてくれと言ってあるし、一応アイアンマンの基本的な資料ももらった。

いつ来るかわからない相手に備えるのは正直イライラするが、来る以上何らかの対策しないと最悪死にかねない。

バサバサと大量の資料をまとめながらアリーナの通路を歩いた。

@

その後、六時間目の暇を瞬龍の調整で潰した俺は寮への道をとぼとぼ歩いていた。

アリーナと寮の道の最中には校舎の昇降口があり、俺はそこでセシリアの姿を見つけた。

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

「わかりやすく落ち込んでどうしたよセシリア？」

鞆の前に提げ、かすかに消臭スプレーの香りを漂わせているところを見るに、一年は六時間目も実習だったらしいな。

「・・・・・・・・・・いえ、お話しすることではありませんわ」

俺を一瞥すると、セシリアはそう一言告げて歩き始める。

・・・・・・・・アイツ、まだ俺に対して腹でも立ててるのか？

正直、夏休みの手合わせの一件。

あれで、なんでセシリアの機嫌が悪くなってるのかわからない。

確かに二年として一年に負けるのはみっともないと思うが、セシリアのあの過剰な避け方にはそれ以上の理由があるようにしか思えない。

しまったな。

調整中に思いついた頼みごとがセシリアにはあったんだが、あれじゃ断られるだろう。

・・・・・・・・なにか悩んでるみたいだし、ご機嫌取りの一つとして聞いてやるのも良いな。

「なんに悩んでるんだよセシリア」

「クレハさんには関係ございませんわ」

歩く速さを速めるセシリアに合わせて歩みを速める。

「悩んでるんだろ。打ち明けてみるよ」

「下級生に負けるような先輩には打ち明けても仕方ありませんわ」

「……」

……存外、キツイ言葉にちよつとひるむ。

「昼の時は普通だったよな。実習でなにかあったのか？」

「……」

セシリアが下を向き、唇をかむ。

心なしか、ちよつと目が潤んでる気がする。

あ、ここだな？

「……負けたのか」

「……そう、ですわ」

いつの間にか立ち止まり、セシリアが吐露した。

「……まああんまり気にするなよ。お前はまだ一年だしこれから経験

を――」

「――そんな悠長なこと言っていられませんのツ！」

「――ツ」

セシリアが……叫んだ？

突然の叫びに、周囲の生徒の目がこちらを向く。

しまった。ただでさえ注目を集めるのに、これ以上……それこそ

泣かれたりしたらやばい気がする。

見ればちらほら二年や三年がいるし、セシリアにもいい影響がある

とも思えない。

「――ちよ、ちよつとこつち来い！」

「え……？ええっ？ちよつとわたくし、待ち合わせが――！」

セシリアの腕をつかんで移動したのは、食堂とは別にある学園島隅のカフェテリア。

木製の落ち着いた内装で太平洋が望める好ポジションなんだが、授業の合間に行くには通すぎて、上級生でも知ってる人は少ない店だ。

お互いにエスプレッソに口をつけ、落ち着いたのかセシリアは自分から切り出してきた。

「最近、模擬試合の結果が芳しくありませんの」

「最近？」

「ええ、あの福音事件からこちら、一年生の専用機持ちの実力がある程度固まってきましたの」

そう言っで見せてきたのは模擬試合の結果表。

もちろん専用機持ち限定だが、セシリアはその中で——最下位だった。

「理由はわかってるのか？」

「はい、機体制動に問題があるとは思っていません。問題は——

—ブルーティアーズの特性ですわ」

BTの特性……。

「まさか、適合率が下がってるのか？」

「いいえ……って、いえ、はい。その、最近は落ち気味でして……言い訳のようになってしまおうのですが……」

セシリアが膝の上でスカートを握ったのが伝わってくる。

「……一夏さんの白式には第二形態以降、雪羅が標準装備されていますの」

「ああ、資料は読んだぞ。盾にも粒子砲にも近接爪にもなる攻防一体の装備だったな」

「はい。そして雪羅は光学兵器を分散してしまう特性があります。つまり——」

「——光学兵器しか積んでいないBTとは相性が最悪ってわけか……」

これは……キツイな。

セシリアの攻撃はすべて無効化され、逆に遠隔砲撃を撃ち返されるのだ。

加えて、爪による近接攻撃の充実はセシリアにとって最も嫌な進化だっただろう。

さて、どうするか。

B Tとの適合率が下がってる問題については、おそらく心因的な理由があるだろう。

気にする気持ちはわかるが、それによって適合率を下げちゃって元も子もない。

前のセシリアを見る。

おそらく実弾兵器でも追加するつもりなのだろうか、武装のカタログから目を離さない。

と、そこへ――

「もうっ、セシリアこんなところにいた！」

「・・・デユノア？」

目立つ金髪を揺らして店内に入ってきたのは、一年の専用機持ち、シャルロット・デユノアだった。

デュノアのやり方

「デュノア……」

セシリアを連れて入った学園の離れにある喫茶店。

そのドアを開いたのは意外にも一年生のシャルロット・デュノアだった。

「もう、クレハといえるなら連絡ぐらいしてよセシリア。おかげで学園中を探し回ることになっちゃったじゃない」

「も、申しわけありません……」

セシリアは頭を下げつつも、「クレハさんが悪いのですからね……！」的な視線で俺をチラリと見てくる。

二人は待ち合わせしてたのか？

そうすると、セシリアが昇降口でたたずんでいたのはデュノアを待ってたからだと思える。

ふむ……俺が全面的に悪いな。

「デュノア、セシリアは俺が無理言って引つ張ってきたんだ。でも、ちようどよかった。座ってくれよ」

謝りつつ、机に椅子を追加した俺を怪しそうに眺めたデュノアは、

「……まあ、どうせお茶しようと思ってたから良いけどね」

カウンターにいる店員さんにカプチーノを注文しつつ座った。

運ばれてきたカップからコーヒートの香りとクリームの甘い香りがしたので、俺とセシリアは顔を見合わせてカプチーノを追加注文。

三人でコーヒートブレイクを楽しんだ後、そういえば、と俺から切り出す。

「お前ら二人でお茶とか珍しいな、なにかあったのか？」

「え？ あー、ちよつとね」

言いにくそうにもみあげを弄るデュノア。

「大丈夫ですよシャルロットさん、クレハさんにはその件で相談していたところですよ」

「あ、そうなんだ。なにかアドバイスもらったの？」

「それは……」

今度はセシリアは黙った。

「正直言つて、俺からは何をアドバイスすればいいのかわからない。BTは遠距離型のISだし、一夏の雪羅ともぶつかって無いしな」
「ここでそれを言うのは上級生としてどうなんですか?」

「まさかお前が模擬戦で負け越してるなんて思ってたんだよ」

実際、セシリアの戦績が悪いなんて思いもしなかった。

セシリアはいつも強気で胸張って立っているイメージで、今のよう
な肩身を縮ませている姿なんて想像もしていなかった。

セシリアはイギリスの代表候補生だし、専用機持ちだ。

きつとイギリスからの圧力もあつて、相当にプレッシャーを感じて
いるのだろう。

さつきも言ったが、それによつて精神のバランスを崩してBTの適
合率が下がっている可能性もある。

だから、取りあえず言えることを言っておこう。

「まあ、なんだ。心配のし過ぎで適合率が下がっているのかもしれない。
なにか気分転換でもしたらどうだ」

「気分転換、ですか?」

「ああ、例えば料理——はないとして」

「なぜ料理は除外したんですの?」

「りよ、料理は細かい調味料の組み合わせだ。精神をすり減らしてる
お前にとつては逆効果なんだよ。決して毒の生成を止めたいわけ
じゃない」

「毒?」

マズイ、少し本音が漏れた。

「とにかく料理はダメだ。他に買い物とかもあるが、自分のストレス
発散方法を見つけたほうが良いかもな」

「ボクのおすすめはお風呂だよ。大浴場より、自室のシャワーのほう
が落ち着いていいかも」

「わかるぜそれ。大浴場は大きすぎて逆に落ち着かねえんだよな」

日替わりで男子が入れるようにローテーションは組まれたが、男は
現在俺と一夏の二人だけ。

さすがに二人で入るにはあの風呂は広すぎる。

デュノアもそうなのかな？と思つて同意したんだが、なぜかデュノアはちよつと焦つた様子で視線を右往左往。

「え、ええと、ボクの場合みんなの視線が、ね……？」

恥ずかしそうに自身の胸元を押さえるデュノア。

……デュノアは男子がランキングをつけたところ（二人しかいないが）、一、二年の中でも上位に食い込むほどスタイルがいい。

ランキングは鈴ベリケツと箒一位によつて、俺と一夏ごと海へと投げ捨てられたが、女子は女子で思わず見てしまうほど凄いつてことか……。

押さえた瞬間手の重みによつて、ふによん、と制服越しでも胸が変形するのが分かつてしまい……ごくり。

その生々しい光景に生唾を飲んでしまう。と、

ギンツ！

うおっ！

俺の視線がバレたのか、セシリアが刃物みたいな目で俺を睨んできた！

セシリアの視線の圧力により、目線を変えざるを得なかった俺は、窓の外の太平洋に逃げ場を求めた。

あ、カモメが飛んでるう。

「はあー、デュノアさん？ クレハさんは自制心が弱いので軽々しく身体の話をするのは褒められたことではありませんわよ？」

「まてセシリア。それじゃ俺が見境無いみたいに——つて、デュノアもデュノアでそんな目で俺を見るんじゃねえッ！」

まるでゴミでも見るかのような二人に言い訳しつつ宥めること数分。

ケーキを注文したことで二人の機嫌が戻つたので今度は俺の願いを提示させてもらう。

「セシリアの悩みは置いておくとしてだ」

「は？」

「お、お前ら二人の実家は貿易もしてるんだよな？ 特にオルコツト家は」

「またもやセシリアに睨みつけられビビったが、無視して話を進める。」

「……ええ、オルコット家の家業は貿易業。世界中の品物を扱っていますわ」

「だったらアメリカのスタークインダストリーとは取引してるか？」

「ええと、少々お待ちください……ええ、今は会社の規模も小さくなってしまっていますが、工業製品を少し」

「デュノアはどうだ？ 会社で何か関わりあたりするか？」

「本人から聞いたことは無いが、デュノア、という名前で初めに思い浮かべるのはデュノア社だ。」

「フランスに本社をおくデュノア社は、自社製ISラファール・リヴァイヴが世界第三位のシェアを誇る大企業で、デュノアはおそらくその令嬢か何かだと思ったんだが……。」

「ツ……。」

見れば、デュノアは唇を噛みしめ、顔を伏せた。

「……クレハさん、女性が隠していることを無暗に聞き出そうとするのは紳士の行いではありませんわよ」

「セシリアが俺を咎めるように言うが、その顔は怒っているのではなく……心配しているような顔だ。」

「予想外の反応に、流石の俺もマズイと思ったので、」

「悪い。デュノアにだってわからないことはあるよな」
「そう、濁しておく。」

「全く、女性に恥をかかせるものではありませんわよ。……話を戻しますが、その取引相手がなにか？」

「スタークインダストリーの業績は知ってるな？」

「ええ。ISの前世代の兵器、アイアンマンを開発した会社ですわね」
「この間、そのアイアンマンの最新型、もしくは改良型に襲撃された。ビッグサイトで爆破事件あったろ。あれだ」

「セシリアは記憶を手繰るように顔をしかめ、そして「ああ、そういう戦闘があったと情報が回ってきましたわね。公には爆破事件で通ってまずの？」と、かつるうーく言った。セシリアも戦闘慣れして

きたなあ。

「幸いにもサラが撃退に成功したが、敵はまた来るとも言っていた。できれば情報がほしい」

「・・・質問しますわ。クレハさんはアイアンマンについてどの程度ご存じで？」

セシリアがタブレットを開きつつ質問してきた。

「スペックデータは束さんから大体もらったんだよ。でも過去のデータだった」

「そういうことですわ」

「どうということだよ」

「篠ノ之博士の知らないことをわたくしたちが知りえるハズがありませんわ」

セシリアがごく最近のスタークインダストリーとの取引データを表示させる。

「ご覧の通り、現在スターク社との取引は電子機器類がメインとなっています。数年前までなら極少数ですが武器の流通も担っていました。ISの登場以来、ほとんど流れることは無くなってしまいました」

「でも、襲ってきた奴は俺が見たこともないタイプだった。間違いなくどこかでアップグレードなり開発なりをしてるはずだぞ」

そこで、ハタと気が付く。

「・・・スターク社は、別のルートで取引し始めたってことか・・・？」

「その線が予想されます」

そういうとセシリアは、見たことも無いような真剣な顔でタブレットを操作し始めた。

たぶん、仕事モードってやつなんだろう。邪魔しないように静かに聞いてよう。

「スターク社とのつながりで取引を行った会社のデータも検索しましたが、めぼしい情報はありません。スターク社自体のデータはプロテクトが強固なためネット回線で閲覧することは難しそうですわ。他の大手以外と取引を行ってる可能性もありますが、現段階で知りえる

情報は確証に足るものではありませんわ」

「そうか・・・」

セシリアでもダメかと諦めかけたとき、いままで黙っていたデュノアが口を開いた。

「じゃあさ、実際に潜り込んでみたら？」

「潜り込む？」

「うん。クレハは夏に潜入調査やってたでしょ？」

「ああ、やった」

「なら大丈夫でしょ」

「「いやいやいやいや」」

セシリアと合わせて突っ込む。

なんだこの軽さ。

前、格ゲーをした時にラウラが見せた「ね？簡単でしょう？」ってセリフより軽かったぞ。

「あのなあ、デュノア。俺は相手にツラが割れてるんだよ。どうやって潜入しろと？」

「そうですね！それにスターク社の社員に紛れるにはクレハさんは頭が足りていませんわ！」

おいこら。

「そこはホラ、初秋のインターンを装って行くんだよ。IS学園は多国籍校どころか国籍がない学校だし、インターンの受け入れは整備科の生徒ならすんなり通るんじゃないかなって」

「・・・偽装することか」

「そう。幸いにもクレハは変装が得意なんだし、潜り込んで内側から攻撃するなら最も適した人材だと思うよ」

変装って・・・あれか。女装のことを言ってるのか。

「百歩どころか万歩くらい譲って女装するでしょう。だがどうやって向こうとの約束を取り付ける。さすがに学園に協力は求められんדר」

「考えはあるよ。転校生として新しく学生登録をすればいいと思う。スタークインダストリーといえども他国の学生一人の身辺調査を詳

細に行くなんて無理だと思っし、それが少し前まで学園外の人間ならなおさらだと思っし」

「つまりなにか？ 俺に暫く女装して過ごせと？」

それじゃあ一年の時の焼き増しじゃねえか。

二、三年生は顔を知ってるし、絶対無理だぞそんなの。

「さすがにそんな酷なことは言えないよ。女装して生活しなくても、女子用の戸籍には予備があるでしょ？」

俺とセシリアは顔を見合わせる。

「・・・予備ってなんだ。知らんぞそんな裏技——ッ」

突如戦慄した俺の顔を見て、セシリアがはてなマークを浮かべている。

それに対してデュノアの顔は・・・今にやけたぞ?! 口の端をニヤツと釣り上げやがった!

デュノアが言外に伝えているメッセージに気が付いた俺は、恐怖に震える。

デュノアが言った『戸籍の予備』というキーワード。

それは俺が良く知る人物二人が使っているモノだ。

言わずもがな、アオとミナトのことだ。

二人はもともと超界者であり、日本には戸籍がない。

この二人は束さんの用意した架空の戸籍を使ってこの学園に在籍しており、ミナトの弁によるとその戸籍はまだ複数あるようなことも言っていた。

あの暗い、地下射撃場で、だ。

そのことを知っているということは・・・シャルロット・デュノア。この女、どっかで盗聴聞いてやがったな!?

あそこは基本的に俺とミナトくらいしか出入りしないこの学園で唯一ともいえるセーフゾーンだ。

その情報を、何故か知らんがデュノアはヤバセシリアい女にチクろうとしているのだ。

「あー、なんだかボクミルククッキーが食べなくなっちゃったなあ」

これは、敵地に潜入する手段を提示しておきながら、その手段に発

生するリスクを人質に取って脅迫するパターン……！

わざとらしくつぶやかれたミルククッキーとは、おそらく条件の隠語。

俺は店員さんにクッキーを注文して、条件に従う意向を示して——話を促す。

「予備の戸籍を使えば転校手続きも問題なく進められるし、初めから学園にいたことにもできる。きつとこれで向こうにインターンする問題はクリアだと思うよ」

水面下で進められたやり取りに、セシリアがさらにはてなマークを浮かべて今までにないくらい面白いことになってるが、今はスルーだ。

「じゃあほかに問題があるっていうのか」

「あるよ。向こうでの住居や生活はどうするの？ 潜入したとして情報はどうやって得るつもり？ ちなみにボク、英語はカタコトだよ？」

……ほほう。

自分どころか、セシリアまで連れていけと言いましたか……。だが、先攻するユニットは此処で決められる話じゃない。

確かに情報戦ができるデュノアや、英語が堪能なセシリアは役に立つかもしれない。

だが、それならばほかに当てがないわけじゃない。

悪いが、条件の真意が読めない以上、すぐに飲むわけにはいかないワケで……。

「ありがとな二人とも。アドバイスも出来ずに悪かった。インターンの件についてはしばらく考えさせてくれ。クッキーはとりあえず俺が払っとく」

そう条件は保留する旨を伝える。

席を立った俺にデュノアは視線を向けず……、
「できれば、いい返事が欲しいな」

そう、つぶやくのだった。

多難な学園祭

セシリア、シャルロットの二人とアメリカ行きの計画を話した翌日、全校集会が執り行われた。

時期を考えると学園祭について生徒会から連絡があるくらいだと思うので、俺はのっそり講堂へ赴き二年の列最後尾へ並ぶ。

ガヤガヤと騒がしい講堂だったが、妙齢の女性教頭教員、高柳先生がマイクを手に取ると静まり返る。

先生の司会で集会は進み、議題は学園祭に移った。

先生に代わって一人の生徒会役員がマイクを手に取る。

「これより、今年の学園祭について説明させていただきます。二週間後の土曜日、九月十七日。例年通り開催期間は一日として学園祭は開催されます。しかし、今年は二人目の男子入学によりだいぶ勝手が変わってくるかと思われれます。去年は秘匿扱いだったので通常の人数でしたが、今年は大量にIS関係者や企業の方も来られるかもしれません。話し合った結果、一般開放こそしません皆さん、自分が注目されている学校の一員という自覚をもって行動してください」

役員の説明を聞き流しつつ、俺は去年の学園祭の思い出を振り返る。

校庭に設置するテントを運搬機で運び、ISも使わずすべての設置をこなし、音響機材の準備、撤収片づけ清掃エトセトラエトセトラ・・・俺はスタツフか。

今年は一夏もいるし、楽になるといいなあとか考えるんだが・・・二、三年にとつては都合の良い駒扱いなので楽する夢を見るだけ無駄かもしれないな。

「続いて、今年公式の男性操縦者、織斑くんがいるので一つ催し物を追加することが決定しました。」

その発言に、講堂内がにわかにざわつく。

催し物の追加あ？

これ以上準備物の増加は俺が過労死するぞ。

「去年は何も無かったみたいすけどねー？ 扱いが違いすぎて不

憫つすクレハさん！」

「おう、お前だったかフォルテ。話すのは前の電話ぶりか」

「そうっすね。クレハさんが妙に長電話するもんだから待ち合わせに遅刻したあれ以来っすね・・・絞め殺しますよ」

「前向け前。絞め殺す前にお前が更識に目えつけられるぞ・・・俺はいない扱いだったから何か大々的にやるわけにもいかなかったんだろ。っーか俺の扱いが最低だったし」

「準備で走りっぱなしでしたもんね。普段からダルそうなクレハさんが働いてるなんて違和感ある光景でしたっす」

「絞め殺すぞ」

と、ここまでフォルテと駄弁っていると、スコーン。

どこからともなく閉じられた扇が飛来し、フォルテの後頭部に激突する。

「その二人い？ うるさいわよ」

おっと。生徒会長の登場だ。

俺は痛みに悶えるフォルテを置いて姿勢正しく前を向く。知らんぷり知らんぷり。

「やあみんな。おはよう」

壇上上がった更識は会長らしく堂々と切り出した。

「さてさて、今年は私自身立て込んで一年生の入学式にも出ていなかったわね。初めに自己紹介と行きましょ。私が更識楯無。君たち生徒の長よ。以後よろしく」

そう言つて頬を釣り上げて笑うと、周囲の女子たちが魅了されたようにため息をつく。

なんであれにうっとりできるんだ。俺には豹かなんかの肉食獣が笑ったようにしか見えんぞ。

「書記の虚うつほちゃんから話はあつたけど、今年はイベントを一つ追加するわ。」

満足そうに俺たちを見下ろした肉食獣こと更識は、そのデカイ瞳をライト以上に輝かせてそのイベントを発表する。

きつと騒動に巻き込まれることになるだろう。

超界者とかアベンジャーズといった問題を抱える俺としては無駄な負担は御免被りたいね。できれば普通に学園祭してほしいところだ。

そう願うが、きつとこの望みは叶わない。これまでの例から俺はそれを直感した。

「名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』!!」

意外なことに、俺には微塵も関係のない話だった。

@

更識を始めとした生徒会は、俺の知る限り三人で運営されている。生徒会長、更識楯無。書記、布仏虚。会計、布仏本音。の、三人だ。姉妹そろって生徒会入りしていることにも驚く布仏姉妹だが、なんと会計の妹は一年整備科のほほんさんであるのだ。

あのちやらんぼらんした女子がどうやって生徒会に入ったのか気になるところだ。

整備科に入るあたり、頭が良いかもしれないからいい勉強方法教えてもらおうかな。

・・・なんて現実逃避気味に益体もないことを考えていたのはワケがある。

「三年が重要よ！ 引退したんだから一人でも多くうちの部活に呼び込むの！」

「箏曲って毎年演奏会と体験会だったわよね？今年は和風喫茶にしない？」

「投票一位の魅力は大きいケド、どうせなら織斑くん楽しんでもらえる出店にしない？」

現在、クラスの希望で開催された放課後の特別ホームルーム中だ。

本来俺は無所属なので争奪戦なんかには全く関係ないのだが、一応クラスでも出し物をしなければならぬので残っているのだ。

始めこそ、雨の司会で話し合いが進んでいたのだが、時間が経つにつれ脱線。

くわえて早めに終わったクラスから部活の出店連絡が来るもんだから、女子たちはもう雨の話をもっと聞いていない。

「み、皆さん・・・！ まだ出し物決めてないのうちだけですよ〜！」
騒々しい教室に黒板を背にした雨の音が消えていく。

ああ、悲しき雨よ。どうしてお前がクラス代表になってしまったんだ（大倭先生の独断

「ちよつと皆、はやく決めちゃってよ。あたしもう職員室帰っちゃうよ？」

「勝手に決めてください！ それどころじゃないんです！」

「え？・・・あ、ああ。・・・なら王道にコスプレ喫茶じゃない？」

「それ先生が私的にコスプレしたいだけでしょう！」

「なんで知ってんのよあんた達ッ!？」

・・・という風にして遅々として会議が進まないのが我がクラスの状況なのだ。

その時だ。

ヴヴヴヴ・・・ヴヴヴ・・・

スラックスに入れた端末が震える。

すぐに止まったからメールかショートメッセージかな。

取り出した端末を机に隠して開き、確認すると——お、サラからだ。

メッセージは・・・『私のクラスの現状』？

サラのクラスと言えば何故か部長が多く集まってしまったことが夏休み以来有名になったな。

何の用だろうと首を傾げていると、次のメッセージが表示される。

・・・写真だ。

俺みたいに机に隠した端末から壇上の様子を隠し撮りしたらしく、そこには各部の部長たちが集まってなにか書いているのが見てとれた。

何だろうか。わざわざ送ってきたからには意味があるはず・・・。
少しぶれている写真を画面をこすって拡大していく。

・・・ん？各部の名前の下に日付と時間、そしてメモっぽく小さい記述がある。

読み取れたのは、「吹奏楽部 九月五日 15:00より楽器運び」。

なんだ。部活ごとの準備予定表か。

サラも無所属だったはずだが、いったい何の意味が？

懸命に画像を拡大し文字を読もうとしていると、追加のメッセージ。
ジ。

『これ、貴方の労働時間割よ』

・・・は？

おい、待て。

なんだそりや。

そりや去年もやったからなにか手伝わされるんだろうなつては思ってたが、これ、どう見ても深夜まで時間割入ってるんだが!?

IS学園の総組織数は百以上。

そこから学園祭に出店するのは公認部だけなので、半分くらいある同好会は消える。

そ、それでも五十は名前が挙がってるぞこれ!?

ヤバいぞここの女子ども・・・！俺を去年以上に使い潰す気だ・・・ッ

！

『みんな取り合うようにして時間を取り合ってるわ。よかったわね色男さん』

『よくねえ。なんで俺が労働力扱いされてるんだ』

『去年は私たちのクラス展示と校庭の準備だけだったから、どこのクラスや部活も都合のいい労働力が欲しいんでしょう』

『え？ まだクラスもあんのか？』

『ええ、このあと抽選で決定する運びになってるわ。篠ノ歌さんも出席することになってるはずよ?』

俺は立ち上がり、壇上の雨に詰め寄る。

「おいおい、雨さんちよつとこれについて説明してもらいましょうか」
「ごつ、ごめんねクツちゃん。で、でも安心してね。絶対私当選して見せるから!」

「じゃなくて、なんで俺に知らせてくれなかったんだよ・・・っ」

「・・・だって、ちゃんとルールに沿わないと誰かがクツちゃん拉致しちゃうかもしれないし・・・」

「……ん」

なるほど、一理あるな。

ちゃんと決まりを作っておけば無理やりってことはないだろうし、混乱も起きにくいことは確かだ。

しかし、手伝うこと自体が強制的なんですけど、それはどうなんですかね？

ここで雨に文句を言っても仕方がない。

諦めて逃走方法を瞳でググろう。

しかし、今年の学園祭。

イベントの件も含めて関係ないと思っていたが、案外忙しくなりそうだな。

@

結局、クラスの出し物は普通の休憩所に決定し、各々部活に注力するため店員の数は最小限。俺は午後のみシフトということが決定した。のみていうか、午後はずっと言った方が正しいな。

部活や他クラスの手伝いは知らん。教員に言われればやるが、そんな無理やりやらされてはいいそうですかって手伝うと思ってるのかアイツら。

「じゃあ、頼まればやるのね？」

ホームルームが終わって、アメリカにわたる都合の良い仕事がないか情報室で遅くまで調べていた俺は、部屋で待ってた三人と食堂で飯を食っていた。

今日あった無茶苦茶な出来事を鈴、ラウラ、デユノアの三人に愚痴る。

「まあ、勝手に時間決めてやらせるよりは何倍も良いだろ。アイツら俺のことを何だと思ってる」

「女装男子」

「お前ら追い出すぞ」

三人と部屋を共同にして数日が経つ。

鈴との生活もすぐに慣れたが、なんつーか、女の匂いが強く香る部屋になれるってなんか自己嫌悪だな。

「私たちのクラスはとくに重労働はないので大丈夫ですが、部活のほうが・・・」

「ん？ラウラお前、部活に入ったのか？」

「はい。クラリツサの勧めで漫研なる部活に入部しました。兄さんも一緒にどうですか」

「・・・いや、遠慮する」

「そうかあ、クラリツサの影響かあ・・・」

「あたしのクラスも問題ないわよ。中華喫茶するんだけど、テーブルなんかは自分たちでやることにしたから」

「トレードマークのツインテールをみよんみよんさせている鈴は、自分の希望で中華喫茶にできたことを相当喜んでるようだ。」

「中華喫茶つてことはチャイナ服とか着たりするの？」

「いやね、着ないわよ。しっかりしたものは案外良い値がするし、恥ずかしいのよ」

「つてことは食いモンに集中か」

「そ、中華料理店の娘監修だから期待してなさいよ」

「そりや楽しみだ」

その後はラウラが去年の学園祭の様子を聞きたいというので、俺の苦労話を聞かせてドン引きさせたりしていると・・・

「そういえば生徒会長と一夏つて仲いいのかな？」

「一夏が？ 入学式も出てないし、集会が顔合わせじゃないのか？」

「ううん。この間知らない青い髪の上級生と会話してて授業に遅れたつて言ってたよ」

「あんな目立つ髪はアイツかミナトくらいしか知らないし、たぶん会ってたんだろうな。なにかあったのかデユノア」

みそ汁を置いたデユノアは更識と一夏の関係について疑問を呈した。

「今日偶然みたんだけど、放課後一夏と会長が二人で会ってたから怪しいと思って着いていったんだ。そしたら・・・」

「「そしたら？」」

「突然大勢の生徒が会長を取り囲んで一斉に襲撃してたんだ」

「あー、毎年この時期じゃよくあるヤツだ。一夏は居合わせただけだろ」

「よくあるってなによクレハ」

鈴が聞いてくる。

「お前ら、生徒会長はどういう存在か知ってるか？」

「どういうって・・・クレハとは犬猿の仲？」

「そうじゃなくて・・・じゃあ、生徒会長になる条件は？」

質問を変えると、ラウラが「人気投票で決まるのでは？」と答えたが、違う。選挙を人気投票というな。

「——最強であれ。ってやつ？」

「正解だデユノア。前に言った気がするな。生徒会長は前生徒会長を倒した人間が就任するんだ」

「なによその少年マンガみたいな制度・・・」

「知らん、初代生徒会長を倒した二代目に聞け。・・・話を戻すと、生徒会長は最強じゃないとダメなんだ。じゃないとすぐに会長の座を奪われて自分が描く学校にできなくなる」

「学生の会長なのにそんな特権があるの？」

「あるんだ。生徒会長は同時に、学園の最高戦力っていう肩書でもあるからな。色々駆り出される代わりに自由は効かせてくれるんだよ」

此処までの雑把な説明でデユノアは更識が襲撃されていた理由を悟ったらしく、確認するように口に出す。

「つまり、学園祭で自分の都合を通すために会長の座を奪おうとしてたってこと？」

「そうだ。大方一夏争奪戦についてだろ。集客が見込めない弱小部は望み薄だから潰したいんだろうな」

「生々しいわね・・・」

「全くだ」

全員で茶を啜り、一服。

「で、昼間の件考えてくれた？」

思わず吹き出すかと思った。

にこやかにどす黒く話題を切ってきたデユノアのしたたかさに肝

が冷える。

瞬時にほか二人の視線が俺に向いた。

「昼間ってなんのことよ」

「何のことですか」

「二人で食べたクッキー、おいしかったねクレハ」

「食ってねえし、セシリアも居ただろ！」

俺の発言に疑問の眼だった二人の眼が鋭くなる。しまった！

「ちよつと食堂で飯食ったんだよ」「離れのカフェでお茶でしょ？」

「コーヒーとカフェオレいただきました!!」

ダメだ。

なんでか知らんが、デユノアはここで答えを出せと言っている。

だがなあ、まだ向こう行ってなにするかどうするか以前に、日にちすら決まってるじゃないぞ。

正直に言ってもいいが、それだと大所帯で乗り込むことになるし、IS乗りが大勢で入国とか絶対許可でないぞ。

「シャルロットと仕事の話でもあつたの？なら今度はあたしも混ぜなさいよね。あんたについていけば超界者に会えるかもしれないし」

すぐに会えますよ。サラの部屋と第三アリーナ地下射撃場に巣くつてます。

そうやって逃げようとしても、ふたりの事は鈴にも知られているので大したネタにはならない。

「お前なあ、どっちかって言うかと接近しない方が安全なんだぞ」

「分かってるわよ。けど、攻撃は最大の防御よ。相手が迫ってくるならむしろこつちから行ってやるわ」

「はあ……鈴らしいといふかなんというか」

きつと鈴は、俺が隠していてもいつかは嗅ぎ付けてくる。それこそ勝手にアメリカまで来ないとも限らん。

だったら、ちゃんと訳を話して現状を理解してもらった方が安全そうだ。

「アメリカのスタークインダストリーに、超界者との繋がりがある可能性が見えてきた。この間襲われた借りもあるし、潜入して探つて来

ようと思ってる。向こうで生活するにあたって、英語が堪能なセシリアと情報戦が出来るデュノアに応援を頼んでたんだ」

仕事の話は内密に。

その了解に沿って俺は鈴に近づき、耳打ちするように説明する。

……が、なんだ？

鈴が耳を押さえて……俺を睨んできた。

「……近いのよ」

「え？ あ、ああ悪い」

珍しい反応に面食らった俺は、ちよつと驚きつつ席につく。

鈴は短く息を吐き、顔色を朱色にしたまま顔をあげる。

「仕事の内容はわかったわ。あたしは潜入に向いていないユニットだし、付いていけば足を引つ張ることも……。だからアイアンマンに関してはクレハの仕事とするわ。あたしもこつちで自分の仕事をする」
「自分の仕事？」

「学園から各国専用機持ちに依頼が入ったのよ。学園祭中の即応戦力として学園祭の警備をする仕事。二人もクレハについていくなら忙しくなりそうだわ」

「人の出入りが増えるからな……一夏目的で来る連中も増えるだろうし」

「そう。だからこつちはあたしに任せて、クレハは向こうでしつかりやって来なさい。結果、期待してるからね」

そうやって鈴は、はにかんだ。

ちよつと腹になにかありそうな、困ったような笑みだった。

偽造パスポートと戸籍はミナトが用意してくれるのでこのまま完成を待てばいいのだが、あとアメリカって行くのに何が必要なんだろうか……と。

「……あれ？　なあ、アリーナの観客席べっこべこなんだが、なんかあつたつけ？」

観客席へと通じる通路に設置してある中継モニターに映し出されたアリーナの状態に疑問を持った俺は、背後をついてきていたデュノアに尋ねる。

「あー、あれ？」

俺で遊ぶのに満足したのか、つやつやしたデュノアは言いにくそうに半笑いの表情を作ると、口止めされてただけどね、と喋りだした。

「実は昨日、あそこで生徒会長と一夏が特訓してて」

「特訓？」

「うん。昨日の夜生徒会長が襲撃されたこと聞いたでしょ？　そのあとホントは一年の専用機持ちが合同特訓と称して一夏の訓練をするはずだったんだけど、何故かはわからないけど、生徒会長と一緒に参加して滅茶苦茶に一夏を苛めて行ったの」

「え、じゃああの破損って……」

「うん。ほとんど全部一夏の墜落跡」

「……えげつねえ。」

「ほかの一年は苛められなかったのか」

胸ポケットに写真を収めつつ訊いてみた。

するとデュノアは頬をポリポリと掻きつつ、

「まあ、少しはね。シューターフローってわかる？」

「リヴァイヴの操縦講座で聞いたな」

「そう。もともとリヴァイヴを専用機として大会に出場した選手の得意技を正式に操縦技術として体系化したものなんだ。シューターフローの名の通り、射撃時のIS制御をマニュアルで行うことによつて、より複雑な飛行を行いつつ、射撃も実行できる、って技術なんだけど」

「確か昔のISの射撃ってオート制御の直線飛行中に行うか、滞空し

て固定砲台になるか、って感じだったな」

「そうだね。ヨーロッパの騎討ち競技に倣って『ジヨスト』とか呼ばれてたっけ」

「で、そのシューターフローを習ってたわけか？　今更？　射撃タイプのお前が？」

「違うよ。確かに一夏はイチから習ってたけど、ボクとセシリアはちよっとしたアドバイスをもらったくらいだね。そういうクレハはできるのかなあ？」

「まあ、上下左右に曲がるくらいなら、なんとか的に当てられるかな」
デュノアとグダグダ喋りつつ第三アリーナを出る。

もうじき夕食の時間ということそのままデュノアと食堂へ入ったんだが・・・なんか人だけがある。

「ボクお茶とつてくるね」

「おいまて逃げるなデュノア。面倒ごと臭いけど、あれ。たぶん一夏だぞ」

そそくさと逃げようとするデュノアに人ばかりを指す。

人の隙間から小さくはあるが、確かに机に突っ伏した一夏が見える。

「本当だ。今日も生徒会長に訓練してもらったのかな」

「かもな。でも、あんなふうになるほどシゴかれたのかアイツ」

「そういうえば今日の昼休み、会長がクラスに来て一夏とお弁当食べてたんだよ。なんかもう重箱五段重ねの凄いお弁当」

「篠ノ之が面白い感じにキレそうな訪問だな」

「うん。箸すつごく怒って一夏を睨んでた」

「胃に穴が開きそうだな」

なんかもうこれ見よがしに死にそうなうめき声を上げながら突っ伏しているの、仕方なく人だかりに近づく。

「おいフォルテ。なんか声かけてやれよ」

「い、嫌っすよ。なんか話によれば今日の織斑は会長にマークされっぱなしだって聞いてますし」

「マークされっぱなし？　どういうことですか？」

「おや、デユノアくんちゃんじゃないっすか」「くんちゃんってなんだ」「じつは会長と織斑の二人が同じ部屋から朝出てくるところを見た生徒がいるっすよ」

「ほう同居とな」

「いやいや、クレハがとやかく言えることじゃないから」

お前ら女子が出ていけば話は終わるんだよ。

「それで今日の生徒会報によれば、昨日織斑は生徒会室を訪れて役員
のミナサマと親睦を深めた見たいっす」

「・・・おい、それって」

「会長は織斑を生徒会に入れるつもりでしょうねえ」

うっわ。一夏ってば不幸なヤツだな。

「・・・ん？ それって良いの?」

「何がだ、デユノア」

「一夏って、今度の学園祭で一位の部に入部させることになってるでしょ? で、会長は一夏を生徒会に入れたい、と」

「生徒会も出し物をするつもりなんだろ。学園祭で一位を取れば、堂々と一夏を生徒会に入れられるんだ。よほど自分のトコの出し物に自信があるらしい」

「ねえ、それって」

「マツチポンプ、っすね」

「性悪水色女め・・・」

したたかさに磨きがかかって来たな。あの女。

一夏がいよいよぬーんぬーんと意味不明の唸り声を上げ始めたころ、その声に少しでも引いた女子がいたのか人混みが散り始めた。

フォルテは自分の飯があるからとその場を後にし・・・俺とデユノアの二人で一夏のテーブルに座る。

「死にそうな声出すなよ一夏。女子引いてたぞ」

「あー、柊さん・・・」

「だいぶ疲れてるね一夏。お茶飲む?」

「・・・飲む」

差し出された茶を一夏がズゾとすすると、ラウラがやってきた。

「一夏っ、あの女はどうした」

肩を怒らせたラウラは苛ただし気に言った。

「? なんだよラウラ。そんな怒って・・・」

「あの女はどうしたと訊いたんだっ」

「えっ、あつ、生徒会の書類仕事してくるって言ってたぞ」

「・・・ふん、そうか」

どっかり腰を下ろすラウラ。

あの、なんか今日ピリピリしてんな。専用機持ちのみんな。

「そういや一夏、生徒会室に行つたって聞いたが」

「え? はい、役員の皆さんを紹介してもらいましたよ」

「噂は本当らしいな」

「うわさ?」

一夏が首をかしげる。

「一夏、始めに言っておくと、更識には十分注意しろよ。あいつは性格悪いし、計算高い。おまけに肩書は学園最強だ」

「はあ」

「いいか、今は丁重にもてなされてるかも知れんが、いざアイツの手駒になったりした時には地獄のような目に——」

そこまで言つた時だった。

「あく、会長の悪口いつてるう。いーけないんだあ」

変に間延びした声が背後から聞こえてきた。

生徒会会計、布仏本音だ。

「久しぶりですねえ〜ひいらぎせんぱーい」

「久しぶりだな布仏妹。上にチクんなよ」

「いわないよ。めんどくさーい」

珍しく(?)制服姿の布仏妹は、手に持ったプレートにどんぶりメシと生卵を載せていた。

「の、のほほんさん、それなに・・・?」

一夏が震える声で尋ねる。

うん、俺もそれが聞きたかった。

何故かというと、のほほんさんのどんぶり。てっぺんにサケの切り

身がひとつ丸々乗っているのだ。

・・・サケ茶漬か？ いや、なら生卵の存在は・・・？

ラウラとデユノアがそれぞれの夕餉を手にしてくる中、布仏妹は自分の夕餉の準備を始めた。

「えへへ〜お茶漬だよ。いっちーは番茶派？ 緑茶派？ 思い切って紅茶派？ 私はウーロン茶派〜」

妙なりズムを取りつつどんぶりをガシガシかき混ぜる布仏妹。

その様子を見る一夏は・・・頬が引きつっている。

それはともかく、お茶漬にウーロン茶とはまた異色な・・・。

以前からズレた奴だとは思ってたが、結構キてんな。

しかし、俺の見通しは甘かったようで・・・、

「なんとこれに〜」

「・・・これに？」

「卵を入れます」

布仏は、コンコンカパ。

殻にヒビを入れると茶漬の山に器用にくぼみを作り・・・投入した。

そして、

「ぐりぐりぐり〜」

か、かきませ始めた・・・。

マジかコイツ。

ラウラとデユノアが顔を背けてメシを食ってる・・・。お、俺も顔を背けたい。

さらさらとした茶漬からグツチャグツチャという異音が聞こえ始めたタイミングで、

「食べまーす。じゆるじゆるじゆる・・・」

「わあ!?! 音を立てないでくれよ!」

「よし一夏・・・椅子ごと向こうに捨ててこい」

「終さんなに言ってるんです!?!」

通りでいつもの女子二人が居ないと思った。

あの一年女子二人、コイツの食い方知ってやがったな？

離れの席を見ると、その二人がこつちを見て、

「本音、またあれやってるよ」「お茶漬けの時はまずいもんね」「前は梅茶漬けにウナギ、納豆混ぜてたっけ」「あの子、味音痴過ぎでしょ……」
なんてつぶやいているのを瞳が読唇した。

てか、梅にウナギって食べ合わせ最悪じゃねーか。

「ズゾゾっていくのが通なんだよ」

「それはソバだ！」

「ちゆるちゆる」

一夏も疲れてんのによく突っ込むな……。

その後、部屋に戻った一夏は待ち構えていた更識を見て疲労で倒れ
たらしい。南無三。

@

学園祭まで五日を切った。

そんな中、俺は今夜の便で短期インターンとしてアメリカへ渡る。

サラが「アオは私が育つ——養うわ！」と言っていたので、俺は
幾分か多めの現金を準備し、荷物をまとめた。

学校に申請した偽の任務受諾票は東さんに口を利いてもらって無
事通過。少しの単位と報奨金が下りることになっているが、実際には
下りることは無いだろう。不正で単位を稼ぐことはさしもの東さん
も許さない。

スタークインダストリー側に送った申請書はもつと時間がかかる
かと思ったが、意外とすんなり通った。顔写真、バレなかったのかね。

最終確認としてポストンバッグ一つにまとめた荷物の点検を行っ
ていると、鈴が部屋に戻ってきた。

「アンタ、結局向こうでの拠点はどうするのよ」

「安いモーテルでも探ささ。セシリアとデュノアはちゃんとしたホテ
ル借りるらしいけどな」

「そう……別室ならいいわ」

「当り前だろ。あの二人と同室とかありえん」

「角の立つ言い方は控えた方が良くないんじゃない？ 怒ったらシャル
ロットとかクレハをどうするかわかったもんじゃないわよ」

「たしかに怖いな」

荷物を詰め終わると、机に置いた端末を手にとって準備を終える。

「ISの調子は？」

「束さんに診てもらった。調整もばっちりだ」

「空港の通貨交換所で両替するのよ？」

「心配しすぎだったの。母親かよ」

「アンタの心配じゃなくて、任務の達成を心配してるの」

「へいへい」

・・・心配、してくれてるんだろうな。

でも、大丈夫だぜ鈴。

今回は潜入任務。

バレない経歴はミナトが用意してくれたし、バックアップのセシリアとデユノアも居る。

万一戦闘になったとしても、瞬龍とBシステムがあるんだ。楽観しすぎてはいけないが、なんとかなるさ。

「それじゃ、行ってくる」

そういつて、俺はドアノブに手をかける。

「気を付けてっ」

そんな声に振り向いてみれば、さつきまで壁に寄りかかってかっこつけていた鈴が、俺を心配するように眉を寄せて立っていた。

あー、かわいいなコイツ畜生。かわいい鈴ちゃんう、だ。

「学園祭までには帰って来る」

少しだけ高鳴りかけた心を静め、努めて平常心で俺は部屋を出た。

@

かつてアメリカの軍事産業を支える一大企業であったスタークインダストリー社。

いまだ特秘部隊として存在するアベンジャーズやS・H・I・E・L・D・なんかの情報とはうって変わって、会社の情報なら簡単に手に入った。

本社の所在地はニューヨーク州マンハッタン。かつてはアベンジャーズタワーと呼ばれた施設であったが、スタークインダストリー

本社の移転により売却。

本来であれば有名な製薬会社オズコープが社屋として使用するはずだったが、スタークインダストリーの新社屋が数年とたたずして全壊。

やむなくして元のタワーに戻ってきてしまったという歴史を持つ。

目的地がニューヨーク州のマンハッタンということで、俺は飛行機を利用するため成田空港に降り立っていた。

「クレハ！ おまたせっ」

IS学園駅前から出ている空港のシャトルバスから降りてきたデュノアとセシリア。

二人とも学園からのインターン研修という名目で渡米するので制服姿である。

「クレハさん。お早いですわね。一体いつ空港に？」

「お前らより一本早いバスでだよ。出国カウンター通る前に準備しておきたかったしな」

ドデカイキャリーケースを引く二人の視線が俺の頭からつま先まで上下する。

「・・・ああ」

「そうだよコノ準備のためだよ。学園で着替えて出るわけにもいかんだろうが！」

空港の正面ゲートをくぐる二人が納得と憐憫を併せた視線を送ってきたため、すぐさま開き直る俺。

俺は女装するために一本早いバスで空港にやって来たのだ。

入国する際に提示するパスポートは俺個人のもものではなく、IS学園二年生の女子生徒『柊 紅葉(アカバ)』のものである。男子のままで出国しても別に良いかも知れないが、あくまでも柊暮刃は出国していないと言う体面を取っておくためにこのような出国方法を取るようになったのだ。

正面ゲートをくぐり、搭乗チケットの確認と荷物を預けるため出国カウンターに行く。

チケットと搭乗席の確認をする際セシリアとデュノアのチケット

が見えたが、なんと二人ともANAのファーストクラスチケットを提示しやがった。おいおい。エコノミーとるのがやつとの先輩差し置いてファーストか。

「粛々と手続きを進める二人を尻目に搭乗手続きに入る。」

持ち込み荷物のX線検査と金属探知機ゲートを潜るんだが、ここで心臓の瞬龍のせい探知機が反応。流石にISのことを言うわけにはいかないので胸に金属片があることを告げると、保安員によるレシーバーでの金属検査とボディチェックで事なきを得た。

一方代表候補である二人。現在、IS所有者が航空機を使用する際ISは格納庫に展開状態で預け入れることが航空法で規則となっている。

チケットチェックが終わった二人は手荷物検査の前に別室へ通された。きつと向こうに専用のハンガーがあつてそこでISを預けるのだろう。

「搭乗ゲートに出た俺は待合室のシートに座って搭乗時間を待つ。」

女子制服を着てる関係上男みたいに脚を組むわけにもいかんが、案内落ち着かないので仕方なく昔見た古い映画「氷の微笑」に倣って女性っぽく脚を組んで落ち着くことにした。

「そこへ。」

「美少女だ。美少女がいる」

なんて、自分もれっきとした美少女であるデュノアがセシリアを連れて現れた。

「よ、二人とも。無事チェックは通つたみたいだな」

「待合室には他の客もいるため、小声で声を誤魔化す。」

「うん。僕の方は無事にね。でもセシリアが……」

デュノアが御愁傷様と言わんばかりの顔でセシリアを見るので、つられて視線を送ると……

「なぜ私のブルーティアーズは拡張領域の武装までチェックを受けなければならぬんですの……?」

と、若干疲れた顔をしていた。

「仕方ないよ。BTは第三世代だから、僕のリヴァイヴと違って武

装も非固定式・非実弾式が多いし。目に見えないだけあって、申告だけじゃ安心できなかったんじゃないかな？」

「そうであったとしても、イチイチ全部取り出して仕舞う私の身にもなってみて欲しいですわ」

ISを所持しての搭乗が初めてらしい二人は、専用ハンガーでの厳しいチェックに既に疲れているようである。

「チャーター機ならこのような不自由はありませんのに」

「あははは。確かにそうだよね」

こいつ等……。

海外渡航なぞ日常茶飯事である大企業の令嬢様方は飛行機はチャーターするのが当たり前のようなようだ。

「さてと。そろそろ搭乗^{ポトタイム}時間だ。ゲートに行こう」

時間を確認すると丁度アメリカ、ケネディ空港行きの乗り込み開始を告げるアナウンスが日本語と英語でされたので、乗り込み口の3番ゲートに並ぶ。

デュノアとセシリアも同じように並ぶと思ったら……あれ？ 列とは別にCAさんにチケットを見せたぞ？

乗客名簿をモニターで確認したCAさんはやけに恭しい仕草で二人をご案内。エコノミークラスの列を差し置いて早々に機内に案内されていく。

人の良さそうな笑顔のまま機内に消えていくデュノア。

セシリアは直前にエコノミーの俺を思い出したらしく、

(申し訳ありませんわね、クレハさん)

とだけ口を動かし、機内へ消えていった。

二人の金髪を見送った俺は、クツソ狭い七列エコノミー席にすし詰めされ……地獄のような機内を過ごした。畜生め。

@

太平洋を横断する飛行経路をとるため、日付変更線を跨ぐ際時間にもよるが日付は一日戻ることになる。

16:50のフライトで成田をたった俺たちは約12時間のフライトを経てニューヨーク州のJ・F・ケネディ空港に到着。日本とアメ

リカ東海岸の時差は大体14時間なので……えーと17+12で27時。日本は深夜午前3時だな。そこからマイナス14時だから……こつちの時間は昨日の午後1時か。入国ゲートに並ぶ傍ら「昨日の午後1時か」なんて呟いていると前に立つセシリアに「何を言ってますの？」と変な顔された。うるせ。時間あわせだ。ほつとけ。腕時計を合わせた俺だが、時差による混乱。いわゆる時差ぼけはあまり感じない。夏場の夕方に出発して昼に着いたのだが、機内でこたま寝ていたお陰かな。

セシリアの前に、デュノアの入国審査が始まる。生粋のフランス人でありデュノア社社長の実子でもあるデュノアだが、入国審査は当たり前に行われる。だが。

「あー、君ら服装からすると三人一緒？　じゃまとめてやろう」

デュノアのパスポートを見るなり、審査官のお兄さんがそう言っつて俺たちを手招きする。

俺もセシリアも面倒な手続きが一気に終わるとみて近寄るんだが、次の瞬間。

「——じゃ、あとよろしくお願いします」

カウンターの横から現れた三人の女性職員に面食らう。

審査官が俺たちのことは放って次の客の審査を始めたところを見るに、俺たちは別の部署に流されたらしい。

俺たちの前に立つ三人の職員の目は……俺たちを警戒している。

そして空港警備隊の制服の襟に光るエンブレム。あれは……！

「アメリカの第二世代量産機、ハウンドだね。空港警備隊配備モデルなら武装は多分……暴徒鎮圧用のライオットシヨットガン」

いち早く武装まで見抜いたデュノアが冷や汗を滴らせる。

シヨットガン装備のISが三機も俺たちの前にある。

待機形態であるため他の客には気づかれていないが、IS学園生徒である俺たちは分かる。これは警告だ。

だが、何故だ？　デュノアはパスポートと一緒にスターク社へのインターン推薦状を提出したはずだ。

なぜこんなにも警戒されるのかが分からない。

「…これは一体何の歓迎ですか?」

セシリアが警備隊員に問う。

「オルコット様、デユノア様にはご迷惑をおかけします。しかし、我々にも命令がありますので。そちらの方は我々にご同行いただけますか?」

そう言つて、俺を示す女性隊員。

「お…私ですか」

「ええ。敢えて言わせていただきますが、法的拘束力はございませんが、抵抗なさるのなら覚悟願います」

剣呑な物言いにデユノアが血相を変える。

「ちよつ、僕たちは非武装ですよ!? あまりにも強引すぎでは!」

「承知しております。ですから敢えて要請しているのです」

デユノアの方に隊員の意識が向いている間に瞬龍の調子を確認する。

すぐに起動できる状態だが、他にも客がいる前だ。

ここで戦闘を始めるわけにはいかない。

相手にも戦意があるわけではない…と思うので、ここは従っておくのが吉か…?

セシリア、デユノアとのアイコンタクト協議の末、大人しく様子を見ることにしたので、

「…わかりました。とりあえず話を聞かせてください」

とりあえず抵抗する気はないことを示す。

俺がそういうと、他の二人がどこからともなく俺達三人分の荷物を持つてくる。

「では、こちらへ」

先ほどから話していた隊長らしき人物にの後について移動するんだが、どういうわけか彼女は正面ゲートをくぐり、アメリカの空の下に出た。

ケネディ空港は海に面した地域にあり、潮風は感じないものの、カラツとした気候で日本のようにべたつく夏の暑さは感じない。

「…っ…これってどういう——」

てつきり拘置所なり別室に連れて行かれるかと思っていた俺たちは互いに顔を見合わせ混乱顔。次の瞬間。

「GO！」

甲高いスキル音が響き、俺の目の前に一台のバンが急停車する。停車する際の反動で勢いよく開いた後部ドアから手が伸び、俺の顔にすつぽりと黒い袋を被せてきた。

…え？　なんだこれえツエ？

視界が遮られると同時に強く引き寄せられる力が働き、俺はどうやらバンに引き込まれたのだと自覚する。

「ちよつ!?　クレハあ!?!」

デュノアの声を最後にバンのドアが閉められ、急発進。

俺の頭はいまだに混乱しつつも、一つの結論にたどり着いた。

(…さ、攫われたっ!?)

声を出そうとするが、袋を被せられる際に布を口に詰められた後猿轡を噛まされているので発声しようにも舌が動かず無意味なうめき声に変わる。

だが、そこはIS学園生徒な俺。

一応周りの情報を得ようと、呻いて混乱するフリをしつつーだけでよかったかも知れんが、折角なので腹いせに俺を押さえ込む奴に蹴りをキメたりしつつ、急襲犯の様子を探る。

「おつ、オゴフツ！　オエツ……な、なあ。キャプテン。本当にこんなことやってよかったのか？　いくら彼女からの依頼とは言え無理やりすぎやしないか？」

「仕方ない……とは言わないが、どちらにしろその人は僕たちに接触する気でいただろうさ。インターンとして侵入されるより話は早いよ」

それより、しつかり抑えなよ。と、キャプテンと呼ばれた男らしき人物が言うのと、押さえつけてたヤツは思い出したかの様に俺の手足に拘束をかけ始める。……イヤイヤ。なんかこつちの意図は全部バレてるっぽいが拉致はやめようよ拉致は。昔、ドイツでちよびつと経験したトラウマが刺激される。

「さて、もう君の素性は全て知っているから単刀直入に行こうか柊クレハ君。運転しているから顔は見せられず失礼するが、僕はスターク氏から君を連れてくるように言われてね。悪いが待ち伏せさせてもらった」

本名を呼ばれる。チクシヨウ。どうやら本当にこつちのことは筒抜けみたいだな。どこからバレた？ セシリアとデュノアに情報探らせたのを逆探知されたか？それとも学園のデータベースに侵入されたのか……？

「君とデュノア嬢オルコット嬢は、スターク・インダストリーに潜入する気だったようだが、すまないね。内緒話は全部聞こえるんだ」

全部聞こえる？ 興味深い話を聞かせてくれるが、こつちもなされるがままって訳じゃない。すぐにISを展開してー

「悪いね。日本人。ソレも知ってる」

こちらの思考を読んだのか、俺に拘束を施し終えた男が申し訳なきそうに言う。

すると、ドンと胸に突き立てられる何か。

ビリっとくる痛みを伴うところからするに……注射器だな？ 何を入れやがった。

薬効が何かわからず、とりあえず手に爪を突き立てて痛みで意識を保つのだが……それすら霞むほどに思考が遅くなっていく。

毒……じゃない。

睡眠薬か何かだ……！

「しばらく眠っておいてもらおう。なに。しばらくしたら目的地だ」
運転する男の声が微かに聞こえる。

置いてきた二人は大丈夫かなと思いつつ、俺は強制的に眠りにつかされたのだった。

スターク・インダストリー

強い睡眠薬による睡眠特有の、泥から抜け出すような意識の覚醒。視界に真っ先に飛び込んで来たのは、病院の手術室によくある大型の照明器具。点灯はしていないが他の室内照明が点いているので部屋は明るく、俺はどこかの医療施設に居るのかと一瞬思う。

しかし記憶が鮮明になるにつれ、ここがただの医療施設である可能性はないと結論付ける。

俺は確かアメリカに渡った直後に拉致されて、睡眠薬盛られて……ここに居るのか。

見れば服は真っ白なTシャツに薄いハーフパンツ。日本をたつときに被っていた長髪のウィッグは頭がない。男の姿の俺になっていた。

これはどういうことだ？

俺は診察台(?)から降りると、閉まっているカーテンを開いてみる。

するとソコには……

「はぁーん……なるほどね。エネルギー伝達に超伝導ケーブルは使用してないのかぁ。とするとどうやってこれほどの効率で動作しているのか……」

床で小ぶりなラップトップとにらめっこし、ぶつぶつと呟く女の姿がガラス越しに見えた。

服装は俺とおんなじようなTシャツにハーフパンツ。金というかプラチナホワイトに近い色の髪を綺麗に肩の長さで切り揃えている。とんでもなくラフな格好だ。加えて、なにか口元に啜えてやがる。タバコか？

微かに聞こえる内容から何かを分析しているみたいだが一体何を

——つてえ

(お、女の目の前にあるの、瞬龍じゃねーか！)

PCを見つめる女の前にあるもの。それはまごうことなき俺のIS、瞬龍であった。第2形態になってから刻まれたIS学園の校章は

見間違えることはない。

Tシャツをまくりあげ、自分の心臓部を確認するのだが、古い手術痕があるだけで、目立った変化はない。

どうやらコアごと摘出された訳じゃないが、ISの登録者以外の展開は基本的に不可能だ。俺は眠っていたわけだし、展開した記憶もない。じゃあなんで瞬龍はあそこにあるんだ……？

ISハンガーを見渡せる窓の横にはハンガーに通じるドアがあったが、そこは向こう側から施錠されていて開けるのは不可能。仕方なくガラスをぶち破ろうと思ったが、これはガラスではなく、防弾ポリカーボネードだ。素手で破るのはこちらもまた不可能と言わざるを得ない。

仕方なく窓をドンドン叩いて呼び掛けるが……集中しているのか女は気づく素振りが無い。

こいつは弱ったぞ……。

しばらくアピールしていたが一向に反応が得られないので、窓を叩くのはやめた。

壁にどっかり腰を下ろして外部との通信を図るが、通信機器類は取り上げられてる。ISコアは胸にあるので、システム起動の準待機モードで通信を試みたが、この部屋自体が電波暗室なのかどうも繋がらなかった。

万策つきた俺は診察台と照明と、非接触式のドアロックユニット以外なものもない部屋をボーツと眺めるんだが……いい加減しんどくなってきた。人間、72時間以上刺激を受けない環境に居ると発狂するらしいね。

目が覚めて二時間近くたっただろうか。曖昧になった時間感覚じゃ何時間たったかなんて正確には把握できないものだが、なんとなく二時間くらいだったとわかる。

不意にカギを解錠する音が聞こえ、開いたドアから先程の女が出てきた。

女ははだしで、ハーパンが隠れるくらい長いTシャツをヒラヒラさせつつ俺の横を歩いていく。

くわあとあくびを一発キメ、どこからか取り出したカードキーを壁のドアロックユニットにかざすと、今までただの壁だと思っていた部分がスライド式に開き、女はそこから出て行ってしまった。

「……」

女が入ってきたドアは開放されたままだ。

俺はハンガーに駆け込むと、装甲展開状態で鎮座している瞬龍のcockピットによじ登り、起動指示を与える……が。

——Error 起動制限が掛けられています。解除コードを入力してください

と、エラーを吐き出した。

……ちよつと待て。瞬龍が俺を認識していないのか？

もう一度試しに展開解除の指示を与えてみるが結果は同じ。

俺の体に異常がないことから、瞬龍のアビリティ「生体再生」は機能しているみたいだが、IS本体は起動も回収もできないただの鎧と化している。

はぁーん？ コイツはさっきの女がなにかやらかしましたな？

さつきまで弄っていたらしきノートPCを覗き込むと、各種瞬龍のデータに加えて、俺の詳細な身体データまで採られていた。俺は何時間眠っていたんだろうか。

とりあえずまあ生体再生が機能しているならまだいい。ISを奪われる経験ならない訳じゃない。要するにコレ、サラのサニークラバーを元に作ったIS剥離剤みたいなものでISのコアを除くマシン部分に勝手に展開されているような感じのようだ。

解除コードがあれば復旧できるだろうし、とりあえず瞬龍はこのままにしておくしかないようだ。

俺はその辺にあった工具からでつかいモンキーレンチを拝借し、今度は女が出ていった方のドアからこの施設を調べてみることにした。

@

すぐに見つかったよ。女。

というか……なんか通路に生き倒れていた。

殺風景だが、木材が使われたシックな雰囲気な通路を進んでいる

と、普通に壁に寄りかかって気を失っていたのだ。

一瞬罨かと思っただが、捕らえている俺を改めて罨にかけerる必要がないので、レンチ片手に近寄ってみると……様子が変だ。

まず、不自然なまでの発汗が気になる。綺麗な顔立ちをしているんだが、その顔色は青く顔中びっしりと汗をかいていた。口元にはタバコと思っただけの白い棒があるんだが、これは多分棒つきキャンデーか何かの柄の部分だな。噛み潰されて毛羽立っている。

食べ終わってから数時間たっているであろう棒つきキャンデーと、青い顔に不自然なまでの多汗……。

低血糖症で失神してるのか？

血糖値がヤバイくらいまで下がると、人間の脳はこれ以上エネルギーとなる糖質を消費しないよう脳の機能を一部シャットダウンする。

ちよつとやそつとの時間なら放置していても構わないんだが、この場に放置しておくのは問題だろう。

この女は件の解除コードを知っているかも知れない女だ。ここは敵地かもしれないが、人質兼恩義を売る相手として始末するのは後回しにしておこう。

モンキーレンチをハーパンのゴムの間に挟んだ俺は、女の両脇を抱え、引き摺るようにして食料がありそうな場所を目指す。どうせ背負うか抱き抱えようかした瞬間に目を覚まして、ボコボコ殴られるんですよ？ 俺の女経験上そうと相場が決まってるんですよ……！

もうしばらく進むと突き当たりにさっきの部屋と同じドアロックユニットがあったので、引きずっていた女のポケットからカードキーを探してかざした。

ロックが解除されると人感センサーが反応し、すぐさまスライドドアが開く。

ソコは壁の一面がガラス張りの展望スペースのようで、階下に見える街を一望できる場所だったが、カウンターに加えて冷蔵庫。目を見張るような数のワインボトルが保存されていたので、また廊下をさ迷うことはしなくて良さそうだと安心する。

「どちゃつと抱えてた女を床に下ろして食べ物……というかカローラーを探すんだが、ここで人の気配があるのに気がついた。」

「やあ。目が覚めたようだね。柊クレハ君」

声が出た方を見ると、夜の街を眺める様に配置されたソファアールに誰かが腰かけている。この声は……。

「アンタは……多分、昼間に俺をさらった運転手だな？」

「正解だよ。さっきは失礼したね。僕は口があまり上手くないから君たちを素直に説得させる口説き文句が思い付かなくてね」

「だからって俺だけ拐うことはないだろ」

男は立ち上がり、俺の方に向かって歩いてくる。夜景の光で男の輪郭が露になる。……でかいぞ。190はある。

「その通りだとは思ってたんだけど、彼女が欲しがったのはキミだけ……って、彼女また倒れたのかい？」

男の言う彼女と言うヤツがソコで伸びてる女のことだとわかったので廊下で倒れてたんだと説明してやる。

「そうか……。またろくに食べもせず分析室に籠りっぱなしだったんだね。クレハ君。悪いがそのフリーザーに冷凍のチーズバーガーがある。レンジで調理してくれないかな？」

男はそのデカイ体で楽々と女を抱き上げると、そのまま部屋の一角にあるソファアールベッドに寝かせてやる。

照明に照らされた男の顔は、白人。それもえらい精悍な顔つきで美形だ。

「あれ？ かかとを擦りむいてる。ハンガーで怪我したのかな？」

女の方はなにやら親しげな男に任せ、俺は言われた通りキッチン冷蔵庫を見つつ、ナイフラックから果物ナイフを取り出し隠し持つ。

冷凍ハンバーガーを見つけた俺は、どうせなら自分の分もと大型の電子レンジに三つほど放り込み、解凍温めを始める。

「で、もう予想はついてるんだが、ここが目的地なのか」

「ああ。そうだとも。ここに来たがってただらう？」

男が立ち上がると、丁度ソコには印象的なAの意匠が施されたプレートが目に入る。

「ようこそ。終クレハ君。スターク・インダストリー本社へ。一応、歓迎すると言わせてもらおうよ」

@

チーズバーガーが温め終わっても女は起きなかったので、俺は一応警戒しつつ俺をさらった大男と机を挟む。

「そうそう。キミの服どうしようか。女性ものだったけど。着るのかい?」

「いや。もうバレたとあっちゃや用済みだ。ウィツグ共々必要ない」

なんて話をハンバーガー片手にするんだが……。

この男。イヤにフレンドリーなくせして一向に自分のことを喋らない。勝手に語ってくれるのを待つつもりだったが、こっちから振らないとダメそうだな。

「ところでだな。ここがかの有名なスタークインダストリー社なのはわかった。なら、アンタたちは何者なんだ? 社員か?」

「そうだね。ここは会社だ。当然、社員がいる」

「……」

「……………」

……えっ? それだけ?

なんだよ社員がいるって。会話が拡がらんぞ。

なんだか含みがある言い方だったが、正面のこの男の正体については何も語っていない。

「ええとだな……そうだ。社長のスターク氏に会わせてくれよ。夏に一回拐われそうになったから文句の一つも言ってやりたいんだ」

そういえばこの渡米の原因もあの日の一件だった。

もう軍事産業に手を出しているとは言えないスターク社の新型アイアンマンがどこの提供を受けて作られているのか。そして教公さんの双龍とアオや雨の事件の時に出たワード『亡国機業』の存在。

超界者の件を解決するためにはその超界者にもっとよく近づくことが必要だが、現在は暗中模索といった状況。

バースの証言から超界者と『亡国機業』は近いところにあるようだが、その正体は以前謎のままだ。

とりあえず、今現在軍事品の生産ならびに取引を行っていないスターク社がどうやってアイアンマンのアップグレードを続けているのか知ることが出来れば、世界が孕む闇に近づくことはすれど遠退くと言うことはないだろう。

「スターク氏なら、ほら。そこで寝てるよ」

男がソファアベツドで寝ている女を指す。

いや、トニー・スタークの後継は男のハズでーと続ける俺。

そんななか渦中の女と言えは……。

「……チーズの匂いがする」

寝ぼけ眼をシャツでくしくししながら起床したのだった。

@

「はじめまして、私はアンソニー・スタークの娘。アンジェリカ・スタークです。よろしく柊クレハさん。拐う相手がノコノコ来てくださるなんて全くもってカモがネギ背負ってきたといったところですね」

そう自己紹介した女は、俺が温めたチーズバーガーを秒で平らげると、追加して、と男に命じて更にチーズバーガーを量産させた。

「ん……あー、ん？ お前後半何て言った？」

思わず聞き返した。

「悪いねクレハ君。彼女、意識がハッキリしているとハッキリモノを言い過ぎるタチだね。ファーストインプレッションの大切さは常々教えているつもりなんだけど……」

「ステイプ。黙って。それとコーラ」

アンジェリカに命じられた男ーステイプ？ーは肩を竦めると冷蔵庫からコーラの缶を三本持ってきた。

アンジェリカはその一本を開栓するとゴクゴクゴクと一気に飲み干した。

顔色はすっかり良くなっている。

食べてすぐ血糖値が改善するのか。超人的な消化能力だな。

「彼女、アンジェリカが言ってしまったから僕も挨拶しよう。僕はステイプだ。ステイプ・ロジャース。……ああ、大丈夫。僕は君が

思い浮かべた人物じゃない。そこは安心してくれていい」
どう安心しろと？

ここはスターク・インダストリーで目の前にスターク氏のご令嬢で、極めつけにはドイツの悪名高いナチスに「やベーやつ」とまで言われた超人と同名同性の人物だぞ。

当人である可能性も捨てきれなくはないが、彼は1922年から生きる人物だ。流石にもう歳が如実に表れても良いだろう。

「それで柊クレハさん、貴方何勝手に分析室を出ているんですか？
誰も許可は与えていませんよけふっ」

コーラの炭酸ガスを逃がしながらアンジェリカはそんな事を言う。
ステイブに「これマジ？」と視線を送ると、半笑いで首を振られた。

「アンタ……いやスタークさん、取り敢えずその発言は水に流すとして、夏の一件はどう言うことか説明してくれよ」

「夏の一件？」

「日本に遠隔式でスーツを送り込んで来ただろ。ほら、マーク44を」
そう訴えるとアンジェリカはしばし考える素振りを見せて、

「ああ、あのコミックエキスポ……いえ、コミックマーケットでのこと
ですね？」

パツと思いつたような顔で言う。

「あの時は良いものを見せてもらいました。日英共同製作のVTシステムに、双龍謹製のISサニラバー！マーク44を切り刻まれたのには腹が立ちましたが、それ以上に得られた情報が有意義なものなので不問にして差し上げます」

まだ二週間とたっていないのにそこまで調べられるのかよ……。

俺は落ち目と言われるスターク・インダストリーの力を軽く侮っていたかも知れない。

「不問にしておくって、襲ってきたのそっちだろ。そういや、あの時とは声も喋り方も違うようだが、どういうことだ？」

あの時のアイアンマンはもっと先代のアイアンマンに近い存在のように感じた。

だが、今は女性と言うことを差し置いて喋り方、性格が違うような気がする。

「声には合成音声を使いました。性格が違うように感じたのなら、それはジェーナスがシミュレートした別の人格に喋らせたからです」「ジェーナス？」

なんだそりゃ？

そう訊こうと思った矢先。

『はい、ボス。何か御用でしょうか』

どこからともなく聞こえる女性の合成音声。

「ああ、違うのよジェーナス。呼んだ訳じゃないの。ただ……丁度いいからこの分析対象に自己紹介しなさい？」

「誰が分析対象だ」

俺のツツコミを他所に合成音声、ジェーナスは自己紹介を始めた。

『初めまして。私はスターク製第三代スマートホームAI、Janusです。第一世代フライデーから連なるスターク家に仕える電子執事です。ちなみに夢は見ません』

SFの名著「電気羊」のジョークを交えつつ自己紹介したジェーナスの話し方は……流暢だ。人間が変声機を使って喋っているような自然さがある。

「コイツが、あの時喋っていたのか」

「そうです。と言うかジェーナス、貴方どんな風に喋ったの？」

『はい。とにかくお嬢様の存在が露見しないようにと言うご注文でしたので、よくお嬢様が私に再生をお命じになるお父上の記録映像を元に、性格を疑似人格タイプの第一号としてシミュレートさせていただきました』

「それってパパをそのまま再現したってこと？」

『いえ、お父上は素性が知れ渡っておりますので、彼の息子という設定で実行致しました』

関係各所への根回しも完璧です。と、そのスマートAIジェーナスは言う。

なるほど。スマートAIというよりは、システム全般からこまごま

とした要望まで聞いてくれるオペレーションAIという方が正しいのかも知れないな。

俺は三本目のコーラを飲み終わったアンジェリカに向かって本題を切り出す。

「夏の件は分かった。攫われかけたことには文句を言いたいが、現在進行形で攫われてるんじや文句言っても仕方がない。俺はこれからどうなる?」

「どうなる、ってもう分析対象としてサンプリングはさせてもらいましたし今のところ求めるものはないですね」

「求めるものはない?」

「ええ。ISを操縦できる男性は世界でも数人しか確認されていません。織斑一夏をはじめ、貴方こと柊クレハ。そして双龍指導者である凰教公。その貴重な一人を手にし、基本的なデータは既に採取し終わりました。ですから、今のところもう何も提供してもらえないのです」

……えつと、じゃあさ。

「自由にしても良いってことか?」

「そうなりますね。勝手に分析室から脱け出されたのには怒りを覚えますが」

空き缶をダストボックスに投げ込んだアンジェリカは、ドアに向かって歩きながら振り返る。

「ああ、そうそう。貴方のISですが研究対象としてこのまま鹵獲させていただきます。セキュリティクランクで強制的に奪取しましたが、貴方には心臓コアさえあれば問題ないようなので。あしからず」

そう言うのと返事を待たず、部屋を後にするアンジェリカ。

そこには俺とステイブのみが残された。

「……えーと、とりあえず君の荷物、持ってくるよ」

居心地悪そうにそう言った後、俺の肩を叩き次いで部屋を出るステイブ。

「……なんじやそりや」

俺は仕方なく、窓から覗けるグラウンドセントラル駅周辺の街並みを

見下ろしながらそう呟くのだった。

@ スティーブが回収していたらしい俺のキャリアバッグを持ってきてくれたので、俺はIS学園男子制服に着替える。

ケースと一緒に返してくれた携帯端末を確認すると時刻は午後10時を回ったところだった。俺は八時間近く眠らされていたらしい。通信機を返してくれたということは、多分自由にしているというの。はアンジェリカの本心なんだろうが、ISを押さえられている以上ここから出ても良いことは何一つない。

とりあえず、電話を一本入れることにする。

『どこにいますのっ！ クレハさん!』

コール一回目で電話に出たセシリアの大声に若干耳の痛みを覚える。

セシリアの背後ではデュノアが「やっぱり無事だった?」と、ことも無さげに言った。やっぱりって。心配すらしてなかったか。

「今スタークインダストリー本社だ。CEOのスターク氏に捕まってる。軟禁されてる」

『やはりあの車はスタークインダストリーのものでしたのね……。スターク氏本人に会っているのですか?』

「いや、どうやらその娘らしい人物には会った」

『娘、ですか……。スターク氏にご息女が居たなんて話は聞き覚えがありませんのに。養子でも取られたのでしょうか? それで、軟禁と仰いましたか、どういう状況ですか?』

セシリアに、睡眠薬で眠っている間に基本的なデータは取られたこと。そしてISを奪われてしまった事を告げる。

『……なるほど。ISの個人認証を偽装するなんて、やっぱりスターク社長のご息女だね』

報告をスピーカーで聞いていたらしいデュノアが呟いた。

『軟禁されているとはいえ、スタークインダストリーに潜入すると言う元の目的は達成状況にあります。身の危険がないのであれば、そのまま調査を進めてもよろしいのでは?』

「だがセシリア。多分こっちの狙いはバレてるぞ。俺を攫った奴らが言っていたんだが、内緒話は全て聞こえるらしい」

『どおりで。待ち伏せのタイミングがぴったりなワケだよ』

デユノアは納得がいったようで呆れたように笑った。

流石、世界の覇権を握りかけた大企業スタークインダストリーだ。

「今のところ娘のアンジェリカ含め、スターク社の連中は……と言つても二人なんだが、フレンドリー友好的だ。この会話も盗み聞きされてると思うが、ISを返してくれるよう交渉してみるつもりだ」

『それが良いですわね。専用機を奪われるなんて前代未聞ですわ』
セシリアが俺を非難する。

そういえば二人は今どうしてるんだろうか。

俺はコンタクトが取りやすいようにと二人の所在地を尋ねる。

『私たちがでしたら、オルコット・トレーディングのアメリカ支社に滞在していますわ。準備が整い次第そちらに伺うつもりですが、支援が必要な時には連絡を』

最後にオルコット社の所在地と連絡先を送信してもらい、通信を終了させた。

電話が終わるタイミングを待っていたようにステイブが現れる。

「電話、終わったかい？」

「おいてきた二人が心配だったもんでな」

「分かっていると思うけれど、ここでする通信は全て彼女に筒抜けだ。厳密には全部が全部聞こえるわけじゃないけれど、そこは覚えておくと良い」

「気になってたんだが、それはどういうことなんだ？ 俺のどこかに盗聴機でも仕掛けてるのか」

着替える際に自分の身体をチェックしたが、何かされた痕跡は無し。持ってきてもらった私物もあらかた検分したんだが目ぼしいものは見つけれなかった。

「まあうちの会社も過去には世界中にヒーローを送り出す仕事をしてきた会社だ。色々と手段があるんだよ」

ステイブがちよんちよんと天を指差す。

……そうか。

「人工衛星による監視か……！」

大気圏の外。衛星軌道上を回る人工衛星のほとんどを今や軍用衛星が占める時代である。

中でも過去にスターク社が所持していたという人工衛星には強力なものも多く、先日のマーク44も会社の全盛期には、その巨大なアーマーを世界中に送るべく人工衛星から射出していたと言われている。

「会社自慢をする訳じゃないが、今のスターク社は情報を主に扱っていてね。国防の殆どをISが担うようになってからも、情報という一点においてはまだまだうちが独占状態だよ」

「そういえばステイブはこの社員なのか？」

「そうだ。元々は米国家安全保障局勤務だったんだが、所属チームが取り潰しになってね。今じゃ社長のお世話役さ。元メンバー達も一人を除き行方知れずだ」

米国家安全保障局。アメリカの中央諜報機関の更に上位に存在する組織だ。CIAほどに名前が売れてないが、CIAより更に過激で強力な実行権を有する、文字通りアメリカの最終的な安全を保障している組織である。ハワイで会った教官が指示を受けたという日本国家安全保障局は、アメリカを手本に組織された経歴を持つ。

「ずいぶん立派なボディガードがついてるんだなあ」

「そう誉められたモノじゃないよ。けれど、彼女の意に反してISを強奪するつもりなら、僕が立ちちはだかるよ」

ステイブから、バースや教公さんに感じた超人的な気配が漂いはじめ。

「拐った上に勝手に奪っておいて随分な言い草だな」

「社長である彼女の命令でね。僕は彼女に逆らえないんだ」

ステイブが一呼吸置く。

「彼女自身には戦闘能力はない。だからここで僕を突破すれば、それだけでリーチだ。ISが無いとはいえ、双龍に超界者と米国を悩ませてきた敵と戦ってきたキミだ。どうする？」

ステイブが挑戦的に微笑む。

ぶるつと身が震える迫力に晒された俺は、

「いや、無理だろ。常識的に考えて」

カランと、隠し持っていたナイフを棄てる。

戦意の無い印として、な。

「良かった。彼女が興味を持った被験体は久しぶりでね。君達男性操縦者の謎を解明するにはまだ時間が掛かりそうだから怪我をさせるのは本意じゃない」

「自分の高い戦闘力をちらつかせて降伏させるのはもはや脅迫だぞ」

それに今の、被験体として価値があるうちは殺さないって意味だと思う。油断できねえー。

「取り敢えず、ここにいる間、君が寝る場所に案内するよ。と言うか、さっきの分析室がそうなんだけどね。僕としてはちゃんとした部屋を用意したいんだけど……」

「……彼女の命令で、だな？」

ビンゴ。

ステイブは夜には眩しすぎる笑顔で笑った。